新群書類従

第六

例言

一本卷の前半には古き俗謠を集め、後半には淨瑠璃其の他歌曲に關する雜書を收めたり。

一『糸竹初心集』は中村宗三の著にして寛文四年の版行にかゝれり。琴三味線尺八の手引にして、此の種の書としては版行の最も古き一に數ふべし。

一『松の葉』は元祿十六年版にして秀松軒の編する所、三味線の本邦に傳來してより、世上に行はれし小唄を集めたるものなり。但し其のうちには自作もありといふ。此の書は頗る名の聞えたるものにして、當時既に廣く世に行はれしかば、やがてこれに類するの書は續出しぬ。卽ち翌十七年(寶永元年)には大木扇德といふ人『松の落葉』を編して、『松の葉』に漏れたるを拾ひ、寶永三年には靜雲

閑主人『若綠』を出して、二書以來の新曲を集め、同七年更に『松の落葉』の增補成り、正德三年には『續松の葉』といふ書版行せられ、常盤なる松の綠は色まさりけり。されど仔細にこれらの書を對照すれば、松の枝葉は彌が上に榮ゆるに似たれど、其の實根幹はたゞ三株に過ぎざることを發見すべし。即ち『落葉』と其の增補とは大同小異あるのみ、『續松の葉』に至りては『若綠』の改題なり。たゞ續編の五の卷の終りに、僅か三四の小唄『若綠』に見えざれど、其の他は聊か順序を變更したる所あるも、全く同書なることを知るべし。故に本卷には、『松の葉』『松の落葉』『若綠』、此の三種を收めて慶長以降の小唄を網羅せんと欲し、訪求頗る勉めたれど、元祿版の『落葉』のみは遂に全本を得ず、其の稀本たること知るべし。依て已を得ず、『松の落葉』は增補を以てこれに代らしめぬ。而も增補亦頗る珍本たり。

一『淋敷座の慰』、これも寛永以降延寶までの流行唄を集めたるものなれば。多少『松の葉』の小唄と重複するものなき能はず。されど極めて小數なれば、今これを削除せず。原本は蜀山人か文政四年山口觸山に寫さしめたるものにして、後ち三馬、種彦等の手に渡り、今は帝國圖書館の藏に歸し、これより寫したるものにして、所々解し難き点あれど、圖書館本の外、此の書を得ざりしかば、遂に訂正するに由なかりし所もあり。

一『諸國盆踊唱歌』、これも寫本にて傳はりしを、我自刊我本に収められ、はじめて世に知らるゝに至りぬ。後水尾天皇によりて、諸國より徵せられたる歌なりといふ説には、據る所なく、古人もやゝ惑へるに似たり。

一『今昔操年代記』は享保十二年版にして、正本屋九左衛門なる西澤一風の著なり。著者は若き頃井上播摩掾に就て淨瑠璃を習ひ、其

の風を能く語り、元祖竹本義太夫、豊竹若太夫等と時を同うし、一方に作者として一方に正本屋として、前後六七十年間淨瑠璃、操に關係したる人なれば、其の記述には最も信を措くべきに足る。
一『竹豊故事』、これ又斯界の通人一樂といふ人の著すところ、『操年代記』と共に德川文藝史の好資料なり。
一『難波みやげ』は穗積以貫の著にして、淨瑠璃評註の嚆矢なり。其の後賽笠翁が『瑠璃天狗』出で、『難波みやげ』と二書を合せ、淨瑠璃評註の唯一の書と稱せらる。
一『歌系圖』は流石庵羽積の撰にして、古來小唄の作者と作曲家との名寄なり。

明治四十年八月　　水谷不倒識

新群書類從第六目次

歌曲

目次終

新群書類從第六

歌曲

糸竹初心集

世はかぎりなし、事は盡せずとは、たれかいひけんこれ誠也、まことの道は天の道也、これをまことにするは人の道なりとは、むかし聖の詞也、此誠物と我とになきにはあらず、されどもしられずしらず、年をつみ、日をかさねて、頭の雪びんの霜のみ、色をあらそふ事、人みなおなじ、こゝに中村宗三といふもの有、幼より目しゐて色をみず、瓶をわるよはひより、理にさとく、耳を以て目とする事、人にすぐれたり、つく杖の土木水石に當る音を手にえて心に得る、しかしより音を聞て理をしるべき事のあらんを思ひて、琵琶琴、さみせんに心をつくせり、或時は大森宗君が節切の調子音律にくはしき事を聞て、強て是をまなび、寢食を忘れてやうやく師に近し、されば友遠方より來りて、又學ぶもの有、かれに對して書付るものをみれば、予が眼をうらむる心有て、徒に書のはしに記すものなり

抑此書たる事は、一節切の尺八幷に、琴三味線ならはずして吹おぼへ、引おぼゆる道の書なり、然りとはいへども少しも心得たる人の、用るわざにはあらず、皆てしらざる人のために、若やと記すものなり、しかし又さらになるまじき道にもあらず、書趣をよく〱かんがへ、聲歌をそらにおぼへなば、少しはなどかならざるべき、若是にらやうれんせば、此心をたよりとし、いかなる事をも吹出し、引いだすべきものなり、よく〱こゝろをとむべし

糸竹初心集目錄

糸竹初心集上卷

一節切尺八は、其濫觴まち〳〵にて、さだかならず、そのかみ異人有て、宗佐老人に傳へたるよし、代代いひ傳たり、然しより宗佐は高瀨備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也、此宗君は、昔は豫州の大森彥七が末孫、勇士武略の後胤也、織田信長公に仕へて、人に名をしらる、信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念をことゝし、尺八の妙音味へ、此道中興の開山となれり、流のすゑをくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだにもみず、わずかに其かた計りうつして、今書にしるし宗君門弟の外、餘力有て、音をしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也

一虛無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切ゆへ、尺八といふとぞ、濫觴はたしかに不知、そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしいへども、丁簡せず、昔よりほうぼうの家に用る物と聞えたり、梵士法士色なしゝら梵士などいひしもの、此尺八の執行者と聞えたり、近き比不人といふこむ僧有て、ごろといふ事を吹出し、その外れんぼうながし、京れんぼ、さむ也卅川、よし田などいふさま〴〵の手有之、いづれも律呂の調子にあはせたる物とは聞えず、されども我道にあらざれば、其深き事をしらず

一節切の尺八切やうの事、節を一つこめ長さ一尺八分に切故、此名を付といふ、節より下は七寸、上は三寸八分に切也、但竹のふとぼそによりて、調子違物なれば、極て寸は定らず、筒音を黃鐘の調子にあはせたる物也、音色は笙のごとく、ゆびつかひは篳篥に似たり、歌口のしめ様は、笛同前也、ゆび遣ひ卅二有、笛は惣の穴七にしてゆびのあけさけ百廿八有、調子は十二より外にあらず、上乙有によりて、しらざる人は調子多樣に聞る也、筒音は盤渉也、ひちりきは穴の數九つ、ゆびのあけさけ五百十二有、これも調子は十二調子より外に非ず、五調子を專らとす、筒音は平調也、簫は、竹數十七本有、一つに一調子づゝ切たるもの也、但十二調子より外に非ず、のこりは同音也、竹十

七は五行十二支をあはせたるもの也、吹やうの息づかひ内外あり

一一節切吹樣之事、まづ左の手をうへになし右の手を下になすべし、左の大ゆびにてうらの穴をふさぎ、べにさしゆびにて二の穴をふさぎ、右の人さしゆびにては、三の穴をふさぎ、べにさしゆびにては、四の穴をふさぐ、一の穴と云は、おもてのふしのそばなるを云、次を二、次は三、下を四といふ、まへにあげたるをうらといふ、第-おぼえずして不レ叶事は、指づかひの名也

一節切惣の穴の音知事

ふトハ惣の穴をふさきてふくをいふ

いトハ惣の穴をあけてふくをいふ

やトハ一二三四をあけうらはかりふさきたるを云

ちトハ一をあけ二三四とうらをふさきたるを云

ほトハ四をあけ-二三とうらをふさきたるを云

うトハ三四をあけ-二とうらをふさきたるを云

ゑトハ二三四をあけ一とうらをふさきたるを云

りトハ二三四とうらをあけ-はかりふさきたるを云

ひトハ一とうらをあけ二三四ふさきたるを云

しやうト、三四とうらをあけ-二ふさきたるを云

神トハ四とうらをあけ一二三ふさきたるを云

たトハ一二四をあけ三とうらをふさきたるを云

るトハ二四をあけ一三うらをふさきたるを云

以上十三字也

フホウヱヤリヒト神イタルチ　以上十三

これをよくそらにておぼえざれば吹習ふ事成がたし

但此内ヤタルこれ三つは二やうに有

一(や)一三四明うらと二ふさきたるをやと云

一(た)一と三ふさき二と四とうらあけたるをもたと云

一(る)一二四裏をふさぎ三ばかり明たるをもると云

これは双調の調子、盤渉の調子に、このゆびを用る也、黄鐘平調一越には右のヤタルを吹べし、よく〳〵心をとめゆびつかひちがへず、空にておぼゆべし、惣して尺八は、五調子用ひ候へども、まづ歌は-越の調子を專とする也

一一節切證歌

△やまとおどりのうたふきやう

ホウフホフホウウウエウエウ-ホウ、ヱヤリ、ヤ

よしの丶を丶ゝの丶、ゆきかと見いれば、ゆきてはあ

あらてん丶、やこれの、はなあのふ丶きよのん丶、や
あこれの

△いせおどりのうた

あいさみさまあはあ、いせのはまあそたあち、めもと
にしほかやれ、こほれか丶る

△あふみおどりのうた

ふうらいふらい、ふるつまいとしなわれふるつまは
なを丶いとしやれ、なをいとをしい

△すげ笠ぶし

やぶれすげかさやあんやあ、しめたるきいれていの
を丶ゑい、さらにさゑせすゑいいさん丶、ささやあ
さん丶さ、すこもをせす

△海道くだり

おもおしいいゐの、かいどくたりやあ、なにとかた
あるとつらきいせし、かもかいはあしらかは、う丶ち
はあたり、い丶、おもふひとにはあ丶あはたくちとよ
を丶、しみやあかはあふあ、しうせゑん、せさや
あまあさんりを、う丶たすうきてゑ丶、ひとまつう
もをとにい、つうくうとの

これより末尺八吹やう同前也

△平調の調子よしの丶山

よしの丶をやまを丶、ゆきかとみいれは、ゆきてはあ
ああらてん丶、やこれのはあなのふ丶きよのん丶、や
あこれの

△平調伊勢おどり

あのきみ さまあはあ、いせのはまあそたち、めもと
にしほかやれ、こほれか丶るゑ

此外近江おどり、すげかさ、海道くだり、いづれのう
たにても、右之格を以て吹ならふべし

△双調のよしの丶山

よしの丶をやまを丶、ゆきかとみいれは、ゆきてはあ

あらてん丶、やこれのはなあのふ丶きよのん丶、
やあこれの
右にしるすことく双調と盤渉とには後のやたるを吹
べし

△双調いせおどり

あのきみさまはあ、いせのはまあそたち、めもとに
しほかやれこほれか丶るゑ

△黄鐘よしの丶山

よしの丶をやまを丶、にきかとみいれは、ゆきてはゐ
ああらてん丶、やこれの、はなあのふ丶きよのん丶、
やあこれの

△盤渉よしの丶山

よしの丶をやまを、ゆきかとみいれは、ゆきにはあ
ああらてん丶、やこれの、はなあのふ丶きよのん丶、
やあこれの

△黄鐘いせおどり

あのきみさまはあ、いせのはまそたあち、めもとにし
ほかやれこほれか丶るゑ

△盤渉いせおどり

あのきみさまはあ、いせのはまそたあち、めもとにし
ほかやれこほれか丶るゑ

此外五調子の手どもあまた候へども、数おほくこま
かなる事に候へば、のせがたし、但黄鐘のうち、世間
によく吹覺えたる手、少ししるすものなり

△初手

ウヱフヱタヱフヱ丶、丶、フヱウヱ、ヒヱ　フヱウ
ヱホウルホ

△返シ

ウ、タヱフヱ、タウルホ

此手黄鐘卷頭の手なるによりて初手といふ呂也や
はらかにかろく吹へし

△安田

タチタチ丶、ウチタヱフヱ丶、丶、丶、フ　ヱタウタ

ヒ、チタチ、、イヱウヱ、ホウルホ

これより末初手の返しを吹、此手江州の住、安田と
云仁、吹出す手也

△手巾

ウヱフヱタヱフヱ、、、、、フヱウヱ、チタヱフヱ
、フウルホ

△返初手におなし

此手江州大津の住、とぎやの佐右衛門二郎吹出す也、刀をとぎける時、此手をおもひ出し、手を拭はで、吹てみるに吹けるうちに手かはきたり、さるによりて手巾といふ、此手の中にチタヱフヱ、フウルホと吹ところ有、吹やうおほし、チタヱイ、フウルホとも吹也、これをぬき手巾と云、日光院吹出さるゝ也、又チタヱフヱウヱホウルホ

△返

ウ、フヱフヱタウルホと吹也、これは筒手巾と云宗佐老人の手也

△居王

ウヱフヱタヱフヱ、、、、フヱタイタチタヱフヱ
チタチ、タヱフヱ、、、、フヱウヱヒヱフヱウヱ
ホウルホ

△返シ初手におなし

此手は文祿の比、後陽成院の皇后に、絲竹の音に長じ給へる有、此手を吹いださせ給ふさるによりて后手といふ也

△ころび

イヱフヱタチタヱフヱウタヱフヱ、、、、フヱ、
ウ、タヱイヱ、、フウルホ

△返シ

ウ、ヱルタヱフヱ、タウルホ

此手頓阿彌吹出す、返しの一の息にころぶゆひ有、他りうには頓ころびとも云也

△小兒

イヱイフヱ、タイ、ヱウヱルホ、フヱ、、、、フヱ
タウタヱ、チタチ、ヱフヱウタチ、イヱウヱ、ホウル
ホ

△返初手におなし

此手は門阿彌吹出す也、ある山寺の小兒に戀慕して吹し手也、さらば明日まいらんと云事有、黄鐘の大事これなり、此外黄鐘の手ども、いくつも有之候へ共、

しるすに不及、但ほど拍子タヱフヱはひろふウトチトはのぶる也

△盤渉の調子つしま

フ、ホ、ホ、フホ、、ホウ、ホヱウ、、ホ、ホヱヱウ、ホヱウ、ホ、　高音リ、ヒ、、、、リヤヤ、ヒリ、ヤ、、ヤ、タヤタヱ、、ヤタヤタヱウ、エヤヱウホおろしホウ、ホヱウ、、ホ、ホヱ、ウ、ホ、ヱウ、ヱヤヱ、ヤタヤタヱウ、ヱタヱウホ

△二段の序

タ、ヒ、、、、タヒ、、ヒ神、ヒ上神、ヒ、ヒ上上神、ヒ、上神、ヒ

高ねおろしは、初段同前、三段めは二段めのごとくに吹て、まを同し如くにして、手を吹入たるもの也、其手定らす

△さがりは

ヒイ、、、ヒイ、、、、、ヒ、、ヒイヒイ、ヒ、イヤヱ、、ウヱ、、ヱヱヤタ、、ヒイイホ

是を何べんも吹也、則ほど拍子は箇の如く也、此内おなじ字の重りたる所の吹やう、何にても ふさぎたるゆびを、少うごかしたる物也、たとへばフの字の重りたる時は、四のゆびを動すべし、ホのゆびの重時は、三のゆびを動べし、ウのゆび重時は二のゆびを動べし、ヱの重時は一のゆびを動べし、やの重時は、うらのゆびを動すべし、リの重時は、一のゆびを動べし、ヒの重時は、三のゆびを動べし、神の字の重時は、二のゆびを動べし、いの字の重時は、三のゆびにて打へし、上の重りたる時は、二のゆびを動べし、たの重時は、三のゆびを動すべし、ちの字の重時は、二のゆびを動べし、又音呂はたとへば一越(いちこつ)の調子を吹んとおもへば

ウフフホフ、ウ、リウリウフウ

これを呂の音取と云、同律の音取

ウリヤリヤヱ、ウリウリウフウ

如此に吹て其後、一越の手にても又歌にても吹べし、何も如此に音取有也

△平調呂の音取

ヱホホウホホ、ヱイヱイヱホヱ

△同律の音取

イヱフヱユウ、タイタヱフヱ

△双調呂の音取

ヤウホウルフ、フウホフヤ

△同律の音取

イヤフヤヤ、タヒタヤフヤ

△黄鐘呂の音取

ウヱウ、チタウルホ

△同律音取

ヤヤチリヤヱユ、ヤヱルホ、フヱチリチ

△盤渉呂の音取

ヱヤヱ、ヒヽユヤウ、ホフヱウホ、

△同律音取

リリヒイリヤヤ、リヤヱウ、ホフヱウホ

右いづれも、調子吹時、まづ此音取吹ざれば、調子かはりてうつらぬ物也、此外音取あまた候へども、數さだまらず

宗君流の書物に傳る手の數は

黄鐘廿三　盤渉十六　一越十五　平調十三

双調十一

此外さらはの音取、またゝきかへしみだれ、戀の音取かんのゆりなどは、宗君一子相傳の所なり

糸竹初心集中巻

琴の次第の事

抑日本に下々まで、琴をもてあそぶ事は、中比九州に、玄浄法水とて、二人の僧有、或時長崎に至て、琴の引やうを唐人より傳り、其後都へのほり、公家殿上の交りをなし、寛永二年の比、琴の御ゆるしを下し給りて、法水は關東にくだり、琴をひろむる、玄浄は筑紫にかへりて、これも琴を専らに執行す、さるによりて、今在家にひける樂を、つくし樂といふ也、かゝりとていやしき賤いわらや、不浄なる工商下人の家などにて、しらぶべき事にあらず、神をすゞしめ菩薩の現し給ふ妙音なれば、四町のうちを初め奉り、月卿雲客やんごとなき人のもてあそび給ふ物なれば、其おそれ有べき事也、凡いとの調やうは、まづ一越に調んと思ふ時は、一は一越、二は下無、三は黄鐘、四は盤渉、五は一越、六平調、七は二のうは調子、八は三のうは調子、九は四の上調子、十は五のうは調子、とは六のうは調子、いは七のうは調子、きんは八のうは調子也、残る調子もこれに准ぜよ、又雲井の調べといふ事を此比八橋検校ひき出したり、此八橋本三味線の上手なりしが、中年より琴を學ひ、不思儀に、琴の妙をえて、今日本の名人となる、音聲色ざしほど拍子、中中心におよびがたき上手なり

一琴を引ならひやう、曾てしらざる人は、爪のさしやう、糸のおさへやうをみ習ふべし、まづ大指にさしたる爪は前爪と云、中指にさしたる爪を、向爪と云、人さしゆびにさしたるを、脇爪といふ、糸の名は手前なるをきんといふ、次はいといふ、又次はとと云、それより次第〳〵に、十九八七六五四三二一也、此中におさゆる糸は、四七九八也、但引ならひにはおさへずしてもくるしからず爪かす計りよく覺たるよし、初には糸あはせがたきもの也、糸あはざれば何事引てもうつらぬものなり、されば糸をよくあはすべし、但右にしるす糸のあはせやうは、調子を聞すしてはあはせがたし、初心なる人のあはせ習ふは、初め一二度は心得たる人にあはさせて、調子よく合たる時、糸十三ながら、いづれもぢのきはに墨を付をくべし、糸しめゆるめにて調子あはするにあらず、ぢのたてど

ころにてあはせたるものなれば、ぢをはづしたりとも墨をしるしにて、本の所にぢをたつるやうにすべし、大かたはあふもの也、又ぢをたてづめにしてをけば、いとたひ〳〵きれてあし、、其上いとのびるもの也、墨を證據にして、糸をよく調へ習ふべき事かんやうなり

△すががき引やうの事

三テン四テン六テン五〇三テン四テン六テン五〇三テン四テン五テン六テン七テン八テン九テン十〇八テン九テントテン十〇八テン九テントテン十〇八テン九テン十テントテンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テン九テン八テン七テン六テン五

此うちてんと有は、いづれもみな打爪也、其外はみな前爪にて引べし、打爪といふは向爪脇爪ふたつの爪にて、三筋ばかりを、てんとうちかきたる物也、うち所はたとへば

三を引ての跡のうち爪は、一二をうつべし

四を引てのあとのうち爪には、一二をうつべし

六を引ての跡のうち爪には、二三四のあたりをうつべし

七を引ての跡のうち爪には、三四五のあたりをうつべし

八を引ての跡のうち爪には、四五六のあたりをうつべし

右いづれも、次第〳〵におなじ心なるべし、但糸三筋うつにはさだまらず、前爪より二筋ほど先をあたるに任せうちたるもの也

△りんぜつ引やうの事

テン五五テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五テン六テン七〇テン八八テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇テン十十九八テン七テン六テン五〇三テン四テン六テン七〇テン八九〇テン十十テン十〇八テン九テン十〇八テン九テン十テントテンイ〇テンキンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンキンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テンイテントテン十〇八テン九テン十〇テント十〇八テン九テント十〇八テン九テン八テン七テン六テン

五

右すがきのことくてんといふは、みな打爪也、その外は、いづれも前爪にて引へし、又むかふ爪といふ引やう有まつ

一五と引時は、一は向爪、五は前爪にて引くべし

二七と引時は、二はむかふ爪、七は前爪にて引べし

三八と引時には、三はむかふ爪、八は前爪にて引べし

四五と引時は四はむかふ爪九は前爪にて引べし

いづれも糸四つはざみ也、歌のうちには幾所も有べし能々心を付ておほゆへき也

△あふみおどりのうた琴引やう

七三八七六六七八九十八、七三八七六六七八八七六

これゑゑからあみれゑは、あふあふみかあみゆうる

五五八八九十十、といいきんきんきんいと十といと十五十九

な、かさあこて、たもをれ あ ふ み か さやれ あ ふ

八九十と十

みかあさあ

此うちむかふ爪にて引事有へしよく／＼心をとむべし

△小倉おどりの引やう

九十九十といきんいと十十九十九十と十九八 いきん

おくう丶らあのを丶のおんのおんのへゑの、ひと

いといと十十九十九十と十九八 九十九十といきんい

をもとをすうむすうむすすうき、いつう丶さあてゑ

と 十十九十九十と十九い いきんいといと十十十九

丶、ほをんほほんほにて丶、みたれあああ丶あん

と十九八 七八八九十と十九十八九十とと十九八

あをいの、おたまこかれゑんて、秋こかれつらんや

△あひの手

「八「きん「いといいきんきんいきん「と丶五十九八

△伊勢おどり引やう

七八八九十八八七八七六 五九八七八七六五一五四三

あのきいみさまあはあ丶、いせのはまあ丶そたあち、

九十と十五十九い九十九八、七三八七六六五七八

めゑもとにいいしほかやれ、こほれゑかかるそへ

△芳野の山

九十八九八九十十と十と十八 九十十六七八 八七八

よしの丶をやまを、ゆきかとみいれはゆきてはああ

九五十九八七六 七八七六五と十九十といきんいと十

あらてむ丶、やこをれのはなあのふ丶 き いよの

九八 九十と十九八

む丶、やあこれの

△すげ笠ふし

七八八九十十九十八九五十九八七 九九八七六七八七

やふれすげかさあやあんむやあ、しめをかきいれて

六五五五三 九十十いといきんいきんいきんといと十十と

いのをゑい、さらはきもせす ゑ い さんさあ、あ

いきんいきんいといと十と十九八七八九十

丶やあ丶さむ丶さすてゑもをせす

△ころくぶし

七八八九十十九十八九十九八七八七七八　七八八九十
ころ〳〵ついたるたけのおをつえころ〳〵、もとはしや
十十八九十九八七八七七八　八九十九八七七八
〳〵はなかはあ丶ふゑころ〳〵、すうゑ丶はほ丶ほん
七七　八七　七七八　八九十八九七　八　九
ほ丶ほんほほんほ丶、のんよを丶しよんしよ、しよん
九　八七六五九九　九　八七六六　七　八七六
しよんしよゑしゆりのんか丶いやかか、か丶んかな、
九　九八七六六七八　七六い三四三　三五六八九
それそれまことに、のほんほはをさあて、ふでのちく
十八七六七八　七六六五
うたあ丶おけ、ゑころく

△しばかきぶし

七八九十九八　七八九十九八七八九十といきんいとい
しばあがあき、しはあかあきしはかきこをしいてな
十九九八九十七八九十九八七八九十といきんいきんい
ああ丶あああんゆきいのむなふりそをてゑ丶ちらと
といきんいと丶十九八九十六七七三八七九十八七六
見いたあとなああ丶あんふりいそをてゑゑゆうき
五四三四五六七八六五四五六五四四五四三三三七八
のなんなんさあんほさいよゆきのいのむなな丶ふり
九十といい三きんいといきんいとい十九八九十
いそてゑちらと見いたわとなああ丶ん

△膃おどりのうた

七八八八七八七　七九十九八七八七六五四三　四五五
うらう丶丶らの、せきのを丶しみいつはあ丶、よこと
四五七六六七八　九八七六七六五五四六五　五
なにおつれゑと、なもを丶おぢう丶にいたよこ
五テン五　七六六七八九八七六七六五四五五
とをに、おつれゑとなもをた丶おねう丶、

△あひの手

七七　八七テン八七八九十八九十　五　十七七八七テン
おちよこのやきにはたれ〳〵そ、うりやなおいあ
い七八九十八九十五　十七七八七テン八七八九十八七
いけついせこいかそりやをとのへいのかせにかあこい
テン六五五テン八八六テン　五五三四五七六五五十テン
いいいにはなかきせきてらよしかわよそりやよ
きんいとテンきんいとテンきんきんテンきんいと十テンなへ
大らよよ大らよよ大らよ大らよ大らよとよひや
五五三三テン五七六五
いたして　まふきせた

△おか崎

テン八八九　十九　十テン八八九　十九　十テン八八九
おかさきじよろしゆおかさきじよろしゆおかさき
八　七　六　五七六五　四　五　五テン八八九八　八七
しよろうしゆはゑい上らうしゆうおかさき上らうし
六五七六五　四　五
ゆはゑい上らうしゆ

△かぞへうた

七八八九十十といきんいと十九十九八九十五十九八
ひとつとやあひい　とをもゑしらあぬこひをしいて
九九十九八七八七六七三八七六五
なみたはたもとをにたえやあらぬ

△かいだうくだり

六六七三八七六五四五九十と十十十九十九九テン十五
おもをしいろをのかいとくたありやあゝなにと
十九八九八七八六七七八八七八六六七二二八七六六五五
をかたあるうとつうきいせしかも川しら川
九十と十十九十九八九十と十十九十九八九十と十十
うゝちわあたりいゝおもふひとにはあゝあはたくち
九十九八九十八九八七三八七六六七八八八七八
とよを丶しのみやあかはあらやしうせゑんし

これより末もかくのごとくくり返して引なり

此外はやりうたどもあまた候へどもふしさだまらざるはしるしがたし

八橋りうくみの名

ゑてんらく　これは古樂の名　天下泰平
梅がえ　宮古鳥
桐壺　すま
雲のうへ　うす衣
うす雪　からかみ
雪のあした　新曲

此分いづれも、一くちにうたのしやうが六つゝ有、ただしゑてんらくは七つ有、其外の大事のくみどもおほく有也、中に雲井のしらへと申は、大きにひじする事也

糸竹初心集下卷

三味線の次第の事

抑日本に三味せむをひき初し事は、文祿のころほひ、石村檢校と云びわ法師あり、心たくみにして器用無双者也、あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓といひて、糸三筋にてならす物有、小さき弓に馬の尾を絃にかけて引なれば、小弓とは云とて、石村これを探りみるに、琵琶をやつしたる物也、いとのしらべやうも、一二はびわのごとく、三の糸はびわの三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり、所のものいひけるは、此嶋には眞蛇の多き所なるが、らへいかといふものありて此まむしを食物とする、さればらへいかのなく聲、小弓の音に少もちがはざる故、眞蛇を退んが爲に、專引也、琵琶法師も、爰に逗留の間は、引給へといふ、其後石村京都にかへりて、おなじく琵琶をやつし、此三味線をつくり出せり、琉球の嶋よりえて來るといふ心にて、りうきうくみといふ事を作りをけり、弟子虎澤けんぎやうに不殘傳へしかは、虎澤またくみはてゝと云事を作り出す、虎澤より山野井檢校傳受して、世にひろまる、糸のあはせやうはこれも一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の四の糸調子也、たやすきものに似て、はなはだ引えがたきもの也

一琵琶の調子先黄鐘の調子に合せんとおもふ時は、一は黄鐘に合せ、二は一越三は平調、四は一のうは調子也、又盤渉に合せんとおもふ時は、一は盤渉二は平調、三は双調四は一のうは調子也、のこる調子も准之、琵琶の樂にあまた有といへども、大唐より傳え來るは

一上原石上
一流泉啄木
一玉樹三女

此玉樹といふ曲は、不吉曲といひ傳たり、然るを或人うつりをかんがへ、此中一手引かへたる所有、されども此曲猶よきにしもあらす、其後も度々不吉のためしありけると也、又七つばちかきくだし、三のたゝき、篠むすひなといふは調の曲の名也、いづれもたやすくは引えがたき事なり

一三味線の習ひやうは、人の引に心を付ばちの持やう、糸のおさへやうをみるべし、或は歌をひかば、まづ其歌のふしはかせよく覺るが、かんよう也、たとへばゑをかゝんとおもふに、たび〳〵みたる物を書ばにせてかゝるべし、終にみざるものを何としてか書出すべきや、三味せんもこれにひとしく、我さへ歌を覺ずして、三味せんにうたはする事、なか〳〵成かたき事也、先はじめにはいとをあはせならふがせんよう

一糸をあはせ習ふやうの事、初はよく引人にあはせてもらふべし、但調子高きは糸たび〳〵きれてわろし、少ひくめにしらべさせて、糸のよくあひたる時、上こまより一寸ほど下に、糸三すぢながらに墨を付をくべし、あがりさがりのなきやうに同處に付をきてあはせ習ふべし、糸ゆるまればすみさがり、しまり過ればあがるものなり、髮筋のはゞほどあがりさがり有ても、一調子ちがふもの也、これをしやうこにしていとをあはせならふべし、又こまのたて所かはりても、調子ちがふものなれば、こまのきはに皮に成とも糸に成とも、墨にてしるしを付、同所にこま立るやうにすへし、或人のいはく

引習ひ糸をあはせむとおもふなよ
すみだにあへばいとはあふなり

さみせんしやうがの事

△一の糸のしやうが

しトハ　ちふくらのきわにておさへ上より引を云
きトハ　すくふを云
さトハ　はなして上より引を云
かトハ　すくふを云

△二の糸のしやうが

つトハ　ちふくらのきわにておさへ上より引を云
るトハ　すくふを云
とトハ　はなして上より引を云
ろトハ　すくふを云
すトハ　五寸ほど下にておさへ上より引を云
てトハ　すくふを云

△三の糸のしやうが

ちトハ　ちふくらのきわにておさへ上より引を云
りトハ　すくふを云

てトハ｛はなして上より引を云
れトハ｛すくふを云
たトハ｛五寸ほど下にておさへ上より引を云
らトハ｛すくふを云

右あはせてしやうがの數十六字有これをよくそらにて覺るほどなに事にてもはやく引ならふ也

十六字とは

シキサカツルトロ　ステチリテレタラ
しきさかつるとろ　すてちりてれたら

いとをおさゆるゆびは、人さしゆびなり、べにさし中ゆびにてもおさゆる事有ども、それは功者に成ての事也、はじめは人さしゆびばかりにてもくるしからず

△あふみおどりのうた三味せん引やう

ステツステチテ　ステツステテツト　サシト、ツス
ふうらいふらい、ふるつまいとしな、われふるつま
テチテツトロツ、テツトツトサシトツト
は、なをいとをし、いやれなを丶いとをしい

これをよく引おぼゆれば、いづれのうたにてもふしだに一つなれば、かくのごとく引てあふなり

△おなじくあふみおどり

スクテレツルスクテレチタテレテクテレツルスクテレテンツトトサ
ふうらいふらいふるつまいいとしな

カ丶ミトハトロツルスクテレチリサレツ丶ト丶トロサツ、丶ツト
われふるつまはなをいとをし、やれ
ロツトサカシキトテトロツルトテト
なをいとおし

たゞし、これは引やうむつかしけれども、世上にておほえたるはかくのごとし

△いせおどり

ステチテ、テツ　ステレツテツトツトサ　シトツト
あのきみさまはあ、いせのはまあそたあち、めゑもし
ロサシトテツヽテレツルトステ、
にしほかやれこほれかあかるゑ丶

△おくらおどり

シトトツテツトトシトトンツトサ　シテツテツト、
をくうらのをのをんのをんのへの、ひともとをすう
シトトシツトサ　スト、ツテツトトシト、シツトシ
んすうんす丶き、いつうさてゑほほんほ丶んほにて
サ　ステレツテツトトシトトシツトシササ、シト
丶、みたれやあんやあんやあんあをいのおたまこか
ツトシトサシトツ、シトシサ
れゑんてなきこかれつらんや

△あひの手

テスツテスツ。ステレステ。ツルトシサ。

△すげ笠ふし

ステ、チタ、タチテ、　チタテ、スチチテ　ツステ
やふれすげかさあやあ、あんやあ丶しめをかきいれ

ていのをゑい、さらにいきもせす、ゑ丶いさあん丶さああああやあさん丶さ、すうてゑもせゑすう

△よしの丶山

よしの丶をやまを、ゆきかとみいれはゆきてはあ丶、あらてん丶やあこれのを、はなあのふ丶きよのん丶やあこれの

△かいだうくたり

おもしいろのかいとくたりやあ、なにとかたあるとつうきいせしかもかわしらかわう丶ちわあたりいおもふひとにはああわたくちとよを、しのをみやあかはあらあやあ、じうせゑんじせきやまさんりをう丶ちわあたりい、ひとをまあつうもを丶とをにいつうくうとの

これよりさきはさみせんおなじごとくに引也

みわたせばせたのからはし、のぢしの原や かすむらん、雨はふらねどもり山をうちすぎて、をの丶しやくとよ、すりはりとうげのほそみちこよひはこ丶に、草まくらかりねの夢は、やがてさめが井、ばんばとふけば袖さむき、いぶきおろしに、ふわのせきもり、とざさぬ御代ぞめでたき

△ころくふし

ころく、むまれはにしのをくにころく、そをたちやほ丶ほんほ丶ほん、ほ丶ほ丶ほん、のをよををくはん、んとののんか丶いやか丶か丶んか丶、そんそれまことにのほんほ丶をさあて、むさあしのにすうむなころく

△柴がき

しはあかあき、しはあかあき、しはかきこをしいてなあああ丶ん、ゆきいのおなふりいそをてゑ、ちらとみいたとなあああ丶んふりいそをてゑ丶ゆううさいのをなんなもさあんよさいよゆきのなな丶ふりいそ

ロツ〱テチテツルテントロサシト、
をてゑ、ちらとみいたとなあああん丶

△鹿おどりのうた

ステ、、ステステチタチテステレツルトロサシト
うらううらのせきのををしみいつうわあ丶、よこ
トレトテツトステテチテレツルテツト、シトロシ
とをにをつれゑとをなもをたあたあぬううゑいそり
サ
や

返しおなじ事也

△おかざき

ステ、チタチタステ、チタチタステ、チテ
をかざきじよろしゆをかさきしよろしゆをかさきじ
レツルテツトシト、ステ、チテレツル
よろしゆはゑいじよろしゆうをかさきじよろしゆは
テツトシト、
ゑいじよろしゆう

近代山井の弟子柳川撿校、此道に心をよせ、寤寐にわすれず、天生その骨をえて當代の名人也、色あひばちのしなやかなる事、中々凡人のわざとはおぼえず、さるに依て、世に柳川流といふくみのかずは、おもて七、うら七と、その外大事どもおほきなかに、さかい與中島ぐみといふは、大なる秘事とす、はでのかず、卅餘有中にもらんこやといふ事は、引えがたき事也、學んとおもふ人はよく〱習をうくべし

一調子を聞習ふ事、初は胴竹にて聞べし、功者に成ては、四穴十二律にて聞べし、十二律は昔黄帝の臣下、伶倫と云し人懈谷と云ふ所の竹を切て、作り出すと也、去に依て調子を業とする人は伶人と也、此調子と云事は、人間のなす事にあらず、天地の間に陰陽造化の氣、みち〱て、自然の聲音物をかつて、顯る丶道理也、これ天地の妙一氣の流行不息の印也

一十干の調子と云は、天一の水より生ずるを、盤渉と云、地二の火より生るを斷金と云、天三の木より生ずるを、神仙と云、地四の金より生ずるを平調と云、天五の土より生ずるを、鳧鐘と云、地六の水となるを勝絶と云、天七火と成を、黄鐘と云、地八の木と成を、双調と云、天九の金と成を、鸞鏡と云、地十の土と成を一越と云、これ十干の調子也、日月の調子とて上無下無をくはへて十二調子也、此十二調子の次第は、まづ一越は子に當て位は一つ、數は九、斷金は丑に當て位は二、數は八つ、平調は寅に當て位は三つ、數は七つ、勝絶は卯に當て、位は四つ、數は六つ、双調は辰に當て、位五つ、數五つ、下無は巳に當て位は六つ、數は四

つ、月の調子是也、鳧鐘は午に當て、又位一つ、數九つ、黄鐘は未に當て、位二つ、數八つ、鸞鏡は申に當て、位三、數七、盤渉は酉に當て、位四つ、數六、神仙は

戌に當て、位五つ、數五つ、上無亥に當て、位六數四、日の調子これなり

又順のうつり逆のうつりと云事有、順八逆六と覺る也順のうつりとは、一黄平盤双上鳧斷鸞勝神下是を八のうつりとも云、運氣論納音の五行に、八をへだてて、子を生ずると書しも、此調子の理也、逆のうつりとは、下神勝鸞斷鳧上双盤平黄、これを六つのうつりとも云也

又十二月の調子は、まづ正月は陰數の木、神仙、二月は陽數の木、双調、三月は陰數の土、鳧鐘、四月は陽數の火、斷金、五月は陰數の火、黄鐘、六月は陽數の土、下無、七月は陽數金の金、鸞鏡、八月は陰數の金、平調、九月は陰數の土、上無、十月は陽數の水、勝絶、十一月は陰數の水、盤渉、十二月は陽數の土、一越、月の調子これなり

又人の呼吸聲音の調子は、神仙、双調は肝の臟、膽の府に通ず、黄鐘、斷金は、心の臟、小腸の府に通ず、鸞鏡、平調は肺の臟、大腸の府、盤渉、勝絶は、腎の臟、膀胱府、鳧鐘、一越、上無、下無は、脾の臟、胃府より通ずるこれなり

其外生としいけるものは、云に不レ及、非情無心の草木、風聲水音まで、自然の調子にあらずと云事なし、然間人の目はみんがため、耳は聞んがため、鼻はかがんがため、舌は味へんがため也、されども調子に

至ては、聞人まれにもあらず、學ぶべきものともせず、誠にいたましきかな、古人は牛の吽馬嘶を聞、杜鵑・聲に、世の亂をしる、これみな音律をえたるもの也、おろかなる人とせんや、今時の人は、耳ありても、淫聲を聞口有ても虚をいひて、終に其身のあたとす、今此尺八も口に任て吹ちらし、野人の耳をうごかさむか爲には非ず、いたらぬまでも、天地鬼神の心にかなひ、妙音不思儀の聲を調べ、生長化収のみちをしらんがため也、もし此道に縁あらば、はからずして、妙音の樂師に逢て、・息の指南に預らん事をねがふの外他念なきもの也

寛文四年甲辰卯月吉日　中村宗三

寺町通
秋田屋五郎兵衛板

糸竹初心集終

松の葉序

それ吾朝の音律は天の鈿女の命より起りてあられふるらし外山のかつらいろにみゆるをいかにせんと庭(には)燎(び)の唱歌にはじまりけるかつ人王百七代正親町院の御宇永祿の比琉球より蛇皮二絃の樂器渡り和泉の國堺にすめる琵琶法師中小路(なかせうぢ)が手につたへ長谷の觀音の靈夢によりて一絃のまし三絃とせしを世に三味線と呼てしらぶる音にあらゆる呂律備らずと云事なし是一より二を生じ二より三を生じ三より萬物の音聲(いんせい)を生ずる理いたれりかの中小路より石村虎澤澤住相うけ次て寛永に攝州に加賀(かゞ)都城秀(いちじやうひで)湛能(たんのう)ならびなく九重に遊び東武に跪き官職に昇進して加賀都は柳川城秀は八橋みな僧官に准じて撿校に經のぼりければ此三絃の鼻祖兩家の棟梁とはなれりける傳ふる所本手端手新曲綿蠻として淺利撿校佐山撿校出田撿校市川撿校朝妻撿校藤島勾當今や都には小野川撿校三橋撿校猶等覺一轉のひかりをあらそふ藤永勾當熊川勾當松澤勾當木崎勾當早崎勾當豐田勾當清田勾當倉橋座頭武藏には岩崎撿校豐橋勾當連川勾當安數川座頭等雪上に霜くはゝり錦江に桃花飜り塵動雲逗るの功妙手として十の指さす達人なりやつかれとしころ閑暇の茶菓に是をもてあそびて知音のこゝろざしありければより／＼かの本手端手長歌端歌吾妻淨瑠璃新曲の唱歌を艸書しかつ古今百首のなげふしをくはえ花晨月夕のこゝろやりにかいつくをある人ねもころの求めに應じて櫻木に命ながうせんとするにまかするものや此花のもとにあそぶ好士あらば德孤ならず吾いづくんぞかくさんや／＼

于時元祿十あまり癸の未龍集の涼み月秀松軒の木のもとにかきあつめぬれば松の葉と名つけぬるもむべなるへし

松の葉第一卷

○三味線本手目錄

一 琉球組　二 鳥組　三 腰組
四 不祥組　五 飛彈(ひんだ)組　六 忍組
七 浮世組

此七曲を本曲といふなり石村虎澤琉球國より相傳のうへ手をなをし加えて一作となし今の世に至りて三味線第一本手組の濫觴となれり

○端手目錄

一 待にござれ　二 葛の葉
三 比良や小松　四 長崎
五 下總ほそり　六 京鹿子
七 端手かたばち

此七曲を新曲といふ柳川撿校作也

○裏組目錄

一 賤　二 錦木　三 青柳
四 早舟　五 八幡　六 翠簾
七 なよし

此七曲柳川撿校作也此內早舟相傳の時師へ一禮の法式あり

本手

（一）りうきうくみ

○ひよくれんりよのてんにてる月は十五やがさかりあのきみさまはいつもさかりよの

○おもひをしがのまつのかぜゆへにしなでこかるゝ〳〵

○みやまおろしのをさゝのあられのさらりさら〳〵としたるこゝろこそよけれけはしきやまのつゞらをりのかなたへまはりこなたへまはりくるりくる〳〵としたるこゝろおもしろや

○とろり〳〵としむるめのかさのうちよりしむりやこしがほそくなりそろよ

○とてもたつながやまばこそこちへおよりやれのうしばがきごしにものいはふ

○おはらぎかはひ〳〵くろぎめさいのてうりやうふりやうひゆやりやにひやるろあらよひふりやうるりひようふりやう

（二）とりくみ

○とりもかよはぬやまなれどすめばみやこよわがさとよ

○わがこひはせんばんこまつのかるゝほどたいがみづひてほこりたつほど

○みるめばかりのこひをしてちかのしほかまみをこがす

○いえはよにふるいはねはこゝろかもた〳〵と

○おめとめとめをみあわせてはなれがたなのそのおもかげをゆめにもみもせずうつゝになりともあはせてたもれあはねばこゝろがもだ〳〵とおもひのたねやあこがるゝみをなとせうその

○きやうでは一でうやなぎやがむすめよつわりおびをたすきにかけていかにもこしがしなやかな〳〵

○いざまいろ六ぢさうへほとけにへだてはなけれどもさりとてはではのしほやがたてた六ぢざうえいそれしほやがたてた六ぢざう

○しのびのとのさまにふらゝんとさげさしよえんのあるゆへよねんがないよの

（三）こし組

○こしにさげたるきんちやくはこれもうき人のぬひじやほどに

○みちて見たりともわすれまいしだれやなぎのふり

じやほどに
○あめはふるともゆきふるなさしのぶほそみちのさゝのたはむに
○なるとならずと文をばつくせ心づよやつれなやとにかくにわれはかずならぬみじやほどにきみこふか〳〵ゆこかこずはもどろに
○ひとよふたよとなれそめてあすはふねづるなとせうぞのうらめしや
○いやといふたものかきくどひてのうなんぞやそなたのひとはなごゝろおもへやきみさまかなえやわがこひあらうつゝなのうかれこゝろやもまいの〳〵さゝらもまいのわれらもわかいときはとのにもんもまれた

(四)ふしやうくみ

○わかひがふしやうでをひまいらせうかのせどしはがきのやぶれたを
○おもふまいとのかねをちんからころりとうてばばちやらなをおもわるゝ
○はしにわがみをなげかけてわたらせうよのとろ〳〵〳〵とやれわたらせう

○月のよにうつきぬたのをとのえいはら〳〵ほろ〳〵はらほろとまたしてもおどろくよも〳〵あるにひとりねよとはなにごとぞおもはざなきそますはなぐるひしやうづものわざくれ
○わざとこんとはおしやれどもしんじつおもへばはぢもひとめもおもわくもおもひだされぬものじやものしかしながらきみはたゞますはなのあるゆへ
○十七八はこんゐいころりなげしのほこりみなとのたちのめにいりた〳〵めにいりたらばやくしへこもれやくしのまへでめぐすしてしよ〳〵

(五)ひんだくみ

○ゆみや八まんねはせねどねたとおしやらばなとせうぞの
○ひとつこしめせたぶ〳〵とことにおしやくはしのひづま〳〵れんぼれゝれつのれいしよじやうにそはゝれつのれ
○これのちよじよかかみわげわしちくこだけによつのふしかゝやゐちぜんみのをはりゐちごきやうねごろこかはさかもとでしよまうめされた
○あすわじよづものふねがじよづものおもたげもな

とおよるとのごやあゝおよるとのごやひんだのを
どりをひとをどり〳〵
○ふねのなかにわなにとおよるぞとまをしきねにか
ぢをまくらにひんだのをどりをひとをどり〳〵

（六）しのびくみ

○いよしのび〳〵てこゝろうれしやむめにさへづる
うぐひすのよるはこずえにやどるとも
○おもふまひよのやれそれほどにかほにもみぢのた
つたやま
○いとまごひにはきたれどもごばんのおもてゞめが
しげゝればまづおまちあれしばのあみどもおせば
なるあはれあられがはらほろとふれがなそのまゝ
にあゝせうしやたつなやせうしとたつなやしのび
をどりはおもしろや〳〵
○こひをせば〳〵二十三やのつきをまて月のいつは
りなきものをてててからこしやんぎしやかんこ
はらりついやひよついや〳〵つやにちやうらゝに
やうつほゝしのびをとりわおもしろや〳〵
○わがこひわもじのふくろにいろこそでなにとつゝ
めどいろにいでさふろやつれいでさふろあいみて
のちわなにとせうぞのもどろやれしやなら〳〵と

（七）うきよくみ

○たれもうきよはかりのやどさのみ人めをつつむま
じよやきみしやらり
○ふみもやるまいびんぎもせまい返事さへせぬうさ
つらさきみをばひとにおもはせてかほどにつらき
ものぞとおんもひおもひしらせでとはおもへども
みのうへになればさらにおもひきられぬ
○とてもたつなにねてごされねずともあすわねたと
さんだんしよはなのをどりをのうはなのをどりを
ひとをどり
○われわ小つゞみとのわしらべよかはをへだてゝの
うかはをへだてゝねにござるはなのをどりをのう
はなのをとりをひとをどり
○いとしわかしゆと小つゞみわしめつゆるめつしら
べつゝねいらぬさきになるかならぬか〳〵
○みやまやるまひみやまたきのみづはうちやうてい
つくちやうどうてばうちやうていつくつく〳〵し
んたんたらつくちやうどうつわかしゆをどりをの
うわかしゆをどりをひとをどり

葉手

(一)まつにござれ

○まつにござりたいとしのきみやのうこんやごさらざこがれしのう

○とてもえんなきなかならばなどやはじめのつらからんいとゞはげしきふきあげはまにとりをかぎりにかのさままてばさむきあらしもみにしまぬ

われがとのごはとう五郎どのしゆじやがあはたぐちよりいしまたひきやるえいややころさにやつといふてひきやるおこゑきくさへよふしがなゆるましてそふたらしのずよの

○きみとわれとはのやわくのいとのされてはなれてまたむすぶ

○しのんだりやなしのばれたりやなうらのほそみちこやぶから

○おもふまゝなるのやこよひかな月わおぼろにつまはきてもみぢばを見よこひわちる

(二)くずのは

○さてもやさしのいよくずのはやなにをたよりにはいかゝるいよえいはいかゝる

○きみをまつしまをしまのあまのたもとひがたきわがなみたいよえいわがなみた

○みやましみづわそこからすむがきみのこゝろもそこからか

○やまでこしばをしむるがごとくこよひそさまとしめあかす

あさきちぎりにあひなれそめてふかきおほひわあゝさてなみたがはきみにあふせをまつばかりあゝさてまつばかり

○こんどござらばもてきてたもれぎふのおやまのひのきのえだのうきよがゝりのおもひばを

(三)ひらやこまつ

○ひらや小まつのあさがよひつまがぬれ候いそうつなみに

○しほづかいづにあるときはのぼりたいよのさかもとへ

○かどにたちたわ八もじさまかよかせみのどくうちごされ

○いつのなんときそなたをみそめわれがみわたゞいそべのちどりなかぬまもなやきみゆへに

○こゝは三でうかやれかまのざかいちやとまりてしげりまいらしよわれがとのごはなごやにごさるさてもおるすはものうゐものじやえい〳〵さら〳〵のういしをひくえい〳〵やつといふてひくにわゆめたんべいのえいといふてひけばおなびきやるかのういよやつといふてえいとへえいさらえい

（四）ながさき

○みやいちがよれた〳〵しよぢよがなさけ

○ながさきのとりわときしらぬとりでまよなかにうたふて〳〵きみをもどす

○くれなゐのさんじやくてぬぐひかたみに見よとておいてゆく

○くれなゐわうすくなるともそもじとわれとわいちごちぎるべいぞよもさしらがにこえだのさくとちぎるべいぞよもさ

○むかしよりいまにわたりくるくろふねえんがつくればふかのゑとなるさんたまりや

○おもはぬきみにおなさけわむやくうきみやついてなげくわれらにおちさせられぬ

○めいしよさま〴〵おをけれど〳〵ふきあげのはまはわかのうらさあてんじんたまつしまぬのびきのまつやまいくちよ〴〵とわかやまのまつおまいりあれのきみゐでら

（五）しもさほそり

○このほどはこひつこひられつこよひわしのびのはつでござり申すよのさあいよへいよへうちとけてゆら〳〵とおよれのうさまたよわよなかよしげれとんときみさまさあいよへ〳〵

○まことやらかしまのみなとにみろくのおふねがついてござり申すよのさあいよへ〳〵ほばしらわこがねのほばしらほにわほけきやうのごのやまんまきものさあいよへ〳〵

○かひのくになるしんげんさまのないちともござらぬ二ともござらぬおちよぼしのぶにむつのくが候まづ一ばんにあめにあられによつゆにしばかきのうさていぬのあだぼえそれ月わなを月はのうさて月わゑせもの

○しのぶほそみちにまつとくるみわうえまいまつよにそのみがくるみでもなしなよさてまことにくるみでもなし

○こぞのたけとよことしのたけとよしどろでもどろでのうさてふしがそろはぬなよさてまことにふしがそろはぬ

○たれでござり申すかべこしのまたねずなきこよひわとのごのあとにねてきくねてもきけとよおきてもきけとよこよひのよがさてあすのよになるともあはずばもどるまいよのなよさてまことにもどるまいよの

○さてもつれなのきんきんさまやきんぎござらざぬめりてくらそそれをたれぞとたづねてきけば六でうしものてうのわかやまさまのうちのやまのかみがきいたらばたけ〳〵たけりやろものを

(六)きやうかのこ

○これはきやうがのこいろもよやめゆひ手ぎわもよやきよやあらみやこゝひしやのうみやこのしてたちこひしやのう

○これわきやうこそでいろもよやもんがら手きわもよやあらみやこゝひしやのうみやこのそめどのこひしやのう

○しんのやみにもまよはぬわれをあゝさてそさまのまよはする

○ふけよまつかせあがれよすだれいまのこうたのぬしみたや

○はなとならばなよたんだおんみはもみぢのいろよのうさてひかずにそひていろまさる

○むめのにほひをさくらばなにやどらせてあをばのまゝにながめばや

○しやく八のひとよぎりこそねもよけれきみとひとよわねもたらぬあら心なのきみさまや

○そちとこちとはまつにふぢのさがりえだのごとくたそかれどきにかゝるかゝるなさけがみにまとはるゝ

(七)はでかたばち

○ふえによるしかはつまゆへにするわれらもさまにやつれいのちすてうずよの

○ありがたのりしやうやおありがたのりしやうやほとけまいりのりしやうでつまにゆきあふたのう

○あさまとくおきてうずがめをみればいがおかぬはなのあるもふしぎやな

○ふはのせきのいたまに月のもるこそやさしけれ

裏組

（一）しづ

○しづのみなればいろにはださぬあたゞ心のうちにこがるゝ

○たちよりむすぶやまの井のあかれずあかぬなかはなまつのふたばよちとせふるまで

○筆でかくともゑにうつすともさらにつきせじまつしまのなみにうつろふ月のかげしまのかずしんしらぬ

○たんだ人にわなれまいものよなれてのゝちはるゝんるゝみがだいじなるものはなるゝがういほどに

○かづいたみづがゆり／＼たぶつきこぼるゝげなものをうつゝなやとのはみやこに

（二）にしき木

○かみのおまへのみしめなわそよふくかせにもなびけばなびくつらき心をうちすてゝものぐねになめされそそふふりわるやうちとけよくすみてもせんなや

○やまがらがかごのうちでのうらみごとかごがこがごでもんどりうたれぬ

○七りおばまのなすなのかずほどおもへどもえんがうすいやらそひもせぬ

○おつとわにしき木とりもちてさいたるかどをたゝけどもうちにこたふるむしのねのおもひき路やれこひのみちきりはたりちやう／＼

○しのべどもおもふきみにはあはずしてむらさんめははら／＼ほろとふるほどにおもひきろやれこひのみちきりはたりちやう／＼

○とてもおすちやるものゆへにさりがたいとてだかりようかうきよのなかのさんだんにさかひつることよのといはりよよりもなまなかいちやはまいるまいよいや／＼いやならはじめにいやとはおしやらでいまさらなにとならふぞのうおもはざなきそますはなくるひせうずものわざくれ

（三）あをやき

○さてもそなたのたちすがたはるのあをやぎいとざくらこゝろかたよ／＼と

○ふみもやりたしびんぎもしたやおもかげにたつそのおもかげをわすられもせでみにそひそゞろにうかれきてうきやうこつやしやうだいなしやうきや

こひのとまらぬたゞとにかくにうらめしや
○まくらにかゝるみだれがみいとゞこゝろのみだれ〳〵てやるせなやよしやそのみがなにとなろうぞの
○えんなきおもひにみわほれてあさがほのはなのつゆよりもろきみをもちてさのみこゝろなつくさせそ
○十七八わすなやまのつゞしねいろとすればゆかりおこさるゝ
○くもりかゞみかわれが身わおもひまわせばとぎほしや〳〵
○あすわとのごのきぬたうちおかたひめごもでゝうたいきぬたをどりはおもしろやきぬたをどりわひとをどり

（四）はや舟

○いはひめでたののうれしめでたののようわかえだもさかゆるのうはもしげる
○ながのながさきのながのるすんのるすゝればおもひいだすことはよひとよなかとのうあかつきとなごややまぢよのうひごじややつとしろくまもとじやとりもえかよはぬやまなれどすめばみやこよわがさとゝ
○しかくばしらのうしかくばしらのまたのんえいそれかどかどのないこそそひよけれ
○はなわさいてものうむめわひらいてもはなさいでむやくのあだはなよ
○これがいとまなふみてにわとらいでなまなかに
○やまじやたにあひのみたにおろしのこのはうづもれのうしばのいほりもまたのんえいそれなつみやこなれどものうたびわうや
○おきのひくしほにたけにあぶらをぬるやうにとろり〳〵とうたふてなのりてこぐやふながたはえいうへさまのござぶねかまたのんえいそれろでわやらいでうたでやる
○おちよぼちよぼさまのなりわむくどりじやこゑわうぐひすじやしゆくしやかむくしやかさんはかしんはかしんからきうたかずんばいぼみめがよござればこゑことばものうしなやかな
○みやへわさんりへのうえいさんりもちかさんりはつかゞいちのげんざがぬりものわうるしではぬら

いでくちなしばかりでさつとひとはきえいそれはつたらずんでんどうそのやうなぬりものわたゞわくるゝともおらはいや〳〵いやでそろやがてはぐるに
○さるさはのいけのみづでわないこいがすみそろみのいけに
○しのだけのこしのだけのまどのあらしにめがきみもおよらずわれもねず・
○さくらぎにうそかとまりてことのひゞきにはながちる
○さきのつきの廿五日にさだめたるにはにぬてるもくもるもふゆのひも
○やまわゆきじやふもとわあられさとわあめうらへまわるもそさまゆへ
○おきをこいでとをるわあかしのうらのげんざがもとぶねかさてろでわやらいでうたでやる
○いちのえだひけば二のえだなびくなびけやこまついちのえだつりりんり〳〵
（五）八はた
○つきわやわたのまだそらにもいのいのとはおもへどもあとにこゝろがとゞまりてうしろがみひかるゝなんぼこひにわみがほそろふたへのおびがみへまはる
○たつるおちやにわあはたゝでわれがうきなはむら〳〵にたつむら〳〵にたゝばたてのうまことのこゝろとけずわしよぐわんじや
○ゐのやまかげをすぐにくるだにおそひになよしんじつうらみごとさしおいてまづだいておよれのうなよしんじつ
○おもふかどにわたけをうえてゆきのふりたるあけぼのをつれなきひとにみせばやなびくさゝのは
○ひとのよめごと竹にさくはなよやとおもへばやへきよくもないさまじやせんないしやもしやももちくなにしよそうてなにしよそれしよしやなにしよわかしゆをどりをのうわかしゆをどりをひとおどり
（六）みすぐみ
○みすのおもかげものごしに見そめきゝそめうか〳〵とこひをしてやするはひとのしらずしてなつやせをするとやれすいめさるゝ

○つゆにみだるゝいとすゝきそよ〳〵とふきくるかぜにもなびきてろうつゝなやしやうだいなしやとわおもへどもてもじとわれとはよろづよまでもちよまでも
○かせにまかするうきくももふくかたへゆくめでしめばひくとおもはれつれなのきみのこゝろねや
○かづいたみづかゆりこぼるゝもうきよのならひさてもつれなやしやうだいなしやうきやうやならぬわわれたしやく八かのう
○たけがな十七八本ほしやなうきなやもらさじのなかごにくも
○われたしやく八てなかけそとてもなるまいものゆへにわれたしやく八てがござるじいじとしむればなるものをとりてふきてみたればふしがちやうとしたれつろれつろつりよれつのれがつれつろ

(七)なよし

○なよし〳〵わなよしなしのあだばななよしなりはしもせでなるとなのたつなよし
○さゝらこだけにあらねどもさらにさら〳〵さらにしらぬものともすればなんぞよそなたのものぐねりなにとなりとおこのみやかねをうとかのう
○しんきはりよやれはまへでゝおきのしま〳〵をみてなりとあれにみゆるはしがのうらこがらささひとつまついなかくだりのみちすがら〳〵
○いなかくだりのたびのとのめいしよの月がながめしやんとのうしやんとながめたりよさそゞろいとしうてやるせなや

本手端手裏組終

秘曲相傳之次第

初傳　搖上　　二傳　亂後夜

此二曲を新曲の秘曲といふや誓盟をもつて相傳の時師へ一禮の法式あり亂後夜以前に後夜敦賀ごやといふ二曲あり此曲に手を加えて三曲一にして亂後夜となし傳受する後に晴嵐といふ一曲淺利撿校手をくわえて彈也　口傳

三傳　七つ子　此曲は浮世組をさきへ彈その跡にて彈也

四傳　松むし　五傳　淺黄　六傳　茶碗

此三曲を新曲組といふ七つ子相すむうへ次に傳受する也

七傳 堺　　八傳 中島

此二曲を本秘曲の曲といふ極最上の傳受誓詞神文ありて一卷の書を附屬するなり師へ一禮の法式あり

口傳

右相傳法式之次第者柳川撿校より淺利撿校相承し淺利より今都の早崎勾當にうけつぎぬこゝろざしあらん人は早崎より口受あるべき也

松の葉第一卷終

松の葉第二巻

長歌目錄

（一）わかみどり

はるははつねのまつかえひきてきみが千とせをやちよとおもふそのときはぎのわかみどりアイノテむめのはながきかほるよりうぐひすきてふとさえづりかはしよし野にはなもさくらぎふぢえいろなつかしきたそかれに山ほと丶ぎすをとづれてあけやすきよのならひにはゆめのうきはしなかたえてふみもかよはぬこひのみちくもでにものをおもふこそかのやつはしのかきつばたわかむらさきやこむらさきゆかりある身にたのみをかけてえにしをむすぶいづみがはいつあひなれてあいそめがはのあだなみか丶るぬれぎぬのたもとすゞしくあきたちてをぎふくかせにみだる丶露のそのたまかづらかけしよりわするまもなきわがおもひそらにうかる丶あのうすぐもにゆふぎりか丶るそのつきのころ人まつよひのものさびしさをたれにかたらんみよしの丶たのもたよりもつきはて丶うらみなみだにそでしぼるいろわやしほにそめなしおひてもみぢちりしくたかをのやまのあらしにつる丶むらしぐれいくたびぬる丶わがそでアイノテひろはゞきえんたまざ丶のあられはつゆきふらばふれわれ

ふるつまは〳〵じつからいとし

(二)まさみち

とるやこそでのつまゆへにあゆみならはぬみちしはのつゆにおきふししほれつゝいくさみだれのことなればあらしぞつらきはなのまへちり〳〵になる身のゆくゑまさみちの御手をとりたどろ〳〵とのんさてまことにきみゆへなればはるかにあとを見かへればおりし所にたつけふりいたはしやなわがつまのなにとかならせ給ふそとそなたのそらよとながむればなみだのあめのたましにやはやいりあひのかねがさきいたはしやおひのみのさぞやものうくおぼすらんわれがおもひにみたれがみゆひかひもなきみなれどもなむやさいふの御ゝがみいにしへのうきをまもらせたまへやとふかくきせいをかけおびのむすぶちぎりのくちせずはつまにはやがてあひにあひあふまつこそうれしかりけれとかたりなぐさみゆくほどにあしやのせきにぞつき給ふ

(三)ふじまふで

やどのしゆびよくつくろひおきてうかれこがるゝ二てうだちにうちのりておもふきみをばはやみつまたのうへのちや屋よりわけよしがまねくさのとくにいよのほんほわがえだちさんよへこのいよこのへ〳〵はんもひちやさとりやうごくばしまでのりつけてはなび〳〵をめせさせかはんせのよい〳〵そのやいそべにうつなみのよせくるゆさんぶねがさはぎあつまりてしやぎりのをとのアイノテおひやりこひやりひやりこ〳〵ひやりひやりらんらゝらりつるんろるゝりやちやらゝるろかねがまたかしこをみてあればふじまふでのぎやう人たちがざんげ〳〵六こんざいしやうざんぶりどんぶりずぶどぶひよひよんにひよひやうたんを腰につけてみづあそびもござんすみぎはむえんじいつもよりけさうつかねのねのよさかねをたゝいてほとけにならばさどてのだうてつはきのとをつたほとけじやすいたほとけじやあれを見よさんちやがよひのやぼすけがこまをはやめてのつたりやとをりんばうあふたりやおそまきさつてどてのきはになれんばはらりとびおりてよいはおりかづひてかほうちかくしまがき〳〵をそろりとみればあれどれふりそでがそでがのゝそでがのほんのほんへ

(四)げんごしう

はなわさくらよかほるはむめよはつねゆかしきやまほと丶ぎすつきはたかをのもみぢをてらすゆきのはだへになれ〳〵なる丶わはんじよがねやのと〳〵アイノテゆきてみうらのまがきのうちにはなのいろいろそのこむらさききくにはつねのうぐひすそでをひく手いくたびわすれもやらでちよのおもひを〳〵たれにかたらんげんごしうアイノテいとしげんしうにあふよさはさんさとりもなくいそよもあけそさんさてらく〳〵ほろりん〳〵のうようら〳〵〳〵〳〵こでらのして丶んてんちんからころりよのお丶ぽつとりぼとりのぼとぼんぼと〳〵〳〵しととろだいこもつんつりがねものふこのいよそれのうさてつくならすなげんごしう

(五)さんやをどり

こんどはじめてお江戸にすめばてんがかくやくひかりをくれてきれよさがれよふりそでだてを〳〵するがのふじはくさんぞたてなわかひものさんやへかよへしのぶあせみちでぶめがわれにあておつたかつにくけれどきみがためなりやつらさもういこんだうきよしのぶのふかあみがさのすがたかたちでわかきはみゆるしの丶す丶きですゑとげぬよしなのおもひじやなアイノテたれもすいたかおゑどのふうやいくたこやの丶あつもりさまがくまがへがさにはちくづえ二つもんのちんちりめんのべんべをきせてせんせかしようきみのねみだれがみをいつにわすりよぞさてもさいたるながたなおきのとをつたおわかしゆ様のいつくに〳〵ちめだまがはなされ申さないアイノテだてもうはきもいのちのうちよさやがてしぬ〳〵ひつひけうんのめさはげあすをもしらぬ身に

(六)くも井らうさい

やまのはアイノテいかな夜もよも人アイノテこそしらねアイノテねやわなみだのふちとなるアイノテよしやなげかじかなはぬとてもアイノテさだめなきこそうきよなれアイノテスカヽキチラシわれふりすて丶一こゑばかりいづくへゆくぞやまほと丶ぎす

(七)木やり

やれうきたつははるのHのかすみのうちのむめの花ひとへばかりかさくらばなにほひふくみてさけるこずゑをゝりたやなかのえだから見ごとにようさいたやれかほるそでをへえいや〳〵ちらばかいあらじや

れものゝきはあきの夜のきみをまつむしくつはむし一よばかりかきり〳〵す二やも三ッ屋もきみをかうろきをひかけなかのつながらみごとよそろうたやれさきのつんなをえいや〳〵ひかばなびきやれのみなさまも御ぞんじどやがしがのしらたま花のにかつらからさきうすくもたなびくあれからこれまでえいややつはしさんまさら〳〵さつとたいこをたのんでくどきすまいたりやうきちの太夫さンまなさけわさんしうさかたにまんよに小太夫まさきにさくらぎはつはなのやどやゆきにはひねつてしなつてわらつてあゆんでくせはなにもなにはじやないこそはだうりなれ京のぶらとおさかのぶらとおゑどのぶらとさんせん人ッのぶらどもがよりあひだんかうでつくりつけたるおこたちいかなとんてきどももうてうてんのやほすけなりともふん〳〵ふかくはあはふかあひますまいかいやたゞふかくはなりそろまいとゆつたらくせつになりましよあいのやのおはがてんかよもとつッなよへやんれうてやうてつゞみたいこかつこ手びやうしにごすごろくにをんびやくしよいよむしろばたにでんばたよさかよねをかちぎぬきぬたかるたに

じやうせんがこつくいしよろりがむちはしかのゝのちよこ〳〵うつはけいひきかおやてつこのしゆかいりころりちん〳〵からりのつちのをとうつたるたぬきのはらつゞみ正月はせつぶんまめぶり〳〵にかきだまなるくさなづなよなじよ〳〵かきよせてほとはととたゝいたいとしけりやこそしとゝうてにくかうたりよかやつこりや〳〵〳〵下がそれたをひかけしめかけこゑをかけもとづッなよへさればそうじやうへんじやうのなにめでゝをれるばかりぞをみなへしわれをちにきと人にかたるなをひかけなかのつなから見ごとによそろうたやれさきのつなにへえいやいややしきでたときやうかれてでたがいまはカヘシまがきあたりをこうたぶしおうはちま〳〵はちざまをみたかいまはおもひのたねとなるアイノテ

(八)こひころも

あだなりとなにこそたてれさくら木のはつ花ぞめのこひごろもわかむらさきやこむらさきゆかりもがなとゆふぎりのたちまよひにしうすぐもやうはのそらなるきみたちをなにとておもひそめがはや身はうきはしのうきねにもせめてゆめにはうちとけよアイノテ

ねやのつきさへまくらにかよふひとりこがるゝ夜は
ながとのそのしのゝめのとりのこゑ見だるゝつゆの
たまかづらいつあふさかとこゝろはせきしうとめて
いくよもかほるははつねたきのしらたまなみだのふ
ちにしづむおもひはいづみがはいづみきとてか二上り
こよしかるものうたひしわロウサイよしやなげかじか
なはぬとてもアイノテさだめなきこそうき世のならひ
きのどくにいよのとはおもへどもすてがたき人を人
をはつせのやまのゐのむすぶちぎりのりしやうのあ
らばせいしせんじゆのそのいちざ三サカリいまやきて
うとまつがえときは本テウシちとせやちよのものおも
ひなさけをかけてやつはしのくもゐのにしをなかむ
ればはつやまとやまのみねのもみぢばいろふかきよ
り〳〵よもにうきなは〳〵たかをやま〳〵おもひに
ぬるゝわがたもとあれみつしまのはなのころこゝの
へにこそにほふらめならさかたこだゆふかしはぎふ
たりとはとにもかくにもたのまじものをわれよきを
しらぬわゐこくものかなとから〳〵さきのわらひが
ほめもとにやしほがへめもとのしほになれごろもか
のさごろもの袖ぬれてなみだの玉の非うらむる小う
たのそのふじえよしだのおもはくやどうもならぬに
の

(九)さよごろも

きぬ〴〵にかはすかたみのさよごろもつまこひかね
ししかのこゑにみだれみだるゝいとはぎのむすぼれ
やすきたまのをのよるてひくてにものおもふ身をせ
めてあはれとしばしなりともアイノテしのぶやましの
びかねたる人めのせきをみちしるべせよしのぶくさ
のいつそつゆともきえなばきえよたいじかさあるに
かひなきすてをぶねアイノテそここそしれねそてのう
みかはくまもなきまくらのなぎさたつあだなみはし
げしとまゝよそれをたよりにあはねばならぬあすま
でよもや三下りつゆのみはあらじこのゆふぐれをと
はゞとへかし

(十)もしほぐさ

ちよはふるともかはらぬいろよときはのやまのいは
つゝじいはねば人のこひしきものとおもひしよりも
すゞりにむかひよしなしごとをこゝろにまかせかき
てぞをくるもしほくさむねにたくひのけふりはそら
になびくならひにいよのアイノテするゑわあふせのなみ

まくらひとりこがるゝみはうきふねのよるせさだめぬこのうさつらさしらせたや〳〵ゆめに見んとてかたしくそでになくねさびしきアイノテきり〴〵すつれなきひとをまつむしのアイノテくさのまがきのゆふべになればものこそしんぞおもへのさりとはうき世やつさいつさて御けんはとにかくに

(十一)さくらづくし

あかでのみはなにこゝろをつくすみのおもひあまりにてをりてかぞふるはなのしな〴〵にわきてやうきひいせこまちたがこざくらやちこさくらもゝのこびあるむばさくらねれやこふらしおもかげのはなのすがたをさきだてゝゆくゑわけこしみよし野のアイノテニアカリくも井にさけるやまざくらかすみのまよりほのかにもみそめしいろのはつざくらアイノテたえぬながめはこゝのへのみやこがへりのはなはあれども馴しあづまの江戸ざくらなにおうしうのはなにはたれもうきみをこかすしほがまさくらはなのふりそでやへひとへアイノテしたにはむくのひざくらやかばにあさぎをこきませてわけよきぬひのいとざくらひくてあまたのみなりともせめてひとよのたはふれにゑひをすゝむるアイノテくまがへのアイノテたけきこゝろはとらのをのせんりもかよふこひのみちアイノテしのぶにつらきあけざくらきみのなさけのうすざくらアイノテよしやおもひをきりがやつアイノテうきよをすてしすみぞめざくらむかしをしのぶいゑざくらはなのとぼそのさびしきに月のかけさへをそざくら三ドリアイノテやみはあやなしこうばいざくらいろこそみえねむるそでもにほひざくらやきくざくらアイノテはなのしらつゆはることにうちはらふにもちよはへぬべし

(十二)ふゆくさ

いとはじなたまゆらやどる人のさかりアイノテ身をしるあめのはつしぐれさだめなきかなうきくものつきのにほひもかげさむきおしのうきねのまくらさへつらのたもとゝけやらで三下リアイノテとこのうらはのしきなみのはまかせさえてなくちどりおもへばゆめの世をしらてやがてかれ野のあさつゆと本テッシさえなんものをたれかのこりしきくのかのやへむらさきにうつろひてそでのむかしもいつしかにあひみしことをかぞふればアイノテむら〳〵みゆるふゆ草のうへにふ

りしくしらゆきのみちふみわけてたれとはんまつのおもはんはづかしのもりのこがらしたへ〴〵にならみだ〳〵たばしるたまあられあさひまつまのうき身のいのちながれのすゑのわれらさへもしもやさそふみづしあらばこひのしがらみせきとめよ

（十三）四季

たれかはじめしこひのみちいかなるひともふみまよふながのなはてのゆきかよひしきをり〳〵のたえせぬははるはよし野のはなさくらぎやそのひとふしもまちがほなるはつねゆかしきうぐひすのむめがかをとめあをやぎのうきねのねみだれがみはいつにわすりよぞアイノテなつはすゞしきさころもをきてもみよしのおんかほよばなあひそめがはのながれこそきよきながれとおもふにぞいとゞおもひはますかゞみくもらぬそらにあきはきにけりアイノテいつのまにことにいろあるもみぢばのそのなはよもにたかをやまのわきもいまはもみぢしてとてもぬりよならなまなかしぐれはいやよのふゆのながめはするがのふじよアイノテゆきになりたや此身はきえていまのおもひをえいさんさしらせたやよしなやとおもひつゞけてかくばかりこひせずは人はなさけのあらましものをあはれみたまへしづがうき身を

（十四）やへむめ

二上り　梅がさけがしいよ八重梅がえだをえたを手をる振してかならずこざせとさゝまをまねくアイノテかならずござせとさまをまねく夢になりともあひたや見たやゆめになりともアイノテうき世じやなまれにあふよはうつゝかゆめかまれにあふよはかたるまもなきさんさみじかよやよしなのおもひアイノテうき世じやな

（十五）かすが

三下り　かすがのゝわかむらさきのすりころもしのぶのみだれかぎりしられぬわがおもひアイノテをくつゆのしづこゝろなきあきかぜにうつろふ人のこむらさきはなむらさきのはぎがえにみだれみだるゝこゝろのつらさアイノテ本テウシそのくりことのまたのよにきみならでよん〳〵よそにはさあへ色にはうつさじさあへむらさきのいろにこゝろはあらねどもふかくぞ人をおもひそめかひもなぎさにわがそでしほる人め〳〵忍ぶのそのかよひぢのふねにうちのりおこきたちは

こぬかのうちのせよせついくたび思ふやどのしゆびとはおもへどもたゞひとすぢに此わけしらぬ人ならばたとひよろづにいみじきとてもたまのさかづき手にふれよアイノテしやんとさせそこはいよ／＼しられぬかきみにあふ夜はまつちやまアイノテ二上リ手にふれてアイノテいつしかもみぬむらさきのねにかよひゆくうたゝねのアイノテきみの／＼ぬれこそアイノテじつとは見えねしんぞこのみは神ンぞこのみはならだもろうててういぞつらいぞまくらもうくばかりへアイノテわけの／＼よひにはアイノテいよほださるゝへしんぞ此身は／＼はなみたもろうてういぞつらいぞまくらもうくばかりへ

（十六）はるごま

世をうらやかにそのふのはなのはるごまはゆめにみてさへこゝろもよきにましてまふたらせんしうらくよのいつもかはらぬわかみづのながれのすゑのわれらさへうかれすゞめのひつとうかれいでてあのいろさとにきてもおうしうなはたかはしのかへるさを見たればまづはなさむにむめがかしほのふりもよし野のはなのおもかげうつすすみの江ふでそめがはのふかさなかをばたがゆふぎりやぬれたわけあるつれうたをかのおもはくのさみせんにむめがえかほるにうぐひすのはつねわいとゞしほらしやどうもならぬにいよのとかくきみゆへ身はやつはしのはなこむらさきかきつばたさはぎたてられてアイノテぞく／＼あひとこなりませぬはとまがきながらもにしをさつとみかさのつきのかつらのおとこだてかやにほんもろこしきりゝとまはしてはなまつかえのふぢえかなをもふぢなみのえいりゑによせつものおもへどもうきはしのなかよかるものいづみかはいくよちさとのつきはさらしなをひかけなかのてうで見ごとにさたれゆへころんだころびやせぬもの手をついたアイノテおてとろきみのなみじやないものつらにくやにくかうたりよかせんよもちよのせいしせんじゆはしつかいみだかぼさつかたゞしよしたのかみならばつなぐりしやうもあれかしはぎのゐこくわかやまこちのてうのよねたちはゐきもはりもつよひはいのきんひらだんべいさかたさくらぎさつてもめいよの太夫しゆこのきみたちのてにのせられてはいかなしやうのいはやのおひじりさまもさみにのせてのひとふしはするも

こながとはるごまはせんしうらくなるみよとぞめでたき

(十七)たまくら

てりもせずくもりもやらぬつきわおぼろのはるのよのゆめばかりなるたまくらにきみがうきなやかひなくたゝんとかく人めのしげ／＼なればしのぶやまみちしのびてかよふいでのたまがはきしねのかはづいまやなくらんうきよのなかにわれとひとしくものおもふ身のあらばかたらんうさつらさこひのやまぢをたどりゆくアイノテ三下リこひ／＼てこひしき人をまつちやまほのかにみえしこのまよりなもなつかしきほとゝぎすいまひところゑのをとづれにアイノテむかしの人のしのばれてそでになみだはよるのあめくさのゆふさきわけてこしすみだがはらのあれたるやどにくゐなならではとぼそをたゝく人はあらじなまつよひにまくらなげそなげそまくらにとがもなやむさし野になべてのくさはなつかしやわかむらさきのいろ／＼アイノテ本テウシありしごげんにかはせしことのむげにかはらぬこゝろぞならばしんぞうれしさなにゝかまさるものをかず／＼おもふ身をたれかあはれとおもひはやらでゆかしきみこそまつのみどりよいつもこゝろをなぞえたや千とせをもまたかけてへちとせをかけてやつさかはらぬなかとよのうさてな

(十八)かまくらはつけい

まだ夜をこめてありあけのつきもやどかるむさし野のそらもひとつにちぎりこしいもせのなかをふりすてゝかくたちいづるわかつまのこゝろのアイノテうちこそうらめしやうらみながらもたちいでゝふりあげ見ればほの／＼ときりにへだゝるあはかづさいでいるふねのかず／＼はえんぽのきはんこれならんみぎはのとりもつがひ／＼はをやすめよせあつまりてふはとたつやがんかもめへいさのらくがんおもしろやあれにみえしはありがたやいくちよぢよのかみかぐらすゞのもりアイノテあらしこがらしさつとふけアイノテかさにやかさにこのはがはら／＼とはりいよ／＼はら／＼とこうてんのぼせつまのあたりはるかにたかきおんやまはいつもかのこのふじのやまどれ／＼それみて／＼から／＼見てからこひがましまずかず／＼のおことばにはつとだまされたそれでねもせでまよひゆくおもふねがひはかながはのおきにた

だよふあゐをぶねとまもるしづくもろともになみだにあかすふねのうちこれやまことにせうしやうのよるのあめともいひつべしあめもはるればあみをひくひくになびかぬアイノテつれなさよ　三下りきみをおもへはアイノテかくしのべともかひぞなきつれなきまつにふるしぐれなさけにへだてはなきものをわすれまじつきせまじおもひはつん〱つりのいとアイノテひいてしやくるところわ本テッシつつたところはおもしろやぎよそんのせきせうはうつすらんげにものどけきうみのおも一しゆはかうぞゐいじけるあづまぢやアイノテのじまがいそのはまかせにわがひもゆひしいもがかほのみとゐいじすてゝぞゆくほどにさんしのせいらんおもしろやアイノテせんりやうとるともまだ〱むまかたいやよ〱こしにやまびしやくアイノテ手にやまたきせるつきのみやこをふらねばないよさどうしたしんていしほがないアイノテ日もはやにしにいりあひのごくらくじのばんしやうときゝしにまさる八けいやゆゐがみきはによするなみみねのアイノテ　あらしにもみぢあはせよする　おなみがどう〱とどうとうつてはさつとひきにつほんぶさうのなどころやこれぞわらはがすみかとてゆきの下にぞつき給ふ

（十九）わかくさ

よのなかの人のこゝろはいろ〱にうつろふものははなのいろむめがかをとむうぐひすのたによりいでゝまたさとなれぬ野べのわかくさねよげに見ゆるおもかけの人めつゝめばいろにはださぬそでにはもれてむつまじくおもひそめたよわかむらさきのふでにまかせてかきつばたアイノテなつはすゞしきいけみづにすむかはたけのすてをふねこがれ〱てむかしをしのぶくさのまがきになみだをそえてなくやさつきのアイノテたそかれどきにたれをまつちの〱やよややまほとゝきすアイノテきみはさみだれおもはせぶりよわれはほたるびおもひにもゆるこのゆふぐれのものあはれさになくねさびしきむしのねアイノテあきはきにけりわれとふものはをぎがうはばにみだれ〱てかぜそよぐよそにもをくやそでのつゆ月のうつろふかげ見えてのこるまつさへあらしとともに人めもくさもかれ〱にいつもながらのふゆはうやをちばもしもにうづもれてこの下つゆにぬるゝ夜はいとゞ

さびしきとこのうちまくらならではしらゆきのつもるおもひよふししづむ

(二十)はるかぜ

さいたさくらにふくはるかぜはのほんへ花のあたりをよぎてふけ〱こぼれてかゝるはなのつゆアイノテみやまかくれの身はほとゝぎすのほんへ人はしらねとなきあかす〱よい〱ぬるゝわがたもとアイノテなげくなみだはつまこふしかよ〱をぎやすゝきに〱をくつゆの〱くるればいろのそでしぼるこずゑ〱ははなかと見えて〱ゆきのあしたはのほんアイノテのんほのういよかぜいとふ〱アイノテしもよにぬるゝわかたもとはるのゆふくれにやま〱をみてあれはをりしもはるかぜにさくらのはながちりかゝるちり〱はつとはなのちりたるはそらにしられぬゆきかとみえておもしろやなつはほとゝぎすうのはなにあやめぐさ 三下リ ぼたんしやくやくあつちりなうつちりなアイノテすじりもじりてえりくりえんじよのをくやまのかげおしかのなくねむしのこゑ〱あきはなにあふつきにうつろふもみぢのいろとりやあつめてあはれさまさるアイノテふゆはしぐれにゆきかしもかときえてたまられぬ

(廿一)さごろも

ひとりおもひをまくらにかたりせめてたのみのゆめさますあさのさごろもうちさめていとゞねられぬあきの夜にさりとはつきふけていつさてこうろぎねもせでまつむしふくればすゞむしずんどふるければせきやるはういよくつはむしいとはぬこゝろにてんとゆふたかみをのぞみならねからふつつときり〱すなかぬまはござせんよすこしあはれ身アイノテ レンボ さつとつま戸のしぐれはうやのぞくのなみだはつゆのみだれがみいふにいはれぬわがおもひ

(廿二)らつひ

われはみやこのらつひらくぐわいとらやくししかもわれらはもうし子でなうかれものでござるおもふかたにはすぎしころよりわかれてひとりいとゞさびしきねざめのとこになみだなそへそほとゝぎすなみだとともにむじやうをくわんじとかくうき世はかしかましとおもひしころよりやまぢにいりてこしばしばがきひきむすび世にありがほに月をながめてふけてきぬたのをとかとわれはきけばつきぞしらするわが

なみだおもひつゞけてあしびきのをしかのなくこゑにゆめさめてわれをばたれかとひこんといとゞねられぬあさのよにアイノテものをおもひのねふりをさますそのいにしへはよねしうとあればまふつうたふつあだくらべうきよのなかをおもひいづれはこゝろもみだれ〳〵たりよさスカヽキあまりゆかしさにことのてうしをしらふればをりしもまつかせがあなたのみねのかたよりもこなたのことにかよひきてひき手あはせたはなによりもつておもしろいあふぎくも井にすまにきりつぼうすころもにくものうへしきのみだれかあつちりなすぢりもぢりてえれくりだしたるりんせつすがゞきおもしろやはなたちばなのそでのかになくはなにとりほとゝぎすにうぐゐひすくゐなのとりのたゝきおとしをとづるゝしばのとほそのけしきをひきてきみたちにやつこのみせてきかせたやよい〳〵ずんとぬれませうに

(廿三)こひづくし

おもひねのこゝろからなるゆめぞろかまたはうつゝかうつゝなやちらとばかりのおもかげをみすのをひかせさら〳〵にわすれもやらぬ身ぞつらきアイノテこひはさま〴〵おほけれどあふこひまつ戀しのぶこひうらみのこひにわかれの戀こそものうけれわれはほんごくくさふかきあづまあたりのものなるがこんどはじめてみやこへのぼりゆきのふりそでちらとまた見そめしづこゝろなくこひにしてふみたまづさをかきくどきやればおなさけのかえしにかならずこよひあふせとありしをいとうれしくてやへむぐらしげれるのきにやどりきなれんりのちぎりあさからずふかくかたれとかねてわかれのおもはれてさりとてはなれぬむかしがましゞやものアイノテかはすまくらはかずかずなれどわれもわすれじきみもまたおもひいはせよこよひのちぎりはなれ〳〵のむらくもみればあすのわかれもあのごとくあたゞしんきやもんきやさりとてはこひにははてなやいかゞせん

(廿四)かさてら

いかにせんとすればうらみかくすれどありがひしらぬ世のなかに江戸をばいとひいづれどもこれぞまことにおほいそやたびでうゐものはいりあひのかねよさやまぢをゆけばしかのこゑふじのおやまをうしろにおきつまへにはきうかいまん〳〵とはてもなくあ

らしにつるゝゆふなみのうちのけよせつたつなみにすゑをいづくとをたふみはまなのはしをうちわたりゆんでやめてのながめしてなゝせややせややそせがはふかきおもひはみのをはりきてこそ見たれかさでらやげにいにしへもわがごときものうきたびのくちずさみ一しゆはかうぞゑいじけるげにけふばかりくもれあふみのかゞみやまたびのやつれのかほのみゆるになみだのあめのもりやまつゆにしつほり〳〵ぬれてこそゆけくさつのしゆくよつれもなぎさのすてをぶねしんまかげよりろのをとがからりころりしがのかんからさきのまつづるきづるからころりとこぎだしてつりするよしのやつさつつたところがおもしろやなにが〳〵へそなたはせたのながはしまゆみつきゆみ日をかさねやばせのうらにぞつき給ふ

(廿五)やまつくし

こひのやまぢにいりそめしより人めしのぶのやまとはつらやまれにあふよはくだかけさへもときしらぬやま〳〵はなのみしてあくるわびしきかづらきやまよよるの御げんにことばのこりてわかれさらば〳〵にのうかへるやまきみがこころのしられはせねどみだれてけさはくろかみやまにつたふなみだのそでふれやまよそでをふる〳〵ふりやるはよいがわけのある身のそでにふるなふるつまいとし

(廿六)ゆふされ

うれしたま〳〵たもとにかゝるさゝはこふちのはなのつゆつゆにこゝろのいつしかみだれあきにはあらぬはるながらいとゞおもひはいやまさりみだるゝものはあをやぎのいとはものかはなか〳〵にはなにおきふししほるゝ此身このゆふされのひとさかりをらばいまをれちらぬまに

(廿七)かはたけ

そさまゆへにぞみだれがみときししたひもかずかさなりてむりにじつからいとしゆてならぬへやゝともすればねやのうちより手をたゝいてはみづくれよ夜はなんどきぞかへらにやならぬせかせことばのむいきのときは神ゞぞつらいはつとめのこのみこゝろをくばりてきをとりてかぎりもあらぬたまづさをよあけぬうちにしたゝめてこゝやかしことやりくるつらさうらみられてはうらみもしたりあらおそろしのちかひのことばこのゆくすゑをなにとせんかはゆが

らんせなかれの身

（廿八）はなのえん

よしやよし野のはなよりわれはそのゆふぐれのをりからにかいまみえにしおもかげをわすれもやらでうか〱とうつるこゝろやむらさきのいろにいでたよはづかしながらはなによそへてやるふみを見よかし〱ちらぬまにアイノテいとゞこゝろのいよつくしぶねやるかたわかぬものおもひふみのかへしもいつとなくまちしかひあるけふの日もはやいりあひのはなのえんあふてぞこよひにゐまくらこゝろとけたよはやいつのまに一よばかりかきりがやつ八へもせんよも神〻ぞかはるなかはらじわれもはなにはあらしよしやふくとも〱ちぎりたえすな

（廿九）いくはる

いくはるのながめはいつしかはらねどわきてのどかにてる日かげちぎりはたけのよゝこめてきみとふたばのまつもろともにえだもさかゆるわかみどりあふぐにあかぬときをえてアイノテされはあやしのしづのおめさま〲のつくりばないろをつくしてさゝげけりまづさきそむるむめのはないとよはくにほひもふかきはなごろもやへひとへさきみたれげにこゝのへにたぐひなきいろもことなるさくらばなよそほひゆゆしく見えにけりさてそのつぎのしまだいにまつとたけとをうえませてちよをさへづるひなづるがみぎはのかたにすをくひてたにのながれにかめあそぶなアイノテしづのをだまきくりかへしよるこひ〱よるこひさまよこひさまよ人のなさけはよるにこそあれ

（三十）なみまくら

さつきまつはなたちばなのかほよはな見るにこゝろのふかみくさふかきおもひのうさつらさいろにださしとしのぶくさしのぶかひなきいよみちおくのつぼのいしふみかくぞともいはねのやまのいはつゝじいはねど人のこひしきものと二上り怨みながらもつき日をおくるさてもこのみはあるものかアイノテ神〻ぞつれなき〲いのちかなさあ〱なにかへとはおもへどもなさけにへだつるそであらばしづがふせやにつきはやどらじとゆふべにそよとまがきのつゆふくかせのをとづれにアイノテつたへしかひやありそうみちん〱ちり〱いそうつなみにとてもぬりよならもろともとふかきあふせのなみまくらかはすばかり

のをぎのうはかせはぎのしたつゆ

（卅一）たなはた

なつはつるあふぎとあきのしらつゆはいづれかさきにをきぬらんアイノテとしごとにあふよまちえしたなばたのあはでぬるよはそでのみぬれてふるはなみだか身をしるあめかかけしなさけはかさゝぎのわたせるはしにをくしものげにおもしろやこよひしも月はさへゆくあきの夜の 二上り 千世を一夜になせりともなごりはつきじいまさらにことばのこりてかねがなるとりもなき候あたゞしんきやきのどくやとかくうき世はまゝならぬ

（卅二）ひきくるま

さらばひかんとゆふつゆのぬれたとりなりさらりとやりてひかばおなびきやれえいさらにさよいよえひはなとならばちりかゝれおん身はもみぢのいろよのう日かげにそひていろまさるえいとなアイノテさてよのなかはなよのなかはさだめなき身のうきくさのひかばなびきやれちらぬまにやんれひく〳〵ひくはたゞはまであみひくやまでひくはたいせきこきうさみせんなるこのなはもひくとのさまがきわずみやれそでをひくみやこのうしはくるまをひきやる〳〵はよいがおもふたふりしてそでひくなかたりつゞけてゆくほどによその見るめもはづかしや

（卅三）ひがしやまはつけい

見わたせばひがしやまのはるのけしきやぎをんはやしにふくあらしはさんしのせいらんとうたがはれかはらおもてのまさごのいろはこうてんのぼせつもかくやらんおもしろのはなのみやこやぢしやのさくらにしくはなしかもがはのながれのすゑにゆくふねはえんほのきはんかさへわたるせいすいじのかねのこゑアイノテえんじのばんしやうのひゞきそれしらかはのすさきにつばさのさんらんすはへいさのらくがんともいひつべしさてれうぜんの月かげはとうていのあきのゝこれにはよもまさらじさてまたぎよそんのせきせうはつりたれてあげまきにあそぶものを

（卅四）なつくさ

なつはゆふべの身のおもひなるいろにこゝろわふかみぐさつゆはたもとのいとまもなしにうらやましくもうきこひのよはしられつしらぬかほよばなアイノテたちもはなれぬきみがおもかげあふさきるさのなみ

だのかはにあやめもわかでなきしづむそこのたまものいはでしげるもよそめ〳〵しのぶのをぐるまにかよひかよはゞせきもりも一夜はゆるせたまくらのちりをはらはぬとこなつのからくれなゐのそでのかもはなたちばなにとがはあふせのとかく人こそつらけれとうらみのくずのたまのをのたえなばたえよ アイノテ さてもいのちはあるものかアイノテたそかれときののきのつまにあまりてかゝるゆふかほはなをしるべにたづねんとものいひよれば手になれぬはすのうきばよなさけにそまぬつゆのなさけに

(卅五)うきね

うきねのとこにこととふはまくらにかゝるなみだなりせめてはゆめになりともまどろめばみじか夜にやまほとゝぎすをとづれてはや夜があけた神そつらいよのこがるゝうき身のきえもせでアイノテさてもいのちわながらえてひるはひめもすなきくらしよるはアイノテよどこにふししづむまきのとぼそをうつむらさめやこずゑにそよぐまつかせかちぎりおかねどはかなやなきみがとふかとおどろかされていとゞなみだにめがくれてかべにそふけるとほしびのかげかすかなるあかつきのかねのこゑアイノテつく〴〵とききくときはとかくかなはぬ世のなかにふつつとおもふまいとはおもへ〳〵どもまたすてがたきすぎしわかれはあふせといひしことのはをわすれまいこの世はさてのちの世ものうさてなあひみてののちのこゝろにくらぶればかほどものをばおもはじものをむかしこひしやないまの身や

(卅六)こむらさき

きみこすばねやへもいらじ小むらさきわがもとゆひにしもおくとまたのたのみをゆふぎりやいなばのやまのみねよりもうつしやうえしからさきのまつのみどりもこながとやアイノテ身はうきふねのなみのもんともゑのきみやこがるらんにしをはるかにながむれば日かげかたふくもりみえてきんりうざんとはあれとかやほまれなたかきゐこくまでやうきひぐしきみのなみまくらきみにあふせのなみまくらかたしくそりふじんもこれにはいかでまさらんとおもひよるべでのかはくまもなきおきのいし二上りなにはいりえの身はすてをぶねしづむおもひはわれひとりそれはへあかぬわかれはそでひきとめよよいのなさけにゑ

ひうかれかはちかよひにいこまやまそのなたかをの
のうわかかいで見んとばかりにちぎりつゝたきのこ
したるうすくもや きやらのけふりのかほるは神〻
ぞおもはくかほるは神〻 そおもはくアイノテすがたを
みればきよはらやふかやぼなりしおてきたちうきよ
をしのぶゐせきがさあめはふらひでこひがふるこひ
かふる身はやつはしのさはやかに 三下リ きなすもす
そをかいとりてわれふるつまはいよなをいとしやれ
なをいとしアイノテ本テツシこがれこがるゝ身はつしまぶゑこ
ひのねとりのおのづからきみとわれとのなかとをし
とかく人めのしげゝれゝばまがきながらの御げんと
いへどとがめられてはなりませぬういこと〳〵そり
やさうさ江戸やつさういてきた

（卅七）香　盡

六十一種の名香は法隆寺東大寺逍遙三吉野紅塵枯木
中川法華經花橘八橋園城寺似たり不二の煙は菖蒲槃
若鵜鴇班青梅揚貴妃飛梅アイノテ種ケ島漂澪月龍田紅
葉の賀斜月白梅千鳥や法華老梅八重垣花の宴花の雪
名月賀蘭子卓橘花散里丹霞花筐上は薫り須磨明石十
五夜隣家夕時雨手まくら有明雲井くれな井初瀨寒梅
二葉早梅霜夜七夕寢覺篠目薄紅薄雲上り馬とかく伽
羅の烟と命のきみはとめてもいくよいくよとめても
とめあかぬ

（卅八）しぐれ

ならまつのはのをちそめてゆふかげしろきまつちや
ましぐれ〳〵になくかものこゑもこほるやひかたみ
ちアイノテえもんざかこえてかねのこゑいでそのころ
はかみなつきくるは〳〵すまゐはなみだてくらすの
わきつれなやふきやちらしたるあつたらこはぎをず
ゝきはなにゑひまたもみぢにはさめてたとりしどて
おろしはるにかはりてそでさむやてうちんくらくゆ
きかよひみしりごしなるかすりうたしよ人のなづむ
はいろ千とせやまくもはうす〳〵にしをのそらにい
り日なをてるにじのきよはしういぢよろうしもゝあ
られもひつちこないてあらしにつよきかしはざきか
ほるくらべんあづまと京といづくはあれどみちをく
のちかのせんせいそれにはかはりこにしやまとがも
しほたれをりたつ田ごのうらめしやけかようおじ
やろぞアイノテおしをとあらくこゑうはがれおをもん
いまださゝずしてちや屋のはしとみたれのかうし

アイノテたれかはをりかついてよねくどくぢよろうくどくうけぎりどうぎりひとつがいせうしなるかならぬかこひの中の町

(卅九)月 見

あるひはしらゝふきあげわかのうらすみよしなにはたかさごのをのへの月のあけぼのをながめてかへる人もありわれはそれにはひきかへてむかしがたりとなにたちしいろのむらたのちうじやうのかちでやれしりよはせをりかよひしみちのべざりとるいけのみづかゞみかたえかれたるさいかちもやれ〳〵こひにやせたかそちやゐなすがたいなりのをかにむまはあれどもきみをおもへはのう手あみがさどてのまつばらたれゆへのほんほかよふひんこひころびびつこひき〳〵ゆくほどにこのもかのものなかのてうあふせ〳〵にかはらじなしるもしらぬもあきのよの月まつほどのこよひしもかゝすいしやうしておばしまのよるべ〳〵のちぎりかなあげやのとぼしかずてりてもやにかさねしをりひげこすゝきにいだすぎんげつもものずきふりてまたおかしひるのおましにいぎたなくゐいふすおとこ月しらずぎやうずいがへりまちうけてしらなみおとこたつたやましのぶこゝろのあやにくやくもれと月をかこつらんのとやにはこぶものしげくまどをにあめるてうちんもこよひはなくてすぎよかしくつはのくれのまりすぎてやりてのやどのねぶつこう二丁目あたりにすがゞきたへてアイノテはつねみゐでらうたふらんアイノテ月はてるやらくもるやら身あがりくらき女郎のあだめにかゝるよばひぼしやくそくなしのうかれ人とものうかれにうかれきてどれでも〳〵ふりによばれししんざうのかみそこ〳〵にゆひなしてやこゐにちかきあげやいりまくらとるまにあけぬべしあくびがちなるねやもありアイノテとなりざしきのふと〳〵きちざにものもうがござるどれからござつたいのさんちやまちからまいりたがおうけきりをとりましよそれはいつのことかといのしはすの事じやいのつがもないことゆつてくるゝなかきたてゝきたれどせんぎばかりでのほゝん〳〵のんほのういよ〳〵らちがない夜があけたぶしゆびじまひのかへるさつらやたいこがとんであとさへうたのねをうちだいてまたまいろ

(四十)あだまくら

あやにくのやもめがらすにあさゞめてたれをまつちのやよやふもとがはみづろふたつろふなもよひなみはしたなくすぎがてにまたむつごとのうすなまりまくらのとこのねざめうたみゝにとゞまりものがなしあだにはせまじうつりがのあゝかたみなるあだなれごろもたびごろもひかずかさねてするがなるしづのはたやまのおりにふれついでおかしきあべかはやこぬよちぎらんみろくまちまたかみかぜやかみかぜのいせのふるいちやそせがはアイノテこゝもこひぐさしばやまちとまるやもずのしもくまちかねをたゝいてほとけにならばなじよ〳〵きつぢなるかはしらずとなるとあわざしんまちゑちごまち一よふたよのさかいのつもりあくるわびしきふくろまちおつとさしこめおふねひやうごのふろめたちわかれむろのとまりにうき身をよせてとものうらよねそこ〳〵にわれからぬらすそでのうみあきのみやじまみやびしてなにはくづしのみつのいとしんき〳〵しのだけなかけておもひをさしよよりもだいりをじまのさゞれうをうきをまじりのさくらうをさごしいとよりこち〳〵とよべばしほのめをなぞうるアイノテなみのまくらやしものせきなをゆくさきはしらぬひのこゝろづくしにこひわたるもろこしぶねのよるとなくひるともわかぬたはれめのアイノテたまのたすきの花をどりやなぎのまゆのまんまるごされまんまるござれ十五夜の月のわのごとくアイノテあゝうつゝなやあだまくらとをくもきぬるものかなとすぎこしかたをみやこにはつかさくらいもそれ〳〵にみせばおをそでゆきみじかひつこきがみやふたつをりまたふたつぐししどもなくゆきのすあしのはなふんでおなじくをしむきぬ〴〵や　三下り　またあさごみといりみだれアイノテだつちのきやくしゆとこつちのきやくしゆがくるとやしち一丁の二丁の三丁のはやかごあふむとりもちやんれさいづれあふむうさつらさせいしせいもんじつをみしよにしつとん〳〵しつとん〳〵とん〳〵〳〵〳〵とうからないしやうふきこんだ本テッシこひのあらしにばつとふきあげ大じんじやさつてはそれからそれしだいうかりひよんなるねざめかな

(四十一)はな見

はなのかにころもはふかくなりにけりこのしたかげ

のかぜのまに／＼やへのかすみにいやたかきめぐみになにかうへのやまはなとこひとにくまれてほんに／＼ほに／＼なにあふよすがかねつきぼんさまみよやぢよくせのやぼすらにしめさんためにみほとけのぬれありがたき御ッすがたなかばははなにかくれます風にたゞよふまくのうちてりこそてりぬかてりましこなくねかはゆきやまがらのをのがひきよくのはもかろくよい／＼／＼／＼やさひよくりひよおやぢがこしにひやうたんひつつけてひよ／＼ひよつとうかれたはなゆへにひよくりひよアイノテみねのあらしとなつれだちかよふひこそ女ばうはだてこき／＼でこつまかいどりしやら／＼行てこれこちの人おう見ゆるかのようぬけまうすをざゝしのはらねざゝやかくい松のとぐいでなあしつきたてゝ卯月づき／＼うづきにうづき卯月八日のはなよりだおなをばえ申まいよのしやん／＼／＼とさいたるながたなはなかてうかとうちむれてさくらちりつむすげがさやさしほんにゆかしおそばに引そふとぎびくにこんにうこんにあさぎにかのこちべにや地むらさきけんたいぐんないとびはち丈アイノテこれのこよねにとんとつとんとほだされたやすい事そちておうちやれちよん／＼おけさおきのとなかにとんとゝんとどつこいいよすて／＼をふねのすて／＼られてはたち申さぬアイノテさてそれ／＼のまくのうちちやのゆまつ風そめもよふなにはにかるやよしあしのとさをかたらぬまくもなしみやこのつての一ふしはやなぎさくらをこきまぜてあさぎかたびらくろこそでおなしをかべのまつにはあらでそのさと人のふうぞくもなはなつかしきやりしゆやりむめすがたかたちはよこぶとりみどりたよりがかみゆひかへてやぼに身をなすかゝえおびかぶろそれ／＼かもじかをちた／＼をとすもうきなのあられねざゝねびきのすゑたのむういこの／＼身の行衛江戸やつさ 三下り みつけはこざきそつちのきやしくゆとこつちのきやくしゆがくるとやしゝろかいをはやめて一丁の二丁の三丁のはやきおふねいろのみなとへやんれをせやれとゑもん江戸やつさあらしまつまのはなよりもしつとん／＼しつとん／＼しとんしとゝんしとゝんとん／＼／＼／＼時めくさとのいゑざくら本テウシアイノテけふもくれぬとつげわたる／＼うらみかさなるあどふのかね人はちりゆく

むらがらすわれはぬるともいよはなのあめそのこざくらのもちづきのいづそきえたやはなのした露

(四十二)たまくしけ

玉くしげふたつのいろのまことうそわけうるさとのよすがとてあだしことばのもしほ草けふりかすかにとびみだるほたるのみやにあくがれしそのたまかづらかりにいまいかなるすぢのいとによるものならなくにわかれあふれんぼのしらべほのかにもアイノテ三下リつくりこゑしてよぶこどりおぼつかなしやかくしぎみそのかずなりしもろ人もなのみのこりて今はまたむかしをしのぶ夕まぐれかほにあふきのいやらしくめにいるいろのふうぞくとときのなかだちさそひくるながれのまことくみてしる茶やのしなづまじつともしらではなのひかりもいさぎよくみるめにぬれししほころもあまのしはざもないものかなんぞのやうにさりとてはアイノテ本テウシやどもさだめすはしたなくよひのむつごとよそになりきはみじかしのながまくらしかけことばのくせつどもよそにしたひもとけぬ心のあれかしこの身をすてゝあはふにたいこぶしゆびのかりねしてつきをこしてもにくからぬとがをばさけにあふせのすゑそらおぼれせしきぬ〴〵に八こゑのかねとりさはぐ五てうのてんのあかつきにかへるさしげきたはれおの二上りをのがさへづりさま〴〵に小うたじやうるりだてらしくげにかず〴〵のたはふれもこゑちり〴〵にわかれゆくわれかよひきてふくあらしよそにはつけそあさがらす

(四十三)いろ香

さだめなきいろかにうかれくにあまたかたひまくらもあかづくきぬもなりやつれたる身のゆく衛さんげにかたり申さんそも〴〵えぐちかんざきは名のみのこりてふうぞくなしのがみのさとはくさまくらあさづまふねはかぢまくらたれこがれけんあとしらずアイノテつかひあげたるしまばらをみやこのにしに入日かげうつるこゝろにたきつけのしばやまちには火もたてずけはいかはりしづしぎみをはる〴〵こゝにみこじぢやしほつかいづにどれ〴〵それあれ〴〵はりがうらつりするあまのうけなれやこゝろひとつをさだめかねつるがこまんのすいつけたばこきつゝなづめば日もあはぬ〴〵目がまはる女郎とちぎらぬた

ひ人にはよぎもかさいでてらどまりおくたびれならねまるべいとてゆさしのさけをしゐざかい四の五のつじをいづもざきおなじながれのさかたのひしやくアイノテそこしんじつから　三下りとけてちん／＼ちぎりのいくよもむすはんひたちおびかけまくもへみとのふじからゑた川つゝじあすのわかれにやちり／＼におさらばへこれちかのうち本テウシいとしけりやこそしとゝうてにくかうたりよかなんでもこれはあいた／＼いたこてじまのこんこでまねきまねくたもとにふみやたまづさアイノテげにふうきやうのよるのいちとまり／＼しゆく／＼のまどにうたふくん女はかくをとゞめておつととすわかれあればまづくれありしなこそかはれたはれめのそでふきかへすあすかかぜきのふとすぎてけふとくれむさしのくになるしんよしはらがとまりじや

（四十四）梅づくし

きみならでたれにかみせん此はなのいろはさま／＼さくらむめやしほこうばひあさきむめぢはうすいろにかのこむめきなすすがたはまだいはけなきこむめふりよきしなのむめしなとひやうしをとり／＼にかぞへかぞふる手まりむめをちてこほれてはら／＼とそらにしられぬあられむめふりさけみればをちこちの野むめやまむめさきそめしよりはつねゆかしきうぐひすのはかぜになびくしだれむめゆきかあらぬかしらむめのはつはなごろもやへむめやたが袖ふれしにほひむめはるやむかしのおもはくふかきたにがは梅よさりとては心づくしのぶんごむめアイノテ三下り　こがれ／＼てゆく舟のとまりさだめぬしまむめやあまのかるもにすむむしのわれからむめのいろなつかしくおもひつゝけてかくたまづさのたよりもとめてやりむめやあいをへたつるかきほむめアイノテ本テウシながめえならぬ庭むめのはなのおもかげかすみのまよりほのかにみゆるあさ日むめいろをもかほもしる人はならばよしやとがめんえだはをるとも

（四十五）小　笹

しなへやしなへをざゝもかせにそなたしのべは人がしるあゝよそにはとがもないものを見しよりもあこがるゝをよばぬこひにいとゞおもひはいやましてアイノテこぼるゝなみだのあけくれはかはくまもなき／＼わがたもとアイノテふみたまづさのかずをつく

せとつれなききみにみせたきものはかせになびける
しほやのけふりをぎはぎすゝきまだもごさるよえい
をみなへしひくになびかぬくさきもないにみせたや
にはのやなぎのいとのやなぎのいとのえい風になび
くをのかなはぬうき世くもにかけはしをよばぬこひ
におもひみだれてえいなにしよぞのとかくうき世は
きまゝがよいぞいのもちろんさうなそりやさうさ

（四十六）さらし

まきのしまにはさらすあさぬのしづがしはざはうち
川のなみかゆきかとしろたへにいざたちいでゝぬの
さらそアイノテかさゝぎのわたせるはしのしもよりも
さらせる布にしろみありそろアイノテなう〳〵やまか
見え候あさ日やまにかすみたなひくけしきはたとへ
するがのふじはものかはふじはものかはアイノテこじ
まがさきによるなみに〳〵月のひかりをうつさばや
〳〵アイノテ見えわたる〳〵ふしみたけだにによどとば
もいづれおとらぬめい所かな〳〵アイノテたつなみが
〳〵せゞのあじろぎさへられてながるゝ水をせきと
むる〳〵アイノテところからとて〳〵ぬのを手ごとに
まきの里人うちつれてもどらうやれしづがやれ

（四十七）かぞへ歌

ひとつ人のまよふこひといふ字はむくつけだにも大
くや人はいとまなきこひぢさくらかざしてこの下か
けのつゆにぬれにぞぬれしわがさよころもふたつふ
たばのまつちやままつのあらしにそのよのゆめをさ
まさせわかれぢのうきやつらさを三つみよしのへご
ざれいつもながらのやまざくらのんやほアイノテ四つ
世の中の人のこゝろはしな〴〵にわかてど五つ〳〵
はいろといふじにひかれてはきゆる命はもちろんさ
六つむかしのそでかほるはなたちばなのゆふぐれに
やまほとゝぎすなきつれふるはなふるはすぎにしさ
いこのは人なつかしやゆかしやアイノテ七つなまなか
なれてくやしやなれまいものをあへばわかれのとり
がなく夜はしのゝめか八つやまぶしすがたにさまを
かへときんすゞかけしやくぢやうをこしにさいてき
やうらくちうのはなざかりアイノテひとへふたへや三
へ八へ九つこひにきましよかをばらしづはらやせの
さとしばめさぬかつゆふみわけてとをでとうからち
らめくほしのかず〳〵あかつきのめうじやうがにし
へちろりひがしへちろり〳〵〳〵とするときはあふ

ぎおつとりかたなさいてたちのつかにてをうちかけていのよなぜもどろりよといふてはたもとにとりついたいとしけりやこそしと丶うてにくかうたりよか手がそれて

（四十八）あきくさ

あきはつねさへものさびしきにおもひにつれてみだる丶心つゆもなみだもあらそひかねてこひのみちのべふみわけがたきくさのいろにもそむ身はつらさァイノテ　ちらとみそめしゐいさん〳〵をみな丶しゆへつたなきこ丶ろかのんさてまことにはやおもひぐさ身はあさがほのあさまじながらせめてなびかんこともやありともみぢかさねのそのうすやうにかいてやをくらん文見草人めしのぶのわがなみだにはかはくまもなきをばなかそでもひかばなびきやれさりとてはくずのうらみのかずつもりきてはいつかはきみをまたみやぎ野のはぎのしたばのつゆにしつほとぬれてなにともなうをぎのふくかぜのたよりをもきくやとまちしこひ心みだれみだる丶なにはのあしのちぎりはつらいなみのよる〳〵さんさ身をづくしおもふわくださうな

（四十九）こひぐさ

おもひそめたよこきむらさきのいろにいでじとつ丶むにあまるそでになみだはのんさてまことにこぼれぞか丶るれんぼれんれつれアイノテしらぬむかしはよそなるものをいまはみにしるあひべつりくのうさをおもへばのんさてまことになさけもつらやれんぼれんれつれアイノテめせ〳〵くさばなに〳〵ぞつままつ夕がほしらきくのはなさきそめてびしん草にこひぐさずんどあきかぜのた丶ぬまになびかさんせをみなへしおさしあひわごさんせぬかいのちよつとかるかや

（五十）しの丶め

しの丶め〳〵いつよがあけたあさゐひさしきあだまくらをゐしこめたるひと見どのなかのおましにはしゐして文のこしばりかげくらくそともにしげきいち人ともにうりくるけしのはな江戸てうはやき身ごしらゐ地しろにあみのつれもよふめにか丶れとのふうぞくやふてうことばのあげや入ふぢ屋三うらのふたむれにのりものしのぶうちゆかしとへどこたへぬくちなしのこはたれやらんはなごろもしんてうをそ

きそのなかにこまもすさめずかる人もたへてとしふるゆかまさへをひさきゆかしにゐ太夫そのほかみやびよしある女郎のしぐれあだしのなよせぐさ人のむすびしすてことばかきもらさなんもしほぐさいつの比よりみぎてはうすくひだつがちなるいろ人のたのしみきはめあづまやにひやうごつのくにはなまつやゆふべとゞろくまへわたりきをとりのぼす（アイノテ二上リ）すがかきやすみなすとこのひとかまへしかのなげ入ちがひだなしぢのすゞり玉くしげふたりねよとのやよや文まくらみなくれなゐのみつぶとんくもをたゝんでうづたかくいちろにたぎるまつの風（アイノテ本テウシ）ことにいろある三味せんや人たちかへるとこのうちをりしくござのかた〳〵にかたりのこせしみじか夜のとてもねられぬうきまくらかやのひとへのうす月もるゝ〳〵もれてさびしやよすからにともにながるゝほとゝきす

松の葉第二巻終

松の葉第三巻

端歌目錄

二あかり

三さがり

さはぎ

十一　つしま丶つり
十二　せうし
十三　唐人歌
十四　永代はし
十五　やりをどり
十六　馬かた
十七　ころく
十八　高　尾

（一）飛鳥川

戀といふじはむくつけだにもあふみや人はいとまなきこひぢさくらかざして此したかげのつゆにぬれにぞぬれしわがさよごろも夕べ〳〵はあすか川のふちせそこはあさいぞこひむらさきよしやこがる丶さはべのはなにけふりくらべんこよい〳〵ほたるかほりをしたふしらんのもとにきつにはめなでそのくだかげのみだる丶こころははやきぬ〴〵のわかれになればはなもゆきももみぢのあはれふゆ野のちぎりまでかはらぬいろをへ

おなしく

かぜもなつかし夕べのそらに袖のかほりもまださめやらぬふかきえにしのかた樣なれどあだし此身もままにはならぬ月日ほどへてむかしのわけをとふはうれしやさりとは命いつそ露ともきへなばきえよこ丶ろまでくるなみだの川にながれはかなきうきよのつとめそむもそまぬもまくらのゆめよさめてあしたのつらさをしらばたとひたんばのしないたおにもさふしたことのよるせはなくとせめてたよりをまつのはのかはらぬいろをへ

（二）たかせふね

ゆかりもとめてわかむらさきのくさのまがきをいまきてみればはなかもみぢかそのおもかげの見へつかくれつこのまの月のうはきならねど身はたかせぶねこがれ〳〵てやく〳〵やもしほの夕けぶり此身をこがすへ

おなしく

きみが心をひかるゝほどはひき見んとはおもへどもさだめなの世やあすか川のふちせふかきおもひをいろの一はにのせてうきぬしづみぬおもはくむまはあれどもきみをおもへばかち地さはいひながらこよひおもにをなにゝのせてやろうぞこゝをこはたのさとになしてほしやのこゝろ身にもあまつた

（三）有あけ

世の中〳〵のうれしきうちにまさりてつらきあふよのとこよわれもいもせはありあけつぐるとりのなくねにきぬ〴〵の袖のしらたまなにそとはばつゆとこたへてきえぬいのちをさおもひにしづむ

（四）蘆わけ舟

なにはのうらによしやおもはじあしわけぶねのこがれ〳〵てあふ夜もつらやせめてわかれのかねばかりかやいまだなごりもつきせぬよはにとりもつらいはつげわたるういこの〳〵うきわかれのちのあしたのふみまくらしばしなつたへんをぎのはのそよとばかりのたよりもなひかうらみなげゝどつれなやよそにうつるいろかとみぢんもしらでたゞかはらじといのるこゝろはいつまでぐさのいつもくるしき身をうきとこに夜日とねもせでまよふたへ

（五）みやまぢ

なるゝみやまぢなもよし野川ふかくたえせぬおもひのうさをいはでかさぬるやへやまぶきのなつは卯のはなさきそめしよりのきのたちばなかほるもゆかしはつねたかまのやまほとゝぎすうきなたかはしこひわたる身はそのあづまぢのひたちおびむすぶちぎりのえにしはながとあきはきてしもみやぎ野のかせをつるにもろきはなぎりのこひのみちしばなをわけがたきつゆの夕ぎりたちまよひつゝふゆ野につよきかしは木もひとりこがるゝ色をへ

（六）たまの緒

なんぼおしやつてもあはぬつらさを見てたもれほん

にそふ身ならばかうしたつとめはせまひにもはやたまの緒たゆるばかりのうきまくらいやまちひさし一夜さへよそにいられぬわがおもひ

おなしく

なんぼおしやつてもわけのわるひがきのどくほんにそふ身ならばかうしたことをしてくれそもはやつとめもまゝなうへからおなしだひいやまてしばしわがこゝろおもひまち〳〵まちあかす

（七）かゞふし

つとめものうきひとすぢならばとくもきえなん露の身のひかげしのぶのよる〳〵人にあふをつとめのいのちかな

おなしく

いつしいづれの日にたちそめていなさほそえの身をづくしくちもはてなばうきなもともにおなじはまなのはしばしら

おなしく

よしやわざくれ身はあさがほのひかげまつまのはなのいろうらみられしもうらみし人もともにきえゆく野べのつゆ

おなしく

あだしこの身をけふりとなさばとてもあさぢのさとちかくさよのころもにかはとゞまりてせめて見ぬよのかたみとも

おなしく

わきてつれなき人ゆへわれはくらすひかげのあさがほかつゆはたもとにをきあまれどもかいもなみだの身ぞつらき

おなしく

ひとりとゞめてうらみしかひももとの水なきすみだ川さてもながれに身はくれ〳〵ていまははもくずのすてをぶね

（八）わきてふし

はなとゆきとはどれがよしのゝながめやらとふやらこふやらわきていろわかちなくとれがよし野のながめやらはなやらゆきやらわきて

おなしく

をぎとはぎとはとれが露やらあらしやらどふやらこふやらわきてまつ夜のそではどれがつゆやらなみだやらどふやらかふやらわきて

おなしく
すまとあかしはどれが月やらめいしよやらどふやらかふやらわきていろわかちなくどれが月やらめいしよやらどふやらかふやらわきて

おなしく
あだしなさけはいづれはかなきおもひ川どふやらかふやらわきてあふせもあしでいづれはかなきおもひ川どふやらかふやらわきて

おなしく
うらみぬる夜はゆめもつきなくまたうらみどふやらかふやらあけて見しおもかげのいづれゆめやらうつつやらどふやらかふやらあけて

(九)いかほふし
はなになりたやほんほとんどどつこいしよよし〳〵〳〵〳〵よしの〻はなにいよしもほとんどへさいてみだれてほんほとんどどつこいしよつゆ〳〵さくらの下つゆおちていよしもほとんどへ

おなしく
なつはかきねのほんほの〳〵あやなしや卯のはなしら〳〵あけてもいかにとひこぬほと〻ぎすかたひゆふだつあとすゞしきこむらさめこずゑにひくらしせみのねいづれ夕べはたゞならぬ

おなしく
しのぶなみだのもれてはあやにくやいつ〳〵〳〵〳〵いつしかうきなたつたの夕しぐれぬれてをしかのつまあはれやつまこひてよる〳〵さりとはよすからひとりいよしもなきあかす

おなしく
月になれ〳〵はかなしいくたびかたもとのつゆ〳〵かはかでものやおもふとしばしさへすまのうきねをとへこと〻へともちどりうら〳〵〳〵〳〵さだめぬなくねあれや夜もすがら

(十)ながさきふし
しんきなしめそもめんぐるまかけてめぐりあふよる〳〵はそりやあふ夜る〳〵はかけてめぐりあふよるばかりそりやあふ

おなしく
こがれ〳〵てもろこしぶねのそでにみなとのよるよるはそりやあふよる〳〵はそてにみなとのよるばかりそりやあふ

おなしく
きりのひとはのなをそれよりももろきなみだのつゆ
〱よそりやあふつゆ〱よもろきなみだのつゆば
かりそりやあふ

（十一）のんやほふし
ばんにござらばひごなたさいてござれ〱ばんにや
むめの木のえだおろそのんやほのんやほ〱ひごた
なたさいてござればんにやむめの木のゑだおろその
んやほ

おなしく
こひはうきもののんやほまつよひきぬぐ〱つらやつ
らひあふ夜ながらもわがなみだのんやほのんやほや
ほまつよいきぬぐ〱つらひ〱あふ夜ながらもわが
なみたのんやほ

おなしく
はるはござらばのんやほみ よしのよしのへ ござれ
〱いつもなからのやまさくらのんやほのんやほや
ほみよし野よし野へござれ〱いつもながらのやま
ざくらのんやほ

おなしく
おもひかけてはのんやほくも井のとりの一こゑ〱
ねやのきやらのかむつごとにのんやほのんやほのん
やほ〱くも井のとりのひとこゑねやのきやらのか
むつごとよのんやほ

おなしく
いつのありあけのんやほそでふりわかれしつらさに
〱もはやあさぢもせにすぎたのんやほのんやほや
ほ〱そでふりわかれしつらさに〱もはやあさぢ
もせにすぎたのんやほ

おなしく
こひはあやにくさつき雨ふりくるなみだ〱〱せ
めてとへかしほとゝぎすうき身をさみだれ〱ふり
くるなみだ〱せめてとへかしほとゝぎすうき身を

おなしく
夕べ〱はつねさへものわびしきにわびし〱ちゃ
のあはれはつまこふしかのねたそかれ〱ものわび
しきにわびし〱ちゃのあはれはつまこふしかのね

（十二）くゐな
くゐなのとりのよすがらたゝきあけておひてさはや
さみだれあめにいろますあやめのことはいの〱や

まほとゝぎすまたのしのゝめもないものかなんぞの
やうにまつよい〳〵

おなしく

おほろの月をたのみによもすがらながめたはやはる
かぜかほりもてくるのきばのむめはいの〳〵あだな
やたゝんかはすたまくらもないものかなんぞのやう
にうたゝね〳〵

おなしく

あまのかるもにすむむしのわれからとなげいたはや
はつしぐれおばなほにいであまりのいろわいの〳〵
ちりのこせかしつゆのなごりもないものかなんぞの
やうにあきかぜ〳〵

おなしく

ねざめならひしまきのやにとぼそをおくにさはやこ
がらしをちばふりしくかれのゝいろはいの〳〵とへ
かし人のゆきのあしたもないものかなんぞのやうに
ふゆがれ〳〵

おなしく

しのびかねたる人めのせきもりをなげいたはやうき
なみだそでやくちなんひとりねのゆめはいのまるね
いゆめわいのたえなばたえよとてもあふよいあるも
のかなんぞのやうにたまのをを〳〵

ちらし

ひとへかさねのちぎりはうすしちよもながかれいと
ざくらそりやさふさむすふえにしのいとざくらそり
やさふさ江戸やつさういてきた

(十三)はなかさ

むめのかほりのはながさうれしほんにゆかし月かげ
のこりてさりとはあけぼのとをやまけしきのゆきも
すこしはしろたへにかすみのまよりこゝはうぐひす
一こゑを

おなしく

あづまからよりはないちうれし神ぞうれしつれしや
みあいうたさりとは庄五郎も一つたのむぞはんだと
さふしじやうるりをまん〳〵だんもきかまほしきて
もそろふたつれうた

おなしく

けさのわかれのとりのねつらやほんにつらやみだる
る〳〵さりとはみだるゝねん〳〵みだるゝみだれみ
だるゝくろかみのゆひかひなしやまたのあふせをい

つの夜
　　おなしく
あきのくもまの月かげゆかし神そゆかしまがきのむしのねまくらにあらそふあかつきしのゝめはてはあけゆくねやのひまあかでもわかるゝさすがかたみのおもはゆ
　（十四）ふなはし
さのゝいよこの舟ばしさのゝふなばしかけてなをおもひいよこのわたるをしらせたや
　　おなしく
はるのいろかのなごりもふぢのたそかれものわびしなつは卯のはなさみだれせめてとへかしほとゝぎす
　　おなしく
志賀のからさきつれなくよそにのみきくさよしぐれおもひかけてはときはのまつもゆるさぬつたもみち
　　おなしく
あきのいろよきにしきをあきのにしきをたがおりてそのもいろよくそめたよそめもそめたよさよしぐれ
　　おなしく
しぐれ〳〵にぬれ〳〵てぬれてつまこふしかのこゑいろのみちとてやさしやしかもうきなのたつたやま
　　おなしく
よしやうきよのなかにも人のうへにもかけてだになにかいよしも心のまゝのまゝのつぎはしまゝならぬ
　　おなしく
人のいよこのうへにもかけてみよ人のうへにもかけてみよまゝのいよこのつぎはしまゝのつぎはしまゝならぬ
　（十五）あさづまふね
あだしあだなみよせてはかへるなみあさづまふねのあさましやあゝまたのひはたれにちぎりをかはしていろをかはしていろをまくらはづかしいつはりがちなるわがとこのやまよしそれとてもよの中
　　おなしく
うきねつらさのまつちのやまのかせゆふこえくれてさゝをふねあゝさだめなやとこのうらなみともなき千どり〳〵たえぬおもひに月日をおくるもあだ人心よしあふまてのうつりが
　　おなしく
あだしあだなる身はうきまくらならはぬほどのとこ

のつゆあゝいくたびかそでにあまれるなみだのいろをあゝたもとのいろをみねのもみぢはひとりこがれてまくらのなみだあはれと人のとへかし

おなしく

うきをかたらんともさへなくてなぐさめかねつわが心あゝうつゝなやすぎしつたへのその水ぐきのくろみしあとを見るにつらさのいやますなみだはたれゆへぬるゝあはれとそでもとへかし

（十六）うかれめ

はなはよし野よもみぢはたかをまつはからさきかすみはとやまいつもときはのふりはさんさしほらしやとにかくかもはるゝ

おなしく

やちよふるともかはらぬいろよまつにふぢえのそのおもかげを見るにひとしほにしをさんしうしほらしやとにかくおもはるゝ

（十七）しからみ

たえてあはずとふみをばかよへふみはいもせの〳〵なかとなるはしとなるよい〳〵ぬるゝわがたもと

おなしく

あひはちかふてあはせはせいでちかいしはかさ〳〵身をこがす〳〵よい〳〵ぬるゝわがたもと

おなしく

かりのねまきにたきものすればよしやわざくれ〳〵いろとなるこひとなるきぬ〳〵ぬるゝわがたもと

おなしく

たえぬおもひと人にはつげよ今はなにはの〳〵身をつくし身をつくすよい〳〵ぬるゝわがたもと

おなしく

くちてかいなしなにのみたちてうき身なからのはしばしら〳〵よい〳〵ぬるゝわがたもと

（十八）ふしから

あれてやさしきふしみのさとのゆきにゆきふるくれたけのおれさふなゆきに〳〵雪ふるくれたけのおれさふな

おなしく

からばとくかれよどのゝまこもかれば月かけかしたにすむそこにすむかれば〳〵月かげかしたにすむそこにすむ

（十九）しほや

けふとくらしてあすかの川になふさいく夜なん〳〵なじみもかはればかはるよのさだめなや

おなしく

たつたやまみちたどりてみればなふさしかのなんなんなくねはかはひやつまゆへに身をやつす

(二十)むめがえ

にはのむめがえいのちのきみになにがをしかろぞはなひとへさいたのさいた〳〵なにがをしかろぞはなひとへさいたの

おなしく

さつきさみだれなみだのあめのふるにつけてもなをゆかしひとりねかはすまくらたまくらふるにつけてもなをゆかしひとりね

(廿一)こひかせ

こひぐさのたぐひならばくずはうらみのおもひくさあきの夜なればなをみじか夜とあふよのそらをなげいたなにゆへに身をこひかせとをばなそよ〳〵袖のか

(廿二)まがき

あきのまがきにさいたはこはぎつゆのあさちふつゆしらつゆぬれた〳〵おしかつまかふなくねわさあゝなくねわさ〳〵いとゞ身にしむひとりね〳〵かなしさまさる袖はかはかぬ此身のつらさへ

(廿三)たつた

あきのたつたにながるゝもみぢがそめてある〳〵ありあけの月もろともにてるやちるやこきくれなゐの川なみさだめて〳〵いろよりいろにうつるならばよひわたるたよりとものさりとは

おなしく

いのちのあしたになこりのたもとはぬれてある〳〵いかなれば身をうきさとにゆくやくるやいつまでさのいつまでさだめて〳〵きんきのどくなるさはりもあらばはかなきわれがかよひぢさりとは

(廿四)くしだ

しもにさまよひしぐれにかよふ袖のをちばもなみだにぬるゝのぢのたなはしこひわたる身はなにゝつけてもものうきわざよいはしゆびなしふけてはさはり四つをかぎりのよるのせき

おなしく

いく夜かはせしなさけのすゑもいかにあふせのなか

なかがはにほんにもらさぬこゝろのそこをくめのい
ははしたえても人にこひやわたらんおもひをかけて
いつをかぎりに身をなげん

おなしく

よしやたのまじあだ人心ひとへばかりかやへやまぶ
きのたんとなじみのちかひもあるにうつりやすさの
はないろごろもとへどこたへぬくちなしわらやわれ
はこはたのかちはだし

おなしく

草のなかにもものおもひぐさたれにうらみはまくづ
かはらやとんとこの身をすてくさにしてくちもはて
なばそれかれそれよえんはあさがほあさくとまゝよ
せめてあふせのふかみぐさ

(廿五)もろこし

はなにたはむれまたほとゝぎす月にめでぬるときし
もあるにとしのなごりとふるしらゆきといつれあは
れさりとはへうつるもうきよへながきためしの松さ
へもくつとのさてはちとせもひとよのゆめかへはか
なの此身へ

おなしく

ういぞつらひぞこのさとなれてそむもそまぬもあは
ねばならぬいつかおもひのやへぎりはれてせめてゆ
めになりともへわけあるかたへまゝにならぬはたが
みにもありとのそれをたよりにうき身をとくるへこ
のとし月をへ

(廿六)ありま

つゆになりたやたもとのつゆにきえぬうき身のかこ
ちぐさなにをたねとかわがおもひ

おなしく

ほしになりたやなゝよのほしにはしはもみちのいろ
ふかくかけてねがひのいとのえん

(廿七)しらきく

なにはづのみじかひあしのふしのまをぬらさるゝ身
のくちはてずさてもうつゝにうつろひくれてゆめも
みようや見まいやらなかばさいたるしらぎくのころ
になれ／＼をばなもみだれけふはふりゆくしぐれの
くもよ神ゝこそ八まんわすられぬそではわかれのつゆ
なみだ

(廿八)よさく

ひとりこがるゝこゝろのいろ／＼がよひいはでしの

ぶのやまやまぶきがよひつゆのたまがき卯のはなが
さねはれぬおもひをさみだれにさつとかほれあやあ
やめさりとはかりねのとこのゆめみじかよのなつの
夜にしのゝめことゝふやまほとゝぎすうきなにたち
しせめてしらせんこのつらさなをしもかはかぬわか
そでにさつとふれむら村雨

(廿九)すておふね

まがきながらのごげんはつらや人めしのべばおもは
くばかり袖はなみだのふちせとなりてうきはながれ
の身はすてをぶねせめてしばしはとまれかし

おなしく

あふはわかれとかねてはしれとけさのきぬ〳〵いつ
よりつらやそではちしほのなみだとなりてうらみこ
がるゝ身はこひごろもせめてひと夜はきてもみよ

(三十)なみだ川

なみだならではうきをばとはぬかはくまもなきわが
そでのいろ

おなしく

はなはおりたしこずゑはたかしこゝろつくしの身は
いかにせん

おなしく

たつた川にはもみぢをながすわれはきみゆへうきな
をながすきみゆへながす

おなしく

うきなたつたのやまみちゆけばかほにもみぢかいよ
ちりかゝるもみぢがちりかゝる

(卅一)しがまつち

うらみつわびつおもひをしがのとこのさびしさよつ
れなき人にみせたやにはのやなきのいとのかせにな
びきしを

ちらし

さてもやさしのほたるのむしやしのぶなはてのやみ
ぢをてらす人のこゝろもなさけあれ

(卅二)てまり

ちらし

つる〳〵といづる月をまつのえだでかくしたいざさ
らばきりてもすちよやれまつのえだのしたえだ

とんとつきあげきりゝとまはり〳〵見てし人こそゆ
かしけれ

(卅三)いつの夕べ

いつの夕べからやらついかの人になづんでひたすらにふかきえにしもかはるまくらのをきふしこのさとのならひかやいたづら草のあきかぜさそふいろとてうつろふ人の心やといふたらうさをわすりようかえいはいな〱といふてもしやうはなをろうかあとをいふほときのどく

(卅四)さかつき

たまのさかつきそこなきとてもとてもちきらは二世とむすばん〱ひたちおびさてよい中

おなしく

たとへごげんはまかせぬとてもありしなじみの〱すゑはたかひのあふせ川さてよい中

おなしく

のちのあしたにかよはすふみのよべのたまくらけさはなか〱けさはなか〱みだれがみゆふかひも

(卅五)くどき

二丁はげしきなつの夕べにつくふねも人めづゝみの神〻ぞほたるもわがおもひこひとうきみをおきのかもめにかこちてきのどくうそもすてられず

おなしく

夕べさびしきあきもなかばのかよひぢこひにくちなん袖のみなとのすてをぶね月はもとよりすみだ川にながしていざことゝはんみやこどり

おなしく

晃しやたまだれうちぞゆかしきおもひづまひくなからねこつなにまかせておひかせくゆるこゝろをたれにかこちてゆふぐれあだにはきかぬうきなを

おなしく

人のつらさにこりぬ心のいつまでうきはたまのをたえぬばかりにくれたけいくよふしみのゆめもながれてなみだ川しがらみかけてせかふよ

おなしく

こひのはつ風身にしむほどぞなつかし月は文月たがかよはしのふみ月なゝのゆふべをほしもいくせのおもひ川かさゝぎはしをかけふよ

おなしく

袖にふりくるしぐれたつたのおもひ川ぬれてもみぢのいろもながれのはてしなやなにをうらみにたえてちぎりのうすごほり中々こひはわたらし

おなしく

かはす手まくらたへぬあふ夜の中がはさはりうきはしかゝるつらさにたれゆへよしやながれにくちははつとも一すぢをあだにはせまじわがこゝろ

おなしく

ねやにとゞまりすぎしその夜のむつごとおもひみだれてひとりぬるみのうさつらさつらきこよひはゆめもなく／＼なきあかすそいねのまくらなつかし

おなしく

なんぼをしみしきのふのはなもいたつらにけふはいつしかかはるならひのこひごろももはやかきねもゆきかとみゆる卯のはなをなつかしきほとゝぎす

二上り

（一）わかのうら

わかのうらにはめいしよがござる一にごんげん二にたまつしま三にしほがま四にいもせやまかたをなみこそめいしよなれしやうがへいよわけよふいふたなのほん／＼のほんへかふしたわけよかたをなみこそめいしよなれ

おなしく

人はつねとやうつろいやすきつゆのかごとをまことと思ひたづねいらばや心のおくのみえぬいろこそゆかしけれきのどくいよわけよふいふたな見えぬいろこそゆかしけれ

おなしく

よし野川にはさくらをながすたつた川にはもみぢをながすはしのうへより文とりおとし水にふたりのなをながすしやうがへいよわけよふいふたなのほんほんよほひほかふしたことのみづにふたりのなをながすしやうがへ

（二）さつまふし

おやはたこくに子はしまばらにさくらばなかやちり／＼に

おなしく

そらになくねはみなうそどりよねやのうちこそほとゝぎす

おなしく

お江どでゝからとつかはとまりこまをはやめてふじさはへ

おなしく

みのにつまもちをはりにすめば雨はふらねどみのこ

ひし

(三)ひよどり

ひよ〱となくはひよどりこいけにすむはをしどりをしどりのしかもやもめにおふやのるすもりさらばえひやとななえいさらえい〱〱えい〱〱〱しかも月の夜かやみの夜にえいさらえい

おなしく

かず〱のよいのむつごとうらみにふくるしのゝめしのゝめのなみだながらにもはやかへるささらばえいやとなえいさらえい〱〱えい〱〱〱〱〱しかも月の夜かやみの夜にえいさらえい

(四)ちん〱ぶし

いくよかさねてふりつむゆきのさのゝわたりにこまひきとめてはらひかねたるふゞきのみぞれまじりにふりくるをかちひともへそれはこひのゆふぐれいろにこゝゑてしのともせめておもひをかたりなばはてそれまで

おなしく

ならぬこひならやめたもましよおきのちん〱千どりがはねうちちがへのこひごろもさてよひ中それかしやうよおきのちん〱千どりがはねうちゝがへのこひごろもさてよい中

おなしく

もはやあけぼののわかれのつらさねやにことゝふむしのねたえなはたえよ玉のをわがなみだへそれはうき人のねやにことゝふむしのねたえなはたえよたまのをわがなみだへ

おなしく

ふねにめせ〱いろあるさとへなみのよる〱たれまつちやまなひてあらしのきましたみつけはこざきわけのさとふねめさぬかそれはあだしあだなみおちてしづんでしのともひきはかへさじ二丁だち名はながさし

おなしく

まつにほどなくこよひとなりてとしにひと夜のあふせもたえてたのむかさゝぎ〱こひのみなとのわたしもりいくあきもそれはまたのをりひめあかぬわかれのなこりにいとゞたちとはほしあひのそらきのどく

(五)さいこのふし

さど丶なさど丶ゑちごはさいこのさいよすじむかいそれはへはしをなはしをかきよやれさいこのさ〳〵いよふなはしをそれはへ

おなしく

はるはよし野にさいたとさ〳〵はつはなざくらそれはへ

おなしく

なつはくも井にないたとさ〳〵やまほとゝぎすそれはへ

おなしく

あきはたかをにそめたとさそむるとなをくつゆしくれそれはへ

おなしく

ふゆはしも夜のさへたとささゆるとさなくともちどりそれはへ

(六)さんさぶし

よひは月にもまぎれてすむがふくるかねにはさんさそでしほるよしなのおもひ

(七)かこしま

こゝにはやらぬかこしまにはやるになさ三十ふりそで四十しまだなほいさ〳〵

おなしく

しがのさゝなみたつともまゝよかすみかくれのふねゆかし

おなしく

文はあまたにかくともまゝよおもひそめしはたゞひとり

(八)みどり

ながれいみじきよし野のやまやはなのやへぐもたなびきつれてみねのしらゆきふもとのふゞきの心のみどりといろこきまぜてともにちりしくうすはなむしろなれしその夜のたもとににほふはるのうつりがよそにのみもらすなえいこのさんさ袖のうつりがよそにのみもらすな

(九)しらゆき

うそのかたまりまことのなさけこのまんなかにかきくれてふるしらゆきのひと心〳〵つもるおもひとつめたひとわきていはれぬよの中

(十)むらさめ

むらさめ〳〵はれまをしのぐ人めつゝみのくさばの

ほたるむねにたく火のたゞえてもゆるわれはきえなん〳〵われは〳〵きえなんいつかへ

おなしく

ひとりね〳〵夜さむのころもまことうらなき心の月もくもれ〳〵とふりくるなみだわれはくちなん〳〵そではたもとくちなんうき名も

(十一)みだれがみ

きみとわれとは七つ八つ十でとのごをみそめてそめて人こそしらねアイノテふりわけがみをそなたならではたれにか見せんこのくろかみをアイノテ今はあだなるみだれがみみだれごゝろやあゝ〳〵アイノテあいたみたさにきたぞかしアイノテつらや〳〵とアイノテおもひはすれどまたすてられぬにくさあまりていとしさまさるさてもいのちはつれなひものよきみつらやいきておもひはあいべつりくのしんでまだきてその〳〵アイノテそのさきの世もおもひしらせんおもひしれアイノテ袖のみなとのこひのふちわたりくらべんなみだ川アイノテいろにしづみてしのともひきはかへさしはやおぶね名はながさじ

(十二)あづまをどり

あさの六つからずんどでかけたずんすとふみたす八もんじびんつけとろりと入がらでいせてうふなてうのだてすがたさかやのむすめみせのひまよりちらとみたみそめたばんにあはふぞやかたろぞやさしあしそろ〳〵くゞりをらつくら〳〵くらちつくらばつたりくら〳〵がりちつくらばつたりくら〳〵がりくら〳〵がりのくらくともあけておまちやれをそくと〳〵月のでるまで

おなしく

よい〳〵よな〳〵かよふつまもつおなはかみのゆいどきかねつけごろは月は三か月いづるころなふやれ〳〵さてものたれをまつやらたそがれどきにかどに〳〵〳〵たつとなふにしき木かいのよるたちやる

(十三)野　中

あのや野なかにをしふせられてうしろいばらでさゝれはすれどまゝはけつかうな〳〵お正月じや〳〵まへはけつかうなおけつかうなお正月じや

(十四)こまち

おもひふかくさいろにはたれもまよふ道しばつゆふみわけてもゝ夜かよへといつはるふみをまことゝお

もひかのせうしやうは月の夜もゆくやみの夜もかよふおもひあまりてなみたにぬるゝあめのよも風の夜もはらへど／＼そでにちりくるはゆきかみぞれかこのはかつゆかのきのたまみづとく／＼とゆきてはかへりかへりてはまたせんかたなみのよるのみちこゝをかよひてきにけらしくるまのしゞにかよはんとここにたゝずみかしこにたてばさてもかなはぬうきよかな

（十五）うたゝね

こゝろのとへばかくれなひこひぢしる人なみのよるさへゆめさへうつゝさへよしなのねこの身をそぼぬれてなれよにようとはまたうそばかりそれはじやうならうき世にかゝるつゆのあだなのしばしもへ

（十六）いしきり

おもひそめてはいとまなきつらさなみだしほれてつまこふちどりどこのうらかけてなきあかす

おなしく

きみとふたりはならびのをかのそめてこまつのよいなかなれどうらみかねてはふるしぐれ

三下り

（一）こんくわい

いたはしやなはゝうへははなのすがたを引かへてしほるゝつゆのとこのうちちゑのかゞみもかきくもるアイノテほうしにま見えたまひつゝはゝをまねけはあとみかへりてさらばといはぬアイノテばかりにてなくよりほかのことはなしアイノテのこえやまこえさとみねこえてくるはたれゆへそさまゆへアイノテきみはかへるかうらめしやアイノテいのうやれアイノテわがすむもりにかへらんいさみにいさみてかへらんわがおもふ／＼心のうちはしらきくいはがくれ／＼しのゝほそみちかきわけゆけばむしのこゑ／＼おもしろやアイノテふりそむるやれふりそむる／＼けさだにも／＼アイノテところはあともなかりけりアイノテにしはたのあせあぶないさアイノテたにみねしどろにこえゆ〱あのやまこえて此やまこえてこがれこがるゝうき身かな

（二）かづま

うらみは人をも世をも／＼おもひおもはじたゞ身ひとつのむくひのつみやかず／＼のうきなにたゝしさんげのありさまいはもる水のおもひとなりなをあだし野のつゆなみだつゝめどあまる世のならひアイノテ

きのふのはなけふのゆめアイノテおとろかぬこそはかなけれアイノテ身のうきにアイノテ人のつらさのなをそひてアイノテわすれもやらぬわがをもひアイノテせめてしばしはアイノテとまれかしあづさのゆみにたつそらのこれまであらはれたるぞやあゝなつかしやいまとてもしのびぐるまのわがすがたアイノテ我すがたアイノテ　ものにくるひしありさまをあはれとも又はかなけれアイノテ世の中はひろいようでせばいよのアイノテにあひのつま〳〵いとゞたいこのねどん〳〵もよしどん〳〵〳〵アイノテどん〳〵〳〵アイノテつく〳〵てんつく〳〵どんがらが　たいこのねもよしやつとしよアイノテにあひのつまつまいとゞたいこのねどん〳〵もよしどん〳〵〳〵アイノテどん〳〵〳〵アイノテつく〳〵てんつく〳〵どんがらがたいこのねもよしやつとしよものにくるひしわがすがた

(三)門はしら

ひるはたんこ〳〵なおけのわをさしみやるさのほんへよさりやせんまじよのこししみやるしやうがへ

おなしく

たんだふれ〳〵六しやくそでをあのほんへてうせんじもんちばしらをふりかくすしやうがへ

(四)いけだ

いけだいたみの六しやくたちはひるははなはおいなはたすき夜ルはりんずの八へまはり

さはぎ

(一)一夜かゞみ

ふけゆくそらの犬のこゑあげや〳〵もうちすみてうらみらうさいわかれざけいびきみだれのねやもありしどけなりふりのひとへおびもすそこだかくはぎしろくをくりとゞくるなかの丁おのがさま〴〵まつち山のまつのあらしはその夜のゆめをさまさせねぬばか〳〵りあゝばかりへあけぬさきにとかづらきのあゝふつたるゆきかなゆきをまろめてひとつかみなげつけたまへばみさほのまへたれじやいのこんなわるひことはせぬものよかねをあつめてひとつかみなげつけたまへばみそかのまへたれじやいのこんなけつかうなことするものよなつとうあつめてひとつかみなげつけたまへばつぼねのまへたれじやいのおかさんせこんなふどうけなことはせぬものよげにさまさまのたはむれにつれて〳〵くるはののんやほゝはん

やしたふてんとささあしたふてんとさかつてかぶと
のをじめのきんちやくきん／＼のはアイノテたとい此
身はほんでんこくになるともたとひこのみはほんで
んこくになるとももの日／＼はむにせまい／＼さら
ばへおつとせたのむによならぬにさうそつきめけい
せいめひんぼめ。へへへへへかへるすがたはやぼ人
のかさもあしだもふみちらかいてゆきのその夜はは
か／＼しやう／＼たどりゆくほどにたうてつのかね
のこゑせんじゆだらにをよむときははやあけがたに
なりなんとちゃに心をくだけどもゆきてかへりてぬ
める身か

（二）さんやかへり

世にこくにあはれらしきはさんちやかへりのふと吉
三よいのしゆえんにおもはれてあなたのかたへさら
ばへこなたのかたへのとさばはんやむまにもふねに
もえのらひであみがさをさしかざしどてのくぼみで
けつまづいてひざかしらをすりむいたなんとしたあ
たゝのたアイノテちんば引／＼きんりうざんのよねま
んちうはおりないかせによないない／＼のないとか
くこひには身かふとる

おなしく

世にこくにわびたちやのゆはしゆしやかかよひのう
かれ人よひのさわぎにこゑかれてあなたのかたでな
けぶしこなたのかたでそもべんけい二まいかたにも
えのらいてやきいんあみがさうちかざしたんばくち
にてけつまついてすそつぎまでふんざいたなんとし
たきこんかないぼろをさけ／＼まつばらどをりのか
ばやきはめすまいかけらい世にとくない／＼のない
とかくくはねば身がほそる

（三）ふなうた

あさのおまへのまんほがせらをこ女郎こひしとなう
たふてなのりておこぎやるこしやくしこんむすめこ
さいかこせんかこかいかこぐるまつのこよねか／＼
つがはが／＼／＼のんえいよほろではやらいでうた
でやるきみをおもはでかよはりよか／＼どこで見た
そつといたしたとよえい／＼きみははるさくむめの
はなあゝじやとよえいかはるゆかしきとりなりはあ
りやりやこりやりやえい／＼さつさえいさつさまん
ざいじや／＼せんしうらく／＼じやちよぎや／＼ち
よぎりやちり／＼やちり／＼／＼ともなきさにとも

よぶはんまちん〳〵ちどりがよせくる〳〵こん〳〵〳〵こなみにゆられてもまれてたんどりちんどりしどろもんどりはねられたほゝたん〳〵つかやらこのしたんたん〳〵たゞちがよんきゝよこんこゝこのこんこのへ

（四）はつね

はつねつらにくさはりがちにござるせつくはいてゐよよざとのわけはきのとくぬらす〳〵〳〵〳〵もれてみだれてはつとさたん〳〵ものうい正月アイノテぎすないてきのどくのやますたりしむかしかねのかず〳〵いまさらおしとわけをゆふぜんひだりのがいなもゝにすけさまいのちとほりてりうしのてんとむつごともみないつはりよあまのろくざもいたづらごとよ月に廿日はあふたいていもあくしよすてぼのさんせきゆへにいまはたよりのふみばかり

（五）がきまひ

あらゑんぶこひしややすきひまなきみのくるしみをのんさてまことにたふれふしてぞなくばかりべんけいきいてをゝだうり〳〵がいこつたちさりながらたちまちそこをたちさらずばかつたはしよりかつひしやがんとぞ申けるがいこつ此よしきくよりもむさ様〳〵べんしう様それはあまりきよくもじもござんせんはいのこればかりのもりきりめしを一はひばかりはふんぞろばいてもけころばいてもちつともぞつともだいしもないがくわゑんとなつてもへあがる〳〵アイノテくわゑんかたをばおごろじやつて　ア、かなしア、　なく〳〵ばかりひもじ

（六）あみすき

あみすき又兵衛どのはごせしやでござるはだしはだかのだいまいりいのるしるしのりしやうもあらばまち〳〵かど〳〵みせのはなにもひつかけておいてから子どもしゆ〳〵もちつとそちらへよらんせおくもちつとそちらへよらんせのわくるは〳〵わくる〳〵〳〵〳〵すきわくる〳〵あみを五しきにすいてかきよとのしゆくぐはんかけていなばやくし〳〵はんなたこすだこのこらずかけたわさびアイノテしなののくにはとちやうにかけたそれがうそならせんくわうじのふつしよにとふてまたみさんせのあたご様へは月まいりおんやれ〳〵きよ水たんばのこやすの

かねのをかけたぐはんなりやすかねばならぬアイノテこのてうは子どもでかしましかみの丁ですきましよかみの丁しもの丁みせのはなにもひつかけておいてからこどもしゆ〳〵もちつとそちらへよらんせのおゝもちつとそちらへよらんせのわくるは〳〵わくる〳〵〳〵〳〵すきわくるあみを五しきにすきわくるまん〳〵又兵衛があみすきまん〳〵又兵衛はあみすき又兵衛がすいたかねのをとかく又兵衛どのはしやぐはんこせねがひ

（七）ぬりかさ

おかたぬりがさ七ねんはやいすけがさにかへておめしやれさあふみのかさはいよこのさいたさなりはよふてびやくらいきよふてさ

（八）さいもん

もとよりまことのぎやうしやにもあらざればぶしたるさいもんしらばこそとでほうだいにぞそも〳〵はらいきよめたてまつるアイノテみもすそ川のかげきよくげくうは四十まつしやないくうが八十まつしやあはせてやしやくのなぎたおふひざぐるまにかいかふでそこさんこゝさんアイノテかみがたのやしろにはいなりぎおんかもかすがまつのをのだいみやうじんきたのはてんまん天神なりあのおしやんすことわいのあのおしやんすことはいのかしまうらにはたからぶねがつくとのせんぼんふなをかしゆしやかいろざとやあそれのアイノテナゲブシとはゞとへかしいよいよにまつやまさぬきにこんぴらおなじくしどじのくはんせおんつの國にいたつてはてんわうじはしやうとくたいしの御ぐわんしよしほやまつともふたしばいアイノテえい〳〵〳〵ことしやとのこのくさかりどしよかまもよくかれちくさもなひけ心よいぞのかげのこまどこ〳〵〳〵どつこい〳〵あね様や〳〵あんすで〳〵よござんすやまをとをればやまもゝほしや身をもなげかけゆすらばおちよあまりつれなのやまもゝや山につれなの山ぶしやなをやまふかくわけいればかゞにしらやましなのなるあさまさらしないよかいのくにアイノテつるがこほりやをがさはらさかみのくにゝつるがをかかまくらやまをよそにみておきのこじまにともゝなくうきをするがのたごのうらきぬたのをとのいとたかくうつのやまべをみをがさきいそによせくるなみのをとなのつたるちどりのくつはのひゞ

きがちん〳〵〳〵かものあしアイノテかはるまじ〳〵此世はさてをきのちの世もこれ〳〵さつて〳〵ういてきた身はうきしまやとうたふみなたかきこじを三かはなるかのやつはしやいつのまにをはりのくに〻はなるみがたいつまでこ〻にいせのくにすゞかみや川つきよみやあこぎにひくはなみたへにやまだがはらやうぢはしやはしのいよこのしたにははしのしたにはそつこでおだんなほんのせにきせろのがんくびはとのめおつとよどんたねこのすゞでもそつともとまれかしげにうはきだんなうつざはよねやまやくしなんなむきめう長左衛門あぶらうんけんそうへもんごきねんとぞうやまつばらどをりへ

(九)しつねん

こんどながさきでかはつたこうたをならふたあとさきはおぼへないがなかのしやうがをわすれたさこそあるべいとてかひてもらつたがそれさへでぐちでをとしたこれめんぼくなひしゆびもしよわけもこのとをりこれめんぼくない

(十)あくしよはつけい

なんほせきやるともあはなけりやならぬやだといやらばでなをしてやりかけよをよばぬこひをせたにかけはしはつとたつながうきなのうきにさあみひく〳〵よねたらはやんれかはゆらしやのえい〳〵えいざんのおやまはくされだてしやじやないかやれくものおびかのこまだらにゆきのふりそでけに〳〵こうてんのぼつとりものしがのからさき〳〵だいまいりひつつれだつてついつれだつてまいるおんなはおとこほしさにしゆくぐはんか〻〻かけたへりしやうをまつぞひとつよつそのきのもとですぞさかづきやつこりや〳〵〳〵のめさやださぞめきさはぎしあり様を見たかへいさのらくあそびかぶろやりてにた〻こもちごぜやざとうにあんまとりさてもあくしよのせいらいやとばつといふてばんしゆ〳〵ばん〳〵しゆあめもふらぬにたかあしだみのきてかさきてぼうついてあんどんさげてどんがらりどんど〻なるは夜みせしまいのたいこもちどんがらりなにものじやあれはえんじのばんたろうさつてはわかれのなみだこそさつさぬれてしつほとぬれたがしやう〳〵のよるの雨にもまさるべしあくる日は二日ゑひのつくりやまいでおやきやうだいのみるときはまことらしげに

とうていのあゝきのつきともいひつんべしいかひたはけのなれのはてうかりひよんとぞ見えにける

(十一)つしままつり

つしままつりにうかれでゝへひるは〳〵しんがくにちやんぎりしつきりふなあそびまづ三ばんさうのすゞのねはおふさへ〳〵やおんは〳〵しやん〳〵とゝん〳〵ふみわたるはやせや〳〵やくしやしゆそのつぎはとものしゆかぞへ〳〵見たればひとつ人のしのぶしんまちのしきぶはきやしやなものじやとアイノテどつとはめたもことはりよふたつふたばのまつはたのみにわかれはうきふねなあゝん〳〵三つみかさに四つよしだのけんかうがながれとてそのゝきしまのみちをたつる女らうはあくしやうらしやのびやくらいかゆらしの五つアイノテ五ついづゝはいきぢはりあいつよいかよはひか六つむさしはべんけいせいのつはものじや七つながはしはらんかんにつゝたちてくせつのおとこをいまやおそしとまつたりけりせきだのをとはざら〳〵ざざらりひしやりすはしれもんのんよとさかづき手にもちまちかけるアイノテかへるさはとろさになつてもんまでをくれささらばやはつといふては八つやへぎりはかみきりすがたにさまをかへとさんくみぢうさかづきをかふろにもたせてさすいさやぼさてんと〳〵てんと〳〵てんとやをつつめぼいかけもんのびもの日をいちにらいはいなむきめうてうらいくせつもなかれ九つ小大夫はをしつけこくらをたてそめていゑもさかいやの女郎やあげやのだいこくまひと夜みせのたいこではやした十でとふからかあすはとふからござんせ三ばんたいこでずんでんどふから文はやりてのかぶろやりくる

(十二)せうし

せうし〳〵がみせうしこざる一にでぬしゆび二にふねのあめどての夕ぐれはしばのけふりあけのからすのこゑ〳〵もきのどく

おなしく

せうし〳〵がみせうしござる一にかすしゆび二にをそひしゆびのきの夕ぐれかぎりのたいこならぬもらいのやくそくもきのどく

(十三)唐人歌

かんふらんはるたいてんよながさきさくらんじやばちりこていみんよでんれきえきいきははんはうろう

ふすをれえんらんす
おなしく
みうらの四郎左衛門ながさき平左衛門ひしやの三郎さへもんあづまやのしん七で江戸てう山がた七郎右衛門

(十四)永代はし

ねがひもいとゞかけまくもつゆをしからぬみちをくのふかきなさけをくみあげてなむやだいじのくはんぜをんかれたる木にもはなさかせいまのわかいにうはきもしやれ風がさそはゞなるまいにまだ夜はふかひにさりとてはきぬ〴〵せつくふなむかひはしをりくべしさけのかんねこのあらせしざぜんまめ月はまつちのこがくれにつけてたゞよふむらがらすひふみよをこめてかへるつらさにまたの御げんとかみかけてまだみゆるいまどばししゝむかふしまざきなごりありをしきりなだもつゝがなくいそぐ心はなけれどもえいたいはしにぞつき給ふ

(十五)やりをとり

ふりやれおふりやれ大とりげのふりそでぎやうれつぼつたてあつまいりちと〴〵ちとかちをめされのしつはとせやりはぢよん〴〵ちよろちよんぢよろさまにもたせろまつかせもたせろまつかせまかせ〴〵まかせておけろのさて〴〵なまかせておけろのさて〴〵〴〵ちよん〴〵〴〵〴〵ぢよろしゆ〴〵ぢよんぢよろさまのやりのてついのふりそでおさきでふれさ〴〵おさきで〴〵さき〴〵〴〵あと〴〵〴〵あとさきそろえただうちう國ははなのお江戸にとん〴〵とつついたはやしな川をうち過てあづまをさしてぞくだりける

(十六)むまかた

千両とるともむまかたいやよ〴〵かんのしはすもひの六月もわつはしめこしにやまびしやくやつとまかせのよい〴〵〴〵とぶかごとくにはねるがごとくにちうをもかけやまをもたにをもこゆるしらつきげちんどりあしわけえいさらありやとんなをきあがつてはせあがつてぴんとはねられてゝゝゝゝいんひゝゝゝこゝなむまめはあめがすぎたかほてつはらめあゆめやあゆめあゆまにやならぬあつちらなこつちらなあちりこちりすべりまはつてはい〴〵〴〵はるはごさせのおつゝらむまよ〴〵あけ七才のれんぜんあ

しげにさゞなみくつはをとつつけてをしかけざんまいはり丶んし丶日本一のやぢむまかたらばなをよかろかへしてく〵くつはとつてやぢむまかたらばなをよかろこまをはやめて

（十七）ころく

ころくぼつくりく〵ついたるたけのつえころくもとはしやくはちなかはひうやりちやうやりふえころくするじや一ひつけいじやうせしめ候せんどは御じやうをぐされたれどもついしかへんじもつかまつらひでさてく〵ぶさたはおもひまいらせ候へとともかいてやれふでのじくだけころく

（十八）たかを

たかをうちにゐてはまのぐりくやるよのもはやふぐどきやんやことしのふぐはへそれく〵く〵かいておみしやれどぶろくく〵く〵やしるすいく〵のすい

松の葉第三卷終

松の葉第四巻

吾妻浄瑠璃目録

（一）あさぎかたびら

ほの〳〵と夜あけがらすもいはゞきけきのどくのやまこえかねしにじゆんれいがなさけにてをにひとくちをまぬかれてまさきよ一人御ともにてたどり〳〵とみちしばのすそはつゆやらなみだやらときしもあきの夕まぐれちゞのくさばももみぢしてにしきかとみるたにかげに木こりはあじかにいゑづとのはなはなに〳〵ふぢばかまきゝやうかるかやわれもこふかどたのいなばかりそめて竹のまろやのしづのめが月にむかひてうつきぬたこゑおかしくもひやうしとるなにのみきゝしうぐひすのせきこえすぎてながむればすねてしげりしアイノテまつやまのかのわけほうしがそこはかとかきあつめにしつれ〴〵にりんずはなをのあしだにつくりしふえにはしかもよるかたなんすぎにしくろかみのよれるつなには大ざうもつながるゝならひかやたゞよのひめをこひそめていつしていゐをふりすてゝくさかりわらはの名にたちしいろのみかどのみさゝきとやうちこえゆけばこんだのさとかいのくろごまたかくともしこなしてのるものゝふやはなのうてなやむらさきのくもとゑいせしふぢいでらじゆんれいがなさけをもひとへに大じのちかひぞとおもへばいとゞそでしほるなをゆくさきはつのくにやなにはのあしのふしのまもまだはだなれぬつまゆへにしよじせわながらまよひゆくいかにまさきよあれ〳〵みちくるしほもこひすかやめなみおなみのあるものをさだひらかたをあとになしくずはのもりに色どりのねぐらもとむるやさしさよおとこやまにはをみなへしをぎのはかせのたよ〳〵とふらでなびくはやぼらしやよどやふしみのふなよばひいとしとのなら〳〵われもねんあないぶかしやまつかぜのふかでしらぶることのねかアイノテかすかに三味せんきこゆるはこゝはいづくぞときならぬほとゝぎすのアイノテ一こゑをきかまほしやとおゝせけるまさきよが申やうさればすぎにしむめさくころみやこづかいのをりからに下べのものにきゝけらしふしみのしゆくのいろさとなりなにしもくまちとかやつゐておかしきことながらうきがなかにもものとはん アイノテ ゆびきりアイノテかみきりいれぼくろよねのならひかいやほんにまつにかはらで心せばたれかちぎりをよそにせんとはとくちずさみいまははやきよみづ

でらにぞつき給ふ

（二）きやう女

いつしかきやう女となるかみのとゞろ／＼となるそらにたちいるくものあともなくうきてたゝよふばかりにてそこともいさやしらつゆのおきまよふみはあさぢがはらまだきいろづくわがそでにたれゆへ月はやどるぞとよそになしてもとへかしなふかき心はあさくさのはずゑにむすぶしらたまかひかりさやかにすみだ川たへずながるゝみづのあはうたかた人はつゝがなくありやなしやところたてゝとへどこたへぬまつちやまゆふこゑくればゆふさきのいほりかたふくいたびさしあれてのゝちはかせあてゝふは／＼ふはのせきならばとりのそらねやかはるらんゆるさぬものをあふさかの人めのせきのしのぶがをかよしゝのばずがいけのおもげにいさぎよきしみづむらゆみはり月のいるさのもりやなかのこだちしげりつゝはなのさかりはみよし野のよし野よりなをうへのやまのぼればくだるくるまざかかなたこなたとアイノテ見はたせばくんじゆのきせんとり／＼にだてをしたやのまちとかやおもしろこそでひきちがへうはぎ／＼のアイノテいろ／＼にもやうもよしやよしなかぞめくゆるおもひのかず／＼にいはでたゞにややまざくらかすみのまよりほのかにもみてしひとにはあひたらであさぎちりめんちやぢりめんうこんべにかばうすねずみいろあるひとに見せばやなをしまのあまのぬれごろももしほかくそでひとつまへしゆすやからあやしろどんすぬいすりはくのはゞひろをゆかりのいろやむらさきのちりめんでぼそむすびさけたれしらすげのかゞがさをまゆふか／＼ときなしつゝなまめきあへるおりからにはなのこかげはかりのやどこゝろとむなとふくあらしらんだやのかほりさそひきてさりしゆふべのころまではいとゞおもひやいづるなるわれもわすれじもらさじとうつりがふかくかさねきてつまのゆくゑをしらいとのみだれごゝろやくるふらん

（三）はうかぞう

まづせいやうのあしたにはたにのといづるうぐひすのこぼれるなみだとけそめてゆきげのみづのうたかたにおひやどりするかはづのこゑきけばこゝろのあるものをめに見ぬあきをかせにきくをぎのはそよぐ

ふるさとのたのもにをつるかりなきていなばのくものゆふしぐれつまこひかぬるさおしかのたゞすむつきをやまにみてゆびをわするゝおもひやりうらのみなとのつりぶねはうをえてうへをすつこれをみかれをきくときはみねのあらしやたにのこゑゆふべのけふりあさがすみみなこれさんがいゆいしんのことはりなりとおぼしめしこゝろをさとりましませやつきのためにはうきくものたねとこゝろやなりぬらん

おなしく

をもしろのはなのみやこやふでにかくともおよばじひがしにはぎをんきよみづをちくるたきのをとはのあらしにぢしゆのさくらはちり／＼ににしはほうりんさがの御てらまはらばまはれみづぐるまのわのりせんせきのかはなみかはやなぎはみづにもまるゝしだりやなぎはかせにもまるゝふくらすゞめはたけにもまるゝみやこのうしはくるまにもまるゝちやうすはひきぎにもまるゝげにまことわすれたりとよこきりこはうかにもまるゝこきりこのふたつのたけのよゝをかさねてうつをさまりたるみよかな

(四)しらたま

さてしらたまとまうせしはいふにやさしきだてすがたたれに見よとてさくむめのいろのはながさふる／＼ときつれてつれてゆくときはしる人ぞしるしらたきのをとはもこゝかなとりでらむれつゝあそぶきやうわらべあふさきるさにしげりあふえだよりつたふはるかぜはそらにしられぬゆきなれやともまちがほのやまざくらいまこのしやばにじけんしてあふぐもをろかきよみづのたえぬながめはおもしろや

(五)かよひぢ

しのび／＼のかよひぢにまつはつれなやきのどくやたよりもとめてやるふみにかならずこんとのかへりことうれしさどふもたまられずよひよりねやにひきこもりまてどくらせどその人のそよとばかりのをとづれもはや九つのかねがなるさてもおもはぬさはりありこよひのあふせはかなはぬなよし／＼かこつもやぼらしやいつそゆめこそましならめまくらひとつをたのしみにこひしゆかしきねやのうち

(六)せみ丸

くらき御めのかなしさはつきひのかけもみづとりのかもの川ぎしなみこえてついのゆふべをまつざかや

きえこそかへれあはたぐちいつをたよりにたはつけのわがくろかみのさねかづらあふさかやまにぞつき給ふ

おなしく

第一第二のけんはさく／＼としてあきのかぜまつをはらつてそゐんをつ第三第四のみやはわれせみ丸がしらべはよつのをりからなりけるしぐれかなながるゝみづのあはれさよそのことはりもめに見えず月のいるさはいづくぞとみやこのそらもなつかしさまさきのかづらあをかづらくる人ありともしりたまはずまきやかしはをしはけてつえにすが。のそばづたひたどりかねてぞみへたまふ

（七）かみすき

なにのつとめにひまをなみつけのをくしもさゝでやととりちらしたるたまくしけすきかへしぬるかず／＼にはまのまさごやそらのほしよむともつきぬたはふれにことのはぐさのつゆふかくいつのころよりみちをくのせきのしたひもうちつけにとけてみだれてもとゆいのすゑながかれとむすびてしふたりがなかはひさかたのとゞろ／＼となるかみのいかでかわけんわくるともあかになれたりつくもがみもつれそめにしそのよはゝもしうつりぎのよそにやとたちゐにつけてうたがひのおもひにむねをこがせしにかはらでかげのつもるにそなさけのいろもますかゞみまつのふたばのちよかけてたのむによ十郎どのあしのまろやにひとりふすともきみかほかかよふこゝろはなきものを見はなちたまふなわがつまとしば／＼かみをぞすき給ふ

（八）まつよひ

あすの夜をこよひになして月もがないのちもしらずくもりもやせんめにはさだかにみえねどもかぜのをとづれいづちともしらぬつまどをたゝくなるよしやまよひのこゝろからもしやそれかとあやぶみてはしりでゝ見ればむしのなくねもさよふくるほどかはゆらしなれもやものをおもふかといとゞゆかしさまさるらんとすればうらみかくすればまたいとをしさにほだされてかとりのきぬをうちかづきゆめこそたのめとうちわびてなれしまくらにとがゆるす

（九）舟あそび

なつはすゞしきあさくさのいろをとゞめし舟あそび

みをすて人のおもひ川ばつとしたの丶わけすがたさりとは心うつ丶なふなりゆくま丶につく〲とうきことをのみあんずればこひかせしたふしやみのねにかほりよ〲いろとかほりのさりとてはきのどくのやまつもりきてうきないとはじわがおもひいづれわけあるつてもがな

(十)まりこ

爰はいづくととふたればこ丶はするがのまりこのしゆくよさてはうれしやまりこまできたかうつのやま心を歌でやるたづなゆりかけむまをひくればこ丶はしたつゆくだりざかうつのやまべのゆめうつ丶

(十一)ちどりのまへ

ふじはいそちどりのまへと申せしはほうげんのひとりひめなさけざかりは十六のとしのはじめのはつこよみむこどりよしとしるせしはたがためにぞとふでそむるけしてかこちてうちうらみよめ入ごろなるひめご丶ろすいた〲とのごのうわさのみうつら〲といひくらしせめてのことのなぐさみにあさひゆふひがことばのすゑたのみにするこそやさしけれ

(十二)げんぶくそが

見丶へそめしもはや みとせすぐるつきのかずよりもきみにあふせはい丶たびかうちとのものにせかれてはたきつなみだもながれえんおもひのふちのそこいをばよどむと人はしらなみのきえぬかごとのつとめとてほかのきやくしゆにあふときはさすがよそにはみちをくのちかのしほがまちかけれどあらゆるかみもしろしめせゆるさぬものはしたひものせきのとかたきつれなさにしたしむ人はうとくなるうときはいと丶とをざかりまだきにあきの風あれてちぐさのむしのかれ〲にたれにすがらんみちしばのつゆの此身のをきどころかたさまならでよすがなしむまれむまる丶世をかけてかはりたまふなかはらじとむすぶちかひのしたひがみあまつかざしのはなよりもわけてめかれずながめしにしづこ丶ろなくちらさんはこれぞこすひのかすならぬとはいひながらとのすがたけふぞさだまることぶきをおもへば〲めでたやとしまだにさし丶くしをとりかみかきわけてさかやきをかまくらふうのいまやうにびんうすからずあつからずゑぼししたよくはからはぬわらはにまかせたまへやとくしげのまゆだれてあはせしいともしづか

にすきおろす

(十三)五人そが

たがひちがひのおてまくらすきまのかぜもらさじとしめてねさまもをきさまもむかしの人ものちのよもいまのわらはにかはらめやこれを見かれをきくときはこひとぼたひをひきわけてみちはふたすぢふみもせぬとのにこゝろはかざぐるませんりまんりもものかはととらがいさめばせうしやうもよるのあめつゆなんのそのしとゝにぬれはおとらじとしのゝめまだきうばたまのやみにかゝぐるともしびやみのりのはなをいゑつとにをりこそくだれみねのてらすそのゝあさぢわけまよふさゆりひめゆりかのこゆりをざゝひめざゝぼけのはなぼけ〳〵〳〵としたこそよけれうたてよめごのなわたすきすげのをがさをかたふけてさなへとるてのしよさらしくうしろじさりにはりあげてわがたにかゝれのきみがたの水みづのながれはしらまゆみやはぎのはしのはたしなさおてをひきよふてとろ〳〵〳〵とろ〳〵たら〳〵をりにやすんでかはらおもてをみわたせばながれかれ木がすてゝあるさだめて〳〵きんきめこまかにござるほとにから木でこざるべいよのさんやれそまやま人もてゝみやれみるになづまぬ身はよしだよしだとをればあれ〳〵かぶろがまねくなぜにかぶろはでゝまたぬまたぬもどをりこゝにとまるとしらすかやしほみざかはしもとのはまなのはしにうちよするなみのあらゐのとをひがたこずゑのかぜはざゝんざとはまゝつよりまへ坂三りすなのかず〳〵われやおもへどもいのちなりけりさよのなかやまこれかとよすてぬうきみのならひとてさすがねがひもおをゐ川かはるふちせぞたのみあるやがてかたきをうつのやときくにこゝろもきよみでらみをのいりうみたごのうらうちいでみればまじろなるゆきのふじのねうつくしくやまのこびたいまゆずみのきわをくそらやくろ〳〵とかたはれ月のさしぐしのよそほひふかきたしなみはさてもみごとのおつゝらむまよこゝはこねの山さかなればはつねがはらのごさまつにしばしとゝまれほとゝぎすたれもこいそのしゆくつゝきしぎたつさわゝなのみしていゑたちつゝくかど〳〵にいでいる人も大いそのしゆくにぞつかせたまひける

(十四)きてう

見つけはこざきふねのうちねられぬまゝにつく〴〵とやどのしゆびのみあんずればわがくろかみもしらがとなるきてうにはだまさるゝ二まい五両のこわきさしどんす三ぼんもみ五ひきわたのだいまであいそえてしもつきなかばにをくれどもつゐにそれとて見せもせずいまはふたりがなかにある

（十五）かうきでん

よはにまぎれていでたまふあらいたはしやしゆしやうは十せんていゐをふりすてゝめしもならはぬさうあいに御あしをいたましめよしかぬこれなり御ともにてこひぢにまよふうたかたのかへらぬ水のあはとのみきえにし人のおもかげをゆめにだにも見えばこそなれしむかしのたまくらにかたりつくせしむつごとのみゝにとゞまりなつかしやわすれもやらぬこひぐさのつゆもおもひのみだれつゝわがみはもとの身なれどもこひしき人のなきゆへに月やあらぬとかこちしもげにことはりとおぼしめし御心ぼそきをりからにやもめがらすのうかれこゑわれをとふかとおもはれてよすがらともすほたるびのきえぬおもひのあればさてむしさへむねをやこがすらんげにありはらのなりひらがきちうのながめにとぶほたるくものうへまでいぬべくはあきかぜふくとなげきしもなみだくらべてあはれなりいとゞさへ〴〵身をしるあめのはるゝまもなき中ぞらにをだのかはづのなきそひてみちもさだかに見へはこそなみだぞみちのしるべにてやう〴〵ゆけばよこぐもはるゝしのゝめのいまはちりゆくはなのやまみてらにつかせ給ひける

（十六）たんぜんせいげん

かくてせいげんはこひのかたきのよしなかをなきものとなしてのちさくらのまへをうばひとりわれぞくたいになりかはり世をらく〴〵とをくらんことたゞとるやまのさるのきもさて〴〵くわほうはねてまでといまこそおもひしられたりいざやいのりてそのしるしあらはし見せんとそれよりもやがてようゐをしゆそのだんと申はせつしやうのはうとてきたにむかつておこなわるれいしやくじやうをふりならしこびんから大あせながらかいてじゆすもきれよやくだけよともみたて〴〵いのらるゝされどもしるしのあらざればふどうにむかつておほごゑあげさりとては〴〵きゝわけもおりないこんだによほいよるとなく

ひるとなくむじきすはらでいのれどもすつきりばつたりげんもなしこりやまたあんたることだによほい〱ほよほい〱ほひとつのきどくをみせたまへとじゆすさら〱とをしもんでぐもつのやうこそおそろしけれにうもくにはめづらしきぼけやからたちぬるでのはおがらまじりのたばこのほねさてはぐみのをりえだをりくべ〱すさまじやおほうちはにてあふぎつけしやうこうにはこれやこのがんのほね〱こにこつきあかにはうしのよだれをもりとうみやうにはいもりのあぶらそのほかあつめしむしのかずいちにげじとのけむしどのにひげむかでとのやぶのうちのくちなはどのとかけどのほり〱〱〱ほりばたのいもりのかずなはでからげて引かたげくわゑんのなかへなげくべ〱どらみやうはちをうちたゝいてだいをんあげせめつけ〱いのらるゝまに〱まゝにまゝにならぬはこのふどうこれにもせういんなきならばあしゆらかるらきんならわうまごらわうわれらがぢぬしのけんろうぢじんに申つけふうらいふどうとなすべしとゝつてはなげまたは引よせいだきあげくるり〱〱〱くるり〱とひんまわしひらにたのむにおふどうよいやでもをうでもをうでもいやでもたのむによよや〱ほんにまことにきよくもなや〱これでもしるしのあらざればせいげんいまはあきれはてばうすみやうりもこれまでとおふどういだいてそれよりもうろ〱なみだでたつたりけるかのせいげんがあり様あはれともなか〱申はかりはなかりけり

（十七）くはんくはついつきう

もとより此身はほんらいのいちもつもなきかりの世にとさうあんぎやとおもひたちはじめてこゝにきのちなるかうやさんにぞ入給ふだうとうもんゑんこじこせきおがみめぐりてそのゝちはなにもいたしくびのほねあらおもしろやこひだるやげにほんらいのくうのじはくはぬさきよりけんしやうのさとりのゑなこちら〱とめぼしのはなもちりかゝるとあるくち木にこしをかけつかれをはらさせたまひけるかゝりけるところにとたらくさんのおほやまぶしむしやうほうひげぶにんさうこくどのべにをぬりちらしでじまばんかうのけかづらたふのこゝろものしりからげどうがねまきのおほなべづるかんがうてつきの八か

くばうだじやくむはうにつきちらしいつきうおしやうにたちふさがりづかうひしぎのゐせこうじやうこれこばうしゆぎやうはほうしのわざときゝしゆぎやうじやうじゆいたいてのりとくはいかにとたづねけるいつきうはきこしめしそれさんがいのだいとうしやかによらいのいにしへはだんどくせんにこもりゐてあらゝせんにんをしと頼み三十ぢやうどうとげたまふぐそうなどもしゆぎやうをとげさてじやうぶつのみちとうるをの〳〵のごとくなるやまぶしたちはいつがみね入五月六月ぼんのころこしにほらがいひつゝけてこんがうづえをつきつれてちからにまかせてをせさささけ〳〵六はいのんだらとうふにこんにやくにしめにはつたけこつこもとにえいさあえんや〳〵ゑんのぎやうじやのあとをつぎおをみねかづらきしやかゞだけかすみをくゞりきりをわけくもにをきふすときんもはづれてころり〳〵とこけのぎやうびつこ引々きんぶせんきのねにとりつきホゝたぐりつきよぢらすどつこいよぢらすこしをよぢらすひのきがさいちののぞきうらかべだにくらがりたうげさぐりさかさぐりさぐつてうじやうへのぼりつめたるぎやうじやなりかた〳〵のごとくなるしばちこぞうのひるねぶつあくびがちなるはるの日のねぶりさましの、よまやいとものゝかずにはあらねどもいでぎやうくらべいたすべし一きうはきこしめしいのりてぎやうのそのしるし見せたまへとありければいらたかじゆずをしもんでひといのりこそいのつたれえい〳〵〳〵かみのおまへにやれいどほればみづはわかいでかねがわく〳〵ぞつくり〳〵ぞく〳〵とかんふらんはるたんにてんによながさきさくらんだばちりこていみんよこれにてしるしのなきならばなゝのゆふべのほしまつりかしま見しますはあつたたかきおやまはなたごさんだいごんげんくらまやまにはそうじやうばうさぬきにこんぴらいづなの三郎やま〳〵のたいてんぐたゞいまふしぎを見せたまへとせめつけ〳〵いのらるゝあらふしきやはれたるそらよりおほゆきふつてやま〳〵たに〳〵をしならべてみなしろたへとなりにけりやまぶしいきほいかゝつていかに〳〵と申けるいつきうは御らんじてこればかりのこゆきをしつてうともしつてうべいそんびくともそびくべいしりからてこさをさつちいれしやつ

くりびきにひいてくりよぶれや〳〵となあふぎをさつとひらきつゝはらり〳〵とあふぎたまへばさしものおほゆきあさひにしもとぞきえにけるやまぶしおほきにいかりをなしこゝがくさりのいつはいいれつゞきのきどくを見せたまへとざんげ〳〵ろこざいしやうをしめにはつだいこごどうしうなぜこゞどうじたゝきだされるななをもきどくを見せたまへとあかでのこつほうすりむき〳〵へめにへてぞへめたりけるかゝるところにふどうのそんたいはなびのしかけであらはれたまふそれ見たかヲ、えいとないつきうほつすふりあけてなんぢふどうけなんぢふどけかあつかかゝらかのかつとなへたまへばぶしゆびじまいでふだうはめぐろへおかへりさばへさてやまうりかな〳〵けゝらけいわんててんがういまどきそのてをくんべいかさあしやつともゆつてみろうやまぶしほつきとがをつてたゞひらぐもと見えければいつきうすこし人からでこはげんきんなる御いんぎんかやうに申もせつそほんいにあらねどもこん日のしやかのみでしとおぼしめしみす〳〵それがしをぶつぼさつのけしんとてもろ〳〵のうその八百つきちらし此のちかならずさたなしとをの〳〵さうへぞわかれける

（十八）ちやの湯

とこのけしきを見たまへばをぐらのしきしをかけられたりたなのかざりはなに〳〵ぞいまやうていのかうだうぐ心をつけてかざらるゝだいすのかゝりしほらしくかまはなにはやあしやがまたぎるそのねはりん〳〵とときならぬまつむしとのみうたがはれらんじやのにほひくんじつゝこゝろことばもをよばれずその時からさきたちいづるさればちやのゆのたのしみはせいけんごだうのもてあそびかゝるなさけの色のみちわきて心のひかるゝはきみがなによるしがのてにいくよぬれ〳〵きぬ〳〵のことのはぐさのつゆしぼりさてまたちやいれはせとのふりそでめいえんさま〴〵おほけれど七しゆのえんとぞつたへしはもりいはゐうもじかはしたをくの山ふもとのあたひびはやひくひきてからなるうぢのちやのきみがあふせのむつごとをいつのころかやはつむかしけふの日もはやくれはてゝあすまたたれにゆづりはのうつりかはるやのちむかしふるさとしたふかりがねのいつ

かこしぢにかへるらんいのしろおをたかたかのつめとしはふれどもわかもりのすがたはなをもそゝりのちやほかはべつぎもあらしやまもみぢのにしきいろ〳〵にえんがすぐるゝごくむじやうきみが手によるはつたかのみよりのはかせにさそはれてみだれそめにしあだし身をたれにか見せんきみならでいろをもかをもしる人とよみしこゝろはおもしろや

（十九）はなうり

おもしろのしづがしはざやさんろならねどふくふえもねよげに見ゆるわかくさのはなむらさきのふぢばかましをんりんどうわれもかうおもひのいろはいはつゝじいはでこかれてやまぶきやしのびくる〳〵かざぐるますがたたえなるひめゆりにいつかそいねのとこなつやなもゆかしきはじじんさうかほよばなこそひとしほにいろもにほひもふかみぐさをくしらつゆのたまつばき身をせばめつゝかげやどす月見くさこそやさしけれげにやまことにありあけのつれなくみえしわかれよりふたりぬる夜にかなしきはをのがつばさはかはせどもおもひしらずやこゝろせでまだきなくねのけいとうげつばなまじりのすみれくさきみかすさみのてまりのはなひふみよとんとをちてもなはたゝじふかき心のそこいをば人にもらすなみづあふひいけにおもたかまこもぐさわれこそ野にさくあだはなよをらばとくをれちらぬまにあやしのしづのみなからもまれのみゆきにいざさらばみきをすゝめてとり〳〵にゑいりよをすゝしめたてまつる

（二十）くさずり引

わだの一もん九十三ぎを引ぐして長じやのもとにうちよりてこくどのうをのいちりぐいあとはらやまずのおほゆさんよひ三日のさかもりはことにせうじておもしろやかゝるところにしやうじのあなたにかなものゝをとがからりとしたびやくらいでんのくもはづれむけんならくのそこぬけてなべのいかけはおりないかとあひのしやうじをさらりとあくればひんぼあふれのあら五郎おをはらまきをきながし五しやく八すんのおをだちかたをかふうにさゞじこなしなんにもくはねとたかやうじそらつふいたるありさまはさてもてあつかふたるきやくらいなりあさいなが中やうあにすけなりもましませばちつとざしきへおとをりあれつゐでにちからをひきみんとつか〳〵とたち

よりくさずり三まいひつゝかんでこりやどうでんすのかけものよときむねにんがりともせずいやだびやくえでさう御めんあれあさいなきいてゆつてもきやつはじやくはいなりしたてにかゝつてそゝりをくれこうたぶしでやつてくりよなんぼかくしてもそがの五郎はしれるこゝろこんみじかふてわきざしかたなはながふていろはまつからかいでこはだかにどつこいどこいどこのいなかのおわかしゆぞひらにいちざをたのむによ此うへはぜひにざしきへいださんとえいやつと引たちつともさらにはたらかずにつほんぶさうのあさいながにわうにまさるちからこぶさうのうでくびふしたつてむねにおほるいかりげはごばんのおもてにあかゞねのはりすりならべたるごとくなりときむねにつことうちわらひうさみくずみかはづにてたいぢからとよばれたるかはづおやぢがふところ子はこねべとうのぼとりちごあげたるてほんが百六つこうたひあはして十六ばんされども御ばうの御をんにきずすつへりかへしてなんにもなしあとにのこるものとてはみづ一こくにせんにんりきこつぶにくだいてさいふにいれふるしたおびのものかげにがんぢがらみにからげつけそつとたしなみ候ぞや三まいのくさずりのはやをがきれてみづのむかちやのみつまいれみづまいれありまどのよりもらつたるらうそくばこをふんぬいでさんりぜつこつすりむくかふたつにひとつはじやうのものとびつくともせずいたりけりあさいなその時身ぶりをかへぎよとうがとうのふてぐるひちからがみをがんぢとかめばどうのすぢがひたひにあがりにんみやくすちがこぶしにさがりあれたるほねはいほのごとしきうてうのふぢかづらまつをからんでこがらしにもまれてたてるごとくなりあさいなさうのいかりをなせば五郎はとらのきをはつてたがいにえいやとひくちからに三まいのくさずりきれてさうへばつとぞのいたりけるいやえいぢよき／＼さるによつていまの世にれいぶつれいしやのゑんまにかけあふぎうちはのばさらゑにもうでをしくびびきくさずりひきうでのほねくびのほねどれこれこれ／＼かいてを見しやれひりこくたいしばかたわうおにをちやのこのきんひらだんべいほゝをつかないゆうりきやといまにのこりしちからこぶ

(廿一)道成寺

つくりしつみもきえぬべしかねのくやうにまいらん
みづからと申はそもとまりさだめぬしのびづまきの
ぢのをくにすみなれし人のこゝろをなぐさむるしら
びやうしのつゞみぐさなるたき川のながれの身たう
じやうじのみてらにはかねのくやうのあるよしをみ
な人ごとにゆふまぐれ月はほどなくいりしほのさし
てはわが身のつみとがもむくはんことのあらしふく
みむろのやまのもみぢばのいろにそめにしあだぎぬ
のうすからざりしさんしうのつみをそろしくことに
またざいごうふかき川たけのひとよばかりのたまく
らに人のつみをも身にうけてながきやみぢやくろか
みのみだれ心やむすぼれてけふりみちくる小まつば
らいそぐ心かまだくれぬひたかのてらにぞつき給ふ

松の葉第四巻終

松の葉第五巻

附作者付

古今百首なげぶし

(一)さるおんかた　七首

まつのはごしのいそべのつきは
　ちとせふるともかはるまい
さしもしらじなかくとはきみに
　つゝむおもひもゝゆれども
おもひみだれてあしやのさとに
　あまのたくひかとぶほたる
たつるにしきぎかひなくくちて
　そはでとしふるみぞつらき
われはあやめのねにこそなかめ
　ひくなたもとのつゆけきに
あまのたくなるもしほのけふり
　ひとのたちゐのしほとなる
あられふるらしとやまのかつら
　いろにみゆるをいかにせん

○そう　十首

よそになしてもとへかしひとの
　つきはたれゆへそでにすむ
つきをみばやとちぎりしひとも
　こよひそでをやしぼるらん
とはゞとへかしこのゆふくれを
　あすのいのちもしらぬまに
ふけてきぬたのをとよりきけば
　月におちくるわかなみだ
せめてやどれよこすもるつきも
　ひごろもとめしうきなみだ
わたりくらへてよのなかみれば
　あはのなるとになみもなし
こゝろ〳〵のよのなかなれや
　はなのうてなのつゆのいろ
もみぢこがるゝいろとはきけど
　すへのをちばをたれかしる
まつのしぐれにゆめうちさめて
　よそのあはれがおもはるゝ
なみだくらべんやまほとゝぎす
　われもうきよのつらければ

十四首

○けいせい

くるははなれてつみなき月を
いつかみやこのそらに見ん

うしやこのみはおやはらからの
ためにしづみしこひのふち

なみだならではあはれをとはじ
ふかきおもひのそてのいろ

よひのくせつのしらけたあとを
ないてとをるやほとゝぎす

きみはつらくとうらみはせまじ
こゝろからなるみのうさを

きえぬこゝろのなかばはくもに
かよふあらしをよすがにて

もはやいのちもたえなばたへよ
すめばうらめしおなじよに

ひとめしのべばそのなもいはで
おもふあたりのことぞきく

ほどはくも井にへたつるとても
こゝろかはるないつまでも

のこるかたみのかゞみにうつる
つきのさゝそひしおもかげわ

うらみながらもまたうちむかふ
月わゆかりかうき人の

いつのゆふべにそでふりわかれ
もはやあさぢもせにあまる

かよふこゝろはくも井のよその
なかにすぎゆくつきひかな

ひとつまくらにしづみしなかも
うきはわかれのそでのつゆ

貳十六首

○おとこ

はなのあけぼのゆふべのあきも
くらべくるしきわがこゝろ

いかにへだてしおぼつかなさぞ
しめてねるよもあかぬみの

かはづなくさへうらみのあるに
ましてねさめのほとゝぎす

そでのみなとのよるせをしらは
これしかべきなみたがは

あはでぬるよはそでひちまさる
ゆめはまくらのいとまなや

ゆくもかへるもしのぶのみだれ
かぎりしられぬわがおもひ
かよひなれにししゆじやくののべの
つゆはものかはわがなみだ
うちやうたれしまくらのふちも
いまはいくせのあすかがは
まれにあふよはひとめをしのび
かたりつくさんわがおもひ
あめのふるよはひとしほゆかし
いつにをろかはなけれども
いくよふるとももらさぬみつの
したにかよふやいはねぶみ
わかれぬるよのつらさをとはゞ
のちのあしたのふみばかり
ゆふへ／＼のそのうつりがは
きみがたもとのゆかりとも
なませなまなかなれずはかほど
ものはおもはじさりとては
かへるのみちのあさぢにやどる
つゆにそへたるわがなみだ

きみにあふよはにふのこやも
たまのうてなにまさるもの
おもひかさねてくるしやいまは
あはでいのちもたえなまし
つきのあけぼのこのむらさめに
いまはわすれぬほとゝぎす
つゆのたまのをかぎりはありと
うつるおもかげかはるなよ
のべにかはづのなくこゑきけば
ありしそのよがおもはるゝ
かくとしらさできえゆくならば
つらきむくひのありやせん
いそのまつがねなみうちかけて
たつなわりなきこひのふち
いまはみだれてうきやまよりの
ながきつらさぞおもはるゝ
さてもねられぬあかつきうしや
すぎしこよひのしかもいま
いろにしづみてきえゆくみなら
ひきはかへさじすてをぶね

いくえかさなるやまかはなりと
　こゝろへだつなたびころも

○おんな　十九首

あはぬつらさをこがれしよりは
　あふてわかるゝうきなみだ
ゐじのたくひはよるこそもゆれ
　むねにたくひのたへやらぬ
こゝろぼそくもともしびふけて
　まつはいのちのきえもせず
いまはたよりのふみさへたえつ
　なにいのちはかけてまし
いとゞさびしきねざめのとこに
　なみだなそへそほとゝぎす
いくよねざめのなみだのふちせ
　なみのうね〳〵うきまくら
のこるうつりがまくらにそひて
　いとゞわすれぬねやのうち
われがおもひはあのうきくもよ
　いづこゆくゐぞさだめなき
ひとめしのぶのくさはにむすぶ
　つゆのたまむしねにぞなく
ものやおもふととふひとあらば
　せめてかたりてなぐさまん
みをばなにせんちかひし人の
　いのちのみこそおしまるれ
たえてしなくばなか〳〵ひとも
　みをもうらみじわがこゝろ
しのぶこゝろをいろにはださじ
　ものやおもふととふばかり
おもひあまりてまみえしゆめよ
　さめてなみたのほかぞなき
まだきわがなのたちたるとても
　おもひそめしをひとすぢに
こゐにあらはれなくむしよりも
　いはでほたるのみをこがす
いくよしほれてきぶねのかはも
　そでのなみたにたまぞちる
ひとのみちひのこゝろもしらで
　そこゐなげなるわがなみだ
あだなちぎりをむすびていまは

わがみひとつのうきおもひ

○ほうし　貳十四首

ゆきのとやまのあけぼのつらや
かやがのきばのとりのこゑ
いまはみにしるあいべつりくの
うさをおもへはなか／＼に
せめてねやもるつきかげなりと
しばしまくらにとまれかし
あはでかへればこゝろのやみよ
つきはさゆれどみちみえず
はなにをくつゆをざゝのあられ
こぼれやすきはわがなみだ
おもひつゞけてなみだのしぐれ
さだめなきこそうきよなれ
つきはひとめのせきぢもなしや
にしにながるゝよはのそら
くものはたてのそなたをこひて
すめばすむみぞあぢきなき
なには入江の身はすてをぶね
きしにはなれてたよりなや

こぬよあまたのやまほとゝぎす
ふるはむらさきわがなみだ
うきみうきくさしづみもはてぬ
そこのこゝろをつきやしな
おもひあまりておりたくしばの
けふりさびしきゆふまぐれ
これもさすかにあはれをそふる
をだのかはづのくれのこゑ
はるにかきねのゆきにはあらで
きえぬかぎりのしたおもひ
なひてねがほのなかばはくもに
みえてこぼるゝそでの月
しのぶたもとのいろ見えそめて
こゝろにもにぬわがなみだ
すぐる月日はわれのみしりて
かひもなき身をうちなげく
かぎりある身にさりとは人の
とほきゆくゑをおもへとや
あまのすてふねよるべもしらで
ひとりなみだにふししつむ

さらばおもかげはなれもやらで
ひとのつらさにますかゞみ
あふさきるさにみだれてけさも
おばなかくれにたちとまる
うぢのはしもりあはれと人は
いはでとしふるそでのいろ
あふぎならでも身はふるさるゝ
あきのなかめよつゆばかり
あふもわかれもみないとによる
なみだつらぬけかた身にも

古今百首なげぶし終

歌音聲幷三味線彈方心得

一歌の事音聲ゆたかにして始終たるまぬやうにうたふことだい一なり當風といひて世上に彈うたふをきけば三味線を君として歌を臣とおぼへしやうにきこえあしきとかやうたをもつはらとしならしものはまことのあいしらい本手組のうたひ方と長歌端歌などの彈うたひかくべつなりまづ三味線の調子をたいせつにあはせてのうへうたひはしむる事肝要にして序破急のくらゐうきしづみをつかんけやけからぬやうに心をつくべしまた連彈のとき歌ひとつのうち二上り三下りなどの調子かはる事あるは一しほ相手の調子取やうあひかたにならひある事也 口傳

一なげぶしの事元來江戸らうさいのふしをなをしてうたひきたるとかや音聲しめやかに調子はひくきかたよしその分際に應せざる調子にては意味うたひかたしいにしへ大坂屋河內風といひてうたひしはかみしもの句さらりと三味線あいしらひもみしかくうたのとまりやんとうたひしなり今やうはふしのたけゆるやかにならしもの相の手撥かずもす

くなく歌のとまりはふしにていひすてゆう〳〵ときこえ侍る歌はつれてうたふもよし三味線は一ちやうにかぎるべきか近比歌の下の句三字めのふしをさげてうたふ事だてにてよろし此歌の曲節急ならず序破にとゞまりてしづかなるかたなりよりてかみの句つぎの七もじのはじめ二字またはかへしのはじめ二字をよせてうたふべし唱歌にはえありておもしろき事也中比より二上りのてうしをもちひて此ふしをうたへる事も有これには本調子ふとつれびきよしふしにはなはだかうをつあり此のゆへに口傳おほくいひのへがたしある人なげぶしはおんなのもてあそびものなりといひたるもゆうびなるさまをよくわきまへたればさる事ぞかし

跋

をふし藝にあそべる人をの〳〵このむ所ありをくれたるすぢをかくし學びえたるかたかどをのみさかしがりいふめるなかにこれが音の歌に和しあはれもやるかたなきにぞなにごともこと盡ぬべきを幼よりならはざりし恨も今更なりかのらんごやなどの遠きにこそいたらざらめなげぶしのもとするゑかいなでゝ心ゆくばかりにはなんどいへるを此書をあめる人打笑ひてそれこそ難きわざなれ朝鍛暮錬のうへならで一曲わ奏しがたしなげぶしは手のかぎりすくなきやうなれど古今の興廢なくことにたやすからずとさらばわかごと學ぶべきにあらずそも〳〵りうきうひんだの露のはじめよりなげぶしのみさはなるは松樹になずらへそのほか松葉の風聲ちり盡さゞることとみつべし花落雲閑なるゆふべ雨よきほとの窓のうちあけぼのけさやかなる雪をあつめて少年常に習はざらめや

元禄十六癸未年六月吉日
京寺町通二條上ル町
井筒屋　庄兵衛
萬木治兵衛　板行

松の葉第五巻終

若みどり序

去ぬる比秀松軒の主、此糸筋の術を得られし餘り、道のすきものを招き本手端手長歌等の證歌を集めて五緘とし、松の葉と題して世に慰み草のたねをまかれしより、此林に遊ぶ人〳〵ことの葉の露の玉を拾ふ翫ひ草となれり、されともかの婳が所縁殘りし歌舞妓臺にかなてぬる、種〴〵のうたひものを始拍子取おかしきたぐひは、わざともらしぬるを、扇德といふ男、調子合せてかき集め、落葉集と名づけて、櫻にいのちなからす、しかれば此兩部にこそ、品は盡ぬらんとおもふ人もあるべかッめれ、さはあれど濱の眞砂の數〳〵もれたる名曲端手新曲、かつ又、きのふのむかし、けふの今やう、時めきわたる長歌などいや生しげり、根にひかれ、糸による、名歌、花の曙月の夕〳〵に積りぬ、靜雲閣のあるじその闕たるを補ひ廢れたるを興さしめんとて、野川撿校の作に、みづからのをもまじえて又いつ巻となし、若綠と名つく、柾のかつらながく、引つたゑて餘音嫋〳〵と絕ざらましとなり、功なれりといつゝべし、余不思議にかの松の葉、落葉より、此若綠の三大部の席につらなりあひぬれば、筆を添る事になれりけり

寶永三の戌の卯の花月の中の日

愚北條持入道大狂園醉序

若みどり巻一

長歌目録

長歌

(一)ことふき

はつ春のそらものどかにいつる日のしたつみくにのかと／＼によそほひしるくたちならぶまつとたけとのいろいつまでもわかのうらはのかたをなみあしべをわたるひなつるのちとせのゑにしをむすふなるにひさかつきのきよくすひきみがめくみのうるをひふかくさわけいりしほうらいのみねのかすみをくみそめてつきせぬみよのかみかせやいせゑびほだはらたちはなのかほりゆたかに民もなをほながに榮へすみよしのなみもしづかになるゑだのかや丶かちくりかず／＼のいつのよ丶りかことふきそめてはるごとにたえずめてたきとそのさけむめのはながきやゑかさねきつれてござれいつもながらのきよみづまふてぎをんやさかのはなのいろこれやよしの丶はなよりももみぢよりもこひしきひとはみたいものとがをばわれにをふせてはなのころはござれのいせさんぐ／＼そくさいゑんめいちやうきうとさかへさかふるちよのはる

(二)新もしほくさ

はる草のやかてももゆるかすがのにあさるきゞすもわかくさのいろかにうつりこひこゝもその袖のかのみち／＼てきみがそのなのにぎわしきさくらづくしやむめづくしつ丶しつくしにかうつくしふくはる風もこ丶ろしてめてたきはなのゑんにいまをふてうまつのわかみどりいくはることにいわゐきてことふきうとふはるこまのよわひひさしきさゞれいしこけむすのべのすゑまでもげにあをやかになつくさのしげみにもる丶こひ草やうきなながる丶かわたけのさ丶のおざ丶ひとよなりともうれしききみかたまくらをまつよひふくるかねのこゑみだれみだる丶くだかけやはや志の丶めのわかれしにまだそでぬらすあまのかわあき草におくつゆのたまつらぬきとめぬたなはたのわかれのなみだいくとしかつもり／＼てこひつくしあだしまくらのたはむれもけふはかわりてそれとなくかりのにのこるふゆくさのさびしきま丶にてをおりてあひみしことをかぞへうたかきあつめたるもしほくさよてふうきねにさよころももしもたよりのゆめもやとまくらたのしむねやのうち

(三)さゞれいし

さゞれいしいはほとなりてふた葉のまつもおいそいでちよのはじめはちよのはじめはおもしろやきみがよのひさしきくにやよつのうみきしうつなみもしづかにてちとせをよぼふをひなつるかすくなるしたにすをくひてめくみもふかきたま川のながれのすへのわれらさへこゝろうきゝのかめあまたよろずよまてもいくちよをげにをさまれるしるしとてきみにひかるゝまつかえにたちよるかげはいつもたゞおひてもくちぬときわきのたれかいひけんみつくきのひさしきみよゝりいわゐそめたかきやにのほりて見れはけぶりたつたみのかまどもにきはひてならべるかどのめでたさよ

(四)ころもつくし

きみが代はあまのはころもまれにきてなすともつきぬはなころもその色ころもこひころもかひまみしかのかすがのゝ若むらさきのすりころもゆかりのするゑをこひつゝおもひいるさのやまもみちかほる風もかろしやなつころもあさのさころもうちはへてそてもすゞしくゆく水のかの八はしのかきつばたそのくのかみにをきむすふむかしおとこのからころもきつゝなれにし七夕のいほはたころもかさねてもあきのかわかせなをさむしころもかせやまこよひはこゝにたびねのころもうすくとも一よあかしてみよしのゝ山もさむみてころもうつつまとのあめもしん／＼となをしもふゆの夜さむきころもやうすきかたそぎのゆきあいのまにおくしもをうちはらいてもはらひてもおもきかうへのさよころもかさねてたらぬ契りかな

(五)はつはる

はるたつといふばかりにやみよしのゝやまもかすみもさと／＼のけしきもいづれたゝならんけさのあさ日にこゐにほふはつうぐひすのやどるてふむめのはなかさたれにかもきせてかへさんあめもなくましてあふよのつまとうちおどろかすべききかせもなくはなのさかりは千夜萬よまん／＼よもよろつ代までもたへずかわらすきみがよのはなのいろこそめでたけれ

(六)一字のだい

そも／＼さだいへのいちじのだいにはるはまつか

すみうぐひすむめやなきわらびさくらにもゝやなしきゞすひばりにかわづなくすみれやまぶきつゝじふぢなつにもなれはあふひぐさほとゝぎすさみだれくひなのとりにたちばなほたるやせみにあふぎはちすいつみやあきはまたおぎはぎつゆのすゝきらんしかかりむしにきりの月うつゝやかしきにさくやつたもみぢにふゆはまたしぐれのしものうすこほりあられみぞれにゆきかもたかふすましいとぞかゝれたる

(七)きよ水まふで

やゝすみなれししづか屋をなみたとともにたちいづるこゝろのうちこそあはれなれまづしよしやでらをふしおがみゆくにひめぢをはやすぎてこひしきひとにあふたのもりよえあふたのもりになきあかすからすさぎとはあれとかやなみのなるをのまつかぜにきんのねをやしらむらんひやうごにはやくつきじまやふねのとまりのみなと川あきのちくさのはなぐまやいくだこや野になくむしのこゑもさびしくうつきぬたまきかへしてはくりかへしこのぬのひきのたきみればけしきまことにおもしろや山よりおつるしらなみはいとをみだせるごとくにてきしにたゞよふしんすひはあいをそむかとうたがわれなにはのむめもはるならでにはひもさらににはひもあらずしてみなみにはすみよしてんわうじこひしき人にあふさかやはしもとにやどをもとめづかこひゆへいのちをうしなひし二人のひとのはかどころおとこやますむ月のいわし水にやゞどるらんすへは山さきたからでらあきのやまのもみぢのいろいなはをわたるかせのをとものすさまじきふせいなりとばにこひづかはやすぎてうきよはうしのおぐるまのめぐり〳〵て今こゝにきよみつでらにぞつき給ふ

(八)ありしよ

はるすぎてなつきにけらししろたへのころもにまかふうのはなやはつほとゝぎすこゑにほやかにおとづれてのこるやそてにありし夜のゆかりをしめてつゝみをくよるのほたるのひかりをよそにたゝもらさじと人めをふかくしのぶこひものおもふかととふひとさへもなみだのかわのきしにおふるうきこひぐさのはなになるともあふこひならばいわねふみかさなるやまにまこふともなにかいとはんきみがためのにい

でゝかるあやめぐさあやめゝわかでまつこひの山ぢにかゝるうきくもやふるむらさめのおとにのみこいすてうなはたつた川みづせきとめてこひのふちかわらじとこそむすびしにせきもるよはのゆめとをくへだつるひとの心よりかわるならひの夜こそつらけれ

(九)あさぎ

かてうにもれてのこる月うわのそらたきすがりたるそでと〳〵はかさゝぎにかよはすなかのみだれがみとるてあやなにしめかへししめかけ〳〵いわこすなみだあこがれいづるたまかときへてうきなたつともいのちにかへてなんのをしかろぞつゆにぬれたる一ゑたはなよもみちよいろにいでゝもうらみしとわぬつらさぞやるかたもなきしのびぐるまのかよひしなれて人めよくらんこひぢのせきはおさまれるをもつらしとよみししづがふさきぬあさからざりし思ひのかずのつもりしふちに身をすてゝこそよるせもあれとうつりがそひてたちわかれゆくいまのくるしさわれかのけしきまたの日までをいのりてまたんまつとしきかはかへりくるかに

(十)うきくさ

此ゆふべふりくるあめはほしあひのそらめせしまにうらみてのみやうしのくるゝ河瀬をめぐるすへはいろひとむれつゝあそぶかせのかよひもにしひかしきしのうきくさたれまつなくにつきぬことばのうき世うたてのまひあしもなるかみのとゞろ〳〵とくも非にちかきみねのまつさへたもとにうつる月のみや川こひ風そよとしぐれつゞきののきばのともしいろのなよせをとふまでもなくしるもしらぬもながめにあかずちとりすかれてあけわたるそらにたれこめかこをかゝげてそみるゆきも五條のさかなか〳〵にふりみふらずみしろたへのたきも三すじのながれはたへずしなざやむまひ三ねんざかをゆくもかへるもあふ夜とわかれうちもねならんせきの戸もりのやさし八坂のなりよしむすめふりよし小ぢよろはなにはそめてまくずのながめやなぎかえでにおほろとくだるたけのしたうらふすかとすればあくる・聲山はとゝぎすあめのなごりのうのはなにいる月はもちろんなわてのほたる思ひみだれてかよはゞよしやからのやまとのはしをくもぢにかけておもひを

(十一 やまかづら

まゝにならぬはたが身にもありとのそれをたよりにうき身をおくるべこのとし月をつゆかなみだかくるわのあめのそではかわかす身はおきのいしひとをまつをのうらみぞまさるありしことの葉みないつわりのいつかまことのいろしあらば志んぞうれしさなにしかまさるあたしこの身と人こそ思へ人に心はかわらぬものをよしやよしなきことの葉のすへをそれとたのむ心につらさそまさるいまはなか〳〵おもはじものと思ひかへせどまたこひしさにみだれみだるゝまくらのなみだ月にそむけてゆくほとゝぎすいとゞこがるゝひとはともなれはせめてゆめにとかとりのきぬのよするまもなくこゑ〳〵つくるかねにきえゆくそらともなりて野べのちくさのあをきがうへにおもひおきたるなみだのつゆとあこがれいつるたまかと見ゆる水の志らべのみたれのいとにおなしこゝろかむすぼれやすきとかくたまのをたへなばたへよみねもあらはのやまかづら

(十二)かきね

人しろはなふきあへぬ入日のやまかへすひかげのいとさくらそらに志られぬなのはなのくもなみのうね〳〵ゆくかふてふのそてをそれかとまねくもくるし思ひ亂れてかきねのやなぎきりよくなふしてたゆたふすがたふちのうら葉にやまほとゝぎすまつ日はいなのたつきもしらずゆくへもとめん花たちはなののちのこゝろにむかしをしのぶいなのさゝはらわすらりよものかつゆになみだにつもり〳〵て思ひのいづみわきてなかれのうきなとりがわしづみはてなであらはれわたるせゞのいわなみくだけ〳〵てもの思ふこゝろたそやく井なのむねとゞろかしあともとゞめぬいなづまのかげかよふたもとにはら〳〵〳〵とほしのこぼれに身をしるあめの月につれなくくらぶのやまのまつのひゞきにきぬたのこだままどにをちくるかりかねのおもかげさそへこひしきひとのよそにかよひのみちのべのゆきあとなつかしやすみすていほのにはのおち葉にちくさをとりてともに人めもかれゆくやあらしこからし枕さだめん

(十三)うすけふり

おもひなれにしゆふくれにあゝうつゝなやこひごろもわれかのけしきにたちうかれなみだもよふすはしめおもへふしきにひとにあひなれそめてたゞいつま

でとちぎりしにうつればかはるひとごゝろうはのそらなるかせさへもまつにをとずるならひありもはやとだへの中とはなりてつらさにあまるそのゆかしさをせめてみんとてかたしくそでのうちぬるゆめもはやさめてうらみかず〳〵まどうつあめにまたたきのこるうすけふりふけゆくかねも身にしみ〳〵と月もさゆるや秋のそらアイノテいまは身にしるあいべつりくのうさをおもへはなか〳〵にはのむらはぎうらかれてつゆもちりゆくはつあらしさりとはさびしおりからやはかなきむしのなくこゑにみだれこゝろのいとせめて

（十四）おもひ川

よの中はうつろふいろに身をせめてうらみもたえぬおもひ川ながるゝ水もゆとなるやなをこり須磨のうらなみにたつやこゝろの水けふりくるしみふかきゆくすゑとおもふこゝろをすてくさのいほりのまがきのゆふべのそらにまたしいまはの身なれともすぎしむかしはそのひとゝ二世とむすびしひたちおひかけしこと葉もいつはりのあだになりゆくうすなさけわれよにしらぬ身と成ていまぞさめぬるゆめうつゝまよひのくもゝうちはれてことゝふかぜもたえ〳〵にふきてすゞしきよはのそらひとりふせやの月かげにみわたすのべのくさばなはけにいろ〳〵にさきみだれたえぬ詠はおもしろや

（十五）はなの香

はつ春のはなのみやこのけしきかなせみの小川のかげきよきたへずながるゝ水のあはうたかたびとにことゝはんわけあるさとのふうぞくはきゝつゝゆけばしな〳〵やきやうのかほりのかほるはしんぞむかしも今もおなじ世に名もなつかしきうぐひすのはつねやさしきおりからによしの三芳（みよし）のはなさくにうかるゝこゝろどこ〳〵ぞまづむさしのゝゆうまぐれ月をながめておすふねのなみのよる〳〵たれまつちやまよゝのみさほのこがるらんまたかへりきてしゆしやかみち若むらさきやこむらさき花むらさきのあけばのにうつろひやすき人こゝろみかささしをふ一しぐれはれゆくそらやみちしばに入日のなごりくれな井の野かせもふきてあふ夜のとこにみだれさかづきかず〳〵にまたむつことのうすなまりちとせやちよのゑにしをこめてまつはすみのゑかすみはとやまたつ

たたかをのもみぢによすが辺といふじにひかれては
きゆるいのちはもちろんじやしのぶ夜ごとのそのか
よひぢにうらみろうさいわかれざけまぶのおとこは
一しほゆかしながとてまくらすいつけたばこそでは
たまがは身はうきふねのかゝるおもひをいく世の中
にまよふこゝろは花ぞめ川のいろにいてじとつゝむ
にあまるものや思ふとひとのとふまで

若みどり巻一終

若みどり巻二

長　歌　（つゞき）

（十六）ひなづる

ひなつるかそのゑだ〳〵にすをくひてきみもゆたかにわれもゆたかにすめるみよとてひさかたのひかりのどけきはるの日にしづこゝろなく花のちるらんげにちればこそ〳〵いとゞさくらはめでたけれちらずはまたのはるがすみたれかしのばんうぐひすのたによりいづるこゑさして野のすへやまのおくまでもおなしめぐみにあひたけのよはひちとせまつもなんきみにひかれてよろずよやへん

（十七）月つくし

月やあらぬはるやむかしのはるならぬわが身ひとつにものおもふそでのなみだにてりもせずくもりもやらぬおぼろ夜のつきにはいろのそれとも見えぬむめのひともとたをりてきみにまいらせそろとかくふみ月のうれしかへしをまつよひの月の夜すがらさかづきをひとりたはむれ手にもち月の野べにかほるはらん〳〵かるかやりんだうけをぎはぎけいとうおみなめしおとこやまべにすむ月のひかりめでたやつきのみやこになんよさアかくれないよさアすまあかしさらしなふはのせき屋の月かけにひと夜かりねのゆめうちさますそのあかつきのかねのねは千里もひゞくえ

（十八）もりつくし

ゆく水ににしきつれだつやま川のかぜにはら〳〵たまこぼすあさなゆふなのつゆのもりあまり〳〵てわがそでにたへぬしづくのもりふかくしのぶもりのかひもなくものやおもふとひとのとふまであだにたもとのいろものてひとやとがめぬはづかしのもりのしたへにをくつゆもみなくれなゐのたまとのみえてこすゑにいとしろくともしつれたるもみぢ葉のあたらよひをばふきさますこがらしのもりあきさびていとゞさびしきそのはらやふせやおふるはゝそのもりゆくかりがねのはかぜよりこぼすはつゆのもりはれて思ひもゆふくれもいとおもしろくすむそらにいり日やいづる月かけのひかりめでたきあきの夜や

(十九)はなもり

いろにめでつゝかほりをしのびさかりおしみて遊ふはながきのひまをもとめてゐだおるひとをとがめとがむる身ははなもりのつゆのたもとをうちはらふにもいとまあらしのまたさそひきてむげにちらせる花のえだかほりなりともせめてはにはにのこせはるかぜまたはるにあふはひさしきよのためしおもひわびてもうらみてもとふてあらしのこゝろはあらしいらぬなげきと思へどもいかなるはなのゐんじややらわするゝひまも中〳〵にあるにかひなきすて船のこがれ〳〵てはるふかくしのぶこゝろをそれぞともとはでさくらもいろもかもともにちりしくはなのには

(二十)まつらきぬた

八ゑのしほぢにまつらぶねかせのたよりもあきふけ〳〵てうちもねられぬきぬたの音にちたびくだくるヱイ千たびくだくるそでのつゆありしやまみねのもみぢ葉はら〳〵ほろなみのよる〳〵まつらふねかせのたよりもあきふけ〳〵てうちもぬられぬきぬたのおとにちたびくだくるヱイちたびくたくるそでのつゆあらしやまみねのもみち葉はら〳〵ほろばせうの葉のつゆふりすつるおもひきろやのゐひおもひきろやのこひのみち

(廿一)はなくどき

としのうちよりさくむめのはなのかほりもふりもいとしほらしき野べのかせさゐそよ〳〵そよと心してふくさくらのもとにうしとかきをくそのことのはのあゝなつかしきわかむらさきのはなかきつばたあやめにかゝるゆうかほのつゆのたもとにおちてをはなかすゐにかけやどすつききゝやうかるかやはぎをみなめしいろをあらそふやま〳〵のもみぢみなちりはてゝかれ〳〵のこるふゆのくさ木のものわひしげににわのすいせんゆきやしもにうもれいとゞあわれのますゆふぐれにかねもおとなくゐた〳〵のとりのねをなくなえ

(廿二)かうつくし

ひかけのどかにけんじくわげつのかうくらべはるはなにあふはなのゐんむめうぐひすのくらべむまひとりこかるゝしばふねみすりにくやへだつるあさがすみかほりはすれぬありしまたねのとこのうちはつねゆかしきほとゝぎすしのゝめうすくもありあけにち

よとつきいではおばすてやさらしなあけぼのふじたつたそりやかほりくるそりやうそかほりらんたちはなにらんじやたいあきはしらつゆもみぢしろくちり〳〵〳〵やいちり〳〵ちらりとふりてはさつてもふりつむゆきのあしたのおもしろやふゆのしもよをしな〳〵かゆるきやらのけふりもいのちのきみにいくよとめてもとめあかぬ

（廿三）はつあらし

さらば〳〵とこゑもたへゆくのだのはらおくりかへせばいとゞ身にしむはつあらしなたねのはなもうらかれういもつらいもこの身になしてなごりつきせぬこれもしのせめてこちよれうつりのきぬにともしとめきのかほりはまたのあふせまでにとそでうちかけてちや屋のあさざけけしきもにくやみせにそむけてかくたまつさのふでのかず〳〵まきかへしはしらかくれはいつくれもせでなれしゑやみせんつれうたひあふはうれしやわかれはつらしあはぬひかずをかぞへ〳〵いつはせめて夢にとすつとん〳〵するのまつやまなみはこさじとちぎりてもしゆびはまかせぬこゝろばかりかすつとん〳〵とんともたれてひとしほにゑのぶなみだをもらさじものと思へどぬるゝゑろこそでありしなさけをそのまゝにまたのゑにしをまつばかりに

（廿四）川つくし

こひとおもひをさゝふねにのせてれんぼにまよふそのおひかぜやしのびくるまのおとなしかわよもしゑらかはやせきもりつらくこよひならずはあすか川におがわいくたかわにもきておゝ井がわきみもろともによにすみだがはうきなとり川いとといはせねどあだなたつたの河なみたゝば中やたへなんいやよよし吉野のかはこの身はとてももゆるおもひのそのふぢ川やけぶりたゝせぬごけんはとかくいつもきく河うらなきわけをひとへに思ふこゝろもかわさて見よかしのへ

（廿五）せきつくし

かことばかりにあひなれてそめていまはなか〳〵うぐひすのせきつゝむつらさのいわでのせきよこひにくちなんなこそのせきよいゝ夜ねざめぬすまのせきなこその見るめもせきのなかへていつあふさかのせきともならばとげてこゝろのひたひぼのせきあくる

あしたのわかれのとこよせめてかたみのころもてのせきかわすたもとになごりもつきぬいかてなみだをおさへのせきよつもるおもひのやるかたなさよかきすさみたるもじのせきいよしものせき

(廿六)はるくさ

ゆきゝえてしな〳〵いづるはるくさのあを〳〵としてつゆもしづくもひとしほになをうきたつやそでのいろわきてゆかしきうぐひすのこゑもゆたかにさへずりてあをやぎのわか葉にそよぐかぜのをといとしろやかにおさまりなびく人こゝろたゝわれとなくうちとけてたゞたはむれあそふうちこそはげにまことかなたれもみなしるもしらぬももろともそのなをしたふさくらはな八重やひとへにさきみだれかすみにつゝむやま〳〵のけしきはいとゞしほらしやあらぬなかめはちよまでもかわらぬものはまつがへにみどりはいつもおもかげのこりてひさしきひとふしをかぎりないこそおもしろや

(廿七)ね屋の月

まつ夜ながらの月をながめてうらみわびおもえばぬるゝそでのつゆかわくまもなき夜をひとりこがるゝとこのうちそれさへあるにむしの音のかれ〴〵なればあはれさまさるしも夜ふけゆくかねのこゑつまどをたゝく野あらしはもしやそれかとたちいでゝみれどこひしきそのひとにあらで身にしむかぜのをとにはのあきゞくにほひきていとゞゆかしきまさりくるひとをしのふるものうさをあはれとだにもとわぬはつらやもはやこぬ夜とまつよのしぐれぬれにそぬれしわがたもとつけてわたるやむらからすはやしのゝめもあけゆけばまたのおゝせをたのしみてなみだながらのね屋いうち

(廿八)きぶねまふて

くもの非にあれたるこまはつなぐともふたみちかくるあだひとをいかにたのまんあだし野のあだしこの身はまゝにはならでつき日ほどへてむかしのわけを思ふもぬるゝ我そでのなみだにたへぬあだなみのよる〳〵ごとにたちいでゝふりあげみれは大はらやおぼろにちかきをしはやまたゞすのもりのこのまわけかよひくるまのたそかれみればくるまの〳〵たそがれみればつゝむつらさとたもとにあまるわけをゆふせんひだりのかいなもくにすけ殿いのちとほりしそ

のむつこともいつしかかゝるふちせをなげいたあまのすてふねわれひとりこがれ〳〵てゆくみづのかけさへきよきかちがわにやつれはてゝよわがかほかたちかくはみすてそよしなやな三じやくそてをとしがよつたらなにふろにせうがゐなふれやふれふるつまいとしわれふるつまをえあとにみぞろがいけなみにひよ〳〵となくはひよどりこいけにすむはおしどりはんまちどりかちりりんな〳〵ちりりん〳〵ちつとしてさてゐりくりゐんぢよのいわま〳〵をつたふにしはたのあせあぶないがてんじやあぶない〳〵あぶのてならぬゐほそみちあせみちをくゞり〳〵くゞつてまつのあらしにさつ〳〵とたぎりておつるくらまがわこひのふちせとたどれどもなをも思ひはうしのときつきだすかねもろともにきぶねのやしろにつき給ふ

（廿九）みちしば

いくよひさしくかわらぬまつのゐた葉さかへていろもことなるわかみとりとざゝぬみよはつきもせぬげにはるなれやあきなぎにかすみこめたるやまもとのむめのかのゐならぬもよそにやこゝにふきこせばいとゞこゝろもあこがれてゆかしきさとはあれ〳〵とゆくとへたてはなかがわのわたりもたえてさくらかざしてこの下かげのつゆにぬれつゝぬれてけふもまたかへるのみちのたそがれ見ればさてもやさしやほたるのむしはゑのぶなはてにひをとほすゑやうがへうさやつらさにこの身をなしてこゝろつくしのかよひぢなれどあきのこのまをもれくる月にながめやさしきしらきくのふけてきぬたの音きけばよそにも人をこひぬらんわれはそれにはひきかえてひと目のせきのゑげゝればかくゑのべともかひぞなきなれどさだめぬうき世こそたのむかけぞひとすじによしやいのちをかぎりにてかよひかよへばいまははやまことのいろにうちとげてきみもろともに千代はへぬべき

（三十）つくもかみ

まだ夜はふかしとこのうちふかきおもひのかず〳〵をかさねてきつゝかたらんとこゝろうかるゝおりふしにはやもんあきとつげくれどいまはのこゝろつくもがみあまてらのかねのねにたゝへてぞゆくよこくものねむさをつゝむぢようのまたそとばかりゆひのこすおもかげさらにわすれてわがたましひものこ

るらんつきもでくちへゆくそらにちやうちんしらけどもひとのよいのしゆゑんにあをさめてあくびましりでかへるらん

（卅一）みつせがわ

まゝにならぬはうき世の中と思ひすてゝもなをすてられぬかねがうきみのかたきとなりてこれぞいのちのはてならんきえもはてなばのこりてひとのあとでうらみんこともやありとおもひのたけをかければきみもおなじこゝろのうさつらさにくやなびけとよこふくあらしそれさへあるにさいこくふねのさそふながれにまかせんとおほせもおもきたらちねのをんをおもへばいもせかはふかきそ様とみづからがあいの中川みづましてとをきわたりとならしばのつゆときへなん心そならばもろともさんずのかわのせをてに手をとりてこさんといゑはおとこよろこびことのはのいつわりなくはのちほどゝまづそのときのいとまごひたちわかれゆく夜はなんときぞ八ッ七ッもはやすぎて六ッのちまたもちかくなるよあけからすやふじこやのゑかうのかねともろともにしでのたびたちかいどりすかたおなじところにいであいてこれぞこのよの見をさめとたがいにかほゝ見あわせていざやさいごのさかつきとおとこにさせばいたゞいていまよりのちはたれとかはとりかわすへきこのさかづきとふたつにわりてふたりが中にのこるうづきのいつかのあさのつゆのたまのをたへてもあとにのこるうきなはみなひとのそてのなみたのたえならん

（卅二）そでのつゆ

さだめなきゆふべ〳〵のそなたのそらにけぶりもたつやあたしのゝあはれはかなき世のことはりと思ひしられていくたびかこゝろまでくるわがなみだひとにいのちはあすをもしらぬけふもかよはんあのさとへさだめなきとはおもひはしれどそでにしぐれのひとゝをりぬれてこかげにたちよりてしんきはらしのたばこととともにやすむそなたはひかたみちゑもんはしこゑて行ばでぐちのちや屋の見せをともしどろにひくさみせんにくむやしだいにあのさけのゑひねむりこけたるきやくもありいびきまじりにたがねごとあくびかちなるながうたもなかばはよそにうたはするほかのうわさとり〳〵にむりのくせつのそらなきはかぶろのときよりならふらん身あがりおほきぢや

うらうのひとかたならぬものおもひかさなるねんのきりましてなみだに志づむかうしもあり見せのよね志ゆははしたなくふみのかず〳〵かきちらしひとをとがむるかへこと葉げにそれ〳〵にながめつゝすぎゆきこせばあげやまちとあるやど屋にたちいればかず〳〵にもてはやしのめやうたへのさかもりにはや志のゝめになりぬべし

(卅三)わかれぢ

見をくるゝ中〳〵つらきわかれしに月まちてとはなにゆへにとゞめていまのもの思ひやるかたもなきおぐるまの志ゞのはしがきかきつめてもゝ世もちよとありてのみうきまろねするこゝちしてひとよはのそのほどをあかしかねたるわがね星のひまさへことにつれなくてなにをたよりにありあけのつきげのこまにかたたづな引とゞめてもとゞめてもつきせぬきみがたまくらのかわるならいのよならずはやがてあをぞやかたろぞやたゞとにかくに月と日とゑんといのちをたのみにてまたくるゝよのあるものとこゝろたのしむあさぼらけ

(卅四)むめあした

むめのあしたのににほひをさくらのににほひをくれてゆくはるともろともをくりこしなつはたちばなあやめくさあきはきゝやうかるかやおみなめしふゆは志ぐれにまなくももみぢちりしくあらしやまあらしおもしろのふゆそらやくものあなたのはるかせにおちくるはなのをのづからこずへに志らぬいろなしてちるはふゞきかわかそでに志ばしやどるゝつねならぬこれも志にしとおもひがわこゝろのこほりうちとけてまくらにさわるかせもなくゆめもゆたかに夜はも白かに

(卅五)まつがえ

くにもゆたかになびくよのなかをおさまれるためしにはまつにこまつのおひそひてゑだにえだ葉にはのさかへゆたかなるきみがめぐみのときつかせえだをならさぬみよなれやげにあをぎてもなをあまりあるわがくにのはるこそいとゞめでたけれ

(卅六)よ　町

よゝのながめははるあきにいづれおろかはなけれどもひかるげんじのおもひ人よまちにうつすこゝろこそわきていわれぬけしきなれはるはまづさくむめが

へにはつねゆかしきうぐひすのをのかねぐらにやどりきはつきせぬはなのゑんとかやこぞのかたみのゆきゝよりわかなさわらびもえいつるなをなつかしみひとよぐさこてふやゆめをむすぶらんはなちるさとのなごりとてふじのうら葉にさきそむるわかむらさきのすりころもゑのぶにあまるそでのいろ世をうつせみのなきくらしほたるよりなを身をこがすあふひぐさのなのみにてあわぬ日おしくゑんぞこひわたるゆめのうきはしとだへしてなあけやすき夜もすからひとりぬるまぞひさしきいとゞさびしきとこのうちうらむるこうたになみだのそでゑぼるつらひは〳〵のふつらひはわがこゝろこひしき人をまぼろしにおもひあかして身をつくしかけしいのちはかげらうかあさがほのつゆよりもなをはかなしや野あきせしあかつきによもぎうになくむしのこゑまつむしすゞむしきり〳〵すいとゞねられぬあきの夜にうつやひようしのからころもそてのなみだはゑぐれどもそらさだめなきうすくもりたかねのみゆきふり積りみやこのふじのながめにはあづまやかいぞなかるらん

（卅七）そでの香

むめかえになくうぐひすのこゑもろともにゐなひとのこゝろのはなもいろ〳〵にうきたつはるのいとさくらかすみのうちにかをとめてたがそでふれしむかしぞとゑのぶにあかぬけしきかなあやめにそよくなつのかぜいとゞすゞしきたそがれに山ほとゝぎすおとづれてなをしむかしのなつかしくいまさらにぬるゝたもともうらめしやふけてねやもる月かけにかねのおとさへかすかにてひとりぬる夜のまくらもうくやとこのうちいつのまにかわうつろひてなみだつゆちるあきのゝくさの葉ごとにゑら〳〵とのこるをぎはぎしもおれてやまもあらはにまつばかり身はかずならぬみのゝおやまのゆふしぐれ思ひとしふるかいもなやけさのあけがたひとしほつらやいつもわかるゝきみなれどさりとてはさりとては

（卅八）こひのきやうか

よしやわざくれたゝ世の中はひとよならではなかりけりきのふわすきしむかしなりあすはゑられぬよそにしてさだめないもののましかのなるほど〳〵ぬのはなるほどゑろくなるほどむすめはくろむかさかふてたもれやあゝこれのあふみすげかさをやあゝこれの

たつ田の川のきよきながれにさかづきをうかめてともにのめや〳〵さけはさかやにちやはちや屋にちよろわきつじのなる川にとかくうき世はこひとたからとさつてははんぢよと〳〵みづのうらなにはあたのゆふぐれおもしろおもしろや人のおもひのつもりてはこひのふちとながれいづるよこほり川の水いろにおぼれ〳〵てなをながし身はうつせみのうつゝなくもぬけのかちとやつれてもさらにえはてぬこひのみち思ひくらしてうか〳〵とうたゝねむりのうつゝなくうさことの葉にうくばかりわれふしばなにはにすてよよこほりの川の水ともなりやせんもゝとつゞけてさめたるゆめのわれにはづかし

(卅九)そめ川

ゐでのたまがわ水せきとめてきしのかわづのこゑよどむなるよどの川せの水くるまめぐりくるまのかわなみまくらありしゆかりにあいそめかわのふかきゑにしもかわればかわるあすか川のふちせよしやよしのゝかわうつなみに身をつくしてもなにゝかわせんうたひたはむれあそぶがよいわいのたれかのこらんよのなか川にかけてわたせるはしのうへより文とりおとし水にふたりのなとり川よしやきみゆへたつなのなにかおしかろのすそひたしかよひゆくそのかわなみにつきさしくだすふねのさほかわさむけきよはをいとわであかすわがころも川なさへゆかしき加茂川のなかれくみてこゝろにいつまでもたえすなたえなゐ

(四十)わかのうら

ときはなるわかまつのいろうるわしくつゞくさかへはゆたかにていくよへぬらんすみよしのかみのめくみぞありがたきみつのうらなみふしづかにもあまてらす日ののどかにてみやこのふしのなたかさよもろこしぶねのとふながめげにおもしろのふうけいやすまやあかし屋わかのうらちさとも見ゆる月かげにともとちよりてくみかわすいのちものぶるきくざけにつきせぬ代こそめでたき

(四十一)かせんがひ

あとなつかしき世の中にいろをこのめるけんじかひあるひは百かひかせんがひわかくさゆふのすたれかひこひわすれがひすみよしのはまのはまぐりしゞみとるしはひのはるのはながひはたがそでのにほひぞ

ととはゞやむめのはながひもやみはあやなしいろかひをこのむこゝろのみやこがひいゑづとかひをてごとにやおりてかざらんさくらがひそらにしられずふるゆきもつみながくしそいたやがひのきばにすだつすゝめかひおそれなしそからすがひもいのとおしやるこゑきけばいとゞおもひのますをかひいろにいてたよむらさきのゆかりときけばなでしこのしたゞみてゆふことのはのあとはむなしきうつせがひ身をかへてゆくこのもとになみまかしはのふたおもてうらうつかひもあらばこそあらいそがひによるふなかひよぶこゑたかきあまがひもしばしまてとわまでがひのこぬわあわびのかた思ひなまなるすてんみなしがひとはおもへどもわれがひのわれてもすゑはみぞかひにおちあはんとのやくそくをかたしがひとはよもなさじちくさのかひのにしきがひいろとるあきのうらばとてこがいこさゝひいがひとゝる月もふけゆくほらがいのみねに入こそなごりなれ

(四十二)しまつくし

ほの／＼とまづあけそむるはつそらにかゝるかすみののどやかにみえ七へ八ゑ九重までもおなじころものしまもよふきてうしほくむたごのしまはる日につれてひとしほになをいろふかきまつしまやおじまのうらにうちよするなみにもまれて　しまのいわねにつもるあわじゝまかよふちどりのこゑまでもはるめく水にこぐふねの中にしきねのとまがしまたびのやどりのよもすがらあるじとたのむはなのつゆそでにこぼれておきのしまばら／＼とりのこゑそへてきりにむまなくあさぼらけうぢのかわしままきのしまこじまがさきにふきかほる風しなやかにうちなびきつゐにはめぐりあいのしまあふしまことのわかれじにいくそでぬらす水しまにうつるもくもるはるのよのおぼろ月よにしくものぞなき

(四十三)ちらし

げにのどかなる春の日にかすみのうちにしのばしきにほひふくみてむめのはな八えもせんよもいまがさかりよおりたやのゑだなをみことによふさいたやれそてのなによせてひけさおれさちらぬまにちらぬまに

(四十四)つゝじつくし

さなきだにはるかせゆかしみよしのゝさとにながる

るさくら川はなとは見えしたに〳〵のゆきこそにほへくれな井しほりやへむらさきやこむらさきゆかりの水のよしのがわおほろの月のひま〳〵にせめてひともとかゝいりつゝぢ花のなさけのそのをくをたづねたづねてならさかやこのてかしわのふたおもてとにかくものを思へとやいわてのやまのいわつゝぢあらしのやまのみねのたがまつしくれにさへもそまでいくとしすごすらんげに春ことにさきそろふをふきりしまやこきりしまぼたんつゝぢのいろとをきさつま千よのはながた見なつ山かけてかほりくる其はなくるまあいらしきいとくれなゐにとびいりまんよまかきつゝぢのはなのつゆてにやむすびてわがそてにくれゆくはるをしばしとゞめん

(四十五)みだれくさ

春ごとにまづもえいづる若草のいろもことなるふかみぐさすじくれくさのふきなびき月もろともにくもみぐさ葉もちりくるやかはたくさたれにみよとてかたみくさのこせしひとにたむけくさかふるおもひもふかゑの身はうきくさのねをたえてさそふながれにきしねのくさのみだれみたるもことわりくさゆふべ〳〵のそのひかりくさかぜあり草のしなよわくはまなのはしのとをながめはやくも野べのはつみくさみやびやかなるおもかげをわすれもやらでこひわたるこゝろもふかきかけがわのあふせもがなといのりしにいくちよみくさかいもなくあだにくちぬるあだなくさいまは中〳〵おもひくさしきなみくさのおとづれたへてとわぬいほりのにわきくさのつゆのすがたをさま〳〵とおのが葉いろにこそめくさ身はすて草とよしくつるともわがこひくさにさくはなのゑんにあわでもはつべきかわとみだれくさなる心のいとをむすびなをすやこひごろも

(四十六)ながき夜

ながき夜すがらねられぬまゝにすきしことのみつく〳〵ひとりまくらはかりにものこそおもえこゝろつくしよよしなやいつみおもひみだれてものくるしきもつらやこの身のまゝならぬ世にひくてあまたのつとめのうきにありしあふせの其むつこともうそのかずかずそらおそろしくくゆ[illegible]、はいまさらなれどせめてのがるゝ身にしもあらばこゝろすみぞめすぐよのさとにいとまなく〳〵たゞひとりのみきのふはけ

ふのむかしとたにも思ひくらしてあらやのすまひ心なきともあわれをといてひとのたもともわかそてもしばしなみだにいろみへぬ

（四十七）ねざめ

わかれぬる夜のうきねのとこにふけゆく月のつれなく見えてひとりねざめにつらさぞまさるしんきはらしのたばこもよそにせめてゆめにとまたひきよするながきまくらのそのかひもなきちぎることの葉わすれもせずはこいんこゝろのいろをもふかきそでのけしきは身をしるあめのゆかしなつかしとは思へどもいかでかわせんこのさとのみのつゆときへなんうきたまのをよさだめなき身はあゝものかなしときしも秋のそらふく風よあわれかわゆきなくさをしかのいつちゆくらんつまこひかねし衣のぶなわてのかよひぢ見れとをちこちひとのおとさへたえてのこるありあけうすぐもとやまみゆるあきのゝころにもあればいとゝさひしさまさりてなをもものを思へとわがくろかみのみたれ心はそのひとに

若みどり巻二終

若みどり巻三

端歌目錄

端歌

(一)わか水

春はいつしもよひわか水のなかれくみそめたへずめでたいとそのさけたれもゑつけきあのかほつきだいは正月きさらぎやよいは小のはしめてうづきは大よさつきみな月せうでもとをすほたるひやさし七八月はだいこそよけれ月のながめにさくきくづきやそのきくのはなせうでもいろのめつらしやさてかみなし月〳〵しもつきゑわすなみたいのかすもめてたいとしのくれ

(二)はるのはな

はるは花さきなもたかはしのかけしなさけはかよひくるわのみちすがらたれもめにつくあのはなきり月は三五やながめにあかぬはだてなどうちうながとのきみやいろもふじべのみだれてなびくすがたをよそに見てのみこふるたかまのやまのみねのしらくもかつらぎやまとそのからはぎのゑもんのしなはゑほらしやさてうわぎのそでやたもとのかせにちらすなはなのきりしまをきみがにわきといつまでも

(三)松はゆたかのかわり

あきの夕くれをともさやかにつくかねのいと身にゑむ野あらしにこゑをそろへてなくむしはかうろぎはたをりきり〳〵すたれまつむしやくつわむし草ばくさ葉そだちの夜つゆなれてなをすゞむしのなくこゑはちりりん〳〵ちるやなぎあふちかつらのはゝちりにちり〳〵ちつてあとなくみだれゆく秋とたもとにゑばしとゝめん

(四)ふかくさ

まつよひのおもわくとつらきさらばはものかはゆゑをいかにとたづぬるにそのきぬ〳〵をしきたへにかねのかず〳〵うらみた八こゑにせかれてわかれしのよしやそれともみをくつたよにあふさかのせきのそらねをはからばゆるせたいじかさゑゆひといふじかたいせつじや

おなしく

ふか草のたわれおのこがひとりこひぢをはじめてわけをいかにととうたれはをのゝあだしにうつほれてふみのかず〳〵くとひたうきにかまけてをもやせていろにそむ身とみなされた身はあさくさのどてのゑ

もともきへなはき丶よだいじかさ𛀸ゆびといふじが
たいせつじや
　　　おなしく
世にこ丶にわすれかたきはまれにあふよのかへるさ
あわぬむかしはものかはとまたねのとこのつらさに
ひたすらそではくちねどもうきとつらきをみつせが
わこひといふじにひかれてはきゆるいのちかもちろ
んじやあいをへだつる中かきよりも𛀸のぶよごとの
さわりありともつきせぬゑにしかたいせつじや
　　　おなしく
うきひとのをもわくをあすか川にたとへたそれをい
かにととふたれはそのかねことのいつしかにかはる
ふちせをなげいたあまのすてふねよるとなくひとり
こがる丶つらさに身はあさましやそでのみなとに𛀸
つまば𛀸つめだいじかさながれよるせをたよりに
　　（五）たまくら
かわすまくらにほどなく八こゑもつげわたる〳〵あ
かつきのそのわかれぢはうさやつらやはやきぬ〳〵
のわかとこさだめて〳〵さだめてなんなくなみたの
かわともならばあふせのたよりとものふさりとは

　　（六）ほとんどふし
なかれはかなきほとんどうきつとめよる〳〵夜ごと
にいつしかかわすまくらもいたつらにこひのいとま
もあれ𛀸ばしはつかのまもかず〳〵いやはや思ひに
袖はなみたのかわたけや
　　　おなしく
あめのふる夜もほとんど𛀸のひきて𛀸ら〳〵𛀸ら
〳〵明かた鳥のなくねとわかれきて思ひ思はるなる
いのちもをしからすいなふねこがれてひとよもきみ
にあわねばなら𛀸ばの
　　（七）かよひくるま
おもひそめがはそでうちぬれて〻そめかわ〳〵そでう
ちぬれてうきなばかりはよにながるともたへぬあふ
せをまつばかり
　　　をなしく
かよひくるまのたそかれ見ればくるまの〳〵たそか
れ見れはつ丶むつらさはたもとのほたる思ひきへて
はまたよる〳〵にもゆるひるはきへつ丶なをよる
よるにもゆるえ
　　（八）𛀸から見

かけしなさけのいつしかかわる今はうらみの〳〵まさりくさ〳〵よい〳〵ぬるゝわがたもと

をなしく

おもひいつればうきことばかりよしやおもはじ〳〵かりの世に〳〵よい〳〵ぬるゝわがたもと

（九）もろこし

むめのはつさきたをりしよりもいろをやしほに身をそめなしてかよふみちしばつゆふみわけてへせめてゆめになりともへあふせをまつしまとやまはなさくわけよひねやのうちむすぶ下ひぼよそにはとかゝへその人ゆゑにへ

おなしく

月をみんとてうすくもみればそらに忘られぬみゆきのふるはさくらちりしく花むらさきのゑいろもふかきこむらさきへなびくはあをやぎうき身なからもこひわたるたまかつらその名もたか尾はもろこしまでもへもろこしまでもゑ

をなしく

あふと見し夜のあかつきかたにかねのひゞきにをとろかされてなごりをしのそのよのゆめかえせめてま

くらこちよれかたみのまくらへさめてうつゝかおもかけにたつとのいとゞおもひにみだるゝころはゑみだるゝわれがへ

（十）ゐほや

よひにあふてもうきことばかりあすのなん〳〵なじみはおもへばつらきよにあさわかれへ

（十一）とふでのかわり

ひるはきへつゝものおもひ川するゑはあふせのありもやせんとすでにはかなきこゝろをつくしあたにくらしてけうあすか川かわるならひのありまやまいなといはれぬいなふねののぼりつめたるわがこひのやまみへざるかりがねにかよわす文もたまづさもとふでたよりはしやさんすまいつゐにとだえの中とはなりていつかならべんながまくら

をなしく

こひのふちせにこの身を忘づめすへはよるせのありもやせんと思ふ心につき日をかさねいやな人にもあいそめかわのなかれはかなきうき身をばせめてあわれととふ人もあらばうれしきいかばかりきやくの見へさるそのうちにみないつわりの玉つさもとふでき

しやうもかゝねはならぬそらおそろしきせいもんく
されおもひまはせばやるせなや

（十二）うらわかみ

じたいわれらは志なのゝくにのゆきの下くさうらわ
か身をばふりよにあくしよに身をかいとられいとな
みをほきながれの身とてあさましうごさるいやな人
にもあわにやそりやならぬ志よわけよいにはかうし
たことできのどくつらいは〳〵うきつとめもちろん
かなやさりとてはすこしはあわれみくれよがしはか
なのこの身を

（十三）あふ夜

こひはあやにくさわりがちにをもわくはならぬせく
はこゝろよあふ夜の志ゆびはきのどくぬるゝ〳〵な
んぼ志のびてもたもとのいろはもる〳〵もれてみた
れてよそにさたん〳〵ものういわが身

（十四）あさがほ

こひをつかねしくわだんのまくらもちろん〳〵あけ
てあさがほらんのかほよきはなのつゆすてぬはばん
かい大もんおゝもんおかしおのこのはまりのいろも
ゑもんがかへるはしごにたるきめもところしやはな
のあみ

（十五）さかひ

こゝはみやこの志まばらくちよさあく志よたをしの
ヲ、たれ〳〵もあれはせうしめき〳〵なるまいない
たりやさきたりやさうかすチ、ウ、さけのとがあればさ
んしよめき〳〵

おなしく

おもひあまりてかよはす文をさあまりつれなやア、
てにふれぬあれはせうしめき〳〵なるまいない
たとさ〳〵こひのチ、志かけがあればちかいめき
〳〵

（十六）にしきゝのかわり

ゑた〳〵につれなくさそふあらしにつれてそらに志
られぬゆきふるころはいとゞみだるゝ花ころも心も
そらにうかれそめてはたゝ花ゆへとむねに〳〵むね
にたく火はふしあまかやたへやらね

おなしく

たび〳〵のたもとにおつる心いなみだかねのなると
き日のいるころはいとゞみだるゝこひごろものうや
れ〳〵さてものふうらみかねてはたゝわれからとあ
まの〳〵あまのかるもにすむむしかいのつねになく

(十七)いせのくしだかわり

あたにみだるゝたもとのつゆをふかき思ひの草葉によせてほんにこがるゝなみだのつゆといろをくらべんそのみやぎ野のはぎの下つゆあめにもまして玄のびかたなきこひのやま

(十八)あさつまふね

またねものうやふきくるはるかぜたもとにのこるむめがかもあゝよそになしせめてうつらばまゝならずとも〳〵ゆめのかよひぢかぎり玄られぬわがうきなみだまくらもきけきぬ〳〵

(十九)江戸ぶし

玄よてにござつてもしよわけさへよくはござせあがらさんせおさしでもをもしやれなんぼふづくるともあわせはせまいそちで〳〵そんなことは玄やほめに〳〵

おなしく

ひよんな人さまになれましていまはほかのつとめも身にそまぬとおも玄やるそれはならひのき玄やうの下かきそちて〳〵そんなことは玄やぼめに〳〵

おなしく

かゐるあしたのまつくれもなくてよねとさことにこの身をなしてなんぼさはゝともかぎりはあらじこそちでそちでとりもかねも入なるともなくとも

(二十)あさ草

あさくさ川のはやきおぶねをうへいなみにうちまかせまつちやまのまつのあらしにそのよのゆめをさまされわかれぢのさら〳〵しさ玄ゆひといふじのうつつなさせひもん〳〵らちもみだれてわすれくさのひとはなこゝろへ

おなしく

にくいことをきいたよすがも御身のたのしみならばよしそれとてもえ

(廿一)たまのさかつき

さよのねさめにことゝふあらしつねにきくよりわきてさびしきつれてやまぢのほとゝぎすなきわたる

をなしく

すぎしその夜に松もろともにかわすたまくらゆめもむすばずとりのなくさへにくまるゝさてよひなか

をなしく

ひとのこゝろはあすか川なみかけしいもせもいまは

かわるせいまはかわるようすちぎりたのまれず

をなしく

たとひあわずとふみをばかよへふみはいもせのひとのうらなきひとのうらなきいろみするひとふでもへ

(廿二)はるのやま〳〵

はるのやま〳〵にさいたる花はなに〳〵さくらなしも丶かいどう〳〵かいどうつゝじややまぶきつばきよしのゝやまはゑらくもわかいてはたかをたよ〳〵なひくあをやきたおりておりて一ゑだいゑつとは見ごとへ

おなしく

こひのだてぎにそめたるいろはなに〳〵とくさひわもみかうばい〳〵〳〵べにかばくち葉にもゝいろゆふべのいろはくれないむらさきはあけぼの四五りんさくらのちらしもんてらいろ月のおばろそめごゑよそめは見ごとへ

おなしく

さがのあたりにあらそふあきのかず〳〵あさぢふになくきみかうろぎ〳〵かうろきすゞむしまつむしはたおりくれないくゞるさはしかくもわけてかゝりかねことちにおつるはぎの葉あゝほに出てまねくはなすすきすてられぬゆふべは

おなしく

かよふちどりのすまのうら葉のかず〳〵よもすがらなくそでかけぢやかけぢやおとにきくさへうるさやあたなみまくらもゑらぬひとりねくみわけてとへがししほひのいしのいつしかあゝそれともみへぬこの身はすてをふねこがるゝ

(廿三)ちくさ

あきはちくさのいろともなしに思ひそめたよかのひともとのゆかしなつかしうらみのなみだあらそふむらしぐれこのゆふべゑひとりまくらひきよせおふさきるさにみたれておはなあらそふくろかみのいとをめてゑ

(廿四)あさかへり

けさのわかれのとりのねつらやほんにつらやつらやみたるゝウツみだるゝさりしはみたるゝねん〳〵ねみだれみだれみだるゝくろかみのゆふかいなしやこころせいもんいくちたび

(廿五)せうし

おもひ〳〵がさま〳〵こざるいちに身あがりかさなるつらさしんきはらしのたはこのけぶりしゆひのつまらぬくれ〳〵もきのどく

(廿六)ちやのみ時のかわり

ねんのあいだはうきしつむ身のいましばしぞやかならずすへかならずたのむはこのゆくすゑつねならぬ日もわけていわれぬふた思ひ

(廿七)もちろん

かわすまくらにもちろんへだてはなか川の水もらさじこれむすびしもこぬ夜あまたにうらみをかさねてさよごろもゆめさへうときあかつきになこりをおしみてやかたねのつらさはしつかりきのどくやせめてはたまのをのうきにはたへなばたへよたのしみはうき草のねをたへてあふせをまつまでよ

おなしく

月のひかりはもちろんしなしたものなれどあはれをもよほすみな人のうきやつらさのむかしをおもひの十寸かゞみくもらぬそらもかきくもりたもとのなみだはかわかぬわけじやにしつからきのどくやせめてはやまのはにしばしはのこりて見えよがしまだ夜はわかひにさりとてはどうもならぬにし

(廿八)松はらのかわり

見もし見へんとまつ夜はふけてかねのひゞきもひとつまつかいこさんせとちぎつたまつよの〳〵こゝろつかひはうみ川あさしやまさかこへて〳〵身しるあめにしよんぼとぬれてぬれかゝつたかいんぐわてあろとありしきぬ〳〵うらみし事もきにあたるとはさらさら思はすさら〳〵さら〳〵さつ〳〵とうつてはきぬたまつかせのみだれへ

(廿九)こしば

けさはゆふべのむかしとなりてはかなやひとりこしばのかきにうかれよるせのよい〳〵〳〵水しもあらばかぎりあらしのよい〳〵〳〵まつゑのそてにのこる見よしのうわかほり

おなしく

おもひこがれてあま夜の月にうちもやられずまくらのそいねそんなたならではよい〳〵〳〵ほかにはないといふたことばのよい〳〵〳〵そのうれしさにあふてくやしやはづかしや

(三十)はんぢよ

きみがかたみのこのてなれくさいまはたれにかのふ
ゆふがほのはなをかきたるあふぎのゑをなかむれば
げにおもひはいとゞなをますかゞみくもらぬ月を見
るたびにこゝろつくしのあきのかせ身にしみ〳〵と
にゐまくらせしすぎにし夜はのそのむつごともむか
しになりていますてられし身は中をきの石かわくま
もなくあけくれは思ひにしづむゑ

(卅一)ありまふし

われはたびのものしやいなめかけてたもれいわにさ
がりふじたよりなや

おなしく

しんきしのだけなやれすのすだれかけておもひはわ
れひとり

おなしく

ひくてあまたになこの身のつとめつらやおもわぬわ
かしよざい

おなしく

よひにむすんでなあしたにたゝむどてのはんする身
やすし

(卅二)さんさふし

こゝろつくしにかきたる文をたれをたよりにさんさ
まつよしなのおもひ

おなしく

うらみなからもまたうちながむ月はゆかりのさんさ
うき人によしなの思ひ

おなしく

ひとりふせやに月さへさしてたれをたよりにさんさ
まつよしなのおもひ

(卅三)むこかわ

むこ川のあたりにきくのいろ〳〵きよくぼたんたゞ
これむぎわら一りん一もと

おなしく

ほり川をわたれば見ゆる一里さんこあづまちみちし
はすみのにことうら

(卅四)かゝふし

人めしのべばあふ夜もたえていまはたよりのふみば
かりとはおもへどもこれもまた心だにさへかはらず
は

おなしく

ひとめつゝめばいろにはださてこゝろまでくるわが

なみだそでにはをちずいくたびかこゝろまでくるわがなみだ

おなしく

ねやのそらたきうきねのとこにきてはまくらにそよそよと

おなしく

あわのなるとに身はしづむともきみのおふせはそむくまじとはおもへともよのなかのひとのこゝろはあすか川

おなしく

あすか川とはゆめ〳〵しらてかたりすてたよはづかしや

（卅五）くどき

なかめしならぬゆきのあしたのとを山はつれしろたへかぜも身にしむ野だのはられんぼしらべのこゑはいよしもうわがれてわかれもちかしうさつらさ

おなしく

かよひなれにしどてのなごりの一里すへをたのみてふか なさけもありとのいまはつれなしよそに なか なか身をつくすきくさへしんききのどく

おなしく

そてのもみぢ葉はかに見へねどくれなゐむねのしくれにぬれぬ木かけのあれがしかりのおとこのふへもたよりのはしならばしかもろともにこの身を

おなしく

ゆめもむすはぬねやの戸ほそのつきかけまつ夜ながらにいとしゆかしきあきかぜきやらのかほりのよそにもれゆくうすけふり心づくしのうきそて

おなしく

ひとのつらさにこりぬこゝろのいつまてうきはたまのをたえぬはかりにくれたけいく夜ふしみのゆめもながれてなみたがわしからみかけてせかふよ

おなしく

かわすたまくらたえぬあふよのなかかわさはりうきはしかゝるつらさはたれゆへよしやなかれにくちははつともひとすしをあたにはせましこひぐさ

おなしく

そてにとしふるしぐれたつたの思ひ川ぬれてもみちのいろもながれのはてしなやなにをうらみにたへてちぎりのうすこほりな〳〵こひはわたらし

おなしく

けさのはつかせ身にしむほとはなつかし比はふみ月たがかよはせのふみつき七々のゆふべのほしのいくよのおもひ川かさゝぎはしをかぞふよ

おなしく

こひのみちのくかぎりしられぬ身のうさそれといわでのせきもりゆるせかよひぢよそにもらさぬ中をとだへのはしばしらしらずやかゝるおもひ

おなしく

あらしはけきしき秋のはやしにたゝもみぢいろにいてずはちりもみだれもあるまいにもはやうき名をたつ田川にながしてきのどくしぐれまたぬるし

おなしく

いかにこの身はうすきつとめの身じやとてもあまりつれなやよそに心がにくやのもちやよしなしおもひすちよとは思へどひたすらこひがせめくる

おなしく

なこりつきせぬねやのあさゝけうつゝなやさらばさらばとこゑもたえゆく野田のはらおくりかへせばひえのやまかせ身にしみてなたねのはなもうらがなし

おなしく

ねやもさびしきいとのしらべのあかつきしゆびをおもへばあはでこゝろのほそぬのけふのたよりをやきかずやほとゝぎすなくさえこゝろにまかせぬ

おなしく

こひをしでうのいくせなわてにまどわどわるゝぎをんやさかのかりのまくらもよの中ちよのかごとをあだにながすな下かわらうつろひやすきひとこゝろ

おなしく

いかにこの身はあたにはくちじこひごろもせめてとへがしおもひこがるゝうきなみだつらや命のあるもよしなしいまさらにきゆるばかりをひとすじ

若みどり巻三終

若みどり巻四

二上り

一　しゝをとり　　二　てる月
三　まつはら　　四　かよひぢ
五　はんぢよ　　六　しよがへふし
七　むらた　　八　なる川
九　ながかたな　　十　せきのこまん
十一　まくらつくし　　十二　しぼしおり
十三　おつゝら馬　　十四　こゝろすぐし
十五　はなおり　　十六　五月雨
十七　夜ふか舟　　十八　かごしま
十九　おつゝら馬のかはり　　廿　かゝふし
廿一　しらつゆ　　廿二　みやがわ
廿三　八重むめ　　廿四　たて小袖

三下り

一　さかいのおはな　　二　ほうかそう
三　さをしか　　四　むもれき
五　こそでかへし　　六　さつま

七　せんだい
さわぎ

一　てんがちや屋　　二　すがゝき
三　まかき　　四　しまたゆい
五　なゝかわず　　六　ながやま
七　たか尾　　八　むかいがわ
九　すがゝきかはり　　十　五つのうわさ
十一　無常のあらし　　十二　あきのむし
十三　ながと

二上り

（一）しヽおどり

さても見ことの由井かんばらややんれそれかべふじのおやまをうしろにしてやんれそれかへみほのまつはら／＼てんとまへにみる

（二）てる月

月はむさしのよびだしのぢよろをみかづきたてなどう中そての月たれをまつよいあのかほつきとしは十五やこしつきあしつきさへたこわつきなにゆふ月よかつらおとこよいとしかござれかわいかござれいざよひ月にたはむれあそべしひ／＼あそべしひ／＼しひしひしひ／＼てる／＼月てる／＼をみたらばなんとよござるまいかのてる／＼月てる／＼月のおもかげ月を見あかしのみあかす

（三）まつはら

見をのまつばらそれからさきはしがのうらはのひとつまつすんとよいきなひめこ松まつよは／＼君をまつ夜はとをやままつのやまさかこえて／＼みとてきたのヽ七ほんまつよほんにかならずあを葉のまつのこるきぬ／＼きぬかけまつよあらしまつかせさらさらどつこいさら／＼さら／＼さつさつとうつてはは
ま松のをとはさゞんざ

（四）かよひぢ

人しれぬわかかよひぢのせきもりはよひ／＼ごとにうちもねてこひのながれのしがらみとなりてひとめのせきしげきしのぶのやまのつゆなみだかヽれとてしもうばたまのよる／＼ごとにあだまくらひとりかたしくころものせきゆふべ／＼にあま人のぬれてかりほすわたつみのみるをあふにてやみてたゞそれとばかりになごそのせきかすみがせきのかごとにもあき風ぞふくしら川の人めのせきははかるともよにあふさかのせきの戸をわけてなか／＼ゆるさねばあまるおもひはわれながらなをせきかねてむねはふしそではきよ見がせきなれやけぶりもなみもたヽぬ日ぞなきこひにしな／＼さはりがごさるしのぶその夜の月かげひとつわかれおそしとなくとりのこゑあはでたつなやあふてのうきないづれおもひのたねならん

（五）はんぢよ

おくりわかれてまたたちかへるねやはありしにかわらぬものをいとゞさびしさまさりてひとりのかみのくさまくらまたふかき夜それはさりしたとゑよかくとこたへしわか中いまはかたみのてなれ草うきおもひるゑ

おなし〳〵

いつかあきなんこの身のうさをさとのならいに身はまゝならぬまこととまじりにつくりしつみのかず〳〵おそろしや神かけてえそれはたれがなすわざこひにこがれてよしなやありしなさけもいつはりのいまさらにゑ

おなし〳〵

かわすまくらにとふほとゝぎすつねにきくよりあわれもふかくこゝろあらばとゑたへとかゑもなつのゝくさかくれはやゑら〳〵それはゑゆびのなこりとをきてわかれのたもともひきははなさしいまさらにいろなつかし

(六)しよかへふし

あまりあつさにもんまで出たりやおてらわかしゆにひきとめられてのきやれはなしやれおびきらしやんなおびのきれたはむすびもなるがゑんのきれたはむすばれん

おなし〳〵

むかひとをりやるおわかしゆさまにあまりこと葉がいよかけたさにのもしこれもしこれもしのもしのもしおくるははながみがしよんがへのんやはながみがのもしおつるははながみかしよんがへ

おなし〳〵

東坡さんごく淵明李白しんの七けんはくらくてんもすんとてうじてあいせしといのそれはもろこしわがてうにては心よしだのけんもじ様もさけをのめとてゆかされたしよんがへ

おなし〳〵

あわでぬる夜はゆめこそたのめうつなつま戸をよるのあめせうがへ

おなし〳〵

だいくどのよりかぢやがにくひねやのかきがねかぢがうつせうがへ

(七)むら田

さけはのんのみたしのんのむことはなんならずおさ

かおはんかはやしを見ておとんどとをるおはりはおとこにお中の町こずはこく町のはんはぢしらずやれこのぼしたてよい此とのごてござるずんど恥をしらぬはおほうぼうむら田はんひやうへをみたかいかななんほし夜もひもなんほゝなんほゝ〱やれしりよはせをてなんほゝかちでかよふたゝいきおほのかけられおはやまかくしいなばをみたかやまふしふきりやうねんななんほくあいだになんほゝ〱なんほくやどのもめやいなんほゝ見られぬにくひつゝむかひまんちう屋にもさ半兵衛やれこりやせひをつくとのうそをつくとのつく〱つくつゝてんこじあることないことふんだいたありもせうないにちようらうくどくさそれで人がわるくいふにさあのかひたんめちや屋のそうひやうへせいもんあきかせか

(八)なる川

さけはさかやにちやはちや屋にぢよろはきつじのなる川にきつぢのぢよろはぢよらうはきつぢのなる川に

おなしく

なゆそなゝないそさつきにやもとるをそて六月なかごろに

(九)ながかたな

ながひかたなをさいたとおもてしりのまくりやるやせじりをやせじりをなしりをからぎやるやせじりを

(十)せきのこまん

さとのよねしゆはいろよひものまづたゆふはかしばかき夕きりさんごにはなさきッヽかほるみちしばたかはしながと大はしもろこしをそろへてそれ〱ことうらわめきだせ山の井よんよしをかやゑぎりや〱しつかみくにすがはらありわらはなのみふねにちよはしやうきはしそりやかくやまよ〱こにしまつえにたかまや〱うすぐもわこくいづみにおふさかいつゝたか尾ちよとさて〱ともゑにきく川や

(十一)まくらつくし

きみもゆたかにつくよひさしきなるまくら春はまづさくはなまくらさて〱みことにさきそむる花にまけしのこよねを見たかふりよになさけをにいまくら思ひわすれぬありしそひねのそでまくらなつはすゞしきかごまくらうたゝねまくらひとまくらちよつとひざをばごめんなれさて〱〱ごめんなれそりやかりまくらア、そりやかりまくらさいわいまくらこ

まくらあきはもみぢ葉みねのあらしにくる〳〵〳〵やつくる〳〵くるりとかへしてもひとつかへしてまくらかへしのしなもよやふゆはしも夜としのきてかよふまたのあふせもまつかねまくらきみのたまくらちよもかわらし

（十二）ゐばしおり

あけてこよみのにたるもんじはきのへさるまづはつかうしんのあそひにはそろへてすきにあかゐぼしこゆびゐほしは若とのゝすがたはまたとなしうちにゐぼしのひぼをこむらさきしやんとむすんでたてゐぼしいせのねぎしゆはひだりへみぎへみぎへひだりへひだりへおりゐぼしまんざいらく十文きんのゐぼしはきみが代のなみもしづかにかざおりゐぼしとめされた

（十三）おつゞら馬

さても見事のおつゞらむまようへにやせんしきからしまのふとんふとんはりしてこせうしゆをのせてそなたくだりかおりやいまのぼるふみをやろにもことづけしよにもこゝはこねのやま中なればふでにやことかくすゞりすみはもたずもしもみなくちおとまりならばふだのつぢから四五けんめのちや屋でむまもそくさいその身もぶじでやがてのほろといふてたもれゐいこのさんさ

（十四）こゝろすゞし

やまとはしからよぶことの葉のうたのなかばにさすさかづきはつゞくやましゆはおさんとのだてをしたやのきりものきかへなん〳〵でもしじらおり〳〵すそははら〳〵ほろをはさぎやるひんとさんとはいやといわれぬどうもいわれぬそでをひかれて中にかいこれもだんなのごりしやうかのあがればさん〳〵もどればさん〳〵なんひんさんさつさ三六十八ばんはかのおきやくはいやらしうこざるあすはかならずくれぬさきからござれのきやくのすきまにかならずあいましよ

（十五）はなおり

やさしむすめのおりかけてたきゞめせ〳〵みやこのとのごこひにきんきんきましよはおはらしつはらやせのさとしばめさぬかつゆふみわけてこひにきんきんきましよばおはらしつはらやせのさとしばめさぬか

(十六)五月雨

なさけつたなきくるわのすゝ井いかなよも〳〵ほとときす五月雨へさてもわけとそいねのすへをおもへばそでぬるゝいまさら

おなしく

人はいまさらなにはのうらみよしもあしきもよのならひさりとはへさてもいろにひかるゝよしもあしきもよのならいさりとは

(十七)夜ふか船

ふねをだしやらば夜ふかにだしやれほかけ見ゆればなつかしや

おなしく

こきやうこひしやわがつまゆかししばのいほりもなつかしや

おなしく

あふよなければわが身にいまはするのわかれもなつかしや

(十八)かこしま

ふねはせんそういろとまんぞういろふとまんまよなさからつきたるゑらんとつふねはえないさ

おなしく

うたのよみてはみやこよなさしよこししよたいみやうもまねたがるは

(十九)おつゝら馬のかわり

とふつとはれつへだてぬなかにつらやきかんせわしが身のうさをあねははらじんわしやちや屋つとめつぎのおとゝにかげまをさせてとゝ屋かごかきかたうすひきていちのいもとにたちきみさせて五でうあたりの月見せてよひこのさんさはなれ〳〵のうきつとめ

(二十)かゝふし

よい〳〵あのうらしまかあけてくやしきたまてばこたまてばこさりとはたまてばこあけてくやしきたまてばこ

おなしく

よひ〳〵あいそめ川に水に一ふでかきつばたかきつばたさりとはかきつばた水に一ふでかきつばた

おなしく

よひ〳〵なにはにもゆるあしのゑほやのゑたにここゑたにこゝさりとはゑたにここあしのゑほやの

したにこそ

おなしく

よい〳〵〳〵とりはら〳〵とひざをまくらになきねいりなきねいりさりとはなきねいりひざをまくらになきねいり

おなしく

よひ〳〵〳〵なむあみだぶつしねばおてら樣のしよじせわになるせわになるさりとはせわになるしねばおてらさまのしよじせわになる

（廿一）しらつゆ

おくはしらつゆやどるは月かげすめるこゝろのあふせのとこわかれのとこにはぬるゝがそでたもとにのこるのこるかたみのなみだ川わたりて見ればげにやうき世はうきねのゆめうきねのゆめにはおもひのふち身はしづむともよしやよしのゝいもせやま

（廿二）みやがわ

みや川すぎてすゞかのまちにしぐれ〳〵をいとわぬひとはさためてこひのうたよむことは

（廿三）八重むめ

花にあらしもよいけのうき世ちらささくらもあきこゝろあきこゝろちらささくらもあきこゝろむめがさけがしいよ八重むめかしだをたおるふりしてかならずこさせとさまをまねくへかならすこさせとさまをまねくへゆめになりともあいたやみたやゆめになりともゆめにうきなはさんさよもたゝしよしなやさそう世しやのまれにあふよはうつゝかゆめかまれにあふ夜はかたるまもなきさんさ鳥のこゑよしなやさうきよじやの

（廿四）だて小袖

やまとおふちのにきをふそではみやこぢようらうしゆのだてこそでこずまぞろへてはんなりとゆきのうちよりはやさきそむるはなのふりそでをかやとめそでよ身せばかくそでいよたてそではいつもくるわのちよん〳〵〳〵ちよんぢようらうしゆぢよん〳〵ぢよんぢようらうしゆそれさ〳〵そでふれさそれさ〳〵そでふれさみよのさかりは千ねんまんねん〳〵〳〵〳〵まるそできみのめしたはいつみのつほそで

三下り

（一）さかいのおはま

おとこやまぢに花をみなめしかさいてあるあるひとのながめしはいろかなさけかほだしのほにてないさだめて〳〵ひんひとはなと世の名にたつほどにこひくさたねのかりかや

（二）ほうかそう

おもしろのきみがみくにやちよをふるともつきせしまつがえはつるのやどりとなるてふたみのかまどのけぶりにのべのかすみもうす〳〵とうめはありやときなくうぐひすやとらばやとれわがのきばのむめあしたはくれのはるかぜはるのはなわあめにしほりてなつのあやめはかぜにかほれるあきのおばなはつゆにみだるゝふゆのゝしだはしぐれにいろづく野やまはこの葉にうもるゝげにまことわすれたりとよ月かげはながれにうかみてつきと日のふたつのひかりよよをてらしていまにたへせぬめぐみかな

（三）さをしか

さをしかがつまこひかねなよもすがらいよへみねをやわけつゝやのさてさとへをりもみぢふみわけかへろとさかへろとさかへろとさかしろとさなくねさびしきゆふまぐれさのみやなけいけやのさてなれはかりともに見たるゝはきのつゆしつほりと〳〵しつほりとならぬこひぢに身をやつす

（四）むもれ木

うきことをたれにかたらんゆくゑなきしみづながるるいもせ川せきとゞむべき身ならねばよそにちぎりをあた人のありしなさけのことの葉をちゞにおもへばうさつらさ身はむもれ木のうかりけるはずしにせみのきんのこしをりしもひとをおもひ出ていとゝさひしきとこのうちときしもあきのゆうまぐれくものはたてのたへまよりもれてさやけき月かげにゆりのひともとたおりし人のはなのかほりをそのきぬ〳〵にいくよとめてもとめあかぬあかぬあゝうつゝなきたちすがたこづまふりよきしな〳〵にわれなれそめてかよひぢはぬる夜もわかでたまくらのたまとかたしきゆめはなし

（五）こそでかへし

こひしその夜はこそでをかへしねてはゆめちあかすゆめさへわれにせかせてみゆるさめてひとりはあぢきなや

（六）さつま

やれ人のよめ子ゝはほかけのふねにそんれは〳〵みてはらくなそうでさま〳〵かござるよのあさせうがへ

おなしく

とばのなかまちを夜ふけてとをれやそんれは〳〵こしやゑゝみのねてさまうかといのあさせうがゝへ

おなしく

さつまわさもとに御ばんゑよなくばつれておちよものわかつまをゑ

おなしく

いせまつんぢよさてよふさにほんのきやうよいくよさとめてもとめあかぬ

（七）せんだいうた

せんだいのおはなはたけのけしのはなびんごへ

おなしく

やゑにひとへはこゝのえのびんごへ

おなしく

これのおかたはゆてのかぶりやうかうおびのゑようまでゑよへら〳〵とびんごへ

さわぎ

（一）てんがちや屋

さかいてんかちや屋くう〳〵とこざれさこふやおまんでおちやもめき〳〵おふといやうさがごせにかまゑよさいやながごせやこちやゑらぬさんせうめきめき

（二）すがゞきのうた

見よしのかはるははなさきやみちしばをふゑうあつまちかひそけともろこしみちとせい〳〵のゝみちの〳〵みゆきはまゝならすめいゑよはすみのへすまあかし夕きりふもとちのせちさとふきくる風にみたるるはつはなこむらさき若まつ小むらさめことうらやくもをさんごのきてうはこゝのへのたちはなあふよのかよひぢみうらをうか〳〵なかむれとゑにしのきく川はちよのうてなに

（三）まがき

まかきのもとにたちゑのひこぬ人を〳〵まつ身のうらみいわんためやくやもすそをかいとりてつく〳〵どてをながむればどてのはんだはぼうをつくおてらのほうしはかねをつくこちのなじみはうそをつくさてまたわれらがかす〳〵のつくりしつみもおそろし

やのちの世たのむなむあみだぶつ〳〵いふてかへるさにつきあたりまわりてむねをつく

（四）ゐまだゆひ

としのよわひは六十ばかりのゐんふつてゐらがのかみをだてにゆひなわてのちやにこしをかけづきんとつゑをそばにをきなにとちものをいわずしてやまでらのはるは山しなのけちはともやでしともがけふはせちあすはせちといふてをれはゐらぬはかつてらちはないヤアこれにつけてげんとくかたへ文をさやりたしのぶせつ〳〵じやすますものではないわさてりはからぬゑ

おなじく

としのよわひは二八はかりのおようのたけなるかみをしまだにゆひあげやのゑんにこしをかけすゞりとかみと手にもちてなにとも物をいはずしてたゞさめざめとなきいたりおもふかたへのふみはやりたしなふきみさんまあつたものしやないわさててはかくすへ

（五）なくかわず

てぐちた中になくかわづなにがなるぞととふたればそがしのばらがなるとのなぜに女らうもかわいてついとをるこれびんほうめ

（六）なかやま

しゐいなかやまつむぎをとびいゐにてそめこんでよるははちでうと見せかけたいまどきそのてをくうべいかじやりばのなぬしでうけつけないおふよいわいな

（七）たか尾

にあい〳〵のこまつしやつれてあくしよ〳〵かやんやをやにもまさるそれ〳〵それ〳〵どうらくたいじんうつけにたわけにめうがの子かんどうとんのと

（八）むかひ山

のちのあしたののこりのきぬはきくかおいけになもゑびす川せわもなさけもひつとりをいてふとんきまくらそこ〳〵にとりておそふまあそふよアイノテむかひ山ふしのつとうよみやるはしのをんばはきをとりあぎやるすのこほとけはらいかうめさるうらのおはゞはちやんなまいた〳〵よがあけたそれでねもせてまよふたへ

（九）すがゝきかはり

いまどきふられぬとこのうち御くらいしよわけもら

ちがないねぬけの女らう身あかりもん日はとむねか
またしておちやをひきしちまでをきはてふだばかり
ふるかねかいもがをおつたやりてのせんさくうるさ
しくるわはもの思ひこのさとのうれたやりやうりに
かまわぬちやづけにやきみそ心かけこゝらはよひか
んひとつとなんどをうろ／＼さかせどもあさざけの
もふにもひんなるあげやてこざせなひ

（十）五つのうわさ

こゝに五つのうわさがござるいちにいとちやわんに
おゝきな事ができましたふたつふらちはへんじもき
かひてうりきつた三にさがみさぶはあみがさすがた
にさまをかへかけゑくわいちうさじきからのけんぶ
つありやこりや四五はいふくとんひ四つよしたはて
まへのひやきとりまぎれしらてしらはけ四五十はい
のこがしなむさんねうちのとりちがへ五ついせもど
りのをみやげはあめに／＼一にどんぶり二にあかへ
さう三にかうらいせとのそめつけうつぢんのやわた
どのたくみにたくんだこさくに傳右そのうちまいり
て申わけはかめしよじもしよわけもへをしにかいた
おなしく
かけいて給ふはどこ／＼ぞかみは一でういまで川二
でうほりかわ三でうむろまち四でう四めんのあなた
なるみゝづかすぎてぼくせんじふしみのさとにつき
給ふこゝに五つのはなしがござる一にいつくはほん
ごのみぞにつきこんだふたつふらちなせつちですと
んとはらきつた三つみついほうしはすみぞめすがた
にさまをかへちやわんあさゞけくわいちうときや
／＼ありやそりやかちぎねふくとんび四つ吉のはお
ぬすのけんとしうてしろむくさくらのほかしなむさ
んねじりをとりをつた五ついまがわにみうらがござ
る一におはらいなく二に物さしよ三にかけはりせと
のそめいひうつのやのとうだんごつけぎでつくつた
ゐんろうきんちやくとゝさまかゝさまそくさいかそ
のうちまいりて申ませふ何をしよじもしよわけその
とをり

（十一）むじやうのあらし

はしばのけふりむじやうのあらしもせうべんくさき
にこまつたいつもやしよくのいでたちはしゆわんし
ゆをしきあつふてきさてまたにものゝふたとればい
つもしいたけかまぼこのいろのくろきはべんけいか

かみしもぬいで禮にくるせんたくはしの八角をこんがうづゑともなづけたいつのじだいのやきものやらすもとるりきでもむしられぬもふない

（十二）あきしむし

あきもなかばにすきゆくときはなかばも〱すぎゆくときは野べのむしめかなおどろきさわぐくつわむしこそつらけれかうろぎ〱身はみのむしゃやちとでんでんむしなめくじりくつわむしこそつらけれかうろき〱身はみのむしゃやちと出てんむし

をなしく

すてにひまちときこへしときひまち〱ときこへしときはらのむしめかなぐらあいたいたなんとしたおとろきさわぐにしめかたをば見てくいたいのみたいすぎずきやうじうどこんにやくなべやきにしめかたをば見てくいたいのみたいすぎすぎやうじうどこんにやくつとせ

（十三）ながと

ありやながとてたながとおぐらのしきしはねがさがるをぐらのしきしはねがさがるすんと見たれたやまのいアイノテき丶だした〱いこく見ちのくねさめくい

をなしく

出たたかをうすぐもまつ山たま川さけのかんすんとみだれたしらいとアイノテうけだした〱にしをちとせもうしろおび

若みどり巻四終

若みどり巻五

半太夫ふし

半太夫ぶし

（一）うつぼぶね

あしたのあらしゆふべのあめまつほのうらのうつほふね身をうきものとおもひたへいのちもがなとしとふまことも大ぬさのかず〳〵よくのいつわりにならべるひとのこゝろにもついなれなじむたまくらにちぢのやしろのゆふだすきかけてもつれしさゝめにもとふで女ほにもちやさんすまいわしはつとめのまゝならぬよい〳〵ごとのみだれがみそらおそろしやきにそまぬとのにそいねのまくらにはかねもいとわじとりちなけうれしゑのゝめあさゞけにうきをわするゝそのふぜいこわいゆめみる心なりかふしたつらいつきひにもゆびおりおりつゝかた様にあふがうれしゆてうかうかとどふしたことのゑんじややらわするゝひまはないわいなふかきなさけのとこのうみなみはこすともすゑのまつかわらぬいろをたのむによきみとむすひし下ひほをひとりはとかじたまのをのたゆるなげきはありともとおもひしづめるありさまにふたりのそでやしほるらん

(二)すきやてぬくひ

よこくものしのゝめからすいわばきけきのどくのやまこへかねしにわけよき人のしなくにて鬼ひとくちをまぬがれてそれ程までにほかもなくたどりくてみちしばのときしもあきのもなかとてやまだのいなばかりしほにたけのまろやのしづのめがふしをもしろき月かけになくねかわいやさをしかのみだれ心かくろかみのよれるつなとて大ぞうもつなかるゝならいかやたまよのひめをこひそめしいつしていゐもいたづらにゆくさきくらきこひのやまためづらかにときならんほとゝぎすの一こゑかかすかにしやみのきこゆるはこゝはいづくぞおぼつかなさればにやこゝろから世をすみぞめのもりちかきすくせのさとゝこたへけりなにしもく町とかやつゐておかしきことなからうきが中にもものとわんゆびきりかみきりいれほくろよねのくせとていきたなくいつもときわのこゝろしてたれかなさけをむげにせんとはとくちすさみゆくほどにとあるざいしよにつき給ふ

(三)戀はなし

はじめよりつとめばかりておふきやくとたへずかさなるいろごろもついのよるへとなるときははじめのうそもみなまことゝかくたゞ戀じにはいつはりもなくまことともなくゑんのあるのかまことぞやそのほかよろずこひはなしうさもつらさもとりをゐてさすいたおとこのうわさしてともにたのしむちやわんさけ

(四)あたなさけ

あたなさけよごとにかはるあすか川なかれの身こそはかなけれみないつわりのこのさとをまことぞとおもひてやすへておとこのうかれくるよるべさだめぬうすちぎりあすは又にひまくらかはるならひの世の中ゆふべにはおのこたちもとよりもなをちやわんさけよいすきにけりいきたなくふけゆく月にわかれぢのちかきをいとふこゝろにやみたれみたるゝくろかみのすへながゝれとむつことにほとなくつくるもんあきのたちわかれゆくみちしばにくちてかひなしなにのみたちてうき身ながらのくはしはしらくげにげにぬるゝわかたもとうちもねられぬかごのうちいづれおもひはかすくのしなこそかわれこひのみちさりとてはまたあふまでのしゆびをおもひのやるせなくかせも身にいるあさぼらけ

(五)はつせ河

むみやうのさけのよひこゝろしづむおもひのはつせがわふかきながれのせきとめてこゝろづくしのみだれかみゆふかひもなくそのまゝにかのわけさとにかよひきていねもやられぬひぢまくらむかしにかへりつく〳〵とあるときしまばらやふしみのゆめを思ひでにうかれそめにしをりもありいまはまたかゝる世にときとともにおとろへてかすならさりしうかれめににせとむすはんひたちおひさてよい中さためなき身のものかたりをんなはいとゞうちしほれなからゑてうきことをきくもよしなししでのやまつれてこゑんとたちいでゝふりあげみれはおとわやまぎをんばやしもそなたそとかなたこなたをたとれとも人めつゝみのしげけれはありしところにたちかへり夜あけからすともろともにうき名をなかす下河原

(六)今やう

よゝことのはなのさかりはいろ〳〵にまつしほがまはうすいろのしろきにあかぬきゞがやつ名もやうきひはあけぼのにあさきさくらのしなよわくゆきかふ人のかす〳〵の一じゆのかげにやどりして一河のながれおもしろやちとせものぶるきく水にむかふを見れはなまめかしさけかみはむかしとて今やうのなげしまだゆくゑもしらぬそらだきのわかたまのをもあこかれてたとるみちしばしば〳〵にそて〳〵もたしやうのゑんまくすがはらにみのこしてたよりもとめてたまづさとおもひつゝけてうたゝねにゆふべをつぐるかねのこゑあすをもしらぬ身のゆくゑせめてこゝろをはかれがし

(七)なが月

花のにしきの下ひぼもとけてなか〳〵よしなやな見そめずばいまの思ひはあらしをとなをもゆかしさまさりくさもしやきみかをとつれもこよやこよひはながつきよさてもいのちはあるものをうらみながらもまつひとをもしやそれかとみればきみにはあらね月がけのにわにしげりしはぎすゝきすゝしきかせのはつとふきくるそのをとにむしのこゑ〳〵ねをとめていとゞさひしきあきの夜をまつまひさしとたちいでゝまかきによりそひたまひけり

(八)おとつれ

なみだましりのうすゝみにあとさきわかでかくばか

りあかてもおもふ思ひきやく／＼ゆるわらわがむねの火はいつかきへなんきゆるともあだしこの身はきみにさてまかせおきにしまき文にこゝろのたけをわりなくもあかしやすまのうらなきはあらゆるかみにかけまくもいつわりならばしやほんにわけてみせたきむねのくもかよふこゝろになにとかとおもふこゝろかもればけに人やとがめんかなしやとおもふにあまるなみだ河なかれうき身のならいかな

（九）しろりんず

しろきりんずのひたひほもしやらとけぞするよしなやないろにいずるやかうばいのうらふきかへししとやなくまちわびしこよひやいとゞなか／＼しいやまてしばしかねのねのひゞくかず／＼かぞうればはや[illegible]わい／＼となくからすなれもこゝ[illegible]いとゞ[illegible]つらさ[illegible]つけてしらせてくれよかしさてもいのちはよふ夜あけのからすへ

（十）とらが石

それはその／＼いとしさはねてもさめてもわすられぬたゞそのまゝのうつりがとしとゝそひねのいれこゝちあわでいなせしその夜はゝほかへもよりておはすかやまたことこひをおもふかとすこしはねたむこころもありみちのほどうちのしゆひなとやとおもふこゝろからさてもその夜のねくるしさとやあらんかくやはたらせたもふかとつとむるきやくをほかになししのきかねたるありさまはこれもゐんぐわのうちならめそのほかよろづきくばりのせつなる事をおもふにそこひのないのかまゝならめとまだくひしむるいのちげのすへはかしくとかきとむ

（十一）かるやま

ふれ／＼こゆきたんばのこゆき京やの仁左かしまんせしにはのまつさへしろたへのをのつから風かのまするさけふけてまくらかるやまふとんにはたもつけあへすこゝろよきゆめ二ッ三ッ七八十四五すつとんとゝんとうちくむいろ里にそなたならではよい／＼よいほかにはないといふたことの葉のよい／＼よいそのうれしさにこのとし月のうきつとめなぐさむよすかもありけらしされどさよころもかす／＼しやうのわるいはすいからおこるうそにもほれたとさすかうしのちのよかけてたわふれのひと夜ふた夜のた

まくらになかきやみぢやくろかみのみたれこゝろのむすほふれてとふりくらべんあさまだき身はきへかへるあさわかれ今宵ばしとや父のおふせをおもはずはたれか見すてゝかへるべきさはさりながらけさはなどわきてなこりのおしきぞやわがこゝろからつみふかきりん忢はめくりくるわのうちひとりももれぬなげきぞといさめいさむるそでのあめぬれてほすまはなかりけり

若みどり巻五終

ふし〳〵おほき呉竹の世にしあれど月に嘯き花にむかひてかきならしふり行窓の雪紅葉色になるてふたはれ島にはあらで歳比こゝろひかれぬさはあれと閑なれ手なれしことの葉はひたすらくりことのやうに覺へければ何がしの撿校の許にてより〳〵手をかゑ品かはりたるとなえ歌ひとつふたつより数まさりぬればあつめて巻〳〵となし函底にひめ置ぬるを剞劂氏のこふにまかせてかいやりぬることにはなれり

静雲閣主人書

姉小路通堀川東に入る町
丹波屋茂兵衛版

（松の落葉首巻の見かへし）

增補松の落葉首卷　中興當流あづま淨瑠璃

目錄

増補松の落葉首卷

(一)秋の色　あつま半太夫ぶし

いつもきくふもとの里とおもへともきのふにかはる風のおと身にしむことのあしきなくのすへの虫のすたくなるちくさの花とあたくらへなみたの露はしくれつゝ空行月のかけうとくいとゝおもひにうきしづむかりねの夢もむすはれすきぬたのおとにさよふくるときしとて秋をつけくるかりかねのよすかなきこそかこたれてあやなくのこる袖のかにしばしわするるうさつらさかやかのきばもやゝさむくまかきのきくもみたれ亂ておく露霜の猶ものさひし秋の色

(二)わかれの色　武江半太夫ぶし

けにわりなきは色の道まよふは人のならひかや君か仰のつらからは只一筋につらからて情のまじるいつわりとおもへはなをもます色のきるにきられぬあひしうのれんほのやみのくらかりにくわたくを出てやう／＼にたれまつはらの橋過て河原おもてを見わたせばけふは嵐もはけしくていとゝ身にしむ戀風や君かおもかげみにしみてそなたの空も打過ぬ名も淸水にさし懸り歌の中山せいがんし爰はいつくそおの〻しゆくきけは昔の名にふれしかのふかくさのしやう／＼の身をしる雨もよそならずわか身のうへとうらめしくけふの名殘のきぬ／＼はなか／＼つらきわかれちに月まちかほのなつかしくたゞあこがるゝ思ひねにうたゝねもりの夢さめてとあるみてらにつき給ふ

(三)ひとりね　あづま半太夫ぶし

さきそめしよりちもとの花のおもかけを見そめにしより我心空行雲のきへ／＼ときゆるはかりのおもひねにとこの山かせ夢たえて枕にかゝる月見ればちゝに物こそかなしきに身はかけろふとおとろえてあるかなきかに世の中の身をしる雨にくちはつるかはくまもなきそての露いはぬはかりそなにはなるあしのしのやの下にたゞけふりものかわむねの火のつゝむとすれと色に出てひとりこちたきねやの內

(四)十六夜　同　半太夫ぶし

くもゝなき秋の今宵のいさよひに見しよの人のうはさせんまつもゝしきのほそどのにさやけき月のうつ

たかく歌のだいとや是ならし扨我戀をいのるちやう
おもひかけすはみやしろの月にわか身をかへり見て
うきをとふやとひとさとのかやかのきはのたけかき
よすましきりたる心からくもれうき世も月も見はて
しすみの衣の袖わひしやくはしにもあまりぬる琴の
いつきよくたまだれのほのかに見へし月かげや十二
や三の袖つめてすいなしたしの日に立て舞子なりふ
りつかのまと月を便りにかよふ島原しのふれと松の
くらひや梅の庵もつたあけやの其けしきけこならぬ
こそよねはよき月にうとまれおむかひとかふろかや
しのあとなりにおろせ〳〵の小ぢやうちんおかへり
といふ聲たかくのへにすたくるむしのねとわか身も
ともになきあかすみあかりくらきまぶくるひあだめ
にかくる月かけやしはしはうさをそかたりける

（五）助六後日　江戸半太夫ぶし

とかくほとけのおしへにはいかなるやぼもきらひな
く一つはちすのやくそくもせめてちからにたまほこ
の涙かすそふ道しはの露と此身をあたくらべあだに
おもひしあたしの丶煙かくまになくからす今のうき
身のすて所あすはちまたにさらすなのほんにわたし
もこなさんも千代をやちよと契りしに今はひきかへ
さきの世をせめてふたりかあてどころさためなき世
やいにしゑは人の心の中ながらそれとすいしてかく
文にあるひはかみ切ちをしぼり涙にものをいわすれ
ばあまりかはらぬ人心またこなさんもそのとをりこ
とばとがめぬさきくりにあへばせひなくわひことの
身はふししつむ涙川あふかたすいなわれ〳〵がいま
かく成はさりとてはすいが身をもつためしかや此年
月の間にはあらゆる夢の數あれとかく成事は夢にさ
へせめて此世に身をふたつおきところなきわれ〳〵
かましてめいとを見すしらずとふしたわけなさとじ
ややらとふやらかうやらしらねどもせひにとうとひ
所じやときけは此身もたのもしやあ丶さりとては今
まてはふたりが中に此しやはをわかま丶なりとおも
ふ事誠一夜もありもせずかふしたせつなきあいたか
らいのちかけ成戀草をねひきに成とはやかる丶跡に
のこりしは丶樣のいと丶なけきはおいの身のふかう
のうへのふかうとはしりつ丶しづむ戀のふちうかめ
てたべやみほとけと地にふしなけくもどふりなりげ
にわれとてもふたりなきこなひのおやのあはれみと

めうがに付て此ごとくたゝすむかたもあらばこそつみをゆるさせ給ふべしあれ〳〵あれ〳〵夜明のかねの聲里を行かふ人のおとあのかね迄もわれ〳〵か今はわかれと手をとりて道のほとりのちそうとう露のうき身のおきところ

（十六）京わらんべ　　あづま半太夫ぶし

まつ正月はかとにたつとよまつたけのかけにはねつくてまりとるぶり〳〵ぎつちよをてにふれてたまをうちでのはまゆみやなゝくさなづなよとんどやおほんかるたほうびききさらぎやはつむままいりのみやげとてすゝやつぼ〳〵かさくるまやよひになればにわとりあわせとり〳〵てひいなのとのゝいもせごと二八あまりはをとなひていろにいづるやさくらいろむめやつばきのはなよりもうづきのけふのみまつりになごりをしきはせんだんたんごゑたんこたんご〳〵ヱゑたんごのせつくゑよりきあやめにかぶとをのきばにかさらせうちあひうちつれたけむまのひまゆくこまのあしはやみはやぎをんゑの夕すゞみほたるこいとて水あそびたもとすゞしきなつ衣ひとよあくればはつあきのぼんのおとりはいせおどりきそん十七とらのとしまいるやくしはとらやくしさつさとふりやれさつさふれ〳〵ふりそでのそめしもやうの月見くさこづまにぬいのきくがさねさてはつ冬やかみな月つくやいのこのもち花もこはるのなにやにほふらんしもつきはうぶ神のあふたけたけ〳〵しわすにはおとこのもちつきたちやゆきころばかし雪まろめ四きをり〳〵のたはふれはおにのこぬまとうたひしも思へば〳〵此かみのむかしなりけり今のよにせんだんごの大明神つきずかはらずわらんべのふくとくいのるまもり神とておしなめあゆみをはこびけり

（十七）かつらきつぼねをり　　あづま半太夫ぶし

さてもかつらきはもとよりつとめのあさましきうちよりもみはしちかきつぼねにをりあるがなきかのうきすまひなみだやそでをしぼるらんとはおもへとも君ゆへとおもひさだめし心にはうきもつらきもわすれぐさつほねの中もすみよしのきしの姫松いくよまでかくうらめしき川竹のふしてはゆめにその人を見まくほしさようつゝにもわすらればこそとひたすらにかはく間もなきたもとかなさるによつてうき世の人かつらきこそは道しゆんがはからひゆへに思はず

もつぼねにおりしと夕くれのくるやら〳〵大じんとのは馬もいなゝくくつわもなるに門立しげきおざゝはら戀風しとうにかつらきはつや〳〵なびくけしきなしとにもかくにもかつらきはなさけのふかき女らうとしたはぬものこそなかりけれ

（八）放下僧道行　武江半太夫ぶし

よしやつゝまし袖の露かゝる浮世になからへてなになか〳〵にみつ瀬川をなしわたりにともなはゝ今の恨もあらかねの土の車の我ながら思ひをいつかつけの櫛とりも見なくにくろかみのみたれ心もとけやらぬ姿は人めはづかしのもり田の里を夜にまぎれ忍び出ればほのくらき月のくまたも影うつる川井の宿は是かとよそのかみ川はいさぎよくすめとも下はにごる瀬になにをたよりのねなし草うきつしづんずしつんずういつなみのうね〳〵ゆられ〳〵てきつれ川水のうたかたあはれけにきへぬいのちぞうちへの里おもきなげきにかろき身はしやはにあく津のふなてしてねがいのまゝにかのきしへいつかいたらん白澤やつのくむあしのほどもなくかれ葉にかせのそよ〳〵そよと秋をしらするおとつれのたが玉つさをかけてくるはつかりころにおとろきてときわけころもあらひほすしつがつゞれのさほづくみよはにきぬたをうつの宮きねしならはし神ごゝろやはらぐひかりあきらかにまことをてらしたまへやとのつとをあくるさつさつのおともすゞめのみやとかやちかひもかたきこしのみぬよのとりもはをとめんきりのはなさくこがね井やたまのつるべの水けふりむろの矢島もよそならすくもとのぼるや西のそら夕日小山のはにいればけふもかきりのかねのねにあすはもとより白玉のやとらん末はまゝ田の里あれてやさしき八重むくらこすけよもきふかるかやもみだれあいたるのけの宮此こがきせいすかのねの長くもかなと玉のをゝかなたこなたへよりかくる二つのわくをくり橋やくりかへし返してもむかしは今にならはこそさつてかへらぬ我つまのひかずばはやく杉戸の宿ののきをならぶる家々にたれかはやどをかすかべといや跡に見なしてこしがへやたゞ何事もふりすてゝきみにさうかとたのもしく中島根の井櫻田をたどり〳〵行ほどにせんじゆの川にぞつき給ふ

(九)露の前船露　同　半太夫ふし

言の葉をいとでむすひてした心こひといふ字によみならひうらみねたみもつれなさもあだもなさけもいつはりも此むすびめのとけてよりいとしにくしと見もわかぬゆめもうつゝももとひとつ二つとはなき道すぢも行をしのびちかへるをはわかれちと又よひかへてあふさきるさにものおもふ思ひのけふりよこをれてそめいろよりもなをたつきわかたらちをの身にかゝり行てかへらぬよもつくによすがもいざやいさらこのすみこしさとをうかれ出なみたのたきも高なわのおちてくだけてちり〳〵にきえもうせなでうたかたのあはれつたなやいやはかなないそなゝいそいそべのちどりこよひはしめてたつなみのなみのたちゐも何ゆへぞかりなるやどに心とめずはうき世もあらじ人をもしたはじ松風にきりのたへまのあはかづさ船は千ぞういらふと萬ぞういらふとまゝよさあら〳〵あすの命もしらぬ身に三日さきみつふじの雪かのこまたかのよそほひもたれにかみせんあまさがりひなにみゆきもあらばこそとはいゝながらみくるまをかけてたのむやうし町のうさにはあらぬみやどころつまの行末あんおんにかたきをやすくうちおふせふたゝび三田のみづがきと又のあゆみをきせいしてふりあふのけは入船の目あてにたつるみあかしの上のおてらのさいかいししやぎり〳〵づでんどゝうつやたいこのねのよさよかはすまくらのさわりとてふたりぬるよはいとひしにつらさかへつて有かたやよしあし同し草なれはなにはも爰そ雨によるたみのゝ島をうつされてあづまながらも名はつく田かやかのきばも住吉の藤のたればをつたふ水ながれのすへはふか川のしほのよとみはくる〳〵とともへにめぐるみつまたやなふ〳〵あれ〳〵あれこそは月の入さをまつち山神は大しやう歡ぎてんいたきあふたるそんたいはいもせむすびの御はうべんげにたのもしやたのもしやかほどにごれるうき世にもすめばすまるゝすみだ川はやせにあかぬみやこどりいざことゝはんことのはをむすびなをせばこゝろのいとこひのみなとにつき給ふ

(十)たるゐのおせん　あづま半太夫ぶし

おせんおやこの人々はひとにそれとは見へしがためともをもつれすたゞ二人ひそかにたびのよほひある

心の内こそあはれなれけいらうの山にひゞくかねはやあかつきをもよふせはなみたたるいのしゆくを出東にむかへはほの〲とよはあか坂のあさひかげあをのがはらにかゝやけば露はさながらなりのたまひかりをますにことならずたれもみつやにきたかたやおいをやしなふたきみつのあるとはきけどはかなくもさらぬわかれはうらめしや名もたのもしきぐせい川我々よりもなき人をわたしてたばせ給へやとふかくきせひをすのまた川こずゑのはなにうぐひすのはるさめいとふかかさぬいのさとにつゞけやつゝじがさきいろにそ出る袖のつゆきゝし人にはねさめにもゆめにもさらにあはでのもりひとつはちすのれんたいへゑにしくちずばいなば山思ひのけふりはれてこそ心きよすの川風はさもひやゝかに身にしめとその名ばかりはあつたのみやあつさをしのぐかさ寺やなにとなるみのすてをふねよるへいづくにあり松の花もちりうのみたらしになみのつゝみやうたう坂ゆみはなけれどやはぎとはいもせぞたゝにおかざきやごゆあか坂のながれの君よしやよしだの人心おもてうら有ふた川とみなしらすかのたうげよりおきをはるかにながむればべう〲としてきはもなしかいがんそこともしらぬひのつくしの海にやつゞくらんだうどうつてはさつとひくしほのみちひのはげしくてさしでのいわをあら井の里はま松かへのわかみどりいつもときはの色ふかくいけだのしゆくを見るのはらわきてながるゝいづみ川いつかかたきを見つけのがう風もかさまるふくろいのながきなはてをたど〲とたどりかねたる世中になにかたのみをかけ川や夢もむすはぬかり枕さよの中山なか〲にかくこゆべしと思ひきやなにのみかねてきく川の色かにめでゝ立とまるゆきゝの人は大井川かくきへわびしつゆのみははや〲くさばすおかべのしゆくとはおもへ共まてしばしうらみの一太刀うつの山よもとのかげはあらねどもまりこのしゆくにさしかゝりてごしあへ川打わたりはる〲こゝにきよ見がたそらにもせきの有ならば月をとゞめてみほがさきそでしがはまのおきつなみさつた山より見わたせばゆいかんはらに打つゞき雲にそびゆるふじの山雪の内より立けふりうへなき思にこかるゝはけにうき島がはらなれやそよ〲そよとふく風にかさねのきぬをきせ川のしゆ

くうちすぎてほどもなくあけてみ島やはこね山そのふたご山是かとよはた小田原もあとに見ていつしき佐川こへ行は梅さわしぼみさかみのかうこいそ大いそひらつかやひきぢふぢ澤とつかのしゆく日數かさねて行ほどがやねがひもやがてかな川のしゆくにぞつかせたまひけるとにもかくにもかのおやこの人のこゝろのうちあわれとも中々申ばかりはなかりけり

（十一）おせんものぐるひ　江戸半太夫ぶし

これはさておきおせんはいつしかきやう女となるかみのとゞろ〳〵と中そらにたちゐるくものあともなくうきてたゞよふはかりにてそこどもいさやしらつゆのおきまどふ身はあちがはらまたき色づくわか袖にたれゆへ月はやどるぞとよそになしてもとはれなはふかきなげきもあさくさのはすゑにむすぶ白玉のひかりさやかにすみだ川たへずながるゝ水のあわうたかた人はつゝかなくありやなしやところたてゝとへといはねのまつち山いふこゑくればいほさきのいほりかたふく板ひさしあれにしのちは風ふてゝふわふわふわのせきならはとりのそらねもはかるべしゆるさぬものはあふ坂の人めのせきをしのぶがをかよししのはすの池のをもげにいさぎよきしみづむらゆみはり月やいるさの山やなかの木だちしげりあひ花のさかりはみよしのゝよし野よりなを上野山のぼれはくだるくるま坂かなたこなたを見わたせばくんじゆのきせんとり〳〵にだてをしたやの里とかやおも白むくを引ちがへうわき〳〵は色々のもやうもよしやよしなか染くゆる思ひの數々をいはでたゞにや山かすみのまよりほのかにも見てし人にはあひたらぬ淺きちりめんちやちりめんうこんべにかばうすねずみ色ある人にみせばやなおしまのあまのぬれごろももしほかく袖一つまへしゆすやからあや白どんすぬひすりはくのはゞびろをゆかりの色やむらさきのちりめんてぼそむすびさけたれ白すげのかゞかさをまへふか〳〵ときなしつゝなまめきみつる折からに花のこかげもかりの宿心とめそとふくあらしらんじやのかほりさそひきてさりし夕べの手枕をいどゝ思ひぞ出さるゝ我ももらすなもらさしとうつりがふかくかさねたるつまの行ゑもしらいとのみだれ心やくるふらん

（十二）上るり御せんやりをどり

さみにいさんでひとなどりふりやれおふりやれおほとゝりげのふりそできやうれつぼつたてあづまいりちと〳〵ちとかちをめされさしつかとせやりはぢよん〳〵ちよろぢよんぢよろさんまにもたせろまつかせもたせろまつかせまつかせ〳〵まかせてをけろのさて〳〵なまかせておけろのさて〳〵ひやうし有てぢよん〳〵〳〵ぢよんぢよろ衆ひやうし有てちよん〳〵〳〵ぢよんちよろしゆちよんちよろさんまのやりの手ついのぬりがさおさきでふれさ〳〵おさきで〳〵さき〳〵〳〵あと〳〵〳〵あとさきそろへたとうちうくにははなのお江戸にとんとつついたはやしなかわをこへてあつまをさしてくたりしをみなかんせぬものこそなかりけれ

（十三）參會和曾我道行　江戸半太夫ぶし

戀はくせ物みな人のこひはくせもの皆人の迷ひのふちやきのどくの山より落るながれの身うきねのことのしらべかや引手あまたにしげけれど思ひいだすはかのひとりかたみのこまの口を取つまゆへしづむありさまはしちだたいしにつかへにししやのゝどうじがそのむかしたんどくせんのそはづたひこんでいこまのもろたづなもろきなみだにくれけるもそれはいきてのわかれぞやわか身のうさにくらふればたちもおよばぬふしのやますそのゝはらは草かくれつゆの下にやきやうだいのいつなきからと聞なさんしぎたつ澤にとふ鳥もやよやあはれをしるならばつにへてくれのかねのこゑじやくめついらくとひゞけ共りんゑの花はちりもせずともにくわたくの門をいざいづのみ嶋のしほきとるうらのけふりの一むすび又ふたむすびよれてもつれてとけてみたれてなびき大いそ君をこいそのみちすがらさりしゆふべの比までもこゝをかよひてきにけらし此こまよ〳〵むちをうたれしうらみをも今はかたみと思はずやとくとき給へはさすかけにきゝいれたりしふせひにてかうべをうなたれみゝをふせしうのわかれをなげきしは人間物をしらぬなりたがたまつさのはこね山なみだにそみて赤澤山かまくら山のやつ〳〵もかけけをさるゝかあし高山かるもかくなるふすゐの床に石の枕やこけむしろふたりかはさはつらからしまつ人もたぬかち路のたびすゝのしのはらまくづが原こすげよもぎふ玉かづらおしわけかきわけしどろもどろに行なやむぬしなきこまのむまかたいやよほくに出てあふ

夜もあり〳〵まりこ川なかれてはやきこしかたや御身とても我とても花ならははつさくら月ならは十三やさかりにたらぬ身をもちておもふ人にはそひもせずかゝるうきめを見る事よこれもたれゆへむらさきの一もとゆいのゆかりそやなけき給ふななけかしといさめられてはいさめつゝ水もらさしとちかひてしそのうつりがものこるやそで手に手をとりて行ほどにそがの里にぞつき給ふ此人々の心のうちしるもしらぬもおしなべて皆かんせぬものこそなかりけれ

（十四）としま八けい　あつま半太夫ぶし

たち出てみねのくも花やあらんはるかすみすみのそらもうらゝかににほひもふかきむめわかのやなきのみとり一しほに見ますかゝみか池のおもこのはうつもる冬がれのこほりもとけてさゞなみやみなぎる水のせはたえていまはあさぢのせゝら木と名もきしかげの山吹はをぼつかなくもさきわたるうへのゝみねの花ざかりはるかにながめやなか寺もりの木すへもしげりあふ五月あやめにさなへとる田中の村の夕すずみかやりふすぼる夜もすがらくいなのたゝく柴の戸はたがすみた川すみにごるよをうし嶋といふしきやうぢやくの橋も今こゝにうつせる御世はゐいたいのしま〳〵うら〳〵のこりなくはるか東に見へにけるまたなにあふたゞのもりゝしの御せんの宮しろもほどふるのきに月もれてさびしきよはのねざめにもゐきろのすゞのこまかたやかのしら川のぎよせいにもかすみのせきかの[illegible]らあるいしのまくらぞうばかいけあきのけしきはかなしくもむじやうがはらのくさのつゆきるまもなくたちさらんはしばのけふりあはれにもなからんものは世の人のさだめなきこそいみしけれまつたかしこの一村はうかれめつたふさとなれはうきよの人のたちまよふ心のはなのいろいろにをのかすかたをしのふかさかさのしづくもこほれむめこりやどうしやけさのあらしや夕しぐれぬれてほすまもなぎさこぐあまのおぶねのつなかれぬ身はうきくさのねをたへてさそはれわたるあすか川なかれの身とてさま〳〵にしなをつくせるいろこそでをぼろあけぼのかゞそゞやすみゐのげんじしきしおりおり〳〵かはるふうぞくはまたおもしろきところなるさてまた大ひの御てらはだいどうくわんねんやよひのころかのかはよな〳〵ひかりつゝなみもい

さごもこんじきにたゞてんぢくのむねつちもかくやとばかりうたがはしされぱところのぎよふとものはしめのほとはおそれしがしたい〳〵にちかつきて見れはまさしく水中にぶつさうあらはれましませはいさもりあげんといふしほのなみまをわけてちひろのあみ引やちかいのてにもれずあがらせ給ふそんざうのりせうあらたにましませばこすへの雪もさながらにゑんりの花とうたがはれ二六時中のかねのねはほんのふれんぼのめをさましじひあいれんのともしひはどんよくしんゐのねをたちてほつしんほだいの身にきするかゝるそんゐん水所をもしらせ給はぬそうぞうしやはや〳〵御出候へとことばにみのる玉かつら花やか成しへんせつのよに面白ぞかたりける

（十五）與作二代目　とこよおまん　半太夫ぶし

頼をかけてすみなれし五ちの如來を立出て是やうきよの中やしき五ぢよくの水となにたてど月も宿かる直江の里いつも行きは大下の橋駒もとゝろとふみならすおとは高田のしゆくとかやいさやくわたくを今いづみゑにしおはゞとねかはしくおもはん人はわれとわが心のあかをあら井の里わこくの本か二ほんぎのしゆくをもはやく板まふく風の便もとむるかとおもへばつらきせき山やなをせきあまる涓川たぎりておつるみなかみをなに尋けん物おもふわが身としれば中々に恨はあらし返す共雲の夜はごとゝへにて頓るあとなくはれゆけと心のきりのふかければ妙光山も見えわかずおまんなんだにかきくれてあらい風にもあてまい君をふゝきはけ敷道すがらひろはせ申すうたてやと見あげ見おろしかこちけりとこよのまへは御らんしてこはおろか也わひぬれはとらふすのへをわけきても身をはおしまじ只うきはいとならなくにわかれぢのそなたこなたへつれぞ布引山田中のしゆくのかり枕しくやこもろのおきわかれたゞぬぎすてしくつかけや淺まの山の淺からぬ思ひのけふりおひわけの風にみだれてきえ〳〵きえとむくひのつみもかさ井澤日の夕暮のたひ衣うすゐたうげのさがしきにあしをつまだて身をちゞめいわまつたひにきもをけしあゆみかねたる坂坂本にいかでかわれを松井田としばしもさらにやすらはずあんなかすくればいたはなのさかぬこすへは高崎やおりひめならぬ身なれ共からす川をばこへぬれどあふせはたえてなぎさこ

ぐあまのをぶねのいざり火もたきすさめつゝくらがのゝ夢ぢはかなきちぎりぞとかげさへ見ゆる山の井のあさくは人の思ふ共わがほんしやうはふかやの水ながれの客のさかつきをくみくまがへになれそめてわすれもやらずこうのすやあはれよしなきたはふれはたゞおけ川とうちすてゝいそぐ心にひかれてはひばにもむちをあげうの里またならびなき大宮とおもてうらはのみづがきをはるかそなたにふしおがみむかふをみれば家ごとにりよ人をとむるつとめとて思ひそまぬももらさしと人手をにぎるわらひのしゆくかくうらめしきよの中もわたる物から板橋とゑんり江戸をもあとにみてやう〳〵行はほどもなく五つのさはり淺草のみてらにこそは着給ふ此人々の心のうちあはれ成共中々申計はなかりけり

（十六）曾我かけ物揃　江戸半太夫ぶし

先一番に見へたるはにわう第二代けねかうの第二の御子やまとだけ尊也たん正美妙の御相好御身の長壹丈御力はむりやうにまし〳〵て拾六歳の御時やそたけるをさしころし又とうゐせいばつに駿河の國迄御下向ゑびすぎやくゐをくわたてゝかれくさに火をはなつほのほ御身にせまりし時みこと御けんをぬき持てはらひ給へばけんのいきほひ嵐となつてみやうくわをたちまち跡へふきもどせばそくと殘らずほろびけり今の矢いづは爰とかや尾張あつたの明神とおがまれさせ給ふなり扨其つぎは平城の御宇につかへし田村丸勇力ちほうかねそなへねび觀音の力にてあくまをしつめとういをうち今は近江の大山に正一位明神とあらはれ給ふは有難けれ其次は田原藤太ひでさとまさかどをほろぼし又りう王にたのまれてみかみのむかでをいとめたる古今ぶさうのゆうしなり第四はんはよご將くんとがくし山の下もみちいろあるによせうにひかれつゝむみやうのさけにゑいふしてをに一くちもしらさりしを正八まんのおうごにてゆめさめきじんをしたがへたりさてそのつぎは御せんそ源まんちうすみよしの御じけんにて多田の大じやをたいぢありばんみんのくをのぞきいまごんげんとあがめられゆみやの神となり給ふ次に賴光よりのぶより義よしいへあくげん太その中に取てもちんぜい八郞ためともはゆんぜいはならびなくをにがしままてせめしたがへす百人とりのりたる大船をくつかへす

こまもろこしもおそれをなし其すがたを繪にうつし門のまもりになすとかや其次は九郎御ざうしきかずまなはてをのづからけんしゆつの妙をゑて七尺のひやうぶ高からず五丈のほりもひろからずはかりことはごし孫子てうし房にもこゑつらん同つゞゐてむさし坊佐藤次信忠信やさかた渡邊ほうしやうやさだみつすへたけ仲光かれらは何れも忠ふかくちからはやわさたぐいなきめいたい無双のもの共なり若君をはじめ奉り若殿原の鏡として其身をてらさは末代に武略のほまれをゑたまはんと四べん八音よどみなく語り給へは老若一度にあつとぞかんじける

（十七）櫻姫ごばん人形　江戸半太夫ぶし

先ひがしははるににてたいゆふれいのむめのはなむかしながらの山ざくらふし見さへたのはなまでも木木のこずへにさきみだれひわこがらうぐひすののきはのむめにはをやすめねを出しかねたる所にはけいけいほろゝのきゞのこへけいならばけいとはなくしてなんぞやのちのほろゝのこゑいつも春かと見へにけり南はなつににてすはまにいけをほらせいけの其中にはほうらいはうじやうゑいしうとてみつのしまをぞつかれけるしまよりろくぢへはそりはしをかけさせはしのその下にはうらしま太郎がつりのふねどうなんくわじよかうつぼぶね五しきのいとにてつながれたりじやうらくがじやうのかぜふけばしゝのあそびはをもしろや　かゝろめてたきおりなれはいさみゆゝしき御馬の初五十三次にかくれのなひ男　よくをこめたるたけ馬をさて〳〵見ごとにかざりたてたつなかいくりしつしつどふ〳〵どゝんととつこいとつこいせ　あさの出がけに小むろそれはぶし出がけにやあさの〳〵出がけにや小むろそんれはぶし一こへ二ふし三藏やいふたりづんづんつれだちさあ〳〵ゆくべい〳〵くつわのすゞがりん〳〵から〳〵りんがら〳〵りん〳〵がら〳〵りんがら〳〵はいどう〳〵はい〳〵はい〳〵はいどうしあつはれ御馬か　上手と〳〵がのつたるのつたぞさて〳〵見ことゑしやみにひかるゝこまのいさみや

（十八）平あんじやう草花つくし

江戸半太夫ぶし

あらいつくしの草のかず〳〵いろは山ぶきふしの花きゞくこうきくさくらさうしをんりんどう女郎花思ひの色はいわつゝじかものお山にさく花はだんのつ

つぢとしろつゝじたが手にふれてもちつゝじきゝやうしやくやくわれもこう忍び〳〵にくる〳〵風車すがたゝへ成そのふせひさゆりにゆりかけ〳〵さつとゆりかけひめゆりにいつかそひねのとこなつやなもゆかしきはびじんさうかほよはなこそひとしほにいろもにほひもふかみぐさをくしらつゆのたまつばき身をせばめつゝかげやどす月見ぐさこそやさしけれげにやまことに有明のつれなく見ゑしわかれよりふたりぬるよのかなしきはをのがつばさはかはせどもおもひしらずやこゝろせでまたきなくねのけいとうげつばなまじりのすみれぐさきみがすさみのてまりのはなよひいふうみいよこゝのへのとんとをちてもなはたゝじふかき心のそこいをば人にもらすな水あふひいけにをもだかまこもぐさ我はのにさくあだばなよおらばとくをれちらぬまにまれのみゆきにいざさらばみきをそなへてとり〳〵にゑいりよをすゝしめたてまつる

（十九）みさほのまへ忍の段　江戸半太夫ぶし

給ひけりわひしき中にも世の中の戀路の色にてとゝめたりうつゝなくも天王はみさほのまへがすがたをば御らんせしよりあけくれに心をつくさせ給ひつゝ御母后の御前をば忍び出させたまひつゝひめのねやに忍ひ入こなたにたゝずみをはせしがせうじにうつるともしびのかげのうちより見給へばそらだきのしめやかにけふりきへ行折ふしにみさほの前はしやうしをあけて見給ふにゆきにきらめく春の月しくものもなきけしきやとにつことわらひしそのふせひふさんのしんによがくもとなりちきりのこせしおもかけやりふじんがいにしへはんごんかうにうつろいしも物のかすにはあるまじとゑいりよひとしほなやましくちゃにくだくる計りにておもひにばうしてましますがゆきをまろめてひとつかねなけつけ給へばみさほのまへあゝよしなやたれなるらんとたもとにかゝるゆきうちはらひ〳〵さはりさわらぬへんとうに天皇いよ〳〵あこかれさせ給ひつゝいやよそ〳〵しきみさほの前はづかしながらちんすでにいもとすかたをかいま見てたちまよひぬるくものおもしうかれてこれまできたりたりせめてはそれかとしろたへのゆきにはあらできへはてん我たまのおもなよ竹のひとよはかりはなもたゝじとけてかたらんわがをもひはら

させよかしとのたまへばみさほのまへはうけ給はりしばらくいなせなかりしがやゝあつて申やうあらもつたいなの御ことやげにやこひぢのならひにてたかきいやしきかぎらねどさしてそれともあやめぐさあやめもしらぬわれゆへにきみの御なをたてんことさりとてはおそろしゝゆるさせ給へと申つゝさしうつふひておともせすきみはいよ／＼たへかねさせ給ひ神のいがきをこへぬるもこひぢのならひとがめなしうらわかきはつ草のねよけに見ゆる身をもちてたがたまくらのむつことぞ語り給へと有ければひめは此よし聞給ひまことに君のせんしにはなびかぬくさ木はなけれども此みちひとつはいなふねのとてもなひかぬ我心ひきみさせたまはんとやあらはづかしの御ことやはや／＼かへらせ給ふへしきみはあきれてたち給ふがよし／＼此身はていとよりをち人の身となれば女にも見をとされかゝるつれなき有さまぞや我もり國が手となつてかゝるふぎをいひ出しおもてを見られんはつかしさよさりとてはあやにくにおぼしきられぬこひぢのほどかへらんとするにひかるゝはうしろかみのゆきてはかへりかへりてはまたゆきにひへゆくぎよくたいのいたはしかりける次第也みさほのまへはさしのぞき御いとおしくやおもひけんをぼへずしやうじをさつとあけなふいかにわがきみさまはるのよかぜはおどくぞや御なふとなればものうきにこなたへいらせ給へとて御手をとつてうちにいる御手もさすがよはの月くもにかくるゝふせひにてしとねのうちにいりたまひすへはにようごきさきにもたてたまはんとの御ちかいわりなくかよはせたまふにぞごうたのにようごと申せしはみさほのまへの御ことなりひよくれんりの御ちぎり心のうちもしたひももしつほととけたる御なか／＼きせん上下おしなへてみなかんせぬものこそなかりけれ

（二十）櫻つくし　江戸半太夫ぶし

としのよはひは十三四五なるちござくらみめはやうきひきりがやつめもとにこぼるゝしほかまやめしたこそではなに／＼ぞあさぎさくらにかばさくらもみかうはいのひさくらをめしかへ／＼なさるゝ時はしつが心はさみせんのほそりて三のいとざくらまつ夜は君かをそざくら忍ふにほゆないぬさくらこせはすこしもねがひはせねどすみぞめさくらふげんぞうか

のあつもりにうき世をすてしくまがへさくらならの都の八ゑひとへ京九ゑはひろしといへどまたと有まいあの君を花のしんに立をひて我下くさとぞ成にける

（一）小うた松風

かたみこそ今はあたなれ足なくはわするゝ隙もありなんとあらなつかしのゆきさまやなれしその夜のいひかはしふたりをめして立わかれ今はあだしばしわかるゝとも松としらかはいまかへりまたはこんどのことの葉をいひかいなしいや世をさりて松風もむらさめも袖のみぬれてよしなやな身にもおよばぬ戀ゆへにかとりのきぬやたてゑほしそらたきのかはのこれともおもかけは見へもせず夢ともなしやうつゝともまつのこかけにたゝすみて袖はなみたにひたしけれ

（二）わかれのかね

わするなよほとは雲井になりぬとも空行月ともろともにめくりあふせの松嶋やおしまのあまのぬれ衣いかにほすともあまをふねこがれこがるゝおもひねに床はづかしきけさの夢さめてはもとの涙あらそふくもまよりそれとしもなきほとゝきす只一聲を聞よりもうきをとふかとうたがはれなつもはやなかば過行いよはつ秋の虫の聲々おさひしあはれもやうすおたもりのいおりさびしきねやのうちすむかひもなき世の中にわかれのかねを清水のあくれは大非くわんせおんちかひをたのみ今一度たかひに見えつみへられつかはすことばもなかりせばとても此身はむもれ木のくちき櫻かさねさりとてはいつくる春に我花のひらくることのありはらや昔を今になぞらへて思ひの床にふししづむ

（三）うは玉

あふことのたへてしなくはなか〳〵にかふるこゝろのなになれやしらてだにこそとしをへてあひみしのちこそ戀はまさりけりなをあやにくのあきの夜やそれとはしらでうば玉のよはのけしきもあけそめてわかれし床のうきまくらわか身一つの思ひしになみたさへこそとゞまらでふちはせとなるにあすかゝはふかきなさけの袖ふれし身をしるあめはふらねとも心のそらに行かよふ人しれずなをあふことのはるかなる身のものおもひうき身をたれかなぐさめんおもひ

しらずもとはぬ身の戀はつきせぬものおもひ心つくしのせきにこそあれ

（四）しのぶ戀

しのぶ心はおもひにまけてうきなたちまちたつともよしやだいじかさなかれたへせぬなみたの川のなみだたちさはぐ我か心いなものいなものになるかねのおとあふにわかるゝいのちにてふしゆびにかへるあやにくや

增補松のをち葉首卷終

増補松の落葉巻第二

中興當流淨瑠璃

目録

増補松の落葉巻第二

(一)うつほふね　　　あつま　半太夫ふし

まつほのうらのうつほふね身をなきものにおもひさへいのちもかなとしとふまことに大ぬさのちゝのやしろの夕だすきかけてもつれしさゝめにもどうで女房にやもちやさんすまいわしかつとめのまゝならぬよい／＼ことのみだれがみそらおそろしやきにそまぬとのにそひねのまくらにもとりもなけかしかねもなれうれししのゝめあさけにうきをわするゝそのふせいこわひゆめみしこゝろなりかうしたつらいつとめにもゆびおりおりつゝかたさまにあふかうれしゆてうか／＼とどうしたことのえんじややらわするゝひまもないわいなふかきおもひはとこのうみなみはこすともすへのまつかはらぬいろをたのむ身君とむすびししたひもをひとりはとかじたまのをのたへぬちきりはありともとしつみはてにしゝきたへにふたりがそでおやしぼるらん

(二)竹林寺　　同人作

しろむくにひとへおひしたよゐのゆきいつそのくきかきゝたひのとすれはかくすそのうちに下寺町になくからす竹林寺のかねのこゑあふらはこれととうゐんなし何のはじややらあき風のあま戸／＼におとすなり心ほそさようらめしさそれほとゐひはあるまいに申／＼とおこすれとたゝくちなしとものいわすにくいことしやとおもへとも氣に入たひかゐんくわなり

(三)文ことば　　同人作

まことにふみはねやのともいよし御げんとかいたるはほたしのたねか花すゝきほんにせいもんいとしさにいくよのゆめをむすひふみかたさままいる梅よりとおもひまいらせそろへくとわけのさかつきいろめいてわきていつみのおもわくはたゝあひまして／＼またのゐにしをまつかしく

(四)こぶどうじやうし　　同人作

みつからと申はそもたれしやそなたのためにも姉か小路のこぶじや何ゆへにこさんした何ゆへとはきよくもなやうらみたら／＼絆汁のつまの心のあたしさにわらはゝだしにつかわれてきもうつりがのこせう

のこはつとなつみときくからにあさ夕むねをやきこぶやいふかいわぬかかもしこぶこゝろにこめてむすひこぶしのふむちつけみちのくのつらき人をはまつまへこふとはおもへともまたわきかへる心の水すに入しほにおほるゝもせんせさたまるしゆくえんなりしんゐの海をおよぎこしいづくまでもつきまとひくるりくる〳〵まきこぶやくいさきひきさき刻こぶ思ひをはらさておくへきかといふこゝろはかりはひばちのそこにひゞき渡てほむらおもひはぬうくはともへごとくてつきうかなひばしおもへばこのかねうらめしやとまたあふりこにそいりにけり

(五)灸すへそが　　同　人　作

いつよりかさゝはかりにてあさ夕のかれいもうすきおもやせに身のいたつらやあた人のおりしもころはきさらぎや二日はきうによき日ぞと暦ひらけはなる日となるとならすとおもひたつうはらたつもゝとらかせなかといひてゐみがをの千代もかわらぬかわらけにさもいつくしきさしもくさみよなら袖をかさしのうちかたとひねり〳〵て玉つさをふたつのほしとてんおゐしゆくゐしらすにたつけふりあつふやおほしめすらんとわけていたはるよそおひはあわれにもまたぬれきぬのつましならすはかくせしと一火すへてはたつむれのよそめのあらはいかにせん今火をとりて前三やうしろ七ツはとかじ下ひもとたかひにわかいこなさんとわしか思ひのちりつもる山をみさんせこなたへとせうしかくれはふしの雪

(六)椊屋おせん狂女跡　　同　人　作

くるふらんあととしのよはひは二八はかりのわかき人世にはたぐひも夏山のしけみがかけにこがくれし君のゆくゐはいつくぞやしろしめされてさふらはゞおしへてたべや人々とこゝろをあけてそなき給ふ手をおりてかなしきことをかぞいろにすきおくれつゝかすならぬうき身のよるべなみた川そでのしがらみひまなきにおもひかさなる年月の千代にやちよの玉つはき替らぬ色をたのみつゝかけしなさけもありはらのむかしおとこかひかる君かほる中將夕さりよりなをまさとしの戀しやと聲を上てぞなけかるゝ雨をしのくやみのゝ國かさのしつくもたるいのしゆゝ涙なからに立出てはしめてたびをしな川にしばしなしみの君とわがつかれの袖をぬれてほす山路の菊の露の

まもわすられはこそ中々におもひ出さんやうもなし
あらうらめしの我身やとたおれふしてぞなき給ふ

(七)清明神おろし　　虎屋喜元

其時せいめいする／＼と罷出おふそれおふぎことにて候へともそれがしがじんべんにてかうきでんをふたゝびよみかへらせ奉らば御修行おぼしめしとゞまらせ給われとはゞかりなふこそ申けるきんぜうさいはい／＼うやまつてまうし奉る上はほんでんたいしやくしだい天わうゑんまほうわう五どうのめうくわんげかいのちにはいせはしんめいてんしやうくわう大じんぐう雨のみや風のみや月よみ日よみあまのいわとは大日如來あさまがたけにはふく一まんこくうぞうわうじやうのちんじゆにはいなりぎおんにかもかすがきぶねは五しやのだいめうじんくらまさんには多門天たかきお山はあたごさんたいこんげんおとこやましやうはちまん大菩薩まつのをひらの術のみやふし見に一こんごかうのみややまとにかつらきさんふせんたうのみねにはたいしよくはんたつたは此はなさくやひめくまのはみつの御山なりじんぐうかうぐうなちはせんしゆくわんおんなり津の國にいたつては天わうじにせうとく太子すみよし四しやの大みやうじん四こくの地にはさぬきにこんひら同しくしとしのくわんせおんつくしにひこさんいづもの國に大やしろきづきの明神ほうきに大せん丹後になれあいきれどのもんじゆあふみの國に聞えたるひよしさんわう廿一しやおたがしらひけ平野はつここすいにあらはれ給ひしは竹生島のべんてんなりみのゝ國にはなんぐう高山つるぎのごんげんゑつちうにくりからふだうみやう王なりいづにみしまはこねは二しやの大ごんげんほんぢはもんじゆしり菩薩ふじはせんげん大菩薩とふ／＼みのくににはあきはこまがたはまなの明神みかはにいつてはほうらいじみねのやくしは十二神おはりのくにゝは一のみや二のみや第三にあたつてはやつるぎあつたの大みやうじん惣じて日本六十餘州三千七百餘社なりてんにあつては日月せいしん廿八しゆく大ぢのそこにおはしますけんろうぢやんにいたるまでこと／＼くくわんでうおろし奉るたとひ定業かぎりのいのち成ともいま一どよみかへらせてたひ給へはてせめかけ／＼「いのりけり佛神感應したまひけん天下にはかにしんどうして

五びやう二つにさつとわれ女御たちまちよみかへらせ給はいづくにましますぞ君は〳〵との給へば御門なにともわきまへずのふこはまことかとおもはすしらすいだきつき是は〳〵とばかりにて三大臣清明にとりつきおゝつかまつゝたり〳〵と御よろこび限なしせいめいめんぼくほどこして御前をこそ立にけりかんか本朝にかゝるそうにんありがたしきせん上下おしなめてかんせぬものはなかりけり

（八）染色盡　武江 土佐 少掾

まつ初春のそめいろにさくやはないろ花になくうぐひすそめのこゑあげて人に春をやゆつり染風にしなへてたよ〳〵とめした姿の柳そめこひをすゝ竹ふぢねづみたもとにのこるかうそめのうつりやさつとちらしもん染しとの茶のきそはじめわがきがらちやはかわらねど人の心のふたへ染やまとにあらぬからかきやあけをうばふと名をたてゝもろこし人はそねめどもかのひともとのはつゆかりけんぼくろちやになにはえのよし青おかにべにひわだほさぬそでたにあるものを戀にくちばや身はされかきのあはぬゑにしはうすがきやいつこんるりのたまごいろそらにこがるゝもみぢはのべにひわがのこゆひたつる戀をする身の袖の露しぼりちぐさのつまこめもねよげに見ゆるとくさいろわかたましいもあくがれてゆかしきそらにとび色やきゝやうたまむしまがひぞめうこんきうこんべにうこんみついろあさぎあさくともせめてひとよはこいあさぎそめいれかのこしめよせていくよかさねし手まくらに野邊のおすゝきほに出て打だしかのこやしぼかのこしくものもなきおぼろそめうつぶし色の御所そめはみなおもわくのうたのもじちらしこもんじうき世ぞめしやむろからぞめいろ〳〵のちゃのおもひやもゝ色にふかき心をそめ入て君がはだへの山吹やそめかうばいはあしかゞのあつまのきぬにおとらじとすゑつむ花や山あひのふり出そむる雲のそでこひのそめ衣たつたひめ手そめのにしき色ふかくこゑあやをなしそめたりしはおもしろかりけるしだいなり

（九）現在熊坂　武江 薩摩 外記

さすがむかしはものゝふのふとらう〳〵の身となりてもうきのせんりを心がけきかうのいつこをよちけれど時にあはねばぜひもなく此あしぬまにくちはつ

るおい木の柳いまははやきりよくもよはると云ながらさすがむかしはもろこしのかうがはやわざわがものにてしつせきのへいふをもいまだたかしとおもわずしうちものとつてはしほうがしゆついつくわんのしよをつくしたりすいれんなまたふひかみちりりやうがんかの玉をもとりゆみはなをやうゆうがむかしをしのぶゆんせいのつるをならしてはるかなるじゆどうのせいゑんひやうふつといるひいぎやうの力わざねてもさめてもたしなみしにたゞいたつらにおひの身のすこしよはりて候へどいまだ心は春ごまのいさむにつけておりふしはよきたよりともまかりなるごらん候へ此あたりなにはのうちの草のはらしやうちんけいぎよくしのだけのおざゝしげればひるとなくきりにこがくれ雨ののちさんぞくよたうのしれものら高にをおとしさとかよひの下女やはしたにいたるまでうちはぎとらんれなきさけぶそのこゑみゝにひまもなしさやうのときには老人もれいの長刀おつとつて爰をば我にまかせよとよばはりかくればけにはまた、度はさもなきときも有いや／＼ししやうなき我が身のうへにやはぬ老やらうぢよのみさこそおかしとおぼされんさりながら彿さへ彌陀のりけんやあいぜんなほうべんの弓に矢をはげたもんなほこをよこたへてあくまをかうぶくさいなんのはらい給ふと聞ものをされぱあいじやくじひしんなだつたが五ぎやくにすぐれつくほうべんのせつしやうはぼさつの六どにまさるとなりこれをみかれをきゝつたへたをせひしらぬ身のゆくへまよふもさとるも心ぞやされば心のしとはなれ心をしとはせざれとのふるきことばぞまことなれかやうに申せば春の夜の長物語よしなやな心づくしにましまさんおやすみあれやまれ人とかざすあふぎの手もたゆくおもしろかりける次第也

（十）藤壺弘徽殿うわなり打　武江　虎屋榮閑

かゝる所にふしぎやないとなまめいたるあを女房の其さまけしからぬふぜいにてつま戸のわきにたゝすみ給ふはいか成人にてましますぞやそのとき答てこはおろか成といことかな人のうらみをうけながらなのらずとても今ははやそのをにうへしくれないのもれても色いてぬべしかうきでんむねうちさはぎはつとおほしめされしが心をしづめてなだやかにげに

げになのらせたまはずともおほかたはすいりやう申てさふらふなりさりながら人のうらみを請ながらとは扨みづからには何たるうらみのあるやらん身にはおぼえはない物をのふおほえなきとはおろかなり有しむかしの雲のうへともにながめし月影のうつればかはるあすか川はなむらさきの藤つぼをおい出さるるは誰ゆへぞあゝあさましやよもぎふにひとりこがるゝうき身の程おもひしらせん其ために藤つぼのおんりやう是迄あらはれきたりたりかうきでんきこしめしあゝあさましやしつとのねたみは人にこそよれたがいにおしもおされもせぬ御身にて藤つぼの女御にはさりとはにやい申さぬなりことさら御身もみづからも中宮きさきのみやにもあらばこそ女御の數はおしけれどわきてたれとは夕まぐれおふそれながら我君をつまやおつとゝ思ひ給ふはおろかなりあらあさましの御心ねやはや〳〵歸らせ給ふべし藤つほいよ〳〵はらを立いやいかにかうきでん御身のいのちをたすけ置君にちぎりをむすばせてゑいくわの花をさかせつゝわらはゝむぐらの宿にたゞひとりよはるむしのねもろともになきあかさせんと思ふかやたのしみつきて悲しみきたるはたゞいまぞやいかに〳〵とのたまへはかうきでんきこしめしあふせまでもさむらはず世はみな夢のうきなればあすをばたれもたのまぬものをおろかの人のいらごとや藤つぼかさねてによむげんほうとおもへども夢のうちにもくらくあるおこととはぼんぶの身をもちてくちと心は替りつゝくやみたもふとかなふまじかうきでんおしかへししんなばんにてんずるとも本來一物なきときは何をか留てくやむべし藤つぼいよ〳〵はらを立それ人の一念はあるものかなきものかおもひしらせんさりとては今はうたではかなはじとする〳〵と走りよりさん〳〵に打散し立のかせ給ひしが中にてたちまちすがたをへんじおもへば〳〵はらだちや人のねたみのふかきとてうきねになかせたまふ共中々おもひはとまるまじ我身はごくやにおしこめられはずへの露とやきへもやせん御身は君といやましにおきふし小夜のねさめにもわらはが身の上そしりつゝとや有かくやなりはつるとむかしがたりに成ならばなをも思ひはますかゞみ其おもかげのつらにくやとまたするするとはしりより何といふともいのちをとらではか

なはじと二打三打てう〳〵と打てしんいのほむらは身をこがす思ひしらずや思ひしれうらめしのうき世やなあゝうらめしのうき世やな思ひしらせん待たまへとゆふこゑばかりありあけの月にまぎれてうせにけりかの藤つぼのおんりやうおそろしきとも中々申計りはなかりけり

（十一）石山寺契情大州道行　加　賀　掾

うきおもひむねにたくひのしばや町よしみのおゐせとやかくと心をそへてくれ竹のかこの鳥かやうらめしといとひしくるわ忍び出かさふる〴〵と身をやつすてだちまはゆきはるの日のながひかなたにこしまきはをりあたしおとこの五つもん付したもとのうちとけてそばて身しまひ相湯風呂血文せいもんきしやうもんあらゆるこんたんつくしたるこひしきおとこはありあけのからすのなかぬ日はあれど、度あはさることはなしかくまてふかきおもひかわふちはせとなるかはやしろ禰宜のやうなる名をつきし式部とやらいふ女房と石山寺にいつゝけの石にははらを立させてふたりにこ〳〵わらひくさもゆるほむらのくらくらと歸るつばめやとぶひばりひら〳〵ひらのがたけみれば花のさかりもしらゆきのまたたに〳〵にきえ殘りとけもやらさる我おもひいつの月日にあひなれそめてゆかしなつかしわすれもやらず人め思はてそひねのまくらながき日かけにせゝのまちすしすぎなづむのべのわかぐさつゆわけてつまもすそもしつほりとぬれしほれつゝ引あみのゑいさら〳〵〳〵さあ〳〵ゑいさらささら〳〵さつとこくふねの大つのうらは七うらなん〳〵〳〵〳〵なあゝ七うらなんなんなあ七うらうらみのかずもあだ人のこゝろのそこのふたへおび今はさなからそめいろのむらさきといふ名もにくしねたましねたし口おしと物ぐるをしくけしからぬ心にくもるなみだの雨はんらはら〳〵はら〳〵〳〵はら〳〵〳〵〳〵あはづがはらあはづといへどそもやわれうらみをあだになすべきかなむや大ひくわんせおんあはさせたへとふしおかむたゞひとすしのおもひにはいる矢もたゝん石山のみてらにこそはつきにけれ

（十二）四條河原涼八景　同　人　作

はるすぎてあをばいこずゑすゞしげにしげる木のまの花うつぎなつのながめもことくにゝにるべくもな

きこゝのへの京の水きわたちつゝく四條かわらのにきわひはやくもたつてう御うたのかみのみうちこいゑとみて大きにやはらぐあきつすのやまと大路ややまとばし一むらたけのしのゝめもやゝあけわたすまきのとのをとはの山にこだましてひゞくしばいのあさたいこあかねさす日のあかまへだれすしにてたちししつのめがかほにゑしやくしなふ申ふだめせよいばさじきでも取てあげましよをはをりもおかさもつえもあつかりて御らやはあとからあれ申いりははやくもはじまりおあし千くわん萬太夫手をかさねてはんじやうのかめやはくめのじやうるりはめでたいこくの加賀掾 サァふだめせとたきつくるはかまのたぎ利りん／＼／＼しやんとむすびしむなたかおびのりものゝでかごところせきむらさきほうし御所かずきをもひ／＼のだてすがた女中がちなる物見なりさてまたすゝみの夕けしきかみのみたらしむすぶてになつなきとしとおもごかわ水にかわつのこゑたてゝまとやのかゞりうちけふりかなたこなたともしびのやゝみへそめつゝほともなくひかし石かきにしはまたぽんとにつゝく石かきまちのきにあらそふつりあんどかみは二てうはしのしたしもまつはらのこなたまでなかれにつゝく水ちやはくもらぬそらのほし月よあまのかはらもかくやらんおさまる御代のたいへい記あるひは平家物かたりつれ／＼くさ辻たんぎ辻のうおかしく拍子とり謡かもの山なみゝたらしかけ／＼うつりうつろふみとりのそでをみつにひたしてすゝしむる／＼神はうけずやいろざいもん 祭文はらいきよめ奉るの色のさかりはあつまなる八百やのむすめお七こそ戀路のやみのくらかりによしなきことを仕出してつみはしざいにきわまりてすくにひきだすあわれさよこれも戀路の世のうはさうたにつくりて讀賣のてひやうしそろふかさのうちよい／＼／＼あさ日さすまもそりや梅のゆきさえてのこりしそのなをとへは花のみやこにおなしみ男戀のなさけのやまとやなりと人もゆいしが其名もともにつゐにむじやうのあらしときえてゆめかうつゝか身のうへのほまれはつかにからくりまとおやまがおにゝうらかへりおにか佛になむあみたなむあみたぶつうたねふつ 歌念佛 さるほとに世の中の人間のめかのすがたを見せんとて花ひらいてしめすまさにしんのちしきた

りそのかみはわしの御山にのりのみち今はしげんのなかにたゝよふアゝあさましやこの身はさて沖こくふねのかぢをたへいつかいたらんねはんのきし心のつなにまつわれていろにひかれかにまよひなさけの竹のゑだしげきかねのひゞきかりんちりゝんりんとをとそふる揚弓はいしや辻すまふおしあひおしあひゆきかよふこゝは人じやうのところてんなつすきあきはきおんまち花をかさりしおとり子のしくみおとりはすみた川これもあたらしふね人

（十三）萬屋助六道行　都太夫一中

せひなけれ佛ももとはぼんぶにてかのやしゆたらによのいもせなかぬる世さまもりんきのしなもいまの衆生にかわらめやかれみこれをきくときは戀もほたいもひきわけてみちはふたすしなきものをいかなればわれ〳〵はたま〳〵人とむまれきてためしすくなき川竹の流れにしづむ身のさいごつまはわれゆへふたおやの氣にそむきにしゆへにこそたれにかまけもをとるべきちゑもきりやうもしんたいも見なあわゆきときえうせてかわせしことのかわるをばかわらぬやうにとさきの世とさきてあふやらあわぬやらとふやらこふやらしらねともいとしかわいの余りにはかなわぬときの神たゞきそもまあわしがうぢかみはどうしたくわちなかみさまぞ京のよし田の神帳に入たかみかやいらぬのかわけもなさけもわきまへずやぼこんしんかうつじんか正五九月の月〳〵にうぶすなとのゝゑんにちとみきたてまつるとしことに神事といへばたいせつにざいしやうにいやんすはゝさまもいわひ清めてねんころにわしもくるはのうちながら心はかりのたむけをばとふうけさんじたことしややらけしんのわるひかみさまやかくなるやうな御まもりさりとはつらやどふよくやとても此世はこの通りせめてみらいはちがひなくふうふ一所にごくらくへそれもかなわぬものならばたとへならくのそこまでもふたり手にてをとりくみてはなれぬやうにとかけまくもかたじけなしやひのもとのむまれいてにししるしにはいかなるごしやう三しゆも　ねんみだの御せいくわんなになけくらんたゝたのめなにはのことのよしあしもつまぐるじゆずのかずとりてとり〳〵さぞやうわさせんあれらんせよゆくさきにはやよこぐものたちわたりあけがたちかきたまぼこのはやむ

るあしもよは〳〵とつゝみづたいの忍ふくさあけはうき身のすてところさらしなわてにつきにけり

（十四）子の日の松　　同　人　作

まくらもとらすおひとかすゆめもむすばぬはるの夜のなたてかましやふたりねのにくやからすのつけわたりよひのしまだをそのまゝにおき手のぐひたひすかたつえよわらずよすけのかさ打つれ立てゆくみちのしみづながるゝいけだ川あたとじつとの水すしはふたつにわれてかたせかわなみより浪にうつるせのてうずとるてにかげみればねぬにほつるゝくろかみのしどけないやらわけもなやけしやうせぬ身は我なから見るもうるさく思へともさすが女のひながたやそめてゑがいてくまどりてきせばや君がためにとてさらすほそぬのさら〳〵とさゝれめなみかよせてきてきしのおくさにア、〳〵ぬれかゝりよるひるわかぬちきりそやわれはまろねに夢もなくうしや出しまにゆくふねの名のら計りとこかれきてこゑおもしろくひやうしとりおきもしつかにからろのおとがいざや出てみよさましやこさらぬいそうつなみよあたゝしんきやしんきとのどくや月にはつかはおきにすむつまなもつたも名はかりと心ひとつにあきらめてゆけばうらみもあかねさすまつの葉こしにかけこぼすはつうぐひすのなくねあどなやしほらしと見るにつけ聞につけいつれおもひのあく田がわふかきねがひをかけまくも神のめくみはおとこ山まもらせ給へとふしおかみ月のおほろのたそかれにかつらの里につき給ふいろとなさけの世なりけりうき世なりける戀ぢやとなつむこのみちはかりなり

浄留理終

増補松の落葉巻第三　中興當流丹前古今ぶし

目録

古今ぶし歌目録

増補松の落葉巻第三

(一)福神出端　嵐　三右衛門

二上り　そんもめてたいいわゐ申よゑびす三ぶ殿と大黒天がどつかとふんだ俵に中かにやよねたちを思ふよふにいれての戀する人のやしない〱にゝにどつこいさにゝにどつこいさにつこり〱にこ〱ともさおわらいあつたにさ福の神じやよしつかいざいしよの庄屋殿だんべいゑひすよい〱さぶどのはつりさほをかたげてゑぼしかりきぬしやんときてみきわよふてよろ〱あしもとはよろ〱よろ〱〱と船こぎ出てつりをたるればあらおもしろやひくは〱ひいてしやくる所をつゝとあげてみたればさてこそでつかいよいおめでたいじやよの大黒殿はいなよい〱たからくらべのしろねずみちゝすいついつだきついつ袋のうちはごそ〱打手の小つちにすゝのおとしやんこ〱〱や〱六つ無病そくさいに七つ何事ないよふに八つやしきをしんちにぐわらりとひろめた九つこぐらをたつる〱〱地形をゑいや〱ゑい〱〱ともつきたつるなにには入江の三つの浦風

(二)藤内だんじり出端　嵐　三右衛門

二上り　藤内次郎殿わいのふゑふきのややくでしちくかん竹のやつこのほこりをささつ〱ともはろふてのとうらいの〱。笛人の物はとらいの我が物はやらいのと合ふいたるはさつてもふいた笛ふきとどつとほめてとをしただんぢり打てはやしただんぢりうつたみさいな藤内三郎殿は小つゝみの名人であかふのどふにかゝがわくれくれないのしらべをゝんどりかけにかけさせちゝつちちふつほ〱たつほゝつたつた〱〱〱合うつたるはさつてもうつた小鼓とわつとほめてとおしただんぢりうつたみさいなたんじりうつたみさいな藤内四郎殿はいの大鼓のやくでしつたんにしつたん〱〱しつたんつくるおん百姓明年は八たんじや三明年は十六たん〱丹波の國の御百姓と合打たるはびやくらい上の町下の町とつとほめてとをした藤内五郎どのはいな太鼓打のやくで大まいの太鼓をあそこらもとにおかせてきんのばちを手にもちつく〱〱つてん〱てれつくには

づんでんどんてれつく／＼つゝてん／＼とんからつ
とんとうつほれたなるかならぬか戀の中の町なかの
／＼中の町をとをりとふはなけれどなまだこつかん
だあたまをみたかくまの小びくにんがちとくわん
くわん／＼くわんともなるは夜あけのかねはつんつ
んつらいかづんでんとふからやぐら太皷のをとによ
りくる

(三)東妻道之記出端　中村七三郎

本調子 きのふは袖に包けりけふ九重に旅のそらふり
あげみればかのこまだらにちら／＼／＼と雪間に見
ゆる富士の山やう／＼爰にきよみがたそらにもせき
の有ならば月をとゞめてみほがさき名にのみきゝし
きく川に夢もむすばぬかり枕小夜の中山なか／＼に
はま松かえのわかみどりさしての岩をあらいのしゆ
く「さゞれめ波がよせてきてきしのおくさにあゝぬ
れかゝる思ひうら有二川やげに潔き道のべの
雲のはだてに戀しき人のこひしきゑにしなつかした
だひとりねのはんぢよがねやの戸／＼西をきつとみ
たれば月はな月はてもせで磯におなみがなんぴへの
なひゑのおゑしが磯に打となん浦々とまり／＼を打
過て大津のうらに着給ふ

(四)右出端の跡遠目金　同　人

二上り あづまも京もたえせぬは戀といへるくせもの
けに戀はくせものあの君のめしたるこん／＼小袖の
袖のうみしつみはつべき我が思ひよしや吉野のはん
はなよりも／＼あのや君さまのおもはせぶりにしの
びかよはゞみだれあふせも有やらんげにはづかしき
初戀に夢うつゝにもいふにいはれぬおすがたをたが
せきとめてかよひぢにふたり枕をかわしまのはしを
かけたやあのさとへとひたつほとに思へともへたつ
る中のかなしやなとかく戀にはやるせなや

(五)八幡詣出端　中村七三郎

二上り げにいさぎよや心よやだてなすがたの／＼男
山ひく手あまたのあづさ弓やたけ心に我が戀の岩音
成こいつまでも君が八千代はつきすまじ／＼とかく
すてぬはをみなへしむすぶ契りはちとせ山はなの情
は猶つきじいろはさま／＼しなの梅八しほ紅梅あさ
ぎむめ地はうすいろにかのこ梅まだいわけなきこむ
めふりよやひやうしもしなもとり／＼に君か手なれ
し手まり梅をちてこほれてはら／＼と空にしられぬ

あられむめわれが思ひを筆にまかせてかきは梅文をば君にやり梅よどの川瀨のなんなどつこいやれさてさて〳〵〳〵水車たれをまつやらくる〳〵〳〵とめぐりあふせの待夜はほんになぜにぢよろは出てまたぬぞ誰を待やらくる〳〵〳〵とめくりあふせの待夜はほんになせにちよろは出てまたぬぞさても〳〵見事やいたいけしたるものありはりこのかほやぬりちがふ千種むすひに笹むすび山しなむすひに風車ひようたんにやどる山がらくるみにふける友鳥とらまだらの犬の子とるやよもきのやはた山

（七六）椀久出端　大和屋甚兵衞

二上り　たどり行今は心もうかれそろ誰かいく野をひきぬきしよりいつの比よりあいなれそめてかよふ心のいくせの思ひしのぶつま戸をほと〳〵たゝくは椀久かさりとは〳〵うけふかのしのぼかのそつこでうけだせおもはくをこれ〳〵〳〵うけたものあのやわんきうはこれさ〳〵皷の皮かのふほんへしんぞ心はこれさ〳〵うちぬいたほんほへしんぞのふほんへとかく戀には身をやつす

（七七）難波津壺論　大和屋甚兵衞

二上り　なにはづにさくや此はなふゆごもり今をはるへとさきそめてさかゆる葉もしげるよの幾代かさねてはもしゆるよの君がよはひは萬代の久しかるべきためしかや國もゆたかに民さかへ玉のさかづき手にもちてのめやうたゑやさゞんさのこゑすみわたるめでたさよ我ちかはらぬうれしさよこゝなしのこはないくつ十三七つあらまだわかやさても〳〵わごりよはたれ人の子なればしほらしやおどれ〳〵爰な子おどり出せ見事てん手びやうしもそろ〳〵た〳〵そろた〳〵そろ〳〵〳〵〳〵月のゑがほのてつたりやもみぢがさそりやかゞかさよ〳〵しんきしの竹ねざしにあられはら〳〵〳〵〳〵落てみだれて夜ごとにかよへささまがふりだす形ふり見ればさてもそなたはいとしゆてならぬさてもそなたはいつもどゞんどとつこいどゞんどどつこいどゞんどどんどゞござれゑいさつさ〳〵ゑいさ〳〵さら〳〵〳〵〳〵ゑいさつさござれどんどゝうてはひやくへこや野のしゆくのゆふ女がそでをしづ〳〵〳〵ともひかへていまやうはらうゑいしぼりはぎをうとふとおさへて酒をしいられた此さけにたべ醉べろり〳〵べろつくくだ

まきやるかにふなじやわいののめのよい上戸衆の側にそつといたれば雪にひやかかん呑みかねちかゝるかいなそもおそろしうはをんじやらないうらゝがやうなそこもない蛇之介がなんでものまんとおもへばいまりかせとかなんきんさらけさ打わられのすりこばちねるやうでねもせいでしつくりがつくりねかへりしてはねられないはや明がたの時太鼓とう打つのどん〱〱とう打つのとんと打納ゑいやつとも聲をせいさみにぎをふかどの松竹

（八）梅揃石切　　大和屋甚兵衛

二上り　おもしろや四方の山邊も白たへにみわたすそらのうすくもり雲と見しはしらゆきの白雪の〱はらへどふりつもるはなと見まかふこずへ〱のしほらしやいつれもしろたへになかめ〱て雪もこほりも其まゝにそでをかざし立よればこれはきゞの花きりくべてたのしみのさけにいざやあそぶべし先ふゆきよりさきそむるまとの梅のほくめんは雪ほふじてさむきにもこのきよりもさきたては梅を切やそむべき生れざいしよはいしきりのしやうでんなものも少ちとかくこさん用もするかへ何所の袖かげんで女ぼうももたぬへ梅はさま〱有が中にさはやざきむめぼつとりと〱しな物〱しなの梅思ひこが〱こがれてかく玉づさをたよりもうめてやり梅やそなたへとんととひむめやゑだがさわらは御めんなれふりふつて〱〱ふつて〱〱ぶりふつたふり袖のたが袖の香のにほひ梅はつ音ゆかしきうぐひすの春風につれてふはとみたれ〱〱てしだれ梅しなとひやうしをかぞへ〱てそれ〱それ〱それ〱そこらでしめろまかせてをけろのとんと〱とんとはずんだ手まり梅ひいふみいよ五つむなんなやことは〱しとゝんとん〱とん〱とろ〱とろ〱てうど百ついたおもしろやかず〱のさかづきはどこ〱へまわつた長二長七長三郎ちよろ〱めきの長二郎はなしがいのぐい太郎ずくわんぼうがわ入どうはやしたてゝあそんだ

（九）關東小六　　嵐　三郎四郎

端唄　ねやの戸〱扇車のゑいゑいくる〱〱とめぐりあふせの波まくらさんやれ

二上り「小六ついたる竹の杖小六もとは尺八中は笛小六末は女郎衆のやつこりやつまかふ鹿かの筆いとし

君さまとねたる夜は小六ぼ々のほろりん〳〵大鳥小鳥の羽ふしをたゝいてぼと〳〵〳〵〳〵ふら〳〵さがりのばん太郎おやじがしてゝん太鼓のゝほんほゝさまの傍わすられよかどこでみたぞつとしたとよへい〳〵君ははるさく梅の花じやがとよへい〳〵きみははるさく梅のはなじやかとよゐいかをり床しきなりふりはありやゝこりやゝゐい〳〵さつさゐいさつさささつささふり袖床しなつかし

(十)戀の風流　勝井長右衛門

二上り　おもしろの山さきかよひやゆくも山みちもとるも山みち心のとまるも山崎かのさとのぢよろと一夜ねたれはずはらめいたといはれたんがらがといのふ伊勢のおまへでゑひしてせひたまづさをひろふたへゑひしてせひおんなかおぢぞのおんくじおんとりをんみれば一にや貳がおり貳にや三がをりるゑひしてせひさてもたまづさはおめでたひぞやゑひしてあれしてこれしてせひそこでかさもてかん五兵衛づきんのもてこいあみがさもてこいない五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさはとらさになつておくれ〳〵をありやんりや〳〵しつ〳〵うどゃんどへもひとつしてこい五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさはとろさになつておくれ〳〵をありやんりや〳〵しつ〳〵うどゃんとへ五丁まちのたからじやふつたやつこのゆかしなつかし

(十一)山崎かよひ　勝井長右衛門

二上り　おもしろの山さきかよひやゆくも山みちもとるも山みち心のとまるも山崎かのさとのぢよろと一夜ねたればずはらめいたといはれたんがらがといのふ伊勢のおまへでゑひしてせひたまづさをひろふたへゑひしてせひおんなかおぢぞのおんくじおんとりをんみれば一にや二がおり二にや三がをりるゑひしてせひさてもたまづさはおめでたひぞやゑひしてあれしてこれしてせひそこでかさもてかん五兵衛づきんのもてこいあみがさもてこいない五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさはとらさになつておくれ〳〵をありやんりや〳〵しつ〳〵うどゃんどへもひとつしてこい五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさはとろさになつておくれ〳〵をありやんりや〳〵しつ〳〵うどゃんとへ五丁まちのたからじやふつたやつこのゆかしなつかし

（十二）成　相　　　　竹島幸十郎

二上り　かまくらの御所のお庭で十七こ女郎かしやくをとるゑひそりや十七小女郎がしやくをとるいたりすがたでうい事いふたよふいふた／＼思ひねぬ夜はそこ心實からまちやあかしたうき代とふりものだてしやのすがたそなたどこへいきやる夜更てからにしばしおまちやれつれになろおまちやれしばししばしおまちやれつれになろ君とわれとはれんぼれんれつれみそめし月日は多けれどしかも元日初春にちよつと見てところ／＼とぼけてうか／＼とすそやたん／＼袂にとりつきひつゝさく／＼いたれいの／＼れん／＼れんぼのふかまじやとしれた二世のかねことさつさふり袖さき手の行列ぼつたてろ

爰てはやるささつさよいやさ三十振袖四十しまださささよいやさだてなふり袖ゆかしなつかし

（十三）祭　文　　　　竹島幸十郎

二上り　萬代の神のみことの二ばしらあをぐもおろかなりけに世のはじめ其みなかみのあかの水きよめ奉るまの人間の初月をは不動明王のうけ取給ひて本來空の一もつこれとかやはらい淸めたてまつるのつぎをばいかにと尋るに本心の靈心わたくしなく初てめいとくと名つけたてまつるの二月めにはとつこのかたちのあらはれてこれをたのしと名づけ奉るの我朝にては神よりとあをぎなづくる所はへだつれどもんじゆ菩薩のうけとりにてさんこのかたちにそなへ給ひ晝夜まもらせ給ふとかやつぎをいかにとたつぬるに五つ月めには六根手足をさいしきて五體殘らずれんぞくし此時にいたりて地藏菩薩の御守りてうあひことに淺からずちやうち／＼あわゝかふり／＼しほのめしやくでうに打乘ッていんじんしよ／＼ゐんじんしよといさみ給ひてつぎをいかにと尋るに六ッ月めになりしかばこのむ處ほつする所自然にてうじ母の乳味をすいとる事申さばいはく凡三石六斗なりつぎつぎ／＼はおしくみろくの御守り當る十月は大日の御守り四方にくわつと廣め給へは梵天たいしやく八百よろづよの御神かくらをそふし給へばかぐらのすゝがりん／＼／＼りん／＼／＼／＼りん／＼／＼うつたり／＼太鼓つゞみどん／＼から／＼とんからがどつと生れた若ゑひす顔みせ代々のわらいがほおもしろや

（十四）市野屋　　生島新五郎

二上り　京のみやけになに〳〵もろふた蒔繪のさしくしきりのたうあゝもんつくつおれに一代そふ身じやとてもあだしこの身はどふもせ心ときぐしいのちじや「戀風ふかばゑい〳〵なわけあるかたへさそはゞさそへゆく水に川島あいをこがれいて舟はおぼろに影見えてうきを身につむしば〳〵もかいもなぎさのはまちどりちりやちり〳〵〳〵ちりとんたさあらしにみだれさつとちりぬるおもしろや「たつた川邊に舟とめておばなかちじとふれば日がくれそうよの鳥がなきそうよの鳥がなことまゝよの余町の殿子とねたる時のうれしさはさて鳥もかねもいとはぬこりやどつこいとつこい〳〵みやこふうりうせかいのなんなん〳〵中に色といふものこりかたまつて ひとつの戀となら しはのしばの戸ぼそもやれたまだれもこひにあつてはたまらぬ〳〵 戀はさま〳〵あるが中にさ小野の小町はさわけをもゝよかよへとのんほへ其中にもゝ夜めのなしのぶ夜はなわけをもゝ夜かよへとのんほへとにかくに戀ちのな心うわ〳〵〳〵きで たまつた事ではないたんたたんたふれとはなか〳〵ぬれた戀のやつこりや〳〵〳〵よい〳〵とかくうき代はぬれのまんなか

（十五）狐會出端　　生島新五郎

二上り　石にせいあり水におとありつゞみはたき浪袖はしろたへ雪をふるふりもよしふりかへる山さらにかすかなりまたあるときはおり姫のいをはたたつるまどにいりて人をたすくるわざをのみましてや我名もいふ聲ひく袖のなかめなりそなたのそらは白雲あれこそおはらやをしを山今はふるすへかへる山此神の德をつげしらしめんとあらはれ出てはづかしやわれが姿のまことをあらはし又は國土をすいしやくのはうべんころは雪ふりなれや木々の梢もうつもれて梅もいろそへ松とても名こそ老木の若ちとり空すみわたる神かくらはんや神かぐらよはいをしらする此神のゆくすゑひさにと我が神たくのとくをあらはす御代そめてたき

（十六）曾我五郎　　山下才三

二上り　我は石川や濁らねども人がにこすよのかけふにはなにとしんまいらしよかつやまが髮のゆいぶり手替りにこの へ君ちとせ山それやむかしのさゝれ石

いわほと成ていつまでも替らぬものはときわ木のはいろにまよふ人ごゝろ地をはしるけだもの空をかくるつばさも戀にはたれも身をやつすいやいやわらは心とひやうし一がんさそくやつとん〳〵二がんさそくやつとん〳〵さきのちからにやよれつもつれつやとゝとん〳〵とん〳〵とん〳〵うけてながして袖返し棒はみや口戸田小坂そちが思へばこちも思ふよほんにさせいもんしやたらほん誠につい〳〵のつい我等も思ひそろ思ひと戀とはかつてんか君がさかづきつく〳〵つつてんつけざし三ばいのめやうたへやとかく世の中

(十七)京之名所

多門庄左衞門

二上り　須まといふもうらの名あかしといふもうらの名すまやあかしも外ならぬ花よもみちよ月雪のあけぼのは筆て書ともつきせぬみやこぞおもしろや「北は黄にみなみは青く東白にしくれないにそめいろの山はみやこのふじなれやふもとにつゞく市はらやおぼろの清水に影はやせの里人小原しつはらくらまやきぶねあのをく山の柴といふものおり〳〵おり〳〵おり〳〵折てたばねてきりゝとむすんでしやんといたゝきつれたおはら木をこい〳〵小女郎なぜにこぢよろは出てまたぬぞ小女郎こそくれ山ごしにいたゞきつれたおはら木をさてもそなたは春の花あさの中なるいとゑもぎ思ひそめたははづかしや思ひそめたりやうき世もいらぬ〳〵やれさて〳〵〳〵〳〵うきよもいらぬゑんでそろ物ちとおどろとゝのかゝのゝとゝのよい子をまふけてたもれのふ上下なれてよいとのを〳〵むこがくるやれむこがくるむこどのこばかま何にいろにそめよぞゑい〳〵はないろ〳〵かちんばかまちやくしてきり〳〵〳〵じんぜうにおくのざしきにおんも〳〵とねてかたろおふそのおくのでいからよまのでいまてさん〳〵さんさぐりまはれとはんなよめにはさんさぐりあたらでひけつらおとこにさんさぐりあたつたはつちやこわ物なんとしよぞりんとはねられたんときのどくしやらや〳〵しやら〳〵〳〵やさつさしやらの戀路の心根や

(十八)若松風流

岩井左源太

二上り　めでたの若松さまはよんのさかゆるはもよはらんは葉もしげるよんの枝もさかゆる葉もよはらんは葉もしけるよんのふくはらの里のよねくろは小松

ばらかよひ十八の〳〵君とな君とねの日のまつ夜はよねくろどこてみたみゆるとささつさ見ゆるとさ十八の〳〵君とねの日のまつよはよねくろどこて見たみゆるとささつさみゆるとさわけの前髪ふともとゆいのしかくまきはでなこせうしゆはどれ〳〵あれはそれはどゞんどへさまのおすきとてちんちりめんにのほんほゝかたにはからむめやからまつにからしゝをぬはせてすそやたもとはうらふくもみがひら〳〵ひさつさふれ〳〵ゆかしなつかし

（十九）濱川風流　山本歌門　近松勘之助

二上り　ことしわたりのきやらではないかとめてねまきのそめ小袖ねまきのとめてとめてねまきのそめ小袖はまがわの女郎はお手があれそろなよゑとうりかなまま川縄のでん〳〵てん出所なよゑ我戀は〳〵まるきおごけに角のふたあいますきまをあはせどもあはぬよのしやてんはちまつかせ「さまがくるやら帆がみゆるそこ介こゝ介がつてんかとまをしきねに梶どつこいかぢどつこい枕よんのござれ沖津のほほんにほんにさほほんにほんにさほほんにほんにさほんに〳〵さござれ沖津のどつこいわかれの野でしげろたんだふれ〳〵戀のにくさよ

丹前出端終

古今ぶし

(一)なぞのうた

瀧川六三郎
古今新左衛門

そこなせんとになぞ〳〵なにこちやなぞしらぬなんとのかきかねはづすが大じかけるか大じういもつらいもよとながなわて身すきなりやこそふねもひけふねをひくとてなぜそてひいたいかにおんらがいんなるものでしんらぬしらぬとおもやろけれどめもとでもしるのりあひふねのせんとやすみやれあゝへつとしよしわひ女郎しゆやいやならおきやれおかいでなんとしよことはかゝぬぞこちのふねまきゑにかきしふねのうちみつこやかしまやこんびくにん御出家庄やどのぬけまいりこほうらいかくどいたれんぼのやみのくらかりにあかゝりあしをさしたしたさまじやこさらぬやつこのうわひげさなでたこめん〳〵十めんつくりてひかられたひげがはげたらこめんなれ

(二)小栗

古今新左衛門作

本調子 いかに鬼かげよくきけよ牛は大日如來なりむまはばとうくわんおんなりけゞん化生のものなれどあまた有ける其中になんぢことさら人まぐさをはむゆへにちくしやうの中の鬼ぞかしこゝもしやうあるものならばみゝふりたてゝよくきけよ口に（ふつみ？）うとのうればいきながらほとけになるぞ鬼かげよによせちくしやうほつぼだいしんときく時は汝もたしかにちやうもんせよそのとき鬼かげは畜生とはいゝながら戀の哀を聞わけてもゑひざおりていたりしは人間ものはしらぬなり

(三)朝伊奈

同人作

本調子 あさいないかにとしかりけるむねんなるかな世の中のそれ天人にはごすい人間には八苦とて八つのくのあるその中にひんほどつらきものはなしひんくとたにもなりぬればうとき人にはいやしまれたんほに衣かさねゝば夜さむさいとゝたえやらず朝夕かとぼしければことゝひかはす人もなく口鑓りじゆんぎにまじはらねばなぐさむかたもさらになしたまたまれつざにつらなりて心はかうでう人にすぐれてみゆれどもかさねのきぬがうすければかたみしよぼらでくちおしや世をも人をも葛の葉のうらむべきやうあらざればたもとをかほにおしあてゝたゞさめざめとぞなきいたり

(四)隅田川　同人作

本調子　吾はみやこの者なるが人商びとにいざなはれあづまにくだる玉ぼこのさもあらけなきものゝふがあゆめ／＼と打つえにあゝちゝはゝの戀しやとなくより外の事ぞなき　自是江戸流位二上り　「いたはしやをさなごはいまをかぎりの下よりも父はよし田の少將よ名はむめわかと申也みやこの人の戀しやとにしにむかひて手をあはせ南むあみた／＼／＼／＼／＼

(五)富士之嵐　同人作

二上り　ふじのあらしにろかいをとられ／＼ひとりこがるゝ田子のうらさんせうめがこせうを女房にせうとおしやるたうがらしがなかふどやれたでほがりんきするとふでもわさびははなをはじくへ

(六)三嬉敷　同人作

二上り　うれし／＼が三うれしござる初手にごさつてもふられぬうれしやどのしゆびさへしゆびさへうれしうらがみなとにやほだすもうれしうれしへ軒の玉水と／＼ごされしげくごさればこされればしげく人が人がしる

(七)鼠の書寐　同人作

ねずみめがさんの野中にひるねしてなねこに子とらりよと夢をみたなまもりよかけさへよけのまもりをなひるねのね事いふたおかしさはいのうちのなへしかまもふすぞりくわんすもとふりやかゝみなこかねへ

(八)老ぼれ枕　同人作

としは寄まいうらが部屋へは猫もこずものおひぼれ／＼こちよれちと／＼抱てによずもの／＼だいてちと／＼によずもの

(九)牛之繩　同人作

二上り　ひいたりな牛の繩をへそんれはひきやることじやとの子のなくさかりとしよかまもよくかれちくさもなんなびけなびけやれ

(十)郡内八丈　同人作

二上り　山の上には白まゆ青まゆ枝まめしろひふくろはひさうのしい竹芋のはの露ぶりしやりとこれのおさつにはたおらしよぐんない八丈こくら島／＼ぐんない八丈こくらじま

(十一)ありまの松　同人作

二上り　まつになりたやなありまの松にふぢにまかれ

てねとござるまかれてふじにふぢにまかれてねとねとござるなさけ有馬の花のゐん

（十二）伊呂波　同　人　作

二上り　子よもぐよ髮結てとらしよいろはにちりぬるをわかわがよたれそつねならむうゐのおくやまなけさこへてあさきゆめみしゑひもせす京宵にやわさんよなかにやほけきやうあかつきおきてはゆづの念佛紙子ぐあべ川紙子へ

（十三）天野川　同　人　作

二上り　あまの川には水こそまされさてもやんれあふよならぬへはしをやんれかきよやれかさゝぎの天竺のあまの川にしろいぐをけがながるゝ奉公するとしたうふやにやいやよそれなせに七ッをきしてまめみがくぐ七ッおきしてまめみがく

（十四）山郭公　同　人　作

二上り　花のちるときやはつほとゝぎすやまほとゝぎす月は三ヶ月かたわれいびつまるいなが月くる時雨月雪をながむる火をけのあぶないまどのあかしくれ竹いくよの枕戀にねぬ夜はふたよみよ

（十五）稻荷參　同　人　作

二上り　ひけやぐひけやぐ牛のもうもふつなゝへ柴にさくらをおりそへてさせいほうせいこりやどふだいなりまいりの參のいなりふりそでゆかしゆふせんもやうでそんれいへおかたよそじにむすめは十五ついのもやうでゆかしへさいかち山へのぼるとてあらい風がもつけな吹てきたはぎの白さてゐいとこなんとこな白さではぎのぐしろさで日をくらす

（十六）浮世言葉　同　人　作

二上り　うき代ことばによそへてとふてとかくうき代じや戀のみちうらがきまゝなるならほんにとはおもへとも人の口有事ない事おつしやります事聞ば松はこふじとねたといふこふぢはまつとねぬといふあのうそはいのねたりやこそあれなやれひつたりとそのよな事はなけもない事よきけばうれしや思ひくさたたうつゝなや人にいはれぬわがなみたそれとはしらでおもひねのかわくまもなきわがなみだられうのたもとをもひかばなとかきれさらん

（十七）茶飲時　同　人　作

二上り　おきていなんせなあすの夜もあるにいましばしぞや又ねのとこぐにはぬるゝも袖ひがしがしら

内に十月がうちのくつうをうけやう〳〵此土に生れいで四とせ五とせ七とせ待やまつやまたずにみまかり出て又いつの世に此恩をおくりかへさんわらんべとさん〳〵にかしやくなしいつちともなくうせにけりしよじのあはれと聞えける南むあみた佛〳〵〳〵〳〵

むどん頓ておばゝの茶のみどきしゆんだらまんだらふくとくゑびすべずる〳〵べざいてんなむ薬師のおぢそうかのみめのよいぢよろさまのそばにそつとねたるはゆきかしもかみぞれか村雨か雨かあられかよしの〻はつせのちりか〻るやうでおいとしうてねられないうら〻がやうなるみめのわるいしやつつらがそばにぐわさりとねたるはいかぐりぎりつくり天神ひげけさ打おろしのあらむしろがんぎやすりさめはだつくやうでさすやうていつくにはつくにねがゑりうつてはねられない

(十八)さいの川原　同　人　作

本調子　爰にあはれをと〻めしはさいの川原と聞へしは二ツや三ツや四ツ五ツ十さへこさぬみどり子がいさごをつかねて山となし小石をひろふて塔につみ一ちうつんではち〻のためちゝのおんと聞へしはしゆみせんよりもたかふしてこと葉になにともい〻かたしなむあみた佛〳〵なむあみた二ぢうつんではは〻のためは〻のめぐみのふかき事さうかいよりもなをふかし三ぢうつんではきやうり兄弟わが身のためとゑかうするなむあみた佛〳〵〳〵ゑんずは〻のたい

当流丹前古今ぶし終

増補松の落葉卷第四

古來中興踊歌百番

目錄

七十五　どふらく
七十六　唐人
七十七　ゑじま
七十八　こよみ
七十九　但馬小女郎
八十　もんつくつ
八十一　都の町青物賣
八十二　拙僧
八十三　堺のはま
八十四　梅の木
八十五　手あいすまい
八十六　藤内太郎官者
八十七　盤川
八十八　しゆんせう房
八十九　伊勢宮廻
九十　せうぶがり
九十一　いもの子
九十二　小川
九十三　ていこ屋
九十四　ほい〳〵
九十五　のんやほ
九十六　二木
九十七　まんまる
九十八　こんどや
九十九　ふくとん
百番　さゝら

増補 松の落葉巻第四

(一)菊づくし踊

二上り　かゝのおきくは酒屋の娘かほはしらきくべにきくつけてよひこの〳〵よひこの小きく（とりなりしやんときく）（なかし）さいてみことなあふきくるまのくる〳〵〳〵くるまきく〳〵かさねきくしやう〳〵まひをまいのそて〳〵みそめてそめてこひにこかれこかるゝ身はからにしきかよふみちしはきくませかきさあしあしてとんとひこゑつとんとびこゑぞん〳〵そんそつとした〳〵ひとへぶたへみゑよへなゝへ八重きくよ御所の御もんはきくの九重

(二)都はしつくし踊

二上り　みやこ大はしわたりてゆかはおもひそめたよこいたのはしにまたもあふみのせたのはし（かげよな さけのひ）（とつはし）人のこゝろはかりはしうきはしそりはしなれはあたにその夜はもどりはしつれなや君にふられてさ〳〵ふられて〳〵ゆきにふられてかさゝぎのはしちよつと替せしことばのはしをなんのわすりよそ〳〵それがうれしゆてきよみつのとんとろ〳〵とゞろ〳〵とゞろとんどろとゞろ木のはしつもりてこひの大和はしくちぬ四條のはしはしら

(三)小倉山踊

二上り　おくらやまからよむことの葉のうたの中山みやこのふしよつゝくやま〳〵こひの山だてをかざるやきぬかさやまよなん〳〵〳〵なんてもにしきをりなん〳〵でもにしきおりすそはちらほらもみぢ葉ちらす高おとがのをいやといわれぬとうも云れぬ袖をひかへた男山これもあたごの御りしやうをかののほればさつさゑいさつさ〳〵さつささぶろく十八町あらし山風いとわてきたやまはるはかならすひかし山へこざれの花のさかりはまん〳〵まるやま

(四)山ふし歌踊

二上り　おとこもとならのあさはれしちやほんこのやまふしおとこをもちやれのもとゆひひねらずはかゝきすやれこりやはかゝきずのんやほのあさはれしちやほんこのやまぶしおとこをもちやれのもとゆひひねらずはかゝきずやれこりやはかゝきずゝ

(五)浦つくし踊

二上り　わかのうらなるいきかたおとこひにかよはばちかのうら ふみとりかわ すそてのうら もみうら白うらあさきうらだてをするがのみをの浦なりよきふりよきふしをにのふたたん／＼たんたごのうら／＼ばんにやかならす／＼かたゝのうらとふでかつかいにくる夜のきみに大津のうらは七うらなん／＼とつこいなん／＼なあなゝうらなん／＼／＼七うらこれからさきもなゝうらなん／＼とつこいなん／＼なあ七うらなん／＼／＼七うらかはらでこゝにすまはあかしのかはらはたかさご

（六）ごばんつくし踊

二上り　京は十らくたのしみところまちはごばんのなりよやみよや しかくしめん なこふんへつ むかひあわすりや手にてをしみやるよござる／＼よいてがみゆる戀のなかなかでにとゝんととふあしたとゝんととふあしたわたり八もくすんずんすとのびるはまはなん百ろく／＼三百六拾もくいちこつれそふつれそふなかの白ちんちりめんくろはふたへでぬめらんすしゆすのおび／＼しめつゆるめつよいなんなかて／＼うつやうつたり／＼おてゝんてをうつうつたりなうつたり／＼おてゝん手をうつうつたりなしやうずめ／＼おもひのたけのよゝをかさねてうちやおさめた

（七）大津おいわけゑ踊

二上り　のほりくたりに目につくすかた露の命をきみにくれべいおいわけのたるまゑこゝろおにゝ衣はってげたもおかしざたうはしりゐにいぬかほへつくねこかしやみひく酒のむやつこあたごまいりにそでをひかれただてな若しゆがたか手にすへてふれやれ／＼大とりげ／＼うきよのんせいふんらんらんしんらんどんらん十三佛かけはりくけばりたゝみばりいゝいけのかわすげかさよりほにそろばんつふせきの清水はうき名所

（八）月つくし踊

二上り　月はむさしのよい月たしの女郎はみかづきだてなどうちう袖月たれをまつよひあのかほつきとしは十五夜こし月あしつきさへたこわつきなに夕つきよかつらおとこよさつさいとしかこされさつさかはゆかござれいさよひ月にたわむれあそへゑい／＼／＼ゑい／＼ゑい／＼てる／＼つき／＼てる／＼月を見たらばなんとこざるまいかのてる／＼月々てる

〳〵月のおもかけ月をみあかしのみあかし

(九)松つくし踊

二上り　にほの松山それからさきよしかのうら葉のひとつまつ(すんとよいき)(なひめこまつ)まつよは〳〵きみをまつよはとふやま松よやまさかこゑて〳〵〳〵みとてきたのゝ七本松よほんにかならずあをばのまつよのこるきぬ〳〵きぬかけまつよ嵐松山さら〳〵どつこいさら〳〵とつこひさら〳〵〳〵〳〵〳〵さつとうつてははままつのおとはさゞんさ

(十)さんがらか踊

二上り　あらい風にもよふやよやよあてまいさまをやろかしなのゝゆきぐにへさあささんがらが川じやざんざら柳のよいやさしろねが〳〵よい手は〳〵こまのひざぶしんからが〳〵しなのへやろかやろかしなのゝゆきぐにへさあささんがらか

(十一)あべ川帋子踊

二上り　お江戸〳〵みやげにあべかは帋子〳〵ありやこりやよいきてはごそ〳〵〳〵とさあんささあんへくわんこや〳〵しやつき〳〵〳〵しやちんがらこゝ妥ぇては走り出てみれば〳〵ありやこりや戀のなかやとさあおろせこれさ〳〵きてはごそ〳〵〳〵とさあんさゝあんへこつがらてくせ天照大神おんいてなされてめでたいな

(十二)ちゆつちゆら踊

二上り　からすかあかゝつちりかあかかあ鶯ちう〳〵ちゆつちゆらちう〳〵ちう春になろとてほけきやうとないとさほけきやうでんぐりかへしてさつさ「鶯へかへし

(十三)づんがらもんがら踊

二上り　ゆのふとふげのまこじやくしささつとしめかけさゑいこの〳〵ゑかながふてつんからもんからからづんがらもんがらやつてくりよひたちの國のつのおかにしほうり長者といふ人がこがねのついじをつくならばれんげはちすといふむすめかれら二人の兄弟をてこのしゆとさだめて思ひのまゝにつくならばなんなくついじはしゆつたいたるらんよふつふなんよへ

(十四)君ちりおどり

本調子　こゝな小吉めは與五へが君たんだ〳〵すのこきみちり〳〵かますのふぐた君たんだかますのぶく

たきみたんだあぼとこふんではおぼちよこけべいてほこちよんとぼし火じやふやらの〳〵ふん〳〵ふふやらの〳〵それはへふやら〳〵それはへ

(十五)晒賣踊

二上り　さらししまさらし高みやさらしさらせばむすめはくろむ布はなるほと〳〵なるほと〳〵なるほと〳〵なるほどむすめはくろむしろくなるほと〳〵

二上り　なるほど〳〵なるほど〳〵なるほど力にまかせたかつちぎねむすめはくろむゑじまをれを見てなぜにかほふりやるぞゑじまたかみやなんとしよぞゑじまは生れつき

(十六)難波長吉踊

二上り　ゑひ〳〵〳〵なにはの梅やよしべ心は入江のうみのにごりよどみてすめどもついにあしのかたほのほにあらはれてひかれいづるや心の鬼よせめて百雨のかねばかりかやいまだおさなき長吉をころそとたくみあるとは夢にもしらでしうのかなしさは是がな此世のなこりかやゑいこりや此世のなこりかや長吉久しのあねにあはしよぞさあこちおじやといふにたまされつれたちゆきて長吉さきの物は有かなんの事でござんす金がふところにあるかといふ事いや〳〵なんにもござんせんださにやころすが一度で出せとさんとかわらけほどなめをむきだせば是はだんなのかはせの小判いのちたすけてたすけてたべと手をあはすればかしましいころしはせぬぞあゝといへどもおくのなんどへわきざしとりに行をみてから身もふるわれてむざんやよしべは長吉をとらへさあどふするさいごじやあゝかなしやなこゝにあねさまござらぬかいのあらうらめしやとうらみなげゝどつれなやむめはこゑをたてたらころすといへばなくもなかれずかはいやなたゞおし鳥の羽ごにかゝりし野ずへのいどのそこにありとは夢にもしらでおや子親類かやせ〳〵長吉をかやせ長吉かやせとなよひとねもせでまよたへ

(十七)一番鶏踊

二上り　ぼんさま〳〵ちとたしなまんせうちにや女房子どももないものかなんぞのやうに性わるぼんさま一ばん鳥のなく時はこと〳〵〳〵とたゝきあけてはやでるとの〳〵内にや水がつくかあまりのことといの〳〵さつても〳〵あまりけふこつ

(十八)伽羅之板橋踊

本調子　さつまのかこしまの長吉どのはきやらのいたばしをわたるとてこえたほとんどへいで其比ははなみ月さくらせたらおふたるなまず見つけた長吉との長松どの長吉長松ちよろ〳〵めきがあげておとして藤のはなをしつかとからげてさつさあねのみやげに

(十九)棟上踊

二上り　四本〳〵はしらをいよへおつたて大工のちこ助これのおたけにほれましたさきりやしやつきりきりしやつきりき〳〵ちこ助のこぎりこぶくらやつこりやこりや〳〵ひきまはし一筆かいてはやりがんなさてのふおやみたやあの子うんだるおやみたやちこ助のこぎりこぶくらやつこりやこりや〳〵ひきまはし一筆かいてはやりがんなさてのふおやみたやあの子うんだるおやみたやちこすけさあやるぞゑい松にこ鶴がまいあそぶ

(二十)源五兵衛踊

二上り　高い山から谷そこみればさつま源五兵衛はめにたつおとこのほほんにほしやれたひんつきちやせんかみねてまたおきてもちやせんかみずんどくぼんたぬりかさおまんはどこへはりまのあかしへはまくりふみに〳〵はまぐり〳〵〳〵ふみにてぐり〳〵〳〵ふねにのこの舟にのせた源五兵衛きりゝとまはつてのぞんだはりまのあかしへはまぐりふみに〳〵はまくり〳〵〳〵ふみにてぐり〳〵〳〵舟にのこの舟にのせた源五兵衛壹萬八千たから藏ゑい〳〵やゑい〳〵代のさかへ

(廿一)長刀踊

二上り　さてもそなたはくわんくわつ人かしんくさげをのなが刀おつとり揃たなぎなたすやり〳〵〳〵〳〵やり〳〵すやりちかくとうさ八方からめてくもでかまやり十もんしみよは〳〵一か二か三か四か七つ道具でおさめておつとり揃た長刀

(廿二)小野村彦惣踊

二上り　城州〳〵おの村の彦さをみたかへあたまちやつせんふともとでほそもとでふともとほそもと〳〵〳〵ひきしめてじけてひとりのだて男へ彦そはどこへ山へさ山えのぼればいばらやとめるいばらやつとん〳〵はなしやれやつしてさ日かくれる彦惣〳〵ひ

こそのおばごのうとふてうすひきやるいのめゝかまへうすのめじやものかまりよかい彦惣〳〵〳〵〳〵彦惣はじげてひとりのだておとこ

(廿三)三彌土手路踊

二上り　ゑひ〳〵どつこいながい刀をさいたはおさきかたひぢいかつてやつしつしついのはさんばこつぎとつこいやりふりじやたてたへさんやとてみちなよふたとさよふたとさあしやちどりあしにしは田のあせあぶないがてんじやあぶないがてんしやあぶない〳〵あぶのふてならぬへもひとつかへしてあしやちとりあし西は田のあせあぶないがてんじやあぶないがてんじやあぶない〳〵あぶのふてならぬへぬれにやめのないかな山どつこいおとこへ

(廿四)お先鈍助踊

二上り　おさきさありやらんりやんりやから崎のしてんやつこのぼつたてろまかせておけゐのよいやさこれはぶんごのありやこりややりむめのやりむめぶんごのおさきて石つきつかんですつ〳〵もちりてふれとんやこひぢでふれとんやつとうやとうしやんぎり〳〵〳〵しやんぎりたいこのすんでんとんすすのどんすけかありや上の町下の町中の町ははれじやほどにむなひげさすつてすつ〳〵ふらいの

(廿五)福之田踊

二上り　さまが舟かやかんべざき沖にゑじまの姫むろはふくの田〳〵あのゝかんす〳〵よのうけてのながくのすはこんのごやのずけおしやりやそうでござるふくの田〳〵あのゝかんす〳〵よのうけてのながくのすはごんのごゝのすけおしやりやそうでござるふくの田よいゐ〳〵ふくの田

(廿六)大小見踊

二上り　鹿島浦からのふ浦から〳〵たからふねがついたとさかほのわかやぐ年男よい事〳〵よい〳〵こと〳〵よい事ぶきをいはふて事ふれかまいりた是やこなたへごめんなろまつ來年のゑほうは申酉のあいだをば年徳神とさだめて庚辰のとしはじめ卯の十六日がまめまきたわつとつかんでよいやさかしまおどりをばちゝちつとちと〳〵ちつとおとりひやうしにかかつてこれやこなたへものとふまづ正月は大かのはて大とも〳〵二月小三大四五小くたそれ六月は大よのさて〳〵さて〳〵どつこい七八月は小とさためて

九月は大の菊月十月小はがつてんか霜月しわすは大大きわめて〳〵しつかときわめて大小げんとさだめた

(廿七)下六藤六踊

二上り　ゐいどつこいゐい〳〵へいこのゐいとんなむこがくるやらげ六と藤六とおたるもつてまいつたおつとりそろゐた御しうぎあられまじりのみぞれ酒春はうでたいとそのさけひつかけて花たちはなやれ宇治水ゐいとんなうんゐいとんな池田いたみのけ六と藤六か晝はまへたれたまたすきよるはりんずの三重まはりちんたのさけやしなのさけはむことのゝおすきじや

(廿八)丸福頭巾踊

二上り　いつもよりにぎおふかどのふたばしらでつくりといくよかさねてまいねんの〳〵ゐほうからとてゐひすと大黒とふつくな身てござつたいはふてつりざほさあまいろおさきへござれくるかあとから〳〵あとから見ればまるふくづきんで〳〵づきんて〳〵にこ〳〵〳〵まるふく頭巾でにつこりとけさのゐがほはなをでつくりなをにつこといとしへ

(廿九)福助買初踊

二上り　かどは一五三かざりわらさげてものもとれ〳〵〳〵どつこいどれ〳〵とつこいとれ當年のゐほうより福助が買初ははめでたいなくらひにきたなをろしかわのさいふをかたにひつかけてふるかねかを唐かねかをふみのうわかききしやうのしたがきかいましよよい〳〵伽羅のたきがらかをやれかをおふかを心中のよいよねたちを千年も萬年もまん〳〵ねんも正月かいといはふた

(三十)有卦初踊

二上り　はなは四きさくやれさて都はにしき野山つゝきて一はいにゐいずつしりととことんとこと〳〵つんと〳〵つゝんつとゝんととこ〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりとうけ七代の年八卦正月はじめ事はじめやれ十七八もうけはじめ火性はつらりつとことんとこと〳〵つんと〳〵つゝんつとゝんととこ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりとはしめてひらいた扇子のかなめはしつかと〳〵すへはんじよへ

(卅一)順禮踊

二上り　よい〳〵〳〵かたにやおいずるひつかけてあ

ゑいとこなあなんとこなつんつきそろへたほうの手きりりん〳〵きり〳〵きり〳〵わつとまはつたじゆんれいしゆ是ははりまのしよしや寺よさだん〳〵そろへてのぼつたゑい〳〵〳〵ゑい〳〵ゑい〳〵ゑい〳〵〳〵しよぐはんなじやうしゆちんやう〳〵つゝいてのぼつたよいやさめてたいな

（卅二）次郎官者踊

二上り　千石のよねぼね萬石のよねぼねおにはにずつしりつゝいてまいれ次郎くわんじやげに尤そうよのめじかに持てさあまいろいそ〳〵いさんでさあきり〳〵いそ〳〵いさんでさあきり〳〵きり〳〵まいれさあまいろまいる〳〵まいる〳〵さあまいろ鳥はがんかもすゞめひよどり鶴のはしさつてもいふたよふいふたまいる〳〵まいる〳〵さあまいるはなはこうばいしらたますいせんくわさつてもいふたよふいふたげにもつともそふよのそろへて〳〵そろへのあふきはするゑはんじよへ

（卅三）さい鳥さし踊

二上り　うづら〳〵なくなるふかくさ野べのねさゝをしわけかきわけ〳〵よくみれば人めせきれい打とけてありや山からのおの〳〵おの〳〵おの〳〵おのがひきよ〳〵の羽もかろく〳〵つまさきしつめて〳〵つごもの〳〵つごもの〳〵ゑゝへゑさしさほへ〳〵けさはつこゑはしほらしや

（卅四）卯の葉重踊

二上り　日本目出たい門に松竹かざり立て若水男とし男卯のはかさねのきそはじめやれ御馬のりそめ弓はじめこのやつつるつつる〳〵つるやつつるつおづるゞ鶴つる〳〵つる〳〵やつつる〳〵松はかはらぬこのとのゝ御はんぢよさておめでたいよの

（卅五）八重垣踊

二上り　小倉くわんぜんちよこ〳〵とをひのおもてからごされじつと引しめやとん〳〵せどは八重垣大戸のくろゝのくんぐりどくんぐり〳〵くんぐり〳〵なんぼくゝりくんぐりくゝりよひくんぐり戸くんぐり〳〵くんぐり〳〵くゝりくんぐりくゞつてだん〳〵めでたいごしうぎ

（卅六）文まけ孫左踊

二上り　坂の下には、夜もいやあよのぶんまけ孫左がお手まくらみつはでゝゆく山ぶきやそつこてしよげ

ろいよんのあいしてさねざめにや鹿よしかのこゑよんのあのみねとをるはこつちん〳〵さがつてのぼつてのぼつてさがつてごいよころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころびおちてあふせもあらばあぶなかたやどつちかひかたはやまだ〳〵ぬまたかふけか〳〵あしがひかれぬ逢坂へさかの女郎衆と

（卅七）髮結小五郞踊

二上り　こひ〳〵小五郞髮ゆいさしてやつとたばねてやくつはかいとり大津八町てむつきくどん〳〵新酒こざけはこざいかくもなどつこいなろかへせきの女郞しゆはやれこりや馬の口とるもろ手綱若衆見かけてなとつこいなんなん〳〵〳〵なん〳〵やつこのやつとたばねてや

（卅八）傘　踊

二上り　むこ殿はなつくべいとて夏は何をみやげにずんどく〳〵ぼんだぬり笠めそなら〳〵いつそとがり笠はそりかさ朝日のやつる〳〵〳〵やつつるつ〳〵そりやさせおとこやれ〳〵男かゝのゝ市大男

（卅九）いせき踊

本調子　われは岩尾にさ打よする波はつとたつなはいせきの竹のかごのやめしけきやなか〳〵あたごぞあはでやみなんういぞつらいぞ

（四十）新庄のや踊

二上り　紺屋もがりのやだん〳〵〳〵だら助のほゝそ帶さつてはたぐつて三重まはるこのよいかどのやしんじよやのさ竹ごしによつくるよ〳〵よつくる〳〵よつくる〳〵くる〳〵〳〵と〳〵よりたけれどもまづとをるそれかへ「さつてはたぐつてへ返し

（四十一）楊弓踊

二上り　御代はめでたやふくろに弓をおさめおさめておいていざや矢をとれ一百手君のは風になとつこいいちどはおちよまとはたまやのなどつこいねんね〳〵ねん〳〵〳〵ねもさへわたるもんは花ぎりをれとそなたはまつどつこい〳〵松竹じや

（四十二）先陣宇治川踊

本調子　先陣宇治川づら〳〵ずつとまくりこむいきおひにこまがいさむのほらほ〳〵のほらほゝ〳〵はんにやしとてとささあしとてとさかつてかぶとのをじめのきんちやく金銀のは娘のたのみにうけとつたおゝ大分の「駒かいさむへ返し

(四十三)なんほゝ踊

二上り　きみは二階のはん箱はしごやつこのぼしたてかんじり〳〵かんじりかよふてござれずんどのぼつりめてはおりぬきだ小娘をみたかとしはなんほゝゆかないがなんほゝなんほゝ〳〵やれ床とつてはなんほゝなずみかゝるおゝしのびの〳〵かくし殿を見たかやつこのぼしたて年はなんほゝゆかないがなんほゝ〳〵〳〵やれとことつてはなんほゝなづみかゝる

(四十四)竹馬踊

二上り　五十三次にかくれない男よゝをこめたる竹馬をさて〳〵見事にかざりたて手綱かいくりしつしどを〳〵とゞんどどつこいせとどつこいせ朝のでがけにやこむろぶしでがけにやあさの〳〵でがけにやこむろぶし一ころ二ふし三藏やいふたりつん〳〵つれだちさあ〳〵いくべい〳〵くつわとすゝがりん〳〵がら〳〵りんがらが〳〵はいどう〳〵はい〳〵はい〳〵はいどうし〳〵おつはれ御馬は上手とじやうずかのつたかのつたぞそれ〳〵そろたへ

(四十五)白樫踊

二上り　ゑい〳〵みくまのゝなちのお山を今朝こそみたれ順禮衆ふだをちやうどうちやおさめていわのはざまのしらかしを〳〵國のみやげになろたよぼうの手そつこてひとふりやつとを〳〵やつとを〳〵とをとを〳〵〳〵やつとを〳〵まいろとう〳〵とを〳〵まいろ岩のはざまのしらかしを〳〵を國のみやげになろたよぼうの手

(四十六)舟指踊

二上り　高砂や〳〵此うら松に年をへて木影(こかげ)のちりを一さらへつまげてからげて〳〵たかつまとりてまぼじよはしり出てゝらをまちやれさあよいさ是さよい〳〵世の中のおめでたいよの「木影のちりへ返し

(四十七)七つ道具踊

二上り　おさきさき〳〵さあさき〳〵はふりてのしゆとろり〳〵とふらねばなんよさつぎつき〳〵はあれ助よい〳〵是助よい〳〵浪助せき助だい笠はもち助たてがさはてくすけ戀のとつこいだて助しやれためもとでひとひねりこんどの〳〵〳〵〳〵今度のやぶいりにやうらからごされうらのやぶからつまどからなりからふりから物ずきでとのをめがけてふるは大

とり毛

(四十八)繁昌之市踊

二上り　めでたいなあゝめでたいなわれかすみかはみやこのたつみいなり山こぼれかゝれる玉あられ是のとのごにあいとてみとてあの山こえて此山こへてゑいさんさゝあさゑいさんさ／＼君をおもへは音羽のたきのたきのしらいといといとしいと／＼いとしよのいとしよのいとしよの／＼いとしけりやこそはんじよないちで此さけによふたとさこん／＼こん／＼のさかづきはせんしうらく／＼萬歳らくと祝ひおさめた

(四十九)山之手奴踊

二上り　さつまア、のいちのやはどつこい三ヶ國のきやらよなどつこいななん／＼名もさてよいやな／＼きやら／＼きやら男へたてからみてもよこから見てもはつアよいおとこへおさき壹番てのやつこうわひげひんとしたしやんとしたつりりん／＼つりりん／＼つりりんひげのなが刀それ八もんじうから／＼うかれてあとからうか／＼うかうから／＼うかれてあとからうか／＼うかかちふる手をふるだてをふる爰は山の手のよい／＼やつこのでところ

(五十)早咲梅踊

二上り　ひらき初めたるはやさきむめのはんなりと袖つまそろへてふつくりときいたか／＼ゑいゑい／＼ゑい太郎くわじや御まへにねんのはや／＼とはやざき梅のうくひすかきりきつてう／＼きいてうきりきりきつてうきつきよいわふた太郎くわじや梅のはな笠はどふでもさこふでもさどふでもこふでもゑい／＼太郎くわじや

(五十一)菅笠踊

二上り　東からくるはなよめうれしおれがめあてのすげ笠うれしほんにうれしおともにとつつくだて助がよぢらす／＼やれこりやよぢらすとつこいよぢらす／＼こしをぢらすもみぢ笠まん丸こふてきよふてさまがすげ笠百萬貫

(五十二)權之助踊

二上り　若衆さんさしのばゝさ若衆しのばゝ寺がよひなんでおじやそろ／＼ねん／＼じやがおじやそろ／＼ねんさても久しの權の助あげのまりのさげのまりのあげのさげのやりはりよりをおりやふみならふたおれがふまいでそれをたれがふもぞいのお手打か

けてほろとないたをいつわすりよ

（五十三）金山まぶ踊

二上り　佐渡の山まぶ山越てせんゑもんさんがと丶ぼんかと丶おん／＼おじやぎんずる／＼ずら／＼ずつとたけながし竹に花咲せんゑもんさんがと丶ぼんがと丶おん／＼おじや八百ちよのた丶らでせんざをまんざをごつほり／＼ごつほりとふみやなろふたにごつほり／＼ごつほりこ

（五十四）岡山通踊

本調子　やんれしらなみのうつやつゞみの川柳水にもまれてねこそいりけれきしかげのはなやさくらやふぢやうつゑいたいこのばちや川うつぎ雨のはやしもさみだれもたのむ汀の田うたのおんどひやうしをそろへてはやせどもゑいいさみてうつるおもしろやうへい／＼そうとめ笠かふこきしよにさ笠かふてたもるならばなをも田をばうよにさおか山かよひの六ちよこばやにろを八丁立てあさのおまへの三ぼがせとをこおよろ戀しきとなうとふてなのりておこぎやるはゑいこの小じやくし小むすめこせんぞかこさいかか丶いかこぐる松かこ女郎かつがわつかわ／＼のんゑいよほほではやらいでうたでやる君をおもはでかよわりよか／＼どこで見たぞつとしたとよへい／＼君は春さくむめのはなじやとよへいかほりゆかしきとりなりはありや丶こりや丶ゑい／＼さつさゑいさつさまんざいじや／＼せんしうらく／＼じや

（五十五）馬場先踊

二上り　まつはゆたかにおふてば丶さきつなぎむまがいにつめたいけさのゆきとの丶おむまはさびつきげれんぜんあしげかげかすげしと／＼打てはかけあをりお江戸そだちのひけ／＼男おんむまの口をしつかとさつりりん／＼ひけ男つりりん／＼ひげおとこつりりん／＼／＼つりりん／＼りん／＼りん／＼らんとはねたるひげおとこつなぎとめたよこひいせき札

（五十六）柚山踊

二上り　おじがそま山からもろたよかしをやりにすげたる十もんじたて丶ならべてなあどつこいなあどつこいなげしをよけて一だん／＼／＼やつとふ／＼二だん／＼／＼やと丶ふ／＼一だん／＼二だん／＼二だん二だんたん／＼そふへた石づきよする／＼／＼

手なみをそろへてよするみぎわのこまがへしはかた
ごぶぞり人にやかまはぬおりやすいた

(五十七)しとゝん踊

二上り 尼が崎からこつちのむこ殿〳〵くるとさしつしろかいはやめて壹丁の二丁の三丁の四丁の五丁の六丁こばやはなのゑじまへおせやれ男ゑとやつさすまやあかしの月を見しよしつとん〳〵しつとん〳〵しつとんしとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵とうからからろのおとがしたはなのゑじまややんれおせやれ男ゑどやつさ須磨やあかしの月を見しよしつとん〳〵〳〵しつとんしとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵とうからからろのおとがしたよめがちそうに人の見るめといその見るめがさかなじや

(五十八)四季花笠踊

二上り 閨のこまんは遊山かよひいろをふくむやふゆこもりまづさはるのいはひにはぬふてう鳥のはながさなつは川せにあぢろ笠あきはおどりにすけ笠をそろへてそれ〳〵こまんおどりだせこまんてん手ひやうしもそんそろた〳〵そろた〳〵そろ〳〵そろ〳〵月のゐかほにてつたりやもみち笠そりやかゞ笠よ〳〵よふゆは雪見にかづくひぢかさはなのみやこの御所ぬり笠はなりがよふてさて〳〵どつこいさよござる

(五十九)櫓拍子踊

二上り ゑい〳〵和歌のうらこそそれしてのさての第一名所うんそうだぞへさつとみつ鹽よせきてはやのかたをなみにぞのりくる船のろは壹丁のいきおい〳〵きおいにきおふてこぎよせたしんとろとろ〳〵〳〵とろりん〳〵とろ〳〵〳〵おつとるろかいにさ船歌あれから是までいさぎよござる〳〵いもせしほはま

(六十)釣船踊

二上り 沖にこがるゝ女舟をみたかおつとかぢをまくらにろかいをさたつる〳〵たつる〳〵波たつる〳〵めなみよすればおなみもよするとかくやおなみはやよいこいこゝ〳〵今宵はどちまくらおつとかぢをまくらにろかいをさたつる〳〵たつる〳〵波たつる〳〵めなみよすればお波もよするとかくやお波はやよいこいこゝ〳〵こよひはどちまくら

(六十一)三番双踊

二上り　よろこびの文をへてちやうどまいつたむこ殿いさみてすへひろあふき御しうぎにしよぎつくあしもと見あふきもひとつ見あふき〳〵〳〵さしあふきさぎあしする〳〵はりひぢあふきでぬきあしそろへて〳〵そろへてふく〳〵ふくじや〳〵ちやうじや〳〵ふく〳〵ふく〳〵おとこは大だいふくちやうじやのはなむこじやゑい〳〵〳〵ゑい子たからのこのさいわい心にまかせてめでたいな

(六十二)地福踊

二上り　さてもめでたやなめでたや〳〵ゑい世の中のよね俵心やすくもだかへた地ふくできすけがおさめた俵を御くらにずつしりとつめたか〳〵よねか袖のつしりとろりとにやいますいろます〳〵いろますこよねがめにつく〳〵そりやゑい〳〵こと〳〵ゑいこときゝますます〳〵うつちのたからますこがねのますでよねはかるんよのめでたき御代はたんだにこ〳〵やかによねのお山

(六十三)君はしんぞ踊

二上り　きみはしんぞののり心さよいよゑい〳〵君とわれとわれときみとひきよせてはよる〳〵さおとこは花のみやこいりずにのつたのつてきた〳〵ふねのややどのむすめは小手まねきゑい袖をかざしておもてのくゞりのくろゝのあなから〳〵から〳〵から〳〵そこしんから〳〵かほがみたさに戸あけてそこせいちやうど一はいきみはよいさけ

(六十四)しててん奴踊

二上り　五丁さきからふりだすかたのゆきのながいはおくにの小ごせういろはまつ〳〵くろくろいがとこやらがよいしづかに見ゆるやつこの〳〵〳〵くだやりをひろどればなん尺〳〵なンほ〳〵なん尺なん〳〵〳〵ぼのなん尺こゝころつけてさあまいろしててんやつこが手のうち〳〵しててんやつこがしてゝんての内〳〵しててん〳〵から〳〵〳〵〳〵してゝんやつこがすりさけ男くにゝかくれない大介萬五郎おふそれ〳〵〳〵かくれない

(六十五)世繼踊

二上り　お江戸がよひに世繼がてきたやつとうおなはかゞにきくざけおゑどのまん鉢ずんどのめばよこざんす吉六しやくとれがつてんだきん〴〵のさかづきにおさへたまつかせ〳〵つぎめじや〳〵よつつぎ

〳〵よつぎつぎめはめでたいなかほにいろますこれはんじやう〳〵へ

（六十六）糸屋娘踊

二上り　本町貳丁めをとん〳〵とん〳〵とことんとことん〳〵とんとことん〳〵とふりとふはないが糸や娘は廿一はたちやつしつし〳〵姉にのぞみはすこしもないか妹見るめはしんとろ〳〵とんとおやを見るめはさるまなこへさる〳〵さる〳〵さる〳〵さるまなこへ「姉にのぞみ　返し

（六十七）珍内花笠踊

二上り　さても見事にそろたり〳〵そつこでふりだせお手まはり大事のまへのいやいこしすんよしふりよしなりもよしみよしよしのゝ花よりもゑい〳〵もみぢよりもゑい〳〵ゑいこの〳〵〳〵こつちの〳〵いまがする事おちんないが見つけたでつかい事をいふたりないふそちんないない〳〵ない〳〵ない〳〵さけもろぞちんないさけはげこなりなさけでないぞそこらをせひとも〳〵そこらを〳〵〳〵せひともをつひしげやごへてまつかせやごへてふりやれやつとん〳〵〳〵殿のおたちにおとも花やか

（六十八）春駒踊

いさむ春駒引つれ千ひきもつないてじまんでのしやなら〳〵しやなら〳〵れんなもみうらたれださまだばかやつたづきんちやちりちり〳〵ンちん〳〵ちんなとりなりでおつとまかせのよい〳〵〳〵ふりよしや〳〵ぬらりひよたれもかれもめつけんしよこゝもとてゑい

（六十九）荒木弓踊

君はなげしのや荒木の弓よ挽手あまたおふせのあらばはつとこたへてよん所はりよやひよや〳〵はりよや〳〵はり〳〵はり〳〵弓はり月のさまは三ヶ月よい〳〵どつこいよい〳〵どつこいよいこざるせめて今宵は有明のさ「はつとこたへてよん所え返し

（七十）ぞんぞりこ踊

本調子　麻の中にも三どはねたがあさか物いわにや名もたゝぬ　ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞりこいもよ〳〵ぞんぞりこのいもよどの子がいとしおふたもいとしだいたもいとしかたくまの小女郎はなをとつこいなをいとしぞんぞりこぞんそり〳〵ぞんそりこいもよ〳〵ぞんぞりこのいもよおふたもいとしだい

たもいとしかたくまの小女郎はなをそつこでなをいとしぞんぞりこあすはとふ

（七十一）牛まど踊

本調子 牛窓のへくんわんおんだうのそばでへどつこい是はきいたぞやけさのやときをうつどふうつのふはてのふ時のたいこはのほほん〳〵おででんがら〳〵おででんがらでん〳〵からりのでんがらりのおででんがらおともきこへてさらりつともへいよゑいよへどふうつのふはてのふ時の太皷はのほほん〳〵おででんがら〳〵おででんがら〳〵おででんがらでん〳〵からりのでんからりのおででんから天下うちおさめおめでたいよの

（七十二）三國玉屋踊

二上り みくにたまやの新兵へを見たか三國一のやさおとこまるて〳〵しゆすのびんつきはけながにつりひん〳〵なぜにこ鶴は出てまたぬそさつこのせうきけばたらふくつるてん〳〵だらふく〳〵たんたらふくつるてんふくつんゆふはかうし小まつのをのしんべどの「さつこのしよへ返し

（七十三）彌之介踊

ゑい〳〵〳〵是からさきはおさき手をふる長刀〳〵おさき手をふるなが刀さんやれ〳〵「ゑい〳〵〳〵是からさきは宮城野にさくはぎのはな〳〵宮城野にさくはきのはなさんやれ〳〵ゑい〳〵〳〵彌の助〳〵さむそにござる火をけやりたやすみそへて〳〵火をけやりたやすみそへてさんやれさんやれ

（七十四）美濃國てしやこ踊

本調子 みのゝくにゝてつまもちおいてさつこのいよこのこゝのへのはなのみやこにすまひすればてしやこあゝはふらねとみの〳〵どつこい〳〵みのこひしゆかしてならぬはてしやこてしやこてしや〳〵〳〵てしやてしやことしるまだ〳〵あゝはななんなふらないにさみのこいしゆかしてならぬはてしやこてしやこてしや〳〵〳〵てしやてしやてしやこ ふとしよ

（七十五）どうらく踊

本調子 いとしとのこはゝゝゆみはじめさあのとうらくめむかひこよねがはねをつくにのてまりつくにのよいつく〳〵〳〵にはつてんひつわがうらくとぶつつけたまねくたもとにふみやたまづさ袖のうちはふ

みやたまづさあのどうらくめむかいこよねはさやれこりやはねをつくにのてまりつくにのつく〳〵〳〵にはつてんひつわがふらくとぶつつけたまねくてもとにふみやたまづさそでのうちはふみやたまづさ見たか

（七十六）唐人踊

二上り　いきにて〳〵すいちやゐんちやすいちやすいふいちやういさらこわいめさはんやさそうわ〳〵ううちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそうつ〳〵うあう〳〵

（七十七）ゐしま踊

二上り　ゐしまみさきにほをまきかけてどつこいわかれのこでまねききみにまわらはさつさおしよせこきよせならはよへそれ〳〵あねのおまきはもんやとちぎるいもとおなべはよきちとしよげろはてそなたをどつこいをどつこいおん〳〵おもはゝさつこりやいかりをぶつこめまつかせおしよせこぎよせ〳〵ならばよへはりはどつこいあみでせまつかせ

（七十八）暦　踊

二上り　やたて〳〵めでたやこちのやのたからじやげんぶくよしの色おとこつゞくひかずをかろくかたげてこよみ大きやうじ小よみはたちのとのごに十九のおんおかた十九のおん〳〵おかたやれさてしつくりと〳〵くり〳〵くり〳〵しつくりと〳〵よめ入むこどりふく日大みやうやら〳〵めでた

（七十九）但馬小女郎

二上り　たしま小ぢよろありやこりやといのにのぎよのふだわいのみれば其日のやつこりやきとふとなるわいのありやこりやといのにのぎよのふたわいのみれば其日のやつこりやきとうとなるわいのなるぞ

（八十）もんつくつ踊

二上り　今づかいづに朝がよひさ〳〵蒔繪の指櫛きりのとふもんつくつ〳〵もんつくつ〳〵朝かよひさまきゐのさしくしきりのとふもんつくつ〳〵もんつくつ〳〵朝かよひさ

（八十一）都の町靑物踊

二上り　みやこ町〳〵にうつたる物はなに〳〵なんぞあをな小なもみだいこ〳〵〳〵ゆすやしやうがやめうがの子たうがらしやほうれんさうしろうりからうりあこだうりすいくわのさねはあかざねくろざねも

ござんす四五寸のびたるあさつきさつてもいふたよくいふたまつたけは見事じや

(八十二)拙僧踊

あたままるめてうき世をかるくせつそう本意にあらねともかど／＼てもらいまするはちの米の情(なさけ)にをやをはごくむだんな一重(へ)にせつそ本いにあらねども今(こん)日(にち)のしやかのみでしとおぼしめしみす／＼それがしをぶつぼさつの化身とてもろ／＼の亡者をとむらふだんなせつそほん意にあらねどもおもひわすれぬ娘ざかりをすいてきたこれがまことに拙僧ほんいでござるよのせひない人めはづかし色いろがよい『間ノ手「一錢二せんやほうしやをたのむと夕暮にすぐちがたんぎはかによらいけべすじもとをやしろふてなくすのけんかんへれそでつかんでへめころせおゝよところしや

(八十三)堺の濱踊

二上り　さかいのはまにありやこりやながれかれ木がすてゝあるある人の申されしはもくやふしやゑんどやきそやみやこにやないさだめて／＼きんきめこまかにござるほどにから木でござるべんよのさんがれ

(八十四)梅の木踊

二上り　むかしよううりはじめそろ梅の木村のわちうさんきみのやまひは思ひか戀かよそのくすりはじよさいでござるこちの家にはじよさいとてはござらぬじんじやくむねむしこはりはらさけの二日えひにはよねや若衆のやとゝんとん／＼ねがはでのまんせののまんせの／＼よろつのむしに第一の藥じや

(八十五)手合相撲踊

二上り　よい／＼／＼おまちやれやつとんとろ／＼とろ／＼と御前(ごぜん)かゝりにふりいだす男してゝん立かみちからしまんゆりかけ／＼幸嵐(さいはひあらし)にきり／＼やつきり／＼きりりとまわつてしつかとむすんだ力帶一夜なれ／＼帶かふてとらしよそれふれさ／＼帶かふてとらしよとけてみたれてやんれ／＼それ／＼／＼男いさんでさすゝんでさ／＼しゆすのひんつきやととんとろ／＼／＼やととん／＼／＼とろ／＼みとれてやさ男國でかくれないさつても見事なでつかい男へ

(八十六)藤内太郎官者踊

二上り　藤内太郎くわじや次郎くわじやてござる日本

一の御きげんに立て舞をぞまふたりけるふりをそろへてどりやどこのそりやそこでのさらばまへ太郎くわじやゑい次郎くわじやさまとならばゝひいなの殿よならべてかほを／＼かほをならべてにゝにつともわらふたこつちのや／＼こつちの／＼よい殿へおれとそなたはふたへのおひよそなたはそちらへくるりとまはりやおれはこちらへくるりとまはろ手さきをそろへてとん／＼とん／＼やととんととん殿さまの二重おひしめてくゝしてしつくり／＼ちからおひむすびとめたらなをよかろへ

（八十七）蟹川踊

二上り　かに川をわたるとて戀の文をおとしたかにらはしらぬかはなしする／＼出る月をゑてはお手を引よふてしんとろ／＼とろ／＼／＼とろ／＼とろ／＼／＼／＼たら／＼おりでやすんだおれはそなたをわすれまい／＼

（八十八）しゆんぜう坊踊

二上り　大和でんまどつこいしてから／＼都がとまりでおんじやり申せよさのふよふほんにほんにおしやかの堂供養しゆんぜう法師のあとをつぎ檜のお笠で鉢の子手に持みやこの町をしゆしやうらしうとをれば／＼あれのむばもじいもとゝもかゝもあねもいもともちよき／＼ちよき／＼ござれの／＼ちよきりこ／＼ちよきり／＼／＼ちよきり／＼ちよともぶんだしたむな木かまつかせ山家おくよりよこだきにとやれ／＼でつくりすわつた楠

（八十九）伊勢みやめぐり踊

二上り　さてもゑいしやさ見事な天照神のけふ吉日の宮めぐりあとさきそろふたらさあまはれ／＼やまはまはれ風車まはれ／＼ばきんきのくすりねからはからそこしん實からうわきがましましじやそれさくるり／＼くるり／＼くる／＼／＼／＼それかへ春はとつこいいせさんぐう

（九十）菖蒲刈踊

二上り　千代を／＼かさねてゑいゑてこいまた毎年のあやめかり所はなにあふひろさわのいけの／＼せうぶをちよん／＼きり／＼／＼ちよつきりと家つとにひつたばねかいたばねてかづいたことしや世の中なかの／＼よい／＼よい／＼／＼なつかの／＼なつかのせつくの大かざりあくまげどうを打はらいきよめ

たてまつるの〳〵千年も萬ねんもまん〳〵ねんもお
家はつきせぬかざりへ

（九十一）芋之子踊

二上り　芋の其子のそたちをみたかへさつては子たか
らめでたいな子は四十八よの末ひろがりてやら〳〵
やら〳〵そんれわへ〳〵やら〳〵やら〳〵めでたし
やん〳〵いちざわざらりとならべていちどによんだ
お名はへおとよけさよたつまつゆるまつだんだらい
なごにかいつくぼうひつつくぼうかいつくひつつく
火うちふくろにしやん〳〵おめでたいよの

（九十二）小川踊

二上り　水をくみやらばよふやよやよ小川でくみやれ
小川小石川ころびよてころび〳〵〳〵かゝるとよへ
君はさい鳥さしわりやもずの鳥むねんしごくやおと
されたとよへ

（九十三）ていこや踊

二上り　戀をしやらばこたつでしやれこたつちわばこ
さんさかくれごさらぬのふほんゑゑゝのふほんゑて
いこや〳〵ていこ〳〵ていこやといふたやつはがつ
てんかおふさゝ〳〵がつてんじやうちもせいちよん
もひとつせいちよん〳〵ちよちよんとうつたやつに
はる〳〵とでよふたちよちよちよんのちよ

（九十四）ほい〳〵踊

二上り　こちのちんちくちをほい〳〵ほむるではない
がとつとおく山のむぎてものが有との親子なかに五
六本といふてかりてこいとの人がかりてないとのそ
れ〳〵みたかそれみたかこんぜうながな子をもてば
人につい〳〵つい〳〵つい〳〵とられて事をかゝし
たほい〳〵のほい

（九十五）のんやほゝ踊

二上り　戀とくれ〳〵のんやほゝ〳〵おしやおん〳〵
おしやおしやれ〳〵のんやほゝ〳〵とは思ふたさう
ゝできたのやおんは〳〵ゑい〳〵〳〵うらのせどの
やのんやほゝおしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵の
んやほゝ〳〵とは思ふ　たさうゝで　きたのやおんは
〳〵ゑい〳〵〳〵

（九十六）二本踊

にほ〳〵戀しやな世にあるときはひけどなびかぬな
きよくもなやとは思へども〳〵善太どの〳〵情にへ
だてはない物をせめてひと夜のなさけのあらば今の

うれしきごしんもじわすれまじつきをまじ此世はさておきのちの世もこれさて〱〱よいやさわすれまじ

（九十七）まん丸踊

二上り　まんまるござれ〱十五夜の月のわのごとくはり〱わのごとくよいとんなとん〱十五夜のよさり〱つな挽女郎にうつほれたはり〱うつほれたまん〱丸やの七左がてくだはかつてんかおしつけおさへてやらかわいのみ船やでかした〱これさ

（九十八）今度屋踊

二上り　こんどやござらはよふやよほいほぞんこしの町へゆけばひたりへもどればみぎへゑゝよほいほすぐにかよへば一里十八丁まわらは三里よほいほそれをばゆきすき花のかのさまに尋あおふこれさこんののれんによの字と書てしちくでこしでかくれなやゑいそれをばゆき過はなのか のさ まに尋あお ふこれさ〱〱

（九十九）ふくとん踊

二上り　情ゆ ふぎりぼつとりとりおことなあゝんはづむなあふ〱とん〱こざつまいきに太夫ふくとんふく〱〱ふくとん〱〱〱〱〱

（百）さゝら踊

二上り　やんらめでたややんらたのしや さつさ せちよやまんぢよの鳥おいかまいり ものもふくとく とのむこかきた やれこりやつまだてゝそろ〱そろ〱そろ〱そろ〱そろ〱そろ〱そろ〱〱〱〱〱〱やつこりやつ まだて ゝ御代のさ かりのまん中まん〱まんなか中でひとりの御代繼

古今踊歌百番終

増補松の落葉巻第五　古來中興當流はやり歌

目錄

増補松の落葉巻第五

(一)花見車

本調子　花見車をひきやるはよいが〳〵御所の女郎衆の袖引なやれ袖ひくな〳〵御所のぢよろしゆのそでひくな

(二)五條車

本調子　五條あたりをくるまがとをるのほんへたうとゆふがほにさんさはなくるまのほんへ花車くるまのほんのほんへ

(三)咲た櫻

本調子　さいたさくらになぜこまつなぐのほんへこまがいさめばのほん〳〵ほんほのんいよ〳〵花がちる〳〵

(四)吉田小女郎

本調子　よし田とをれば二かいからちいとまねくしかも鹿子のずんどふりそでがなんきみちよいとしよ

(五)四季よほん節

本調子　さてふあらしにちりゆく花のよほん〳〵〳〵へよほん〳〵へせめてしばしは香ばかり袖にはのこれよほん〳〵〳〵へよほん〳〵ゑ

「軒の橋枕にかゝるよほん〳〵〳〵へよほん〳〵ゑに夜のねざめにことゝふ山ほとゝぎすよほん〳〵〳〵ゑよほん〳〵ゑ

「ところせきやの月さへつらやよほん〳〵〳〵ゑよほん〳〵ゑしかのなくねにいよしも哀をそふるよほん〳〵〳〵ゑよほん〳〵ゑ

「雪にならはで思ひはつもるよほん〳〵〳〵ゑよほん〳〵ゑきゆる思ひになどかはとけぬは君のよほん〳〵〳〵ゑよほん〳〵ゑ

(六)しうとめ

二上り　おれがしうとめはきふいぞ〳〵あのまつ山の葉をよめあのまつ山の葉をよめはそなたは天なるほしをよめしうとめおどり　おどり

(七)鹽屋長次郎

二上り　しほや長次郎はこいさばにのせてのふさおきにやとん〳〵どんどろめけばよのめもよねられずあさせうがいな

(八)茶　摘

二上り　くもの御來迎はさご右衛門がおがむへ其子無事郎ともあじことはするなへのちはさご右衛門がみせかはりゑ

「となり藪からによき／＼でたはこぞの竹の子のこの／＼ま竹こちのとゆ竹に見ておいたしよがいなやれ見ておいたこちのとゆ竹にみておいたしよがいなおとろとまゝよはねきゑとまゝよいとし殿子とこちやねたがよい袖をしきねのにいまくら

（九）替り祭文

本調子　はらいきよめ奉るのいろはこんほん大夫しよくさてはてんしよくすかたなりまんず江口のはしめより君といふ字をかきそめてよゝのすへにはよねときみかへせんしやう大臣閣の戸ぼそにひきこもりとこやみの夜みせとなりけるをやをよろづのまつしや立おろせがやどにてこれをなけきかぐらをもつてもんさく袖をひるがへせばまたとこやみのけもはれてともしびひかりかゝやきてこれよりいろさとはんゑいしすへの世までもぶたいてんしやつかうじやうどのうてなとかや

「思ひきれとやきりやまのあさぎりこめてやつきり／＼／＼やゑきりやおはらたかくらたませしはしきぶあふしうおぐらやませ山みやこしから崎やくれはやしほの道とせにうらのあけまきつりはせでいそのかつ山わけのぼるふもとの野邊のはぎ原が敷とねし夜のねたましくおぎのうわ風ふきはらひあくるわびしきかづらきやたかま高さきのせを川あふゑ大きしあふよどや此おふ國のきみたちに替らてかよふ人々にきたるましきはあゝくるしのさいなんがたゝりをなすともいまよりはしよきやくはしやうじゆあげやはまんぞくせんせいとうやまつてぞ申ける

（十）手　杵

二上り　市べかしらにおとゝはふたりもちのこめがなやれあづきかな山に手杵をみておいたしよがいなやれみておいた山に手ぎねをみておいたしよがいな

（十一）さまが便り

三下り　あらいたわしやゆりわかさまは／＼しらぬたこくにすてられてはしのらんかんにこし打かけて／＼そより／＼とふきくる風はさまが便りかなつかしや／＼

「はとがまめくふ八兵へどのはとか／＼お花でゝお

ゑさほ打かたげよやりひやりにで丶おやれ〳〵ちやつとで丶おやれよやりひやりにで丶おやれ

(十二)間之山佛念

二上り　うき事をおもへばいとゞむねの火のきへやすき身とい丶ながらりんゑのきづなにつながれてなむ阿彌陀〳〵〳〵

「夢のうちなるゆめの世をさとらぬ事のはかなさよなむあみた〳〵〳〵野邊よりあなたのともとてはたいぞうかいのまんだらとけちみやくひとつにじゆず一れんなむあみだ〳〵〳〵〳〵

(十三)伊勢之櫛田

二上り　いせのくし田のまん中ほどでふかき思ひのやれむらさきぼうしほんにくどくかそりやしんじつかごちの如來のめぐみもあろと戀のおも荷をのりかけむまにはなれかたなき我が思ひ

(十四)おもやこそ

二上り　おもやこそくれおもはでこよか千夜萬夜はねてこそよけれかけてよいのは小さをに小袖かけてわるいはうす情〳〵

「君をまつ夜はのほんほほんに〳〵にさにしもひがしもみなみもいやよほんにさとかくまつ夜はきたがよいのほんほほんにほんにさ

(十五)替り榮閑神風

本調子　かざらる丶百色(ひやくいろ)の道具をならべければたゞしまいもの丶ごとくなり五通の手形の五本立ならべもとよりせいすけ三國にかくれなきじんべんきいのちゑしやなればだんなのゑんにさしあがつてまづなき事をぞ申ける金子三兩〳〵かし給へかみへのぼるもろぎんなければてんとびやくらいごとうのつまりはげかいにおつる伊勢にしんだいかためたれども雨にふられ風にふかれ月まち日まちにあまつさへ大にちにあいあさましや火ふくちからもあらばこそあふやのやちんもなさゞればいかり切てたてよ〳〵よとあたまくだしにしかられて男ならば正八幡大はさつまつぞやしばしおなしあれ伏見のごほうはいつものごとくとうにすまさはなにかせんたてたは此月中の日よ車わすこしごめんなれしんじつおんになすならば錢は壹文なけれども天王寺でしやうゆふつくらせすみうりしてもだいじもない四國の米はさぬきて壹石おなしく壹石三斗なりつくしの彦三はいつものごと

く大やしてきどくにめうとはほうべんなりたんごになれあいきれいにもんたて大せいくらすとうけたまはる日吉は山王廿一じやがおやはしらひげひだりちんばでこすいなおとこちゝをふんぬくぞんめいなりみやうぎ町にはぐわんにん坊ではてはらきるゆどののゆかたはみぬまにうせたがだいつが取つた手もとがみたい見付たぞおいくる時は壹厘にげ貳りんにげ第三にあたつてはやつこにあたまをきりわられ惣して身のきずは壹萬三千余きずなりたとへじやうごうかきりのしちもつなりとも今一度うけさせてたひ給へとせりかけ〳〵いのりけりしちやものふじうしたりけん五兩貳つにさつとわれ貳兩貳分にぞ成にけり三人のとろぼともゆんてめてよりとり付ておんかたつたり〳〵かほどのかたりはかんかほんてうにまたとふたりはあるまいとてかねかすものこそなかりけり

(十六)うらのせどの屋

うらのせどのやでぎしり〳〵とぎしめくほとになんじやとおもふてはしりでゝみればなんでもしやり〳〵おんじやれめされさしまさぬかなつかたひらのぬをおしやり〳〵さらすおんじやれめされさしまさぬか

(十七)旅の日暮

二上り　いふてなげくはおろかでござるいはでおもふはのふ身をこがすといのたびは日暮がものういものよわすれた戀をまたおもひだす

(十八)鬼か出る

本調子　おくりかへせばひゑの山風身にしみてなたねの花もいろ〳〵

「おにがでる跡より子おにがいくらともなくによき〳〵とある所につき給ふ

(十九)おもひ草

本調子　ながいかたなをぼしや〳〵とさしてあはれぬ中をふみにてかよふいつぞ此身はもみくしやにして死なば野中の身はあさ露ときへてはかなく成りゆくものをなにが殘りてつみとは成るぞ〳〵

(二十)庄屋の庄左

二上り　おとんとん〳〵とろさくやれなかそめてこんにもせいなかさへよくばなべかふてしよたいしよそれがそこへいでることかしやうやの庄三どのはつち

やはつかしや

(二十一)つく物揃

本調子　まがきかもとに立出てこぬ人を〱まつ身のうらみいはんためやくやもすそをかいとりてどてをつく〱みわたせばどてのばんたはぼうをつくおてらの法師はかねをつくこちのなじみはうそをつくさてまたわれらはかず〱のつくりしつみのおそろしや後の世たのむ南無あみだふつ〱ゆいてかへるさにゆきやあたりまはりてむねをつく

(二十二)三瀬川

本調子　西は堀川中小川けんしやう日夜ひんがしにながるゝ水の賀茂川やわらがための三瀬川げに〱はしも三本木比は卯月といふしてのほんでんすごく立ならに小家のとぼしびきへのこるかげをたよりてふみまよふかしこ爰よとさだめゐぬいつそふたりが中のしまかくれゆく身今さらにわすれぬ顔をと一度見つゝ見られぬうす月夜しばし入間の水かゞ見川をへだてゝほのきこゆばちもしどろに引三味線のてうし〱といふこゑきけばのみしらけたるふぜいして夜もはやいたくふけぬらんわけとなきゆくほとゝぎす誠めいどの鳥ならばちごくのありさまかたれきこきくともいかでかはらめやこよひかぎりのうきちきりひじきものにはうすばをりはおらてしくもみじかさよ　三下り「どしおり帯の長まくらおきてみさんせな後の世もあをにいましばしぞやまたねのとこ〱にもぬるゝは袖東がしらむしらむかとりもつげわたるはねをかはさんためしにやつまと〱とを引むすびともにかりねの夢すがた

(二十三)心中しゆん

本調子　まゝにならぬはうき世じやものと思ひまはせどまたすてられぬいつそ露とはきはめたけれどあとでそなたがうらみんものとおもひはかりてかたるといへはしゆんはきゝつゝよふいわんしたわしもきのどくかたるにつけてにくい平ざがよこしまれんぼそれさへあるにちか〱に西國がたへやらんとはおやのまゝなるかなしさはこれがうき世のならいとやとてもこなさんしなんす身ならわしはかうじやとさゝやきければ吉左うなづきさあらぬていにいとまごひしてたちわかれゆく夜はなん時ぞ八つのすぎかや七つのかしら六つのちまたもさんずの川もしでのたび

たつかいどりすがた心ぼそくもあとみかへりてのふよしさまかまちかねさんしよしゆびをつくろい此わきざしをぬすみまするにひまとりましたいざやさいごの水さかづきを壹つ貳つにはやふしごやのゐかうのかねになむあみだなむあみだぶつときへてあしたは卯月の五日せみの小川に名をながす思ひと戀とゐ

(二十四)はてくせ揃

本調子　すいなさいしよのくせきけはまづどて町はけしからぬ雨のゆうべはおもしろやまたきをかへてしまばらとゆけばかぶろがはしたなくはやりことばの口あひにあゝけたゝましぎおん町へと立歸りもんじがかどでたれやらがきでせい〳〵と石かけにはやる口あいまあそふよそれは壹升がなんぼするはてそふいやるがいやじやいの

(二十五)心中江戸三界

二上リト本調子　江戸へやりつゝしほふませたらすへがよかろとみないゝあはせすでにだんかう極りければそちにあふのもけふあすばかりまめでつとみややわずらやんなやいとまごひじやとなみだでかたるふさはきくよりこは何事ぞわしはつとめをあすやめうともまゝな身なれどこなさんにあふがうれしゆてうか〳〵とつとめまするにどふよくなゐどさんがいへゆかんしていつもどらんす事じややら山も見えざる假初につ いなれなしみわしをさてどふせによばにもちやさんすまいいらぬものじやとおもへともどふした事のゐんじややらわするゝひまもないわいなそれをふりすてゆかふとはやりやしませんぞ手にかけてころしておいてゆかんせなはなちはやらじとなきければ男しばらく泪をながしなじみもないにうれしやななんのあが身にわかれておれが何をたのみにゆかふぞいのそなたふりすてゆく身でもなしこよひ爰にていさ死なんとてつゐにふさをばさしころしつゝともに其身もな野邊の露

(二十六)下の關節

本調子　しあんばしとん〳〵〳〵こえてなおやどにござんす〳〵かそこせひ〳〵三リへだてし波のうへいろとなさけを小ふねにのせてくるはたれゆへそさまゆへ

「北山ばら〳〵ば時雨なから笠持てこい降てきたそ

こせひ〱雨はふるともぬるゝともたゞおそろしき
かざし風とかふいふ間にはれてゆく
「淺黄はざつとしたいやよなのぞみがござんす〱
するそこせひ〱こから山がら四十からから松たけ
のいくよも戀にうき茶の葉の色に
「一夜はちよつとの間これ なびけなあんまり〱ど
ふよくなそこせひ〱さりとはつらき御心物のむく
いはものごとに小野の小町の身は市原のしやれすが
たあなめ〱と吹風にねつのさめたる末を見よ

(二十七)わすれかたき

二上り　わすれがたきは彼人さまのすぎしたよりにこされし文をたとひみちとせあはずとまゝよおやと〱の結ひし緣をなんのとかりよう其したひぼをうらがとかいてとくものはおんじやるまいあとのいのこにこされし文はいつ〱よりもかはひらしやのふ〱ゑいこのさんさ富士の裾野にな一もとすゝきやれかれしはいつかわが戀ほにいでゝみだれあおふといふ事かゑいこのさんさ岩のはざまになやれたまり水ひとりすませといふ事か君としめよてぬる手枕は長門印籠じやなけれともくわいがよるろとほめられたほめたも道理いまの世にまたとあるまい御女郎

(二十八)つらい〱

二上り　つらい〱とおもひはすれどかほが見たさにあこがれきたをそれとしらぬへよしやよそにうつろふぬれきぬなれどいろふかくも思ひそめたへ

(二十九)御馬屋關介

二上り　だてをこのみやる御馬やのせきすけくるやら馬も馬もいなゝきくつわもなる小次郎よ太郎よどこに〱にさて馬どゞんどつゝんとつついなだお寺の寺のかきの木にづんぼろぼ〱とゝんとつゝんとつないだ

(三十)かだの粟島

二上り　かだのあわしまをゑい〱ゑい〱ゑい〱なゑい〱ゑい〱ゑい〱ななにといふてまたおがむへ君とねじやかをゑい〱ゑい〱ゑい〱ないふてまたおがむよへだいたらしめたらさなをよかろへ

(三十一)さまは天人

二上り　さまはてんにんそれ〱とんとろりおとめのすがた雲のかよひじちらとみたとんとろりおとめの

すがた雲のかよひぢちらとみたとんとろり

(三十二)つんと坊

本調子 つんとぼがさ〳〵ゐちやのおまへのそりはしをあんまいぎやたら〳〵のほんほほあゝつんとぼがさいやおりやつんどすいたよさ

(三十三)蔦の葉

三下り おちよ〳〵とおとしておいてかべにつたの葉のき心つたのは〳〵かべに〳〵つたの葉のきこゝろ

(三十四)さけはさかや

二上り さけはさかやに茶はちややにぢよろはきつぢのなる川に「ないそなゝいそ五月にやもどるおそて六月中ころに

(三十五)おもてみやれ

三下り おもてみやれのせけんまいよものかしのびながよづんまのよふたあゝ心よづまのよしのひ〳〵ながよづまのよふたこゝろさつきあめほどこひしのばれて今はあきたのおとしみづ〳〵

(三十六)いかな客衆

本調子 いかなきやくしゆよりもひげの角さまおいとしおかへりのあとを見ればびんつけひとかいはなけぬきおぐりのそうしをおかれたこれがはなかやたゞしこよひのつとめかものひ〳〵のくちふさげ世にこくにせはしらしひは晦日ごとの夕暮しろひお手にて出だされたなによおわしを貳百いだされた

(三十七)辛崎心中

二上り 此世の名殘り夜もなごり死に行身をたとふればあだしが原のみちの霜一足づゝにきへてゆく夢のゆめこそあはれなれあれかぞふれはあかつきの七つの時が六つなりてのこるひとつはこんじやうのかねのひゞきのきゝおさめじやくめついらくとひゞくなりかねばかりかはくさも木もそらも名殘と見あぐればほくとはさへてかげうつるほしのいもせの天の川わたせるはしをかさゝぎのはしとちぎりていつまでも我とそなたはめうとぼしかならずそふとすがりよりふたりが中に降るなみだ川のみかさもまさるべしみちゆく人のこゝろたかく京や大坂のしん中のことの葉くさのとり〳〵をきくに心もくれはどりあやなやきのふまでもよそにいひしがあすよりは我もうわさのかずに入り世にうたはれんうたはゝうたへうと

ふもまふものりのこゑ實に思へともなけゝとも身も世も思ふまゝならずいつをけふとてけふまでも心ののびしよはもなく思ひのいろにつらかりしにどふした事のゑんじややらわするゝひまもないはひのはなちはやらじとなき居たり歌もおほきにあの歌をうとふはたそやきくは我過にし人もわれ〳〵もひとつ思ひとすがりつき月のかけさへとゝまらで心もなつの夜のならひいのちをおわゆる鳥のこゑあけなばつらやからさきのはまてしなんと手を引て志賀のさゞ波さよがらすあすは我身をゑぢきぞやまことにことしはこなさんも廿五才のやくのとしわしも十九のやくなれば思ひあふたるやくたゝりゑんのふかさのしるしかや神や佛にかけおきしげんせのぐわんをいまこゝてみらいへゑかうし後の世もなをしひとつはちすぞとつまぐるじゆずの百八になみたの玉のかずそいてつきせぬあはれつきるみち心もそらもかけくらくなみうちよするからさきの松の木かげにつき給ふ

(三十八)むこ川

二上り　むこ川に住居する茶吉殿わいのとしが十五なら心は月のまん中よさ〳〵さしこしが〳〵か十五なら心は月のまんなかよさ

(三十九)かんふうらん替り

二上り　たいしゆらんひやさけのんてみやながざけのみじらけもひとつのんでみやたんたらふく二日ゑひかうくわいくすりに金たらい

「やんしううすむいろまりやんけんたにこたまさんちゑまさんなはらりとさけのかんおなしこと梅の花とうらいきうこ五うりうすう

「かせやまうす雲江口白菊坂田花崎からさきじや若松小紫でん〳〵りきてうにしきゞことうら玉の井だてみよし

(四十)沖の石

本調子　おきのいしとはおろかのさたよかはくまもなきわかなみだまもなきなまもなきかわくかはくまもなきわがなみだ

(四十一)さうだんべい

二上り　そなたまつ夜のあふらひをほそくながかれとろ〳〵とそふだんべいしごくと聞わけた

「だいりぢよろしゆは水の月手にもとられず見たば

かりさふだんべいしごくときゝわけた

(四十二)五尺手拭

本調子　五尺いよこの手ぬぐい五尺手ぬぐいなかそめて

「おれにいよこのくりよよりおれにくりよはりやどにおけ

「やとがいよこのよければ宿がよければ名もたゝぬ

「佐渡といよこのゑちごはさどゝゑちこはすぢむかい

「はしをいよこのかきよやれはしをかきよやれ船橋をはしのいよこのしたには橋の下にはうの鳥が

小鮒いよこのくはへてこふなくはへてぶりしやりと

(四十三)大坂茶屋名よせ

二上り　ゑひ〳〵ゑひ〳〵ゑひ〳〵つながぬ船は波にゆられて身はすてを船よるべさだめぬみなとやのにかいざしきでひくしやみせんのおとはてんつる〳〵てんまやたゞや水のながれに吉野やみればいつもかうしに花橘屋ゆかりもとめてお名をばきくやそれをたつねてきたじまや文のかずよむかみたや紙屋あまがさきやで身はぬれ衣いろがくろけりや大こくやじやと人が名たつりやすこしはわくやさきにゑびすやあしやた馬やてこがれあふぎやあのひめしやでたがいちん〳〵ちがいのお手うちちがいのお手まくらじつかはす枕にちぎりをこめてかわすまいとてきせうまでかいてのぼりつめたる坂本やたれが思ひもあの太子やの花のふり袖としや若松やつらいつとめは身にしみ〳〵とはやり小歌のその一ふしも聞てなり共月日をまつやかくのこさんはな綿やのつとめ戀がござればつとめのさはり内のかゝたやな目をむきだしてしかりますやといふてたもれゑいこのこいや思ひしづみし身は河内屋のうき名かきけす住吉や波のまくらにかじまやたてゝ京やふしみやさぬきやまでもくるり〳〵とうられてめぐる便りござらはあのみかさやで壹つまいれとな手にすへたさ

(四十四)法性寺の入道

二上り　法性寺の入道さきのくわんばくだしよ大臣うなゝせうせおつたやれたゝきだされるな

「ぎおん町のまん中がうみなら川ならよござんしよ魚をつるしの竹のやれさまをつりまつしよ

「猿丸太夫おく山にもみぢふみわけなくしかのうな

なせなきおつたたヽきだされるな
せきの小刀銘はなけねどあやもたちますにしきもた
ちますきんらんどんすは申におよばすうりもわりま
すすいくわもわりますうななせわりおつたやれたゞ
きだされるな

(四十五)おつゞら馬

二上り さても見事なおつゞら馬よしたにやせんし
きからじまのふとんふとんばりしてなこしよしゆを
のせてそなたのぼりかおりやいまくだる文をやろに
もことづてしよにも爰はこねのな山中なれば筆に
やことかくすゞりすみはもたぬもしも水口なおとま
りならは札の辻から四五間めの茶屋で馬もそく才其
身もぶじにやがてのほろといふてたもれゑいこのさ
んさ

(四十六)姬小松

二上り やら〳〵めでたや〳〵天下泰平國土あんのん
おさまる御代は天長地久千歲樂萬歲樂民もゆたかに
住吉さまの岸の姬松しつてん〳〵に大悲の風ふかば
地にはこがねの花かさこありやヽいよしのめでたい
な

はやり歌終

增補松の落葉卷第六

中興當流所作

目録

増補松の落葉巻第六

(一)契情夜明烏

袖崎歌流
澤村長十郎

二上り　今はむかしとのむけふりくさなにを便りに身はうきくさのういてなかれの情なやうそもかさりも一座なかれのつらにくやよふも〳〵かいたぞきしやうもんたゝくきせるにとかもなやしやくりのみ〳〵なかすなみたのたもとをひかへせいもんくされしんぞこれにはあのいゝわけかはてまつきけははししらすいきちくしやうふたりか中のきしやうをみよまつ一つそのはうさまと二世三世しなばもろともこせまてもふうふのけいやくいたすこともまた一つ外のをとこにかりまくらかわすことはのそのしな〳〵をつゝますあかし申べしこゝにまことのひとつありかさねてうそにもつとめにもきしやうちはんのおし申ましき事とかひておいたはこりやどふじやひとにはうそをはつくとまゝせめてかみにははぢよかし

(二)大坂上りの道行

中村千彌

本調子　たてなとりなりつひおもひたつたびすがたひとめをつゝむかさふか〳〵とおもはゆく五てうのはしのしもはしらおもひいたせはこきやうなにはもなつかしやといとゝこゝろはよは〳〵とゆけはほとなくこれやこのみやかわすしをのほりつゝはやたちふゐのゆかたがけさすがおなごのきやうめいてちよこ〳〵いそくゆたかさよひかしにむかへは清水寺大ひのちかひありかたやかれ木にゆきのはなもさくたれまつはらのはしすぎてかものなかれの水せい〳〵いせきにあそふともちどりはつとたつてはひらり〳〵〳〵〳〵ひら〳〵〳〵とひつれ〳〵とひつくとひゆくありさまたとへていはんかたもなしつゝくかはかせかみあらいさすて引てにしなはこばなしこひはなくひらの雪かせもはたさむござるすそも小つまもちよとからけてしやんとからげさん〳〵さゝなみ男波にもまれ女波にもまれあそふしらかみさんさ〳〵ちらしこゝろおかしくもいさぎよやにしはほうりんあたこ山みこし高山かゞたるはさんこくいちのひゑおろしわがねんくわんをはらさせたまへと一心にきせいかけあゆみ〳〵ていまははやふたうるちや屋にてつき給ふ

(三)傾城因幡の松

瀧川六三郎
藤村半太夫
坂田藤十郎

二上り　だまされておもふことおばねごといふわがつらいおとこにくひつきはきりするその心のつみつくるあふら火とろ〳〵かけほうしこゝにつつくりおもかけみするうそのかす〳〵つくおとこねてはひつくりする夢をみせてなりともあゝあのしやうはる〳〵しやうのわるいはすひからをころくちにまかせてめでころす女こゝろのはかなさよそらせいもんにのせられてうそにもほれたといふことはあまりうれしゆてにくからしかみをすきたて百しやうわけ戀をしこなす男つきそんなたならではほかにはないとさいふた詞のよい〳〵うれしさにあふてくやしやはつかしや

(四)淀川所作

山下亀之丞
澤村長十郎
岩井左源太

はるの夜のゆめおとろかすくたかけのそのきぬ〳〵の物思ひ又あふ事もいつかわと深き心にかこち草ね引にせんといひかはす身は捨草のすてられてなかれし此身はよど川の何をたよりにうきくさの波にゆらるゝうたかたのあわぬは君がなさけなやねたましやそれはわかくさ身をうらみくさなんのそなたにあいたてはなしあきもあかれもせぬ中なれとうけ出すかねのつるにはなれてつたなき我身せめてあはれとおもへかしおくりかへしさみしやねやの今はまくらにかばかりのこるうきおもひなをうらめしきかねのこゑした行水のおもひ川そこの心をしらいとのみたれてものをおもへとや鳥かうたへはもいのとおしやるさのゑ月夜からすはさいつもなくよしやうかへもいのとおしやるさのへ月夜からすはさいつもなくよしやうがへしはしとまりてくれよかし

(五)契情多賀の大祓

岩井玉之江
中村四郎五郎
津川半太夫

三下り　またとたにたのまぬ中のわかれみちをいまはのそらの山かつらことばてからむくずの葉のうらみかこちてかいぞなき水に繪をかく男氣をたのむちからぞたよりなきくるひかけたすこゝろのこまよとめてくれかし情のあらは情たつなや縁のつなたくりよせはや引よせてたいてねた夜は花をやろねた夜は花をだいてねた夜ははなをやろとけぬ思ひのあた男の

ふかしはきはかりはいとしうてうちには水かつくかいのしねならしねとかなかきによめるやうにはいひもせてあたにとられし命そとたふさにすかりむしりつきくひつきつめりなみたくみたゝみたゝいてなくばかり

(一八)契情誓湖

大和山甚左衛門
山下龜之丞

三下り 花はちりてもはるは咲しゝてかへらぬしての山まよふこひぢのむごやつらやどふよくやよふはころしたそのくるしさをいまそかたらん泪川いとし男のそのことのはをかわい／＼といつはりことをまことゝおもひおりや一すじにつらいつとめもそれはその／＼そりやくにならてくるははなれてつみなき花をいつか／＼ときのせくこともみなあだはなとちりゆくこの身いまくるはなに目がくれてよふはたのしむこゝろのにくさとかくしんたかさりとはいんぐわしんで花見のさかぬとは花みのしんでしんで花みのさかぬとは我身のうへにしらゆきのこるつもるうらは戀の山

(七)富士禪定

高島尾上
金子十郎左衛門

二上り ひとふでとかきそむるはなつかしさいまゝみちよりとわせまいらせ候べくとわかれよりほとはふらす候へとおもひねにするひとりねはこゝろもすみて目もさへてたはこ戀草とぎとなる寢やのうちかわるいろなき御くらしやがてあをそやかたろこそや筆にまかせぬものおもひたたあひまして／＼のこるごとの葉かへすかき

(八)多賀御傳來孫嫡子

松本重巻
大和山甚左衛門

二上り うつゝおとこのすかたにまかふさらは面かけはなれもやらでわが身ひとつのうきおもひおなし思ひにしつみしなかもいとゝわすれぬねやのうちいざ床とらんはるの夜にこちよれまくらながまくらかたりあかさんおほろつきたばこ引よせのむむつことにおれもそなたもしらぬむかしかよいわへとてもしるならねからそこからしれかしないつのもの日になれ／＼そめてきそはしめわけあることひのたねまきそめてなかよしかみよしこころよしふたりまろねにころりとしたもましじやへあけかたのかねはつくかすのひゝきにあたらゆめをわするへあけもんのしらせはおかへりとおこされあたら床をわかるへおそい／＼／＼のおかゑりとおこされあたらとこをわかるへお

しやねたましはるのかせ

(九)奈良名所盡

竹中吉三郎
山村勘三郎

本調子　三笠山名にたかくもろこしにても中丸がふりさけみればとよみし名所のそのむかし今も雲井にすむ月の久かたのあまくだりますみやの神すぎ木の間すかしにながめ有とわせたまへやおしへ申さんうれしやさてはたづね申さんあれ〳〵はなにをうならざかや此手をあはせてふしおがむ東大寺には大佛のしやかはやりみだはみちびく一すじに後世前生のみてらとかやおふそれうこのたかねはつゞら山のりかけ馬のかちじのみちをゆけばひだりへもどればみぎへよほいほすくにかよへば一里十八町まわらば三りよほいほそれをば行すぎ花のはつせの山つゞきこうぶくしと申せしは藤氏の御願所にてたいしよくはんな御身をやつしめんかうふはいの玉を取んとおぼしめしいやしき海士の磯まくらいもせことばのすへかけて女も命すてをふねこげやゑいさらやそしまかもめのたつよのたたせ給ふはしどしのくわんおんなむやさつたの力を合せてたびたまへとて大悲のりけんのひたいにあて龍宮の中へとび入れば空はひとつに雲のなみけふりのなみをかきわけかづきあげまたどふ〳〵とおちゝる尾なみのひまをつつとくぐるやからくれなひの綱はこしなは命のきづなしつかとひかへよ御船のうちにも心へゑい〳〵ゑいとともづなののぶるを便りにはしり入かのほうじゆをぬすみ取てにげんとすれば悪龍追かけ兼てたくみし事なれば持たるつるぎをとりなをし乳の下をかき切たまをおしこめつるぎをすててぞ臥たりけりりうぐうのならひに死人のいめばあたりにちかづくあくりうなしやくそくの縄をうごかせば人々よろこひ引あげ玉はめんかうふはいの唐あの御ほぞんのみけんにこめしそ拝ませ給へやたびのひめ二月堂にはくわんぜをん午王はみた佛はん木の御板非荷のいのりにれいしやくじやうはから〳〵〳〵ちんから〳〵〳〵唐ししのふむらん拍子やしんたん〳〵たん〳〵たのむやたん〳〵たりき他力功力のたきもんじゆわかさみかさにわかさやとしやすいの印をぞむすぶなり結やちかひのひたちおびかしまの御神當社にうつるや高きお山は本社のいらかふもとにとどろきさるさわしやかつた八代りう王りうとうささげいけの青波けたて〳〵て雲に

のり大地をかつばとふむひやうしの御神惣じてなら
ば七堂がらん八百やね九重十重みやこの石ずへや
しろのかずが一萬八千とをりものめがほめておいた
る名所舊跡たがいにとふつとはれつゝ春日の宮居に
着給ふ

(十)吉田小女郎

嵐三右衛門
市川香藏
芳村菖蒲

端歌　あらあさましやつれなやなわれからなせる思ひ
のたねみのまつせ一代教主のによらいも生死のおき
てはのがれ給はず
本調子　いけ水にそこの心はかよへどもいわにせかれ
ておちあはぬあきてはかなきうき世ぞと思ひすてゝ
もすてられぬ
三下り　むかしの人の戀せしは命もたえよと戀をする
さて中ころのこひのみちくさ木もなびけと戀をする
二上り「我は思へどそなたはつらや磯の流れ子のかた
思ひさはりせうがのやれかたおもひいそのながれ子
のかた思ひさはりせうかの皷歌「とはおもへどもいと
ど戀しき折々は人めもはぢもつゝまれずせめてねや
もる月だにもわかれをいそくを寺の鐘や梢のあらし
は物すごやの二上り「戀の山ぬるもねられず目もあは
ぬ身の狂亂はたれゆへぞとふにつらさのますかゞみ
いつ迄かくはながらへてうきは數そふならいにて身
は捨草のいたづらにあら浦めしや〳〵心もなげにた
ちのほる〳〵くゆるけふりはほの〳〵とあとには戀
のふちせ川せどがわのさわの〳〵さむさあらしにひ
よつとうかれて川原おもてにうき名をさらすおもは
じ〳〵とんとすちよそも戀はなにのむくいぞ〳〵

(十一)公時酒の醉

竹島幸左衛門

二上り　みねのまつ風かよひきてきんのしらべとうた
がはる一の人大臣はしよだいない人でゑおどらぬ我
におとれどおしやるおどりでふりをみせまいらしよ
〳〵くわんこや〳〵くわんこ〳〵くわんこやてれつ
くに〳〵からりちんにちんからりしやつきしや〳〵
しやつき〳〵しやつきしや　ここをあけ　さいあけず
ばもとろ〳〵しのふ其夜のかよひぢにかならずごさ
せとささまの俤みやまのおくをとをりてみればいた
いけしたる花ありをぎはぎすゝきかるかやしをんり
んどうかずのはなおりせたらおふてせをふてわらで
髮をゆふてこしに鎌さいてついつくぼふてかいつく

ぼふてつい〳〵とりなりは柴かるおの子のなりふりはみめのわるいしやつつらでそばにころりころ〳〵り〳〵〳〵ころ〳〵りともねたるはいがくりほうひげ天神ひけけさうちおろしのあらむしろがんきやすりこめはだつついつくよふでさすよふでいつくにばつくにねられぬせいもんのつつたて申べい弓矢八まんこしばねこみじに打てかばねはかきにさらすともきのうらににょあぶないこんだとさかはりはてたよしよだいなや

（十二）西國八景

本調子　わかれてなくね高砂やむろつにかよふ市人は　竹島幸左衛門

さんしのせいらんいまこゝにうつしぬるかとおもしろやそれよりをきのあまをぶねやそしまかけてこぎいづるこなたは尾上鐘の音にしもにさへつゞきこゆるは遠寺のはんしやうあはれなる一村雨のふりくればとまもる舟に身をそばめこがれたゞよふ其ふせいこれやまことにせう〳〵の夜るの雨よとおもほゆれゑじまがさきはくもはれてなをとうていの秋の月心をなぐさむたよりとなり夜もほの〳〵とあけゝれはいとゞふなをさちからをゑ梶とりなをしほあけて波にたゞよいこがれゆくあはぢのしまのあさぎりにむれいてあそぶ雁金のわれはこきやうのこひしさにとこよのさむさいかなれはふる里すてゝきたるやとゝはばやへいさの落鴈にそふがいにしへおもはるれおきのつんつり船なるゑひやうしの音はからころりつるゑりつるゑおづるめづるよるのつん〳〵鶴めがつま思ふてなくねにいざやくらべんくらべこしくれかゝりては浦々の沖のつり船我さきにと入江〳〵にふりしはゑんほのきはん是なるべしはるかに見えしは一の谷まことにいにしへ源平のいくさみだれしあとも有明の月にしらむはつるぎのひかり水にうつるはかぶとのほしうちあいさしちがふる軍勢の其ありさまひくはうしほにみつるは又八重の鹽路のはる〳〵とさいかい四海の波の上たつたみかけ〳〵ぼつかけ〳〵たゝかいしははな〳〵しくこそ聞へけるあらおもしろのなかめやといさみにいさんでゆくほどにあかしのうらにぞつきにけり

（十三）鎌足道行

本調子　此手かしはのふたおもていつかならべんなが　竹島幸左衛門

まくらにかれてゆくやたゞひとりちよくでうおもき御意をへて四國のうらへといそがるゝ心のうちこそ

たのもしきはや山しろに井での里月のよ川のみねつゞきゆんではひらのめてはあたごの山おろしみねのけふりの一むすび袖打はらふいにしへを思ひいだせばこさやうの空もなつかしやしたけき心もよは／＼／＼／＼としどろもどろのしがのさと須まのわか木のさくらはなあらしにつれてちるは／＼ちりくるのちりくる／＼をしきさくらはちりはつる思ひあかしのうら過て室のとまりに身をよせて海まん／＼と見わたせばこなたは四國のあはちがた波にもまれてゆくかもめういつしづんづしづんつういつばつとたつてはひらり／＼ひら／＼／＼とをるゝありさまはたとへていはんかたゞなし便りもとめてゆく程に七重八しまのだんのうらまさごをはつとはらふ風のまは笠かぶりかたむけて身をかこち人まつ澤にこしをかけたひのきうそくなされける異國はしらずわが朝にためしまれ成所作やとほめぬものこそなかりけり

(十四)花　車　　竹島幸左衛門

三下り　うどんげの花のひらくを待かねてちらすなはなのあるじをばこがれ／＼てつれてみやこへやれのぼらんとおとにきりころ／＼おとに聞へしおはらのさとは菊の名所とたよりをもとめ杖にすがりてかぞへてみればしらきくの紅粉菊(べにきく)の小手鞠(こでまり)寒菊(かんぎく)きくきり／＼きり／＼まわる水車くるりすまずにごらずよほほんにさく／＼くん／＼／＼／＼まわるくゝるまきゝゝまはりまはればせりやうの里じんやじやかうはもたねどもにほふてくるはたきものおはらぎ／＼かはい／＼くろ木めされの柴めさいのちやうりよふりよひうやらにひやらろひやらろにるろるりちやらるろう心うかれてさつても／＼おもしろや／＼りやうじんたがいに心をあはせきくのせいをみかたになせば菊のつほみをさつとひらかせおんどりあがりとびあかり千重のきくのいさみをなしあつはれてん／＼てがらやとほめぬものこそなかりけり

(十五)名護屋山三　　中村七三郎　花井東妻　子役

端歌　なく泪雨とふらなん三瀬川水まさりなば歸りきて此ありさまを見給へのふ夫婦は目もくれ心きへこはそも夢かと立よれば妄執の雲のへだゞりて今まで見えしは姿もなし是は夢かやうつゝかと夫婦たがいに手をとりてわつとないてはいだきつきあきれはて

てぞいたりける

二上り　光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨南無あみだ／＼袖のみなとのなみ風もこゑそへてなむあみだ聲のうちよりまぼろしにまよひ出さもくるしげによろ／＼とあゆみよりあらなさけなや母上さまのんどがかはきてくるしきに水をたむけてたびたまへくるしやとたえ入やうにぞなきいたり夫婦は夢の心ちしてげにだうりなりいとおしとうつわ物に水を入れよらんとすればたちまちにみやうくわさかんにもへあがる母はあまりのかなしさにいだきとらんと立よればふしぎや俄に風ふき來りまなこくらんでふりくる雨の音はそもしのをたばねてさら／＼／＼と雨かなみたかろくぢにどふどふしまろび木神にひゞく聲ばかりあらかなしやたへかたやたすけてたべのふ父母とさけぶこゑのきこゆれば夫婦はいとゞかなしくてやこゑの鳥の音をたて人間の水は南星(みなみほし)は北(きた)にたんたくもあまのうみづつよき雲のたちそふこゑもかすかに聞へ夢かいふうつゝか夢かまぼろしのよぞ哀なる

(十六)傾城淺間嶽　中村七三郎

二上り　うらみも戀ものこりねともしや心の替りやせんと思ふうたがいはらさんためのせいしをばなせにけふりとなし給ふうらめしやむねのほむらは夜に三度こちのおもひは日に三どけふりくらべん淺間山あれごらんせよ淺ましやじやゐんのあつきは身をせめてのふつるぎの山の上に戀しき人はみえたりうれしやとてよちのぼれば思ひはむねをくだくこはそもいかにおそろしやはなのすがたもよは／＼／＼とかしこに立ゆかんとすればこゝにきゑあるかなきかの春の夜のおぼろ月夜にはかなくもきえてかたちはなかりけり

(十七)關東小六青葉　芳澤菖蒲

三下り　こはなさけなきしわざかなさのみ人にはつらかりそかなしみのなんだまなこにさへぎりにしもひかしも白なみのよるべさだめぬ歌かたのいつそあわともきえもせでこがれこがるゝ身の行衛青葉／＼とよべどもはまの濱の松かせ音ばかり松風濱の／＼もつかせ音ばかりそよとばかりのたよりもがなとうらみなげくぞあはれなる

(十八)同小六自然居士　中村七三郎

二上り　よせてはきしをどふとは打あまぐもまよふ鳴神のとゞろ〳〵となるときはをざゝの竹のさゝらをすりあなたへざらりこなたへざらりざらり〳〵さら〳〵ざつとふきくる風は戀かぜかあだしのゝ草葉にをける露の身なれど身なれど是もこれもかりなる世のつとめとか〳〵世の中につらいものはなに〳〵しのぶ妻戸につまどに忍ぶしのぶつまどにかねのこゑよんの

禪僧のこひするはまづ文をやりてみてやりかけ〳〵やりて見てきたろにやだいてもねしよねもしこずばあはせのかたつまかた袖をうちしいて此うらみねもねしよね波のたちゐもなにゆへぞかりなる宿に心とめずばうき代もあらじわかれぢもあらしふくはなよもみぢよ月雪のふる事もあらよしなやかりのうき世に

(十九)男道成寺蚊屋之段

中村七三郎
山本歌門

二上り　君かふる泪をうくるさかつきに思ひ切瀬ときらぬせの中にながるゝいもせ川思ひこがるゝみじか夜はとてもねられぬうき枕かやのひとへのうす月もるゝ〳〵もれてさびしき夜すがらともにながるゝほとゝきすつゝみかねてはくい〳〵とくいなの鳥の物おもふ今宵ばかりはうすなさけさのみつらくはのたまひそいつの月日に見そめてさても思ひきられぬ身ぞつらや心からなる我なみだとは思へどもうらめしや血すじはしん〳〵のあみをはり戀をむすぶの神心わが身の戀はいかでかはにくしと思ひ給ふらんあらうらめしや其人の思ひみだるゝにゐまくら誰かとくべきひたちおび思ふもつらしねたましと蚊帳のうちへいりぬればこはかなしやとはしり出わな〳〵ふるうておはしますのふなさけをしらぬひめ君やたとひ何國へ迯給ふとも此戀あだになすべきか思ひしらせんはら立やと蚊帳のそとをくる〳〵〳〵くるり〳〵くるり〳〵とくるしげにつくいきはあうくわと成て此身をこがすあゝきよくもなき御すかたとかちやうにつゝみしつかといだきこくうにむかつてつくいきは鬼しもなれ蛇ともなれ我ながらわがすがた人めはづかし淺ましと思へどきられぬりんゑのきづなあはれにも又おそろしや

(二十)行平道行

中村七三郎

本調子　げにいく秋をふべき御代なれ住吉のかねてう

へおくまつの千とせはつきすまじ時しも秋の夕まくれさとのきぬたに月さえて千々の草葉になくむしの聲もすゞしきすゞ虫やきみをこうろぎくつわむししのぶ夜さむはまつむしも荻がうは葉にねもしなん猶ゆくさきはひめこまつなにはの蘆に初鴈のをのが友よぶ聲そへて詠めつきせぬ道すがら身にしむ風に空はれていくちはつたけうらわかきすゝきにつなぐ賤わらは磯のみるめもはづかしと思ひつゝけて行ほどに松の木影に物とはん

（廿一）行平地獄物語　中村七三郎

三下リ　かたるにつみもきへぬべしかたるにつけておそろしやかしやくのせめも昔たかくふりあぐる鐵杖はてんちもひゝくばかりなりつみをあらはすじやうはりのかゝみにあくをうつせば八萬ならくあきらかに天をうつせばひそうひゝそうてんまてくまなく見えたり扨又大地をかゞみゝればまづはちこくだうつみをあらはす罪人のかしやく打やてつぢやうの數々こと／＼く見えたりこはそもいかにと立さればぐれん大ぐれんの氷にとぢられてあたりをみればめうくわ大地にみち／＼たりむけんぢごくのくるしみはねつ／＼たるほのほの中へまつさかさまにをつる事みつばのこや下よりめう火ふき上るとがはうへよりをつる所をさつ／＼と吹あけて隙なくくげんをうくるなりあび大ちこくのくるしみはてつせきをたつ事一ゆじゆんつるぎをひつしとうへならべ罪人を追まはしがんぜきせなにゆいつけられてみねよりどうどつきおとさるればほねはみぢんにくだかれて風に木のはのごとくなりたすけ給へや人々よざんげに罪もきへうせてねがいのまゝにやす／＼とぐせいの舟の川岸にいたりいたしせたひ給へとて泪ぐみてぞ語りける

（廿二）松茸狩　中村七三郎

本調子　いな舟のおすにをされぬ梶まくらねもせてながき夜のつらさかたりなぐさむかた糸の折敷御座のかた／＼にねられねばこそ夢もみずさそはれ出てみちのへの千々の草葉になくむしも思ひみだれて糸すゝきせめてそれかと我とふものは荻の上葉にみたれ／＼て風そよく余所にもをくや袖の露どれ／＼月のうつらふ影見えてのこるまつさへあらしにつれていとゞ心はのふさんさ物わびし道しるべせよしのぶ草

しげき思ひはあさ霧のあだなたつともいとはじな宵よりねやに引こもりまてどくらせど其人のそよとはかりの音信もはや九つのかねがなる扨もおもわぬさはりありこよひのあふせはやれさてかなはぬなよし〳〵かこつもやぼらしやいつそ夢こそましならめ枕ひとつをたのしみて戀し床しきねやのうち

(廿三)稲荷塚四ッ門　中村七三郎

二上り　すいちやうかうけいにまくらならぶる床の内なれしねまきの夜すがらも四つもんの跡夢もなしさるにてもわがつまの秋よりさきにかならずとあだしことばの人心そなたのそらよとながむれどそれぞとといし人もなし夏もはやすぎまとの秋風ひやゝかに吹をちてよしや思へはこれとてもあふはわかれなるべし世をも人をもうらむましたゝ身のほどをおもひつゞけて我ひとりまろねの床こそさひしけれ

(廿四)稲荷塚狐會　中村七三郎

二上り　らんきくやこぎくしらきくこてまりやかんきく君をまつ夜はくる〳〵〳〵と車ざくよしやなげゝどしたへども秋の朝てらきりとおもて露なき草にこがくれの杖をたのみにやすらへは身にしむ風につまもたもともふは〳〵〳〵と吹あけて我とは見えぬ水かゞみうつす姿は月影のくもりみはれみゆく雲の空さためなき山々の木々の梢になく鳥は山がらこがら〳〵四十からひわやひよ鳥めうないすゞめ鳴子ひくねにおどろかされて數の小鳥がむら立さわぐにくやにくや小とりが我をおどすはつらにくやゑいこのゑいこのゑいこのゑいこの〳〵ゑいこのへみのとたのむよいや又笠と笠とたのむはこいけのはすの葉かくは草かりたずく男はよいやさゑいこの〳〵〳〵〳〵〳〵ゑいこのゑ木の葉の雫はら〳〵〳〵風にもまれて秋の小蝶のたはふれてみねの小松にしなだれかゝる蔦かづらよれつもつれつはなれがたなき我が思ひ

(廿五)傾城花筏　葉山岡右衛門　蔦山四郎兵衛

二上り本調子　かたるにつけてかなしきは此おさあいが身のうへなり父ははりまのなにかしとて人にしられしものゝふに母はむろつの上ろふのはてかりに難波に住居して此子をまうけ給しに過つる秋の末つかた我に此子をあづけおくいたはしやおさあいは父よ母よと戀こがれ晝はひめもす夜はまた夜明の鳥ともろともにまどろみもせすなきあかす目もくれ心きへ〳〵と

身も世もあらぬふびんさに母のきてうにわたさんと
さてこそむろつへまいる也

(廿六)彌陀たのむ　　芳澤あやめ
　　　　　　　　　　今村粂之介

三下り　みだたのむ人はあま夜の月なれや雲はれねと
も西へ行なまみだ〳〵いとしわか子もせめてさてみ
だの御國へゆくなど丶便りのあらばいか計りうれし
かるべき我が心そなたいとしけりやのふやれわが子
もいとしそれなせにいつそ子もなけりやなけりやこ
そ思ひもないよさよしやよしなやまよふたりなふさ
てなまみた〳〵〳〵〳〵かねのひ丶きに夜はな
ん時ぞ八つでもあろかいやなふあれ〳〵夜があける
やらはやじんじやうのゑかうの鐘のあら有がたやい
ざや我子のほだいのためになまみた〳〵よいにやわ
さん夜中にやほけ經南無地藏大菩薩〳〵心かみたれ
てのしどろんもとろん〳〵そなたへはゆかぬかこな
たへはゆかぬかとそばなる人にとへど〳〵〳〵こた
へぬふる塚の夢かうつ丶かまぼろしか我子戀しや

(廿七)傾城佛の原　　岩井左源太
　　　　　　　　　　上村吉三郎

二上り　いつの間にかは秋風の吹やこしぢの山こえて
彼の三國のわけあるさとへ惡性がよひのつらにくや
ひさげのみづはゆとなれどまたさめやらぬ我思ひつ
らしねたましゐはら立やとすかりついてはなくば
かりをれとそなたはなん〳〵七つ八つ十で殿子
を見そめてほれて人こそしらねふりわけ髮のそなた
ならでは誰にかみせん此くろかみをいまはあだなる
みだれがみみだれ心かあ丶〳〵〳〵〳〵あいた見た
さにきたぞやれつらや〳〵と思ひはすれどまだすて
られぬにくさあまりていとしさまさるさてもいのち
はつれないものよ君つらやいきておもひはあいべつ
りくのしんでまたきてその〳〵そのさきの夜で
おもひしらしよぞ思ひしれ袖のみなとの戀のふちわ
たりくらべんなみだ川戀の一念さかつきのかげくら
きよにしんいのどくじやくる〳〵〳〵〳〵くるり
〳〵くるはかよひもふつ丶りと思ひきれ〳〵ね
たましやあらはらたちやと立たるはあはれにもまた
おそろしや

(廿八)女仙人　　多門庄左衛門
　　　　　　　　出來島小三郎
　　　　　　　　山本沭門

二上り　そちが思へばこちもおもふよいづれ思ひは替
りはせねどいつもながらの御げんもたえて今は中々

あふことならぬなぜないつはりかち成心としらでつらきながらもまがきにたてばつての文さへやれさてかなはぬうき代じやへよし〳〵かこつもやぼらしやいつそしんだがましならめさてはかなはぬうき代やとおもひつめたる其けしき身につまされていとしさまさるたとひ萬里をへだつとまゝよかはる心が〳〵なけれどもあいとて見たふてかたりたふてきたおれになぜにそなたは顔ふりやるさても〳〵そなたはげに戀のかたきよとうらめしそうにうちながめすがりついてはなくばかり一じゆのかげの人やどり又は一河のながれの身枕ならべしむつ事もかりのうき代のならひぞやあはれはかなきみづからはたま〳〵うけがたき人身のうけたれどためしすくなき川竹のながれの身となるかなしさよさきの世のむくいまで思ひやられてかなしやなすこしあはれとおぼしめしきげんなをしてのふこれ〳〵ちとわらひ顔が見とござる戀もくぜつもひとさかり假のうき世の夢なれや經文まじりになまふだなも〳〵なまふだ語るまもなきねやのうちはやきぬ〳〵に引わかれしゆびさへあらば重てとさらば〳〵〳〵ばやとすそやたもとにとりつけば戀しき人のをもかけは見えつかくれつまぼろしか消てあとなき夕暮

（廿九）女仙人怨靈　　山下又四郎

三下り　それ三界は夢なれやみつの車にのりのみちくわたくの門をや出ぬらん月はひかしの山よりいでゝ西の山の端にかくれつゝ世上の無常はかくのごとし何の上にもむくいありうかむ事なきみづからはじやゐんの惡鬼と身は成てゑい〳〵さつても〳〵未來ゑい〳〵くる〳〵〳〵〳〵といやつきそひて我にうかりし其人のいきて此世にましまさば水くらき澤邊の螢のがげよりも我が思ひもむねの火はくはゑんとなつて此身をやくむねんやはら立やとしもつとふりあげおいめぐり髮をくる〳〵〳〵〳〵〳〵と手にからまいてうつやうつうつの山邊の夢の世にめぐりくる〳〵ゐんくわはいまぞ思ひしらすやおもひしれととびあがりてはまろびふし雲にうちのり波をけたて〳〵飛行することすさまじけれ　本調子おそろしやみちくらに三十ばん神まし〳〵てもふりやうきじんはけがらはしいでよ〳〵とせめたまふつらにくやねたましやおもふ人をばいたつらにとらであまさへかみ〳〵の

せめをかうむるあつきの通力ちからもたよ〳〵よろ〳〵とあしよは車のめぐり〳〵てまたとるべしとよばはる聲もかすかにきこえ〳〵松風はかりや殘るらん

(三十)廿四孝狐會見　山下又四郎

三下り　見そめまいものうか〳〵〳〵とうかれ心かうば玉のよるならでひるはこがるゝわが思ひねてもさめてもわすれもやらてねをぞなく〳〵君をおもへばなんな〳〵しのすゝきやおばなの中をくゞり〳〵くゞつたなんぼくゞりにくいくゞり〳〵〳〵どやるまいぞ〳〵どつこいそつこいやるまいぞさまをみがけてはしりこきり〳〵〳〵ここきり〳〵〳〵や月の夜もゆくやみもゆく雨かあられか露か木の葉かはらり〳〵〳〵しどろもどろとあの山越て此山こえてけさのきぬ〳〵あらはれそうな〳〵いのよもとろに我ふるつかへかえらんいさみ〳〵歸らんおれが思ひはつゝむにあまる〳〵もぢのふくさにかうばい小袖つゝのと〳〵なにとつゝめといろにてゝ人目はつかしやるせなや

(卅一)傾城善の綱　大和屋甚兵衛　芳澤あやめ

二上り　筒井筒〳〵の水はにごらねどかはせし人はおほろ月いるかたもなきわが思ひたゞかはらじと一すじにねてもさめてもいとしさのあまりてもれてにくふなる墨とすゝりはこいなかなれど人が水さしやうすくなるしんきへしんき〳〵水さしや人が〳〵が水さしやうすくなるしんきへ其一念のつきそひて影にたゝずみあゝ日なたにおほいくる〳〵くる〳〵〳〵〳〵とくるしきむねのほむらの火わきくる水にのふきへもせずかすかにへだつあさましやすこしはそれと思ひしれ足もとはよろ〳〵よろ〳〵〳〵とよはりはてたるつるべのしづく落てかたちはなかりけり

(卅二)文覺上人　竹島幸左衛門

本調子　そのときもんがくひざおし立はづかしながらそれがしは源氏ふだいの侍なりせんねんよしとも野間のうらにてしやうがいあり其くびやがて六はらの川原にこそはかけられしをぐそうひそかにぬすみとりぼだひのみちにしゆぎやうしやの首にかけたるずだ袋あけぬくれぬとせしほとにはや三歳のこうゐんは矢よりもはやきものゝふのまもりの神ともなし給へとしやれたるこうべをとりいだし助殿にたてまつ

ればさてはうたがひあらかねのつちにかはねはくつれども名は末代にありあけの月のみやこにけぶのぼりたえて久しさしらはたをみやまおろしに吹なびかせをごる平家をたいらげんと頼朝いまはいさきれしがいやましてしばしなんぎありゐんせんりやうしなくしてはしよぐんのさいそくあるべからずと助とのあぐみはて給ひ我にたのむと有し時それこそやすき事どもとこそくじに津の國きやうのしまろうの御所にかけつけてみつよしきやうを頼つゝゐんせんりやうしをこひうけてまたたちかへる浦波の/\磯をつたひ山をこへひるが小しまになりしかばゐんせんのとりいだし兵衛殿にいたゞかせそれよりぎへいをあげ給ひ源氏の御代となす事もひとへにぐそうがおんならずやせめて廿日はまち給へかまくらにはせくだり此一そうをせんまてはかならず/\頼むによなほうじやうとのといゝすてゝ衣のすそのたかからげやぶれ笠こしにつけちよこ/\/\はしりて出られしが又立かへりもんがくは北條殿に打むかひこれにもしやうゐんなきならば我いきながらませうと成てかうやにがわきんぶせんしら山立山ふじのだけ此やま/\のてんぐどもさつ/\とまねきよせしやぢくの雨につるきをまぜひつそうをひゞそう天までたゝきあげうみにうかまば六代七代八だいりうわう山神水神がうがのうろくづ八方よりもたゝりをなさせれいの天狗のそらつぶて一時が間に打ひしきみかたのせいうん目りん月りんじやうふを吹やはらけ/\ざんじに本望とげん事なんの子細のあるべきとおんとりあがりはねあがりいさみにいさんで申せしはたのもしとも中々申はかりはなかりける

(卅三)とがし城

竹島幸左衛門
同　幸十郎

本調子さるあいだむさし坊熊井太郎たゞ一すじにおもひ切さしも大勢まちかけしとがしが城へ入たるは人に替りておほえたり山ぶしの法なればれいしせんぼうを讀べきにむさし何とかおもひけん高念佛をとなへつゝ大門よりつつと入とがしか城のていを見るにおもてのやぐら十三ヶ所わきのやくら九所二重三重やくらを上げ北のおもてを見てあればくらおき馬の數しらずそれぞといはゞひき出さんと用心きびしくみえにけり扨又うしろのやうがいはおもては山たかふして一邊の雲のごとし谷ふかうしてとぶ鳥だにも

かけりがたし山みね一丈さがつてからほりほつてうむ〳〵つゞらをりなる難所なる東の方のをさきには川をやうがいとしせいたひかすみなめらかに足そばだつに便なし此せき所をこゑん事かんしんがじゆつとまなひふるなのべんにてたばかるともさて中々思ひもよるましきされどもむさしがちゑのほど百千萬にくたきなばやわかとをらでをくべきかそれにもうんめいつき弓のたくみしちりやくもあらはれてさしもの大勢ぜんごさうよりとりまかばかげらふいなづま水の月むでにはいかでとらるべきかしこにおつふせひつくんでうつ取べし或はうずまきせんぎが中かけやぶりさしとをし十方むぢんのすて刀さつとひゞいてはたがいに言葉をかけかはし是ぞ軍のはなざかりよし野たつたの花もみぢあらしにつるゝあを侍にぐるやつばらおつさますて切むかふてかゝるはから竹わりらんびらんぐわいとらばしりまくのそうだてそうのこてとんぼうがへしに水車磯うつなみのまくりぎりつらぬきねぢくび人つぶて死人の山をつかん事たゞとる山のほとゝぎすといさみにいさみし有さまはめいぼくたいしはくた王我てうにては政かどすみともいるかのあれしもかくやらんとおそれぬものこそなかりけり

（卅四）山居之僧　　荒木與次兵衛

被歌　あまりに山を遠くきて雲又我が里をうづむみなこれ人間まうしうの雲霧のひきはかへさじあづさ弓やすからぬ身のかりの世を思ひすつるに身こそやすけれ我はなまじいに弓馬の家に生れきてかごうを捨てうもんにいる月をひかしに里を見てけはしき山路なければいわねにとりつき〳〵〳〵苔路をふんでたきゞをこり水音すごくそこふかく谷にさがり水むすびそのせつせんのむかしをとへば唯一心のおきどころそむかばまさにさんあくたうはのがるましおふきちごくの其中にむげんちごくのくるしみはねんねつたるほのをの中にまつさかさまにをつる事は三つ葉のそやしたよりめうくわ吹あぐるたとへばすせんでうの谷よりもまくりたて〳〵吹ますあらしにひとしく〳〵とがはうへより落ればさあ〳〵さつ〳〵と吹あげてひまなくくげんをうくるゆへむげんぢこくとなづけたりあらおそろしや〳〵あびたいぢごくのくるしみはてつせきをたつ事一ゆじゆんしほうにし

てつるぎをひつしとならべとがあるものを追のぼしかしやくする罪人とがをなげくといへどもかなはぬはぢごくのならひにて岩石せなにゆひつけられつるぎのみねよりつきおとされほねはみぢんにくだかれてなげきかなしむ淺ましやくらくのさかいはとくもとかれすいふもいはれず風ふけばふけ我が庵の佛のてらすたえぬともしび

(卅五)名馬揃　竹島幸十郎

本調子　あつはれ御馬ぞうらふやよき馬のきつそうやをつさまむかうよこはたばりしゝあいほねぶしよめのふしおゝつくりつけたるごとくなり尾はせんだんのぬのをはへて百丈のたきのをつるにことならす右のまなこ左りのまなこふりわけ髪にちらり〳〵ちら〳〵ちらと「むちはなに〳〵し竹かんちくから竹わか竹もとから末から根から葉から竹のきり〳〵なきり〳〵きんきりよのやれたまりみづすまずにごらずでずいらす人の心もそれによそへてなにも柳にさらり〳〵ともやらせてかるいがよござんす思ひはづふりづふ〳〵〳〵ともしづんださなにがさ

(卅六)柴刈風流　上村今吉彌　袖島市彌

本調子　山がつのたきゞを折てかず〳〵のおもふまゝにはいはれぬやことさら風をいとふなるしばに櫻を折そへてしばかる女のいやしき身にも〳〵じんやじやかうはもたねども匂ふて來るはたき物ちやうりやうふりやうひやらにひやらろひやらろにるろうなりちやるろ戀といへるくせもの〳〵かんな身はやつれそろにくや〳〵つらやうらめしや月には雲に花にはあらしあらしつれなやよぎてふけしのぶ夜のあらしさても〳〵いや〳〵山田にをりしそうとめのしかもあふみのなりよい笠をじやんときないてひやうしを揃　三下り「田うへるはおもしろいがぐる〳〵まはりがうかないさあうかない十七八はねごいもの梅の木のさがりの枝をまくらにおよりたかおよりもふせさあいよ〳〵〳〵ゑ此へ〳〵しよんぼり〳〵とうへた袖よそのたもとは田うへにぬるゝたれゆへぬるゝわが袂打ながめあゝしづのめのおも荷のしばもくにやならぬあゆむほどなき道すがらとある所に着にけり

(卅七)近江八景　水木辰之助

本調子　ふねをだしやらば夜ふかにだしやれゑい〳〵ほかげ見ゆればなつかしや戀にはのんゑいそれわか

枝もいよゑいゑいや〳〵といるややばせのわたし舟なみはへいたをたゝきあげたゝくしらなみあら男波しづかにこげやそろ〳〵おせよいそいでこげやさつ〳〵とおせようきぬしづみぬゆく船のみぎはをみれば瀬田のはしぎよそんのせきせよまのあたりゆきゝもたえぬ旅人ののぼれはくたるあいの土山雨がふるうとふ小歌のから尻に乗り打させぬせき所也足もとまらず行舟の次第〳〵にそのさきはいか成所と尋ぬれはあれはかた田のらくがんぞやいざや名所をかたるべしおりてしはしはまあそびあがらせ給へ人々よ入江〳〵のあしの葉にそより〳〵と吹來る風は夏のしるべか涼しさよ　三下り「磯にをり居る鴈金のおのが友よひあそふにぞねらいより追ふてまはればはつとたつやひら〳〵〳〵とむれいる雲にさほに成てとをるあとながさきへさきながあとならかうがいとらしよ〳〵これぞへいさの落鴈とかたりてふねにのりうつるのふいかにせんどう殿こなたにたかき御山はいかなる所なりけるぞあれこそひらの暮雪とてこれよりは冬けしきみねにふりつむしらゆきのちらり〳〵とふり來るゆきに四方のなこずへものふよ白妙に枝もたわむやしつはりとつもれる道をふみまよふ木こり山がつ柴かりが笠も薪もうつもれてさむそふにこざる火をけやりたやすみうへて〳〵比もしわすのくれなればほながゆづりはかどまつをめせ〳〵めされ候へとあきなふ風情げにまことにこれかうでんのぼせつなりむかふをみればかた田のうらのあまをふねつりして歸るありさまを見るに我身ちいとなみのつりの糸さへしなへてもつれてさほもたずにひくは〳〵〳〵ひいてしやくる所をつつた所のおもしろやいり日の影ともろともに風にまかせて帆をあぐる此めされたる舟こそは遠方の歸帆もまのあたりあれからさきのひとつ松　本調子「らうにやくきせん布びきのひきわけられぬみやまいりいかなる上手の筆なり共是にはいかでかまさるべき日もはやにしに入相のこうちんとぼすさよ嵐ふきくる雲に雨おこり村雨しきりにふりくればぬれにぬれたるとりなりもしつほりしつたりわにのみさきに舟とめてとまもるしづくもろともになみだであかすふねのうちこれやまことにせう〳〵のよるの雨ともいゝつべしやう〳〵はれる雲ぎれにとまおしのけて見あくればあれ石山

のあきの月湖水にうつりあきらけきすまもあかしもよそならずこれやまことにとうていの秋の月こゝにうつしてみつうみのふくるもしらすながめいるふけゆくかねの音きけばあかぬわかれの鳥は物かわ鳥もなきかねも聞ゆる三井寺の時をたがへずつく數ははやあけ六つのあけわたる東あふみや西あふみ大津の町もとくおきておのがさまぐ〳〵手わざする是てさんしのせいらんと夢のやうなる其うちに四季折々のたはむれをいまめのまへに見する事これりうじんのめぐみなり

(卅八)狂亂

荻野澤之丞
西國兵五郎

本調子 きちがいに物とおふ〳〵うすげせうにやなぎかは堤はおどろにみだしたれども花むらさきのゆかり有ふせい床しきものぐるいいかなる人にてましますぞとふてなにしよおとやつてなにしよわれは親より子ゆへにまよふまだ父しらぬなでしこの花はねにかつる〳〵かりかねそれはこしぢ我はまたあつまから出てこがれ〳〵こがるゝ子ゆへにくるうがおかしいかなんのおかしかろおかしゆはないが我も御身にあひとふてみとふてぞつく〳〵〳〵とたづねし國はどこ〳〵せんようだうにさんやうだうおんといせとにはりまなだふなぢはるかにきいのぢや玉つしまふきあげかいつくぼうてひつつくぼうて尋々あるいた我らもくるいめぐつたいとし我が子のめにつくはねのみねどしらねどつくしのはて〳〵はてまでおどりいではしり出くに〳〵さと〳〵伊勢のつをはりのつあふみに大津草津いまづかいづしほつとつ〳〵〳〵せつ津の國には大もつの尼が崎からあまになれとて文よこいたあなたこなたとくるいめぐりて人めもしらで尋ぬる我をなんだろつよのひこたろつよのそのよなことき丶やきん〳〵きがわるいりんとはねられしやんとゆてたもれあか月のからすわんなかいでたるきのはなをしつかりてうゐいやつとふまいたなごりなさけ名の世の中や

(卅九)三ッの車

大和屋甚兵衛
淺尾重次郎
筒井吉十郎

二上り 三つの車にのりのみち火宅のかどをやいてぬらん夢かうつゝかおぼろ夜の月けの駒にかた手綱ひきとゞむれば春の雪とけてみだれし我が思ひあまりてにくい此人をたれにそはせんねたましや袖になが

る丶血のなみだいろとなさけのふたおもひふかき心は常々に語りあかせし戀草のもへ出そめしおもかげにすがりつけば八重櫻風にみだれし亂髪ゆいかひなくもころされて身はあだし野の露しもときへにし事のうらめしとなくより外の事ぞなくさいたさくらになぜこまつなくよのゐいさ駒がいさめばはながちるいさめば駒がよのゐいさ駒がいさめは花がちるあ丶淺ましやたえがたやぼんのふじやゐんの身のくるしみはてつせきたつ事一ゆじゆんあだと情の心のおにのぼれとせむるつるぎの山くるり〳〵くる〳〵〳〵と追立らるれば岩根にとりつき〳〵のぼりて見れば下よりめうくわふき上ルこは情なやかなしやなたすけ給へと夕くれの月は霞にかきくもり聲ばかりして失にけり

(四十)時雨の松　大和屋甚兵衛　芳澤あやめ

二上り　おなしうき世にかけてたのまんひたちおびとりかはしたる二世のおびみへにまはるも戀身はかげろふのあるかなきかに捨られて泪のしぐれまつかえにみえつかくれつ戀のせきまよひ〳〵あるくもたれゆへぞあはんと思ふわが男人にあはれてはづかしや戀にやせたるふたへの帶みへまはるふたへの帶がふたへの帶がみへまはるさりとはかはすせいしの血しほの文字めうくわと成て思ひのきづな切てもきれずはなれもやらぬわが思ひしめつゆるめつゆるめつしめつふたりねの夢ばかりなる手まくらにふしてかたちはなかりけり

(四十一)思ひの繪姿　賀茂川野鹽　山下才三郎　高島尾上

三下り　世の中の人の心はうつろいやすき物としれ君と我とが長枕よごとにかはすむつことの人こそしらね神かけてあしき心はあ丶しんきなひにてんとうらめしやあ丶ま丶ならぬ君　二上り「さまはなひさしやいつあふたま丶ぞをれもなわすれたあふたよさをわすれたおれも〳〵なわすれたあふたよさを思ひいづればなつかしやまだはだなれしうつりかのふたりねがほのつや〳〵〳〵となでしこいまはこたへかね君の御ゑりしかととりこれのふうらめしやわれにしねとの御事かしねなら〳〵いつそしねなら死にましよかあなたゐなひけばこなたのうらみおもひとこひとくるまの〳〵りやうのわになるくる〳〵〳〵ねもせ

でまよふたやんれありつるすがたは繪にかける我はうたゝねうつゝたしよの

(四十二)ふみこと葉　高島尾上

二上り　一ふてと書てむるはなつかしさのまゝとはせまいらせへく候わかれよりほどあらず候へと思ひねにするひとりねは心もすみて目もさへてたばこ戀草とぎと成ねやの内かはるいろなく御くらしやがてあをぞやかたろぞや筆にまかせぬものおもひたゞあいましてもののこることの葉かへすかき

(四十三)定家怨靈　高島尾上　竹中藤三

三下り　淺ましやなみだは生死のうみのなみ死にくるしみをうけ重くらやみよりくらきにおもむくおんあいのうすき契りの袂には涙をつゝむ春雨につぼめるはなの水ばなれはなれもやらぬあいねんのそいねの床に夢もなくふたりが中の泪川つながぬ舟はとまれどもたれかとゞまる人もないそよ夢の世にかりねの母が手まくらよ乳房をしぼりひとりかこちしありさまは見るにたもともぬれぬべしまたおきあがりてはじりめぐりてつまにとりつきのふかなしやもはやわかれのあれたえがたやいばのつみにしゆらい太皷さらばといへばしばしとゝむる袖ふりはなせば目にこそ見えねふむあしもとはめうくわのけむりこはかなしやと又ゆくさきもほのふのけふりにむせんでおそろしやわれはじやゐんのながれのうき身くみながす酒は三途の大河となり起請しんはつゝうはつあたつて此身をくたくとむらい給ゑお僧さま

(四十四)地搗踊　山下座

二上り　やれおいかけはやさぬかさアもさおいかけなかのつなしめてみよよいやさやれ我が戀はもも細谷川のさる木はしふみかえされてはぬるんるゝ袖かやをいかけなかのつなしめてよそらふたやれ中のつなわへゑやもゑやへやこのさんさのへ

「鳥にうらみはあふ夜の時ようたへ今宵のひとりねにさんよへも

「あのや小山に戀風がふくとの身をもなげかけゆすらばおちよかのさてもつれなのあの君やふるやこづまはかはいよへゑいやもゑいやへこのやこのさんさのへ

「なには入江のよね舟をみたかゑいとんなゑひゑひへゑいとんなあゝはりまの米が千石あはちの米が下

石萬石舟方がおさめた月の夜はしりにやしもの〳〵しものせきのむつ事もわすれたあゝゑいとんなゑいゑいへいゑいとんなひらいてさおいてやさおも梶とりかぢなには入江のはんじよへ
有馬のふぢ狐會右水木辰之介所作松のはに見えたり此集にのするにおよばず

寶永庚寅七年九月吉祥日

ゐつゝや庄兵衞板

書林

萬木治兵衞行

增補松の落葉大尾

自寛永 至延寶 はやり小うた

自延寶四年至文化十二年及百四十年
古寫本可愛玩今茲乙亥三月上浣令春
高子補表裝所藏也

式亭主人

愚意

抑延寶丙辰八月上旬の事成に獨り寢の淋敷儘に色々の草紙を見て心をなくさむ中に我曾て音樂不調法成に依て此草紙八十冊に及ひて見るに世にはやりし音樂の類思ひ出して慰む所に世の人の心一品に心を留す年に幾度か移り代りて古きは捨る故專らうたひ翫し事とも見聞に隨て古き新敷を撰はす此双紙に集て淋敷座之慰と名付て小わらべの翫ひとなす者なり若音樂に志ある人是は或不足又は誤り而已多からんあはれ糺さるゝにおゐては我望是にしかし又書かうきてん一心二河白道或三味線小弓且尺八等の歌は夫々の冊に委敷記しあるに依て今爰に略すものなり其外予未見聞音樂又は覺へてもはやらさる事或歌に依て名の不知は除之て名高き音樂の類はや(かカ)り撰み出して悉く此一冊綴之畢

于時延寶四中秋上旬日

淋敷座之慰　全

目録

一　醫者くとき木やり
一　道盛〳〵とき木やり
一　西行〳〵とき木やり
一　北野天神くとき木やり
一　八島くとき船歌
一　お江戸〳〵とき船歌
一　若衆〳〵とき船歌
一　鳥さし〳〵とき船歌
一　たもひ物くとき
一　琴の歌品々　（七十二）
一　鞠つき歌
一　盆歌品々
一　らうさいかたはち昔ふし品々　（十七）
一　昔小六ふし
一　昔ほそり
一　櫻川のふし
一　はやり長歌
一　さよの中山長歌
一　なけふし品々
一　しな者の歌

一　やよやふし
一　はやり物の歌
一　さんや源五兵へふし品々　（九ッ）
一　替り源五衆ふし品々　（六ッ）
一　のほたんふし品々　（二十四）
一　さわき歌　品々　（二ッ）
一　京はやりふし
一　浮世いそへ殿ふし
一　替りせうかなふし
一　のつちりふぐじるふし
一　谷中うわきふし
一　御門徒與五平ふし
一　大坂から墨ふし
一　吉原しよくりしよふし品々　（十）

目錄畢

前後口傳有之

都合音樂二百七十

紙數合百十五枚

淋敷座之慰

本朝王代記之謠　　次第不同

一夫仁王の御次第神武、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化、崇神は十代の帝、垂仁、景行、成務、仲哀、應神、仁德、履中、反正、允恭二十代、安康、雄略、淸寧、顯宗、仁賢、武烈、繼體、安閑、宣化、欽明三十代、敏達、用明、崇峻、推古、舒明、皇極、孝德、齋明、天智、天武四十代、持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、廢帝、稱德、光仁、桓武五十代、平城、嵯峨、淳和、仁明、文德、淸和、陽成、光孝、宇多、醍醐六十代、朱雀、村上、冷泉、圓融、花山、一條、三條、後一條、朱雀院、後冷泉院七十代、後三條、白川、堀川、鳥羽、崇德、近衞、後白川、二條、六條、高倉八十代なり、安德、後鳥羽、土御門、順德、後堀川、四條、後嵯峨、後深草、龜山、後宇多九十代、伏見、後伏見、後二條、花園、後醍醐、光嚴、後々醍醐、光明、崇光、後光嚴百代、後圓融、後小松、稱光、花園、後土御門、後柏原、後奈良之院、正親町、後陽成、當今迄は百十代、四海波靜にて萬民時をおふくなる、今上皇帝の御代そ久しかりける

異國王代謠

一伏羲神農と皇帝是を三かうと云、天地につかさとれり、少皇、瑞玉、かうしん、とうぎやう、ぐしゆん迄は五帝也、夏には禹王をはじめにて夏のけつ迄は十七代、君の道なき故障より終に誅せらるゝ、とう王いんのはしめにて三十七代の時に、紂王の惡により、武王のうたせ給ひけり、是太公が智略也、周の世は三十七代ときこえし、年は八百六十年也、文王を初めにて武王、成王、かうわう、しやうわう、程王是迄聖代と聞えしが幽王のりさんに放火をあげし寵愛のほうじか故に亡びぬ、されども幽王の御子けいわう、世をおこしちうかうとなりにけり

(下略)

(唐まで段々疎略となり後には代數をあぐるのみ)

名香之謠

一夫六十一種の名香はほうりうじ、とうだいじ、せうよう、三吉野、こうぢん、こぼく、中川、ほけ經、花

橋、八ッはし、おんじやうじ、にたり、富士の煙り、あやめ、はんにや、鵜鵠、斑走梅、揚貴妃、飛梅、種か島、みをづくし、月龍田、紅葉の香、斜月、白梅、千鳥、ほつけ、らうばい、八重垣、花のえん、華の雪、名月、がらんす、蜀立花、花散里、たんか、花かたみ、うわだき、須摩、明石、十五夜、りんか、夕時雨、手枕、有明、雲井、くれなひ、初瀬、かんはい、ふたば、早梅、霜夜、七夕、寝覺、しのゝめ、薄紅、薄雲、のぼり馬

鐵輪道行謠

一げにや蜘の家にあれたる駒の繋くとも二道かくるあだ人を頼ましとこそ思ひしに人の僞り末知らでちきり染にしくやしさも只我からの心也餘り思ふも苦しさに貴布禰の宮にまふでつゝ住甲斐もなき同じ世の内にむくひを見せ給へと頼みをかけて貴布ね川はやく歩みをはこばんかよひなれたる道の末〳〵よるも糺のかはらぬは思ひにしづむみぞろ池いけるかひなき浮身の消む程とや草深き市原野邊の露分て月おそき夜の鞍馬川橋を過ぐれは程もなくきふねの宮に着にけり〳〵

小　舞

一松の枝にはひな鶴のすだつを見ればうごきなき岩尾の方に居る龜の千代萬代も限りなきよはひは君がためなれや心も清き池水に廣き惠みぞ有難き

歌枕の道行

一扨も其後思ひもよらぬ旅衣立出るより袖ぬれて千日をいつと白波の暇(沈カ)む浮身と成ぬとも東は殘る妻や子はしらでぞあらんかくとだにいはで思ひを淀舟のこかれながるゝ泪かなわれおかさねは誤りを人は何とも岩清水澄濁るをは神ぞしるらん男山斷り給へとふし拜み思ひはいつか山崎や關戸の境を打過てうどのゝあしの程へても歸らん事をかたのの原ましろの鷹を手にすへてなりひらの中將のかりくらしとなかめけん昔しの春もなつかしや袖に波よるなきさの院江口かん崎打過て思ひはつきじ有明のかたふく空や西の海波の煙りの松原やかすむそなたはすみ吉か岸におふ成わすれ草今のおもひに種とりて植て思ひをわすれてしうしほのひける大物の浦より船にのせられて鹽路はるかにこかれ行浮目を三つの濱なれや難波のさとに飛

ほたる思ひにもゆるも身の上と思ひ合せてあはれ也あしやの漁の船よばひ身にしみ渡る折からにむこ山おろしふくはらやわだの御さきを打ながめさらしゐの色かとぞ見るさみだれに濁りて落る布引やたきつ心をせきかねて袖くちわたるさかて川ゆきゝの人のしげゝればてまのはやしに隙もなく心つくしの須磨の關もしほたれんとわひけんも今身の上にしられたりしつみははてじうたかたの淡路島山詠むれば波にくちせぬゐじまおばたが筆染て寫しけん身は浮船のよるべにもつみならで見る空なれや心ばかりはすむ月のながめ明石の浦を行とわずがたりの古へを思ひ出るもゆかしくて千代のかげ見ん小松原うしや思ひを高砂の尾上の鐘にねをなきてむろの泊りに身をよせあまのかりほすもかけの世とすなをならんや世の中の人の心はよもきか關身にとりつどふ梓弓やよりの濱をこき渡りあべの浦よりうちうみ行日數やう／＼重なりて備前の兒島に着給ふとにもかくにも正景の心の内無念とも中々申ばかりはなかりけり

弓場意恨の道行

一其後かつ秋のみだい所や若君は住馴給ひし屋形をば泪と共に立出てけふ出て行衛もしらぬ旅の空さてこそ猶も物うけれ古へ人のおもかげを戀しき都いつか又あくる山ありとばかりを頼みつゝ矢田のいつる梓弓つるかの津にも身をよせて音に聞あらち山こえても露ちる秋風のなげきこりつゝはてしなき七里半にぞつかれける此人今のあはれさ何にたとへんかたもなし

ぢぞうの道行

一其後若君は鹽津の浦より船に乗跡ふり歸り見給へばわこく無双の竹生島こんりんざいより夜のうちにしゆつげんしたなれば地にて胎臟界の辨才天假にこの世にちんざ成弓手の山はすげの寺妻手はふなきの湊なる佛の縁に近江ぞと沖にかもめのつけ渡る浪も磯部に打よせてよはひ久しき白ひけの宮居もあれに立給ふりうとうの光りまし御殿を照させたまひける若君これを御覧して感涙袖をうるほして順風心に任せつゝわにのみさきや平小松かたゝの浦の船よはひ是も何をふ名所哉西に小高き御山はあれこそ日本天臺山しめいのほらをうつさる

る麓に日吉權現のいらかを雙べ立給ふ東はやつさき山田村やはせの浦の渡し舟とづ坂本のこなた成志賀唐崎の一つ松今も山王權現の御神木にて候と名所を語る其中に舟は大津の浦につくほうしゆ丸の心の內もはれとも中々何にたとへんかたもなし

義氏吾妻下りの道行

一扨も其後義氏は郎等四五人御供にて吾妻をさしてくたらせ給ふいつかわが子に粟田口ひの岡峠打こえて大津濱過ひばりさゑづるのぢの里露はうかねど草津の宿雨はふらねど守山やしの原堤なかみかた見てこそとをき鏡山ゑち川過れは千鳥嶋おのゝ細道すりはり峠は是とかや立歸りなかむれば都の山はとをざかる旅寢の夢はさめがいいそき給へは美濃と近江の堺なる寢物語を打過山中宿につかれけるふわの關屋のいたひさし月もれとてやまばら成たるいの宿よはほの〴〵と赤坂や夏を待へて熱田の宮何と鳴海の鹽干方末は遠江の濱名の橋の夕鹽にさすもさゝぬもかのほる海士小船こかれて物や思ふらん心つめは夕まぐれあすまであらん命はしら雪の今は池田の宿に着袋井繩手を行は程なくにつ坂過れは吾に聞さよの中山是かとよ此所にて一首の歌をよまれたり「としたけて又こゆへきと思ひきや命なりけり(脱字アルカ原本ノマヽ)と口すさみ給ひ筏なかるゝ大井川嶋田藤枝鞠子川てごしの里しづはた山を打ながめみをの入海田子の浦雪かつもり年に高さやまさるらん伊豆の三島や浦島やあけてくやし箱根山猶よろこひを菊川や大磯小磯を過鎌倉山を妻手に見て武藏下總のさかひ成角田川梅若丸の墓印し柳櫻を植交て念佛の聲の殊勝さよ宇都宮に着しかは大明神を伏拜み今一度某を花の宮(みやこなるべし)へ歸し給はれときせいをめされしのゝめ早く白川や二所の關に着しかは我をはとめよ關守と戀しき妻や子に會津の宿目出度事を聞からにやないついつにもまいらんとてやないつさして參らるゝきよたき川にさがりこりをかき御前にまいりいかに申さんこくうぞう樣三國一のこくうぞうと聞時は我等までも有難くぞむじ是迄參りしりしやうには花の都へ某をかへして給はれや此願成就するならばとしこもり申さんとてふかくきせいをめされつゝ三日こもり御下向ありいそがせ給へとて日數つもり

て七十五日と申には奥州などゝの里に着給ふ彼義氏の心の內あはれとも中々申ばかりはなかりけり

笛之段

一御ぞうしはまがきがとさまに立忍ひかくおぞちやうもん被成けるあゝ面白のおんがくや都にてあまたのくわげんを聞しかどもかほどゆゝしきくわげんはなしかゝる(イカ程ニ)ゆゝしきくわげんにも笛のなきこそ不審なれ 口傳 笛はあれども吹手がなくしてふかぬかや 吹手はあれども笛かなふしてふかぬかや(異本なし) 笛も吹手もありけれど惣て東のくわけんには笛をはふかぬがならひかや夫はともあれかくもあれ義經是にてがくに笛をあわせんとする若もとがむる人あらばさんろがよるの草刈笛と答ふべし重てとかむる者あらば源氏重代友切丸のつゝかん程は打あふへしと思召右の袷の袂より彼せみおれを取出し八つのうた口とてあかの花の露に打しめしがくは樣々おほけれど 口傳 男子が女子を忍ぶがく女子か男子をこふるがく中にも北野の天滿天神のおしませ給ふさうふれん(イニ秘節ト云) おやの子を又尋かねたるしゝとうでんと云がくをおし返へしては吹もどし吹もどしては押返し矢はぎは闇ともならばなれと半時ばかりぞふかれける

四季のちやう

一御ぞうしは淨瑠璃御前の一間所へしのばせ給ひて見給へは四方の障子に四せつの四季をぞかゝれけるまんつ東の障子にかいたる繪は春のていかと打みへて二月(キサラギ)末彌生初めの事成に峯の白雪むら消て谷のさわらびもへ出れば松の枝には孔雀鳳凰かさへつりてこりうそてりぬるてりましこひわやこからや四十から數の小鳥がすを喰てあなたこなたへとまり舞あそびし其風情をかゝれたるは誠に春かと見えにけり南の障子にかいたる繪は夏の躰と打見えて卯月末さみだれ初めの事成に軒端をふかすはあやめ草夜ふをかたるはほとゝぎすなつかしさにそなたの空をながむればしづの女かたこのもすそを引みたしすげのおがさをかたぶけてさなへとるこそやさしけれ日だにくるれば我屋にかへり宿の埋み火かき立て軒端〳〵に立煙り谷へとかたふく其下にはこうろぎはたをりきり〳〵す松虫すゝ虫轡虫常になかぬはたからむし蟬のなく聲梢々に

ひゞきわたりし其風情をかゝれたるは寔に夏かと見えにけり西の障子にかいたる繪は秋の躰かと打見えて荻か上葉にそよく風萩の下葉に結ふ露九月下旬にもみじばの所々に散行風情をかゝれたるは誠に秋かと見えにけり北の障子にかいたる繪は冬のていかと打見えて遠山近き里までもあらしこがらしはげしうて軒にたがひそこほりけるつかはぬをしの一番羽をばこほりにとぢられてたぎる其身の風情をは日本名譽の繪書の上手かこんじやうろくしやうの筆を以て繪朱をもおしますかいたりしを物によく〳〵たとふれは都に取てはどれ〳〵ぞ一條殿や二條殿近衛關白花山の院六原殿のかしの御所と申とも是にはまさるべしとも見へざりけり

當世都めぐり

一旅人は都あたりの名所舊關さと〳〵をめぐり〳〵て見し程に東には祇園清水ぢしゆの櫻の先咲て音羽の瀧の落くれてあらしの花の數ちりて霞の内に鶯のさへづる方を詠れば朝日かゞやく豐國をふしおかみて行程に並木の花も盛りにてあたりに近き大佛や三十三間ふし拜み三の橋を打渡りいなりの山の青楓もみちせは見んとばかりを契りつゝうづらなく成深草山松にからまる藤の森（本書誤乎口傳）打こへ行ばしづ原やおはらのさとにひゑいざんいつれも雪の降けれは猶しもかんふうはけしくて伏見こわだに打つゝき彼宇治川のせゝの嶋になかむれは風に亂るゝほたる火や水にみまきのいそすゝみ猶音に聞八幡山正八幡をふしをかみ淀の川瀬の水車めくる命を限りにて鳥羽に戀塚あきの山むつだのよわの虫のねもはやかれ〳〵に成ぬれば聞につけても哀なりとうじ四つ塚かつらの里月の影さす大井川高尾の峯のもみぢ葉はいとゞしぐれやそめつらんをしかなくなるさがのゝ原は物さひしく音に聞うづまさの入あひの鐘もそゑて程近きときわのさとに北山や積る白雪踏分て心ぼそくも舟岡山の夕煙り立のぼりしを見しよりも一しゆはかうぞ聞えける煙立船岡山を詠れはよその哀れに袖ぞぬれけると讀しも聞に付ても斷也きさふねの明神鞍馬寺打こえ行はしづはらやをはりのさとにひえいさん何れも雪のふりけれは猶しもかんふうはけしくて山より出る細道も木の葉亂れてうつみけり谷の小川

もこほりつゝおしやかもめの忍ひ寝もたへ〳〵にこそきこえけるひのをか峠に粟田口かなたを遙に詠れは加茂白川も見えにけり吉田の宮立ふし拜み我も〳〵と打つれて都入こそめでたけれ

高安通ひ

一うつろひ安き人心花になれしはそもじ様扨つたなきはわらはが身にてとゞめたり故を如何にと尋るに君と我中二葉の松の末かけてかわらじとこそ契りしにいつの間にかは秋風の吹や龍田の山はすさましく惡所の有と聞物をおぼつか波のよるの道とやあらんかくやわたらせ給ふぞと思ひつゝけてかくばかり風ふかは興津白波龍田山よわにや君かひとり行らんと行末を思ふ心とけよその契りをとめんとやあかぬは君の情とて打つれみすの内に入給ふ

吉原太夫ゑびすおろし

一そんもめでたひよいはひ申よ御代も吉原五丁には我も〳〵と袖をつらねてあげや丁に來りありける君立を忍ひて見れは諸國〳〵の國名かたとり丹州但馬對馬に因幡次郎かはやしてこゑをひゞかすくろうす樣とよ初音樣のつふしなんそにしねとかい(替り大手なし)たもことわりや扨又めいよ不審によるかかなつてくつわあけやもよろこひ申よあさつまのかわり清十郎はしをらしやてんかくよりもわたらせ給ふか雲井の君とよ藤波のながれ(櫻川ノフジ)にうかむつねよはつねの初島鶯聲にて歌をうたへはまれにあふよは(世ノ中ボンサマノシ)たまのへのこのゑ「高尾樣の御なりふりはかまくらの(カマクラフシ)御所の前て十三の姫かしやくをとかく吉野かふしへかへわげつてないかとほめられければしやみのらんきよく玉よの君とよあなんかつらにふるなの初瀬いつも常盤に松がへさころもいとしをらしきはかしをにかるも吉田外山あれみなさいや是みよしのゝすみのゑ大坂此君達の一つ處に集り給へて御酒宴なんともはしまりけれはおもひ〳〵のもん盃にて加賀に菊酒いづみの御酒にてるいも御ざない右京右近にかさなりてよべは幾代ゑん代も呑明石樣御酒をまいれとゆふぎりさんしゆそこで與太郎にお肴とあれは内の首尾能繕ひをいて馬に打乘て此さとへ來り門をたゝけば亭主はませすあんたるこよひだな

當世はやり祭文

一抑はらひきよめ奉る愛宕山には大權現吉原三原にほうじゆんぼう富澤丁にはときわけぼん古かねたなにはほこりをふいてならんべ置たる莨菪盆小傳馬丁には車長持なるかみぼん藥師堂前にはかんこりとりのほうらくぼんばくろう丁の裏屋／＼にぐわんにんぼう見付の端にお立なさるゝ代僧代參り盗人ほん横山丁には地打に打たるくまでんぼう乘物町には乘物ほう堺町には風呂屋／＼をのぞきんぼう鹽物のかしのひだこ入道ひつはりほう船町のかしにはゆるかの大じんぬかをけほんこあみ町には小船をこきよせぎやうとく迄と人をのせるほん新橋にてはわらんずはいて上下をせんとて待かけほんたちうりては奈良物脇指賣付ほん萬町にはよりんほうめつた丁にはびくにほう日本橋にはあめうりとうまん是程たかしきほん達をくわんしやうおろし奉る

吉原太夫祭文

一抑くわんじやうおろし奉る先々びやうじやのなにしあふ愛宕山より高尾樣あふみね大せん千手樣其外さんやの名とりたち種々の手くだはゑたれとも今のでうずのをもざしを千とせ見しよりよねんもなみの初瀬明石と名はよべどはぎのしろきに心をうつし伽羅を失ふひやうきんぼうなどはあやなし金太夫いつも見あかぬ江戸まちの巴ときけはなつかしやふじへせんしう其姿誰も見んとてすみ町のまさきのかつら長きよの幾世重ねてあさつまの初音ともゆかしかるも樣いとおしらしきゆふきりの峯の嵐かやれ松風かさてもやさしき物こしのきよく聞ゆるりしゆう樣心は吉野の山にこそ咲ははつ花八十郎かくせんせひの君達とせめて此世の思ひてに一ざ二座もさんしゆ樣此君達のまもらんにつきしいきりやうよもあらし病者の命は五百萬世と祈る也いきみたまのこさんしゆほう其身は息災延命諸願は成就皆領滿足敬白

野郎祭文

一抑くわんしやうおろし奉る先々野郎の名にしあふ愛宕山川内記殿勘三瀧井山三郎其外餘多の見物衆今の名家のおもさしを一めみるよりよねんも浪の内藏介顏の白きに通を失ふ久米介春ならねとも此

君の朧に花井岡之丞櫻井門彌と夕月の朧にあらて光りある能出來嶋のこさらしを出るにあやなし金きくといつもあらぬは初太夫節をこめたる竹之丞誰を見むとて上村の掃部の脇にたゝすみて猶もひそかにとうにこそよにも又なき皆之助いとうつくしき小きんの君扨も利發な物こしの清く聞ゆる才三郎心よし川權十郎咲や花咲右近殿かくせんせいな君達とせめて此世の思ひでに一座も二座も山三郎此人達の守らんに何の恨は有明のつきしいきりやうよもあらし光をみがく玉村ほう其身の息災延命諸願は成就皆領滿足敬白

江戸まんさい

一とくわかに御まんさいとちよにや〱御まんさいと四海の波もしつかにて國も治る御代なれはかゝるめでたい寳の君の御城つくりの結構には門々な六十六櫓々の其數は玉をつらねたごとく也かゝるめでたい寳の君の御在所なれば町の數をかぞうるに名のある町か八百八町其外數しらず寺の數をかぞふるに一萬三千三百三十三寺ありやあかやうにめでたき寳の君の御在所なれば六十六國の守護神達のまつはらせ給ひて屋形を立ひろ〱と立て君を守護し奉ればながれの末の我等までゆたかに榮る嬉しさよ其後寳の君はたかき屋に〱上りて見ればい〻煙り民のかまどはにきあひけるとほめよろこび候けるは試に目出たうさふらひ（一去）ける其後寳の君の御在所なれば南おもてを見わたせば南はくんだり夜叉是も淨土の三部經海の面を見渡せば西國四國あきたさかたさいなゝ國つがる八方そとが濱は扨おゐて唐天竺の寶船に餘多の寶を詰込ておお江戸の港へおしかふたるは誠にめでたふさふらひける東は觀音菩薩西は六社の大明神寳の君の南面を御番の佛はどれ〱そ同しく法華經のしやりやうぼんにおはしますしかとくぶつらいせうきやうしやうしやうこつしゆむりやう百千萬億さいあそうきしやうせつほうきやうけむしゆおく衆生りやうたうぶつどう如來むりやうかういとしゆじやうこほうへんけんねはんたちのまつばらせ給ひて御番を勤め給ひけり北の方はどれ〱ぞ同じくほけきやうの八の卷におはします（本ノマヽ）ありなりとなりあなろなびくなびいてびいでみんいてびあでびいでび

てびく＼ろけい＼たけい＼どけい＼あしゆらかるらきんなゝまごらかびく＼にうばそくうばいにんひにんとうたちのまつばらせ給ひて御番をつとめ給ひけり東の方はどれ＼をなじくほけ經の五の巻におはしますいづしやふくとくさぼんはわう二しや帝釋三じやまわう四しや天わんじやうわう五しや佛心達のまつはらせ給ひて御番を勤め給ひけり西の方はたれ＼いちめうらんば二めうらんば三めうこくし四めうけし五めうこくし六めうたほつ七めうむゑんぞく八めうしようらく九めうくわうたいによ十めう達のまつはらせ給ひて御番を勤め給ひけりいよ＼お江戸の七まんざいとやいさいわかおたんなへ金かまいつたつれふしにまいろうゑい當年な＼若水かわりて大はんに小判にたんざくはやぶきすなかねなんそをみやこのくるま牛にしつかとつんであれから是まできりん＼まいるはすへるな＼ころぶなかゝるめでたいまんざいをいつ迄さまおうやくたのし

大峯入萬歳

一かゝるめでたい折からなれば都聖護院と三寶院との一世一代の大峰入を見申に昔えんの行者のながれを汲て山伏の水上也諸國の山伏達を引くして大峰入は誠に殊勝に候ひける扨又扱の中をあらく＼見申に先一番の扱の中には大せうきやうを入られける扨又二番の扱の中には金剛經を入られける三番の扱中には三部經を入られける四番の扱の中には大般若を入られける扨五番の中には眞言秘密を入られける六番の扱中にはどつこしやくじやういゝたかじゆずを入られける扨七番の扱の中には胎識界のまんだらをこそは入られける（八番本書になし誤か）（八番の扱の中にはほし甲にらんてん鏁の鎧を入られたり）扨九番の扱の中には淨土の規式をこそは入られける扨又十番の扱の中には十方諸佛位神を入られける十一番の扱の中には那智の山より飛來る天狗のはかいを入られける十二番の扱の中には藥師經を入られける扨又其日の裝束は思ひ＼の裝束ときんすゞかけ螺の貝金剛杖を（脱字あるべし）につき大峰入とぞ聞えけるは誠にありかたかりし次第也

吉原太夫まんざい

一あらたのしやとくわかに御まんさいと君もさかえ

まん〳〵すかゝる名譽な太夫揃への御女郞ふりのいつくしさよめいたいなあんたらかこうしの前に來りて御せんせいていよほめられしはやぼと見うけたあしらいて一とりんかせんしやうらしくしんぞいやなふうのはんしやうにてもはふらはす昔彼は三筋町の御時初瀨か吉野とならんと二人なこう人なしたいに來りてせいてのぼりて百萬兩たてつくはしめてしちんほうひろかける其後甚太かこうし三四がこうし天神にわたりて大はんしやうの六條をは島原へこされけり其後にとくわかに御まんさいそやまんさい〳〵初春に正月かいきさらき彌生花かい五月はあやめの節句かい七月に成ぬればたなばたのほしあひ八朔はまぶかい九月は節句の菊重ねやれさいわか七樣と八樣とくぜつがいできたつた是はふしきな事だ是程よひ中があんたる事だされは七樣もつまらぬ御人のみゝにかゝる樣な事ばかり人中ておしやるをれはいこう腹がたつわいの初音樣へはつ〳〵しう何をくぜつおしやるえひされはかゝ樣きかしやれ此中もみゝにかゝるやうなことをしやるきつう腹か立まする私は歸りまするさらばや是今おれかちかふたににつこりとわらふてたもやこなたの其樣におしやれはおれも腹か立られぬめでたいは此めでたいかめでたいは扨もめでたい〳〵やれさいわか中の町に大よせかあるきいたか夫がいな事じやおてきはたれ〳〵だまづしゆん樣山樣と樣なんびんぢば樣おもたいなりていやなうてはないかいの扨も〳〵おひたゝしいなんひんの集り哉扨太夫達はたれ〳〵そ先吉野樣かほる樣初音樣小藤樣かつらき樣小妻かいとりほそ緒のせきだあけやのかたへちよろりん〳〵〳〵なこのまんさい〳〵千年の御祝ひととつはいひやろのひ

野郎まんさい

一とくわかに御まん太夫とよ君もさかい町にましますかもんめでたや田村の君の御子ふりのけつかうさよ名代(イタイ)の味しやこきんの前に至りて狂言をぞめされける狂言に取ては一にりきみしなせふりぬれ者品者ぼつとり者にてさふらひける皆之助顏はせ見に來る人は布引の瀧井山三の御姿ころすか〳〵ぶつころすかなりもふりもよしおかのたもむの松

井織部淸き玉井の水はわかやくきのめははる淺之烝の御姿又も世には出來島にざらし樣の御ふりは內記見事とほめられて我等か樣成ちはすけなんとも鼻毛にとんほつなきさふらいけるは誠に名譽てさふらひける昔かんのかふきをとりの御ときかんみに彥作さうにんは二人は次第にひろまりてかゝるはんじやう〳〵は十六又かゝるはんじやうたておゐて初めて狂言廣まりける夫よりも千世よ鶴の丸甚三めでたや竹之烝ずの舞ふりなかれも絕せぬ玉川の主膳の舞の見事さよはんとうの末ながく光りをみがく玉村の吉彌樣の舞の手末廣今とさかい町民のかまどもにぎわひてふつきや長久とよろこびけるは誠にめてたやさいわかはやせやまんさい〳〵夫にやつゝいて〳〵中村の作彌樣さき川の八十郞六彌吉彌瀧之烝樣みきの介もし太夫殿是がさかい町て御座る是が竹之烝太皷の曲がはしまつた〳〵太皷の曲あるまんさい〳〵〳〵是太夫殿子共衆のおとりがはしまつた花は吉野紅葉は高尾月はさらしな須磨明石太夫とのでつからかいてまんさい〳〵なふ太夫殿是か勘三郞鞨の曲じやまり蹴て見れはなあさんさ鞨かあたりて天と面白やこりやなんたるこんだな扨も〳〵でつからかいたまんさい〳〵なふ太夫殿是か玉川主膳さる若山三郞かさんぼそうがはしまつたせんざいらく〳〵やまんさいらく千年の御いはひやゝたのし

吉原太夫浮世たゝき

一面白の浮世遊ひやタァ〳〵にぬめり町を上から下へ見渡せは扨も見事やうつくしや餘多の上臈衆が御ざんす主はしらねどかうしからちよいとまねくしかもかのこのずんどい(き)よしがなこのちよいとしよ先も名高き吉野樣とやまに咲しお姿を一目見しよりしづか心もうか〳〵と成はてゝやりてが袖をぢつとひくとしはいくつとゝをたればじゆんじゆん七そん八がそん〳〵そなたにうつぼれてたん〳〵たき野樣はみめよしふりよし心よし世界の玉葛とぼつとり者のあぢもの丶せめて一夜はもまれたやかと吉田殿へも取沙汰扨も見事やさしのけふはどこの町へおそうがさ是こそお町のおんのぢと床入をはじめた〳〵とこにもなれば花月樣しやみに心をひかされてはつたと上てうたふたわれも

他國よきしよ様も他國よたぐひちがへてのさておめを下され又ある方を見てあれは爰にかいてのとんてき者ながひ刀に長脇指をぼつこんて日本堤をずんよい〳〵ずんずとぬめりあるいてはたとあてたやつこなんたさいきかなさうぬめか腕立身かしつた八わうし山の炭焼だか色はくろいが僞りやござなひさんすいやつこわゆすきたゆけは程なく大門口にもあみかさよだて羽織金鍔大小指ちらしあけや町へぬめつた爰をとをるはほんにさ高尾に吉野君よ〳〵是ぞお町のほんにさくわげつのおてき兎角浮世はしやつひけうんのめさわげめてたい浮世たさ〳〵

吉原紋盡しのたゝき

一シテ松もとかえる今此春のながき日の本なんせん部州お江戸淺艸のあなたのかたへあしはやに歩み行て思ふ人に大門口のこゝらに立て今の名とりちよん〳〵上臈衆のいしやうの紋を見たれは治る御代のためしとて ワキ弓は袋に矢車丹州様の出さんさした シテあさぎ小袖にもみうら ワキちがみにもつかうさんしゆ様 シテこくも薄くも染川まんしゆを縫にぬはれた ワキきつかう木瓜付たるは シテいつも姿の若山 ワキ見ても〳〵見あかぬは吉野の櫻のせこふし高尾の紅葉様の立姿 シテ今よきにうかれきてとの字に ワキとの字をかさねつゝ シテ幾夜思ひを駿河成 ワキふしえに立し シテ夕霧も ワキ殘る外山の薄紅葉 シテなびけや〳〵さゝのおさゝの ワキ露しつほり〳〵ぬれて成ともな シテ一よ二よかさんや様 ワキつらや〳〵 シテあゝさてつらや思ひきりの菊五つ紋 ワキすそに立波高嶋の シテおさきにゆられ〳〵なかるゝ ワキ身は捨小舟きしにはなれて シテ便りなや便りなひとて身をこりす定家の君の御紋にはききやうかるかや ワキをみなへし シテ萩や薄の亂れあひほに出て人に白糸の ワキ瀧野様はだてもので シテ春も初音の空色に ワキ霞を分て シテ鶯の ワキ梅の小枝にたはふれて シテほうほけ經の一こゑに ワキうてなも爰に シテ玉の井玉のすだれにほのみし君も ワキなびけかしわ木手かひの口の引つなもゑいさらさ 二人ひかばなびきやれわかいが二度ない物とそなた思へはひやうたんの川流れ浮にういてきたものよしとしやるはおゝ夫もこ

ちにがてんぢや兎角浮世はずてんどうちんからこ
ろりの鐘のこゑたんたよかよへ與二郎衆伽羅もて
御ざれさらばや
昔大黑舞
御ざつた〳〵福の神を先に立て大黑殿の御ざつた
大黑殿の能には
一は俵ふまへて
二ににつこりわらつて
三に酒をつくつて
四つ世の中よふして
五ついつものごとくに
六つ無病息災に
七つ何事なふして
八つ屋敷をひろめて
九つ小藏をぶつ立て
十でとうどおさまつた
大黑舞をみなさいな〳〵
中古大黑舞
一御さつた〳〵加賀守を先に立て大名衆の御ざつた
大名衆の能には
一に俵をおさへて
二ににやわぬあきないし
三に酒を作らせす
四つ世の中ちがふて
五つ伊豆がさし出て
六つ無理成仕置に
七つ何事ありそふで
八つ屋敷を燒はらひ
九つ米がたかふて
十でとうどこまつた
大名舞を見なさいな〳〵
西國順禮歌品々
一番に紀伊國那智
一ふたらくや岸うつ波はみくま野の
なちのおやまにひゝく瀧つせ
二番に紀伊國きみゐ寺
一ふるさとをはる〳〵爰にきみい寺
花の都にちかくなるらん
三番に紀伊粉川寺
一父母のめくみも深きこ川寺

佛のちかひ頼母しきかな

四番に和泉のまきを寺

一みやまぢやひはら松原分行ば

まきのを寺に駒そいさめん

五番に河内藤井寺

一參るより頼みをかへる藤井寺

はなのうてなに紫のくも

六番に大和の壺坂

一岩をたて水をたゝへてつぼ坂の

庭のいさごも淨土なるらん

七番に和州をか寺

一けさみれは露をか寺の庭の影

さなから瑠璃の光なるらん

(以下三十三番迄大同小異略之)

坂東順禮品々

一番に杉原十一面

一頼みあるしるべ成けり杉本の

ちかいは末の世にもかはらし

二番に三浦の岩戸十一面

一立寄てあまの岩戸を押ひらき

ほとけをたのむ我身たのもし

三番にたじろ千手

一まよひしか今はさきたつひきのやつ

とりにかはるはたしろ寺かな

四番にはせ十一面

一はせ寺へ參りて沖を詠むれは

由井の汀に立はしら波

五番にいひずみ十一面

一かなはねばたすけ給へと祈る身に

ふねに寶をつむはいゝずみ

六番にいやま十一面

一いやまてら立そめしよりつきせぬは

入あひひゝく松風のをと

(以下三十三番まで大同小異略之)

西國順禮順番

一番紀井の國那智、二番同きみゐ寺、三番同粉川寺、四番和泉國槇尾寺、五番河内藤井寺、六番大和の壺坂、七番和州をか寺、八番同はせ寺、九番奈良のなんゑんどう、十番山城宇治むろ、十一番同だいご寺、十二番近江岩滿寺、十三番同石山寺、十四番大津三井寺、

十五番京今熊、十六番同清水寺、十七番同六はら、十八番同六角堂、十九番同かうどう、二十番ちやうしうよし峰、廿一番近江あなう、廿二番攝津てうぜんじ、廿三番同かちを寺、廿四番同中山寺、廿五番播州清水、廿六番同ほうくわさん、廿七番しよしやてら、廿八番丹後なりあひ、廿九番若狹松の尾寺、卅番近江竹生嶋、卅二番同觀音寺、卅三番美濃たにぐみ

坂東順禮順番

一番杉本十一面、二番三浦の岩戸十一面、三番たじろ千手、四番はせ十一面、五番いひずみ十一面、六番いやま十一面、七番かなひ正觀音、八番ほしのや正觀音、九番しくわうじ千手、十番ひきの岩戸千手、十一番よしみ正觀音、十二番しをんじ千手、十三番淺草觀音、十四番くみやうじ十一面、十五番白岩十一面、十六番みつさわ十一面、十七番出寺千手、十八番十禪寺千手、十九番おほや千手、廿番さいみやうじ十一面、廿一番やみそ十一面、廿二番さたけ十一面、廿三番さしろ千手、廿四番あまひきゑんめい、廿五番あふみとう千手、廿六番淸瀧正觀音、廿七番飯沼十一面、廿八番なめつ十一面、廿九番ちば十一面、卅番高倉正觀音、卅一番かさもり十一面、卅二番清水千手、卅三番なこし千手

忍ひくどき木やり

一やれかんかれ〳〵是見てひいた風もふかぬに妻戸のなるはかぶろで丶見よ殿ではないかとのじや御ざりませぬけたをはしる鼠じやちん〳〵からりのちんからりとうつは鍛冶の槌のをとうつたるたぬきの腹皷たまさかにきてねて打をいてなふとのこ夜明(カラス)の鐘かつくつつてん〳〵ちやん〳〵すほ丶ひやりつろ〳〵りつろう〳〵〳〵ろとつひやひやりつろるりちやうろかねが

秋の夜くどき木やり

一扨物うきは秋の夜の君を松虫くつわむし一よはかりはきり〳〵す二夜もさんやに君はかうろきをいかけ中の綱こゑをかけよやあれさきのつなゑい

吉原太夫くどき木やり

一ゑひわつさりとしめかけやれおてきの歴々ほんらい國本はいなかそたちの者ぢやがことし初めてよし原へ參りまして三浦四郎左がみゆへやんや〳〵にさ丶れまして高尾の紅葉に逢ましたが吉野様と申は皆樣も御そんじで御ざりまんしよ志賀のしら

玉花野にかづら唐崎薄雲棚引渡るあれから是迄ゐいや八橋様やさら〳〵さつと太皷をたのんでくどきすまいた松枝の太夫様なさけは三しうさかたにまんよに小太夫まさきにかつらきせいしゆ様のやとやゆきにはすだでもじてしなてわらてくせはなにもあたないくせのないが道理じや京のふうが千人といなかのふうが千人とお江戸のふうが千人と三千人のふうたちが寄合談合評定てつくりそだつたほこたちて癖のなひか道理じやいかなうちやうてんのとをり者のやほさんなんとも此君にあひましたくはふんふかくはなり候まいといつたらくせつになりましよかあいのやりては合點かよのもとのつないよゐい

野郎くとき木やり

一えいやわつさりとしめかけやれやらうの歴々ほんらい國本はいなかそたちの者なるがことしや初めてさかい町へ參りまんして中村勘三が芝屋へやんや〳〵にさられまして山三の君に逢ましたるおくめ様と申は皆様も御ぞんじで御ざりまんしよ藤井あつまに市村中村玉川流れわたつてあれから是迄ゐいや小ざらし様やさら〳〵さつと太皷をたゝいてはやしてすまいた山川のゆき様情の左近に左せん様おきゝにおつるに掃部様のやとやかへりはすじてもじてしなつてわかてくせはなにもくせはあだないくせのないが道理じや京の役者か千人と大坂の役者か千人とお江戸の役者か千人と三千人の役者達が寄合談合評定でつくりそだつたほこたちて癖のないが道理じやいかなうちやうてんのとをりものゝ錢なしなんとも此君にあひましたらはふんふかくはなり候まいかいやたゞしんきなり候まいといつたらくせつになりましよかあひのはやしは合點かよのもとのつないよゐい

春駒くとき木やり

一やれおいかけはやさぬかおいかけ中の綱しめて見よさいこくたゝらのひやうしにてとろ〳〵ととろり〳〵とひやうしをそろへて頼むぞゐいいさめや〳〵わかい衆よいさむ心は春駒の立とゝまらぬ風情して扨春の日に春駒は庭の櫻につなぎとめ駒かいさめば花かちるいさめは駒が駒がいさめは花か散る花はちりても年を經て又くる春はめを出す思

へば人間一盛りけでんの内をくらぶるに夢まぼろしのごとくなり狩場の鹿と申するはあすをもしらぬ身を持てたはふれ遊べ夢の浮世にをいかけ中の綱いかう見事ようそらふた四つのつなゑ地えいや〱ゑいやゑやこのしもさか小六じやゑ上えいとこせの四つ綱ゑや地ゑいやらさのえい

きり〲すくどき木やり

一やれきり〲すなくべき野では鳴もせで君と我とが其中は梅に鶯花に小蝶と申へしひよくれんりの中成にあひきれ〱と鳴時はなくやきり〱すの心こづらのこんにくさよをいかけ中のつなから見ん事よふそろたやれなかのつなよへ

敷物揃くとき木やり

一やれをいかけはやさぬかやれ十七か〱ことしはじめて家つくりはふは白かね軒こがね東きり窓せにすだれせにのめ事は光りかゞやくばかりなり七まと八まと九の間にしいたる疊はどれ〱ぞうけんべりに錦べり高麗べりをばまつさきに村雲立てぞしかれたりあまりてたらさる所にはしいたる皮は何々ぞ毛氈虎の皮豹の皮をはまつさきに毛筋を揃へてしかれたり三間通りし床の間にかけしはぞんはどれ〱ぞびしゆがだるまにとうはりたけとよ其比都にてはやるもつけ和尚のあそばした墨繪の觀音三幅一對さらりとかけ秋も半の事成に北風そよとの吹ければ金の軸との白木の軸と〱のともうちはさなからきやうしやのきんのしらふるもとのつなよへ

島くとき木やり

一やれをいかけはやさぬかをひかけ中のしめて見よ南をはるかに詠れば南はいつも夏に似てすわまに池をほらせつゝ池の中には蓬萊ほうじやうゑいしうとて三つの島をぞつかせつゝ島より陸地を詠むれは唐木を以てふな橋をかけ橋より池を詠むればとうなんくわぢよかうつぼ船浦島太郎が釣の船五色の糸にてつなかせてじやうらく〱かぜうの風ふかばみぎわへよれてつないだはいつも夏にはおてんとうたかい御さゝぬおいかけ中のつなから見ん事よふそろたやれ中のつなよへ

楠きくとき木やり

一やあれをいかけはやさぬか此わけくといて聞すへ

つらなる有様はゑいもろこしのしんの始皇帝咸陽宮にもおとるまじゑい天下のやうがうも日夜朝暮にありぬやといきやうくんじて花もふりゑい咲散花か櫻田やいらかをならぶる家作りゑい天下のこらぬ諸大名君を守護し奉るげにゆゝしくぞ見えにける同じくお城の山づゝき松に小松を植添て千代を重ぬるためしかや秋にはあらねど紅葉山ゑいあたりの川を詠れは留りさだめぬあしおぶね出入船の數々に波の船歌うたいつれ歌のふしこそ面白や天下かゝやくお旗本おわかい衆のちよろ達の肩にかのこのだんだら筋腰に浮世のぬめりすちのふ腹筋や腹いたやゑい〳〵さるの浦濱にふたご山とて又なふあるになせにそなたにや子かないぞからろの音は隙もなしいさごにねぶる水とりも人おもさらにはゝからずつばさをならべてむれゐたりかんこもこけふかふして鳥おどろかずとも云つへしやらん〳〵めでたののんゑいそりや若枝

若衆くとき船歌

一ゑいさきの月の十八日にくわんをん參りしたれば坂中の〳〵まつ坂の坂中であゝよひ若衆にひたとあふたの我もわかい時は松に下り藤五年も十年も松に下り藤かいつきひつ付はなすまいと思ふたれば人の妻なればのいて脇へしやごんたしやてんはちわざくれ浮世に壹分五厘ゝ寸さきは闇の夜命てうすのこにはかりかへしやのなにも藤六平六へのしなりにあかせ〳〵ませほれてしぬる〳〵今もどる一期じやそもじかく思へばのむゑいこの菊も

鳥さしくとき船歌

一やんらめでたいの春の梢にひよとりとまりてさえつるやうは天氣よかれがな扨もよかれがなこにちよかれがなしゆくしやかもくしやかさんはやさうたるちんはう〳〵ともさへする所をさいとりさしのさいとりほうかさゝばやと思て竿は短かし梢は高し前成小石で鳥をはら〳〵はつと追立て飛所をちうでさいておつとつたこしのなわへつくんたるちんなみちぎりきだんだらひやうしねぢきつたにきりかうやくひやうしのふくたりひやうしの孫の彦のやしやら子のひまごか小鳥をさいた所を是をおごろじやたかのか程めてたののんゑいそれ若枝もさかゆるのんゑん〳〵はもし

おもひ物くとき船歌

一ゑい重いものにとりてはしうの御恩に父母のおんしめり茶うすにおろの人の乗物ちやうせん人の長刀下手の謡に上手のくすしゑい雫の笠まだも御ざるよぶせう者の立居兎角浮世はかるいがましよおもひはころせんしづむゑいおもひはしづむやんさかるいがましじやいのんゑい

琴の歌品々

初組ゑてんらく

一ふきと書(云カ)も草の名茗荷と書(云カ)草の名ふきじざい徳ありて冥加あらせ給へや

一春の花のきんきよくはくわふうらくにりうくわえんりうくわゑんの鶯は同し曲をさいつる

一月の前のしらべは夜さむを告る秋風雲ゐのかりがねはことぢに落るころ〳〵

一長生殿の裏には春秋をとめり不老門の花には月のかげをそし

一かうき殿のほそとのにたゝずむはたれ〳〵朧月夜にないしのかみ光る源氏の大将

一たそや此の夜中にさいたる門をたゝくはたゝくともよもあけし霄の約束なければ

一七夕のへいふうもおとゝはなとかこいざらんらりやうの袂もひかはなとかきれさらん

二組千鳥の曲

一梅か枝にこそ鶯は巣をくゑ風ふかはいかにせん花にやどれうくひす

一花ちる里のつれ〳〵たへ〴〵の琴のね花立花の袖のかに山郭公おとづるゝ

一思ひ寝の夢の間枕に契る明方さめては本のつらさにて泪の外あらじな

一さよふけて鳴衛何を思ひあかしね浮世を須磨の恨みにて我とひとしき泪かは

一しらま弓のまゆみのそるべきはそらいで八十のおきなの戀に腰をそらいた

一美保の松風ふきたへて沖津浪もあらじな水にうつらふ月ともに詠めにつゞくふじさむ

三組小車の曲

一心づくしの秋風に須磨のうらはの浪枕ころも片敷獨ねて夢もむすはぬよな〳〵

一古里を遥々と隔てゝ爰に角田川都鳥にこととはん

一君はありやなしやと
一夏の夜の暗に夢をさます時鳥白妙に見ゆるは月にさらす卯の花
一きりにたゝずむ小車やつしてたてるおぐるまの人目忍ぶの契りこそふけて寢やのかよひぢ
一あすか川の水上を硯の水にせき入て書ことの葉はつきましやけふもくらさん命かや
一契りし宵のたそがれしるべふかきそらだきとめゐる方の萩の戸をひらくや袖の移り香

四組住吉の曲

一天下泰平長久に治る御代の松風雛鶴は千とせふる谷の流れに龜遊ぶ
一人しれぬ契りは淺からぬ物思ひつゝむとすれど紫の色に出るぞはかなき
一はかなくも隈なき月をいかで恨みしとにかくにわが袖はたえぬ涙の夕暮
一花のえんの夕暮朧月夜に引袖さだかならん契りこそ心淺く見えけれ
一住吉の宮所かきならす琴のね神の惠に逢そめて過し昔を語らん

一秋の山の錦は龍田媛やをりけん時雨ふる度ごとに色の增ぞあやしけれ

五組朝顔の曲

一うらめしや我縁薄雪の契りか消にし人の形見とて泪ばかりや殘るらん
一ひよくれんりのかたらひも替れば替る世のならひさりとては恨むまじ昔は情ありしを
一若紫を手につみて深き心の色ます長き契りを結びしも草のゆかりと知べし
一しのゝめのまがきに露をふくむ朝顔玉のかづらたをやかにかゝるや花のおもかげ
一世々の人の詠めし月は寔のかたみぞと思へば〳〵涙玉をつらぬく
一吉野川の花筏さほさす隙もあらじないわなみ高き山風の四方にちれる花の香

六組葵の曲

一雪のあしたの嵐は梢の花の散る風情名殘惜しきはとにかくに待えし君の歸るさ
一淺間しや我身は雲ゐのかりの夕霧に音しめらるゝ思ひをばいつか世にかわすれん

一まどろめばおもかげをしけ〳〵とみじか夜に時鳥おとづれて初音に夢ぞさめける

一詠むればいとゞだに戀しき人の戀しきにくもらばくもれ秋の夜の月に恨みはあらじな

一峰の嵐のかよふか谷の水の流れを寝覺にきけば松風は琴の音にたがわじ

一あふひの上のときめき加茂の物見の折から車爭ひつれなきは深き恨なるへし

七組武藏野の曲

一雲の上の詠めは有し昔にかはらねとみし玉だれの内ぞたゞ懷敷やゆかしや

一面白やさみだれ花橘の匂へり時鳥をとづれて短か夜なれどねられぬ

一中々に初めより馴ずは物をおもはじわすれは草の名にあれば忍ぶは人の面かげ

一思ひ餘りせきかねてうらみぬる夜の涙は床すさまじや獨りたゞ枕に戀ぞしらるゝ

一武藏野に行き暮て月を詠めて草枕戀しき人をゆめに見てうたゝねに袖しぼる

一軒をめぐるてんてき琴のねにたとへて七ねんのよるの雨曾てしらぬ夢の世

八組てかへの曲

一數ならぬ身にも唯思ひもなくてあれかし人なみなみの薄衣袖の泪ぞ悲しき

一あこがれて思ひ寢の枕にかわす面かげそれかとてかたらんと思へば夢ぞさめにける

一しら雪のみゆきのつもるとしは降ともあくまじやもろともに寝亂れがみのかほばせ

一引く人はそれ〳〵あまた有ともつま琴にもとの心かはらずば琴ぢに落よ秋風

一拍木の衛門は鞠をとんと蹴たれば鞠は枝にとゞまりければ梅ははらりほろりと

一さりとてはつれなや君が袂のあやにくになびかぬはてがいの虎の引綱

九組くいなの曲

一桐壺のかうゐのひよくれんりの契りもさためなき世のならひとて夢のあひだぞ悲しき

一短か夜に夢さめておもかげを夏蟲の身より餘る思ひをばいかで人にかたらむ

一秋の夜のふけゆき月はにしきにかたふく松風や浪

の音鹿の聲ぞ淋しき
一道しるべせし小ぎみの中立にひかれてゆくゑまよふ空蟬のきぬのかほりぞ床しき
一たそや今宵さよふけて芝の戸ぼそをたゝくは尾上おろしの音づれかくいなのつぐるこゑ〳〵
一青柳を片糸によりてなけや鶯うぐひすのぬふてふかさも梅がえの花がさ

十組須磨の曲

一須磨といふも浦の名明石といふも浦の名さらしなの月ともに詠めていさやかへらん
一春によせし心のいつしか秋に移ろふ黒き赤きのませの内によしある花のいろ〳〵
一きり〳〵すよすがら何を恨すだくぞ我も思ひに絶兼ていとゞ心の亂るゝに
一中〳〵に人をは恨むまじうらみじとにかくに數ならぬ浮身の程ぞ悲しき
一三五夜中の新月くまなきぞ面白やちさとのほかの人までもさぞや詠めあかさん
一深更に月ふけて車の音のきこゆるは五條わたりのあはらやの夕顔をしるべに

鞠つき歌

一向ひ通るは甚太じやないかてつほかついて小脇指をさいてどこへ御座ると問たれは雉子のお山へ雉子打に雉子はけん〳〵ほろゝ打よつて御茶參れおたはこ參れお茶もたはこものそみじやないが是の娘にちよとほれた晩に參ろがどち枕東枕に窓あけて窓はきりまど戸はあり戸七つ下り〳〵にそろり〳〵と手をやれは爰はどこ〳〵爰は膝さら爰は内股爰は情のかけ所情かけての其後に親に三貫子に五貫ましておばゝにや四拾五貫四十五貫の錢金てたかいまめかふて何にしよやすい米こて舟につみ船は白銀艫はこがね綾や錦をほにかけてあすはのほろぞつんつゝつのつの國へ〳〵

盆をどり歌品々

一盆々々にをどらぬ者は牛の生れか燒蛤か乞食小女䕺かおそろしや
一千松樣へをどりをかけるでゝ請とりやれおまん樣〳〵
一眞丸(マンマル)御座れ〳〵十五夜の月の輪のごとく〳〵
一もふはやかへろいざさらかへろ小雨のふるにいざ

かへろ〳〵

一盃々〳〵も今日明日ばかりあさつてはよめのしをれ草〳〵

らうさいかたはち昔ふし品々

一山の端にすめは浮世に思ひのますに月といろやれ山の端に

一したれ小柳亂れて見せうつれて心のうらやまるゝに

一こがれ〳〵て露ともきえば跡はとにかく君頼む

一あまの釣船身はこかるれど甲斐もなき世の浦にすむ

一戀をはじめた人うらめしや今の我身のつらさゆゑ

一頼みかけ置結ぶの神のちかひかわるないにしゑに

一神や佛を恨むはりんゑくわこの約束ぜひもなや

一逆もゑんない中にてあらはなどやはじめのつらからぬ〳〵

一思ふまい物心をつくしよそに心のある樣を

一月のとひ來る其よな〳〵は思ひやられて袖しぼる

一出る月日の短じかの命絶ぬ思ひのうらめしや

一思ひ出す夜は枕とかころ枕ものゆへこがるゝに

一はなれ〴〵のあの雲見ればあすのわかれもあのこどく

一君はくれなひ我綟衣八重につゝめと色に出る

昔小六ふし

一小六ついたる竹の杖本は尺八中か笛うらはしほたんほんなあよをほん筆の軸竹小六

昔ほそり

一忍ふ細道に松とくるみを植まい待る其身はくるみでもなし

櫻川のふし

一ぢしゆの櫻は散かちらぬか見たかの散やらちらぬやら嵐こそしれ

はやり長歌

一今の世のおためをいひてはりまわる伊丹や曾根か伊豆ならばかみ下ともにうるほひて末繁昌わざわひも忍ふ遊ひあるましや阿部か伊井なしよかるらんわれて退たる能登釜を本のかまどにいなをして多くの米をもりあけて大和の國を加増して讃岐圓座をさしかへん備後表に修理をし螺貝よりも音高き石谷等をめしおろし町のしをきをさせんより惡

臣ともに相添て天下の仕置させよかし併も人民の貧て利を持公事沙汰は石谷なくていかゝせん世間の儒者の見せしめにしつてしらざる道春をうつほ船に遠流して一文錢か集りてあんせん等をゑり出し大和言葉をいひかけて天下の仕置するならは君長久に成べきにいやしき下の心にも劣りはてたる臣下ども今の惡臣其儘にあらためなくてあるならば正罰いかゝ人罰の其怨念や報ひきて如何成天魔出來り天下を奪ふ其時は富士の山程あつめ置こがね白かね何ならす利錢商ひ分別かおためたてして人民を飢饉かし等なす物を改めかへん仕置せよ其惡臣は主君のためにはならで怨(アタ)ぞかし忠臣等と云事は天下安穩政民の苦みなきやうにすることそ君のをためなれ天下安穩ある時はあめか下の錢金は皆將軍のものぞかし上もよかれよ下よかれ下がよければ上もよし上のゆがみを下として直さん事は愚なれさはありなから民よりも上を養ふ道なれや十に一つも誠あれ

さよの中山長歌

一我等が以前わかい時さよの中山とをるとてはらみし女臈に行逢て一夜なびけと手を引ば一夜なびくはやすけれと我等もにせに妻持てからかほかをのにくしみに刀試しに仕り刀の刄から子が生れそこへおしやう様立寄てさよの清水でとり上けて衣のすそへかひくるみ門前人に預け置門前人のやさしきはあそこや爰のもらひ乳で十三迄もそだて置明る十四の春の比生れぬ前の父じややら枕神にもお立あるおやの敵か取度は京で一番とぎや樣一年ときして貳年目にどこのいつくの人じややら刀とげとても御座る刀はよいが中かけた何をためして中かけた皆も御存し御座らうが我等か以前わかいをりさよの中山通るとてはらみし女臈に行逢て一夜なびけと手を取ば一夜なびくは安けれと我もにせに妻持てからかほかをのにくしみに刀試しに仕り其時刀の中かけたといて下されときや樣といておましよは安けれど五日三日に出來ましよか五日三日によもできじ三十日過て取御され三十日過てとりにきて我等か以前ゆた事を耳に能々聞付て親の敵とある程に三寸やるまいのがすまい思ふぞんぶに敵とりおやの御墓へ參りては香をもりては

花を立是でうかみやれおや様さよいよゑい

なげふし品々

一こんど御座らばもてきてたもれ伊豆のお山のなぎの葉をお山のないづの伊豆のお山のなぎのはを

一染てくやしきわせ紫や本の白地がましじやものしら地がなもとの本の白地がましじやもの

一ゑはすれども姿は見えぬ君は深野のきり〳〵す深野のな君は君は深野のきり〳〵す

一あはれ成哉梅若丸はしらぬ東に隅田川東になしらぬしらぬ東に角田川

しな物の歌

一夕べの〳〵しな者は今宵はどこのおとまりじや播磨の國のしよしやむしや寺のおつきやかおとまりしや

やよやぶし

一昔しは松の葉にさへ四五百人も寢たが今は御看略(カンリヤク)で〳〵やよやう丶只ひとり

はやり物の歌

一はやり物は何々ぞかうきでん十二段あふ〳〵新田鑓かんなべらほう〳〵

さんや源五兵衛ふし品々

一源五兵衛どこへ行くさかい町のまちへ高いさじきから樂屋を見れば役者かわいや骨折じやるゑ源五兵衛

一源五兵衛どこへいくさんやの町へ高い土手からたんぼを見ればおほひかいてが打連立て布引てゑ源五兵衛

一源五兵衛弟はさんちやの町へ高い二階からかしわた見ればけんとんかわいや身をさらするゑ源五兵へ

一源五兵衛おてきにくせつかてきてやりてあけやはおろかな事よいつもかはらぬつなきとてんとあのや源五兵衛はおふりやるゑ源五兵衛

一源五兵衛おてきが道中見ればきむく白むくひざやの小袖細小袖をかふろにもたせあけや座敷で小歌をやりやるゑ源五兵衛

一源五兵衛さんやへだてしていきやる金鍔大小びろどの袴細縮綿帕なんぞ土手やたんぼはなげぶしやりてぬめるゑ源五兵衛

一源五兵衛あげやで上瑠璃語る又もあるまい上瑠璃御前十二段ゑ源五兵衛

一源五兵衞おてきのだて帶見れば幅が二尺に長さか三尋中はしんくの八つ打てゑ源五兵衞
一源五兵衞つけたる定紋見れば花は吉野よ紅葉は高尾松は唐崎霞は外山替りあるまい我小袖ゑ源五兵衞

替り源五郎ふし品々

一新すどこへ行東の方へ高尾山から吉野山見れば外山勝山かく山唐崎志賀の夕霧〳〵
一まれにくるよのさしある宵はつらき思ひは度かさなれど誰も人目のしげ〳〵なればふくるつらさを神そ底からわする丶〳〵
一春は吉野よにほひは花野さわへす丶しき八橋かほる高尾外山に薄雲見れば雪のはだへにとむるは初音對馬の伽羅の香袖の香
一ふけてもとりにかへてのお手ひくは名殘の別れの辻にさらばまたやと賴みはおけど袖の泪がはらはらおくられくさのきぬ〳〵
一袖の泪のかこつけ松よ雪のはたゑにそひ寢のつらし歸るあしたの名殘のかりかねしみてあふよの風をもいとふ引合の屛風〳〵
一幾世かはらぬかこつけ松も春は一入色香もまさる夏はす丶しきそひ寢のつ丶じ秋はあふよの名殘のかりがね冬はあふ夜の風をもいとふ引合せの屛風〳〵

のほ丶んふし品々

一君は川向ひ我は川前よ〳〵立てならべて〳〵みたはかり〳〵
一君はみやまのあの遲櫻〳〵我はさきたつ〳〵しば櫻〳〵
一君の姿は眞立花よ〳〵なれてそいたや〳〵下草に〳〵
一君はみやまのふりつむ雪よ〳〵我は谷間の〳〵薄氷〳〵
一花にたん尺たが又つけた〳〵枝をたをれば〳〵花が散〳〵
一小紫とは誰名を付た〳〵色にそみては〳〵うへがない〳〵
一あのやおてきをたとへて見れば〳〵櫻花をは柳にさかせ〳〵梅の匂ひの〳〵ある君しや〳〵

一櫻のこすへに鳴鶯を〳〵さすなさわるな〳〵やさしきに〳〵
一何とつゝめどいろには出て〳〵顔に紅葉か〳〵散かゝる〳〵
一戀の道には浮名がたつに〳〵ひらにおきやれの〳〵せいげん坊〳〵
一君は他國へ身は武藏野に〳〵とまる心を〳〵おもひやれ〳〵
一君と我とは川瀬の螢〳〵人につゝめど〳〵もへ出る〳〵
一戀てしんきや身はかげろうの〳〵いつかめぐりて〳〵君にあを〳〵
一色にださねど我身の戀は〳〵袖の泪で〳〵人かしる〳〵
一さいた櫻をなぜ詠めぬぞ〳〵春のしるへに〳〵咲花を〳〵
一樣と我とは二葉の松よ〳〵千代をふるとも〳〵かはらねば〳〵
一向ひとをりやるお若衆樣に〳〵餘り言葉のかけやうかなさに〳〵紙かおちます〳〵鼻紙が〳〵

一行ば極樂歸れば地獄〳〵からたやつしの〳〵吉原よ〳〵
一ながい刀もさし樣か御座る〳〵後高にて〳〵前下り〳〵
一てきと見るならびやくらい切るき〳〵てきじやない物〳〵君じや物〳〵
一てきにわかれて土手さをくれは〳〵なみだがこほれて〳〵うれいつゝ〳〵
一でつちもてこいすり鉢笠を〳〵こゝさかぶさろ〳〵獄門へ〳〵
一やいさ同類いさをすまいか〳〵藤や太郎吉が〳〵やかはねへ〳〵
一やいさおゐんまたすけてたもれ是さおゐんまたすけてたもれ迷やりらば〳〵吉原へ〳〵

さわき歌

一おもふ湊にしつちやがさおもかぢとりかちほんとたかくもおせさゝ〳〵おほさゝ〳〵夫もこつちで合點じやこのきうもひとつしてくれきういわうてさんときう〳〵のきうこの船漕寄て忍びどんふり笠でまかき迄はきたれど見つけられてはどうもな

りませぬ了簡至極もないこんだ
一すい／＼いまごゞは見付よりから尻馬引寄しやんふらりしとうまゝかいと打乘て大門口へぬつと入ちやゝの二階へくわら／＼くわくわら／＼くわつとかけあがりに石州流の扇を抜なかみよ三間はらりつとひかいてあけや歸りのよねたちをひゝんかりくる／＼りつとまねかれけるんな五つ時分にまかき迄きたれは見付られてはどうもなりませぬしててん／＼まご太郎さらばや・おつとせい了簡至極もないこんだ

京はやりふし

一花見車をひきやるはよいかよふたふりして手をとるな

浮世はやりいそべ殿ふし

一きつねくわい／＼こん／＼殺して人をまわすたはこぐさふうを能してぬめてころんでせうはがたはこをめしませうかいや／＼橘屋かよかろか見よか見まいか勘三か芝居見とふてはいりとうてそつく／＼／＼するならはいりやの一ふくしてから入ませうつるてん／＼／＼拍子のりたる太夫かふりまさつめてたいさわりじや

かわりせうかなふし

一破れやくわんにはん茶を入てかけた茶碗にほのない茶筅莚屏風にむきはらゝ枕ふすまふとんにへりなしござてくるか／＼と待夜はこいてびん不男や喉すばりしよかみの／＼よい是々しよかみのそつこでうけたせ三百文

のつちりふぐじるふし

一親はのつちりふぐじる子はのつちりふぐしる／＼親はのつちりふぐじる子はのつちりふぐじる／＼のんほふくじるののほふぐじる／＼とふがよいかすがよいちん／＼はかすてゝんすつたりむけたりはげたり／＼そりやさてなよいしるめされたつてりやさてよい是新町のほうしゆんかりこ者かおもわくしやいさみての長市坊長市おきゝやれおかたもきゝやれ是の娘がきがそれた長市坊なるもならぬも目もとてしれる今のめもとはなる目もとてうしこい

谷中うわきふし

一谷中の削り廻し敎へに任せて引南無妙法蓮華經う

わ〳〵〳〵〳〵う佛になるともくわん〳〵わつ佛このすき申たさ夜ねふつ申のみたくなゝめかむけんのかまさ落る地獄のかまぼこ玉子の肴でのめへせおさへたさわつたおつときた御免せ五左衞門たかへ長左衞門おいかけ中の盃よふたら大事かやあれ君のつけさしのめさおまちや肴をしよ

御門徒與五平ふし

一お與五平かおきみたんだ〳〵おすのこおぎみちり〳〵おかますのおふくらたおらみたゝり〳〵おあぼとこおふんでおぼとこたけべいでおほこちよんおともしびしやおふやらの〳〵お〻おうはおふやらのおそんれはえいおふやらのおそんれはゑい

大坂からすみぶし

一大坂天滿でんつるほうかてんねりとうせんせんかしすみ合近江與茂四郎引か子孫與三郎かひよつとにきりたいた下おりこり〳〵同し〳〵ならはかわしやませ〳〵

吉原しよくりしよふし品々

一とてもかなわぬ浮世としらばとてもゑならぬ戀路としらば輕くおこし戀の道しよくりしよ所々くりしよあいよの

一せうか畑に茗荷を植てことしや子をとるおのこするしよくりしよ所々くりしよあいよの

一あふはわかれと兼てはしれどあふはわかれの初めとしれど忍ふ泪は袖しほるしよくりしよ所々くりしよあいよの

一神や佛に祈るはおきやれ〳〵過去のゐん果は是非もなやしよくりしよ所々くりしよあいよの

一つらき吾妻のはてしに我は〳〵角田川原の流れするしよくりしよ所々くりしよあいよの

一君に思ひは信濃路淺間〳〵胸にたく火はたえやらぬしよくりしよ所々くりしよあひよの

一忍ふ其夜の時雨は嬉し〳〵ぬれてくるまの音もせずしよくりしよ所々くりしよあいよの

一そちとこちとて二世迄そをふといゝてものして起請迄かいて今はきしやうの音もせすしよくりしよくりしよ所々くりしよあいよの

一そなた思へば雨降よはもそなた思へは風吹夜半もたどりくるぞよなかの道しよくりしよ所々くりしよあひよの

右此双紙者、好ニ今樣ヿ人翫レ之畢、且雖ニ我不レ好レ此、至ニ老後ニ而昔懷敷節爲可レ披ニ見之ニ、斯集レ冊訖、

延寶四丙辰八月二日

文政四年辛巳三月廿日寫竟　山口觸山

文政辛巳季春倩山口氏筆

七十三翁　蜀　山　人

蜀山人

筆者觸山又號柳塢と俗稱寛之助

下谷新屋敷住　柳　亭　記

淋敷座之慰終

諸國盆踊唱歌

此さうしは寛文の頃後水尾院諸國に勅して盆踊の唱歌を集め給ひしものなりとて今より二十年ばかりさきに友人の許よりかりえたりしが其刻は何のこともなくて寫しとどめず其のち見まくほりすれども彼友人も亡たれば更にせんすべなかりしが今又不意此寫本を得たり御撰なりといふがたゞいひ傳ふるのみにてその虚實は不知

いたこ出嶋云々の歌はむかし見しさうしには無し後人の書加へしものなるべしそのほかもなほ近くおもはるゝ歌ありよく味ひて新古を分つべし

文政己酉六の朔　　柳亭種彦

諸國盆踊唱歌

○山城二十五

めでたく〵のわかまつさまよえだもさかえてはもしげる

ことし御しやうらくうへさまはんじやうはなのみやこはなほはんじよ（寛永中小町踊り唱歌なり消魂紙料にくはし）

おやこつまとも田を植終ひ神に千歳のたねをまつ

こひとたがい（いカ）ふたさゝはふこえてつまに（はカ）こまつはみ（にカ）なぬれた

ござるその夜はいとひはせねどくるがつもればうきなたつ

わしは小池のこい（鯉）ふな（鮒）なれどなまづをとこはいやでそろ（なまづ男とはぬめり男のことなるべし）

しのぶみちにはあわ（粟）きびうゐなあはずもどればきびわるい

こなたおもへば千里が一里あはずもどれば一里がせんり（關東にても今うたへりおふたその夜は千里か）

いとゑ下され後日はまたぬあすはくゝろ日でひがわるい

こひにこがれてなくせみよりもなかぬほたるが身をこがす

のみやれ大黑うたやれえびす（夷）こゝとにおしやくは福の神

いくよながかれこのとのゝみそたちてわかなつむ

さまはさんやでよひ〵御ざるせめていちやはあけに（さんやは三日月なり）

たかひ山にはかすみがかゝるわしはそなたが（にカ）めがかゝる

しゆすのはかまのひだとるよりもさまのきげんのとりにくさ（さぎ娘のをどり歌に此うたをもちひたり）

ふねは出て行ほかけてはしる茶屋のをなごは出てまねく

まねけど口へよらばこそおもひきれとの風がふく

さまのねすがたけさこそ見たれさつき（五月野）のにさくゆりのはな

かきはなけれどかき（鈎）はなげかけゆすらばおちよ心つ

れなや山もゝ(桃)よ
こなたおもへばのもせも山もやぶもはやしもしらで
さく
いとしとのごのめもとのしほを入てもちたやはなか(鼻紙)
みに
こひといふじがありやこそきたれとば(烏羽)のこひづか(戀塚)あ
きの山
さてもよひこやくろ木賣のむすめこひのおもにかか
つぎつれ
山にさくはなあらしがどく(毒)よわしはきみさま見るが
どく
おはら木やめせ〳〵黑木さゝをめせ
こくもうすくもきこしめせ〳〵

○大和二十六

としたちかへる春なれや木のめもめだつ花もさく
千代の松がえみかさのもりにあさるかすがのみかげ
まつ
さまといとまのすひつけたばこ(烟草)こひがますやゝ火が
わかぬ

梅と櫻とよしのへいたら梅はすいとてもどされた
ひがし山のゆきではないがあれがゆきかやさくらば
な
一に當麻の糸掛さくら奈良の都は八重櫻(糸かけ櫻)
ござれそめたらさまきそめたら道のこぐさ(小草)もかる(枯)ゝ
ほど
よしの川には住かよあゆ(鮎)がわしか胸には戀がすむ
わしはやまがら餌におとされてあかり(明)しやうじ(障子)のう
ちにすむ
ひとに物いみあぶらのしづくおちてひろがるどこま
でも
わかいせなごのぐわんかけるのは神やほとけもをか
しからう
さまにうらみはみしまのこよみいたて(うカ)なにしよにそ
はぬから 嶋曆こゆみとうたふなるべし細字の文を三嶋曆にたとふることいとふるく見えたり
はなのさかりをこなたでしまふたどこをさかりとく
らさやら
ゆうべよんだるはなよめごけさはむけんのかねをつ
く 解しかたき歌なり

はなは一枝をりてはふたりわしはどちらへなびこやら
ひとり山みちものすごござるはやくこゑだせほとゝす
なさけないぞやけさたつきりはかへるすがたを見せもせん
きじのめんとりすゝきのもとでつまをたづねてほろゝうつ
月よかげにもほしたき袖をぬらしたよ又しぼるほど
さまよあれ見よあの雲ゆきをさまとわかれもあのごとく
おもひなほしはないかよさまよとりはふるすへかへらぬか
人めおもはずひとさへいはにやおつてきしよぞやたつじまを
そうてそひなへとのごもあるにそはでおもひのますもあり
おつきさまさへこひぞよめさるこゝでまてとのくもかげに
てふよこてふよなのはにとまれとまりやながたつうきなたつ
はやるかんざしかみかたちよりすぐな心がうつくしい

○河内二十五

きみは八千代にいはふね神のあらぬかぎりはくちもせん
ことし世の中いねかりそめて神ときみとにかさねもち
山家なれどもわがふるさとはしばのいほりもなつかしや
山家〳〵とあしげにいやる色のよいはな山にさく
おやがかたおや御ざらぬゆゑに人もあなつりや身もやせる
人はけなりやさくはなゝれどわれはこかげのしほれぐさ
さまとわしとは山吹そだちはなはさけどもみはのらぬ
不二のすそのゝひともとすゝきいつかほにでゝみだれあふ
ひとがいひますこなたのことをうめやさくらのとり

〳〵に
わしは谷水出るはでたが岩にせかれておちあはぬ
なにをなげくぞ川ばた柳水の出はなをなげくかや
さつき雨ほと戀しのばれていまはあきまのおとしみづ
うめはにほひよさくらははなよひとは心にふりいらぬ
あめのふりでにながたちそめてあめはやめども名はやまぬ
おもしろいぞやいまさくはなはのちのちりばはしらねども
ひとの事かとたちよりきけばきけばさしなはわしがこと
あわのなるとに身はしづむともきみのことならそむくまい
こいの山吹なさけのあやめあきのかくれさしほれぐさ
さまとわしとはうちごみやなぎうけどしづめどもろともに
おもうてこひしてかなはぬ時はいねのはむすびして見やれ
こなたおもふたらこれほどやせたふたへまはりがみへまはる
いちやおつるはよもやすけれど身より大事の名がおしい
いとまぢやといふてさしぐしくれた心とけとのときくじを
あきもあかれもせぬ中なれどいとまやりますおやゆゑに
かねがなるかよしゆもくがなるかねとしゆもくのあひがなる

〇和泉二十一

千とせにあまるしるしとてきみがよをへるはるの松がえ
こなた百までわしや九十九までかみにしらがのはゆるまで
ひよ〳〵となくはひよどりなかぬはいけの友におし鳥つれてゆく
なゝつさがりて田のくさとればのばのつるかやなみだかや

こゑはすれどもすがたは見えぬきみはみやまのきり〳〵す
さまはけなりやほそいとつむぐわしは山家のふしつむぐ
ひとはわるないわが身がわるいやぶれくるまでわがわるい
あさはあさぼし夜はまたよぼしひるはのばたのみづをくむ
かぜがもの云やことづてしよものかぜは諸國を吹きまはる
をつとたがへすむすめはかせぐ妻はせどへ出て米かしぐ
よめをかあいがれよめこそかゝれむすめ他國のひとのよめ
もみじふむしかにくいといへどこいのふみかくふでとなる
たづねてござれこひしくばわしはしのだのもりにすむ
つきようたてややみならよかろまたぬまにきてかどにたつ

さまにもらふたねつけのかゞみわれはこいますおもひます
ごせをねがやれぢさまとばさまとしよりこいとのとりがなく
おちよ〳〵とおとそとしやるさるの木のぼりおちやせまい
おまへついしよかひとこといふかおちやあらしにまたきたか
まつがとのごで子をうめばこそ山にこまつがたへませぬ
よめを〳〵とめをそしりやんなそしるわが子も人のよめ
むかしおもへばうらめしござるなぜにむかしはいまないぞ

○攝津二十二

ことし世がよふてほにほがさいてとのも百姓もうれしかろ
おやはこの世のあぶらのひかりおやがござらにやひかりない
ひとははなりやおやさまふたりわしは入日のおやひ

とり
おやといふ字を繪にかいてなりとはだのまもりとおがみたや
うたのかへしは二度こそかへせ三度かへすはいなものよ
山をとをればいばらがとめるいばらはなしやれ日がくれる
いとしかはひ子にたびさせおやようゐもつらいもたびでしる
心たんきでわしや國をでゝ今はならはぬしよくをする
はんきおなごは心をおきやれどこのいづくでかたろやら
はらのたつときうしにかはほしやみづに心をすゝぎたや
鳥もかよはぬみやまのおくにすめばみやこじやのよとのよ
野でも山でもお主さまよかれおしゆのおかげで世に出る
物をいやるないやくずになるいはでつゝめばくずもない
ひとをつかはゞ川のせを見やれあさいせにこそもがとまる
おれをいふとてとなりをおしやるはまのまつかせうらをきけ
ゆめになりともあはせてたもれゆめにうきなはたちやせまい
さまがわるいかわがあしかろかねたむ心はすがのねか
おもふて御ざるかおもはでくるかおれが心をひいてみるか
おだい所のれんじのまどに月と書たはまことかや
むねでくるしさ火はたくけれどけふりたゝねば人しらぬ
あめのふりでに名がたちそめてあめはやめども名はやまぬ
うきなたゝせてなぜきみそはぬ人がさますかわがいやか

○伊賀九

千代もながかれこのきみの老木の松はさかへゆく

たこくへだてゝ海山こへて見ずこゝろはかわるまい
まつになりたやありまの松にふじにまかれてねとござる
さいたさくらになぜこまつなぐこまがいさめば花がちる
おさななじみにはなれたおりはおきのろかいがおれたよな
ねたらよござるゐを田のなかでねたらはなさくみものりて
つばめものきの住家にかへるきみはなにゆへかへらぬぞ
見れども見へぬおきの船こちふくそらをねやにまつ
ふは〳〵小川に子がすてゝあるひろうてそだてゝ花がさく

〇伊勢五

かけてよいのはいかうにこそでかけてたもるなうすなさけヤアレ、ヤアレ〳〵
つとめすりやとてわごれのようなやぼなしやくすりやあしもする
鳥羽でさくはなヤアレ女郎は大坂しんまちよヤアレヤレ〳〵さけは酒やに茶は茶やにヤアレヤレ〳〵しん巾しましよかかみきりましよかヤアレかみはゑもの身はだいじヤアレヤレ〳〵
駒のやせたに高にをつけて是でおりさかよ鈴鹿の山をしかも月よかやみの夜に

〇志摩五

今朝のうの字は嬉しのうのじきめるまもなきうのかがみ
おもひきらしやれもうなかしやんなさまの戀ぢはうすござる
くもらばくもれはこねやまはれたとてお江戸がみゆるでもなし
かほをけがすはおしろいかうまれながらのやまざくら
つとめしようとも子もりはいやよお主にしかられ子にやせがまれてあひになき名をたてられる

〇尾張六

かやもうりたしむぎかりとりてはおりしたてゝおやも子も

をなごすきなら八丈へゆきやれ八丈むかしはをなごじま

ひさごくづやにかやりをたきてあや丶にしきとゆふすゞみ

さんしよこしよよりからい物はしよたいならぬ世たいはなほからい

心きよきはみづかゞみみやれにごる心はなきものよ

江戸にさく花するがでつぼむことにお江戸ははなざかり

○三河三

さまの心はなぜうすうなるこ丶はやつはしかきつばた

あかぬふるさとふりすて丶たれがためかやきみゆゑに

やなぎのいとにとめられてかへるもならび子（らすヵ）がつなぐ

○遠江三

あくればいで丶くる丶まで身はこになるかはだかむぎ

ゑんしうはま丶つひろいようでせゑいよこにくるが二てうた丶ぬ

きみはこがらすわれはまたおはをからすのはねばたき

○駿河三

ことし世がよふておもふよふにかなふおやもよろこぶ身もたちて

しつておれども人にまたとふて母のさしづでむかいとれ

さまのやうな〱ひやうたん男川へながしてなまづとかたりや

○甲斐三

とのはあまよの月かげなるか心もしらぬ行すへを

たかい山からたにぞこ見ればおまんかわいやぬのさらす

おれがさらすはぬのではないぞあだな男の心をさらす

○伊豆三

こんどござらばもてきてたもれいづのお山のなぎの葉を

ゆふべそが〱ふつたるあめはとらがなみだかかせ

つよし
じつにそふならなまづめはなそおれは五つのゆびをきろ

○相模

大工どのより木びきはにくやおなじ中をばひきわける
くるか〳〵と川しもみずはいぶきよもぎのかげばかり
つまはかやかりかまくら山へわれは子どもにねせり(芹)つむ

○武藏六

みやこまさりのあさくさ上野はなのはる風をとさへる
こゝはどこぞと船頭衆に問へばこゝは梅若角田川
色のよいのは出口の柳とのにしなへてゆら〳〵と
いとしとのごを遠くにをけばからすなくさへ氣にかかる
わかいをなごのとのごのないは笠にしめ緒のない如く
さがみよこ山てるての姫は夫のためとて車ひく

○安房三

くだけても身はかまはぬぞのくならばなせに我をばおとしたぞ
やまな白雲朝日にとけるとけて流れて三島へ落て三島女郎衆のけせう水
そなた命をすてんといふていまはふたみち山ごしに

○上總五

うすにまはれよまはれようすよばんの夜びきにまはりあふ
岩にせかれてはらたつなみもこゝろすぐならなみこさん

○北國

つまはきたぐにまだかへらぬがふみ(文)をやりたしかへる(歸)かり(鴈)
おもふ心のまゝならばねたむ心はなせやまぬ
むかしみしゆめふりすてゝいまはむかしのゆめこひし

○下總三

くもらばくもれはこねやまはれたとてお江戸が見ゆるでもなし 天保二年の頃此うた江戸にておこなはれぬ○見ゆるぢやあるまいしとうたへり
どばし板ならよかろものどんとふんではめをさます

さよのなか山これではないかさまについてやろつきがねを

○常陸三

水戸で名打はせんばの川よはしのめでめにかもがすむサッサヲセ〱

いたこ出しまのすなまこもとのにからせてわれさゝぐサッサヲセ〱

いたこ出てから牛ぼりまではあめもふらぬに袖しぼるサッサヲセ〱

岩井町とはたが名付しぞかねがなければつらいまちサッサヲセ〱

○下野三

十七かむろのこぐちにひとりねてはながかゝるとゆめにみた

人はともあれかくもあれわしはめじかとかたならびよ

しらさぎやふねのへさきにすをかけてなみにゆられてしやんとたつ

○陸奥三 きぼうしのことなり

はしのぎんぼしを五兵衛かとおもうてすでにことばをかきやうとしたがさんしやうくてこせうくて見ればいとこどしやらにてからいさんせうのせひ

秋風がふけば秋風がふけばサまめのはもかれるいのまめのはもかれるサかれたが大事かなんとしよのせひ

あのむらちどりつらにくやサわれをつれてはなぜゆかぬつれて行たら殿子にあふてサわしが心のそこうちたゝき見すてられたら島國へさんしよのせひ

○出羽三

はしのらんかんにこしをかけ沖をはるかにながむれば沖のかもめがみつゝれてみつゝれてむつましくよられながらもきみ戀しさんしよのせひ

あくればいでゝくるゝまでしんくするのはたがためなるやすゑをとげんとなもひつめ身はこになるとかまはぬにつれないことはいかゞせんさんしよのせひ

浪もしづかにみよをさまりて臼ひきうたはよもつきじ

○若狭四

松より巣だつ つるの 子の千とせは きみと おやのか

げ
はしるふねをもまねけはいそへよるは心のまことなり
よそにおもひしきのふのあやめけふはわが家のつまとなる
むかし竹馬老てはすへのつへとなりたるおやじさま（西行の歌に似たり）

○越前五

山かげやいがらし川のながれにはみやまのおくのきよみづ
月の夜にさへおくりをもろうて見すてられたよやみの夜に
おもふて來たのにみづかけられてわしがおもひをみづにしやる
相生（ひつ也）みよゝりかいじやうみやれこびんなでふよりひ（めし）つなでふ
しんき／＼が三つ四つござるかゝるしんきにかゝらぬしんきひとつ枕に寢ないしんき

○加賀五

をさまる代のうれしさはいなほさかへる秋のみづ
さし（里）のあたゝまりでむしやれてくらしやわれはみ山の蟬のころ
けふかあすかと朝日をまつ（待）につひにくもり（曇）て日をくらす
さまはなが（流）れの瓢箪おとこ（男）ぬらりくらりはようもよも
みやま六月ぬの（布）子をきるはかね（金）がないからひゆる（冷）やら

○能登四

おや子ぐさ（親子草）（きいす歟）とはとしことに古葉ゆづりのわかばかや
ねさゝ野にすむひばりは山にうづらのあはばにつまおもひ
のみやれうたやれさきのよはやみよ今は半のはなざかり
沖の戸中の三本竹はうまず竹やら子かさかぬ

○越中四

よろづ世をへる音なしのたきのながれはよもつきじ
あゆはせにつくとりは木にとまる人はなさけのした

にすむ
しんでまたくるしやかの身がほしやみしよやつらあてに
かふてくりやれよねばるの（びんつけのこと）を一兩ごまのあぶらでけがふさん

○越後五

老せぬ千代の松さかやたに（谷）間のいはにかめあそぶ
わしがおもふと戸板にまめぢやなまじいはぬがましぢやもの
千里はしるやうなとら（虎）の子がほしややるぞ此文江戸までも
いとしとのごのしんがい田がわれたゆふだちにはかにこめいこと（こいと云こと也）
月よがらすはまよふてもなくがわしがしんじつ思ふでもなし

○佐渡五

さど丶ゑちごはすぢむかひはしをかけたや船ばしを
さまはつりざほわしやいけのふなつられながらもおもしろい

いとしとのごにあいたいことは川のまなご（まさご也）でかぎりない
きじのめん鳥おく山さしてまつのしんばのつよはみ（ゑはみの事也）に（つよばみは露食みなりと）
いけの子ぶなに心をくれてたちやかねたりしらさぎに

○丹波五

いねの葉むすびおもふことかなふすゑはつるかめ五葉のまつ
わしがことかや志賀からさきの一つまつとはたよりなや
たにの小やぶにすゞめはとまるとめてとまらぬいろのみち
あめはふれ〳〵ゆきふる間しのぶほそみち竹たはむ
うめやさくらは七重や八重もなせにのざくは一重さく

○丹後六

わしとおまへは小やぶの小うめなるもおつるも人しらぬ
いはのしみづはそこからわくがさまの心もそこから

か
月はひがしにすはるはにしにいとしとのごはまんなかに
人は口なりや兩手にはなをわしもかた手に花ほしや
きのふやけふまでみづしの女今は二ケ處のくらのぬし
たんば田處よい米どころむすめやりたやむこほしや

○但馬七

おやは子といふてたづねもするがおやをたづぬる子はまれな
ひさごくずやにかやりをたきてあや丶にしきとゆふすゞみ（尾張の部此歌あり）
しやんしこ丶ろふんべつ處おやのいけんもき丶どころ
丹波與作こうた　よさくたんばの馬おひなれど今はお江戸のかたなさし（延寶八年ハタン人漂着記）
よさくおもへばてる日もくもるせきのこまんがなみだのあめか
あのはふるとも身はぬりやせまいさまのなさけをかさにきて
みやこ〱とわしつれてきてこ丶がみやこかやまなかを

○因幡六

つきせぬしるし岩にはなみねの小まつのしげりあふ
あさまよりのこんからす（小鳥）かつゆにしよほろぬれたようなゆら〱となへをとるつゆにぬれたよな
けさきておなれとがかたびらはなよなすそもなわずにきるかたびらはなよな
ひるま米つく八十二からうすでなよよめもしうとめもつきやれよ十二からうすてなよな
お主にやいとまとりあの山こえてみやこさりのおやざとへ
ごせとちぎりていま丶たあきる釘をうちたやのちのつま

○伯耆五

心かよはすしやくしのさきでいはずかたらずめでしらす
かねがゐくわうの太平（オホヘイ）がかほ（顔）もきのふかぎりのさんづ川

ばくちうたしやる大酒のみやるわしがぬのはたむだにして
ひるまはでかいたが何のをけのみでなよないそばたのわかめよしそれがおしるのみでなよな
そふとめのまたぐらをはとがにらんだとなにらんだもどりかやまた豆をはさんでとなよな

○出雲四

これのいしうすはふかね(ひかぬなり)どもまはるかせのくるまならかをよかろ
ひるまもちのござるやうあかいかたぶら(かたびら也べら也)てぶらりしやらりとあかいかたぶらでち(ひるまもち考べし)
さんまれこれのよめごさまどこなそだちのさんまれさまぞいねのうらぼののきそだち
下家きたしまにやアやきもちがはやるなかにみそいれて ポッポ(ポッ ボ) ほや〳〵と

○石見三

京の大佛でほばしらもたせくぢら(鯨)つりたい五島うらで
閻の地藏にふり袖きせてならの大佛むこにとろ(びんつけのこと)
これの親方はんじやうをなさる奥は琴の音中の間は皷かどはものもが絶ませぬ

○隱岐三

脊なをたゝかれしんこほどはれたこれもりんきのかたまりか
いなしよ〳〵とおもふたうちに太郎が生れていなされぬ
われは奥山のさゝ小ざゝふぢにまかれてねとござる

○播磨六

いけだいたみの上もろはくもせにがなければ見てとほる
いつかかうのいけのこめふみしまいはりまなだをばうたでやろ
今の若衆はむぎわらたすき一夜かけてはかけすてに
かみをしまだにいはうよりおかた心しまだにもちなされ
ござる〳〵とうき名をたてゝさまはまつかせおとばかり
おもふとのごとうすひきすればうすは手ぐるま中でまはる

○美作五

十七八はたいとのわらでうたねどこしがしなやかに
（大唐米の藁か又大道歟）
まへ田のいねのはもちのよさはこがねのつゆをまきあげる
またとゆくまい湯原のゆへは三坂三里がうぃほどに
近江のかさはなりがようてきよてしめをがながうてきよござるソリヤイノウ（○糸竹集にあるあふみ歌と大同小異）
とんとゝなるは大竹さゝらならぬは七八こまさゝらソリヤイノウ

○備前五

千代に八千代に御代をさまりて浪も静に四ッの海
しあく大工はちよ〳〵まりちよそれが木ずゑにとまりて女郎まねく
ごいや赤坂よし田がなけりやなんのよしみに江戸がよい（天和三年稲久が江戸くだりに五井とある歟）
きみにあふとて朝水くめばにごる心かまたあはぬ
備前岡山新太郎さまの江戸へござれば雨がふるあめぢやござらぬ十七八のこひの涙が雨となる

○備中五

つきせぬしるし岩にはなみねの小まつのしげりあふ
こなたおもへばてる日がくもるさえた月よがやみとなる
こちのだんなどのはからかさでだちせけんひろかりうちすぼり
こなたおせどにひづるとたでとなんのひづるめがたで〳〵と
こちのだんなどのくさぎのそだちうはべうつくしそこにがい

○備後五

さかへ久しき松がえの岩のきしねになみよする
江戸へ〳〵と木くさもなびく江戸にははなさくみもなりて
にくい〳〵はうらのうらじつのにくいはおもひのあまり
たとへ火の中水のそこおよばぬ中に住もきみ
心たんきな男を持ばむねにはやがねつくごとく

○安藝二

みやと廣島に海がなかよかろいとしとのごをかよは

せはすまいわしがちよこちよこかよひましよ
うずかまいます廣島の沖にうずぢやごしせんゑくぼでごじすおまへとわしがなかぢやもの

○周防三

こちふきすさむあしたにはさまのなみだかあめのあし
ひとよな〳〵この子が出きてしん茶々壺でこちやしらぬシヨンカヘ
よし田通れば二階からまねくしかもかの子のふりそでかシヨンカヘ
さけはのまねど酒屋のかどであしがしどろであゆまれぬシヨンカヘ

○長門三

にしふく風の夕くれにおもひいでたよさとごゝろ
こいとゆたとてゆかれるみちかみちは四十より夜はいちや
こいじやせきやるなうき世はくるま命ながけりやめぐりあふ

○紀伊七

いく千代久し松がえのきみはさかへるわかみどり
つきになりたやさまがすむねやのふしどを照したや
たづねてござれ戀しくば三輪のふたもとともつき（す歟）ん
おもふとのごが野べござるなり涼しかぜふけあめふるな
山がやけるがたゝぬかきじよこれがたゝりよか子をおいて
人にいはりよと云さがりよとわしが身にさへくもりがなか
人のくちには戸がたてられぬながれ川たきせきならぬ

○淡路四

舟がつく〳〵百二十七そうさまが御ざるかあの中に
たんば雪國つもらぬさきにつれておでやれうすゆきに
しんくしまだにけさゆふたかみをさまがみだしやるせひもない
花は折たしこずゑは高しながめくらすや木のもとに

○阿波五

あたけ□しく（戀しく歟）さまつた山かよひつたのたていしほしつきよ

せまいひろいとわしがねたへやをいまはよそめで見てとほる

雨がふろとておきからくもるむすめさろとてむこがこぬ

とりもはら〳〵よもほの〳〵とかねもなりますてら〳〵に

かねをたゝいてほとけにならば江戸のはやがねみるほどに

○讃岐六

さまよ〳〵とこがれて來たにさまはおしかよ物いはぬ

志渡はよいまち西北をうけて八島おろしはそよ〳〵と

はなのゑじまはからみがあらばたぐりよしよものみのはらへ

人の娘と新造の船は人が見たがるのりたがる

八島山には大谷小たになぜにこなたに子かないぞ

みすじふろが谷あさゝむござるこたつやりましよ炭そへて

寛永作竹齋物語〔〕さかの浦濱にや二子山とてあるになぜにそなたにや子がないぞ

○伊豫五

つきはかさなるはらな子はふとるなまきいかだで氣がうかぬ

十九はたちでつまないならばひとりまるねがさびしかろ

わしははまゝつねいろとすればいそのこなみがゆりおこす

おやも兄弟もなき身のはてはともになさけのかけところ

やみ（闇）のまる木ばしさゝとならわたろおちてながれてさきのよともに

○土佐七

田野々やまいち茅は帆はひかぬおさや手おりのやつもめん

おやこ（に歟）かくしておはぐろつけてよそにふる雪はをかくす（歯葉）

他國

ゆつら云はら女房にせうとつれてたこくをしよとゆつら

さまとわしとはやけのヽかづらつるはきれてもねはきれぬ

こいといふのに遠いといやるなんの四十余り四百里

もこヽろちかくぞナアレカシ

こいしゆかしとさまゆへばかりあはぬむかしにナアレカシ

ほしやおしやとおもふはなんぞとかくきみゆゑナアレカシ

○筑前五

こ□の名物はかたときこえおびにしてさへまはりよい

生れ來りしいにしへとへばきみにちぎれとゆめに見た

ごけをたてヽの身たしなみ日かげにさける花ずきる

茶ものがたりに人ことというておのがはぢをばのみかくす

こまの手づなをしりながらさまにひかれて身をよごす

○筑後五

高みにのこる月かげをやどせしそではかはるまい

いかでわすれん逢なれてごせのちぎりもあきの山

うすはまはさでしなばかつくるしなでまはろか此うすが

まつがつらいかわかれがういかまつはたのしみわかれつらい

みめがよいとて心が人か大坂で子（木偶）のぼうでつらばかり

○豐前三

わしとおまへは諸はく手樽中のよいのは人しらぬ

つれていかんせいづくへなりとたとへしほやの火をたくとてもおまへゆへならくるしない

さても見事なみたらいつヽじばんにつぼみてよなかにひらくよあけがたにはちり〳〵と

○豐後五

ごせをねがふはわか身ぢやないぞさまをうかめてともしたい

金の山ぶきかぜそよぐ□（けカ）んな色はんな色はんふく茶

にすんふく茶ちよんきりちよんかいな
さまはちはぶみねづみにひかれおれがおもひはある
になる穴なる歟
くんくるべいとまつよはなくてまたぬよはきてちよ
んきりちよんかいな
つくばくわんおんにくちひげかはえてサはへたらだ
いじかなんとせうちよんきりちよんかいな

○肥前五

げんが弟はヤアレすなぢのごんぼねそこほらすてあ
らはするよゲンコヾ
やぶのなかのきち〳〵ぼうずはなじよとなくぞおや
がないか子がないかおやも子もござるけれどもおば
ごのかたへかたびら一枚かりにいた
おまんまたぐらにつりがねだうできてけふもくれめ
が六つのかねサヨイヤナア
させばおさへるおさへばのめずのめば其身のあだと
なるサヨイヤアナ
平戸小せどから船が三ぞう見ゆる丸にやの字のほが
見ゆる

○肥後三

つまよないけのどんがめならばくんくるべいッポン
ボヘ
とものむかいのせんする山は地からはえたかうきし
まがエ、エ
よいに見そめたしらはのむすめようもなりそなうり
のつるエ、エ

○日向三

月はいみじきやみこそよけれしのぶすがたのかほ見
えず
水にかはずのなく聲きけばすぎしむかしがおもはる
ヽ
おもひこがれて飛ほたるゆべ〳〵に身をこがす

○大隅二

おもひだせとはわするヽからよおもひ出さずにわす
れまい
いくよあかしのうらこぐ船もうかれこがれていそへ
よる

○薩摩七

やみよなれどもしのばゞしのべきやらのかをりをし
るべにて

ちよのまへがみおろさばおろせわしもとめましよ振袖を

洲山おかめ女はす山の狐おふりしりふり人をふる

ちり行花はねにかへるふたゝびはながさくじやない

志賀からさきの名はよけれ一つまつとはきくさへつらい

しまがしまならよがよであらばなんの地かたに身はもとそヨイコノイカニなんの地かたに身はもとそ

夫の留守に人よせゝぬは扨も見あげた花よめ子

壹岐三

みねの小まつにひなづるつがひたにのながれにかめあそぶ

ござる／＼とうき名をたてゝさまは松風をとばかりしまふた／＼團七どんのさらに小麦六口ばかりしまふたうらのおかめ女とざれあうて

對馬三

いらぬきせるのらうがながうてさまとねたよのみじかさよ

野にも山にも子なきはおきやれまん（万）のくら（藏）より子は寶

いざやわかいしう（若衆）ござるまいかよひるきつねなんのばかさりよとんとろばけよ

右の唱歌は近江美濃飛驛信濃上野の五國なし何の故を知らず且傍書細注とも故柳亭種彦翁の手寫にかゝる一字も增損せず

校者識

（此校者は我自刊本の校訂者なりし）

諸國盆踊唱歌終

見性却清醇
享齡擬壯椿
春温渾滿腔
空眼轉洪鈞
匀翰譜歌玅
少戲綺語神
甲休門榜爍
樂隱特相親

右題近松
子安翁像

（難波土産一の見かへし）

淨瑠璃文句評註難波土產

序

おしてるや難波のみつの賑ひ余國にこえ港に出入百千の船ャンラ目出度やの聲絶ず就中南江の歌舞伎淨瑠璃芝居の軒をならべて繁昌の時を得たり僕もとし比淨留りの作文に種々の事共取あつめたるが面白さに數本一覽をなすに唐倭(からやまと)の引事聞えらぬ俗の諺など時々抄せしを懷にしひそかに博識の隱士に便(たより)てこれを問に其解こと流水の如くなりしをこと〴〵く筆記し見ればおのづから善をすゝめ惡をこらすの一助共成けるまゝ頓て淸書し篋に藏んとするに書林某來て是を梓に壽ふせば四方好事の本望ならんといふにぞ吝べきにもあらねば吾子が心に任せんと直に難波みやげを題として茅舍の窓下に筆をおきぬ

元文三年戊午のほし　　　百済の門半音

浄瑠璃評注巻之一

發端

抑浄瑠璃といへる來由を尋るにむかし豊臣秀吉公の御臺政所の侍女に小野於通といふ人あり才智人にこえ手跡も普通に勝れたりければ時の人殊におもくもてはやしける一日御臺所於通を召て仰けるはいにしへの清少納言紫式部などいへるは源氏枕双紙等の文を作りて其名を千歳に殘しぬ汝が才をして小女にひとしく朽なん事いと口をしきわざなり何にてもあれ作物がたりして後世にとゞむへきよし命ありければ小通かしこまりて退き私に思ひけるはいにしへの才女の仕わざにならはん事思ひもふけさる事なり去かりといへ共主命もだしがたしとて閑窓に閉こもりて長生殿十二段といへる物語を書て參らせける其趣ひとへに矢矧の浄瑠璃姫の事を主とし藥師の十二神に表して十二段として書たるにより時の人此草紙を浄瑠璃本とぞ申けること〻に岩橋撿挍といへる有てこの双紙に節を付け夫よりして以來好事の人間出て浄るりの作文をし音聲すぐれし人に曲調して豊なる世のもてあそびとす又人形にあはする事は往じ慶長の比六字南無右衛門といふ女太夫四條河原に芝居を立興行せしに初る共いひ又同し比西の宮の傀儡師みやこに出てかなでしが濫觴也共いひ傳へり近世にいたりては或は座敷浄るりあるは芝居浄るりなんど專らもてはやす事には成ぬ然ども其文勢筆力なく何となく描く感情もなかりければ只下々のもてはやすのみにして中人以上は曾て其本とて取あげみる事もなかりしに元祿年間に近松氏出て始て新作の浄るりを作り出し竹本氏が妙音にうつさせたりければ聞人感情を催しひそかにその本をもとめて其作文をみるに文躰拙からず儒佛神によく渡り譬を取り故事を引にも人の耳にするどからず貴賤のさかひ都鄙のわかちそれそれの品位につきてさこそあるらめとおもはせ道行等のつづけがらもいせ源氏の俤をうつして去かも俗間の流言をおかしくつらねければ自然と貴人高位も御手にふれさせ賞し翫し給ひしより打續て數多の浄るりを作り出すに佳言妙句擧てかぞへかたし終にその名を天下にあらはし彼浄るり本を見るに恥なく成

て専ら世上に流行する事數十年に及べり是偏に近松氏が力なり然して近松死したれ共猶餘光うせず其門に遊ぶの人相續て作文をなす夫より數多の作者出來りて今に於て燦然たり皆是近松がながれを汲たふが故に其おもかげ殘て甘味ある事すくなからず然はあれど元來近松が器なければ古語の取あやまり古實のたがひまゝ有て氣の毒ながら機轉發明がおとらぬ所も有て近年の淨るりにも世人の耳目を悅しめ或は希有の一趣向を出して大に當りを取事是また達人といはんに强て難有べからず

往年某近松が許にとむらひける比近松云けるは惣して淨るりは人形にかゝるを第一とすれば外の草紙と違ひて文句みな働を肝要とする活物なり殊に歌舞伎の生身の人の藝と芝居の軒をならべてなすわざなるに正根なき木偶にさまざまの情をもたせて見物の感をとらんとする事なれば大形にては妙作といふに至りがたし某わかき時大内の草紙を見侍る中に節會の折ふし雪いたうふりつもりけるに衞士にあふせて橘の雪はらはせられければ傍なる松の枝もたはゝなるがうらめしげにはね返りてとかけり是心なき草木を開眼したる筆勢也その故は橘の雪をはらはせらるゝを松がうらやみておのれと枝をはねかへしてたはゝなる雪を刎おとして恨たるけしきさながら活て働く心地ならずや是を手本として我淨るりの精神をいるる事を悟れりされば地文句せりふ事はいふに及ばす道行なんどの風景をのぶる文句も情をこむるを肝要とせざればかならず感心のうすきもの也詩人の興象といへるも同事にてたとへは松島宮島の絶景を詩に賦しても打詠て賞するの情をもたずしてはいたづらに畫ける美女を見る如くならんこの故に文句は情をもとゝすと心得べし○文句にてには多ければ何となく賤しきもの也然るに無功なる作者は文句をかならず和歌或は誹諧などのごとく心得て五字七字等の字くばりを合さんとする故おのつと無用のてには多くなる也たとへば年もゆかぬ娘をどいふへきを年はもゆかぬ娘をばといふごとくになる事字わりにかゝはるよりおこりて自然と詞づらいやしく聞ゆされば大やうは文句の長短を揃て書べき事なれ共淨るりはもと音曲なれば語る處の長短は節にあり然るを作者より字くばりをきつしりと詰過ればかへつて口にかゝ

らぬ事有物也この故に我作には此かゝはりなき故手にはおのづからすくなし○昔の淨るりは今の祭文同然にて花も實もなきもの成しを集出て加賀掾より筑後掾へうつりて作文せしより文句に心を用る事昔にかはりて一等高くたとへば公家武家より以下みなそれ〳〵の格式をわかち威儀の別よりして詞遣ひ迄其うつりを專一とす此ゆへに同じ武家也といへ共或は大名或は家老その外祿の高下に付てその程々の格をもつて差別をなす是もよむ人のそれ〳〵の情によくうつらん事を肝要とする故也○淨るりの文句みな實事を有のまゝにうつす内に又藝になりて實事になき事あり近くは女形の口上おほく實の女の口上には得いはぬ事多し是等は又藝といふものにて實の女の口より得いはぬ事を打出していふゆへ其實情があらはるゝ也此類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は女の底意なんどがあらはれずして却て慰にならぬ故也さるによつて藝といふ所へ氣を付ずして見る時は女に不相應なるけうとき詞など多しとそしるべし然れ共この類は藝也とみるべし此外敵役の余りにおく病なる躰やどうけ樣のおかしみを取る所實事の外藝に見なすべき所おほしこのゆへに是を見る人其心えやく有べき事也○淨るりは憂が肝要也とて多くあはれ也なんといふ文句を書又は語るにもぶんやぶし樣のごとくに泣が如くかたる事我作のいきかたにはなき事也某が憂はみな義理を專らとす藝のりくぎが義理につまりてあはれなれば節も文句もきつとしたる程いよ〳〵あはれなるもの也この故にあはれをあはれ也といふ時は含蓄の意なふしてけつく其情うすくあはれ也といはずしてひとりあはれなるが肝要也たとへば松島なんどの風景にてもアヽよき景かなと譽たる時は一口にて其景象が皆いひ盡されて何の詮なし其景をほめんとおもはゞ其景のもやう共をよそながら數々云立ればよき景といはずしてその景のおもしろさがおのづから心ゆるゝ事也此類萬事にわたる事なるべし○ある人の云今時の人はよく〳〵理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ世の中むかし語りにある事に當世請とらぬ事多しさればこそ歌舞伎の役者なども兎角その所作が實事に似るを上手とす立役の家老職は本の家老に似せ大名は大名に似るをもつて第一とす昔のやうなる子供だましのあじやらけ

たる事は取らず、近松答云此論尤のもやうなれ共藝といふ物の眞實のいきかたをゑらぬ說也藝といふものは實と虛との皮膜の間にあるもの也成程今の世實事によくうつすをこのむ故家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ共さらばとて眞の大名の家老などが立役のごとく顏に紅脂白粉をぬる事ありや又眞の家老は顏をかざらぬとて立役がむゑや〳〵と髭は生なりあたまは剝なりに舞臺へ出て藝をせば慰になるべきや皮膜の間といふが此也虛にして虛にあらず實にして實にあらずこの間に慰が有たもの也是に付て去る御所方の女中一人の戀男ありてたがひに情をあつくかよはしけるが女中は金殿の奥ふかく居給ひて男は奥方へ參る事もかなはねばたゞ朝廷なんどにて御簾のひまより見給ふもたまさかなれば余りにあこがれたまひて其男のかたちを木像にきざませ面體なんども常の人形にかはりて其男に毫ほどもちがはさず色艶のさいしきはいふに及ばず毛のあな迄をうつさせ耳鼻の穴も口の內齒の數迄寸分もたがへず作り立させたり誠に其男を傍に置て是を作りたる故その男と此人形とは神のあるとなきとの違のみ成しかかの女中是を近付て見給へばさりとは生身を直にうつしては興のさめてほろぎたなくこはげの立もの也さしもの女中の戀もさめて傍に置給ふもうるさくやがて捨られたりとかや是を思へば生身の通りをすぐにうつさばたとひ楊貴妃なり共あいそのつきる所あるべしそれ故に畵そらごとゝて其像をゑがくにも又木にきざむにも正眞の形を似する內に又大まかなる所あるが結句人の愛する種とはなる也趣向も此ごとく本の事に似る內に又大まかなる所あるが結句藝になりて人の心のなぐさみとなる文句のせりふなども此こゝろ入れにて見るべき事おほし

淨瑠理評注卷之一

目錄

淨瑠理評注目錄終

淨瑠理評注卷之一

外題
○御所櫻堀川夜討

此淨るりは九郎判官どの京ほり川の御所に御座有し時鎌倉の賴朝卿より土佐坊を討手にのぼされ堀川の舘にて夜うちの始終をあみ立たる故かく外題する也げだい當世の氣に應じ尤面白し

序
○恩は春のごとく威は虎のごとく訓(おしへ)は父のごとく愛は母のごとし李嚴をうたひし吏民の詞

李嚴は三國の時の郡守也民をよく治し故民の吏(郡守の下司なるべし)や民共が其徳をほめてうたひし詞也民をめぐむは春の陽氣の草木をうるほすがごとく下を畏(おど)すに威のある事は虎のはげしきがごとく民を敎るに道の明かなる事は父が子を敎るがごとく民をあはれみて愛する事は母が子をいつくしむがごとしと也こゝは平家ほろび源氏の世となりて賴朝義經の民を治め給ふになぞらへいふ也

義(ぎ)形(けい)せり

儀刑と書べし儀(のり)とし刑(のつとる)といふ事にて君の徳が天下の手本となりて四海がのつとるといふ事なり

評、右の序文近松の筆法とは大にたがひ(御所櫻は文耕堂の作也)句作りの格何となくいやしく理もまたとくと本意には妥貼(つか)ず去かしこれらは兩體の文づらの巧拙の論なれば何許(どこ)を指てその好惡をあらはしがたし但し漢和の文共を多くみたる人の目にはおのづからみゆる事也是ぞ古人のいへる知人ぞ知の場なるべし

兄によろしく弟に宜(よろしふ)して國民をおしゆといふ

大學に詩經を引て國をおさむるの本は家の內にて兄弟中よくするが肝要なりとおしへたるを引なりよりともよしつね兄弟にかけていふ

吳越とへだゝり

春秋戰國の間吳の國と越の國と不和にしてたゝかひにおよびし故中のあしくへだゝるをいふ是に付て世俗あるひは間のはるかにへだゝる事を吳越になぞらへ思ふは誤り也吳と越は遙ならず唐詩に到レ江吳地盡隔レ岸越山多といへるも吳越の界たゞ江をへだてたるのみなる事知るべし但し間のへだたるは胡越なり唐人も間の遠くへだゝる事を胡越

のごとしと書簡に書る事あり

摩利支天
軍をまもる天部の本尊なり

その咎をあらためるに
あらためるの語淺まし〻是は京大坂などの側陋の匹夫などが調るといふ事と改るといふ事とを聞はつりて兩語を一つにして改らためるなんどいふそれを直に取たるならん殿中にてかぢはらが口上には似合ず

甲がしやり
大友眞鳥の抄に出せり

梵天帝釋
佛法にいふ卅三天の司にて天帝也

閻魔法王
是も佛法にいふゑんまわう也閻魔こ〻には雙王といふ但し苦と樂とをならび受給ふゆへ也と名義集にみへたり

五道の冥官
地藏十王經に出たりめいどの官人なり誓文に請ずる所の本尊この外に十二神あり

泰山府君
是も誓ひにもちゆる神也陰陽者流のたつとぶ神にて史記にもみへたり

阿鼻地獄
阿鼻こ〻には無間といふ阿貢の間あばらくも間なき故に名づくといへり

龍の腮の珠
此事列子に出たり河上翁といふもの〻子川に沒て千金の珠を得たり河上翁がいはく石を取て是を鍛かならず名珠ならん惣じて珠といふものは驪龍の腮の下にあり汝是を取えしは龍の睡たる時に出あひしならんさなくば汝が身を粉にせられんものと嘆じけるとなり

衆星北に拱して
天の衆の星は四方にめぐりて北斗は北にありて動ぬゆへ衆星がめぐりては北の方の北斗に拱を北にたんだくすといふ也論語にも此たとへ見えたり

靜はたへかねコレのふと立よるを駿河がへだて〻どこへ〱もう泣ごとはかなはぬ我君に見放されて身のたてらいがならずば

身のたてらいとは何の詞ぞや身が立ずばとか身を立るたつきがなくばとか身を立るあだてがなくばなんどいはゞか程には鄙からじ

流殺の法は黄帝の御代に始て

流罪の事書經の舜典に出たる四罪がたしかなる書にみへし始とすべし書は尚書よりふるきはなき事漢以來の諸儒の說也こゝに小さがしく黄帝に始るといひしは後世の雜書の端にさだかならぬ事の記せるをみていふなるべし今の作者は誰もすべき事也と近年世上に評判するも其理ある事也みな此類の誹諧學文なる故なるべし

施は財と法と無畏の三つ

在家より沙門へ金銀などをほどこすを財施といひ出家より俗へ法をほとこすを法施といふ又眞實の妙道を得て畏る事なき德をほどこすを無畏をほどこすといふ此事つぶさに起信論に出たり

剛臆をみて

剛はつよき也臆は臆病なる也ゑかし此語は日本の軍書詞にて漢文には通せぬ詞なり

四民

士農工商也士は官につかへる人をいひ農は百姓をいひ工は諸職人をいひ商は諸商人をいふ此四つにはづれたるを遊民といふなり

許、此間の追はきの段理句義文句共はなはだ面白し針右衞門はおかしくばくち打は小きみよく親孝行の貧者は思ひの外にあたゝまりてよそのみる目をこゝろようすさりとは作意也殊に伊勢ノ三郎が我身につまされての感心尤人情のいやといはれぬ所にて又むかしも是に似たる例有て賢者の論にも合へりむかし漢の代に吳祐といへる郡守の掾に孫性といふ者ありて其父まづしく寒氣をふせぎかねし故孫性がわたくしにて支配の在々へ公用金なりとて民の金を出させ衣服をこしらへて父にさづけけるに其父いたりて廉直なる者にて汝いかなる術をもつて此衣服を得たるぞと問ける故有のまゝに答ければその父おゝきにいかり官につかへる身としてかゝる私の非道天道のおそれあり急き郡守へ參りて此趣を白狀しその罪を乞候へといゝ付ヶけるにぞ孝心ふかき余り父の下知にゑたがひ郡守に其旨を白狀しければ郡主吳祐かへつて是を感じ汝

は父をいつくしむ故をもつて民のたからをかすめ汚たる名を取れり勿論民をかすめしは汝が過なりといへ共又父のためにする所もだしがたし是すなはち孔子のの給ふ過を見て仁を知るといふもの也とて天子へ奏してその衣服をゆるしあたへけると也今伊勢ノ三郎がみつから刧盜をなすもおやの故なれば誰か不義也とにくむべきや尤見物のひいきをうながすものなるべし

耆婆や華陀

ぎばは天竺の人にて釋尊時代の名醫なりくわだはもろこし三國時代の名醫にて蜀の關羽を療治せし人なり

評、此淨るりは二段目一段丸ぐち無疵の上々吉扱よくは作意を煉たるもの也しかも瑣細な所に氣のついて隅から隅迄みちんのぬけめもないとは此事是を思へば三段目はよつぽどまだるい事がち也惣じていせの三郎に付たる趣向の筋一から十迄尤ずくめ玄かも骨つぎの段には余程おかしみ有て氣の盡をさんじ其跡土佐と出合てのせりふ老母の立あひ何から何までよく〳〵揃ふたりとみゆ但し場が三の玄ゆかうとならぬが殘念也二段めには打てつけたる極上々の作意なるべし

ある人難じて云伊勢ノ三郎は道を守るひんぬきに仕立たる浪人のならひとは云ながら刧盜をさせたる所が少しいさぎよからずもしも學者などがみて評せばすこし云ぶん有べきか、答學文の理屈と世間の人情とは少しづゝ違のあるもの也こゝをよくのみこまねば右のごとき難ある事也殊に世上の人ごゝろには判官ひいきといふ僻ありておゝだゝいが實方にて手柄なんどある人の事なれば疵有てもよく云なし又よく思ひこむ所が藝にもちこむ骨髓なりされば歌舞伎淨るり共義理を本とする事なれ共その義理に右のかけ引ある事也それを一向に理くつぜめにして評判すれば藝の本意を取失ふ事たとへば西と東との違ひができるもの也それに付ちか比京都のさる學者を門弟がふるまいて芝居をみせければ此學者都に住ながらよく〳〵無風雅に偏屈なる人にや當代の役者の名も顏もみた事なくみごと其日は一日見物せられしが歸りて後門弟共問けるはかの芝居の立役の內いづれが上手也と思し

めすぞといふに答てかの若殿に成し惡人形が数ぶり甚だおもしろかりし是が上手ならんといはれし故それは嵐三右衞門とて實形にて候かの繼母と一つになりて若殿の遊女ぐるひを云立にして家を追出さんとたくみし家老が惡人がたにて候といゝければいや〳〵それは理にちがひし評判也あの若殿がごとく淫酒におぼれて放埒至極のおこなひをなさば家の滅亡ゆへそこをとがめて追出さんと謀るまゝはゝや家老は至極の尤也といはれしとかや芝居を此やうにみられてはいかなゑばゐも仕廻成べし

風の勢ひは大海の波をうごかせ共井の内の水をうごかす事あたはず

語の心はよく聞えたり但しこの語は正しき古人の成語とはみへずそれゆへ經子史集の四部には大かたみへぬ語ならんと思へは穿鑿に及ばず此國にて出來たる管蠡集といふ書に日月は大地をてらせ共海底をてらさずとある下に此語に似たる事あり然れ共たしかなる語にはあらず

親々矛楯の折からに

こゝのむゑゆんといふ事世俗は中のたがう事共思ひ又は相違する事共おもへりみな誤り也是は故事にて自身の口上か自身にくいちがふ事にかぎりていふ詞也むかし一人の士矛と楯とを賣ものあり矛を賣らんとては此ほこをもつて突時はいかなる楯もつきとをさずといふ事なしといひ又楯を賣んとては此たてにてうくる時はいかなる矛をも請とめすといふ事なしといふある人難じて若又なんぢが矛にて突かけ汝がたてにて請とめはいかゞととがめければ此者何共こたへんやうなく自身の詞の相違せるを恥たり是より自言の相違せるを矛楯とはいふ也作者その義をゑらす是たゞ今やう作者の斗筲の輩文盲の罪也

伊勢の二字を偏と傍に引わくれば人平に生るゝは丸が力とよむとあれば

辻談儀する物もらひが神道を講釋する迚何かな佛法をそしらんとて西は西方極樂とて佛法には西をたつとむされば西の心になればたちまち人の道にそむくゝ故惡とは西の心と書なんどおのが胸のくらきにまかせて盲蛇におぢずのたは言世間はひろき

物なれば目あき千人めくら千人みんごと口過をしてとをるもおかしされば伊勢の二字を此に書たるごとくいひならはす事愚俗の世話にある事はある事なれ共僞銀もにせがねと知ては取ましき道理なれは僻言を取もちゆるは作者の目がかすむ故とおしはかられて淺はか也近松なんどはかやうの所に自分の力量のあらはゝるゝを恥一向學者などの笑ふ事は除て書ずさればこそ近松有てより後は淨るり本が下におかれず上々がた迄も御覽あるやうに有しに近年は本のもつたいぐわつたりとおしさがりて公家武家のうへを書も町屋下ざまの挨拶體になり下り取あげてみられぬ事多し伊勢の伊の字の傍は尹の字也平の字にはあらず勢の字も又生るゝの偏にあらず本字勢なり俗に勢とかくはやつしよりあやまりたる也但し此の本文には平產の緣をとらんため俗說を用ひたらんか俗の耳には尤らしく聞事も有べし然共盲千人の譽たるより目あき一人の笑ひにかゝる身の汗をしぼる種なるべし賢者の詞に身かならずみづから侮てしかふして後人これをあなどるといへるごとく作者も自身に我道の威光を引さげる事又口をしからずやされば惡の字を西の心と書と思ふも伊の字を人平とよむとおもふも擔ふておるゝ棒にあらずや

伯夷叔齊はその罪をにくみて其人をにくまずといへり

論語にはくいしゆくせいは舊惡を思はずとの給ひし孔子の意を取て其語を作りなをして用ひたる也

倶不戴天

禮記に君父の仇には倶に天をいたゞかずといひて君と父とを殺されたる敵とは同じ天をいたゞきて同じ世に住べき義にあらずすみやかに其仇を討ほろぼすへしと也

古の高良の臣は湯起請取て

高良のしんとは武内宿禰也人王十六代應神天王三十一年たけちのすくね勅使として筑紫におもむきける其跡にて弟むましうちのすくね帝へ讒して武内三韓をかたらひ謀叛の志ありと奏す天皇おどろき給ひて使を下し武内を討しむ武内の臣まね子といふ者武内に代て死す武内是よりひそかに上洛し咎なきよしを奏すみかど疑ひ給ひて武内兄弟を神

前において湯をさぐらしむ是湯ぎゑやうの由來なり
評、蜀紅の錦も衣服の裁縫があしければ木ト布子におとるべし此所の梶原が名字そなはりし憶なる連判狀を義經公やき給ひて鎌倉の大小名の中にも此連中あるべければみな／＼心を安堵のためわざと燒捨給ふとの意遠くは楚の君ともしびをけさせ冠の纓をきらさせ給ふの德に似近くは魏の曹操我にそむける百官共の天子への奏狀を箱の内にて燒せたるふせいにてあつはれ大將の胸中廣大なる一器量のみゆへき所也たゞ殘念は筆さききゑぶりて其意を盡さず跡先の文言はつきりめかぬ故にや泣ねいりに肝心の甘美がぬけ見る人きく人の感ずる段迄とゞきかねるは殘念／＼ア丶近松戀しや
勇士の戰場におもむく時三忘とてわする丶事三つあり
　この本文七書の中にみゆ本文の心はきこえたるとをり也
もろこしの焚噲が母の小袖を母衣と名づけ戰場迄も持たりといふ

此事史記漢書等の實錄にはみへず通俗などの中に出たるならんか
評、辨慶は一代にたつた一度女犯せしと云諺子供迄いひ傳ふる事にてゑかも是迄狂言に取くまぬ事なればまことに結構なる一口趣向なるべし是によつて作者の思ひつきとみへたれ共淨るりに仕立あげたる上にてみれば當世の氣にくいちかふやうにおもはれ侍るそれ故にや世上にこの所の評判はづまぬよし今の時代女形があら事するを悅ぶ氣にはのらぬ筈也尤べんけいがせりふづけ辨慶らしくぎこつなくはきこゆれ共いかにしても女房といふ道具おとし一體がなまけて見へ芥子酢のきぶい所へ砂糖水をくはへたやうに底があまふて見物にもたれのくるきみ多し是を思ふに大事のもの也かの鹿を逐ふ獵師は山をみずとかやいひて鹿に計り目が付て向ふみずに追かくれば山に行あたる難ある所に目がつかずべんけいに此しゆかうははずむと計り目がついてかんじんのべんけいにぬるみのくる所に目がつかずついに當世のはづみを失へりされば此淨るりあつたら一段目を三で引もどすやう

十ぶんのあたりとはみへす誠におしむべしそのうへ雨人が肌にわけしふり袖は淸十郎おなつの上用ぼしかびくさく播州ひめぢのゑのび寢は七小町に名にしあふ大原のざこねの夢まださめず殊にぐんけいが娘を切てより後のせりふうれいの中にすこしおかしみの出る文句ありどこ共なふうれいもゑらけて諸見物のうるほひすくなし

又ある人の難に辨慶が肌着は童の時よりして晝夜身をはなさず今此場の役にたちし事あまりに見物をうつふけたる趣向ならすや辨慶がおさなだちより是迄の越方いか計りのへんれきとかせん矢島のうら波一の谷のゑほ風數十年のあらばたらき戰塲の大汗にひたしてはおそらく齊の晏子が名を得し三十年の狐裘なり共有べき事とは思はれず事のかけたる仕組かなと嘆息せしもさる事なるへし

○道　行

注なし

この道行に評注なきはいかん、答この道行一つも注すべき事なし其上近年の道行の文句は生玉祭文あるひは手まり歌繪草紙やうの口氣におちて多くは評ずるにたらず近松が筆勢の光燄はたへ果たりおしいかな近松が道行は何となく句がらけだかくやゝもすれば歌書の體源氏なんどのうつり有て優美なる事かくべつ也それに目なれて今時の道行は一向評議におよぶべからず

須彌の四州の四天王

佛說に世界をゑゆみせんといふ山に作り東西南北の四州にわかち四方をつかさどる四天王也多門持國增長廣目の四天にて謠などにも多くある事ゆへつまびらかにはゑるさず

夜討によせたる正俊が心をみする此ゑびらと重藤共になげ出すを伊勢三郎おつ取てみれば弓には弦もなく鏃をぬいたるゑびらの矢幹

この正俊が義を立し所よし聖賢の意にかなへり孟子離婁の篇に此義と同じき事あり鄭の國より衞の國をうちし時に鄭の大將を子濯孺子といふ衞の國よりは庾公之斯といふを大將として向はしむゑかるに戰場にてゑたくゑゆし俄にやまひおこりて弓を引事かなひがたく其士卒に云けるは我かならず今日の軍に討るべし我病て弓をひく事かなはすと

て其日の衛の大將を誰なるぞと問に士卒こたへて庾公之斯なるよしをいゝければ孺子聞てしからば命をたすかるべしといふ故士卒ふしぎに思ひゆこうしゝは衛の國にて聲にきこへし弓の上手なるよし然るにかれが向ふと聞て命をたすからんとの給ふはいかなる故ぞと問ふ孺子こたへて庾公之斯は弓を尹公之他といふ人に學べり尹公之他はわが弟子なるが日比たゞしき人なれば其人が友として弓をおしへたる庾公之斯はかならずたゞしき人なるべし此故に我をたすくるを知るといふ果してゆこうしせめ來て孺子の弓をひかざるをうたがひ問にじゆし病おこりたるよしを答けるにぞゆこうししがいはく我は弓をいんこうしたにまなびいんこうしたは弓を君にまなへり我君の術をもつて君を害するにしのびず然れ共今日のたゝかひは我君の命なれば捨られずといひて矢をぬきて乘たる車の輪にたゝきつけやじりをぬき捨て中(あたり)ても孺子に害なきやうにして矢をはなつて引しりぞけりと也此事義によくかなひたるゆへ孟子是を取て教とし給へり

けいほうきそくの日

此事いまだかんがへす

吳子孫子張良陳平韓信に諸葛が術をそらんじ給ひ

吳子と孫子とは戰國の時の兵法の達人也すなはち吳子も孫子も兵書をあらはして七書の中の一つなりちやうりやうちんぺいかんしんは漢の高祖の臣にていづれも名將なりしよかつは孔明にて蜀の劉備の謀臣なり

評、四段目の奥いそのぜんじが舞に取ませ藤彌太がはたらき尤氣を取ル仕くみ也さて土佐坊を善にしたて初段の口にかまくらにて誓紙を書せたる所世上のいゝつたへを反へなして新しく今この場にてよしつねにもせいしを奉り御父義朝公の重恩を思ひよりともよしつね御兄弟へ共に奉公の筋を立たる尤おもしろきしゆかう也べんけいが尻馬は番場の似せ土佐正眞の土佐は忠信をたてぬき伊勢ノ三郎にうたれし所始終よくぬけたるもの也すべて此段もあなのあく取みへずいかさま佳作といふべし

馬歷神

馬櫪と書べし厩の神なり
評、正俊と正尊とむかしより土佐が實名を二樣に云ならはせるを據にして眞と僞とをわけ眞の土佐ぼうは正玄ゆんにして正そんが僞土佐なりとの事尤似つこらしき作意なりこれより奥のかんたんのまくらの一きよく諸見物ながことのたいくつを引たて罷顔(いにがほ)のよきやうとの取くみ尤さもあるべし

外題
○お初天神記

曾禰崎の天神のやしろの境内にて天滿屋おはつ心中したるよりして此天神をお初天神とよびならはせり此淨るりおはつが心中の始終を作るゆへかく外題せるなり
げにや安樂世界より
此語田村のうたひの語をすぐに取て書たる也あんらくせかいは極樂といふにおなじ示現はかりに形をあらはし給ふとの意なり
のぼりて民の賑ひを契り置てしなにはづや
是は仁德天皇高津にのぼりなにには津の體を見給ふに貢ものをゆるされて民が富さかへて賑ひけるを御覽まし〳〵ての御製に高きやにのぼりてみればけふりたつ民のかまどはにぎはひにけりと詠し給ひすへの世迄も此所の民のにぎはひをことふき契り置給ひしなにはづ也との事なりさて大坂をなにはといふ事はむかし神武天皇日向の國より御船てのぼり給ふ時此所にて浪速く御船こえ難かりしかば此所を浪速の國と稱給ひし事日本紀にみへたり浪速もなにはとよむ又なみのあらき心にて難波共書みな此時の故事也さて大坂を三津の里共大江の岸共いふなり
三つづゝ十と三つの里
大坂三十三所の觀音のある所三十三所ゆへ三つづつ十と三つといふこゝの文句がら雅にして面白し
近松が手段にあらずばかく優美にはいひがたかるべし是は伊勢物語の歌に鳥の子を十づゝ十はかさぬ共といへる詞がらをかりて書たりしかも大坂を三津の里といふにいひかなへて三つづゝ十と三津の里と詞を引うつりたる所妙也大坂を三津の里といふは高津敷津難波津の三つある故也
罪もなつの雲

つみもなしといひかけてなつのくもといふ
かほよ花
杜若の事也是も娥は妍よき事故云かなへたるもの
也
てる日の神もおとこ神
神道にては日を天照太神とす天照だいじんは陰神
なりしかるをかくいひしはいぶかし但し日は陽な
るゆへ陰陽の方より取ておとこ神といへるならん
むかしの人も氣のとをるの大臣の君が鹽がまの浦を
都へ堀江こぐ
融のおとゞは嵯峨天皇第十五の御子也むかし加茂
川のほとりに家づくりして住給ひ六條河原院と申
す官位は從一位故大臣にてまします故大臣といふ
しほ竈の浦はもと陸奥宮城郡にある名所也とをる
のおとゞ此鹽がまの景を都の宅にうつし給ひしが
今なにはの堀江をこく船の其しほがまのうらのけ
しきにて荼ぶね荷ぶねのかよひは鹽くみ船のこと
く也と也
弘誓の櫓べうし
くはんをんめぐり故廿五の菩薩の來迎のぐせいの
舟によそへていふ也ぐせいは一切衆生を弘く濟度
せんとの誓願を立給ふ故しゆじやうのいのち終る
時極樂より觀音を第一として廿五の菩薩がぐせい
の舟にて來迎し給ふと也
法の玉ぼこ
玉ぼこは道といはん枕詞也故にのりのみちとのこ
ころ也
ふだらくや
普陀洛迦山とてくはんおんの淨土なり
久かたの
久かたは空といはん枕詞也空にまばゆきと云たる
ゆへ久かたの光とうけたり
光に移る我かげのあれ〳〵はしればはしる是々又と
まればとまるふりのよしあしみるごとくこゝろもさ
ぞや神ほとけてらす鏡の神明宮
この段文句はよく聞えたり空の日のひかりをうけ
てかゞみをいひ鏡は神の御正體ゆへしんめいぐう
をいふ空にまばゆきと云出したるより以下の文句
みな神明宮をいはんためのまくら詞也しかもはし
ればはしるとまればとまる等の詞人形にふりを付

たるもの也女一人の道行ゆへながきもんくの中には此文句のごとき事あれば一入人形の所作がつきてふりがあるゆへなるべし
御佛も衆生のための親なれば
一切衆生悉是吾子と法華經に說給ふにもと付ていふ也親の緣よりおはせと移たり
かもめなれも
鳥類畜類蟲などをよひてなれもといふ也歌ことばなり
はづかしのもりて
はづがしの森といふ名所ある故それにかけていふ也山城の國乙訓の郡にあり
七千余卷の經堂
一切經をおさめたる堂也一代の說經七千よくはんなりと也
經よむ鳥のとき
ほとゝぎすを經よむ鳥といひ又はめいどの鳥共いふ此事くはしく十王經に出たり經よむ鳥といひてすぐに日暮の酉の時といひうつしたる也
きぬ〴〵も
きぬ〴〵は別れの事なり
空にきえては是も又ゆくゑもしらぬあいおもひぐさ
西行の歌に風になびくふじのけふりのそらにきへてゆくゑもしらぬわか思ひかな此詞を取て書り相思草にたばこの異名なり
夢をさまさんばくらう
貘といふけだものはよく夢を食ふといふ故事あるゆへばくらうといひかけたりされば枕屛風の繪などにおほく貘を書もあしき夢をくはせんとの心也とかや
佛神水波のしるしとていらかならべし
佛は神の本地にて神は佛の垂跡なれば神とほとけは水と波とのごとく也となりいらかは甍と書て瓦なり棟をならべたるをいらかならべしといふ
さしも草
たゞたのめしめじがはらのさしも草われよのなかにあらんかぎりはと觀音のちかひをよみたる歌によりていふなり
三十三に御身をかへ
觀音は人を濟度せんために三十三の身をあらはし

・給ふ事くはんおん經にある故それによりていふ也

戀のやつこ

奴は下部の惣名なり然れども和語にやつこといふに二種あり一種は鑓持などの髭やつこ也是は常のとなへのごとくやつことよふべし又やさしき童僕なんどは。や。つこトやの字を截てよぶべしこゝは戀の。や。つこなるべし

とくゐ

あきなひ旦那をとくゐといふ事京大坂の常語なれ共遠き田舎にはしらぬ事也先年奥方の學者此淨るりをよみて此詞をあんじ煩ひしよし聞つたへし故爰にあらはす

死手の山三途の川

めいどに死手の山とさんづの川ある事佛說に出たり三途は火途刀途血途とて三つの途ありといへり

うつせ貝

身のなき貝殻なり

袖と／＼をまきのとや

和歌の戀の詞に待わぶる付ケ合せに眞木の戸ざゝぬといふ事ありこの本文も德兵衞がまちたるにいひかけたるなり

道行 あだしが原の道の霜

あだし世あだし野あだちが原みな他(あだし)の字を書てさだめなきあだなる心也されはあだしのあだしがはらはおほく墓所を指ていふ今死にゆく身なればむしよへの道行の心也又あだちが原といふ詞もあり大和詞にあだちが原とはおそろしきをいふといへり然ればあだちが原と見ても遠からずしかれ共其本意を取て道の霜といひ霜より取てきへて行といへる皆おもしろし

ひとあしづゝに消てゆく

道の霜といふより緣を取て一足づゝにきへてゆくと受たる尤おもしろししかもひとあしづゝにきへてゆくの意は人の命の一日／＼にちゞまる事を佛經に屠所の羊のあゆみにたとへたる語あり羊を殺すものを屠者といふその屠者が羊を屠場へ引てゆくをみればひかれゆく羊は、あゆみ／＼にておのが命がちゞまるなれ共それをしらず凡夫のいのちのちゞまるをしらぬもかくのごとしといへりこれらの心をふまへて書たるゆへ底に意味をふくみた

る文句也

夢のゆめこそあはれなれ

うき世は夢なるに又我身のいま死にゆくはかなさながらゆめの内にまた夢をみしこゝちなれと也此世を夢といふ事は佛說におほき中に唯識論に云いまだ眞覺を得ざれば常に夢中に處す故に佛說て生死の長夜とすといへり金剛經にも一切有爲の法は夢幻のごとし共いへり又詩にも人間一夢中などと作りて浮世のあだなるを夢にたとへたるこれらの語をふみて書たる文句なり

鐘のひゞきの聞おさめ寂滅爲樂とひゞくなり

涅槃經の偈に諸行無常是生滅法生滅〳〵已寂滅爲樂と說給ふ此心はうき世のもろ〳〵のものは一つとして常ある事なし生ずればかならず滅するの法也されば生じては滅しめつしては生じひたすら生滅を經て其終り寂滅としづかに滅しおはりたる所を眞實のたのしみとするとしめし給ふ也されば今死ぬる身にじやくめつをたのしみとするのひゞき也と聞とれば此世よりさとりしこゝろもちあり

雲こゝろなき水の面北斗はさえて影うつる星のいもせのあまの川梅田の橋を鵲のはしと契りていつ迄も我とそなたはめうと星かならずそふとすがりよりふたりが中にふるなみだ川のみかさもまさるべし

陶淵明が歸去來の辞に雲無心以出岫といふ語ありその外詩人の詞に雲の心なきを人情のうき思ひの胸にふさがる目より見てうらやむ心多しこゝも其心にて書なせり我々はうき思ひにかきくれしにうらやましや雲は心もなく何の苦もなくみゆると也それより水の面とうつりてしゝみ川のけしきをいひしも彼の空はひとつに雲の波といへる心もちに書なし空の景氣と今目前の川邊のけしきとを打混じて上と下とでいひたる甚だめづらか也空のほくとはこゝろよくさへて其かげ水にうつりてかゝやくも我むねのくもりたるには事かはりてうらやまれわきてうらやましき事は七夕の星のいもせのちぎりをこめ給ふ天の川もあり〳〵とさぞな二星は千歳をうけてつきぬ契りをむすぶらんさらば我々もあやかりて今わたる梅田のはしをかさゝぎの橋とちぎりかならずそはんとすがりよる有さまその景その情その態いづれもさも有べしかさゝぎの

しみといふ死苦はもとより死する時のくるしみ也
八苦は人間の八苦なり死苦といひたる故八苦とう
けたる是もいひかけの類なり

橋とは牽牛織女の二星落合給ふ夜かさゝぎがきた
りて羽をのし天の川をわたすとのいひ傳へなり扨
ふる雨よりいゝかけて川のみかさとうつりたるも
筆のあゆみこゝろよくおもしろしみかさは水のか
さ也水のかさ高くなるを水かさもまさるべしとは
いへり

きくに心もくれはどりあやなや

應神天王の御時使を呉國へつかはして綾をる女を
もとめ給ふに呉國四人の綾をり女をおくれり其中
に呉織穴織と名付るありしゆへ是よりしてくれは
どりといふ詞をうけてはあやとつゝる也爰も心の
くるゝといふをいひかけてくれはどりと云たる故
あやなやと受たる古歌の心にかなひておもしろし
古歌にくれはどりあやにこひしく有りしかばふた
むらやまもこえずなりにき

せめて玄ばしはながゝらで心もなつの夜のならひ

心もなしといふ心をもたせて心もなつといひかけ
たり此類のいゝかけは結句きれいにして雅なり

だんまつまの死苦八苦

いのちの終んとする際のくるしみを斷末間のくる

淨瑠理評注卷之一終

浄瑠理評注巻之二

外題
○安倍宗任松浦簦

此浄るりは伊豫守みなもとの頼義御子八幡太郎義家の両將奥州あべの貞任宗任を退治して凱陣あり其後都にて山純親王のむほんをふたゝび平治しその上むねたふを度々ゆるし其終に奥州の舊地をあたへ松浦黨と名のる事をつゞりたり外題當世の氣に應し諸人の評判よろし但し簦の字をきぬがさとはめづらしき和訓なりと黒字を見知りたる人は咲(ゑみ)するもいやとはいはれず

序
飛禽也恩將義を智る猛虎尚惠與仁しる治亂我にあり敵にあらず歸心叛意おのれが身たり同一甘味の民と君

この最初の二句は詩の語とみへたれ共其出所つまびらかならず其心はよくきこえたり空をとぶ禽だにも恩義を知りたけき虎さへ惠仁の心はあり是らにさへ恩義仁惠あるをみればまして人たる者誰か仁惠を捨んやしかれば此方よりさへよくあしらふ時は敵となるもの有べからずたゞ世のみだれて敵多きは此方よりのもてなしのあしき也かくみる時は此方のしむけ次第なる程に治亂我にあり敵にあらず我にきぶくする心と我にそむく心とのさきさまに出來るは皆おのれよりの仕むけによる然れば歸心叛意おのれが身なるにあらずやさて右のごとくみる時は怨と情と二ッにあらず同一なりと也此序のこゝろ義家卿が宗任をしたがへさせ給ふをふまへていふ其文面よく意にかなひ面白し但し筆者のあやまりにや智(しる)の知の字を智の字に書たる見苦し又同一甘味の甘の字鹹の字にあらざれば意義通せずその故いかんとなれば作者には御存なきかもしらねど此語はもと佛書におゝく出たる語也是は古歌にいふわけのぼるふもとの道はおほけれどおなし高根の月を見るかなと詠せしごとく佛のおしへさま／＼に別るれ共つまる所の本は一理に落るをあかさんとて千川萬河の水その流のすじはわかるれ共おちこむ所は一つの大海にして同一に鹹味となるとのたとへ也海水の鹹をいふなれば甘の字大にあやまれり作者よく／＼引るゝ所の本書をみ

られよかし
上意にまかせて天奏をもつて上聞に達せしに
天奏は傳奏のあやまり也堂上に議奏衆傳奏衆とて
事を天子へ奏する役なりその内に傳奏は別して武
家の事を奏するゆへ武家傳奏共いふいま天の字に
書たる笑ふべし又上聞といふ詞も天子へそうする
には耳なれぬ詞也但し今の淨るりには何方もかく
のごとき胡椒丸のみなる事多し然ればかやうの僻
言は當世淨るりのはやり物共いふべし

大みや人
禁中の人々を指ていふ詞也

うぐひす蛙も歌をよむ
かはつの歌はむかし紀の良貞といふ人住吉もうで
の時浦の草をもとめに出けるに木の下にうつくし
き女の立居ければ心をかけてい丶よらんとするに
かの女今は露ばかり思ふ事ありかさねて爰にきた
り給へかならず相見んとちぎりてわかれし故其明
る年けいやくのごとく良貞又かの浦に出て待けれ
共其女は來らずしてたゞ砂の上にかはづ有て前わ
たりせしかば其蛙の跡をみれば卅一字の歌也すみ
よしのうらのみるめもわすれねばかりにも人に又
とはれぬる良貞おどろき是を見て扨は過し此女と
みしは此かはづよとぞしりける又鶯の歌は孝謙天
王の御宇に大和の國たかま寺の軒端の梅へうぐひ
す來りてさえづる老僧その聲を文字にうつせば初
陽毎朝來不遭還本栖とあらはれて是を和訓にてよ
めばはつはるのあしたごとにはきたれ共あはでぞ
かへるもとのすみかにといふ三十一字の和歌なり
しとかや

周處心をあらたむれば忠孝のほまれをとる
しうしよは三國の時呉の人なり里人に迄おそれら
れて周處が三害とて三ヶ條の害の内へ入し程の惡
人なれ共後には大將となりて忠孝のほまれを取れ
り

なんぢ豫讓が義を思ひ
晋のよじやうといふ者主人の敵趙襄子を討んとね
らひたりしを一たんてうぢやうしにとらへられた
れ共主の敵をねらふ忠義のこ丶ろざしを感じてた
すけし事也しかれ共其後橋の下にふして趙子をね
らひし故後には殺されたり

評、初段ずらりと大概きこへたるとをり也さして替(かはり)しゆこうもみへず文句もありべかゝりの内に匡房おつぼねなんどのせりふ余りいやし過てみゆる所多し

衆愚の謌々いつはりの變言

衆愚はおほくの愚なる者といふ事謌々はげうげう敷ていなり

圍碁

碁をいごといふ但し碁を打を碁を圍といふゆへなり

もろこし玄宗皇帝すごろくをもつて后をさだめしためし

此事通鑑の唐書又は唐鑑などにはみへず小説の中にあるにや

いざ手談と

碁をうつを手談といふ相手向ひに手にて談といふ心なり

評、碁の所おもしろし殊にごばんがすぐに八幡太郎い塀を飛で切付らるゝの用にたち其後さきふさの北の方が早成へ碁石を打付らるゝ場にても入用のものとなる道具はかくのごとく始終用に立やうに造るゝ事尤働なるべしある人のいはく初段より二段目の段切迄打みた處がさらりとして譯はよく聞へ氣のつきぬ藝とはみへたれ共底に意味のある事見えず何とやら請取ぶしんをみるやうによみがこまぬと存ずる、答尤さる事有べし然れ共せかいの事は一概にいはれず見物にさま〴〵のすきこのみあり是を料理にたとへていはゞ下戸の口と上戸の腹と物ずきがうらはらなるごとく其藝の見手によりさらりとしたるが氣にいる有りねちみやくしたるを好もあり兎角何をまいらふもしれぬは客の心也殊にしばゐでのあたりは第一あやつりのはなやかなるが肝要にや此二段め八まん太郎のしのびの段前太平記の移りにて趣向はありべかゝりなれどあやつりの騒どうもいはれず是を思へばあたりを取は陰の舞の理屈よりは目の前で仕てみせるか十分の理也しゆかうがわるふ入くめば一段で一場程づつ長物がたりの居せりふしらぬ京物がたりにけんぶつの精をつからす事又ある事なるへしされば近比ある人の説にあやつりを見やうならば今の

しばゐにしくはなく本を讀てたのしむには中古近松が作にしくはなしといはれしごとく辿も文句のうへでは今時は人のなぐさみになる程の事なければ太夫衆の音曲とあやつりの色どりにて評判をたのむも、手だてといふべきかしかれば場所により趣向もさらりが勝なるべし

桃園

源氏の先祖六孫王經基しん王の事也

本國河内へ引こみ

かはち石川郡香爐峰今いふ壺井通法寺也山のうへに頼信よりよし義家三將軍の墓ありつぼゐごんげんとあがむるも右の三將軍を祭る也又壺井と名つくる事は頼義奥州の水を壺にいれ本國へもち歸り此所に井をほりて其水をうつし給ふゆへなり

六任の兄弟

貞任宗任家任重任正任則任なり

靑龍朱雀白虎の旗

天の二十八宿を四方へわかち四方に名あり南をしゆじやく東をせいりう西をびやくことす卽ち天子卽位の時是にかたどりたるはたを立るなり

波羅門白駝四天王

ばらもん王はくだ王四天王みなあらき姿なる故いきほひのはげしきにたとふ

韋駄天斑足王軍多利夜叉提婆達多

いだてんは足疾鬼を追給ふ天部也はんぞくわうは天竺にて暴惡の王也ぐんだりやしやは五大尊の一つ也だいばたつたは釋迦に敵せし惡人にて法華經につまびらか也

佞人賢人に似たれば非もまた理にまがふことはり

この文句古語にはあらね共此道理なるがゆへに作者の筆さきにて古語のやうにつゞりなしたるならん

もろこし陳の大夫に秋胡といふ好色者わか婦としらで戯れ後代のそしりを受る

しうこは魯國の人なり春秋の時陳の哀公につかへて太夫となり楚より責られて陳の國やぶれしかば城の東門よりぬけ出て古鄕に歸らんとするに既に古鄕に近く成て平山桑埠の間をとをりしにひとりの婦人桑を取居しをみるに其かたち甚だうるはしかりければしうこ是を戀てたはふれ寄女の心を引

見んために云けるは百姓の耕作を精出すよりは豊年に出合たるがまされり織おんなの桑を取事をはげまんよりは一國の卿太夫にまみへて寵愛にあふがまされり今婦人終日桑を取給ふ其筐にも滿じもし我心にしたがひ給ふ物ならば我に金あり婦人にあたへて辛苦をたすけんとて金を出してみせければ婦人こたへて云桑を取て絹をおり辛苦して姑婦をやしなひつかふるは婦たるものゝさだまりし道也我には夫ありて今他國につかへたり我金をもとめず又太夫にまみゆる事もねがはず君はやく其金をおさめてかへりたまへといふ折ふし秋胡が僕ども來りけるゆへ其まゝわかれて立去しうこは古郷に歸り着けり此しうこといふ者五年いせんに妻をむかへ五日過て陳へ行つかへたりしが此たび久々にて歸りし程に老母よろこびて對面しるすの內は嫁の白氏みづから桑を取てよくやしなひよくつかへし事を語りてかの嫁をよび出してあはせければ最前平山にて桑を取居たる婦人なり夫婦と成て間もなく久しくわかれ暮せし故双方共に見わすれてかくのごとし白氏おつとを見ておどろき泣てはぢしめて云君先年妻をよひて五日にして遠つかへ母に別るゝ事久し今日古郷へ歸らば萬事をなげうつて途を急ぎ母にまみへてやしなふべき事なるに途中にして女にたはふれ母の孝養にそなふべき金を捨んとせしや母をわするゝは不孝也色をこのみて行作をけかすは不義也親につかへて不孝なれば君につかへて忠あらじ家に居て不義なれば官して理にしたがはじされば我は君をみるにしのびず君他の婦をめとり給へといゝをはりて奥に入りうしろの園よりぬけ出て河に身を投て死したりしうこ大におどろきて我あやまりをくやみ泣かなしみて白氏か死骸をほうむりふたゝひ奉公の心なく一生母をやしなへり魯人白氏かために廟を立年ごとに祭をなし潔婦の社とあがむといへり

あやまちを改るにはゞからずと申せば論語に出たる孔子の語なり

冥途黃泉

大友眞鳥の抄に出せり

評、三ノ口趣向おもしろし忍びの段の浪人が夫婦のやくそくを云立て景正を不義ものといふを義家

卿もつともとしてかげまさを罪に落し給ふ所すこしまだるきやうなれ共奥で打わつた所が元來義家卿がつてんの謀なればさも有べし惣じて大塔宮の三ノ口程にはみへ侍る第一しゆかうの筋が先へ少しもみへぬ所が何よりの珍重此場より奥迄よく練れたるしゆかうとみへて當目がたしか〳〵

ある人難じて云むかしより女を男の體にやつしたる事は本朝にも其例を聞及ぶ事あり此段のごとく男を女にしたつる事其ためしをきかずちかくはかぶきの女形などうつくしき孌童を地女の臙粉よりもなをこまやかに飾たるもの故打みたる所は取なり物こし女に正のやうなれ共よく氣を付たる時はあるひは手の筋あらはに青みだち喉骨高くあらはれ中々眞の女とは格別なる所ありいかん、答云難のごとく男を女に似せたる事狂言には多き事にて實事には見及ばずもろこしの歷史などにもみあたらぬ事也但し魏晋以來六朝の雜傳をあつめたる歷代披砂といふ書にたま〳〵此類の事あり晉の惠帝くらゐに卽て至ておろか也その妣賈皇后淫亂ほういつのあまり近侍の宦官共にひそかに命して市井に人をつかはし美少年の者あればだまし誑て後宮へ召よせ給ふに內外の目をおほはんためかの少年を女儀に出立せあまたの女官の中にまじへて給事させ給ふ故惠帝をはじめ朝廷の大臣もその事をしらざりしと也是をもつてみる時はたま〳〵其例なきにしもあらずといふべし

是人於佛道決定無有疑

法華經其外の經にもおほく出たる語なり此文の心はこの人ほとけの道においては決定して疑ふ事ある事なしと也

評、三ノ奥一場注の入るべき文句なし但し諸見物ひいきせぬ方の最後故かうれひはしんみりとせざれ共りくぎのやりかた十分こゝちよし但しこしもと共が噂のあたりより奥方鶴はぎの口上などに少し奥へ氣のつくべき文句ありそれ故か此所ではそろ〳〵筋みへるこゝち是は作者が奥のこゝろを心にもちて書れしゆへ思はずしらず其もやらかふでさきへあらはるゝ成べし但はもろ〳〵見物へのみこましもてゆく合點でわざとかふ書れしかそれなればわるい合點惣じて先を隱す事は隨分かくすが

宜さうに思はるゝ事ぞかし勿論おゝとうの宮などは三ノ奥におどり場で身がはりを切る下づくろひに三ノ口に燈籠づくし齋藤が切子の使者又奥の口あけに右馬頭がおとりなど先のみへるやうなれど是は肝心の趣向にはちつ共かまはぬ事にて玄かも其狂言の時節盆の比ならねば宮の首きる場になりて俄におどりを始ては時ならぬゆへ見物の氣がけうとく萬一わるふ呑こみて跡に物のあるやうに成ては主意の邪魔になるゆへに是はわざと手まへよりそろ／＼おどりをもよほして踊の時節じやといふ事を見物の蟲にがつてんさせんためなれば此格とは別なるべし玄かし此やうにいへばとて此場に疵を付るにはあらず是は榮耀の上のせゝり箸とやら先は三段目口奥共十ぶんの大出來文句玄ゆかう共諸人の難ずる所なくみな當りとの評判なり

○道行

注なし

評、此道行ざしき淨るりにしては差たる事もなけれ共芝居ではあたりを取る文句共おほく尤花やかにおもしろし

鳳凰は德を見て下り鳥は視肉にまよふとかや

この語文選に見えたりほうわうは諸鳥の長にて聖人の世ならではあらはれず雄を鳳といひ雌を凰といふ羽蟲三百六十の長也からすは注に及ばず視肉は鳥けだものなどの肉のある所を見てまよひくだるとなり

もろこし郭巨といふ者母にちぶさをあたへんとて我子を土中に埋しといへり

くわつきよは廿四孝の中の一ノにて此事廿四孝傳にみへたり此時くわつきよ土中をほりて金釜を得たりと有りそれに付釜は斤目の事にて金を釜ほど得たりとの義なるを此方にて取ちがへ金のかまを得たりと訓故繪又は作り物などに釜を掘出す體をなすは誤也

評、道行の奥の場より段切迄玄ゆかう文句共に上上吉飛脚の籠をやく所一際おかしく奥にいたりてのうれひあはれにひあひに別して女中などの好そうないきかた也吃の置みやげふし事の段だてにあはれに面白し終にはおさな子は命たすかり結局沼太郎が思ひかけなき切腹さいごの際に吃のなをり

たるいゝわけの所きつくりと見物のむねにこたへて尤らしく女房かたわのなをりしに付ていとゞくやみなげきの體人情の感ずるだゝ中始終この段も上出來なるべし

ある人難して沼太郎が心の臟を切てより物いひが正しき事舌は心に屬する故との事はきこへたれ共心は眞君の靈府なればすでに心を傷て暫時も精神の有べきやうなし然るを辨舌が正しきなどゝは醫經にうとき事也とさみせり尤狂言綺語とはいへとかく難すればいやとはいはれず然れば筆を下す時少しは學文の心もつけらるへき事ならすや

諸神もとより形なし正直をもつて心とす虚靈不昧の御神德

是も古語にあらず作者のつゞりたる文句なり神體は鏡の中のむなしきがごとくさだまれる形なし神はたゞ正直を心として物をてらし給ふ事かゞみの體の虛靈にしてくらからざるがごとしと也虛靈とは形は虛してしかもあり〳〵と靈なるをいふ不昧はかゝみのくらからぬにてすなはちあきらかなる事也

野夫漁人

野夫は土民をいひ漁はすなどりにて魚をとる人をいふ

御鬱然をはらさせ給ふ一興

この然の字あしく惣じて然の字を卒然儼然鬱然などゝ用ゆるは形容字とて其體をかたどるための付け字也それゆへ鬱然としてとよまるゝ所ならでは用ひてのらず是等は作者が文章をしらざるのあやまりなり

冥感

惣じて佛神のたすけは目にみへぬ所より力をくはへ給ふ故冥の心にて冥感の冥加のなどゝいふ詞を用る也

酒宴たけなはの折から

酣の字を書て半醉半醒の時をいふと注する字なれ共古來おほく熟醉の方へつかふ也軍にても酣戰といへば戰をはなはだきびしくするになる也

五　調

五臟がよく調和したるといふ心にて用ゆれ共漢文には見あたらず誹諧師などのおほくもちゆる事な

り

猿田彦

神事の先へ惡魔をはらふ鼻高の事なり

外題
○北條時賴記

此淨るりは最明寺殿鎌倉執權の時節の事を取くみて末には近松の殘し置れし女はちの木の雪の段を切くはせて始終をよくむすびあはせたりそれゆへ北條時賴記と外題を置也

序
葵の花は日を見て轉じ芭蕉は雪を聞てひらき

此事圓機活法又は本草綱目などに出たり

桑の門薙髮

出家は樹下石上とてさだまる家なくあるひは石のうへにたゝずみ又は樹の下にやどるものゆへ桑の門といふ薙髮はかみを薙ことにてすなはち出家ゆつけする事なり

將軍職の除書

將軍職に任ぜらるゝの書也惣じて官位をさづけらるゝを除せらるゝといふ但しふるき官を除といふ意なりとかや

唐の盜跖が邪智

とうせきはいにしへのぬす人也伯夷といふ賢人は飴を見て此食物は老人の口をやしなふに便よき物也といふとうせきは飴を見て此ものは盜に入とき鎖にぬりて鎖をあくるにかつてよきもの也といへりとかや

節刀といふ

天子より將軍出よくをたまはる出るしとて斧鉞刀旗などを給はるを都て名づけて節刀といふ也

かのもろこしの鴻門の會沛公がまぬかれし頂伯が恩

陳平が情

沛公は漢の高祖也楚の項羽關中に入て鴻門に陳を取し時范增がすゝめによつて高祖をまねき酒えんのうへにて劍をまはせ沛公をうたんと計しを頂伯と陳平とがなさけによつて其座をまぬかれ給ふ事史記および前漢書にみへたり

功有て賞せす罪あつて誅せずんば唐虞といへ共化する事あたはず

唐虞は堯舜の天下をおさめ給ふ代の名なり化とは治化敎化とて天下をおさめ給ふをいふ此語は七書

の中に出たり
孟宗郭臣
もうそうもくはつきよも二十四孝の中の人にて兩
人共に親孝行の名をえし人也
魍魎鬼神
もうりやうは山の神の類也鬼神も山川などの鬼神
なり
壽をやしなふものは病にさきだつて藥をぶくし世を
おさむる君は亂にさきだつて賢にまかす
この語の心なる文句は儒書又は醫書にもあまた有
る事也但し正しく此語の出所は見あたらず古語に
はあらず
謀計は眼前の利潤といへ共終に神明の罰をかうむる
天道の正直にまかせずして私の謀計にてりしゆん
を得る事有といへども終には神罰をうくると也此
語は三社の詫宣に出たり
もろこし周の世に魯國と戰ふ事あり一人の匹夫二歳
の子をすて十歳の子をつれ走る
この本文のわけはよく聞えたり此事は左氏傳に見
えたり

○道行
此道行大概上々の出來なり但し注におよぶ事なき
ゆへ略しぬ
道行ノ奥
こも僧しゆぎやうのぼろ〳〵と
こもそうの事をぼろ〳〵と名づくる事つれ〴〵草
に出たりみなかみは京都明あんじ元祖は普化せん
じ也むかしはこも僧といはずしてぼろ〳〵といひ
けるとなん又尺八を洞簫なりと思ふ人あれ共さに
あらず洞簫は今いふ一重切の事也尺八はむかしよ
り尺八と稱す羅山文集に尺八の賦出たりかんかへ
みるべし
世の中をいとふ迄こそかたからめかりのやどりを何
をくむらん
西行法師の歌なり
げに人間の一生は岸のひたいの根なし草
身を觀ずれば岸のほとりに根をはなれたる草いの
ちを論ずれば江のほとりにつながざる舟といふ詩
の句を取て書たる也
發心門さとりの門
はじめてぼだいにこゝろざしたるがほつしんもん

也後にぼだいをさとりへたるがさとりのもんなり
さとりのもんはすなはち悟道門なり
易行門難行門
他力念佛などが心やすき修行ゆへ易行門なり戒をたもち座禪する等がむつかしきしゆぎやうゆへなんぎやうもんなり
觀念門天臺二十四門
くはんねん門は天台止觀あるひは一心三觀などして空假中の三諦等の佛法の一大事をくはんずるをいふ天台の廿四門は右のほつしんごだういぎやうなんぎやうもん等みなその內なり
空門非空亦空門
これも三諦より出たる事にて諸法を空とくはんずるを空門といひ空にもあらずとくはんずるを非空門といひ空にあらざるにもあらずとくはんずるを亦空門といふみな佛學の奥義なればたやすくえとくせらるゝ事にはあらす
評、五段目にいたりては近松の作の女鉢木雪の段を切くはせて五段の都合首尾まつたしかく古き名作物を取合せ給ふ所偏に作者の機轉也さるにより此じやうるりは大評判にて今も人のよろこふでき物なりさて奥には最明寺の道行の謠の出端ばかりにて淨るりに移る文句よりして道行の間はぬけたるか此道行の文句には筆勢のおもしろき事共多しまづ蝶のつばさのおしろいをくさにこぼして梢には鶴のしもげをぬぎかくる雪は花より花おほきと書る所圓機活法の雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して石曼卿が雪を詠せし詩を出せりその詩を和語にうつしたるもの也其詩に云、蝶遺ニ粉翼一輕難レ拾、鶴墜ニ霜毛一散未レ轉といふ二句あり是をなをして右のごとくにつゞりしは彼の樂天が靑苔帶衣掛ニ巖肩一白雲似レ帶繞ニ山腰一の句を沓ごろもきたるいわほはさもなくてきぬきぬ山のおびをするかなとなをしたるにもおとるまじ殊に雪を六出花と名付るは常の花は蘂が五ツづゝ出るもの故五出といふ雪のみごとさは花にまさるの心にて唐人も花のうへをゆくの心をもつて六出とよぶの意によりて雪は花より花おゝきといへる尤佳作にあらずや其外雪中に最明寺入道行し給ふを見立てさながら雪の一筆鳥といひからすの縁よりお羽打かれ

しといひ其むすび文句には叡山の僧正の雨ごひの勅をかうふり給ひて詠せるおほけなくうき世の民におほふかな我たつそまにすみぞめの袖といふによりて浮世の民におほふかなの句をもちゆ一句一句意味ふかく筆さきかんばしゝさて道行奥にいたりては宿をかりかけ給ふ時墨のおれか木のはしかとあるはつれ〳〵に法師ばかりうらやましからぬものはあらじ人には木の端のやうに思はるゝと書しをかたどりたる詞さなから最明寺殿の詞共思はれ又娘がこたへ鼻そげでもいぐちでもの詞大に下へ落て見物のはづみをうけ又其跡をおさへて天下をさはく御身にも此へんとうにゆきくれてたゝずみ給ふぞゑゆしやうなるとは又及ばぬ手段にあらすや爰の問答一人は天下の執權職ひとりは在所の若むすめ諺にいふ下駄とやきみその相手とち其相應にせりふを付られし事自然とそなはる妙手なるべしさて爰の娘が詞について思ふに惣じて今の世下がゝりにあらざれば下へはづまずさりとて下がゝりを無調法に書くずせば千枚ばかりの女形をみるやうになり一向下鄙てけうかさめるされば

このむすめがせりふの跡天下をさばく御身にもの語にあらずんはなか〳〵花車にはおさまるへからず然る時はおかしい事げびた詞も跡のおぎなひやうにていやしからず天下取の御前でも耳にたゝぬやうにもなるものなるべし其外評したき事山々なれ共此淨るりにかぎるにあらねばまづは筆をとゞめぬ

太上感應編といふ書をみるに趙州の奥に白虎山といへる深嶺ありその峡に鳳鳴觀といふ道士の庵ありある夜雪いたくふりすさびて暗夜のけしき常ならぬに扉をゑきりにたゝく者あり道士立出何者なるぞとたづぬれば平生おとづれを通じてむつましき麓の農民胡班といふものゝ娘也此むすめよはひ二八計りにして近所に名を得し美女なりしか心に願ふ事有て此峰の絶頂なる神の祠にまふで日の内に歸るべきをいかゞしけんをそなはりし内雪にふぶかれ道にまよひ這々夜に入てこの觀にたどり着たる也道士うちへ入るゝ事をゆるさすして云せつてうより是迄さへあゆみ來られしうへ是よりふもとへは程近し今すこしの艱難をゑのぎ我家へかへ

らるべし若き女性を此庵にとゞむる事かなふへからずといふ娘聞てうらめしく此庵迄たどり着をちからにして來りしを何とて扉をあけ給はぬ日比親たちのよしみは思ひ給はずや其うへ此山中に人倫はなれておこなひすまし給ふ身がわかき女をとめたりとの世のそしりをはゞかり給ふは扨は塵の世をはなれ給ふの道心はおはせぬかやととがむれば道士聞ていやとよ世のそしりはしばらく置我いま道義を修するとはいへ共猶いまだ肉眼なれば御身が色のうるはしきを人なき庵に引いれさし向ふて見るならばいかなる煩惱かおこるべき然れば某がしゆぎやうを害する惡魔外道心魔をふせぐためなればやどりはふつ〳〵かなはずと彼かあはれをよそに見捨身のつゝしみをなしたるとなん是に付て思へば最明寺どのをやどさゞりし娘が遠慮もさる事なるべし殊に最明寺どのは道德すぐれ給ふ故世には老人のやうに思ひなせ共三十歲にて入道し給ひ卅七歲にて逝去し給へば回國は三十一二歲の比にて男ざかりなる時は其身はたしかにおぼゝめす共わき目にうたがふもことはり也されば人ごとにたしかならぬ心をたのみて我身を正しきものと思へど心ほど手綱のゆるされぬものはなしされば孔子は心を論じて出入時なく其向ふ所をしらずあやふき物也との給ひ別して佛法には心は緣にひかれてはさま〳〵に變ずる事を說給ふしかるに佛心はいかなる緣に出あひても其境につれて變ずる事なき故に是を不變眞如といふいまだ佛心にいたらぬ內はいかに道德の人たり共惡緣にひかれては惡業におちいる事をまぬかれず故に衆生の心を隨緣眞如とはいふなり是によつて佛說には心は孤生(ひとりおこ)らずかならず緣に託て起るといへり此心を書寫山一雨ときこへし僧の歌に　にほはずばそれ共しらじゆふま暮心をつくる梅の下かせと詠ぜりうす暮の比むめの樹のあり共しらず心せはしく打通りしを風がもてくる匂にさそはれ心ときめき色よき花の唉みだれしを打ながめてはあかぬ思ひになずみ終に下陰の立さりがたきも緣にひかるゝのゆへなるべし

淨瑠理評注卷之二終

淨瑠理評注卷之三

外題　○大内裏大友眞鳥

むかしの内裏は今の内裏よりは廣く大きにして南北卅六丁東西二十丁なりそれゆへ今の朱雀が古の内裏の朱雀門の跡也今の東寺が禁中の鴻臚舘なりしを後に弘法大師へ給はりたる也かく廣大なりし故大内裏といふ眞鳥筑紫に於て是をうつして宮殿を作りしと也大友の眞鳥は人皇廿六代武烈天王の朝に仕へし人に眞鳥宿禰とも又は平群大臣ともいふありて勇猛なる公家あり此人の曾孫に大友金鳥といふ人勇氣大膽の武夫なりしが後に曾祖の名を取て大友眞鳥と名のり筑紫にをいて謀叛をおこせしを朝廷より宿禰金道に敕して誅罰させ給ふ此淨るりの全躰眞鳥がむほんを金道が退治せるを主意にのするゆへ大友眞鳥を外題とす殊に大内裏を立たるが大事ゆへ別して大内裏とは題號せり其實記は近年板行なりし大友眞鳥軍記といへる軍書にくはしく記せり

○周の世に八士あり一母四乳の伯仲叔季雙生るゝ王佐の才

この事は論語に出たり八士とは八人の學者をいふ周の世に一母双生を四たびに乳て兄弟八人を出生せり四乳とは四たびに乳といふ事也伯中叔季とは唐にての兄弟の次第也日本にてもむかしは宗領を太郎とよび次男を次郎三男を三郎などゝ次第して呼しごとくに宗領を伯とよび其次を仲とよびその次を叔とよび末子を季とよふ也故に太郎次郎三郎四郎といふがごとし扱ふたごを双生といふは卽ち双生るゝといふ意也王佐の才とは天王の天下を治め給ふを佐る程の才能といふ事也周の世に此兄弟八人が士となり天下をおさむるほどの才能有しと也是迄双生の才能すぐるゝ事をいひて金道になぞらへたる也金道はもと双生なるゆへなり

人に雙生樹に連理康叔が二穗の稻王瀋が二莖の瓜

人に双生ありて其才能すぐれたるをめでたき御代の吉瑞とするのみならず樹には連理の枝をめて度事とす連理とは根が二株にて枝が一つにつらなるをいふ康叔とは周の文王の子にして衞の國の君也

此人が衛をおさめたる時異畝同影とて田地のならび畝に禾のかぶは二株にて畝を異ながら穗先が一つになりたるを吉瑞也とて天子へ奉りければ朝廷にもいわひ給ひて嘉禾といふ文を作り給へり王濬は晉の武帝の時の人也此王濬といへる人の園の内に瓜の莖二本が一つになりてその末に瓜が一つなりたるを是も吉瑞として天子へ献じて祝へり是みな人の双生のごとく天下の吉瑞とする事也されば金道の双生にて有しもめでたき御代のためしとなり

みな是代々の吉瑞のためしを爰に日の本や文武天王の皇居ある藤原の宮所

吉瑞とはめで度瑞相也上にいふ所の吉瑞とものたとへをこの國へひくといひかけてたとへを爰には日の本やといふ金道の時は文武天皇の御宇也此時ならの京ゆへ藤原の宮所といふ宮所とは天子の御所といふ事也是も古は下々の屋敷をも宮所といひしを秦の始皇の時より始て天子の御殿にかぎりて宮壞所といふなり

土地がよく腴て膏のあるごとくに潤として柔なるをはらゝぐといふ是は書經の禹貢の篇にみへたり

今上

何の代にてもその時の帝を今上皇帝といふ也

聖德ふかく

聖とは德の至極にいたりたるをいふ

神代の古風

天神七代地神五代を神代といふ此時は上代ゆへ上下共に人の心すなほにして質朴なる風なりしを古風といふ

四十二世

文武天皇は人皇四十二代なり

律令をはじめ給へば

律令とは朝廷の法度おきてなり

禮樂たゞしく

天子の天下をおさめ給ふ根本が禮樂なり禮は貴賤上下の等をわかちて其身の節につけて衣服道具等も次第あり朝廷のつきあひにも貴人をうやまふ等也樂は聖人の道德をうたひて樂に合せ舞也是も禮がたゞしければ貴賤上下のあらそひなく上下が和

して樂を用る故禮と樂との二つが世を治むる本となる也

主水司の貢の氷ひむろのもたひ

禁中にて水を支配する役所を主水司といふ六月朔日に主水司より舊冬の氷を奉る是を氷のためしといふ四海ゆたかなれば其氷とけずしておほく有といへり是は山里に氷室とて冬のこほりをたばひ置室をこしらへ六月朔日に其里人が主水司の取次にて天子へ奉る也毎年きはまりて春日野のさと人が献ずるが佳例なり貢とは下々より君へたてまつるをいふかすが野とは今の奈良なり

深山幽谷

おくふかき山を深山といふ歌には深山とよむ也おくふかき谷を幽谷といふ也

陽氣におそく發するゆへ

草木みな陽氣にて發生する也春は陽氣が發する故梅さくらに花さくが常なれ共深山幽谷は寒氣つよきゆへおそく發するなり

鳩は三枝の禮ある鳥

鶡爽全書云烏有二反哺之孝一鳩有二三枝之禮一云々烏は巣だちして後おや鳥へ哺をふくめ返すもの也是すごもる内におや鳥に哺をふくめられし恩をおくるの心也鳩は木の枝にとまる時おや鳥よりは三枝づゝ下にとまるもの也これ親をうやまふの禮ある心也されば詩經にも諸侯の夫人を鳩の性の專一なるにたとへてほめたる事あり

鷹は鷙鳥

惣じて鷹はやぶさ鵰(くまたか)などの諸鳥を鷙鳥(うつとり)をすべて鷙(し)鳥(てう)といふ同じ鳥類の命をうちとるゆへ惡鳥とする也

仲春の月鷹化して鳩となる事禮記には見へたれ共

禮記に月令篇とて十二ヶ月の月々の氣候を𢈘るして其時を𢈘り天下へ令し給ふ事を𢈘るしたりその中にこの語出たり

天地の變怪

天下に惡事おこらんとてはさまぐ\にあやしき事あるを變怪といふなり

百官百司

禁中の百の官人百の司なり司とは一役をつかさどる役人なり

躑躅と
けだものヽ兩足を折ておどる體を躑躅といふされ
ばつヽじの花を躑躅花といふも此花のつぼみ羊の
乳によく似たるゆへ子羊が是を見て母の乳ぞとお
もひて躑躅と足を折ておどる故也とぞ

小牡鹿
ちいさき牡鹿をいふ

秦の趙高
秦の始皇天下を取てのち諸國をめぐりて途中にて
崩ず李斯といふ者と趙高といふものと兩人共に佞
人にて始皇の太子扶蘇といふ人の正しき人がらな
るを忌恐れ此人を嗣にせずその弟の胡亥といふ人
の愚なるをかれらか便として始皇の遺言也と僞り
て扶蘇を自害させ胡亥を位につけたり右の趙高は
もと宦官とて女中につかはれ奧方へ徘徊し始皇の
氣に入て御前近く立身せし者なるが此たび我はか
らひにて胡亥を位に立たるにほとり朝廷の臣もし
おのれを恐れざる者はたちまち罪に落しけるが猶
も己れが權威を試んとてある時鹿を奉りて馬也と
いひければ胡亥あやしみて羣臣に問にみな趙高が
權威におそれていかにも馬也とこたへし也是より
人をうつけにしては馬鹿なりといふ詞はじまれり

前　表
先だつてあらはるヽをいふなり

九州の探題
探題とはもと大内にて政をゑらべ給ふ役にあたる
をいふ但し題を探といふ事にて古文をぎんみして
ゑらぶる意也諸國にて一方の惣頭となるをむかし
は探題といへり眞鳥は九州の旗がしら故かくいへ
りされば今の俗に物をぎんみする事をたんだへる
といふも此こヽろなるべし

靈佛靈社
靈はあらたなる事をいふ

兩部の社
神道に唯一と兩部との二つあり伊勢加茂などのご
とき佛をいむは神道一すじに立るゆへ唯一神道と
いふ兩部といふは神道に佛法をまじへ神の本地は
佛にして神は佛の垂跡也と立る故神佛を合せて兩
部といふなり

武　士

武士をもの丶ふといふは日本のむかし物部氏の人朝廷にてはじめて武官をつかさどりたるゆへ後の世迄も物部とよぶなり

兵部省

省は禁中の役所なり禁中には八省とて八所あるその中に軍兵をつかさどる役所を兵部省といふなり

つの髪

わらべのひたいの兩旁に髮をつかねて結たるは角のごとくにみゆるゆへ唐にては童のまへがみを丱角共又總角共いふ和訓にて角がみ共あげまき共いふ也みな前髮の事なり

不　肖

我身を卑下する詞也もとは肖[に]ざる事にて賢人には肖ざるとの意なり

とび梅の筑紫

菅丞相つくしへ流され給ひ都の梅を忘たひこちふかば匂ひをこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそと詠じ給へば都にのこし置れし梅たちまちつくしへとびさりしとの故事をふまへていへり尤作者の頓作なり

堂上堂下

公家衆を堂上方といふいづれも官位を經て御殿の堂上へあかり給ふ家なる故也公家にあらざる官人を堂下とも地下人共いふ堂上へあがる事を得ず階下に伺候するゆへなり

軍神の血祭

軍に出る時に軍陣をまもる神を祭るにはけだものの生血をそ丶ぎ其肉をそなへるを血まつりといふ唐よりして其ためしある事也

馬　鹿

上に出たる故事をふまへて馬鹿もなしと書たる作者のはたらき也

王　化

天子の敎化といふ事なり化はおしへなり

ふりわけ髮

いとけなき時のまへがみを中より二つにわけたるをいふ歌にくらべこしふりわけがみも肩すきぬきみならずしてたれかあぐべき

三種の神器

天子の御位をゆづり給ふに此三つの御寶をゆづら

せ給ひて御しるしとし給ふ神璽寶劍内侍所なりこの三つ代々の天子御くらゐをまもらせ給ふ御たから也

瀟湘の夜の雨

からの八景のひとつ也うたひの文句を直に引もちひたり

手向山

たむけは近江の名所なり菅家の御歌に（大和なり大和山城の境にあり）此たひはぬさも取あへす手向山もみぢのにしき神のまに／＼

かたそぎや

やしろの棟のかつほ木也上代は質朴にして神の御殿も茅ぶきゆへ風をおさへるためにかつほ木をもちゆかつほ木は風おさへ木といふ事也その端をそぐゆへかたそぎといふ是も神代の神は内へそぎ人王以後のかみは外へそぐ也口傳也

額づきて

ぬかはひたひ也ひたひを地につくるをかくいへり

柏　手

神道にかしはでのはらひとて神をおがむに手を拍てはらひする事ありこれにいろ／＼の口決ありて神道に傳授とする事也

かへりもふし

賽と書なり神を拜して祈念する事なり

瓢簞酒

うちみの藥なる故なり

瑞　籬

神前の垣をいふたまがきといふに同じ瑞はあらたなる意なり

庶　流

宗領のすじを嫡流といひ次男すじを庶流といふ也

孽子（げつし）

妾ばらなどの末の子といふ事なり

傅（かしづき）

いとけなき時より其人の傅（もり）につきて諸事をおしゆる役なり

國に杖つく

つえは老て歩行をたすくる也禮記の王制に五十にして家に杖つき六十にして國に杖と云り

金巾子の冠袞龍の御衣

巾子は冠の髪をおほふ所をいふ其うしろに立るものを羅といひ其うしろにたるゝものを纓といふ巾子を金にてしたるを金こじといふ袞龍はのぼり龍くたり龍を袍にゑがく裝束をいふ金こじのかんふりにこんりやうのぎよいは天子のよそほひなり

こうがゑやり

甲が舍利也甲はよろひと訓じて甲虫といふは龜や螺蛤などのかたくよろひたる惣名也舍利はもと梵語なり翻譯名義集に舍利こゝには骨といふとありかの甲虫のごときかたき物が骨となる共といふ心也

補佐の臣

補佐はたすくるとよみて君のたすけとなる臣をいふ

九州二嶋

九州に壹岐對馬をこめていふなり

掖門の扉

正面の門の兩旁に小門あるを掖門といふ人の脇の下のごとくなる故也掖は脇と同じ

大紋

布びたゝれの事なり

なまめく

媚の字也うつくしく艶しきなりふり也

伽やらふ

今は旅人のつれ〴〵をなぐさめの伽をやらふといふ事に成たれ共もとは下ざま惣嫁やうのたぐひは土の上野中などの契りなれば唐土の書にも是を土妓野合といふすべて世俗の僻言そのいはれある事おほし但したび人なぐさめの伽にやらふと轉したるも又一興也

おもゝち

面もちといふ事也源氏に見へたり

船玉

ふねをまもる神なり

九百九十九の鼻かけ猿

此こゝろはきこへたるとをり也但し文選六臣注季善が注にみへたり

景行天皇

人皇十二代の天子なり鹿嶋もふでの事は本朝通記にみへたり具あはせの始り此淨るりの本文のごと

し

兩夫にまみへぬ敎訓

通鑑に出たる齊の王蠋が詞也燕の國の大將樂毅といふ者齊の軍をやふりたる時王蠋か賢者なるを玄り燕につかえん事をすゝめける時王蠋がいはく忠臣は二君につかへず烈女は二夫にふれずといひてうけがはさりしと也是より貞女は兩夫にまみへずといふ詞あり

尾に泥をひく龜山

莊子に諸侯より莊子をまねきし時うけかはすして云けるは卜のためにもちひらるゝ龜は人が尊敬をなせ共かへつて其身を殺さる泥中のかめは尾にどろを引て見ぐるしけれ共無事也と云り是を取て龜山に恥をあたふる詞にいゝかけたり

逆鱗

龍の頤にさかさまに生たる鱗あり此うろこにふれたる者はかならず死するゆへ天子のいかりにふれたるものはかならずいのちをとらるゝにたとへて天子のいかり給ふをいふ

綸言ふたゝひ歸らぬと汗をぬくふて立歸る

古語に綸言如汗とあり天子の詞を綸言といふ天子の詞一たび出ては跡へかへらぬ事身の汗のふたゝび歸らぬかことしと也此本文にはりんげんよりあせをぬくふにいひかけたり是作意なりてんば

顚婆と書也顚き婆といふ事なりいぶせき

詩には無聊といふ源氏岷江入楚に不審と書りすゞめかまたか

これは鴉かきの山椒也すゞめは百に成てもおどりわすれぬといふ諺より取て百をすゞめといふ股とは一本との義にて二百をいふ

骨肉同胞

兄弟は同じ骨肉をうけたる故こつにくといひ同じ胞にむまれしゆへ同胞といふ

みさほ

操とも介とも書て共にみさほと訓じて人のまもりめのかたきをいふ

旣に孔子も季孫のうれひ蕭墻のもとにあらんとの給へり

此事論語に出たり魯の國の季孫氏といふもの君をないがしろにして政道を我まゝにさはきしか魯國の傍なる顓臾といふ國をうたんとする事を孔子聞給ひて季氏がごとく我まゝにては臣下の内より亂がおこるべしといふ事を季孫のうれひは顓臾にはあらずして蕭墻のもとよりおこらんとの給へり蕭墻とは外門と内門との間にある墻也畢竟は季孫が家内より亂がおこるべしと也俗にいふ足もとからおこるの意なり

聰明睿智

耳に善惡をきゝたかへぬを聰といひ目によしあしをあきらかにみるを明といふ睿はふかき心にて智の千萬人にすくれたるをそうめいゑいちといふなり

つたへきく燕丹王

この事史記に出たり秦の始皇は燕丹の敵ゆへ人をたのみてころす事をもとめ田光先生といふ勇者にたのまれしに田光がいはく某は年老たればうつ事かなはずといへ共我友に荊軻といふ者あり是をたのみて本望をとけ参らせんとてけいかゞもとへゆく時燕丹王田光を門外迄おくり出この大事かならず人にもらし給ふなと申されしかば心得たりとてやかて荊軻か方へゆき此事をよく／＼たのみて田光はけいかゞ門前の李の樹にかしらを打わり死したり是ひとへに燕丹王がうたかひをはらさんかため也今かすへの身のうへに尤よく相應したる故事にて尤おもゑろし

此やい鎌のとがま

中臣秋にやいかまのとかまをもつて切はらひ給へはといふ語あるをすぐにもちひたりかねみちか鎌を持ての所作なれは尤とりあひよき作意也

邯鄲鏌耶

晋の雷煥といふ者天にむらさきの雲氣たなびきしを見て其下をほりたればつるきの鏌（したぢ）となるべき鉄丸二つを得てすなはちこれを地がねとし干將ばくやといへる夫婦のものに劔をうたせて名劔となる是より名劔をいふにはかならずかんゑやうばくやと稱するなり

孝弟忠信

孝はよく親につかふるをいひ弟はよく兄につかふ

るをいひ忠は君によくつかへ信は人にまことを立るをいふ此四つのものは人道のおもんずる所なり

三段目
猩々よく言へども獸をはなれず

禮記曲禮篇に鸚鵡よくものいへども飛鳥をはなれず猩々よくものいへ共禽獸をはなれずといふに本つきたり人として禮義をしらざるはきんぢう同然なりとの意なり猩々は面は人のごとく身は猿のごとしとあれば此語に引つゞきて獮猴をいへるも取合よろしき引ごとなるべし

獮猴の冠

是は楚の項羽みづから覇王と稱して我まゝ無禮をおこなひしを餬徹といへるもの是をそしりていへる詞也今の眞鳥が無禮我まゝに引あてたり

麒麟大王

きりんは四靈の一つにて毛蟲三百六十の長なり身はくじかのごどく尾は牛のごとくひつめは馬のごとく額に一つの角あれ共つのゝ端を肉がおほひて物にふれずされば生たるものをくらはず生草をふます至て仁ありけだもの故その德を聖人になぞらふ眞鳥みつからほこりてかゝる德ある號を稱せしと也

卿相雲客

卿は天子の朝廷にてまつりごとを相(たすく)る官ゆへ卿相といふ天子の殿上を雲のうへになぞらへて殿上人を雲客といへり

浮へる雲のうへ人

論語に不義にして富貴なるはうかへるくものごとしといふ孔子の語あり此語のこゝろは有もなきかことくなるをうかへる雲といふ又あぶなき事を浮雲共いふこゝの文句右の兩意をかねてしかも雲のうへ人といひかけたり

しらぬひの筑紫

むかし景行天皇海上より火のみゆるを見給ひて御船を其火のある所へ着しめ給ふすなはち今のつくし也是よりしてつくしといはん枕詞にしらぬひといふなり古歌におほくよめり

色やむかしの色ならぬ

春やむかしの春ならぬと詠したる古歌のもじりなり

麻につるゝ蓬

此語の出所つまひらかならす童子教にもこの語あり意はあさの中に生たるよもぎはあさにつれてなをく立のびるとなり

子を妊では寝るに側ず座するに邊ず立に蹕ず

是は漢の劉向といふ人の作りたる烈女傳といふ書の語をすぐに引たる也是は胎教とて懐胎の内のおしへ也

姫ごせは三界に家なし

三界の事はこゝに出あふ事はあらね共俗は世界の事をさんかいといふ故俗説にしたがひていひたる也たとへは子はさんがいのくびかせなんどいふも皆せかいといふ心にもちゆ女に家なしの事は女は夫をもつていへとすと禮記にもみへたり又は孔子の語に婦人は三従の道あり家にありては父に従ひ人にゆきては夫にしたがひおつと死しては子にしたがふあへてみずから遂る事なしとありみな家なしの義なり

よめいりを歸るといふ

詩經の注に朱子のいはく婦人謂嫁爲歸といへり是も女は夫をもつて後はおつとの家をわが家とするゆへ嫁は我家へ歸るの意也となり

猶豫せしに

事を決せずしてためらふをゆうよといふ猶はけだものゝ名也此けだものうたがひ多くして人が來らんかとおそれ樹の枝へかけのぼれ共樹のえだは安からぬ故たちまち地へおつれ共又人をおそれてのぼり又くだりてふだん居どころを決せず豫は犬の事也いぬは主人に付したがひて主人の行さきに待ゐるもの也若かへり來る事おそき時はいかゞとうたがひて往つもどりつするなりしかれば猶も豫もうたかひてさだまらぬこゝろをいへり

形容枯槁

形容のやせかれておとろへたるをいふ屈原が漁父の辭に出たる語なり

つくも髪

藻をみるごとくばら／＼として見苦しき髪なり江澤藻と書なり

夫歸は義合

五倫の内に天合義合の別あり父子兄弟は天然と生れ合たるもの故天合といふ君臣や夫歸や朋友は今

日のうへにて人と人とのやくそくつくにて義理をもつてまじはりをなす故義合といふ也

はらから

兄弟をはらからといふ伊勢ものがたり初段にいとなまめいたるおんなはらからすみけりとあり

恙なければ

いにしへ恙といふ蟲ありて人を害せしゆへ人の無事なるをつゝがなしといふ

いふに岩手の神ならで通ぜん事もあら氣の雅道

役の行者大みね山上をひらき給ふ時神をつかひて道を作らしめ給ふに日をへて成就せさりし程に行者これをいかり給へは一言主といへる神そのかたちの甚だ醜を恥て夜ならではたらき給はぬ故かく延引するよし岩手の神かうつたへられしかは行者やかて一言ぬしの神をしはり給ふ事元亨釋書にみたり其故事をふまへて書たる文段にて尤よくかなひたり

琉黄が島

薩摩にある島也輕大臣燈臺鬼となりて此島にて死せられしより鬼男が島共いふよしくはしくは眞島實記といへる軍書に出たり昔より科人をながすところ也

地獄へみちびく五逆罪

往生要集に一百卅六地獄を出せり八大ぢごくにおの〳〵十六づゝの小ぢごくありて八大ぢごくを合せて百卅六となる也五逆罪は父母を殺し佛身より血を出し和合僧をやふる等の五つ也

丸がはからひ

此注はあしや道滿の初段にくはしくしるす

順逆の二門忘緣にあらざらんや

佛語也人の生死老たるか先へ死しわかきがおくるるは順也わかきがさきだち老たるがおくるゝは逆なりこの順逆の二門ありといへどもともにりんゑのきづなをきりて緣をわするゝの端にあらずといふ事なしと也

傍若無人

晉の桓溫といふ人王猛といへる高官の人の前にて道をかたるに虱をひねりながら物がたりせられし程に其さま傍に人なきがごとく見へたるゆへ是よりして法外なるはたらきを傍若無人といふ也

さすらへ
左遷と書もとは官職を貶らるゝ事なれ共今では流罪の事にもちゆるなり
欣然と席をあらため
きんぜんはよろこばしき體也席は座なり
双六かてうばみか
てうばみといふ事源氏にみへたり今いふおりはの事也おりはといふもの塞の目の偶にてとる故にいふ偶食と書なり食とは石を取事也十六むさしに食といへるも是より出たり
皇后も御懷胎
人皇十五代神功皇后なり御くわいたいにて出陣し給ひ新羅高麗百濟をうち御凱陣のみぎり筑紫にて譽田の天皇を產給ふとなり
子をもち月のいわた帶
みちのくのならはしにて我戀にして妻とらんとおもふ女の門ぐちに手拭ふくさやうの物を竹につけて立をく是を緣むすびのしるしとするなりこれをいわたおびと名づくとなり
口さへいまだ乳くさき大將軍
史記漢書等に大將のわかきをあなどりていふ詞に口尚乳臭といふ語ありそれを取て國石が至て幼稚にして大將となるをいふ
勢ぞろへの段
五大力
五大力ぼさつとて夫婦の緣守りの本尊也津の國にも住吉の神宮寺に有
ゑびにいふてぞ通りける
ゑびは自饕也自身に髮をいふ事なりこゝは自身にほめる事に取なしてそれより自讃にもいひかけたりおぐしあげが口上にはよくかなひたり
九牛が一毛
九は老陽の數なれば數の至極として物のかずおほき至極をかならず九をつけてよふ九天天淵九重の類のごとしされば多き牛の中での一毛といふ心にて大海の一滴などゝいふにおなじ但し佛書におほき語なり
婦人城
是は晋の朱除といふ者の母軍勢を引うけておほくの女を士卒とし籠城せし事あり世に是を婦人城といふくはしくは晋書に見えたり

一聲の玄鶴そらになき巴峡秋ふかし五夜の哀猿
是は圓機活法に出せる詩の語也作者はつまびらか
ならずあきの比巴峡といふ山道を夜のくらきにと
をりたる景象を詠じたり闇の夜の物すごきに鶴の
一こゑ物かなしき折しも猿のさけぶこゑいとあは
れにきこへて心ぼそくなるとの意也この城外へゑ
のびきたるもやうもかくやあらんとなり
秦の儒除が母
是はあやまり也晋の朱除が母也前にいひたる婦人
城の故事也歴代に外の例なければ必定あやまりた
る也作者いかゞこゝろへられしや
扨は双方手はおはぬなこはいかにともぎ取て火影に
すかし能みればきれぬこそ道理なれ是も及引これも
及ひき
文句はきこへたるとをり也
評、ある人難じていはくこゝの及引の文句のてに
は初の是もといふがきこへす是は及ひき是も及引
と書べき事也其故はもとてにはは旁及の詞とて一
つ主なる事ある上に是もといふ事也是は及引と一
方を見て又次に今一つをみれば是も及引也といふ
べきを最初から是も及引といへるは作者のそこつ
殘念なりいかん、答て云これ文章の法を志らぬ難
也漢文にこの格おほき事也和語のもといふてには
は漢字の亦の字のきみなりたとへば翰文に賢者亦
有ニ天者一不肖者亦有ニ壽者一といへるも上の亦は下
の亦へかけていひ下の亦は上の亦へかけていひて
兩方をもちあはせたるもの也是に同じく上の是も
及引といへるもは下の是も及引といへるもにかけ
下の是も及引といへるもは上の是ものもにかけて
いひて兩方をもち合せたるゆへ結句文の法をよく
知て奇に書なしたる作者の器量のみゆる所也それ
を志らずかへつて咲する事文章にうとき故也、難
者又いはく文法はさもあるにもせよ人形に合せて
みるべしまづ一人の及を見て是は及引とおどろき
次に又一つをみて是も及引といふべきをあたまか
ら是も及引といへるは何に對して是もとはいへる
ぞ心得かたし尤作者は二腰ながら及引とする趣向
にて書たるゆへ作者の心には初より兩方及引と志
りたる故あたまから是もといふ詞出そうなものな
れ共虎王が一方を志らぬ口からは是もとはいふま

じ是作者が我心をすぐに書たるはあやまりならすや、答云この時虎王が人形はいかゝつかひたるかもしられね共もし兩腰を二度に見たるやうにつかひたらば人形遣のあやまり也作者のあやまりにはあらずまづ淨るりの文句を跡先よくみるべし虎王が心に双方共手をおはぬをふしんし双方一時にもぎ取て火影にすかしてよく見ればきれぬこそ道理なれ兩方共に及引也との意也火影にすかしよくみればといふ内に二腰をためつすがめつとくと見たる心こもれりさればこそ兩方共に及引なるを見とゞけてきれぬこそ道理なれ是も及引是も及引といひたるが何とあやまりといふへきや、難者此一句に閉口しうなづいて退きぬ

十月にたらぬおろし子の諸佛一度に御聲をあげなげかせ給ふ御なみだ

是はくめのもりひさ地獄の名ときといふむかし淨るりの古文句をすぐにはめ句にしたるもの也今のわかき衆は多くしらさる所なり

もろこし衞の國出公輒

しゆつこうてうといへるは衞の靈公の孫にして蒯聵の子也くわい〳〵罪を得て衞の國を立のきたる跡にて靈公死し給ひしゆへしゆつこうてうを君とすしかるに蒯聵このよしをきゝ國へ歸りて衞の君とならんとすしゆつこうてう是を入まじとして軍おこるこの時子路といへる人しゆつこうてうにつかへゐたる故しゆつこうの父をふせぎ給ふをいさむれ共しゆつこう聞給はぬゆへしゆつこうのゐ給ふ樓を燒んとせしをやがて矛にてつきころされたり此事くはしく史記にみへたり

首陽山の伯夷叔齊

これも史記に出たり伯夷は兄しゆくせいは弟にて孤竹といふ國の君の子也周の武王旗をあげて殷の紂王をほろぼさんと出陣し給ふにこの兄弟武王の馬前にすゝみ臣として君をうつ事あるべからずとて轡を取ていさむ左右の者共是をころさんとせしを太公望見て義者也といひていのちをたすけゝる其後周の天下になりしかば武王の德をけがれたりとして周の粟を食ふ事をはぢ首陽山といへる山へ引こみ蕨を折てくらひ終に飢て死したり

娑婆と冥途

名義集に娑婆こゝには忍土といふしやばは梵語にて唐の詞にすれは堪忍土といふ事にて娑婆世界はもろ〳〵の苦を堪忍せねばかなはぬの意なり冥途とは和語のよみぢといふ事也

一重つんでは兄のため

是よりさいの河原を移してものもらひする鉢ぼうずの口うつしなり此たぐひの事はなには邊の人ならでは遠國へは通じがたし

あはれはかなき我ら迄

是も地藏の和讃に出る口うつしなり

神力勇者に勝事あたはず

佛力ゆうしやにかつ事あたはずといふ語をなをしたるもの也此理は儒佛神道共におなし事也近くは織田信長ひえ法師と爭論の事共あり怒りて山王共へ社をこと〴〵く破却すこの時當分には何のたゝりもなしかゝるたぐひをいへりしかれ共ついには神罰のがれず明智がために本能寺にをいて自殺せりおそるべし

樗

散木とてやくにたゝぬ木也莊子に出たり

黄泉

人死すれば體魄土に歸すつちの底の泉は濁るゆへにめいどともくはうせんともいふなり

栲器の杜

もと科人を責る時に緊るはしらなり今こゝにてはごくもんの臺をいふ

俑桶

いにしへは貴人の死去の時近習の護衛になぞらへて芻にて人形をつくり死骸にそへてほうむりしを後になりて眞の人形をつくりて俑となつけてほうむる事はじまりたる也今の俗それより取て棺をようおけとよびならはせり

月日をつかむ修羅

あしゆら王が梵天帝釋とたゝかひて日月をつかみし事佛書に見えたり

紅梅のあははませ

馬を急にのりて駈させれば口わきより血まじりのあはを吐をいふなり

威風凛々

其いきほひの物すさまじきをいふ

天下創業の旗あげ

はじめて天下をとるを創業といふされば親のゆづりの天下をうけてまもるを守成の君といひみづから始て天下を取たるをさうげうの君といふ也

力士ごし

りきじとは本名は那羅延といふ佛塔などのやねの四隅に棟を負て鬼がはらのごときが是也はなはだちからのつよきものなり

韋駄天ごし

是も天部の本尊にて足疾鬼が玉をうばひて迯るをかけ給ふもこのいだてんなり

おち坊主の白藏主

つり狐の狂言にあり

道行かくれがの軒もる

山ざとなどに小家をたつらひたるをいふはにふの小屋とて軒もまばらなるさまをいふ

月にこがれ出

あはれをもよほす折ふし月のさえたるにさそはれ出るていなり西行の歌になげゝとて月やは物を思はするかこちがほなる我涙かな

露にやしなふ

月に對して露をいふ袖がうるほひて茨ばらく氣をやしなふとなり

すがり

きやらのたきさしか下著に香の殘りたる故に香取姫といひかけたり本は練とて好絹をいへ共こゝには云かけに用ゆ

契りを

手と手をもちにぎりてちかふ事也もちにぎるを略してちぎりと訓じたるなり

二世

佛說におや子は一世といひ夫婦は二世といひて一蓮䑓生と說給ふかねみちに深きちぎりをかけたるを二世とかねみちといひかけたり

未來のため

佛敎に過去現世未來の三世をたつ過去は前の世をいひ現世とはこの世をいひ未來とはのちの世をいふなり

そぎ尼

そぎとは髮を薙事也大内などにては菩提に入ると

き尼になり給ふとては髪をきり給ふ也是をそぐといふ剃髪にはあらず

うつぶし色

黒き色をいふすべてくろき色に染るには五信子にてそむる也さて五信子は子の中空なるものゆへ空五信子といふ蟬のぬけがらを空蟬といひ人の氣のぬけたるを空氣といふがごとし

けさよりも

今朝と袈裟とをいひかけたり

づた袋

天竺にては乞食を分衞共頭陀共いふ出家の人修行のために乞食に同じく身をなして食を乞て袋へ入るゝ故に其ふくろを頭陀袋といふなり又ふくろの訓は物をいれてふくれるの義也れとろと通ずる故にふくろといふ

かたみに持し

筺とはもと竹籠也繼體天皇いまだ位につき給はず男太迹のの皇子の時西國にて女にちぎりくらゐにつき給ひて後つね〳〵もち給ふ花筺をかの女へつかはし給ふそれより人の別れのなごりにおくるものをかたみといふ也形見とも記念とも書なり

なぎさの

川などのほとりをいふむかし淀川のほとりに宮をつくりて渚の院といふ今の牧方の傍に禁屋といふ村あり又渚といふ村もある也

身なし貝

貝の名にあらず濱邊の貝の殼を身なしがいといふ也

片しく袖のかた思ひ

君まちがほのうたゝねにひぢまくらしたるをいふあはざる戀のことばなり

菩提

天竺の詞なりこゝの詞にては得道といふ佛のみちを得たるのこゝろなり

五戒

一に殺生戒とて物のいのちを取事をいましむ二に偷盗戒とてぬすみをするをいましむ三に邪婬戒とてよこしまなる婬欲をいましむ四に妄語戒とていつはりをいましむ五に飲酒戒とて酒をのむをいましむる也

三　界
欲界色界無色界これを三界といふ今この𛀙やばは欲界なり
家を出たる法のみち
法華經に三界無安有如火宅とて此界を火の宅なりといふ故に佛道を修行すればさんがいの家をいづるの心にて出家といふなり
むすぶすゝきはまねかねど
古歌に花すゝきまねかばこゝにとまりなんいつれののへもついのすみかぞ「ふく風のまねくなるべし花すゝきわれよふ人の袖とみつれは
あだし野の煙
あたなる野といふ事也名所にはあらず嵯峨の奥愛宕のふもとに化野といふ墓所ありつれ〴〵草にあだしのゝ露きゆる時なく鳥部山のけふり立さらでとありこゝには墓所に用ひたり
楊柳觀音
洛東清水のくはんおん也むかし音羽の瀧のみづ五色にみへしを諸人あやしみたづねのぼりしにみなかみに金色のひかりさし朽木の柳に花さきたちまちやうりうくはんおんとあらはれ給ふと也
はた物
刑罰ものを幟物といふ但し唐にてはその傍に罰におこなふ様子を書たる幟をたつる故なりたぐりたぐりといひかけて糸くる體より織機にいひかけたり
千引の石
ものゝ至ておもきをいふ千人もしてひく石となりみちのくに千引の石ありとぞおほく戀によせて古歌によめる人のこゝろのひけどもゆるがぬにたとへたり
戀のぬすみ
貧のぬすみに戀の歌といふ俗言をあはせていふ也
白　浪
ぬす人をいふ伊勢ものがたりに風ふかばおきつ𛀙らなみ立田山よはにや君かひとりこゆらん立田山にぬす人あらんと業平の山をこへてかよひ給ふをあんじて井筒のよめる歌なり
暗はあやなし
ものゝ文采(あいろ)もみへぬをいふ躬恒の歌に春の夜の

やみはあやなし梅の花色こそみへぬ香やはかくるる
かねのみさき
はりまの國の名處なり
諸行無常
涅槃經の四句の文にてもろ〳〵の世にあるものはみな無常にして終には寂滅すると也
ひゞきの灘
是もはりまのめい玄よ也
たまの緒
いのちの事なり
あられ釜
いま茶の湯にもちゆるかまの一つ也あしやかまといふも有ゆへあしやのうらといひかけたり
いさり火
在所の家内にてたく火也ある說に海士の朝にすなとりするをあさりといふゆうべにするをいさりといふと云々いさり火はその時ともす火也と鴨の長明がいへり
評、惣じて此道行首尾全體近年の上作なり玄かしかとり姬がかねみちの首をぬすみとらんとてのびあがりとゞかぬ足のうらめしく世のせいすいやとなき玄つむといへる詞何ぞや世のせいすいといふては其心をだやかならず今すこしあるべき所なるに不自由千萬なるくり言かとり姬には殘念なる不相應の詞なり是おしむべし
四段ノ央
ふとんの内むりやうの玄あんぞこもりける
ふとんといふより織ものゝ文綾と無量とをいひかなへたる面白し玄かし是より前近松が筆に旣にみへたり是は口まね也
經陀羅尼
經は唐の詞にて佛說の惣名玄れたる事也だらには梵語にてこゝには惣持といふとなり
魂魄髑髏
魂氣體魄とて神（たましい）は陽に屬して魂（こん）なり人死する時は天にのぼる體は陰に屬して魄（はく）なり人死する時は地にかへる髑髏は玄やれかうべなり
六根五體
眼耳鼻舌身意を六根といふ五體は手と足とを四體とし首をそへて五體といふなり

四十九の餅
亡者の七々四十九陰に表したるもの也人死してより四十九日の間は中有にまよひていまだ生を受る所さだまらず七日〳〵に生滅していまだ形なく虚空に住して香を食すこの間を中有共中陰共いふと也中陰經にくはしくみへたり

評、ある人難じて云四段目の趣向の内かね道と助八とを見ちがへたるにつきかとり姫がごくもんのくびをかねみちと見ちがへしは死くびなればさもあらん後に助八が家にて眞のかねみちを疑ひし所その意をえずいはんや嫁のお作が近比まで助八と一所にゐてこのたび來るかねみちを助八と取ちがへしはいよ〳〵有べき事ならず世間に双生はよく似るものとはいへ共いか程似たり共すこしはちがひのなくてはかなはずさればこそ世間によく似た人多けれ共取ちがへるといふ事は其ためしなき事也然れば同じ玄ゆかうならば實に見物のうけとるやうにしたき事也惣じて噓もまことのうらにて諸人の尤とうけとるやうに書ではおもしろがらぬ筈也此所いますこし玄ゆかうの未熟なるにあらずや、答て云兄弟のよく似て夫婦の間にも取ちがへたる事唐にもその例あり張伯階といふ人の弟を仲階といひしが其かたち甚よく似て人の取ちがへる事おほしあるとき弟のちうかいが妻うつくしく化粧して立出るに兄の伯階が立てゐたる傍へより我夫のちうかい也と思ひてさゞめごとをいひて手を取しゆへ伯階興をさまし我は兄の伯階なりといひければおどろき恥て立去しが又伯階がたゝずみゐたるを見て是こそ夫ぞと思ひはづかしきたは言をいひたるといふ伯階又我は兄なり仲階にてはあらずといひければいと恥かしく思ひて奥へ入て久しく出る事を得ざりしと風俗通にみへたり是はまさしく枕をかはしたるふうふさへかゝるためし有お作が見ちがへしは尤也又かとり姫がうたかひも既に我手にかね道也と思ひ込しくびがあるうへ最前よりかねみちの狐つきの體を見てはそこつに信せられざりしもことはりなるべし難者尤とうなづいて玄りぞく

五段目
亂臣の榮衣は出沒螢のごとく太陽に照されその身を失ふ

是は古語を取あつめ成語のやうに書たるもの也ほたるのひかりはひかるかと思へばそのまゝきへてある共なきともさだめられぬをえゆつぼつほたるのごとしといふ太陽は日の事也らんしんのえいぐわをなすはやみの夜のくらき間にほたるかひかるごとくなれ共德ある人に出あひては日にてらされて螢のひかりのきゆるごとく終にその身をほろほすとの意也

民を虐

虐は民をむごくする事也今の俗にいふ人をせめせたげるといふが此字なり

課役をかけ

課はおほせるとよみて日に幾月はいくらといふ員數をきはめて公儀へ役をとる事也

金殿紫閣

こがねの御殿むらさきの閣にて美をつくしたるをいふ三體詩に金殿當頭紫閣重といふ詩の語を取て用ひたり

鬪鷄

には鳥合せの事也鬪鷄とて唐にもあり

闕々

御殿々々也禁中には御殿の門に高樓ありて其兩掖を闕たるごとくに門をあくるゆへ掖門とも門闕ともいふそれより取て御殿を闕といふなり

大宮人

禁中の人をさしていふ貞任が歌にわがくにのむめのはなとは見たれどもおゝみやひとはいかゝいふらん

東天紅

にはとりの時をつくる聲也文字のごとく東の天くれなゐなりといふ事にて夜あけをつぐる鳥のこゑをいふ

てうけける

寵戯と書人をなぶる事也今も北國仙臺あたりの詞に物をなぶるを寵するといふこの字也

秋津島

和國の異名なり秋津はもと蜻蛉の事なり日本の地形あきつむしに似たりとてあきつしまといふ也

評、此眞鳥全體上出來おさ〳〵近松がえゆかうにおとらぬ所おほし双生のいりくみ始終にわたりお

作かとり姫が二度のびつくり助八が養母のくり言まとりが猛惡かねみちが勇氣女の勢ぞろへの發明ひとつとしてぬけめなしそれゆへ見物のよろこび數月の大入を取し事作者のまんぞく座本の大慶いはん方なくいかなる家にもねずみの糞と眞鳥の本のなき所はなかりき

浄瑠理評注卷之三終

浄瑠理評注卷之四

外題
○國性爺合戰

此浄るりの一體は大明の末に思宗烈皇帝の御子福王南京にて卽位ありし時先帝の時より韃靼王中國へせめ入り北京を居城として又なんきんへせめ入此福王をもほろぼさんとするに先帝につかへし鄭之龍といふ者先帝御存生の折讒言にあひてやうやう命をたすかり日本長崎へわたりそれより肥前の平戸にて妻子をもふけしが大みんの亂いまだしづまらざるを聞て妻子を引ぐしふたゝび大みんへ歸り一子國性爺と共に明朝の味方をなして韃と合戰する事をしるせり始終こくせいやがはたらきを第一とするゆへ此外題を置也しかし性の字を性の音にとなへさする事いぶかし是は唐の土地の名や人の名などは唐音にとなふる例もあるゆへ作者の狡黠にて性の音をはねて國性爺とかなを付たりとみゆ松江の鱸を松江のすゞきととなへさせ南京を南京とよぶ例也と思へるなるへし然れ共性は唐音にはせいは性なり性にはあらず殊に唐音にてよぶならば國性爺の三字共みな唐音にして國性爺とよぶべき事也されば共人の名に限りて唐音にとなへしに從らなければ國性爺ととなふるがよしと知るべし是等はもし浄るりをもてあそぶ人々學者などにふしんせらるゝ時の心入レなれば辨じ置也世上のかたりならはしなればかたるは國性爺とかたれ共根はとくとせぬ事也わきまふべし

序
花とび蝶おどろけ共人うれへす水殿雲廊別に春をおき曉日よそほひなす千騎の女

是は鄴宮を詠せし詩の詞にて陸龜蒙が作すなはち三體詩に出たり此意は花がちる故春の盡んとするを見て花にたはむれし蝶はおどろけ共宮中の人はうれひなしその故は帝のおごりにて禁中には水をゑがきたる御殿や雲をゑがきたる廊などが有て其内はいつも春のたのしみ有て世間とはかくべつに春を置たると也さて曉がたには千騎もあつまりし宮女共が靚粧て白櫻桃の下にてむらさきの綸巾をいたゞきてたはふるゝと也此奥にせんだんくはう女の緣さだめに女官の花軍があるゆへ其事に

あてゝ此詩を序文とする也殊に兄みかどは奢つよくして多の宮女に花いくさをさせ給ふ事實錄にも有ル事なれはかれこれよく相應したる序也

紅唇翠黛色をまじへ

宮女共が口臙をよそほひ翠の黛をかざりて色をあらそふとなり

三夫人九嬪廿七人の世婦八十一人の女御あり

禮記に天子につかふる宮女の數をゑるしたる通り也夫人は本妻也嬪より下はみな女官なり嫡妻にあらず

をよそ三千の容色

禁中に內家叢とて宮女のあつまる後宮ありて其內に容色ある女くはん三千人ほどあるをいふ也

諸　侯

一國を領する君をいふ日本の大名と稱するがごとし

二月中旬に瓜を獻ずる榮花也

唐の王建が花淸宮に題する詩に內園分ニ得温湯水ー二月中旬已進レ瓜と賦したる語を取ていふ瓜は六月にならでは熟せぬ物なるをたいりのそのゝうちには温湯の水をわけ取て種をくたし二月中ゑゆんにはすでに瓜をすゝめまつると也榮耀の體をいふなり

越羅蜀錦

越の國の羅蜀の國の錦いづれも名物なり

侍女阿監

侍女はおもとひとゝよみてこしもと也阿監は女中かしら也

珊瑚のたま

珊瑚樹は海底にある樹なり八月十五夜の滿月に是を取て珠にみがく也七寳の一つなれば至て重寳するにたとへたり

虎の皮豹の皮

虎は山獸の長にしてかたちは猫のごとく大さ黃牛のごとく黑き章あり爪は鉤のごとく牙はのこぎりのごとく兩眼はなはだ光あり一目よりはひかりをはなち一つの目にては物を見るその皮甚だ貴とす豹はなとらと訓ずれ共虎とはかくべつ也毛色は赤黃にして黑文ありといへり

南海の火浣布東海の馬肝石

火くはんふとは布也但し火中に火を食する鼠あり其ねずみの毛にて織し布也垢づく時は火中にて燒ば白くなるもし水へいるゝ時は損ずる也ばかんせきは馬の肝に似たる石なりと也

米粟

粟はあわとよめ共日本の稷の事にあらず米のいまだすらざるをいふ日本にいふもみごめなり

三皇五帝孔孟のをしへ

三くはうは伏義神農黄帝也五帝は少昊顓頊帝嚳堯舜なり孔孟は孔子と孟子と也其敎は仁義忠信人倫の正道也

五常五倫の道

五じやうは仁義禮智信なり五りんは君臣父子夫婦兄弟朋友なり其まじはりの道は親義別序信也これをも五常といふ

斷惡修善

惡を斷て善をおさむるをいふ

道もなく飽迄くらひ暖に衣て

孟子に飽までくらひあたゝかにきて逸居して敎なきは禽獸に近しといふ語あるに本づきていふ口には飽迄物をくひ身にはあたゝかなる程物を着て人の道をしらぬは禽けだもの同然なりと也

北狄

中國の四方のはしぐをゑびすといふ俗のいふ大いなるなりたつたんは北のはづれ故ほくてきといふ

官仲が九たび諸侯の會もかくやらん

周の世の末に天子の御家おとろへたる故天下の諸侯勅命をもちひざるゆへ齊の官仲といふ人その君桓公をもり立て諸侯の伯とし天下の諸侯を會して國々をよくおさめさせ天子をたつとむやうに下知したる也それゆへ天下のゐよこう天子の威にはおそれね共桓公やくはんちうにおそれて我まゝをなさずそれゆへ天下が靜謐なりし也

伍子胥が余風

ごしゐよが眼をくりて呉の東門にかけし事前にゐるせり余風とは其余りのふせいにてなごりのこりたる體也

范蠡がおもむき有

はんれいは越王勾踐の忠臣にて越王をもり立て呉

王を討しめたり呉三桂が君を玄ゆごするにたとへていふ

萬乘の位

天子のくらゐをいふ禮記の王制に天子は萬乘の國諸侯は千乘の國といひて天子の御領地は軍車を萬乘いたす程あるものゆへにいふと也

頭にさせば二月の雪と散もあり

折二梅花一挿レ頭二月雪滿レ衣といふ詩の句のこゝろを取て書り

一家仁あれば一國仁をおこし一人たんれいなれば一國亂をおこす

大學の語をすぐに書り君の家一つか仁愛の風になれは其敎が下へおよびて一國中が仁愛のならはしとなり君一人か貪欲無道なれば下もそれを見ならひて國中が亂をおこすとのぎなり

五刑の罪

つみに輕重ある故刑罰の法に五ヶ條あるを五刑といふ五刑は墨劓剕宮大辟なり墨とは科人の額を刺ていれ墨をするをいふ劓は鼻を斷をいふ剕は足を斬をいふ宮は男なれは勢を割女なれば幽を閉るをいふ大辟は斬ころすをいふ

宗廟の神

先祖の神靈を祭る處を宗廟といふ宗は源にて先祖は子孫のみなもと也との意なり廟は神主を置殿也廟は貌也とて先祖の貌にかたとるとの義なり

大の字の金刀點

筆法に點の名さま〴〵あり大の字は三點にて大の字の一文字を玉案と名つけ左へひく點を犀角と名づけ右へひく點を金刀と名づく其形刀の身に似たるゆへなり

震翰

天子の御筆をいふ

かし水

米をあらふ水也淅と書也もと米をたくを炊といふゆへそれより取てこめを炊んとてあらふみづゆへかしみつと訓ずるなり

龍顏

天子の御顏をいふ天子の德を龍にたとふるゆへ也

刄のさびは刄より出て刄をくさらし檜山の火は檜よりいでゝ檜をやく

この語は成語にあらず是は作者が意をもつて造語たるもの也藍よりいでゝ藍より青く朱を研て朱よりもあかしなんといへる語の勢ひを摸てあらたにつゝりたる詞也さびは銹と書る正字なり

印綬

もろこしには天子より百官迄その位につきたる印ありその印を腰におふる紐を綬といふ是は天子の御位のしるしのいんじゆ也

たのま緒

いのちの事を大和詞にたまのをといふなり

綿蠻たる黄鳥丘隅にとゞまる人としてとゞまる所にとゞまらずんば鳥にしかざるべしとかや

是はもと詩經の詩にて大學に出たり鳥のなく聲をめんばんといふ黄鳥はうぐひすと訓して毛の黄なる鳥也丘隅は峯の樹のはへふさかりたる所をいふ此詩の心はめんばんとさへつりとふ黄鳥も人ちかき所には居をやすんせすかならす山おくの樹の生ふさかりて獵師の弓矢なともとゝかぬ所にいたりてとゞまり居ると也然れは人の住居もとゝまるべきよき所にとゝまらすんは鳥にもおとりたるなるへしと也

長沙の罪をさけ

漢の賈誼といふ賢臣讒言にあひて朝廷をしりぞけられ長沙王の傅に貶せらるいま鄭之龍もさんげんの罪を避て日本へわたり居と也避るはよけるなり

砂頭に印をきざむ鷗

唐詩の語なりかもめが濱邊の砂を足にてかきさかす體を文字を印に彫きさむの體に見立たる也

蛤よく氣を吐て樓臺をなす

蚌蛤蜃みなはまぐりと訓ず蚌と蛤とは常のはまぐり也蜃には二種あり一種は大蛤也と注して一名を車螯といふ是は貝の類なれ共樓臺をなすものにあらすよく氣を吐て樓臺をなすといふ蜃ははまぐりと訓じても其かたち蛟に似て龍の類なる物なり本草綱目に其かたち虵に似て大なり角ありて龍の形のごとし紅の鬣ありよく氣を吐てろうたい城郭の形をなすまさに雨ふらんとしてみゆ是を蜃樓と名つけ又海市共いふと云り又唐詩訓解の注にも蜃は蛟の類にて氣をはき樓臺人物のかたちのことしといへり然るを近松は鷸蚌のはまぐりと思へるは旄

末のいたりにあらすや又謝肇淛が五雑俎に登州の海上に蜃の氣あり時々むすんで樓臺のごときかたちをなす是を海市といふ但し是海の氣にして蜃の氣にあらすをよそ海水の精多く結んでは形をなし散ては光をなす海中の物何によらす其氣を得る事久しければみなよく變幻をなす蜃のみにかきるにあらす共いへり日本にても近年安藝の嚴島に此氣あらはれ所の人みな是を見たり三刻ばかりの間はその邊金色のひかりさし五色の岩くみさなから金樓玉臺のごとくなりしと也

あさる羽おと

鳥の餌をもとめんためにさへつるをあさるといふ

雪折竹に本來の面目をさとり臂を切て祖師西來意のわをさとりしも

初祖に神光といふ僧來り參するに祖はたゞ端座して教の詞なければばかの僧庭に立けるに大雪ふりて竹を折れ共去りぞかす夜あくる迄立居たりしかは初祖あはれみて汝何事を求んためにか雪中に有やと問給ふにかの僧なみだをながし師たゞねかはくは教給へといふ初祖のいはく諸佛無上の妙道はなんぢがごとき小智小徳の慢心をもつて得べきにあらずとかの僧聞やいなや刀をもつて左のひぢをきり師の前に置て云く諸佛の法印聞事を得べしや祖のいはく諸佛の法印は己か心にあり他よりもとむへけんやかの僧のいはく我心いまた安からす師ねかはくは我ために我心をやすんぜよ祖の云くなんぢか心を我前へもちきたれかの僧心をもとむるにとらへ得べからす祖のいはく今なんぢがために心をやすんぜりとかの僧ついにさとりをひらけり

しぎ蛤のあらそひ

是はもと韃靼より梅勒王を大將として大明をせめしむる時闖王李自成といふ者其虚にのつて南京へせめ入帝を害し王位を奪ふたる故呉三桂いそぎ韃王の陣へ至り此たび力をくはへて闖王を討しめ給へと願ふに付だつ王いかゞせんと評儀有しにばいろくわうか謀には此度ごさんけいが乞にまかせ加勢をやりて闖王とごさんけいとをたゝかはせ其虚に乘て兩方をたつたんの手に入へしとて此鷸蚌のたとへを引てたつ王をさとしたる故事也今此淨るりには國せんやが事にもちくみたる尤作意也さて

此故事の源は戰國策に出たり

秦の始皇六國を呑んため連衡の謀

この時天下に七ヶ國あり秦燕趙韓魏齊楚なりしかるに秦の始皇のこり六國を攻ほろぼしてみな秦へあはせ天下を一つにして皇帝のくらゐにつき給へり連衡とは此時蘇秦といふものと張儀といふものと謀をなしてあるひは六國をつらねて秦につかへさせんとしあるひは秦を討んとし又は六國を討んとする等の謀共をなしたるをいふ

楊貴妣

唐の玄宗皇帝のてうあいし給ひし女官なり

なむきやらちよんのうとらや〳〵

あみだ如來の根本だらにの詞にのうほあらたんのうたらやゝといふ事ありそれを畧してかくいひたる也是もよき作意なり是より奥の唐人ことは皆やくたいもなき事なりと志るべし

くひの八千度

いくたひも〳〵くゆるをいふ和歌のことはなり

本卦師の卦にあたつて

師の卦は六十四卦の一つにて八卦の坤を上卦とし坎を下卦としたる卦體なり卦の義理は專らいくさの事を斷たる卦也

天の時は地の利にしかず地の利は人の和に志かず

孟子に出たる語なり軍を出すに天の時をかんがへ歳月の吉凶日取時とりの吉凶又はその日によりて或は勝利を得あるひは敗北する等の方角もある事也然れ共要害堅固なる土地の利き城にこもりたる時は何程よせ手の勝べき時日にせめよせても勝れぬが治定なれば是天の時は地の利に志かざる也又たとひようがいのよき地に陣を取たり共士卒の心和合せずして大將をうらむるはいかなる堅固なる城をも士卒が捨て逃る時は大將一人してまもる事あたはずついに打負べき時は是地の利は人の和におよばざるなり

三韓退治

新羅高麗百濟これを三韓といふ神功皇后さんかんたいちの時ともへにあらみさきの立し事日本紀に見へたり

もろこしの望夫山

婦人その夫を虎に喰ころされし者この山へのぼり

虎に似たりし石の有しを敵虎と思ひ矢をはなちしかば婦人の念力にて其石に矢か立たり其石を望夫石といひ其山を望夫山といふ

我朝のひれふる山

狹手彦が東夷征伐に發足の時その妻まつらさよ姫其別をかなしみこの山へのぼりて袖をふりてなげきしと也大和詞にひれふると袖ふる事なりといへり

潯陽の江これ猩々のすみ所

しんやうは隱なき大江にてこゝには別してせうせうおほくすむといへり

赤壁とてむかし東坡が配所ぞや

赤壁は三國の軍に魏の曹操が呉の周諭に舟をやかれて敗北せし所也宋の蘇軾を東坡と號す朝廷よりつみせられて流され此赤壁のもとにあそぶ東坡か赤壁のあそび前後に二度にて前赤壁の賦後赤壁の賦をつくりてそのあそびのたのしみを詠せり

廿四孝の揚香が孝行の德によつてしせんとのかれし惡虎の難

此事二十四孝の傳につまびらかにしるせり

西天の獅子王

しゝ一名を白澤共いふ狻猊といふも是也かたちは虎に似て黄なり銅のごとき頭にて鐵のごとき額あり牙は鋸のごとく目のひかりいなびかりのごとく吼る聲いかづちのごとしよく虎豹を食ふ天竺にあるけだもの也天ぢくは中國より西にあたるゆへ西天といふ

あまのぶち駒

神代の馬なり

しやぐはん

射官なるべし火砲弓箭を射る役也

ちやぐちう左衞門

是より國所をかしら字にしてよび名とすその國々の文字は東埔寨呂宋東京暹羅白城等也

仁ある君も用なき臣は養ふ事あたはず慈ある父も益なき子は愛する事あたはず

古語のやうなれ共慥なる書には見えずその理もちかく似たれ共正しき聖賢の意には的當せざるがごとし

夜まはりのどらの聲

どらは鉦と多く書共刁の字よし史記通鑑等に出て陣屋の用心をいましむる夜廻りがうつ鐘也もと刁斗といふを和訓にて刁とよませり此字を刁とよむに付て今の俗子丑寅のとらの字の畧也と思ひて寅の字の代りに用ゆるは笑ふべし是さためてかなの濁を見をとしたる麁相ものゝ取ちがへそめたるなるべし

いしゆみ

弩弓とて此方の人のいふ石はしきの類也

いしびや

佛郎機なり

胡　亂

胡國は天竺の際にて中國よりは甚た遠きゑびす故言も中國へ通せぬゆへ不埒なる詞を胡説亂道といふ胡亂は此二字を切て唐音にていひならはしたるもの也

きこらい／＼びんくはんたさつふおん／＼

此浄るりの唐音は前もいふ通り譯もなき事也きこらいは歸去來の字を用ひたれ共是も唐音にては歸去來なれば合ずひんくはんたさつふをん／＼も唐音をもつて文字に合せなば相應なる事も有べけれ共すべて近松が唐音はみな頓作にて共かゝはりなし前の所にはたらにをもぢりて唐音にまぎらかしたり又大職冠の唐音は唐菓子や膏藥の名にてまぎらかせり又本朝三國志の大王の道行に御いたはしや大わうはちりくちくすい引かへてあほす峠のよるの道と書り京都のさる俳諧師此ちりくちくすいの語をあんじ煩ひて問ければ是は大王夫婦の道行ゆへくちりくちすい引かへてといふかなを上下へ置かへて用ひたりとこたへしとかや又唐船はなし今こくせんやの口に唐の木やり有其文句にらうがときろくほにやふたうにやくこんもつきんとゝいふ事あり是はむかしの東國歌にうらか齋坊にや豆腐こんにやくきんもつたといふをかなを上下へ置かへて用ひたる也此類にて埒もなき事を知るべし

近年鼎軍談の唐音はまことのたういんなり

足かせ手かせ

足械は足にうつ械也手械は手鎖なり

延平王國性爺鄭成功と號し

本傳を按するに鄭之龍か兒鄭森廿歳の時父と共に

大明の皇帝隆武爺につかふ身のたけ六尺八寸ちからは大象を取ひしき殊に倭國の産なれば日本の兩刀を善つかふをきこしめし忝くも宮中にて元服し成功と字し明の朱姓をたまひ常に左右に侍し奉れは臣民これを貴み國性爺と稱す後又延平王と號せりと云々

章甫の冠花紋の履

しやうほは殷の代のかんふり也花紋ははなの紋を織つけたるくつ也

幢(とう)のはた幡(はん)のはた

幢幡共にはたにて天子諸侯のもたせらるゝ道具なり

會稽山に越王のふたゝび出たるごとくなり

呉國を討んとて越王勾踐くはいけいざんより旗をあけ給ふ體也前にいふかことし

父が庭訓

孔子の子伯魚ある時庭を通りたるに孔子立給ひて詩と禮とをまなぶべしと敎給しより故事と成て父のおしへを庭訓といふ

玉ある淵は岸やぶれす龍すむ池は水かれず

この語文選にみへたり

むかし唐士の白樂天といひし人日本の智恵をはからんと

此所の文段つぶさに白樂天の謠に有て誰もよくしりたる事ゆへ是を略す

道行 唐子わげには薩摩ぐし嶋田わげには唐ぐしと大和もろこし打まぜて

此文句うはべは何事もなけれ共底意にふまへたる故事有て書出したる也莊子に蝸牛の角のうへに國二ケ國あり左の角のうへなるを蠻の國と名づけ右の角の上なるを蜀の國と名づく此左右の國たがひにあらそふて戰ふといへり蝸牛はかたつむりと訓じて俗にいふでん／＼虫也莊子は人の耳をおどろかす事を書上手なるゆへ右のとをりにいゝたり此語の心をふまへて中むかしの毎句付の笠にかしらの上に國二ケ國といふ題ありしを加賀笠の下にさしたるさつま櫛といふ句をつけて勝句となり世上の人の語り草となる此の道行の出の文句又是をやつしたる也唐子わげには和國のさつまぐし和國の嶋田にはもろこしの唐ぐしとやまともろこし打ま

せてといひかけてせんだん女と小むつと打まじり
てのたびだちをことはる也

枕をたゝむ夢たゝむ千里を胸にたゝみこむ

船中などに用ゆる懐中のたゝみまくらより邯鄲の
枕をふまへて夢たゝむといひ飛張房が縮地の杖の
意をふまへて千里をむねにたゝみこむといふ殊に
二人が渡海のはるけさ千里あなたへ着く意を胸に
たゝみたくはふるの情によせていふ

我は古郷を出る旅君は古郷へ歸るたび

此句情のいはずして情その中にこもる尤詩などに
この格多き事也小むつは古郷を出る旅なれば古郷
をはなるゝ物うさいか計りぞやそれにくらべては
せんだん女は古郷へ歸り給ふ旅なれば旅のうさに
も便ありと小むつがせんだんによへ力をつけてい
さむる體也それゆへ此下の文句に小むつがいさめ
ちからにてといへり

ふたはに見せてせんだん女

古郷を出ると歸るとの二端とうけて又せんだんの
二葉といふにいひかけたり

親と妻とを持し身は何かなげきは有明の月さへ同じ
月なれどなふ二人見馴し閨の月

小むつが身の上にて小むつが情をのぶる也月を見
て夫婦ねやにてながめし思ひをのぶる尤さもある
べし

なごり數々大村の

是より

ぬれてかはかぬ旅衣

といふ迄の文句其心はよく聞えて注に及ばずたゞ
文句のずら〳〵として何共なふおもしろく筆にう
るほひのある事よく〳〵氣をつけてみるべし是ら
が筆さきにうまみの有といふならん

二千里の外故人の心

白樂天が月の詩也三五夜中新月色といふの對句な
り月をながめて二千里の外に別れある所の故人の
心もさぞや此月を見て我を忘たふらんとなり

うなばら

滄海の二字をあをうなばらとよむ也

鬼界十二の嶋

きかいはさつまのいわうが嶋也それより目通りに
打つゞきて十二の嶋ありとなん云り此所の嶋々み

な今に有ル嶋共也
あれはいにしへ天照神の住吉の明神に笛ふかせ舞曲を奏し二神のあそび給ひし所とて二神嶋共申す也
そさのおの尊暴惡なりしかば天照神いかり給ひて天盤戸へ引こもり給ひしかば天下常暗となりたるゆへ住吉の明神をはじめ八百萬神かぐらを奏し給ひしかばそれより岩戸をひらき給ふ爰のすみよしのふえふき給ふは此故事也又二神嶋にてふたがみのあそび給ひしは余の事なれ共かくらをいふ故住吉の明神を引て立たる也二神嶋はふたがみ志まとて今に有となん
敷嶋のはや秋津洲の地をはなれ
敷嶋もあきつすも日本の別名なり
あまの鳥舟岩舟の
たゞ舟の事をいふ歌ことばなり
まだ秋風に鱸つる松江の湊
古來ずんがうとよみ來れ共唐音は松江にてすゞきの名處なり日本にても出雲の松江は鱸の名所にてまだあき風にすゞきつる也などいへる古歌あり其古歌を取てこゝの文句のいゝかけに用ひたり

陶朱公
越の范蠡官を去て後陶朱公と名のり大に富をえたり
宮前の楊柳寺前の花
三體詩に出たる詩の句にて其こゝろはきこへたるごとし
鑾輿鳳車
天子の御車をらんよといふ跡につゞくるまを志よく志やといふ也
谷のましら
ましらは猿の事也
かたにかし
肩に駕といふ事也
さいくはいの山路に
崔嵬と書也山のけはしき體也詩經に有
手談のわざ
前にみへたり
斧の柄もおのづからとや朽ぬべし
列仙傳に此事あり仙人の碁を打を見る内に年月移りて手につきゐたるおのゝえくさりたりとなり

とりのそら音ははかる共

孟嘗君といふ人秦に囚られし時ひそかに秦を夜の内にぬけ出たりしが追手のかゝらん事をおそれ道をいそぎしが函谷關といふ關所をひらかさりし所にもうしやうくんにしたかひし者に鷄のなくねをよく似する人あり鷄のまねをせしかば其邊の鷄みななきし程に關守やかて夜明ヶたりとて關所をあけて通しけるとの故事なり

驪山のふもと

りさんといふふもとに花淸宮といふ御殿あり

楊貴妃の御廟所大眞殿

唐の玄宗皇帝の十八番目の御子に壽王といふあり楊貴妃はもと此壽王の妣なりしが美事すぐれたりしかば壽王へは別に妣をあたへやうきひをば玄宗寵愛し給ふすなはち楊玄琰がむすめにておさな名を大眞といふ貴妣は女官の名也後に安祿山といふもの亂をおこせし故玄宗は貴妣ともろ共に蜀へにげ給ふ其みち馬嵬といふ所にて軍兵が貴妣を殺したる故その後玄宗したひかなしみて臨邛の方士に勅して貴妣の魂のあり所をもとめ給ふに蓬萊山へいたりて大眞殿といふ額のかゝりし所へゆきいたり楊貴妣にあひしとぞ

楚人の一炬に焦土となんぬ咸陽宮共いつゝべし

是は杜牧之が作りたる阿房宮の賦の詞なり秦の始皇がおごりをきはめて花麗に立たる咸陽宮なれ共楚の項羽が一戰にほろぼされ項羽楚人にやかせしかばさしもびゝしき宮殿共も一つの炬にやきつくされて焦土となりたると也

目擊一瞬

目擊はまたゝき也一瞬は一たび目をひらきて閉る間をいふ故にまちかく見るをももくげきすといふ

福壽海無量

法華經普門品の語也福と壽との德を得る事海の量なきがごとしと也

鵲のわたせる橋

前にみへたり

くめの岩はし

大和の國大峯山をかづらきといふ此所にくめの岩はしといふ名所あり

泰山を挾んで北海をこゆる事はあたはず

是は孟子が梁の惠王へ敎給ふ語なり此心は魯國の泰山のやうなる山を脇の下にはさみて北海のごとき大なる海を飛こゆる事は何程したき事とねがひてもかなはぬ事也君の位ある人が民をおさめて王となる事は此類にあらず君の心に爲とさへ願ひ給へはなる事なれ共君の心にその事を爲給はざるゆへなりとなり

御幸

天子の御行を御幸といふ但行給ふ前々にてたまものあるゆへ民みな幸とするのこゝろあるゆへなり

鴆毒

鴆といふ鳥は甚だ毒あり此鳥もし水に影をうつせば其所の鱗こと〳〵く死すと言り是によつて唐にては酒又は食物に此毒を入れて毒餌するの術あり又井の傍に桐を植るも桐は鳳凰のすむ樹にしてほうわうは諸鳥の長なる程にこの樹を見てもし鳳凰や有べきと鴆鳥も恐れてよりつかざる時は水にその影のうつる氣づかひなきがため也とかや

評、右國性爺合點五段の趣向外にいゝぶんなし只一つ老一官が甘輝か城へゆきし時かんきが妻の金祥女がやぐらのうへにて一官がすがた繪を月かげにうつしてよく見合する所理のくらき書やう也一官は城外にたゝずみきん宊やう女は櫓の上に居その間遠きゆへ鏡にうつして引合すとの心是は晝ならばさも有べし月はもと日の光をうけてひかるものなれば夜にいり大陽地に宊づみては月光が本影也それに復かゞみをうつしたりとて照すべき理なし是はさだめて古人の云る書をよむに雪をあつめ螢をあつめし格と思はるべけれ共それは目の前にて目にさし當てみるなるべしそれさへあるべき事ならずいはんや數十間をへだてゝその影あきらかに鏡にうつるべきや何として直には見られぬぞ此段はなはだいふかし〳〵

○外題 刈萱桑門筑紫𨏍（いへづと）

此淨るり全體がかるかやの事を取組たる故此外題也かるかやの事はむかしより說經又はぶんやの淨るり其外かぶきにも多く仕來る事にて今さら語にも及ばす次に此げだいのの𨏍字をいへづとゝ訓ずる事たしかなる出所ありやおぼつかなし惣じて外

題は三字五字七字等の奇の數をもちゆる事俗の胡婆の業より出てかならす字わりを偶にはせぬ事有ふれたる例なる故字數を奇にかなへんための無理訓と聞へたり尤狂言綺語とはいへど近比わがまゝなるよし評する人もすくなからずいかさま文字の形を分てみれば家の土産に榮ものを車につみて歸るの心を會意して此字を製しかくよませたるにや此やうな事が格になりなば金扁に道といふ字を大臣とよませ紫帽子を冠にして爺といふ字を變童共よませるやうになりゆくべし

序

大道すたれて仁義おこり國家みだれて忠臣をあらはす此語をもつてかんがみれば道にもまた誠の本あり其まことのみなもとを尋れば戀慕愛執にしくはなしと豐芦原の陰神陽神さぐり給ひし天の逆鉾

この序の詞木に竹をつぐとやら前後の語つゞきははなはだ不都合也まつ大道すたれて仁義あり國家みだれて忠臣をあらはすとは老子經に出て老子が道とする所の虚無自然の眼より聖人の仁義忠孝を打やふりたる詞也この語をうけて道にも又誠のもとあるとは何事ぞやしかも戀慕愛執を道のもとゝいふ事いかに狂言なればとて余りにつたなき書やうならずや勿論男女のまじはりより父子兄弟等の人倫のひろまる事は諸書に多き事なればその心をいはんとならば聖書にもあれ神書にもあれ此所へ引べき語幾等もある事なるをかくのごとく妄言を書ならべて一部の發端とする事作者の恥也さて豐芦原は日本の別名にて伊弉諾伊弉冊の二神あまのさかほこをもつてさぐり給ひ此國がはしまりしといふ事は子供もしつたる事なればくはしくしるすにおよばず

世々のひつき

祚の字にて天子の御くらゐをいふ

君子國

日本の別名なり日本は禮義たゞしき國なるゆへ稱美していふとなり三才圖會には日本の外に別に君子國といふ國あれ共日本の事をくんしこくと稱する事昔よりふるき事なればまつは日本の別名とすべし

踏歌の節會

正月十六日に内裏におこなはるゝ節會なり

とのゐもり
だいりへ御番にあがりて守護するをいふ

いなにはあらぬいな船
古今などに最上河によめる歌の評也出羽の國の名所もがみ川は川水ことの外はやくして船を引のぼすにふねのかしらのふる態が人の物を否といひてかぶりをふるに似たる故かくいひかくると也

公　卿
内大臣右大臣左大臣を三公といふ又内大臣をのぞきて太政大臣をくはへても三公といふその内にだいじやうたいじんは常になき官なればまづは内大臣と左右の大臣を三公といふさて三位以上を卿といふ故に三公と三位以上とを公卿といふ也

比翼の友羽がひ
山海經にいはく常晉山に鳥ありて翼も一つ目も一つゆへ二鳥相ならびて飛その名を鶼といふと又尓雅にも南方に鳥あり比ざれば飛ずといへり皆ひよくの鳥の事なり

香染の袈裟
絳色に染たるけさをいふ

おどろの髪
荊はいばらの事也いばらのごとく亂たるかみといふ心也

叡　感
叡の字は深明也と注して智の至てふかき事也書經には叡は聖をなす共いへりされば時の天子をあがめて聖主などゝ申す故天子の事にほめ奉りて叡の字をつくる也

常陸帶
ひたちの國かしま明神の祭の日女に思ひかけたる男のあまたあるを布のおびに其名を書付て神前におけば其多き中にすべき男の名書たるはおのづとひるがへるを禰宜が取てとらすればそれを聞て男かこちて終に玄たしくなるといへりそれゆへいもせの緣むすびの事に引ていふなり

大悲のおちから
大日經に大慈大悲といへり佛菩薩の衆生をあはれむをいふ

念彼の段
觀音經の偈に念彼觀音力といふ事多く有その所を

俗にねびの段といふ

雲雷くせいでん

念彼の段の文也もし雲おこり雷なり電はげしき時彼觀音の力を念せは時に應じて消散する事を得んとのこゝろ也

胎金兩部の峰

眞言家に佛體を陰陽にわかちて陽を金剛界とし陰を胎藏界とし是を兩部といふそれより取て大峰かづらきの山上をたいこんりやうぶのみねといふ也

幕　下

大將の旗下をばつかといふ大將の陣所に幕を打たる其幕の下といふ事也されば其手下につくをばつかにつくといふなり

大玄谷神の咒

幻術などをつかさどる神にて其本尊の咒なり

雲井のかほり蘭奢の乘もの

こゝのらんじやは蘭麝なるべし匂ふ乘物との心也

又蘭奢は南都東大寺にある奇楠の名也むかしより東大寺に傳はる寶物也それにつき世俗のものがたりに寺を東大寺となづくる事此蘭奢待といふ奇楠ある故也其故は蘭の字の中にて東の字を取り奢の字の上にて大の字を取り待の字の旁にて寺の字を取て東大寺といふと也此說久しく云つたふる事なれ共蘭の字の中は東にはあらず柬の字なれはいぶかしき事也さて此序に伽羅の事をも辨すべし世俗に奇楠と伽羅とよぶ事漢語のやうに覺へたれ共伽羅はもと梵語也漢語になをすれば黑といふ事也佛法に大黑の眞言を摩訶伽羅といふ是すなはち漢にては大黑といふ義也翻譯名義集に摩訶此には大といふ伽羅こゝには黑といふと云り然れば漢にては黑といふべきをそのまゝ梵語をもちひて伽羅といふなるへしさるによつて伽羅といふ字義を穿鑿しては奇楠の名とする事其義知がたし是に付て薫物の方を黑方といふも伽羅の方也との意なるべし是等は世間に多く云らざる事ゆへ序ながら書付ぬたそかれ

黃昏と書く暮方の事也

男山のむかしを尋るに豐前の國宇佐の郡より勸請

男山とは八幡山の事也元來ぶぜんの國うさのこほりひしかたの山に廣幡八ながれあらはれて八幡大

神宮とあをがれ給ふを其のち神龜四年に今の山城のおとこ山にうつし勸請し奉となり

餓死

餓の字に餓のかなを付て餓死とかたるは何故ぞや大かたうへ死をがつしと覺たるならん鄙々

大行は細謹をかへりみず

戰國策に出たる語也天下なとを取んとのぞむやうなる大事をおこなふものは瑣細なる事には目をかけぬもの也とのこゝろなり

外面似菩薩内心如夜叉

阿含に女人地獄使能斷二佛種一、外面似二菩薩一内心如二夜叉一といへるを截ていふ也

まよふが故に三界の火宅

佛法のさとりの意をのべて迷故三界城悟故十方空本來無二東西一何處有二南北一といふ偈あり此心をふまへて書たる也三界の事火宅の事は前に注せり

輪廻のきづな

恩愛にほださるゝものは三界をはなるゝ事あたはず車の輪のめぐるごとくに生れかはり〳〵て三界の間をうろたゆる是をりんゑのきづなといふ也

無明のさとり

無明は煩惱の事也無明の暗といふはあれ共無明のさとりとはめづらしき詞也無明を悟で破るのこゝろにて書たるにや

妻子珍寶不隨者

經に妻子珍寶及王位臨二命終時一不レ隨者といへるをきりて用る也

愛別離苦

前に出たり

評、此段の本妻と妾とが碁盤の枕のうへ二疋の蛇の咬あふ趣向はもと藤澤の一遍上人の俗の時の事也くはしく奚に云るすべき事なれ共北條九代記にもあり又は近年出たる小栗實記といふ軍書にも遊行の由來を書たる所にくはしくあり作者大かた小栗の中より得られたる思ひつきならん

富で奢らず貧してむさぼらぬは未可なり富貴にして禮をこのみ貧してたのしめと弟子にこめせし孔子の詞

此語は論語に出て孔子の弟子に子貢といふ人問かけられしを孔子のこめし給ふ詞也其心は文面にてよく聞えたり

鏑矢

矢だりに煉ものゝ丸きを付たる矢也

一天の主となる某十二人迄女房持てもくるしからず

天子の妣は十二人をさだめて一年の十二ケ月にかたどると白虎通に出たり日本の天子にも女官は典侍四人お下四人内侍四人合せて十二人ありこれを局といふ俗多く取ちがへて十二の后といふ后は天子の妻也一人に限る局は官女にて官なり

もろこし臨潼の會に善をもつて寶とすと伍子胥がいひし

りんとうは秦の哀公天下の諸侯を會せられし所の名也この會鬪寶の會なりしが楚にはいか成寶かあると問し時伍子胥こたへて我國には金銀珠玉の寶をもつては寶とせず惟善人をもつてたからとすと答たり伍子胥この時楚の靈王にしたがひて臨潼にゆき此會の明輔たり

ついに妹脊の道しらず

本朝の神代に鶺鴒ありてその尾をびくめかせるを伊弉諾いざなみの二神見給ひて是にならひて其腰をびくめかし給ふより婚姻の道ひろまり長くいもせの道をつたふされはせきれいを戀おしへ鳥といふも此故事也とかや

智仁勇

此三つ人道の大德也智はちえ也仁は天よりうけたる本性の德なり勇はすゝみていさみある也人に此三つがそなはらねば道德にいたられぬ也智はたとへば行所の道すじを目をもつて見わくるがごとし仁はたとへば行べき道すじを足にてあゆむがことし勇はたとへば行べき所へゆき着へしといさみすすむがごとし故に此三つを天下の達德共いふ也

もろこしには卞和がたま我朝の驪龍のたま

荊の國にべんくわといふ人あり山より璞を掘得て是を荊王に奉る荊王かのあらたまを玉尹といふ目利に相せしめ給ふに是石なりといふ荊王へんくわが上をあざむくと怒て左の足を刖せらる其のち荊王死し給ひその子武王くらゐにつき給ひしかばへんくわふたゝび是を献ず玉尹又見て石也といふ故武王もいかりて右の足をきらせらる其後武王死し給ひて共王くらゐにつき給ふ時へんくわは荊山に引こもりかのあらたまをかゝへて哭ゐたるを荊王

めし出し給ひかのあらたまをみがゝせ給へば至極の名玉にて有しと也さて驪龍のたまといふも唐の事也こゝに我朝といひしは心得ず是も又めつぱうに書たるものなるべし

張華が博物志

はくぶつしは書物の名にてちやうくわといふ人の作なるゆへちやうくわがはくぶつしといふ也

萬劫

劫は數の名也佛書におほくいふ事にて一劫といふもはなはだ久しき事也四十里四方の岩あるを天人が三千年に一度づゝあまくだりて羽衣にて一遍づつなづるになでつくしたるを一劫といふ共いひ又四十里四方の藏に粟のみのりたるを三千年に一度づゝ天人がきたりて一粒つゝ是を取に其取つくしたる時を一劫といふ共いへり

女之助の趣向尤おもゐろしとはいへ共仕組のすじ入くまぬ故か一つ〳〵さきがみへて氣の毒それゆへ素人目には感ずれ共推はのみこまぬ所多しさて守宮の事俗説にいひふらす事なれ共慥なる據を見ざりしか先年長崎の人にちなみて熙々子といふ南京人の傳授の書也といふをみるに藥方も多くのせたる中に女のほれる藥とて此事を書りその方守宮の雌と雄とを取り生ながら竹の筒へ入但し竹の筒に節を一つこめ雌と雄とを節をへだてゝ入おけば一夜のうちにかのふしを咬やぶりて二疋がつるむを直に霜となし是を煉る汁には〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ほれさせんと思ふ人にゐらせずして是をつくれば其人たちまち心ほれ〳〵として其つけたる人を戀ゐたふといへり今按ずるに唐人は日本より僞りおほきものにてかゝる得ゐれもなき事をいゝたるならんゐかも〇〇〇〇といふごとき取得られぬものを藥味にくはへたるは嘘のはげさる前置なるべし

それを力のゐのぶ草

ゐのぶ草は歌に多くよみて忍ぶ事にいひかくる也人家の軒につるしのぶといふくさなり

爰はやもめのかたを波

惣じて波にはめなみおなみありて女波は多く打てその間におなみがうつものなるに紀州和歌の浦は

めなみはうたずして男波のみうつゆへかたをなみといふ也山邊の赤人の歌にわかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさして田靏なきわたる

婬犯の病

犯の字誤り也婬奔と書べし婬亂といふに同じ

ひなの者

鄙はいなかの事也

屠處のあゆみ

譬如ニ屠所羊ニ歩々近レ死といふ語ありて羊が屠にゆく時は一足づゝに死に近しとなり

陰德あれば陽報あり

陰はかげにて陽はひなたの事也人の目にかゝらぬ陰にての德を陰德といふ又人の目にみへたる報のあるを陽報といふ陰にて德をつむ人はかならず目にみへたる善報を得ると也楚の叔敖といふ人いとけなき時出てあそび兩頭の蛇を見るたちまち殺して是をうづみ歸て泣母そのゆへを問ふに答て云く我きく兩頭のへびを見るものはかならず死すとさきにこれをみるゆへ母をすてゝ死せん事をおそるといへり母のいはく蛇今いづくにか有いはく他人の又見ん事をおそれて殺してこれをうづむと母のいはく我きく陰德ある者は天かならずむくふに福をもつてすと汝かならず死せじといへり果して無事に成長し後に相となりしとかや

浮木の龜の對面

佛書に多くある事也盲龜とて目の盲たる龜大海の底にありて千年に一度海上へうかみ出づしかるに此かめ甲はひゆれ共腹ははなはだ熱すもし赤旃檀といふ木をえて其身に添れば熱をさます藥となるそれ故龜の心に赤せんたんの浮木に乘て腹をひやし甲を日にほしてあたゝめばやと思へ共目はみへずあまつさへ千年にたゞ一度うかみ又しやくせんだんが浮てながるゝに出あふ事まれ成事なればあふ事の希なるたとへとはするなり

奇恩入無爲（きおんにうむい）

奇の字あやまり也棄恩入無爲とて出家する人は恩愛を棄て無爲の菩提に入との心也しかるを奇の字にては通せず今の作者の義もしらず書ちらすめつぽうかいこれらの所にて見るべし

今此三界悉是吾子

法華經の文にて今この三界の衆生はみなこれわか子也との意也

評、高野山の案内作者はゑられぬにや文句に間違ありはじめ石動丸が登りし坂は不動坂よりのぼりたりそれ故刈萱の詞に來た道すじは難所にて草臥足にはかなふまじこちらへゆけば花坂とて平地も同然といへりさて次の文句に息をはかりに玉やの與次みだい所をおい奉り女人堂迄來りしかと有て又其次の文句に石動丸はかちはだしかくとみるよりはしりつきノウ情ない母様といへり是大なる間ちがい也其故は大師の廟の前より花坂の方へゆけば大門といふ門有て女人堂はなし但し女人は大門より内へは入事かなはぬ也右の通りゆへ花坂へゆけば女人堂へは行あはず花坂と女人堂とは大に方角たがふ也いかさま近年の作にはふぎんみなる事すくなからずちか比ある人の物がたりに今の淨るりは東西となくたはいもなき事がちなるを似つこらしく語なして見物をまねかるゝはいかさま日本一人の名太夫なるべしといひしも思ひ合すれば過論ならずその一理はある事なるべし

淨瑠理評注卷之四終

浄瑠理評注巻之五

外題 ○蘆屋道満大内鑑

此じやうるりみな蘆屋のだうまんが事を主意にして書たる故蘆屋道満の四字を置也あし屋は氏なり道満は名也大内は内裏の事也鑑とは唐の代の詞に古をもつて鑑とすれば興替を知り人をもつて鑑とすれば得失を知るといふ事貞觀政要といふ書にみへたりそれよりして物をかんがへみるを鑑と名付る事多し是もかんがへみるの心にて大内鑑と外題す此浄るりげだい評判はすぐれざりしが與勘平といふ名趣向よりして浄るりは近年の大あたり世上にかくれなき事也

序 ○風にさけぶ青嶂(せいしやう)の外雨にうそむく古林の中

青嶂は松柏などの生しげりて青々としたる峯也屏風を立たるごときを嶂といふ狐が風にむかひて吼さけぶ體をかくいふ也嘯といふも雨にむかひて打あをのき息をつく體也古林はふるき林の物さびしき所也是みなきつねのあそぶありさま也

尖れる鬣はびこる尾小前大後

これ狐のかたちを詠ず小前大後とは狐の形は前の方小く後の方大なるもの也といふ事なり

色中和(いろちうわ)をかね死すれば丘を首とす

是はきつねの徳を詠したり狐の色の黄なるが中和の徳にかたどる中和といふは徳の至極にて天氣にていへば寒からず暑からず春の日ののどかなるがごときを中和といひ人の氣にていへば聖人の氣象の剛からず柔からずほどよきを中和といふされば五色を方角に配當すれば青は東にあたり赤は南にあたり白は西黒は北にあたりて黄なるが中央にあたるゆへ是を中和の色とする也さて狐は死する時丘をまくらとする事禮記にみへたり狐は丘にて生るゝもの故死する時又丘を首として死するは本をわすれざるの心也これみな狐の徳なり

是この妙獸百歳誰かしらん女と化し岩の褥に草まくら契りを人におなじうす

こゝには狐の妖(ばけ)る事をいふ妙はふしぎなるをいふ字彙に狐はよく尾をうつて火を出すと云り佛法には狐のよく妖るを報得の通と名づく事文類聚とい

ふ書の中に百歲を經し狐名ある人の髑髏をかしらにいたゞき北斗を拜するに落ざる時は淫婦とばけて人をまよはすと云りされば狐がばかせば苔をしとねと思ひ草を枕として眞の美女と思ひて人にちぎりをおなじうすとなり

日月星度

日や月や星やなどのあゆみの度を度といふ惣じて天には形なき故二十八宿の星を東西南北の四方へまくはりて是を天の體とさだめ月日や星のあゆみをさだむ故に日月星度といふ

比翼連理

比翼鳥とて雌雄つばさを比てとぶ鳥ゆへいもせの中むつましきにたとふ連理は前にみへたり唐の玄宗帝楊貴妃を愛しある時ちかひて天に在てはひよくの鳥となり地にありては連理の枝とならんとの給ひしとかや

氣候

天地の氣を一歲に廿四氣七十二候にわかつ卽ち春夏秋冬の氣のめぐるをいふ

月かげの白虹日つらぬけば甚だひかりを失へばむかし荊軻が秦の始皇をうちに行たる時白虹が日をつらぬきし例ありすべて虹が日月をつらぬくは不吉のしるしなり

日蝕月蝕

蝕はむしばむとよみて日月がひかりを失ふ事也もと日と月とがたがひに光を銜て蝕する也日蝕は君よはきの象月蝕は臣よはきの象也といへり

身まかり

罷と書てさりぞく事也死する人はこの世をさりぞくの心ゆへ死するをみまかるといふなり

天文の博士

日の月の星のといふものは天の文ゆへ天文といふ博士は官の名にて其道を博くきはめたる學士といふ事也

薄氷をふむごとく

恐るゝ體をいふ也詩經に戰々兢々として薄氷をふむがごとしといふ語に本づきて書たるなり

胸はうつせの

おそるればむねがだく〳〵とうつやうなる故胸はうつといひかけてすぐに空蟬へ取付て心がうつゝ

ぬけがらのやうになりたるをたとへいふみな御前をおそるゝ體なり

おめず

おめるは臆の字也人に恥る所ありておそるゝきみなり

分　野

唐の九州の地を天の廿八宿に割付て何州は何の星のぶんや也とさだむる事也

白虹日をつらぬけば天子のお身のたゝりなれ共月の體をつらぬきしは親王さま

日は君の象月は大臣の象なり又月は日に次ものなれば儲貳の象ありちよじはすなはち親王なり

二十八宿

東方の七宿は角亢氐房心尾箕なり北方の七宿は斗牛女虚危室壁なり西方の七宿は奎婁胃昴畢觜參なり南方の七宿は井鬼柳星張翼軫なりかくのごとく四方におの／＼七宿あるを合せて二十八宿にて是を天の體とする也

しなとの風の天の八重雲を吹はらふやうに

神書にある事也たゞ雲を天の八重雲といふ八は神道にたつとぶ數ゆへ別して八重といふしなとの風は神風なり

聞でんほう

聞傳法なり耳に聞たるばかりのおしへといふ事なり

易は變易

易は陰陽のうつりかはる妙用をいふ故に易の書に易はへんゑき也時にしたがつてへんゑきして道に隨ふといへり

大元尊神

大元帥明王とて惣身に蛇のまとひ付たる本尊也いくさをまもり給ふゆへ大元帥といふなり

和歌三神

住吉玉津島人丸をいふ

そこにお暇たまはらばみづからも身をすぐり

そこは足下なり今の俗の貴様といふ程の事を雅語には足下といふなり

丸（まろ）が心にあり

丸といふ事を天子の自稱と心得るはあやまり也是は上を恐れて我身をよぶ詞なれば親王以下臣下の

自稱に用ゆべし其故は元來まるはちゞまるといふ略語なり君をおそれて此身がちゞまるとなり都て和語にまるといふ詞の付はみな物が一所へあつまりちゞまるの義也これ和訓の一つの秘事なれ共ここに明すまつまるといふてにはの付語共を案ずべしあつまる、ちゞまる、わだかまる、こまる、つゞまる、つまる、せまる等みなちゞまるの意ありされば子供の大小便を取る小厠をまるといふも腰がかゞまり身がちゞまるの意也朝臣にもいにしへは麿と名を付たる人多し後世には麿を轉じて丸の字をもちゆと見えたり

無狀（あぢきなし）

無爲共書て埒もなき事をいふ

おぼろけ

小緣と書てすこしのゆかりといふ事なり

久かたの空

ひさかたは空といはんとてのまくら詞なり

うちはへて

打棨と書にぎはふ體也又みごとなるきみ也

簠簋內典

阿部の晴明が作りし曆數をしるしたる書なり

注連繩

神前にはる繩なり惣じて神事の淸めにもちゆ紀貫之が土佐日記にはしりくめ繩とあり諸社根元記云いわとのまへに繩をはりて日の神の還り入り給はぬやうにする也是今のしめなわ是也わらを左になひ七五三と數をわくるは七五三は合て十五也天道は十五にして成なりひだり繩にするは天道の左旋に取る左は陽也陽には陰が添もの也繩の二筋まとふは是すなはち陰陽也はしをたゝさるは質素の義なりと云々

非相非々相

みな三十三天の中の天の名也

大卜師

占の官をいふ周禮に大卜の官といふは天子のうらかたをつかさどる官也

曆算推步の術

曆をつくる算をれきざんといふ日月星の步を推量てつもり知るを推步の術といふ也

吒枳尼（だぎに）

天部の本尊なり

呪咀の文

まじなひにて人をのらふ文なり

三百六十四爻の占

易の卦は六十四卦にて爻は三百八十四爻あり今こゝに六十四爻といへるは六十四卦の數を取ちがへていひたるもの也作者の文盲なる尾の出る所もつともかやうなる所に於てみつべし

坤の卦乾の卦

坤も乾も共に八卦の中の一つなり

ふかみ草

牡丹の事なり

塵にまじはる宮柱和光の影もあきらけき

神の威光のひかりをやはらげて塵の世にまじはり給ふといふ事を和光同塵といふ也此語はもと老子經に出たり

鴻飛で冥々弋者なんぞしたはんや

感遇の題にて唐の張九齡が作りたる古風の詩也鴻の大鳥がめい〳〵たるおほぞらへ飛あがりとび去たる時は弋いるものもしたふ事あたはずとの意なり

蟻の穴から堤のくづれ

老子經にある事也蟻の穴を老子經にては蟻封となづけたり

戀ぞつもりて淵となる

陽成院の御製につくばねのみねよりおつるみなのがわこひぞつもりてふちとなりぬる

詩經といふ唐のふみに桃の夭々たる其葉蓁々この子こゝにとつぐ

詩經周南にある詩也是は詩人が嫁する女を見て桃の若木の夭々としてその葉の蓁々なるにたとへ美ていふたる詞也とつぐは嫁をいふ

優曇花

天竺に有て三千年に一たび花さくといふ木なり

龜卜

龜の甲を燒て其甲のやけわれたるすじを見て吉凶をうらなふをいふ

身體髮膚をわけられし父

孝經にしんたいはつぷは是を父母にうけたりといふ孔子の語あり

伍子胥はいさめて誅せられ眼軍門にかけられしが呉王の恥辱を見て笑ひしとや
是は呉越の戰ひの節の事也呉王を夫差といひ越王を勾踐といふ兩方相たゝかひて越王勾踐會稽山にて打まけさま〴〵の艱難に身をこらし今一度旗をあげ呉王をほろぼさん事を心がけたり此時呉王ははなはだ驕をきはめられしかば其臣伍子胥これをいさめ斯ては又越王にほろぼされ給はん事をいふ呉王いかつてごししよに屬鏤の釼をあたへ是にてなんぢが首を刎よとわたさる伍子胥も大にいかり今呉王知なくして我を殺し給ふ此後久しからずして越王のためにほろぼされ給ふべし我いま死したらば首を東門にかけ置べし我呉のほろぶるを見んといひて自殺しぬ其のち果して越にせめられほろび給ふ時ごししよが眼に是を見て笑ひ其まゝしほれけると也

隨求陀羅尼
大ずい〴〵ぼさつのたらに也都てだらにはみな梵語にてぼんじ也

露ときえゆくたまよばひ
いにしへ人の死したる時その死人の衣服を屋根の上へ持のぼりてその名をよびかへり給へ〳〵と三度よぶをたまよばひといふすなはち復(たまよばひ)と書なり

離寬病
俗にいふかげのやまひにて異病論病名彙解などに出たり

はづかしやあさましや
此かゝりより奥へむけて葛の葉が子に別れの口上おほく百合若大臣野守鑑の鷹が子にいふせりふをはめたるものなりもとよりゆり若のせりふは近松の筆ゆへ一入しつほりとして人の感情をもよふす事多し此場みな〳〵其移ゆへおもしろき筈なるべし

畜生殘害の人間よりは百倍ぞや
ざんがいとは物のいのちをそこなふ事也こゝの文句殘害といふと百倍といふと文句がつりあはず百倍といふは畜生は人間より愚痴なるゆへ愛着の念のふかき事百倍ぞやといふ事也されば佛法に畜生の子を思ふ事人にまさるを愚痴鄙陋とはの給へり殘害はこゝへ出あはず

○道行

注なし

葛の葉の恨

くずの葉といふものは風にふかれては其葉のうらをかへしてこと／＼くうらを見するもの故歌道に恨のまくら詞にはくずのはのうらみといふなり

卅一字の歌の詞は八雲たつ

素盞雄尊の御歌に八雲たついつもやえかきつまこめにやえがきつくるそのやえかきを是三十一字の始なりとかや

丹波の父うち栗

此事世上に大に取あやまりて傳ふるはむかし此里人に不孝のもの有て我父を殺して地にうづみたりその墓より栗の樹はへて常の栗よりも其子大き也今の丹波の名物てゝうちぐり是也と是跡方もなき説なり此栗はいがの内よりひとり割出で樹よりおのづと地に落るがこの栗の妙也それゆへ古人出落栗と名付とかやそれを後世はみきのごとく取あやまるとなん

司天臺

禁中にあり

評、此淨るり始終の趣向文句共おほやう面白くよく出來たるものとはいへ其又格別に外の淨るりにすぐれたり共みへず然るにかくべつの當り有し事は與勘平のたすけなるべしまづ與勘平といふ名ばかりでも一當りがものは有べし其上に我がおれかおれが我かのせりふおかしうて尤で底に意味のふかきやうにおもはるゝ事也但し莊子に此趣あり莊周ある時夢のうちに小蝶と化して翔りまはりてたのしみしがたちまち夢さめたれば我身をみるに床に打ふして本の莊周なりさて莊周は世上を虚なるものと見捨る見識ゆへ今日のゆめのさめたるも亦ゆめのごとしと思へりそれゆへ此夢の事を論じていはく今ゆめのさめたる我心より思ひやれば今迄ゆめの内に小蝶となりしは莊周がゆめなるべし然れ共打返して思ふてみれば今我ゆめさめて莊周といふ人に成たるが小蝶が夢にて今我身を莊周也とおもふは却て小蝶がゆめの内やらしれず夢が現かうつゝか夢か莊周か小蝶か小てうが莊周か其差別知れがたしと云り佛法にも此意ありて維摩と文珠

舍利弗なんと心躰の入かはる事あり入我我入といふも此きみ也然れば此しゆこうはその心の來る所の根ざしがはなはだ高妙也京かれど見た所がやつことやつこの所作町中子供のうれしがる所葛の葉がせりふは女中の感心あさからず何やかや都合よく出來立たる故の評判なるべし

○外題大塔宮曦鎧

此淨るりは後醍醐天王太子さだめの事につき關東ならびに六はらの我まゝをいきどほらせ給ひ大塔宮をもつて將軍とし征罰の企をなし給ふ事大樣太平記の意を本にしてつゞりたるもの也中にもおゝとうのみや御鎧をめされたる行粧あさひのかゝやくごときとの文句あるをもつて外題を直にあさひのよろいと名付るなり尤よきげだいとの評判なり

序舜に錐を立るの地なけれ共天下をたもち禹に十戶の聚なけれ共諸侯に王たり上三光の明をおほはず下百姓の心をやぶらざるは王者の術

この語文選に出たりいにしへ舜といふ聖人はそのはじめは百姓の子にてわづかの土地もたもち給はざりしか共後には天下をたもち給ふ錐をたつるの地とは至てわつかなる地をいふ禹といふ聖人ももとは堯舜の臣にして其はじめは民のかまと十軒もたもち給はず十戶は家數十軒にていたつて少々也聚は落聚とて民のあつまり住居する村をいふ禹は十軒ほどある村の主にてもあらざりしかども後には天下の諸侯の上に立て天下の王となり給ふされはかく舜や禹のごとくに後にてんかを取給ふ事は其身の德上日月星の三光のあきらかなる德をおほはす下は百姓の心をやふり給はざるを心として天下に王たるの術とし給ふ故也となり

參差たる

かたたがいとよみて世の濟らずさま〳〵の出入のあるをいふ

山の座主

山といふものは何のやまにもおの〳〵名あり或は愛宕山鳴瀧山などゝ皆その名をよふ事なるに只打まかせて山と計りよへばひえの山にかぎる也是但し叡山は王城の鬼門をまもり佛法王法を鎭護ある第一の山なるゆへなり

屈従
君の供をするをこせうといふ
赤酸醬
鬼灯の事也日本記に出たり
折伏門
佛法に攝取門折伏門の二つあり衆生をあはれみてすくひとるをせつしゆもんといひ悪魔外道をおどしてくつ伏さするをしやくぶくもんといふなり
解脱どうさう
罪を解まぬかるゝをげだつといふ衣はつみをげだつするゆへげだつとうさうといふ
若宮はおもなげに
おもなげは面目なき體なり
一言事をやぶり一人さだむ國津風
文句はよく聞へたるとをり也此語は大學の書に見えたり
鍾馗の繪
しやうきはもと終南山の人なり唐の太宗の時進士及第し出世をくぢかれいきどをりを發して御殿の階にて頭を打わり死しけるが其後玄宗皇帝の御宇楊貴妃わづらひの時みかどの夢に大臣の姿となり悪鬼を追はらふと御らんあり紙に悪鬼ごうふくの神として其像を繪にうつさせ鍾馗大臣とあがめさせ給ふそれよりして後の世迄大和もろこし相傳て此像をあがめ悪魔及び疫癘をはらふのまもりとする事也
酒は詩をつり歌をつり
唐詩に酒を掃レ愁箒といひ又は釣レ詩鈎なりといへり
借(ひところ)び
禮をのりこゆるをひところぶといふ
釋提桓因
梵天皇の名なり
評、無禮講まんざい等の文句みなあたり有その中に無禮もぶれいぬれえんさき立はたかりしとの文句あまりのやうなれ共これ下の句の受がよき故耳にたゝず立はだかりしはの跡右少辨俊基といふものにて格別いやしからず是又氣をつけあぢはふべき事なるべし
臣として不忠なるは子として不孝なるにおなじと田

氏が母の確言

この語圓機活法忠臣の所にみへたり確言とは名言の事也

北の方より家の挑灯さきばしりのかちの者お歸りとよばゝる聲に門番とび出貫の木扉ぐはつたりひつしり八もんじにひらく地に鼻手燭かゝげて扈從近習敷臺におりめ高なる玄關前月にきらめく鎗印父齋藤太郎左衞門利行お歸りかいのと乘物に取つけは

文句は注におよばす

評、此所太郎左衞門やしきの表へ早崎がきかゝる所へ齋藤歸り合せ門番が門をひらけばこしやう近習出むかへはやさきは齋藤へあいさつをせんとする何やかや一時に取ませたる事の多き場なるを文句を綷て小みじかによく書こなしたるもの也貫の木とびらぐはつたりひつしり八もんじにひらく地にはな手しよくさゝげてこしやうきんじゆ敷だいにおりめたかなる玄關前の句ずいぶんつゞめたる内に其場のもやうをよくかたどりたるもの也まづ爰の語を一つづゝ引はなしてはきこへぬ事多し第一ひらく地に鼻とは何の事ぞやしかれ共あとさきの書まはしが奇妙なるゆへおのづと其わけよく聞ゆ此本をよむ人これらの所にて作者のはたらきのある所を氣をつけ給ふべし此次に早崎がせりふも小りこうに書たるもの也その故は夫に隱して參りしといはすしてもしも夫よりかず殿はみへまいかといひア、心せかれやといふゆへ聞親はなを心ならず子細はしらねど立ながらのさたではあるまじいざまづ奥へとつれゆくやりかた人形を活してせりふがしづまぬ書方也是より奥に至り早崎が齋藤へものがたりの所齋藤が返答よりかすが立ざゝみなみな都合よく勝手ばやにいやといはれぬ書こなし尤妙作なるべし

三十年來夢空々しゆみせんくだけて盤石に花ひらく

一喝

辭世の偈をつゞりたる也よりかずが年卅歳あまりゆへ一生の間を夢とさとりて卅年來夢空々といふ也空々は本來空の意にて元來我といふ物なしと也しゆみせんはくだくべき物にあらずばんじやくは花さくべき物にあらざれ共眞理をさとり得たる時はしゆみも常あるものにあらず盤石も一佛性なれ

は又さとりの花をひらくべし一喝とは我が一念悟入の眼をひらかんため心をよびおこして喝とさけぶ也禪宗のさとりの意也

哀別離苦

人間八苦の一ッ也いとしかはいひ親子ふうふも死わかれてかなしみくるしむをいふ

周の八疋項羽が騅呂布が石兎馬我朝の鬼鹿毛

周の穆王八疋の龍馬にのりて天下をかけめぐり給ふ騅は楚の項羽が名馬せきとめは漢のりよふがめいば也我朝にては小栗判官の名馬をおにかけといふ

辟　易

おどろきさはぐをいふ

彌天の暴逆

天にはびこるを彌天といふ

那羅延力

佛書におゝく出たりならえんは今いふ力士なり都（みやびやか）なる女あり車を同じうす顏蕣（かほばせあさがほ）の花のごとしとうたふ

是は詩經の鄭風有女同車の篇の語也蕣は今いふ槿の花也其顏のうつくしきもくげのはなのごとしと美女を詠せし詩也三位の局にかけていふ扨今の俗のあさがほといふは牽牛花也なる程草にては牽牛花をあさがほと訓ずべし木にては槿をあさがほと訓す詩などにいふはおゝく槿の事也詩經の注にも蕣は槿也といへり

鄭衞の二風道を蕩し國をそこなふの淫聲

詩經國風の內にて鄭の國衞の國の詩は其うたひ聲たはれて淫聲と名付て人の心をとらかす故聖人是をいましめ給ふ

氣焰鷹のごとくにあがり

書經に周公の勇氣をほめたる詞なり其ゆうきのいきほひ鷹のはげしくあかるがごとしとなり

根笹のあられに水晶の玉をかざり上には鳶が羽をのし鯉をつかむつくり物戀に心はとびたつばかり根ざさにあられさはらば落よの心をさとり

こゝの燈籠のもやうづくしの文句五十年もいせんのはやり歌をすぐに書たるもの也されば時代がうつれば古物があたらしく今のわかき輩にこれをふる言と知る人なし

ひきがいるに歌よみも有ふ事とぞさゝやきける
此まへの文句を段々よみて此落文句をみるべしこれらが正眞の近松の筆勢なりかはづの歌をふまへて太郎左衞門がふつゝかなるをひきがへるといひたり諸見物のどよみをつくつてよろこぶ所おかしみ又かくべつ也是につき近松かよのつね人に語しはをよそ落文句に笑ひを取事又はかる口なんどを書にはすこしもあんじたるけしきなく其場へふと出たるやうに書がひみつ也しかれ共是が下手のなりにくき事也とかや尤さも有べし近松の筆勢には思ひがけもない所で時々ひよかすかおかしみある故本をよみてもよむ人の氣をつかさす是近代作者の大に及はぬ所なるべし

乾達婆王
法華經にあり夜叉などのごとくあらくれたる姿なり

もしほぐさ
何やかや書あつめたるをいふ

らうたげに
此語のもとは御所に上﨟下らうありて官位をおほく經給ふを﨟長(らうたけ)たりと申すゆへ下々のいふ長(おとな)しやかのきみあり又爰では宮の御ものおもひにて氣をつかし給ふ體にもかけていふ也

評、三の奥のかゝり八歳のみやの御うたの前後文章うづだかくさながら下におかれぬ手段あり亦近松が筆勢也中々余の作者のおよふ口氣にあらず今の淨るりはかやうの場になりて格ががつたりと落て正眞のよみうりの繪ざうしと肩をならぶ能々氣をつけて何かを見くらべたらんはおのづからあじはひしるべし

充滿其願如淸涼池
その願を充滿しめて淸淨地のごとくならんとの文言にて奈落の底の罪人も七月十六日にはちごくのほのほをのがれ出すゞしき池にあそぶ心地とてすなはち孟蘭盆經の說なり

漢の紀信が忠義にこへ
きしんは漢の臣にてかんそのたゝかひに高祖のあやふかりし時きしん身がはりとなりかうそのしやうぞくにて車にのり楚の陣にゆきて燒死したり是によつて高祖はあやふき場をのがれ給へり此事史

記前漢書に出たり

九品蓮臺

極樂に九品あり上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生合せて九品也其うてなをれんだいといふ

評、齋藤が賢介を立ぬきたる所尤ぬけめなしはじめよりかず切腹の上にて力若を齋藤がもり立んといひし所にすでに此こゝろあれ共もとより見物に思ひがけなし扨この場にいたり齋藤が始終の心をかたるについて最初よりのいきかたをあんすれば齋藤はしやう武士道を立ぬきたる所あきらか也我は六はらのひくはんゆへ我身においては少しも天王への荷擔なく賴員力若は天王へのたのまれし義を立させ始終てんわうの御ためにいのちを果ししかも力若がさいごによつてよりかすがむた死迄忠死となる是さいとうが一心よりあみ立し武道尤さも有べしをよそ三段め一段丸ぐち外の筆勢ならずみな近松の形見なるべしされぱこそ趣向より文句にすこしもぬけめなくおどりの中の愁なんどまはらぬ筆にはおよびもなき事共なるべし

○道行

注なし

四段目

北宮黝が勢ひをひらき孟施舎が義をまもる

ほくきうゆうはいにしへの勇者にてすゝんで敵にむかふ事をこのむもうししやもいにしへのゆうしやにて我身をしりぞかず敵に屈せざる事をこのむみないにしへの名あるゆうしや共にて此事孟子に出たり

分段同居の塵にまじはり

佛法に四土といふ事有て世界を四つにわかつ其中に貴賤ひとしく居る地をどうごどゝいふすなはちどうごどは刹利もしゆだもわかちなく貴賤貧富のしやべつなし娑婆はぶんだんどして上下きせんのぶんざいがそれ〴〵にへだゝりて貧福のわかちありされば佛ぼさつは同居土より出てしやば分段土のちりにまじはり給ふとなり

薄伽梵

佛をばきやぼんといふすなはち佛の十號のひとつ也

午正月本出來

評、四段目殿のひやうえが潔癖にて狂氣の段よめむすめのいきぢ萬端始終おもしろししゆかう文句共に大でき尤はんなりとして道具立迄見物の氣を取よく出來たりとの評判にて有しとぞ

日西天に沒する事三百七十余日大凶變じて一元に歸す

天王寺にて楠が見たる聖德太子のみらいきの語なり

もろこし管仲が古主をすて桓公をたすけし

齊のくはんちうははじめ齊の公子糾が傅なり齊の君死し給ひて糾の弟くはん公齊の君とならんとすこの故に兄の公子糾と桓公とたがひに國をあらそひて軍におよび終に公子糾うたれて桓公の世となれりはじめこうしきうが戰場にてくはんちうは主人こうしきうがためにくはんこうを射てころさんと迄せしか共後にくはんこうの世になりてくはんちうがいのちをたすけ齊のまつりごとをさづけ給ひければくはんちうすなはちくわんこうの宰相となり齊の國をよくおさめたり此事春秋左氏傳につまびらかなり

淨瑠理評注卷五終

題瑠璃天狗首

別古宏宇宙兼愛好風光四時移變幻一日有興亡窮途遊子恨薄命美人傷誤軀過病患晦跡託徉狂或尋塵外靜却混世中忙丹心偏報國白首克勤王公孫時隱僕姬子亦爲倡千金當寶劍一炷駐名香吟行追蛺蝶獨臥戀鴛鴦梅襲曉夢發柳惹春嬾長日中期約束夜半苦相償豈無解亂手必有挫奸觴温袍初立志衣錦竟歸鄕蔑如以雜劇誰道説荒唐文竊狂子室解上郭生堂見宜偏窒欲嫉惡自懲行誦絃諳事實下學習篇章獨謠對月枕共樂弄花床伎加泣鬪氏調和惱周郎視收懷孝悌聽取創忠良縱然世俗樂粤兮亦何妨人間那般事如是大戲場

右

文化丙寅秋日掠贊居士書於浪華客舍爲友人蓑笠翁

瑠璃天狗附言

往昔穂積先生のあらはされたる難波土産といふ書にむかしの淨瑠璃の文句をすこしづゝ注釋し其一齣の趣向あるひは文句のつゞけがらを評したりといへども其注釋のくはしからぬのみにあらず儒者氣てかたくなゝる論どものまじりたれば見る人あくびかちなるによりて我蓑笠翁先生あらたに此書を著せり今のよの淨るりを演る人この本を見たまはゞ文句のこゝろ明らかにわかりて心いきよくうつり詞のいきごみたしかにしれてめりはりに味はひを生ずべし又淨るり本をつぶよみにする人この本をみたまはゞ文句にこもりたる故事のわけ古歌の心など多くの書籍を引てたしかにしるしたれは和漢の學問にすゝむ階梯となる事多かるべし

近來の板本に正本をうつしあやまりたることすくなからずたとへば川中嶋の配膳の齣に牛の刀といふことを牛の力と書てかなづけまてかへてあるゆゑ歴々の演者も牛のちからとかたらるゝ事きのどくなるもの也すべてかやうのたがひを此書にはくはしくあら

ためたゞしたり

此書卷之一金閣寺の𢌞くりから龍の注を本文に脱せるを今こゝに擧ぐ　倶利伽羅といふは天竺の語也玄應音義には迦羅迦龍とも書て漢土にては黑龍と翻譯す其龍劒を纒ひ繞るこれ不動明王の形なりと有また不動秘密法には壁の上にひとつの劒を畫き古力迦龍王を以てこの劒の上に繞はせ其劒の中に阿字を書き心中にこの劒を觀し又心に不動を念じて六箇月に滿るときは古力迦龍王みづから其かたちを現じ人の形となりて常に其人に相したがひ驅使ふところに任すと有此經説によつてつるぎをくりから丸と名づけたる物なりといへりこの一條賽笠翁先生の原本をうつす時書おとせしゆゑ此所にしるし侍り看官その疎漏を嘲りたまふことなくむば幸甚

懸金堂主人謹識

目錄

目錄終

瑠璃天狗巻之一

賽笠翁著

〇祇園祭禮信仰記　金閣寺の段

そも〳〵金閣寺と申は鹿苑院の相國義滿公の山亭三重の樓造庭には八つの致景を移し夜泊の石岩下の水瀧の流ち春深く柳櫻を植交て今ぞ都の錦なる

金閣寺はむかし西園寺公經公の山莊にてこの邊に西園寺といふ寺を建たまひしを足利三代太政大臣義滿公剃髮して道義と號し此地を請ふて隱居所としたまひ第宅を建て鹿苑院といふ額をかけられ庭に三重の閣を設け給ふこの閣の内外こと〳〵く金箔を貼せ給ふゆゑ世に金閣寺と稱したり此庭に八景あり法水院、潮音洞、究竟頂、鏡湖池、岩下水、龍門瀑、銀河泉、安民澤是なり又池のほとりに九山八海の石ならびに夜泊石、赤松石ありこの赤松石は赤松家より獻ずる所也といふ委しくは雍州府志に見えたりこゝに相國といふは太政大臣の唐名なり

柳櫻の歌は古今集に「見わたせはやなきさくらをこきませて都そはるのにしきなりけりとよめる素性法師の歌也

究竟頂に押こめた慶壽院此天井楠の一枚板

究竟頂とは此上なき頂上といふ事にてこの三重の閣の三階にて則この庭の八景の一つ也雍州府志に三間四面の一枚板をもつて床とすと見えたるを天井の事につくりかへたるなり

狩野助直信が雪姫ならでないといふ

直信は繪師の主馬尙信のこと也自適齋と號して探幽法印の弟也雪姫は雪信と云女繪師のことにて探幽の姪孫也

雪姫も同じ樣に何やら斟酌

斟酌は杓をもつて酒をくみうつはものに入てその深さ淺さを量る也と四書通義に注す物を見はからひ酌はかる心をいふなり

慶壽院が警固隨分と怠るなと

警固はいましめかたむるとよむ字にてきびしくかこふ事也

彼王陵が母を擒同前

漢の高祖と楚の項羽と爭鬪のとき王陵數千の兵を集めて漢祖の方に付ぬ項羽王陵をよばんと思ふ心深かりければはかりて王陵が母を取籠て王陵をよぶに陵が母ひそかに王陵がもとへ使をつかはしわが身とりことなるともいたみ思ふべからず漢王の爲に忠をきはめて二心を見せ奉るなと云ひやりさて我身ながらへてあらば王陵それ故に心よはき事もあらんと思ひてつるぎにふして命をうしなひたること前漢書にみえたり

王昭君が胡地の花色香失ふ風情也

漢の元帝の宮女王嬙字は昭君胡地のえびす國にゆきて都をおもひしたひしありさまをいへり

雪舟樣より父將監迄傳はりしが

雪舟名は等楊といひ雪谷軒と號す備中の人にて永祿三年八十七歲にて卒す將監といふは土佐の光高のことにて雪信の父にはあらずかれこれの畫かきをとり合はせて狂言につくれり

岩下の井戸へ釣おろし

岩下水はこの庭の八景のうちなり

古へ齊の晏子といふ者身の長は三尺なれども諸侯の上に立て國政をとり行ふ

齊の晏嬰身の長わづかに三尺なれどもよく主人の景公を補佐して諸侯の上にたちたる事晏子春秋にみえたり

人には一つの癖有物とは慈鎭が歌

奈良の一乘院の御門主は慈鎭和尙の御舍弟なりしが八月十五夜中門にたゝずみ給ひける折しも御力者あまた御庭を掃除しけるに傍輩どもいかに今宵慈鎭坊の歌よませ給ふらんといひあへるを聞し召て翌日慈鎭和尙の御もとへ狀を進せられし樣は一山の貫主三千の棟梁にておはしませば眞言止觀の兩宗をこそ興行もあるべき事に候へ日夜風月のたはふれを翫び給ひ候こと釋門の義にもそむきかへつて凡俗の譏に着せられ候事もつたいなく候御室のめしつかい候奴原去ぬる夜の月に御身の上の事を申しさた仕候向後は此道を御さし置候へかしと存候と敎訓狀を進せられしかば慈鎭御返事によろこび入候とておくに一首の歌をかき給へり「みな人の一つのくせはあるぞとよ我にはゆるせ敷しまの道と遊ばされてまゐらせられしかば門主沙汰の

かぎり也とてまた申させたまふ事もなくやみ給ひきと清巖茶話に見えたり

天竺波羅那國の大王まつ此ごとく碁に打入あやまつて沙門を殺した引事

是は太平記の引事のまゝ也この事は丹桂籍にいはく梁の榼頭師といふ僧よく戒律を守られけるゆゑ武帝これを崇め信ぜられしがある日此僧と武帝と碁をうたれけるに武帝碁のことばには殺着せよとのたまひければ近臣遂にこの僧を斬たり後に武帝これを悔みてかの僧の末期に何をかいひしと思ひ給へば彼臣下のいはく僧罪なくして殺さるゝ事は前世にて我沙門たりしが冬の比地をほるとて一つの白き蚯蚓を斬たり此みゝず帝の前生の身なりこの因縁にて今かくのごとしといひたりと云々

下邳の土橋に石公が沓を捧し張良もかくやと計りいさましゝ

前漢書に云張良わかきとき下邳といふ所の橋の上に行てあそびけるにひとりの老翁あり沓をはしの下におとして張良にとりてはかせよといふを心よからぬ事とは思へど老人のいふことなればと沓を取て跪てはかするに翁立ながらはきて哄ふて去ぬしばし有て翁また歸り來り汝に道を敎へんと云則太公が兵法を授たり張良これをよみて後に漢の高帝の師となれり此老翁は黃石公也

令する詞に

令はものをいひつける事なり

父雪村迄傳はりしが

雪村は雪舟の弟子にて元龜天正のころの繪師也雪信の父にはあらず

雨をおびたる海棠桃李

白樂天の長恨歌に楊貴妃のすがたをいふとて梨花一枝春雨を帶と作りまた春風桃李花の開く日といふ句もあるゆゑこれらをとり合せたる也

屠所の羊のあゆみ兼

屠所は獸を料理する所也そこへ引れてゆく羊のひと足〳〵死地に近づくたとへにて摩耶經に出たり又この心を赤染の衞門の歌に「けふもまた午の貝こそふきつなれひつじのあゆみちかつきぬらんとよめり此うたは後拾遺集に出たり

三井寺の賴豪法師一念の鼠となり牙を以て經文を喰

さゝ根をはらせし例も有
三井寺實相房の賴豪阿闍梨白河院の御后の腹に皇子誕生のことを祈けるに勸賞望にまかすべきよしなりければ皇子御誕生の後戒壇堂を建んことを乞ふに其事勅許なかりければ賴豪大にいかりかの皇子を祈りかへし奉りその身は持佛堂にて干死しければ彼皇子は四歲にてかくれさせ給ひけり其後叡山の良眞に仰せて祈らせられ皇子御誕生ありければまた賴豪の死靈怨をおこし兎角山門の有ゆゑ也とて鼠となりて一山の聖敎の經どもをくひやぶりし事江州一景錄につまびらか也

細目の葛草の根を月日の鼠が喰切／＼
人の命を草の根にたとへ月日を黑白の鼠に譬へたりこの事は賓頭盧爲優陀延王說法經に見えたり又散木集に見えたる俊賴の歌に「わかたのむ草の根をはむ鼠そとおもへば月のうらめしきかな又土御門院の御歌に「霜かれの草葉にさはく日の鼠よりふのけふになるぞほとなき

青陽の東に當つて木曜星壽命家に建す時は忠臣君に代るといふ
青陽は春の異名木曜星は九星の星のうち也家に建すとは亥の方にむかふ也忠臣君に代るとは忠義の臣下君にかはつて政をとり行ふなり

木づたふましら
ましらは猿のこと也

かけたる額は潮音洞の椽側へ
潮音洞も此庭の八景の內にて三重の閣の第二なり

釋迦觀勢の三尊佛
雍州府志に云庭に三重の閣を設け第一を法水院と號す本尊釋迦左右に觀音勢至ありと云々

いふに念誦をとゞめ給ひ
念誦は佛號經文などをとなへる事也

立明しの灯をうつせば戚南塘が火龍炮ゑん／＼ともへ上り
立明しは燭臺の火の事なりつれ／＼草に立あかししろくせよといふこと有戚南塘は明の代の兵術者なり火龍炮はのろしの名なり

天地にひゞき動搖せり
動搖はうごきうごくなり

とり付さがるさゝがにの蜘のふるまひいとあやうき

さゝがには小々蟹と書て蜘のことなり蜘の形はちひさき蟹に似たる故さゝがにと云也「わがせこか來べきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしもとよみ給へる衣通姫の御歌の詞をとれり扱くもの糸を最といふ字にかけていとあやうきとつゞけたり

力士の如く眞中にすつくと立たる松永大膳

金剛力士とて唐の則天皇后の左右に給事せし強力の者のこと也事は唐書にいづ

供奉する眞柴は大鵬の萬里に羽うつ朝嵐

大鵬といふ鳥はひとたび羽うてば九萬里をかけるといふ事莊子に出たり夫を久吉の威勢にたとへたる也

瀧は今より龍門の名を萬天に鳴ひゞく

龍門瀑といふ瀧も此庭の八景のひとつ也

〇菅原傳授手習鑑　道明寺齣

歸洛を松の島臺行末祝ふ熨斗昆布

歸洛はみやこへかへるといふことなり島臺はむかしの洲濱といふものゝかたちをうつしたる也むかしは貴人へ物をさゝげる時すはまがたを木にて作りそれを臺にして金銀のつくりものをのせあるひは草花などをうゑてさゝげし事古き物がたりに見えたり此臺は海の洲さき濱などのかたちになぞらへてつくる故洲濱といふ也菅家の御うたにも「秋風のふきあけにたてるしらきくは花かあらぬか波のよするかと讀せたまひて吹上の濱の菊をすはまにうゑて君にさゝげたまひし事古今集に見えたりもと此洲濱といふものは蓬萊、方丈、瀛洲といふ仙人のすむ三つの嶋をうつしたるものゝよし中右記に見えたれば後にそれを島臺と名付てめでたき事に用ゆる道具とせし也熨斗のことは秋草に云今の世に三寶に伸鮑をすゑて客人へ出すを臺熨斗といふ也古代客をもてなす初にのしあはびを出す事なし手掛といふ物を出せし也手掛は檜木にて折敷のごとく平く六角にして少しふちをつけたるもの也其臺の上に五色の削ものを高盛にすと也其内の黄色がのしあはびなり此のしあはびを熨斗といふ字に書は誤也熨斗の字は衣の皺をのばす火のしのこと也又のしあはびをのしと計り書も誤也

菅丞相

菅原の道眞公右大臣なりしゆゑ菅丞相と申奉る丞相は大臣の唐名也

判官代

すべて官人に四分配當といふ事有て長官次官判官主典とわかるゝ也長官はかしら次官はすけ判官は其官の役目をかしらとすけとよりわけてつとむる役なり主典は其官の筆取也後に判官代といふは仙洞の官人の事にて諸大夫是に任ずるよし職原抄の注にみえたり

路次の用心

路次は道すがらといふこと也

譜代の家來

譜代とは代々の家來といふ事也續日本紀には譜第と書たり又家來といふ事は下學集に家來は家人の義也と有職原抄にも家禮と書り源氏の花鳥餘情に家禮といふは子の父をうやまふ事也他人なれども子になぞらへて禮をいたすをば今の世にも家禮といひ來れりとありしかれば今のように家來とかくは宛字にて本字は家禮とかくべき也

かりや姫

菅丞相の御女にかやうの御名ある事なしこれは須磨の記といふ僞書有て菅公の御作の文章といひ傳へつくしへさすらへの御時都より津の國の須磨までの道の記にかきなしたる物にて其中にかりや姫といふ名有て菅家の御孫としたりまた白太夫といふものもかの須磨の記の中に見えたり

若黨中間

本朝の俗雜兵をよびて白歯者(あをはもの)と云今いふ若黨これ也と書言字考に見えたり中間の事は秋草に云むかしは侍中間小者と次第して侍と小者との間なるゆゑ中間といひたる也中間といふもの昔よりあり源平盛衰記十三に黒丸といふ御中間と云こと有是は高倉宮の中間をいふと見えたり

白狀さするそれ引立と

白狀の字は漢書の丙吉が傳にも出たる字にて其ありさまをありやうに云ひあらはす事なり

詞のてん〴〵

展轉とかく字也漢書の注に展轉とはその心を移し動すを云と有ていろ〳〵に詞のかはる事也

弓手の腤（あはら）
軍術の書に左の手を弓手とも雄手とも書り弓をもつ手なる故弓手といひ又左は陽の方なるゆゑ男にたとへて雄手といひ右は陰の方なれは女にたとへて雌手とも妻手共書よし書言字考に見えたり

さすがに河内郡領の
むかしは郡々に大領少領の役人有て其一郡の政道をとり行ひたり夫を郡領とも郡司ともいふ今の郡代のごとし

暫時の仰天
仰天は天を仰むくといふ心にてあきれはてたるさまを云

輝國が安堵〳〵
安堵の堵の字は垣といふ字と同じ心にて通鑑の注に人の安然として墻堵の遷り動かざるか如しと有それゆゑに心の落つきたる事を安堵といふ也

優美の姿
優美はやさしくうるはしとよむ字也

婭　殿
あいやけはむこの親としうとの親とをいふ也

棟梁殿
棟は家のむねのこと梁はうつばりの事にてものゝかしらを棟梁と云也重き臣下を棟梁の臣といひ大工の頭を棟梁といふも同し心也

有爲轉變の世のならひ
有爲は此世にあるものゝこと轉變はうつりかはる事にて經文にある事也

罪業消滅
つみもごうもきえうせる心也

娘が菩提逆緣ながら弔ふ此尼種々因緣而求佛道
菩提は佛の道の事逆緣は親が子をとむらふはさかさまの因緣といふこと也種々の因緣にて佛道を求むといふも經の文也種々はさま〴〵也

强欲非道
むりに欲深くして道ならぬことをするをいふなり

菅丞相の右手の方
雌手の事上に注す

暫時の睡眠
しばしねむりたる間と云事也

巨勢の金岡が書たる馬は夜な〳〵出て萩の戸の萩を

喰

巨勢の金岡は宇多の帝の時の上手の繪師也この金岡がかいたる馬の繪はよな〳〵出て禁裏の萩の戸といふ御殿の庭の萩をくひたる事古今著聞集に見えたり

唐土にも名畫の譽呉道子が墨繪の雲龍雨をふらせし例も有

是は名畫錄に出たる故事にて唐の玄宗のとき呉道子といふ人有仙術をえて畫の上手なりしが墨繪の龍をかきて雨をふらせし事有

身は荒磯の嶋守と

あら磯は波風のあらき磯ばたといふ事嶋守とは遠國へさすらへる人の我身を嶋守にたとへていふ詞なり家隆卿の歌に「玉嶋やにゐ嶋守かことし行河瀨ほのめく春の三日月ともよめり

上着の小袖かけたる伏籠もろともに

秋草に云小袖といふはむかしはすべて袖の下を丸く縫たるを云給にてもわた入にてもひとへ物かたびらにても袖の下丸きは小袖なれども今はわた入のみを小袖といふ事になれり伏籠は順の和名抄には火籠と書たりまた漢土にては薰籠とも書て衣裳に香をとめる爲に籠の上より衣類をふせて其中に火を籠る物ゆゑふせごと云也

浪風あらき揖枕

かぢまくらとは船にてねること也歌に多くよめり

鳴ばこそわかれをいそげとりの音のきこえぬ里のあかつきもかな

これは決して菅家の御詠にはあらず後のよの人の別戀の歌なるべし

父はもとより籠の鳥雲井のむかし忍ばるゝ

籠鳥の雲をこふといふたとへにて此事は鶡冠子に籠中の鳥空しく窺へども出ずといふ語より出たる詞也爰にてはとらはれとなり給へる菅丞相をかごの鳥にたとへ禁裏を雲の上といふ故雲ゐのむかし忍ばるゝと書なしたる物なり

涙の玉の木槵樹珠數の數々くりかへし

木槵樹はつぶの木也一名菩提樹ともいふその實を木槵子といひて球數にもちゆる物なり此事翟豹が古今注に出たりこの木槵樹は今も河内の道明寺の境内にあるなり

○同　寺子屋齣

一字千金二千金三千世界の寶ぞと
一字千金といふことは史記の呂不韋が傳に出たる語にて呂不韋といふもの呂氏春秋といふ書物を作りて咸陽といふ市町の門に出し其書物の上に千金をかけおきてあまたの學者たちをよせ此書物の内にて一字よきことを増し加へるか一字あしきことをけづりのけてくれる人あらば其褒美として此千金をあたふべしといひし故事也今この齣の枕のこと葉にこれを出したるは手ならひをしゆるも其樣なるものにて無筆の者のためには一字が千金にも二千金にもあたるとのたとへなり千二千三千とつづけて三千世界のたからとかきつらねたる所か作者のはたらき也三千世界といふことは廣き世界といふ心にて佛説より出たる詞也

菅秀才
菅原の道眞公の御子はあまたましましけれ共太宰府にてかゝれさせ給ひし後に御家をつがせられたるは淳茂と申せし御方にて其御事をかやうに取くみたる狂言也秀才といふは才智の秀てたる人を云ふ

武部源藏
元祿のころ江戸に建部傳内といふ能書ありて今に傳内流といふ名殘れりその人の名をかりてとりくみたる也

いたはり傅き
かしづくとはたいせつにそだてる事を云俗に娘をよめ入さする事をかしづけるといふは大なるあやまり也

一日に一字まなべば
毎日一字づゝならひても一年には三百六十字覺ゆるといふ心也

利發らしき
利は伶利とてものにかしこくさとき心發は發明とてものをよくあきらめ見ひらく心なれば此二つの詞をあはせて利發と云也

ほんそ子
ほんそは奔走と書てものを世話やく時ははしりまはる物なれば父母の子を愛して育てる心にいひ傳

へたる俗語なり

御內證樣

内政とかくが本字にて人の女房はうちのとりまかなひをし夫は外をおもに勤るがつねなれば内の政とかきたる物也それを誤りて内證と書來れり

まだぐはんせがござりませぬ

ぐはんせは觀世と書字にてよの中の事を觀じしることもなき子供のさまを云也

繁花の地とちがひ

片山家にてことしげく花やかならぬ所をいふ也

公家高家

公家は堂上方高家は武家の歷々をいふ

時平

本院の左大臣時平公と申て右大臣道眞公と共に延喜の帝を補佐し奉られしに道眞公文學にたけさせ給ひければ帝の御寵愛深かりしを時平つねに妬ましく思はれけるに時平の妹帝の御后なりければ其后より讒言を申上させられしゆゑ帝もいつとなく御后の詞にまよはせ給ひて道眞公をつくしへ流させ給ふやうになりたり其讒言の趣意は道眞公の御むすめ齊世の親王に嫁し給ひける故御むこの親王を天子の御位につけ奉らんため當今延喜の帝をなきものにせんとたくませ給ふよしを時平より妹の御后を以て讒言せられし也其事は北野天神縁起菅家抄梅城錄などにつまびらか也されども此時平公は美男の色ごのみにて御伯父の大納言經信卿の北の方をうばひ歸りて妻とせられし事も十訓抄に見えておこなひはよろしからぬ人なれど今戲場に扮するやうなるおそろしくにくげにて車をふみくだく樣なる人品にては有ざりし

玉簾の內

玉だれはみすのこと也玉はほめこと葉にて玉のやうなるすだれと云心也

屠所のあゆみ

屠はほふるとよみて獸をころして料理する所をいふ屠所の羊のことは信仰記の注に出たり

さうがうのかはる物

相形とかくか本字にて人相かたちといふ心也

死出三途の

閻魔王の國の堺は死天山の南門なりといふ事十王

經に有また三途川といふ事も同し經に出てみな冥途の有さまをときたり

嫁にも喰さぬ此孫を

これは木みしり茄子にたとへたる續きの詞にて秋なすび嫁にくはすなといふことわざを取合せたる也此たとへの出所は夫木集の「秋なすびわさゝのかすにつけませてよめにはくれじたなにおくともといふ詞より出たりこの歌の心は秋茄子を酒のかすにつけませて棚にあけておくとも嫁にはくはすまじきと也是はその嫁をにくみてくはすまじきといふにはおらず秋なすびはたねのなきものなればそれにあやかりて子が出來まいかと案じ過しをするしうとめの深切なる心をいへりわさゝのかすは新酒の粕なり

こいつ有論と引とらへ

有論と書はあて字也本字は胡亂と書てみだりなるこゝろ也胡亂の字を唐音にてはうろんとよむ也

右大臣の若君

菅原道眞公昌泰二年右大臣に拜せられたまふよし公卿補任に見えたり

玄番が權柄

權の字は秤の錘のこと柄の字は斧の柄の事にて前漢書に大臣權柄を操て國の政を持すと有て物のおさへになることをけんへいといふ也

常張の鏡

これは宛字にて本字は淨頗梨の鏡と書是も炎魔王宮にあるかゞみにて罪人これにむかへば前生に作りし善惡の業直にあらはるゝよし十王經にとけり

鐵札か金札か

十王經の注に善を金筒にしるし惡を鐵札にしるすと有て善と惡とのちがひめをいふとなり

一生懸命

懸命はかゝる命とよむ字にて人の一生の命のあやうき時と云こゝろ也

凡人ならぬ我君の御聖德

たゞ人ならぬ菅丞相の聖人の樣な御德といふことなり

梅は飛櫻はかるゝ世の中に何とて松のつれなかるらん

此歌のことは源平盛衰記に云菅原の大臣東風ふか

ばといふ御歌をよみ給ひしかば紅梅つくしへ飛行けれぱ同じ御所にならびて有ける櫻の御言の葉にかゝらざることをうらみて一夜が中にかれにけるを源の順が歌に「梅はとびさくらはかれぬ菅原やふかくそたのむ神のちかひを又搨鴫曉筆十九に云昌泰四年正月廿九日菅丞相を大宰權帥にうつし九州へ配流せさせ給ひけりかしこにて三とせの春秋を送らせ給ひしに都にて愛せさせたまふ梅花を思し召出て「東風ふかは匂ひをこせよ梅花あるじなしとて春なわすれそと詠じたまひしかばこのうめはるかに飛去て配所の庭にぞ生たりけるされば夢の告有て折人つらしとをしまれし西府の飛梅これ也心なき草木までも馴し御別れをしみかなしみけるにや其後御庭のさくらはかれけるとなん此事をきこしめし及ばせて「うめはとひ櫻はかるゝ世中に松はかりこそつれなかりけれさてこそ都の松は御跡を追て西府には生たりけれ追松と申侍るこれ也とみえたりこの二說にては此歌のよみ人かはりたれど今下の句をばすこしかへて菅家の御歌としたる也

前後不覺にとり亂す

不覺はおぼえずと書てあとさきをもわきまへぬことなり

未練者めと呵付

未練はいまだねれずと云事にて人をさげしむ詞也

異義を正し

異義は宛字にて本字は威義也きつとして行義よきさまをいふ

いぶかしさよ

不審と書ていぶかしとよむ合點のゆかぬ心也それ故次のことばに御不審は尤とうけたり

親兄弟共肉緣切

親兄弟は同じからだ同前なれば骨肉の緣と云也

心の箸

箸はうらなひに用る物也それ故ものゝめあてをめどゝいふなり

迷途の旅

迷の字はあて字なり冥途と書べしくらき道といふことにてあの世へゆく道也

あの子が香奠

奠はそなへるといふ字にて佛前へそなへる香の料に贈る金銀をも香奠といふ也

利口なやつ立派なやつ徤氣なやつ

利根と云をあやまりて利口ともいふ也利はさとしと云心根は根性の根の字にてさとき生れつきといふ事也利口とかけば口をきく心にてこゝには叶はず立派ははのたつといふことにて際立こゝろ也けなげの徤はすこやかとよむ字ゆゑ氣性のきつとする事を云

同腹同性

梅王松王櫻丸は同じ腹に生れたる三ッ子ゆゑおなじ性分といふ事にて菅丞相の愛し給ひし飛梅追松と都にてかれたる櫻と三木のことをとりあはせて三ッ子に仕立たる所作者のはたらき也

あじろの乘物

あじろは邀條とかいて竹をあみたる物故竹にて製したる乘物をあじろの乘物といふ

白無垢

無垢はあかなしとかきて白くあかづかぬ衣類をいふなり

六道能化の弟子となり

六道は地獄道畜生道餓鬼道修羅道人間道天上道の六ッの道をいふ其六道にまよふものをよく化度するとてすくひたすくる佛を地藏菩薩といふこと地藏本願經に出たり爰にては地藏菩薩の弟子となれよと云心也

劔としでのやまけこへ

刀山とて冥途につるぎの山あること諸經に見えたれば今小太郎がつるぎにてころされたる事を此世ながらつるぎの山と死天の山とをこえたる事にとりなしていへり此一場はじめに一字千金二千金と書だして末にいろはにて書とめたる事是又作者の粉骨と云べし

○ひらかな盛衰記　無間鐘の齣

爰も名高き難波津に戀の船着數々の多かる中に取分て酒汲かはす神崎の里の色宿千歳屋は

むかしの遊女は船にのりたるゆへ和歌の題に遊女とあれば船のことを詮によむ也それ故こゝにも戀の船着なとゝ書たり神崎江口はむかしの遊所にて

ありし事朝野群載の遊女の記にくはしく見えたり
古事談に二條の帥長實水干裝束を着て神崎の遊女にいかゞ見ゆるとひたまひし事も見えたり

紅も園生にうゑて隱れなき

この詞謠曲の安宅賴政などにも出たれといづれの註釋もさだかならずこれはたゞ紅色の花は園の中にうゑてもかくるゝ事なくみゆるよしをいひたるものにてさせるより所は有まじき也たとへば虞美人草の名を滿園春といふよし花疏にいだせるがごとくたゞ見えたるまゝを云詞成べし

主が答拜

答拜は客が物をいへばそれにこたへてかしらをさぐと云心也

追從輕薄

追從の事は前に註す輕薄の字は杜子美の詩に紛々たる輕薄何ぞ數ふることを須ひんと作りてかるがるしく薄き心をも有樣をもいふ也

本の心で淡路嶋

まことのこゝろにてあはふといふ事を淡路嶋といひかけたる也さて又「あはぢ嶋かよふちどりのなく聲にいくよねさめぬすまの關守といふ歌をとり「千鳥も今はこのさとへとつゞけたり

彼ふかまの源太樣に

箕山大鏡に眞夫はおもてむきの買手にあらずして密通する男をいふ眞實におもふ夫といふ事也といへりされはふかまといふはふかまぶを略せる詞にて深き中のまぶと云心成べし

千鳥に逢が嬉しさに足もいそ〳〵

磯ちどりといふ詞あるゆゑいそ〳〵とつゞけたり足もいそ〳〵はいそぎてはやくありく事也

よふまめゐてたもつた

まめはまめやかといふ心にて實の字なり實は虛のうらにて無事なるこゝろなり

アヽ聲が高いかべに耳

詩經に君子易く言に由ことなし耳垣に屬といふ事あり管子にも墻に耳ありといふ語有てみだりにものいふことをいましめたるたとへ也

煙くらべん淺間山

富士と淺間はいづれも常にけふりのたつ所ゆゑ烟をくらべんと云ひならはしたる也後撰集の歌に

「しなのなる あさまの山もゝゆなれは ふしのけふりのかひやなからんとよめり今むめがえがきせるのけふりとおもひのけふりとをくらべんといふ心にかきなしたり
もと某は頼朝卿のゑぼし子
男子の元服のときゑぼうしを着せて給はる人より名乘を申うくるゆゑ是をゑぼし親といひ我身をその人のゑぼし子といふよし秋草に見えたり
一生埋木となり
水の中に埋もれてあらはれぬ木をうもれ木といふ也古今集の歌に「名とり川せゝの埋木あらはれはいかにせんとか逢みそめけんとよめり
君傾城に成さがつても
君は江口の君のこと西行の撰集抄に見えたり傾城のことは前に注すいづれも遊女を云也
首尾かぶ首尾か
居家必用に首は始也尾は終なりとありてはじめをはりの都合する事を首尾するといひ不都合なることを不首尾といふ也
奥の吉左右聞迄は
左右はとにもかくにもとよみて善たよりかあしきたよりかを聞事を左右をきくといふ也こゝにてよきたよりを聞といふことを吉左右と云ひたるは左右の字をひとかたにかりていひたる也
しばし待間も千歳やの
しばしの間をも千年もすぐるやうに思ひて待遠くおもふよし也つれ〴〵草にあかずをしとおもはゞちとせを過すとも一夜の夢のこゝちこそせめといひしはこのうちのこゝろ也
弓矢神の御加護と
加護の字は法華經に出くはへまもるとよみて神佛のめぐみをくはへてまもり給ふをいふ也
其敵のけめう實名
義經記にいかなる人ぞ假名實名尋ねて參れといふことあり秋草に云假名といふを今の世には苗字と云假名と書は非なり家名とかくべしといへりしかればけみやうは何氏と云苗字のこと實名はまことの名也
憶なしやうせきいへ聞ふ
證跡と書て證は證據といふことにてしるしとよむ

字跡はあと〻よむ字にて是もたしか成しるしをいふ也

滋藤の弓たづさへ

滋藤は重藤ともかく也しげく藤にてまきたる弓也

面目もなき御對面と

史記項羽本紀に我何の面目あつてかこれにまみえんといふ語有さしむかひてあはす面も目もなしとはぢ入ていふ詞也源氏物語には面目をめいぼくとよませてほまれのある心にもちひたり

世の雑談にいひふらせし

雑は萬葉集にてくさ〳〵とよむ字也いろ〳〵さまざまにとりませてしかとせぬ咄しを雑談といふ也

鎧ひた〻れ小手脚當

冬草に鎧の事を具足といふ具足の二字はよろひたれりとよみて甲も胴も小手脚當もなにもかもとりよろひて事足るをいふ也俗に大將の鎧をよろひといひ平士の鎧をは具足といふまた一說に古制の鎧をばよろひといひ近世の鎧をは具足といふと有これらは取にたらぬ俗說也と云

甲打物夫々に箙かきおひ出立たる

上にいふごとくよろひといふ名には外の武具もこもりたる義なれどかやうにつゞけていふ時は鎧はよろひ一ッの名にて小手すねあてかぶとなど〻別別にいひ立ねば聞えぬ也打物は太刀かたなの類にて鍛冶のうちたる物を云箙の事は釋名に矢を盛る器也とあり秋草に逆頬箙葛箙栁箙蜻蛉えびらなと有てさま〴〵の說をあげたり

箙に生たる紅梅を一枝手折箙にさせば

長門本の平家物語一の谷合戰の段に云源太梅の花のさかりなるを一枝折て箙にさして敵の中へはせ入てた〻かふ時も引ときも梅は風にふかれてさつと散ければ敵もみかたもこれを見て感じける所に城の内より本三位中將殿の御使にて候梅をさ〻せたまひて候に申せと候「こちなくもみゆるものかなさくら狩と申もはてぬに源太馬よりとびおりてしばし御返事申候はんとて「いけとりとらんためとおもへばと申されけると有按ずるにこの連歌の「こちなくもみゆる ものかなといふ句は無骨にも見ゆるものかなといふ心成べし骨なくと書た無骨とよむ故也

今度の軍に花も源太も我先かけん〳〵とかつ色見せて

梅を花魁とよびて花のさきがけといふことは詩學大成に唐詩を引て且百花頭上の魁となすといふ詩を出せりそれゆゑ梅をはなのこのかみとも云しかつ色みせてはかつはすこしといふ心にてすこし色をみする事を云也それを敵にかつことにとりなしたるものなり

鶴翼飛行の秘術をつくし

魚鱗鶴翼とつゞきて陳法にいふことば也魚鱗はうをのうろこのごとくならぶこと鶴翼はつるのつはさのごとくかさなることなり

勇みいさんでたつか弓

たつか弓は手束弓と書て手ににぎる弓といふ事也それをこゝにてはいさみてたち行ことにいひかけたる也

瑠璃天狗卷之一終

瑠璃天狗卷之二

○新うすゆき物語　清水𣷓

地主の花見の花衣花をかざりて花麗に

地主權現の社は淸水寺の中にあり地主とは鎭守と云ことにて大己貴の命をいはひこむるよし雍州府志にみえたり花衣は端手なる衣裳をいふ玉葉集に「花ころもかさゝき山に色かへてもみちの洞の月をなかめよといふ歌粉川の觀音の素意法師に告給ひたるうたとて入たり

轆酌までが男ぶり

轆の字宛字にて本字は漉酌なり漉は酒をしぼる事酌は杓にて汲ことにてこれはもと酒家の奴隷のことなるよし書言字考に見えたり今のりものをかく長のたかきものを云

ものをろくしやくといふは六尺の字の音に轉じてる

糸より細き柳腰柳さくらをこきませて都ぞ春の錦な

女の腰のほそやかなるを柳腰といふ事は杜子美の柳の詩に恰十五女兒の腰に似たりとつくり家隆卿の柳の歌に「たをやめの春のすかたやこれならんなつかしくもある玉柳かなともよめり柳さくらの歌は古今集に素性法師「見わたせはやなき櫻をこきませてみやこそ春のにしきなりけると讀り

木の下影をやどゝして

影の字はものうつるかげにてこゝにはかならず下陰とかくべし此詞は「行くれてこのした陰をやととせは花やこよひのあるしならましとよめる忠度の百首の歌をとりもちひたるなり

大内人も見たまはん

大内は内裏といふと同じこゝろにて禁中の御かたかたといふこゝろ也

春ごとに見る花なれどことしより咲はじめたるこゝちこそすれ

これは詞花集に出たる道命法師のうた也それを薄雪姬の歌としたるもの也

今の世の小町さませう〳〵の殿御お氣に入ぬはお道理と

少々の男といふことを小町少將とつゞけたる文句

也小町と少將との事は通小町のうたひにはじめて作り初たることにてあと方もなきことゝ也これは大和物語に小野小町と僧正遍昭と贈答の歌あるよりおもひ付たる物なるべし僧正遍昭俗のときは良峰の宗貞といひて色ごのみの事どもゝ有しが其時は宗貞を良少將といひたるよしかのものがたりに見えたり

濃紅の短冊

短冊の紙の見事に赤きをいふ紅梅の短冊といふも同じたぐひ也

筆ずさみ給ふを見て

なぐさみに物をかくことを筆すさびと云手なぐさみを手すさひといひなぐさみに歌よむをくちずさひと云類也

天晴御歌なら御器量なら

あつはれは嗚呼といふ心にて感心する體をいふ

てつとり早ふ

手にとる事の早うといふ詞也

水引通し振よき枝に

たんざくに水引を通す事は短冊のかしらより四分目に空をあけ水引二すぢを二ッに折りあかき方の前になる樣に通すが故實也

よい殿御をで有磯海深き願ひの數々を

ありそうみは海の惣名也普門品に弘誓深如海といふ文あり是は觀音の誓ひの御心は深うして海のごとしといふ心ゆゑかやうにつゞけたり又普門品に若女人有て男を求めんと欲せば則福德智惠の男を生しめんとあるは男の子を求んとする女の事なるをこゝにはよき夫を求むるむすめの心にかへて用ひたり

遠山の腰白々と帶したやうに見ゆるは何

白雲帶に似て山の腰をめぐるといふ詩の句を白樂天としたるは謠の作者のつくりことゝ也これは具平親王の詩にて江談にみえたり

はげたつふりは兀として阿房らしい鼻の下

古文眞寶阿房宮の賦に蜀山兀として阿房出とつくれり兀とははげ山の目にたちたるを云貝原好古の諺草に云秦の始皇阿房宮の大殿を作りて民をなやまし終には天下をもうしなふ是至愚のわざなれば日本にて人のおろかなるをあほうといふはこゝに

起れりと云さもあらんかしといへり

讒る下からくつさめ〳〵

陰言いはれてはなひるといふ諺によれりはなひるとはくさめすること也此ことわざの出所は詩經の終風の篇に寤言寐られず願てこゝにすなはち嚔と有て注に今俗人嚔ときは人我をいふといへり此古の遺語也と云

つれをまいたは風吹に誹諧の宗匠顔

これも風吹に灰をまくといふたとへによれりたとへの出所は延命地藏經の風に向ふて灰を投ずればかへつて其身を汚すがごとしといふ文によれり

みづ〳〵したる男の鬢付

古事記に美都々々斯久米(みづ〳〵しくめ)の子等と有てわかくうるはしきかたちをいへり

粟田口の住人來國行

城州西の岡に住す其子國俊といふ雍州府志に云山城の國いにしへより巧手あり粟田口の冶工當麻の丞等がうつところを上作とす

花曇

三月比空のくもりてすこし雨のふるを云もろこしにては養花の天といふよし月令廣義に見えたり長嘯の擧白集に「此ころの世は春雨そふるさとのよしの山より花くもりして」と讀り

大慈大悲の花なれば一枝折て家づとに

慈悲のふかき事觀音經に出たり清水寺の花なるゆゑ大慈大悲の花と云り家づとゝはみやげの事なり

主は誰共しらぬ共結びとめたる枝ながら

此詞は清輔の袋草紙の人魂の歌の「玉はみつぬしはたれともしらねともむすひそとむるしたかへのつまといふ歌によれり

折てお歸り遊ばすは落花狼藉

和漢朗詠集の落花狼藉暮春風といふ詩によりてかけり狼藉の字は通鑑演義に狼草を籍て臥し去るときは雜はりみだすこの故に物のたつよこにやぶれみだるゝ事をらうぜきといふと有ておほかみの物をふみちらしたるやうにすることを云也

下もへ計り下紐のまだとけ初ぬ薄雪姫

下もえとは春の若草の土の下にきざしてまだ葉をあらはさぬをいふ續拾遺集の歌に「今よりは春にたりぬとかけろふの下もえいそく野へのわかくさ

ともよめり下紐は帶の事なれば下もえばかり下ひものまだとけそめぬとつゞけてとけぬといふ詞の縁をうすゆきとつゞけたるもの

御照覽

神佛もあきらかに御覽あるべしといふ誓ひのこと葉也

驪山の契やこもるらん

玄宗楊貴妃と輦に相のりて每年十月驪山の溫泉にみゆきし明年の春にいたりて歸給ひし事明皇雜錄にみゆ

あふむがへし

同し歌に一字をかへて返歌する事をいふ

麁菜の非時も進上

出家の食は正午の時を正食とす少しにても晝過れは非時といふと釋氏要覽に見えたり麁菜は粗末なる野菜と云こと也

あふせは石より忝い

石よりかたき契約といふ事をふくめてかきたり

先非をくひてせんかたも千手の誓影たのむ

先非を悔るとは先達ての不調法を後悔すること千手の誓ひとはこの淸水の千手觀音の御ちかひにもし嗔り恚る事多く共常にあがめうやまふ思ひをなさばすなはちいかりを離れしめんと說せ給ふ事普門品に有ゆゑ其御かげをたのむといふこと也此影の字はあて字にて陰の字をかくがよし

念彼觀音の御名をとなへ

普門品の偈に或囚禁枷鎖手足被杻械念彼觀音力釋然得解脫と見えたり是はもしとらはれとなりて手がせ足がせをいれられても彼觀音の力を念せば直にかのとらはれをゆるされんといふ心也さるによりて國俊も觀音の佛力によつて父のゆるしをうけたく思ふより御名を稱へて瀧にうたるゝなるべし

七度結びて親と成

阿難問經に識母の胎に託して凡三十八箇の七日ごとに一つの風吹てかたちを變ぜしめ三十八箇度の七日にして生るゝといふ事有それをかやうにつゞけたる物なるべし

巢父といふ唐人の惡事を聞てけがらはしと耳を洗ひし潁川の瀧の流をだにけがれしと見し許由が例をまのあたり

蒙求に云許由は潁川の人なり世をうき物に思ひ取て箕山に籠居して年を送りしに堯帝許由が賢なるを知て世をゆづらんとの給ふに許由うき事を聞たりといひて左の耳を潁川の流に洗ひけり時に巣父牛を引て潁川の流れを渡て水飼んとするに許由が耳をあらふをみて此水けがれたりと云て牛を引て歸りたりといふ故事也

陽を欠て左をさげ陰に旺じて右を上金尅木に命を斷火冠金に世を亂す

左を陽とし右を陰とす陽をあげ陰をさぐるが順なるにそれを逆にすりたるをいふ旺の字はさかんなりと云字尅の字はそこなふとよむ字にて金は木をそこなふも◉火は金をとらかすものと云事にて是を五行の相尅といふなり

思ふまゝに調伏し

調伏とは惡靈などを祈りふせる事なるを俗には兕咀ことにあやまれり

後覺の爲ちと拜見と存て

後覺は宛字也後學と書へし後々の心得の爲に見ておきたしといふこゝろなり

聊爾なされな

聊爾の字は山谷の詩に且然聊爾耳とあり詩箋には聊は且畧之辭ともありてはやまりて輕々敷する事を云

息災に罷在

息災はわざはひをやむると云心にて佛書に出たる字なるを息災延命といふ事よりあやまりて人の無事堅固なる事をいふ詞に遣ひ來れり

先お歸りと挨拶すれば

挨は推也と注のある字拶は逼る也と注したる字にておしつけせまる心なるを人をあしらふことはに用ひ來りたるはあやまり也

六波羅での意趣などゝ

意趣の字は小學に出たる字にて注に趣は指趣也と有て意のめあてをいふ也それを今は意趣遺恨とつづけてかねて心に思ふうらみの事にのみ思ふは誤也

五輪の五つ輪五體の桶がは

佛書に五輪は地水火風空あつまりて人の體となることをいひ五體は筋と肉と骨と皮と毛とをいふそ

れゆゑ五輪五體とつゞけてもいへりそれを今桶の
輪と桶の皮とにたとへて云也

大地は忽泥の海ふかくをとらじと

泥のうみといふより海の緣語にて深くといふこと
葉を不覺にかよはせたり

こゝに死骸の有ぞとはいかでしるべきとよみたりし
歌の中山こゝろざし

清閑寺緣起に云むかし清閑寺の眞苑僧都といふ人
すみけりある夕ぐれ門口にたゞすみて行かふ人を
見ゐたる折ふし髮かたちめでたき女のたゞひとり
ゆくを見て忽愛心おこりければ物いひかくべきた
よりなくて清水への道はいづれぞと問ければ女
「見るにたにまよふ心のはかなくてまことの道を
いかでしるべきといひ捨てやがて姿を見失ひけり
女は化人にて侍るにや其歌よみし所を歌の中山と
いふとありこゝの詞は此歌によりてつゞけたる也

○同　切腹の段

見る石のおもてに物もかゝざりし竹のやうじもつか
はざりしにとむしつをかこつ菅家の御詠歌

これは菅家の御詠にはあらず夫木集仲正の歌に
「僞の名をのみたてゝあひみぬはすゝりの上のち
りやふきけんといふをあやまり傳へし也今もすゞ
りの塵をふかぬものといひ傳へたる事ふるき事な
るべしすゞりを見る石とよみたる歌は逍遙院殿の
雪玉集硯の歌に「すみ筆をさそあた物とみるいし
のおのれしつかに世を過しつゝとありむしつをか
こつとは無實とかきてまことにはなき事をとがに
落されたるをうらむ事なり

園邊兵衞の簾中お梅の方の物思ひ

秋草に云貴人の妻を御簾中といふ事みすの中にお
はしましてかろ〴〵しく人に見え給はぬこゝろに
ていふなるべしされども古書にはこの稱見えずと
あり

花むすびでもついまつでも

花むすびとは打ひもをいろ〳〵の花のかたちにむ
すぶこと也是は袋などの口をむすぶに一通りにむ
すびおけば誰ぞ外の人がほどきて見ても又もとの
ごとく結びおけばそれとしれぬ故わが心えたるむ
すびかたにてさま〴〵の花などにむすびおく時は

外の人のみだりに明ることのならぬ爲にこしらへたる結びかた也この結び方は雅游漫錄にあら〳〵しるせりついまつは歌がるたの事にて伊勢物語のいせの齋宮の「から人のわたれとぬれぬえにしあれはといふ上の句をさかづきのさらに書て出し給ひたる業平「またあふさかのせきはこえなんといふ下の句をたいまつのすみにてかゝれしよりかく名づけたる也ついまつとたいまつとはつとたと五音通じて同じ事也

金輪ならくの底までも

佛經に大地の厚さ一百六十萬由旬ありてその底を金輪際といふととけりまた捺落は地獄のことなれば金輪ならくとつゞけたり

旅の調度を取したゝめ

調度は道具の事也源氏物語などに多く出たり

殿を下主人はしれた事

下主人は宛字也東鑑には下手人とかけり然れども本字は解死人と書

心ぼそさはよる糸のわかれ〳〵て

古今集貫之の歌に「糸によるものならなくにわかれちの心ほそくもなりまさる哉とよみたる歌をよく〳〵とりなしたり

裁斷の氣づかひなし

裁はものをきりわけさばく事斷はことわりとよむ字にて理をたゞす事也

入我々入と書て入まじりてわからぬことなり是も經文に出たること也

にうがにうに方便をめぐらし

定まる過去の因果じやなと

佛經にあまた見えたる事にて前生にてなしたる罪の因ところをこの世にて果すといふ心也

ひきやうな詞必々おいやるな

卑怯とかく也卑はいやしく怯はおそるゝとよむ字にて心いやしく臆病なること也

不祥〳〵にうなづくばかり

不祥は老子經に出たる字にてよからぬ事也また古事記には不祥をふさはずとよませて是も心よからぬこと也又日本紀には不祥をさがなしとよませてさいはひなき心也

裟婆に名殘がおしいか

婆婆とはもろ〳〵の衆生の三毒諸煩惱をこらへうくるといふ事にて世界の惣名なるよし名義集にみえたり

親にも永離三惡道
永く三つの惡道をはなると云經の文也

いな事を時宜する人
物を辭退する事あるひは人に禮をするを時宜といふは禮記に禮は宜しきにしたがふと云ひまた禮は時を大なりとすといふ語によりたるものなるべし

六道の門出
六道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天生をいふよし大藏法數に見えたり

虎溪の三笑と名に高き唐土の大わらひ
晉の惠遠法師廬山の東林寺に任せられけるに陶淵明と陸子靜とゆきて是を訪ふかの二人かへる時遠公つねには此山門を出ざるに彼二人をおくりて虎溪といふ谷を思はず打過て三人ともに大に笑ひし故事也晉書にいづ

○同　道行

旅立に日のよしあしをゑらばぬは落人の身の常なれや
この枕の文句作者竹田小出雲深く案じてつくり出せしが其とき父千前軒奚疑江戸に有けるにわざわざ飛脚を以てこの道行の文の添削を江戸まで乞にやりし也奚疑これを見て此まくらの文句のかたはらによろしくといふ褒美の詞を書そへてかへしけるる故其まゝ芝居え出せしとぞむかしの作者はかやうの枕の文句などにもことの外骨を折し事感すべしこれにつけて思ひ出るにちかき世には近松半二忠臣講釋のおりへと傾城うきはしとの出端の詞に加茂川と井地の小川を月やとる流れは同し二人づれといふ文句を九日が間案じてつゞりたるよし也誠に傾城と立君と二人連の出端をよく書とりたりといふべしこれらの事を思へば今の作者は文句などの事は意外のことにおもふなるへし

はんちや合羽も
秋草に云合羽といふものは古代なき物なりむかしはみのを着たる也今世簑籠とて行列にもたするも簑を著たるゆゑかの籠をみの籠といひならはした

る也慶長のころ阿蘭陀國の人商賣のために日本へわたり來るに彼おらんだ人の上にきたる衣服に袖もなくすそ廣きものあり其をかの國の人の詞にカッパといふ也此方にて其カッパを似せて紙にて作り油を引てカッパと名付たると也今の坊主合羽といふもの也阿蘭陀に用ゆる文字は此方の字とは違たりされはカッパと云字しれず合羽の二字はこの方にてあて字につけたる也と有按ずるにはんちや合羽は半合羽のこと成べしものゝ半なることを半チャと俗に云ならはせりこれはなから半着といふ俗語の轉じたるにやされば半着の字なるべし

かつら男の

かつら男とは月の中にある桂の木をきる男といふ事にてその名を呉剛といふよし酉陽雜爼にみえたり

思ふ思ひはますらをがやたけ心も

思ひは增といひかけたりますらをは壯夫と日本紀に書てこゝろたけき男のこと也これ故やたけ心とつゝけたり

○義經千本櫻　狐之齣

鶯の聲なかりせば雪きへぬ山里いかで春をしらまし

拾遺集に出たる中納言朝忠の歌也

ことぢにたつる雁がねも春を見すてぬ心ざし

空をゆく雁のつらを琴柱に見たてゝ雁は都の春をみすてゝこしぢにかへる物なるに川つら法眼が義經公を見捨ぬ心さしをほめたることば也

疎略なき心底

疎略の字は漢書の司馬遷が傳に出て疎はうとく疎遠なること略はものをざつとする事也こゝにては法眼が深切なる心をいふ

いぶかしげにうけ給はり

韓詩外傳に不審と書ていぶかしと讀せたり不審に思ふ心也

破傷風のやまひとなり

金瘡の疵口より風を引て筋なと引つりなやむを破傷風といふ事外科正宗に見えたり

我きせながを汝にあたへ

着脊長とかいて大將の着し給ふ甲冑の通稱と書言

字考にみゆ
ひやうはくしてもうつけぬ義經
瓢泊と書て船のたゞよひながらかゝりゐる體をいふ
引くゝつてめんはくさせよ
面縛とかいて左傳に出たる字也註に兩手を後に縛てたゞ其面をみる也と有
がうもんしていはせふか
拷問とかく也字彙に拷は打也と有てうちたゝきてせめとふ事也
忠信殿御出也と奏者が聲に
宗五記に云公にては申次と云私にては奏者と申也とぞ是室町家の時の事也海人藻芥に云近日頭人等内々の取頭を奏者と稱するは傍若無人のこと也奏の字天子に限りて云事也然は則關白以下諸家に物申者申次と稱すべしと云々
何にもせよ子細ぞあらん
子細はこまかなる事也北史の源思禮が傳に政をするには大綱を擧べしなんぞ必はなはだ子細ならんと有こゝにてはこまかに入組たるわけ有べしといふ心なり
へんしも早く
片時もはやく也
もくして樣子をうかゞへば
默してはものをもいはずといふこと也
りんゑぎたなきふるまひならねば
輪廻は佛敎に出たる字にてつきまとひてはなれぬ事也ふるまひは擧動と書て人のたちふるまひの事也
げんくはん長屋所々方々
玄關の事秋草にいはく古代武家に玄關なし佛寺には玄關ありし也三光院内府記に云壁與は諸山門前において棄去なり但し東堂は玄關に於てこれに乘る也と云々諸山といふは諸寺のこと也諸寺に玄關あることをしるべし武家には玄關是なしといへり今按ずるに玄關の字は傳燈錄に出て惠海和尙の詞に玄關を啓くと有て佛道の深き心を說ひらくを云也
忠信のかいほうだけ
介抱はたすけいだくと書てかゝへたすくる事をい

ふ也
しんきしんくをなひませのしらべむすんでどうかけて
辛氣辛苦とはしづかゝ心遣ひすることをいふそれを眞紅の糸にてよりたるつゞみのしらべにいひかけたる也
手じなもゆらに打ならす
神代紀に手玉も玲瓏に織紝少女はこれ誰むすめぞやとありまた萬葉集に「あしたまも手たまもゆらにおるはたをきみかみけしにぬひあゑんかもといふ歌も有て手だまはすなはち手じなにて女の手じなのやさしきかたちをいふ也
こゑせい〳〵とすみわたり
つゞみの聲の清々ときよくすみわたる也
じんにをすますめう音は
李太白詩集に南窓蕭瑟松風起憑三誰一聽清二心耳一と作れりこゝにてはつゞみをきくに心も耳もすますほどの妙音ありといふこゝろ也
かのらくやうに聞へたる會稽城門の越のつゞみ
此書は白孔六帖に云會稽の雷門に皷あり白き鶴飛てこの皷の中に入たり洛陽の人そのこゑを聞て是をとらんとするに鶴たちまちとび去たりとあり
聞入聞ゐるよねんのてい
つゞみに聞入て餘念なき體なりよねんのていにてはこと葉たらず
油斷を見すまし
油斷といふ事は涅槃經に出たるたとへにて國王一人の臣下に勅してひとつの油の鉢をもたせて道を行しめすこしもかの油の鉢をかたふくることをゆるさすもし一しづくにても其油をこぼさば汝が命を斷べしとてまた一人をつかはして刀を拔しめ油をもちたる臣下のうしろより是を怖さしめばかの人心をつくしてかの油鉢をもちかためんといふ事にて油によつて命をたつと云事を油斷と云ならはしたる也
たゞひれふしてゐたりしがやう〳〵にかしらをもたげ
ひれとは領のこと也かしらをさぐれは領もうつむけにふすゆゑひれふすとはいふなり
からすは親のやしなひをはごくみかへすも皆孝行

からすを慈烏と云また孝烏といふ反哺とてからすが成長すれば鮮しき食物を得ては口に入て腹にいれずはきかへして其親烏にくはしむること禽經に見えたり

ぐちむちの畜生も
愚癡はおろかなる事無智はちゑのなき事也

千年こうふるいとくには
刼を歷るといふことにて佛書に一世を刼とすとあればよをふると云心なり

八百萬神とのゐの御ばん
やをよろづの神といふ事にて古事記に出たり日本紀には八十萬神とかいてやそよろづの神とよませたり八百といふも八十といふも數多きことをいふ詞にて天照大神の外の神々のあまたましますを事をいふ也とのゐの御ばんとは其數々の神たちが禁裡を守護したまふ心なり

いんぐはの經文うらめしく
因果經にある文言といふこと也

五臟をしぼる
心の臟肝の臟腎の臟肺の臟脾の臟これを五臟といふなり

賴もつなも切はてしは
是は賴みのつなも切はてしといふべき詞也賴みもつなもといへばたのみとつなとが二ッに成てこのつなは何の綱ともしれぬものになる也賴みのつなといへば賴みにする心を綱にたとへたる心なり此ことばこゝに限らす所々に出る詞なれどもいづれも賴みもつなもとありてにはを誤まれりかほどごういんふかき身も
業は前世の惡業因は前世の因緣也

りんゑのきづなあいじやくのくさり
輪廻の紲はたえずつきめぐる執心をつなにたとへ愛着のくさりは恩愛に執着を鏁にたとへたる佛語也

そもいつの世のしゆくじうにて
宿習と書て前世よりなれ來りたる業因いとふ佛經の語なり

我てんぺんのつうりきにて
轉變はうつりかはる心也狐の通力にてさま〳〵にばける事を云

けいしやうひじゆつはゑたりや得たり
輕捷はかろくはやき心也はやわざの秘術はきつね
の得ものといふこゝろ也
くはいりよくらんしんをかたらずといへども
論語に怪力亂神をかたらずといふ事有あやしきこ
となどは聖人ののたまはぬことなれ共といふ心也
あたかもふせつを合すがごとし
符節を合すがことしといふ事孟子に出たり符節と
は竹のわりふの事にてすこしもちがはずあふこと
のたとへ也
よきけいりやくござんなれ
よきはかりことこそあるなれと云詞也そあの二字
をつめていふ時はさの字と成ゆゑこそあんなれと
いふことをござんなれとつめて云也
じんとくあつき御詞に
仁德と書て義經の人をめぐみ給ふ德の厚きことを
いふなり
御はかせをたびてける
御はかせは君のはかせ給ふ御太刀といふこと也日
本紀にみかどの御手にとらせ給ふ弓を御執といふ
におなじ心也
ゆかもひゞけとづでんどう
頭轉倒と書かしらのひつくりかへる事也
命おしさに骨折はくらう九郎と
苦勞九郞と詞をかさねたるなり
らうたげなる御すがた
らうたげはけたかくおとなしやかなるかたち也源
氏物語にあまた有詞也
玉體のまします事
天子の御身を玉體と申なり
にぎりつめたるたなうらに
たなうらは手の内也足のうらをあなうらといふ
龍顏にあはせ奉るは
天子の御顏を龍顏といふ事史記に見えたりすべて
天子の御事を龍にたとへていふ故御怒を逆鱗と云
也逆鱗は龍のうろこをさかだてる事也
のり經が隱れがへせんかうあれ
天子の御座をうつさるゝ事を遷幸といふなり
うき世をうしの車ともしろしめされとそうしつゝ
うしの車はうき事を牛といふ字にかけて車に轅と

云もの有ゆゑこの長柄の長刀を牛に引する車とおぼし召れよと云こゝろ也

供奉のけがれ思はずば
みかどの御供申す事也

上にはのり經ゐた天立見くだす眼かど立て
韋駄天は諸天傳に韋天將軍とも有其傳に云天神姓は韋諱は琨南方天王八將の一臣也と有讃の詞の中に熏修の所威權を現ず共頭頂の金兜寶杵をよこたふとも有

ぎやうがうの道をさゝへ
當今のみゆきを行幸と申仙洞のみゆきを御幸と申也

しゆらのもうしう散ずる道理
修羅道に墮たる繼信が妄念執心を散ずる道理とい ふことなり

庄園を申くだして得さすべし
愚明抄に庄園は田畠也と有榮花物語に御堂關白道長公病中に法成寺へ庄園おほく寄附せられたる事見えたり

すはやと見ゆるふくしんにわけ入なだむる　源九郎

狐

腹心のうちへわけ入るは狐の性にえたるものなるべし

君々たれど臣々たらず
君々たり以て臣たらずんはあるべからずと云論語の詞をとれり

けいひつの聲高々と
警蹕とかく也さきをおふともみさきをはらふとも文選によませたり前漢書には王者出るときは警し入るときは蹕す人を止め道を淸ふ所以也と有

川つら法眼せんくの役
前駈とかいてさきばらひのこと也

銀魚帶
金魚帶銀魚帶とて貴人のおびものにて魚符とも云二ッにわかちてわりふともする物也唐書に出たり

○愛護稚名歌勝鬨　道　行

あふことは猶かたいとのよるとなく
片糸はよりをかけぬ糸也それ故古歌にもかたいとのよるとつゞけて糸をよることを晝夜のよるにい

ひかけたるが多きなり新千載集の戀のうたにも「夢路にもあふとし見えはかたいとのよるたにやすくねなましものを」とよめりこゝの文句は愛護若にあふことはなりがたきといふ心をかた〱によりあはさぬかたいとにいひかけて其糸のよるともひるともわかぬ閨の內とつゞけたり

床の海

これも戀の歌になみだの事を袖のうみとも床の海ともよみたればこゝも閨のうちにて泣あかす涙に床も海のやうになるといふ心也

うきねの鳥か鳴てる姬

うきねとは水鳥は水に浮て寐る物なれば床のうみにうきて寐る鳥とつゞけて其鳥の中に鳴鳥といふ物があるゆゑそのやうなるにほてる姬の有さまぞと云心也

過し競馬の折からに

五月五日賀茂のやしろにてあること也此日は多く見物の人々立こむよし長明の四季ものがたりに見えたり

帥の阿闍梨

帥とは出家の官名にてあじやりは天竺の詞に出家にてよく弟子の身持をたゞす人をいふよし釋氏要覽に見えたり

いとゞ思ひのまさり草

まさり草は菊の異名にて寛平菊合に「すへらきの萬代までにまさりくさたまひしたねをうゑしきくなりといふ歌見えたれどこゝにてはたゞ思ひのまさるといふ事にきかせたり

なれしふすまの曉に

此ふすまは衾の字にて夜着ふとんの類をいふなり

母のいさめや世の人のそしりも何のわきまへも

いさめは諫の字にて折檻異見などするを云こゝの文句につれ〲草の萬にいみじくとも色このまざらん男はいとさう〲しく玉のさかづきのそこなきこゝちぞすべき露霜にしほたれて所さだめずまどひありき親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなくと書たる文によりて戀路の切なるさまをうつしてなんのわきまへもまだ知らぬといふことを白川の橋にいひかけたり橋柱ははし杭のこと也

波のあわたつ山つゞき
是は粟田山のことをいふ古今集にあはたといふ事を隠し題にしてよみたるあやもちの歌に「うきめをはよそめとのみそ見つゝ行雲のあはたつ山のふもとにといふ歌ありそれを今こゝにはしら川よりつゞけて波のあはたつ山と取かへてつゞりたるなり

我たつ杣の山おろし都の富士とながめやる
わかたつ杣とは叡山の事也むかし傳敎大師えい山中堂建立のとき杣木をきらせ給ふとて「あのくたら三藐三ぼたいの佛たちわかたつ杣に冥加あらせたまへ」とよみ給ひしより此山をわがたつ杣といふよし無名抄に出たり又都のふじといふ事は伊勢物語にするがのふじの山のかたちをいふとてこゝにたとへばひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどしてとかきたるにつけて叡山をみやこの富士とは云ひならはせりそれゆゑ後撰集の歌にも「我戀のあらはにみゆるものならは都のふじといはれなましをともよめり

麓は鳰の朝霧や袋を出る琵琶の海
叡山のふもとは近江の湖水なればつぎ〳〵そのけしきをいへり此みづうみを鳰のうみとも鳰てる海ともいふ琵琶の海といふことは此湖のかたちびはに似たれば名づけたる也こゝに袋をいづると書たらは朝霧のひまより湖の見えたる所が袋の口をときて琵琶をとり出したるやうにみゆると云こゝろ也それ故たが糸かけて引あみ共續けたり

千舟百舟帆をあげて
近江八景のうたに「雲はらふあらしにつれて百船もちふねも波のあはつにぞよると讀たるによれりさつささゞ波しがの浦むかしながらの花園の
千載集よみ人しらず「さゝ波やし賀のみやこはあれにしをむかしながらの山さくらかな

加茂の葵の二葉山
加茂の葵祭の日のことをいふとて葵の二葉山とつづけたりあふひはふた葉なるものゆゑ加茂やまをふたば山ともいへり

狩裝束の花やかさ袴は精好水干は此秋の野の草づくし
狩裝束は鷹狩の裝束也此袴は奴袴とてくゝりを高

くあげらるゝ様に仕立る也それ故やつこと云字を添へて奴はかまと云と秋草にいへり精好はよきうす絹也水干はひたゝれの様成物にて紗にても平絹にても拵るよし裝束拾葉抄にみゆわれもかうは漢名を地楡と云薄の様にて紫色の花咲草也

鳴てさわたるあの鳫がねも

さわたるは早くわたると云事にて秋のはつ鳫をいふ也早の字をさとよむ事は早苗早蕨などにて知べし

あふはわかれの始ときけど

會者離之始といふこと白氏文集に見えたり

ちりにまじはる神心

これはもと老子經に其光を和らげその塵を同じうすといふ事有之我智惠をかくして人に見せぬを和光といひ世にしたがひて塵の中にまじはりて時をしるを同塵といふ心なるゆゑ神の御心の其やうなる物にて世の人を守らせ給ふに光を隱して塵に交はらせ給ふ御めぐみを云也

○同　山之段

かくとはいさや神ならで

いさとは不知と書て神ならねばかくともしらずといふこと也

佛につかふ閼伽の水手に携へて岨づたひ心細道たどらるゝ

天竺にては水をあかといふこゝにあかの水と書たるは重言也携へるとは手にさげること也岨は山のがけのやうなる細道なりたどらるゝとはしらぬところを行はくらがりをありくとて手にてさぐりさぐりありくやうなるものなれば物の覺束なき事をたどると云也たは手の字にて手取と書也

今のわが身の境界と

境の字も界の字もさかひとよむ字にて身分と云と同じ心也

早中堂に勤行のはじまるしらせ

中堂は傳敎大師の建はじめられし堂なり勤行はつとめおこなひと云こと也

戀しき人を慕ひては劔の山にものぼるといふ

地獄に刀山劔樹有てかの山の上にわが愛する所の婦女あるゆゑに男子これをみてかの山にのぼるに

樹木の葉刀のごとくにてこと〱く其身體をやぶれども其をもいとはず山の上に登りて見ればかの女はまた地にありていふ何とて早く來りて我を抱きたまはぬといふ故かの男又刀山を下れば劔樹の葉又下にむかひて彼男の五體をきるといふ事瑜伽論に出て邪淫の罪をあらはせり

震動雷電はたゝがみ
震動はふるひうごくとよみ雷電はかみなりいなびかりとよみてかみなりのおびたゞしく鳴ひゞく事也はたゝがみは霹靂とかきてかみなりの鳴はためく事也

ふたゝびのぼるつゞらおり
つゞらをりは九折とも羊腸坂とも書てはげしくまがり〱たる坂道のこと也

空には磐石
そらよりいしの降ことく大風がいはをもとばすなり

魔障の業
魔は惡魔障は障礙の事にてあしきものがさゝはりをなして山へのぼらせぬこゝろなり

氷の雨は大ぐれん天狗つぶての等活地獄骨もくだかれあなうらを
八大地獄の中にて大紅蓮とて寒氣の身を責る所と云よし翻譯名義集に見えたり等活地ごくは罪人たがひに害心をいだきたま〱相あふ時はたがひに鐵の爪を以てかきやぶり血肉すでにつきて骨ばかり殘るとき獄卒鐵杖鐵棒をもつて打くたき身體こと〲く粉のごとくなる時すゞしき風ふき來ればもとのごとく人の形の活かへり又たがひにかきつかみてくるしみをうくる是を等活ぢごくといふよし往生要集に見えたりあなうらは足のうらと云事也

瑠璃天狗卷之貳終

瑠璃天狗卷之三

○妹背山婦女庭訓　山之餡

古への神代の昔山跡の國は都の始にて
いにしへは往し方と書て過行しかたをいふ也神代のむかしとは神代紀に陰陽始てみとのまくばひして夫婦となりこうむ時先淡路洲を以て胞とすすなはち大日本豐秋津洲をうむと有をいふ下學集に云山迹はすなはち大和なり日本の惣名也日本紀に天地闢けはじまりし時人みな山に往む其地いまだ堅からずして人のあと見ゆ是をもつて山迹と云と有また日本六十餘州最初に大和州出生す故に日本の惣名を大和といふともあり又大和をみやこの初といふ事は神武天皇東征したまひ六年の後攸をやまとの國畝傍山の東南橿原の地に相てはじめて帝宅を經始たまふ都を建ることとこのときに始るといふこと舊事紀に見えたり

妹背のはじめ山々の中を流るゝ吉野川
拾遺集の神樂歌に人丸のよめる「おほなむちすくなみ神のつくれりしいもせの山を見るぞうれしきと云歌と古今集よみ人しらずの「なかれてはいもせの山の中におつるよしのゝ川のよしやよの中といふ歌とによれるなるべし

實世に遊ぶ歌人の言の葉ぐさのすて所
ことのはぐさとは和歌をいふ也新續古今源範政歌に「よしあしを君しわかすはかきたむることの葉くさのかひやなからんとよめり

太宰の小貳
官名なりむかし筑前の國に太宰府といふ役所を置て外國の要害としたまへり宰はつかさどるとよむ字にて後の世の管領職とおなじ事也其太宰府のおも役を太宰の帥といふ其下役を大貳小貳と云なり太宰の小貳は五位の諸大夫にあたるよし職原抄の註に見えたり

大判事
大判事は武官の名にて罪科の輕きと重きとをわけしるしてさま〴〵の爭ひごと訟へ事を判斷してさばく役なるよし令義解に見えたり位は正五位下に

あたりて此下役に中判事少判事といふも有也この事は職原抄に見えたり

爰に勘氣の山住居

貝原好古の諺草に云俗に君父の怒に逢て閉居するを勘當にあふたるといふ是は其罪の科を勘へて輕き重きの律に當ることとなるべし唐書に勘當に暇あらずとありと云々按ずるに勘當のことを清少納言の枕草紙には勘事と書てかうじと讀せたり今勘氣と書は父の勘當の氣色をはゞかりて山住居するといふ心なるへし

經讀鳥の音もすみて

鶯が法華經とさへづるといひならはせし故にうぐひすを經よむ鳥と書なしたる成べし

氣を慰めの雛祭

ひいなあそびの事は源氏物語もみぢの賀乙女野分などの卷々に見えたれど今のやうに三月三日九月九日にばかりまつる事にはあらずちひさき人形をこしらへ小さき家などをつくりて常にもてあそぶをひいなあそびと云也野分の卷に雛の御殿をひいなの屋とも書たり按ずるに此雛といふ字はもと鳥の子のことなるゆゑすべて小さき物をひなといふなりすべてのもの丶かたちを十分一にちひさくこしらゆるをひながたといふもこの義也漢土にて小僧を雛僧といひ小妓を雛妓と云も同じ心也

桃の節句の備へもの

日本にて三月三日曲水の宴をはじめて行はれし事は顯宗天皇の元年なるよし日本紀に見えたり漢土にては韓詩外傳の註に三月桃花の水盛にながるゝ時にあたつてもろ／＼の士あまたの女と蘭を執て邪氣を祓ふ鄭の國の俗として三月上巳の日是をおこなふよし見えたりよつてこの日を桃の節句と云ひならはしたる成べし

柳の楊枝はしちかく

楊はやなぎといふ字にてもと楊枝といふものは皆楊の枝にてこしらへたる物也釋氏要覽に楊枝を嚼に五ッの利あり一には口苦からず二には口臭からず三には風を除き四には熱をのぞき五には痰癊を除くと有今こゝに柳の楊枝といひたるは重言の樣なれど杉やうじ竹のやうじなど云事あれば苦しからず

御中ふ和の關となり
ふ破の關は美濃の名所にて千載集大中臣親守の歌にも「あられもる不破の關屋にたひねして夢をもえたそとはさゞりけれとよめり此關の名を不和の字に通はして書り

よもやいなとは岩はしの
葛城の一言主の神久米の岩はしをかけおほせずしてやみ給ひしゆゑわたる事こそならずともと云ひかけたり千載集師頼の歌に「かつらきやわたしもはてぬものゆゑにくめのいははしこけむしにけりとよめる心也こゝに大和の名所を取出したるは作者の働也

念悲觀音の經机
念彼觀音と書て彼觀音を念せば釋然として解說をえんといふ觀音經の偈によれり念悲と書はあやまり也

からりと川に落瀧津
おち瀧つは山川の流れ落てたぎる心也古今集忠岑の歌に「落たきつ瀧の水上年つもり老にけらしなくろきすちなしとよめり

返事を松浦佐用姫の
これは萬葉集の「遠つ人まつらさよひめつまこひにひれふりしよりおへる山の名といふ歌によれりひれは領のことにて夫のゆきかたを見んと領をおりてながめやりたるまゝにて石になりたる故事也こゝにひれふす山とつゞけたるは誤り也ひれふすはうつふけに伏ふこと也

善か惡かを三柏水に沈めば願ひ叶はず
柏の葉を水にうけて物をうらなふにしづめば願ひ叶はずうけば願ひかなふといふこと有續古今戀の部小侍從の歌に「おもひあまりみつのかしはにとふことのしづむにうくは涙なりけりとよめり

吉野を假の御祓川
御祓川はみなづきはらひをする川をいふ此吉野川をかりに御祓川としてこゝより大神宮を拜せんといふ也柏にみきをのせて大神宮にさゝぐることは夫木集仲房の歌に「むかし誰みつのかしはの盃を天照神に手向そめけんとよめり朝拜といふは淸凉殿の前にて臣下の天子を拜する事をいふよし花鳥餘情に見えたりこゝは遙拜といひてよき所也朝拜

と書るは誤也
いふに嬉しさ雛鳥の飛立計り振袖も
この詞よくつゞきたり萬葉集に「よの中をうしと
やさしと思へとも思ひたちかねつとりにしあらね
はともよみうちはふき今も鳴なんといふ歌を萬葉
には打羽振と書たり鳥が飛んとする時はふたつの
羽ねをふるゆゑ也こゝに飛立ばかりふり袖と書た
るよく叶ひたり
吉野の川に鵲の橋はないかと
銀河に鵲の橋をかけて一年に一度織女をわたすと
いふこと准南子にあるゆゑ此吉野川に橋はなきか
とうらむ心也
籠鳥の雲井をしたふ
此故事菅原にしるす
空にしられぬ花ぐもり
花ぐもりははなの比空の曇りてすこしふる雨也こ
この心新古今戀の部に「なに故になかむる月のく
もるらん空にしられぬ袖のしくれをといふ歌にか
なへり
心の嶮岨刀して削るが如き物思ひ
嶮岨は山のけはしきかたちにて刀をもつて削り立
たるやうにするどきを云今大判事がわがこゝろの
苦しさが刀にて削らるゝやうなりとたとへたり此
詞は朗詠に山復山何れの工みか青巖の形を削りな
すとも見え又遊仙窟の高き嶺天に横たはつて崗巒
の勢ひを刀して削れりとあるにもよれるなるべし
清澄も一揖し
揖の字は漢土にては人にむかひて禮をするとき手
をわが胸にあてることをいふ也日本にては手をさ
げて挨拶する事に用ゆ
けふの役目の落去次第
落去は落着といふに同し去の字は宛字にて本字は
落居とかく事下學集に見えたり和文にも氣のおち
つくことを心のたちゐると書は此落居の字なり
母に勸て入內させ
入內とは公卿の御むすめのみかどへ御よめいりな
さるゝを云大內に入といふ心にて入內とかく也
遺恨に遺恨を重るか
遺恨の字は杜子美が詩に出たりのこるうらみをい
ふ心也

覺束なくも呼子鳥

「をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かなといふ古今の歌にてかきたり

胸は眞紅のふさがる箱

眞紅はくれなゐの色也ひもの流蘇を塞るむねにいひかけたり

叡聞に達し

天子の御耳に入るを叡聞といひ御意を叡慮といふ也

一天の君

天下に一人の御あるじ故天子を一天の君といふ也

此花は八重一重

八重櫻と一重ざくらと二ッの花をいふ也むかしはさまぐのさくらはなくして一重のやま櫻ばかりなりしかば奈良の都にある八重ざくらといふ千重の櫻が甚だめづらしかりしゆゑ禁裡へさゝげられし時「いにしへのならの都の八重さくらけふ九重に匂ひぬるかなと伊勢大輔もよまれたり今の世に楊貴妃鹽釜車がへしなどさまぐ名の多くなりたるはみな人作にてかのやへざくらをさまぐに變ずるやうに手入して咲かせたるなり契冲の漫唾集に今のよのさくらをといふ詞書有て「八重さくらならのみやこの一木より枝にさえだに花ぞわかるるとよめるも後世花のかずおほく成たるをいふなり

九重の内に倚かる〻

こゝのへは禁中をいふ傅かるゝは大切にせらるゝことをいふなり

義理の柵せき留ても

しがらみは塘を水にてくづさせぬやうに河ばたに木や柴やをからみつけておくを云なり

馴ぬ雲井の宮づかへ

雲井とも雲の上ともいふ皆禁中の事也

けふより内裏上﨟の

上﨟とは女御などの御事をいふ下﨟とはまた其下の更衣などの御方をいふ也

別れの櫛のはかなさも

くしの歯といふことをはかなさもとつゞけたり別の櫛のことは源氏ものがたり榊の卷に六條の御息所の御娘伊勢の齋宮に立給ふ時御こゝろうごきて

別れのおほんくしたてまつり給ふいとあはれにてしほたれさせ給ひぬと有これは齋宮とていせの大神宮へ宮づかへにまゐり給ふかの御むすめのひたひにつげの御くしをみかどの手づからさゝせ給ひてふたゝび京の方へかへらせ給ふなど仰ごとあるが例なれば別のくしといふなり

何樂しみの女御后

天子の御妻を后と申それに次たる女官を女御といふよし花鳥餘情に見えたり周禮に女御は御妻也とあれば漢土にても重き稱號也

十二一重

これは五ツ衣と同じ事にて古代十二一重といふことなし源平盛衰記の女院の海に入せ給ふ所に彌生の末なれば藤重ね十二單の御衣を召しといふことはじめて見えたるよし年山打聞にみえたり

一ツに落る三ツ瀨川

十王經に亡人の葬頭川をわたるに三ツの瀨有て一に山水瀨二に江深淵三に有橋渡といふとあり是によりて歌にも三ツ瀨川ともわたり川ともよむよし古今集の古抄にみえたり按ずるにこの十王經は僞經なれどもふるくこの經によりて歌にもよみ來れる事おほし

子よりも親の四苦八苦

四苦とは生苦老苦病苦死苦をいふ八苦とはこの四苦の上に愛別離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦を合せていふと大藏法數にみえたりこゝにては只種々の苦しみをいへり

西方淨土

極樂のことなり

殘らず川へ流れ灌頂

眞言宗の法事に灌頂といふ事あり延暦二十四年高雄の道場において行はるゝよし日本後紀に見えたり流れくわんでうは經木を川へながす事にて職人歌合に「いかにせん五條の橋の下むせひはてはなみたのなかれかんしやうといふうたあり

水に成たる水葬禮

天竺の葬法四ツ有一には水葬とて屍を江河に投て魚鱉に飼しむ二に火葬三に土葬四に林葬とてはやしの中に棄置て鳥獸に飼しむといふこと釋氏要覽にあり

筐も仇の爪琴に
「かたみこそ今はあたなれこれなくはわするゝとき もあらましものをといふ古今集の歌にてかきたり爪にてひく物ゆゑ爪琴といふなり
弘誓の船あなたの岸より彼岸に
弘誓はひろきちかひとよみて佛の衆生をすくはんとのたまふちかひをいふ也またほとけを船師大船師とも云て苦海を船にてわたし給ふ船頭にもたとへたる事法華經にも見えたり彼岸は心經に到彼岸といふ事あり佛道をうる事を彼岸に到ると說り
玉の緒
命といふ物は魂をわが體につなぎておく緒のやうなるものゆゑ命を玉の緒といふ也
親か赦して塵未來
塵の字あて字也盡未來と書べし地藏本願經盡未來際とかけり未來永々までと云心也
焔魔の廳を名乘て通れ
廳は役所の事にてゑんま王宮の前に役所有て簿を以て亡者の罪を正すこと十王經に見えたり
なむ成佛得脫と
佛になりて此世にくるしみを脫るゝ事を得べしと云こと也
早日もくれて人顏も見へず庵の霧隱れ
この霧隱れといふ文句春のけしきに不相應なりとて難ずる人有ど其はかへつてあたらぬ論也三體詩劉禹錫の詩に日出三竿春霧消ともつくりて霞がくれといふも同じ心也

○假名手本忠臣藏　山科齣

風雅でもなくしやれでなく
風雅はものずきといふ樣なる心しやれは洒落とかきて性理大全に周茂叔は人品はなはだ高くして胸中の洒落なること光風霽月のごとしといへるやうにうき世をはなれて氣性の高き心を云也
牽頭仲居に送られて
箕山が色道大鑑卷の一に云太鼓持といふは傾城買の家に付したがふものをいふ此名目のおこりは紀州の雜賀跳にはじまる鐘をもちたるものは首にかけてをどる其中に鐘をもたぬものに太鼓をもたするなり是によつて此名目とすといへり又同書に太

鼓持の異名をむかしは行證人、あかば、おひやなど云又跡付、沓持、惟光、ぶんせき、末社などゝもいひたるよししるせり惟光は光源氏の君の心しりの若ものにて源氏の君のしのびありきのともをして常につきしたがひ奉りし事源氏ものかたりに見えたり其心にて名付たる物成べしされど昔も太鼓持を惟光といふことは筑紫がたにいひ馴て上方すぢにはこれを用ひざりしといへりぶんせきは慶安のころ大坂邊にていひならはせし名目にて本客とは席をわかつといふこゝろにて分席といふよしかの書にみえたりこの色道大鑑は甚珍書にて寫本十八卷あり此作者は顯傳明名錄をあらはしたる呑舟軒箕山と云人なりまた太鼓持のことを漢土にては牽頭帮間六頭子など共いへり

雪こかし雪はこけいで雪こかされ

雪こかしは雪圓と書て源氏物語槿の卷にわらはべおろして雪まろばしせさせ給ふちひさきはわらはげてよろこびはしるにあふぎなどもおとしてうちとけがほおかしげなりと有わらはげはをさなきさまを云也

旦那申旦那

本字は檀那なり今下人より主人をさして檀那といへどももとは佛語にて僧より在家をさして云こと葉也それゆゑ俗にわが賴み寺をもだんな寺といふ也くはしき事は法界次第に出て内に信心あり外に福田あり財物有三事和合して心に捨法を生じよく慳貪を破る是を檀那とすと云り

朝夕に見ればこそあれ住吉の岸のむかひの淡路嶋山

此歌は津守國冬の歌にて新後拾遺集の雜の上に出て下句うらよりをちの淡路嶋山と有これは拾遺集に出たる人丸の「すみよしの岸にむかへる淡路嶋あはれと君をいはぬ日そなきといふ歌の詞をひとつにおぼえあやまりてきしのむかひのあはち嶋山といひ傳へたる也さて此歌のこゝろは朝夕にみてゐればこそめづらしうも覺えね此すみよしの浦よりはるかに見わたすあはじしまのけしきは何ともかともいはれたるけしきにてはなき物をと淡路嶋のけしきはいつみても見あかぬといふ心なれば今由良の助の引ていふ歌にては心うらおもてにてあたらず是は作者のあやまり也

もよみて神社のめぐりのあかくぬりたる垣也玉は垣をほめたる詞なり

嶺の雪吹に岩をも碎く大石同前

ふゞきはつもりたる雪の風にくだけおつるをいふ也後京極攝政の月淸集に「旅人のみのしろ衣うちはらひふゞきをわたる雲のかけはしともよめり

螢を集め雪を積も學者の心長き例

螢をあつめし故事は晋書に車胤といふ人博く書物を覽て退窟することなかりしかど家貧しうしてつねに油を得ざりければ夏のころはきぬの袋にあまたのほたるを入て書物をてらし夜を日につぎて是をよみたるよし見えたり又雪をつむ故事は孫子世錄に孫康といふ人貧にして油なかりければ冬は雪に映て書をよみたるよしみえたり

刀脇指さすがげに

秋草に云近世刀といふて脇差と一具にさし添るものをいにしへは打刀鍔刀とも云し也古き武家の禮書に刀をたまはりたらば指て禮すべしといひたるは腰刀のこと也打刀を座敷人前にてさすは無禮也といふまた云脇指の事本名は脇差の刀といふもの

詞もしどろ足取もしどろに見ゆる

東坡集に取次と書てしどろにと點せり下學集にも取次筋斗と書てしどろもどろとよませたり取次はものゝ次第なく入まぜりたる事筋斗は俗にいふとんぼうかへりの事也源氏物語むめかえの卷に筆にまかせてみだれ書たまへるさま見どころ限りなししどろもどろにあいきやうつきみまほしければと有て河海抄には此處の註に「よしとてもよきなはたゝすかるかやのいさみたれなんしとろもとろにと云うたを引たり

降たる雪かな

この所の二くさり三くさりの文句は鉢木の謠をわざといひかへて雪は鵝毛に似て飛て散亂し人は鶴氅を被て立て徘徊すといふ詩をかやうにとりなしたるもの也此詩は白氏文集に出て鵝毛とは鵝といふ白き鳥の毛のこと散亂はちりみだれたる事也鶴氅は鶴の毛にて織たる毛おりの衣の事徘徊は立もとをるとよみて立どまること也

伊勢海老と盃穴の稻荷の玉垣は

赤き物をいひならべたる也玉垣は朱の玉垣と歌に

也此ものむかしより有しものなれども今の世のごとくなる物にはあらずいにしへは脇差は六七寸計りにして柄もまかず鍔もなく鞘尻を圓くして短き下緒を付さげをの先を結玉にしかうがいをさして懷中にて脇の方へよせてさす故わきざしといふ懷中にさすに衣服にかゝりさはらぬ爲鞘尻をまろくするなりふところより外へすべり出ぬために下緒のむすび玉を帶の通りにおしはさむなりと有

梅見付たるほゝ笑顏まぶかに着たる

ほゝえむとはすこし笑ふを云ほゝは頰の字にてむかしのかなづかひにてほゝと書也まぶかは目深と書て目の字をまとよむもむかしの詞也帽子をめのあたりより下へふかく着たるを云

小浪御寮

人のむすめを御寮とも御料人ともいふ事いにしへはなき事にて太平記に北條高時の男を萬壽御寮と書たれは其ころは男子をも御料といひしなるべし今按ずるに寮の字は文選の註に小窓也と有はまどの内にそだてられたるむすめを御寮といふなるべし長恨歌に楊貴妃の事を養はれて深窓に在て人いまだ識ずとも作り源氏ものがたりの品定の所にも親のかしづくむすめの事をいふとておひさきこもれるまどのうちなるほどはと書るにても知べし

只今は浪人

浪の字はみだりとも讀てよるかたなくなることを流浪ともいへば浪人は仕官をやめてうきたるからだといふ事也文苑彙雋に踪迹定り止る所なき人を浪人といふよし見えたり

追從武士の祿を取

追從はおひしたがふとよむ字にて人の氣にすこしもたがはぬやうにつきしたかふ事にて下學集に媚諂之義なりと注せり源氏物語うつせみの卷にはとのゐ人などもことにみいれついそうせずと書り

二君に仕へぬ由良ノ助が

史記に齊の王蠋が詞に忠臣二君に仕へず貞女二夫を更ずと云て燕の國に仕へずして死したる故事あり

心へだての唐紙を

今世間に用ゆる襖はむかしは襖障子といひたる物にてそれをから紙にてはりたるゆゑかのふすませ

うじの事をからかみと云也職人歌合から紙のうたに「空いろのうす雲ひけとからかみのしたきらゝなる月のかけ哉とよめり平家物語長門本にからかみの障子をたてたりと有よし秋草にいへり

貞女兩夫にまみへず

上の王蠋の詞をうけて書たる所おもしろし

涙一途に突詰し

一途はひとみちといふこゝろ也

勿體ない事

諺草に俗語の勿體はすなはち物體也人物のすべよきを物體のあるといふ君父を蔑にし神明を侮るなどは人物の正體にあらざる故にこれを物體なしといふなりとあり

薦僧の尺八

薦の字は誤にて本字は虛無僧也又普化僧ともかけりもろこし盤山寶積の弟子普化禪師といふ人尺八をふき鈴をふりて明頭來晴頭打四方八面來などいふ事を唱へありかれし事有其流れを汲で文明年中朗庵といふ僧みづから普化道者と稱して宇治の吸江庵京都の妙安寺に住して尺八を好みしゆゑ此寺終にこも僧の本寺となれるよし雍州府志に見えたり薦僧をむかしは暮露とも暮露〳〵ともいひたる事は明惠上人の空華論兼好のつれ〳〵草等にみえたりまたむまひじりと云し事は職人歌合にみえたり

とたんの拍子

塗炭と書也書經に民塗炭に墜といふ事あり註に夏の桀王闇く亂れて下民を恤まず民の危ふき事泥に陷り火に墜てこれを救ふことなきが如きをいふと有文選の註には塗は泥也炭は火也と有されば俗にあぶなきかげんと云心をとたんの拍子とは云也

修行者

すべて佛のみちを修行するものをいふ

白木の小四方

三寶の類にて俗に足打といふもの也

引出物の御所望ならん

聟引出とて嫁入のときむこより舅へおくる物をいふこの字は江家次第にも見えたり

刀は正宗指添は浪の平行安

正宗のこと薄雪淸水齣に註す浪平行安は一條院の

時の刀鍛冶也
あんかんと
安閑とかいてやすらかにしづかなりといふ心なり
放埒なる身持
諺草に人の法度にしたがはざる事馬などの埒を放れいづるにたとへて放埒とはいふなるべしと有埒とは競馬の時馬を外へ出さぬやうに兩方にゆひたる垣をいふ也按ずるに定家卿の拾遺員外集に「埒のうちにくらぶる駒のかちまけものれるをのこの鞭のうちからといふ歌有されば俗に埒もないと云詞もとりしまりのなき事埒のあくといふは垣をあけて馬を自由にかけさすことよりいふなり
大だはけ
諺草には淫氣と書て恥をもしらずおろかにあさましきを云よしに云り
馬鹿つくすなと
秦の趙高亂をおこさんと欲して群臣のしたがはざらん事を思ひ鹿を二世皇帝に獻じて馬也と申せしかば二世皇帝左右の臣下にこれは何ぞとゝふ時趙高にへつらへるものはわざと馬也といひへつらはぬものは鹿也といふを聞てひそかに鹿といひし者を殺しておのれがいきほひを見せたる事史記にいでたり是より人をたぶらかす事を馬鹿にするといひ傳へたり
鹽梅見せう
書經に若和羮を作らば爾これ鹽梅ならんといふ事有てむかしは鹽と梅とを以て食物の加減をせしゆゑ天下の政をほどよくとり行なふ臣を鹽梅の臣といふこと山谷詩集に見えたりそれ故に物のほどらひをもあんばいと云
不祥ながら
不祥の字は日本紀にてはさがなしと讀てよからぬ心也
長押にかけたる鑓追取
鴨居の上に打付たる横木をなげしといふ事誰もしりたること也敷居の外にうち付たる横木をもなげしと云こと今はしらぬ人あり源平盛衰記に長押に尻かけ大床に足投出しといふこと有義經記に辨慶長押の上につい居て腰のほら貝とりいだしと云事有つれ〳〵草になみ〳〵にはあらずと見ゆる男女

となげしにしりかけて物語するありさまといふ事あり是等は大なる家造りは椽より敷居までの中高くてしきゐの外の方になげしを打し也釘かくしも有これをなげしとしらぬ人有と秋草にいへり今爰にいふは鴨居の上のなげしの事也

諸足ぬはん

もろあしは兩足也諸ともとは人と我と二ッ也もろ袖はふたつの袖をいふ皆同し詞なり

欝憤をはらさんと

うつとしく思ふいきどほりをはらすといふことなり

造營の砌

造營はつくりいとなむといふこゝろ也砌といふ字はもと前栽などの事なれど其折からといふ心に用ひ來れり

若氣の短慮

短慮はみじかきおもんはかりとよむ字にて氣のみじかきこと也

未來永劫

未來はいまだきたらずといふ心にて先のよの事永劫の劫の字は世の字の心にて永き末の世までといふこゝろ也皆佛書に出たる字也

露しらず

露といふものは草などにおくかと思へば直に消るはかなきもの故それをたとへにしてすこしのあひだの事を露の間ともいひすこしばかりの事を露ばかりともいふ也こゝにつゆしらずと云はすこしもしらぬといふ心也新古今能宣の歌に「秋霧のたつたひ衣をきてみよつゆはかりなるかたみなりともとよめり

冥加の程が恐ろしい

冥加の字は佛書にては梵綱經に出て目にみえぬ所より佛の惠みのあることを云又神書にては神代口訣に出て天照大神の託宣に冥を加るにまさるすなほなるを以て本とすといへり然れば目に見えぬ所より加護し給ふ神佛のおぼし召も懼しきと云心成べし

君子は其罪を惡んで其人を惡まず

此語はこれより先に御所櫻の院本にも出て伯夷叔齊は其罪をにくみて其人をにくまずと書りこれは

論語に伯夷叔齊は舊惡を思はずとのたまひし孔子の意を取て其語をつくりかへたる物のよし穂積以貫もかけり四書蒙引に司馬温公は姦邪の小人の己を害するものをにくむといへどもまた其賢こきを咨嗟すといへる心なるべし

未前を察して

いまだ其所へいたらぬ所をおもひはかるを云

石塔の五輪の形

石塔をたつる事は釋氏要覽に磚石を疊んでこれをつくる形小塔のごとしと有五輪は大藏法數に五體といふも同し心にて人間の體の頭とふたつの肘とふたつの膝とを地水火風空にかたどりて五輪といふとありそれを石塔のかたちにうつしたるを五輪ともいふ成べし

玉椿の八千代迄ともいはゝれず

新千載集賀茂經久の歌に「神山のみねにおふてふ玉つばきやちよは君の爲といのらん」とよめり

呉王を諫めて誅せられ辱しめを笑ひし呉子胥が忠義

呉子胥と書は誤にて伍子胥と書べし楚國の人にて身の長一丈眉間一尺有しといふ呉王を諫めて誅せられし事史記にみえたり

唐土の豫讓

晋の豫讓智伯に事へたりしに趙襄子といふ人智伯を亡したる故趙襄子をころして其仇を報ぜんとしけれども其志を遂ざりしかば襄子が衣を撃てみづから劒に伏して死したる事也是も史記に出

孫呉が秘書我爲の六韜三略

呉の孫武子があらはす兵書を孫子といひ魏の呉起がつくれる兵書を呉子と云六韜三略司馬法尉繚子太宗問對を合せて武經七書といふ也六蹈と書もあやまりにて本字は六韜三略なりこの二ッの書は太公望の作なり

舅が情のれんぼ流し

尺八の譜に云虚無僧の手二ッ臨門流虚鈴とありしかれば此れんも流しといふ尺八の手の名を戀慕ながしといひかよはしたるもの也戀慕はこひしたふといふこゝろ也

よべとこたへぬだんまつま

倶舍論に曰命終に臨む時を名つけて斷末摩とす苦受に逼られて物を別つこと有事なきを末摩と云と

有
これや尺八ばんのうの
尺八は壹尺八寸に竹を伐たるものにてむかしは樂器にも用ひたるよし河海抄にみえたり源氏物語末摘花の卷にさくはちの笛とあり釋氏要覽に煩惱に百八の數あるゆゑそれを除かんために珠數の玉をも百八のかずにつらねて佛號を唱ふるよし見えたり爰には尺八を百八と通はして作れり
閨の契りは一夜ぎり
一節截といふ笛を尺八の事とすれども是は洞簫といふ笛の類にて尺八とは別なりといへりこゝも一夜を竹の一節にかよはしたり

○壽門松　新町齣

筑波根のみねよりおつる瀧のしら玉ひいふうみいよ
「つくはねの峰よりおつるみなの川戀ぞつもりて淵となりけるといふ後撰集にいでたる陽成院の御製と「龜の尾の山の岩ねをとめて落る瀧のしら玉千代の數かもとよめる古今集の紀のこれをかの歌とをとり合せて枕にかけり本歌の筑波根はつくば山のみねのことなるを女兒のたはふれにはごいたにてつくはねのことにとりあはせたり此はねといふものは胡鬼の子とも羽子ともいふものにてそれをつき上る板をはごいたとも胡鬼板ともいふ也
ひよくの羽子板むくろじも
比翼の鳥の羽とうけたりむくろじは本字は木欒子と書俗につぶと云もの也欒實ともいふよし本草綱目にみゆ
戀の二葉の禿松枝と枝とをやり羽子も
禿といふ字は韵會に髮纖く長からずして禾稼の如しとあれば俗にいふしよぼ〳〵髮のこと也それゆゑ太夫につきしたがふ少女をかぶろと云ひならはしたる物なり蛻巖文集には雛妓といふ字をかぶろのことに用ひたりやり羽子の事は箕山大鑑にいはくはねつき正月の手ずさび也是天職ともにくるしからずはつ春の夕つかた小づまかいどりてはね胡鬼板右の手のみにてさばきたるいとやさしげありたちむかひてはねをやりあひたるより外なしそも又桂の久しきもさのみ見よからずやがてさしおく

べき也数をかぞへてひとりのみつくことゆめ／＼有べからずといへり是は寛文より延寶のころ迄の曲中のさまを書たる所にいへり

千代も根引はたへすまじ

正月の初めの子の日に松を引てうゑかゆるを子日すると歌にもよめり玉葉集小辨の歌にも「數しらず引る子日の小松かな」もとたにも千代はこもるをとよめり新町の太夫を松にたとへたれば身うけする事を根引にするといひならはしたり

かすみの袂虹の帶雲のうはぎをゆりかけて

これは太夫のよそほひをいふ也霞のたもとは續後撰集通方の歌「さほ姫の花色衣はるをへてかすみの袖に匂ふやまかせと讀たり虹の帶は詩學大成の虹の詩に一條の綉帶天腰を束ぬと作れり又雲のうはぎは人丸の集に「あまの川霧たちわたるたなはたの雲のころものかへる袖かもとよめり

新艘つき出し出立はへ

むかしの遊女はおほく船にのりて客をむかへたる物ゆゑつきだしの遊女をあたらしき船にたとへて新艘と書たるなるべしされど新造はよめのことをもいへばそれより遊女の稱にうつりたるにても有べし秋草に云人の妻を御新造といふ事むかしよりありし事也蜷川殿中日記にて見えたりよき人は妻をむかへるにはかならず妻の住居すべき家をあらたに造作するゆゑ御新造ともいふ也ある説に船をあらたに作りたるを新艘といふて祝ふこれになぞらふるといふは非なりといへり出立ばへは衣裳を着かざりて外へ出たるがはへありて一きはうるはしく見ゆるといふ事也源氏物語にはいでばへとかけり

うさをも芥子のべに鹿子ごくざいしきの越後町

冬としのうさをも消すといふ事を芥子にいひかけたり芥子は至つてちひさきもの故佛書にも須彌を芥子に納るといふたとへありてこまかなる鹿子をけしかのこともいふ也かのこの事はいせものがたりに「時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらんといふ歌有て鹿の子まだらとは鹿の子の背にむら／＼白き毛のあるに富士の雪の斑なるをたとへていふよし古意に見えたりそれよりくゝり染にする事をゆひ鹿子とはいふ也極彩

色の繪といふことを越後町に云ひかけたり

三筋にみつの春立ば
くるわの三筋町にみつの春の立といひて三の字をかさねたるなり正月を三の春といふは年の始時のはしめ日の始なりと玉蜀寶典に云へり

やりが前だれあかねさす天も醉たり人も醉ふ
箕山大鑑に云香車はひとすぢにむかふへゆくゆゑ車といひ來れりされども此名目ことふりたれば今に異名を鑓といへりこれになぞらへてやり手を香は遣女と云べしあかねさすは赤き光りのさすといふ事也新古今集菅家の御歌に「あまの原あかねさし出る光にはいつれの沼かさえのこるへきとよませ給へり天も醉たりとは和漢朗詠集の文に春の暮月々の三朝天花に醉りと作れり是は桃の花をいふなり

春しりそめて七つ屋の藏の戸出る鶯茶の
玉葉集定賴の歌に「としふれとかはらぬものはうくひすの春知りそむる聲にそありけるといふ歌と谷の戸出る鶯とよみたる歌とをとりあはせて世話事におとしたる所例の平安子が妙作也

おろせの風とも見へぬ
箕山大鑑器財門におろせはもと駕籠のりものゝ事也また乘物をかく疋夫をさしておろせともいふとかけり

五器さげるずいさうと
下學集には御器と書てもとは貴人の供御の飯器のことなるを下さまの飯椀の事にいひならはしたり古き名物の茶碗に尼御器といふも有書言字考には御器又定器椀也それをさげありくは乞食のさまを云瑞相はもとめでたきありさまをいへど俗語にてはかやうの所にも云ならはしたり

てゝごさまはかくれもないいしんじよ也
いしんじよは石丈とかいて石のごとくかたき人といふこと也丈は丈夫といふ事にて男の通稱也

うば玉のくろはぶたへ
うば玉はくろきといふまくら詞也

千兩にするは三つ羽の征矢
みつばの征矢とは金まうけることが矢のごとくはやきといふことなり
かづくふとんのどんすよりむりやうの事ぞ思はるゝ

緞子五絲みな唐織の名也爰は五絲を無量といひかけたるなり

金つかふて髮きらせた

箕山大鑑に云傾城の髮きること心中の其ひとつにして近代はなはだもつて盛なり其はじまる所播州室の遊女宮木といひし女より起れり醍醐の中納言顯基卿これを愛し給ひて都に侍りけるがいかなる事か侍りけんすゝめられ奉りてむろに歸りぬある時中納言の家人西國より京へのぼるをうかゞひ見て髮をおしきりてみちのくに紙にひきつゝみその紙に歌を書たり「つきもせすうきを見るめのかなしさにあまとなりても袖そかわかぬ」と書て船になけ入たるよし撰集抄にものせたりこれ遊女の髮切たる濫觴也是は顯基卿の心のうつろひたりしをうらみ奉りて切たる髮也と云々又云傾城の髮切る事此ごろの事と計り思ふべからず二條あたりの人の所持したる屛風に傾城遊翫の圖を書たり是狩野法印永德が筆也此繪に傾國あまたあつまり酒宴する内にみじかく切たる髮を押みだしたる傾城尺八ふく所をかけり振袖ならば禿にも見まがふべけれどしかもふり袖に非ず禿はかぶろにてかたへにあり是永祿天正のころにもかきたるにや繪本をもつてこれをかゝば猶以て久しかるべしかゝる舊例あれば髮をきる其こゝろはかはるといふとも古風をまなぶを豈風流なしといはんや

瑠璃天狗卷之二終

瑠璃天狗巻之四

○神靈矢口渡　渡守齣

可愛らしいといはふか
可愛の字は日本紀神代巻一書に伊弉諾伊弉册の二神みとのまぐばひしたまふとき妍哉可愛少男(あなにゑやゑをとこ)をとのたまひしよりはじまりたる詞にて男女のあふことを字の聲にて可愛といふ也

思ひ亂るゝいとすゝき穂に顯はれて
糸のやうなるすゝきが穂に出れば花すゝきとも尾花ともいふ也いと薄の歌は夫木集長方「すかるふすくるすのをのゝいとすゝきますほの色や露や染らんとありまたすゝきの穂に出ることをよみたるは古今集仲平「花すゝき我こそ下に思ひしか穂に出て人にむすばれにけり

保養がてら
保養はたもちやしなふとよむ字にて温公通鑑にも疾いまだ全く平かならざれは保養をもつはらにせんと欲すとあり

琥珀の塵や磁石の針粋もぶ粋も
琥珀といふ石は松脂土中に入て千年にして此石となるよく芥を拾ふと本草綱目にしるせり磁石は字彙に石にして鍼を引べしと有和名はりすひいしと云此二ッの石はちりをもはりをもすひつける物ゆゑお舟が義岑公をつけまはす姿にたとへて吸と云字を粋と云字の音にいひかけたる也

ふ肖と思ふて下さんせ
不肖は文選の註に不才を謂也と有て知惠のなき事成を俗語にてはめいわくながらといふやうの詞につかひ來れり是は風俗通に子を生て父母に似ざるを不肖といふとかきたる義にて似あはしからぬ事なれどゝ云心に用ひたる成べし

日影の木々も花さけば岩のはざまの溜り水
影の字はあやまり也陰の字を書べし岩のはざまは岩のあひだなり

さはらで落る玉ざゝのあられもないが戀路也
源氏ものかたり品定の所に女のさまをいふとて折らば落ぬべき萩の露ひろはゞ消なんとみゆる玉ざ

さのうへのあられなどのえんにあへかなるすきずきしさのみこそおかしくおぼさるらめと書たる詞をよくとりなしたり
義孝公も稻舟の否にもあらず
古今集大歌所の歌「もかみ川のぼれはくだるいな舟のいなにもあらず此月はかりとよめるをとりたり否にもあらずはいやにてもなしと云心也
じつとしめたる手の內は
神代卷一書に陰神すなはち陽神の手を握りてみとのまぐばひすといふこと有佛書にては俱舍論に夜摩天は纔に抱て婚をなし都史多天は但手を執によると有
戀の錠前情の要
情の要は扇のかなめにたとへたる也桃華蕊葉扇の所にかなめは蝶鳥をかねにてうちて是を用ゆと有
互にいだき月草のうつろひやすき色糸の
月草は露草のこと也むかしは白き衣に露草の花をすりつけてもやうとしたるに藍色なる故色がうつりやすき也古今集よみ人しらすの歌に「月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬともと讀りまた同し集に「よの中の人のこゝろは花染のうつろひやすき色にこそ有けるとも有こゝの文句は此二首の歌にて作れる也
ぬれの糸口綻び口吸付引付
ほころぶは俗にふくろびると云詞也遊仙窟に腰支一たび過て勤ぬれば心の內百の處傷む但若口子ことを得ばあまたの事は承り望まずといふ詩あり貫之の土佐日記にもたゞおしあゆのくちをのみぞすふこのすふ人々の口をおしあゆもし思ふやうあらんやとたはふれてかけり
普請の結構
普請はあまねくこふといふ字にてもと出家よりいひ出したる詞也百丈清規普請の法に力を均しくする也と有てあまねく人の多力をこひえて堂寺などを建ること也今俗家に家を造作する事を普請といふはあたらぬ事にてかの出家の建立のことよりとりちがへたること葉也結搆は文選靈光殿の賦に其結構をみるに規矩天に應ずと有て李善の註に結は交る也構は架する也と有さまざまの材木をとりませてくみ上ることをいふ俗に花美なることを結

構といふは少しあたらぬこと葉なり

跡にしよんぼりほいなげに

しよんぼりはそぼりといふことにてこまかなる雨をそぼふる雨といふに同じ伊勢物語に雨そぼふりてと有雨にぬることをもそぼつといへばしよんぼりは身すぼらしきすがたをいふ也

手著もしらぬ海中に

たつきもしらぬとは俗にとりつきどころのなきといふ心なり海中はうみの中をいふ也海をわだづみともわだともいふ心は海は舟にて渡るものゆゑわたるといふ字の心にていへりこゝは古今集よみ人しらすの歌に「をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶこ鳥かなとよめるをとりかへて用ひたる也

楫なきお舟が物思ひ

新古今好忠の歌に「ゆらの戸をわたる船人かちをたえゆくへもしらぬ戀の道かなとよめる歌の心をとりたり

相圖の狼烟を上ふか

のろしを狼烟とかく事は韵會に烽火に狼の糞を用ゆれば烟たゞちに上りてあつまりてちらず風ふきても横になびく事なしといへり

惡寒發熱

惡寒はぞつとする事發熱は上氣することに譬へていふこの語はもと風邪にてさむけたち熱の出ることにて傷寒論にあまたいでたり

いふて水棹や詞の楫

水棹は舟のさほ也お舟といふ名によりていふてみるといふ事を水棹といひかけ詞にてあしらふことを詞の楫とつゞけて舟の縁語をよく續けたり

渡に舟と六藏は

法華經本事品に其願ひを充滿せしむること渡りに船を得たるがごとく病に醫をえたるがごとしとあり

かくて時刻もひさ象の

時刻の久しくなるといふことを久かたといひかけたり久方といふことは空といふ字の枕詞にて天はいつまでもかはらぬものゆゑ久しき方といふ心なるよし燭明抄にしるせり今こゝにひさ象とかきたるは續日本後紀に匏象（ひさかた）の天といふ事有によれり天

のかたちのまろきをひさごに見たてたるなれば匏
象といふ心也と冠辭考に書たりこゝは此説により
て書たるなるべし
廿日
廿日ゐなかの月出て
廿日の月は亥の刻に出るなり
燈火消て眞の闇
眞の字はあやまり也深の字をかくべし明惠上人傳
記に深の闇にて有にとかけり
ぴつしやり碎る芬盤
こゝにたばこ盆を芬盤と書たるは清客寄語に芬盤
を唐音にて打馬高筸と譯し芬吹を起紗里と譯せし
によれりたばこは慶長の比阿蘭陀船にもち來りし
より日本に弘まれり其はじめは阿蘭陀の崑崙兒が
紙をひねりて筆のごとくにしたばこの葉をもみて
かの紙のはしにつゝみてのみ居たるを見てこの國
の貴賤となくこれをのみ覺えしよりやがて眞鍮銅
などを以てきせるといふ物を製してあまねくのむ
事になれるよし羅山文集に見えたりまた元和元年
六月烟草を吸ことを禁じ給ひしよし和事始にみえ
たり按ずるにこのたばこといふものは本草綱目に
は是をのせず漢土にてもあたらしき物にて芝峰類
說には倭國より出るとしるし又一說に南蠻國に女
人あり其女の名を淡婆姑といひしがこの女痰の疾
を患ふること數年なりしにこの草を服して其疾の
痰たるよりやがて此草を淡婆姑と名づけしとかけ
りこれによればたばこといふ名は和訓にてもなく
蠻語にてもなくもとは女の名也しとしらるゝなり
上にはわつと玉ぎる聲
玉きるは玉きはるの略語にて魂きはまる聲といふ
こと也死ぬる期のこゝろをいふなるべし萬葉集に
「我せこか その名いはしと玉きはる命はすてつわ
すれたまふなといふ歌も有て後々には玉きはると
いふことを命といふ字の枕ことばとせり萬葉には
魂極と書て玉きはると讀せたり
佛とも法共辨へず
報恩經に佛と法とのわかちを說て云佛は法を以て
師とし佛は法に從つて生ず法はこれ佛の母佛は法
に依て住すとゝけり
悶絕せしも
悶はもだゆると云字絕はたゆるといふ字にてもだ

えくるしみて息のたゆること也

大膽千萬な

大膽はきものふときといふ事にて千金方に遜思邈が心は小ならん事を欲し膽は大ならんことを欲すといひしよりいひ傳へたる俗語也

打擲

うちなげうつとよむ字にて物をうちつける事也

常々不埒な

埒の字は馬をはなさぬ爲に垣をゆはすと云こゝろにて我儘に成ことを云也

異見いふても歎いても

異見の字は續日本紀には意見と書りもろこしにも意見といふ書の名有て意はこゝろばせといふ字見は見識の見の字にてわが心におもふ存じよりをいふて人をいさめる義なり

一念發起もしたまひて

一念はふと心におもふこと發起はおこりおこるとよむ字にてふと佛法に歸依するの心おこる事をいふ發起の字は倶舍論にもみえたり

覺悟極めて

覺悟はおぼえさとるとよむ字にて物を合點することゝ也

血汐に爭ふ血の涙

血汐は血が汐のやうにわき出るをいふ血の涙は韓非子に卞和といふ人璞を楚山の中に得て厲王に獻せしかば玉人に見せたまふに石也といひしゆゑ卞和か足を刖せたまへりそれより後武王文王と三代の間其まことの玉なる事をしるものもなかりし故卞和かの珠をいだいて楚山のふもとに泣ゐたるが三日三夜にして涙盡てこれにつぐに血を以てすとありこれはあまりになげけば後には涙も盡て血の涙を流すといふこと也古今集哀傷の部素性法師の歌にも「ちのなみだ落てそたきつしら川は君か代まての名にこそ有けれと讀めり

ふ便といふも愚なり

不便の字は荒政要覽に老弱道路に堪がたき一つの不便也と有源氏ものがたりにもふびんなるわざ哉と有てたよりなくふかつてなることをいふ也それがかやうにかなしみあはれむ心に轉じたる也

釋迦如來が元服して

釋迦といふは天竺の五姓の一つにして氏也と釋氏要覧に有牟尼といふは名也智度論に釋迦牟尼といふ事を秦の世には能仁寂嘿といふと有て註に姓名兼稱する也といへり如來と云ことは成實論に如實の道に乘じ來て正覺を成也と有てまことの道によつて正しきさとりをなす人を如來といふ也元服のことは岷江入楚に禮記を引て天子の子は十二にて冠すと有てはじめて童形をあらためて冠下にかみをゆひ冠をきすることをいふ也元ははじめといふ義服は冠をきること也地下の俗にさかやきをはじめてそることを元服といふは字義にあはざれども今の世には一統にいひならはしたることば也

人を集る法螺吹立

螺は口にてふく貝のこと也佛家に用ゆる故法の字をつけてほら貝といふ也

村々の圍をとくと

圍むとは軍兵を以て其所をとりまくこと也左傳公羊傳などにも宋を圍む鄭を圍むなどゝいふ事あまた有かこみをとくとはとりまきたる軍勢を引とることなり

漸抱を振上て

たいこのぶちを抱といひ琵琶のばちを撥といふ也ぶちと云はばちといふ聲のはひふへほに二かよふ也

領巾麾山の悲しみも

松浦さよ姫が夫をしたひし故事也比禮振山は肥前の名所なり萬葉集の歌に「遠つ人まつらさよ姫つまこひにひれふりしよりおへる山の名とよめり

匹夫め待と呼かけられ

論語に匹夫も志を奪ふべからずと有て集解に匹夫微也といへども其志を奪ふべからずといへりこゝにて匹夫めといふはいやしめていふ詞なり

飛で火に入夏の虫

符子に其昧きを安んぜずして其明かなるを樂しむはこれ猶文蛾の暗きを去て燈に赴て死するがごとしといふ故事によつていひ傳へなるたとへにて火とりむしがおのれと火に入て死するにたとへたる也

力一ぱい牛頭馬頭が

十王經に路を引牛頭は肩に棒を挾み行を催す馬頭は腰に叉を擎ぐと有て牛の頭馬の頭の獄卒が亡者

をさいなむさゝなり

觀念と

觀はとくしんする事念は口へ出して物をいはずして心にこたへてゐる事也

お怪我はなかつたか

怪瑕と書が本字也諺草に云俗におもひよらずして疵を被る事を怪瑕といふとあり怪はあやしむとよみ瑕はきずとよむ字なり

水破兵破の二つの御矢

盛衰記に水破兵破のこと有て頼政の水破といふ矢は黒鷲の羽にてはぎたる矢也といへり

魂魄はれい／＼と

魂といふたましひは死すれば空にあがり魄といふたましひはめいどにゆく也三體詩に魂は冥漠に歸し魄は泉に歸すと作れり冥漠はそらの事泉は黄泉とて地の下のことなり

官軍をかり集め朝敵を亡して

官軍は天子の御軍勢をいふ朝敵は天子へ敵たふものをいふ也

松明挑灯きらめきて

松明は和名抄に續松とかけり勢語古意に云松の秀を物にてまとひつぎてたくゆゑにつぎ松といふを音便にてついまつと唱ふるなりたいまつとはたきまつといふ訓にて火をたく松といふこと也伊勢物語についまつの墨して歌の下句をかきたるとはたいまつのもえさしにて書たる也扨挑灯の事は秋草に云ちやうちんといふこと古代にはなきもの也いにしへは夜行に松明を用ひし也またあんどうを用る事も有し也夜行に持せし物なるゆえ行燈とは書なり鎌倉年中行事に松明行燈の事有其ころまではてうちんはなかりし也蜷川記に挑灯は籠灯か本也と云こと有これは永祿天正の比なるべし其比はすでに今の世のてうちんも有しとみゆ籠灯といふものは行燈のさやのごとく丸きかごをさやにして上に横木を取て提るやうにしたる物なり今も奥州出羽などの民家には用ゆる也是を本にしてたゝみてうちんを仕出したる也と有

待ども／＼沙汰せぬは

杜詩全集に江河の濁れるを沙汰すといふ詩有註に沙汰は篩に沙を貯へ其細かなるを去て其大なるを

存するを沙汰といふと有是をみればいさごをゆりわけることにたとへたる字也俗に案内するやうの事をさたするといひうちすておく事を沙汰なしなどいふはこれより轉じ來りたる詞にてものをしかとことはる事を沙汰するといふ成べし

空に雷電霹靂

雷はかみなり電はいなびかり也はたゝがみは鳴はためく雷と云事也

水主棹取

水主はかこ也棹取はかぢとり也

比興なり者ども

比興の字は詩の六義の内にて比はものをたとへること興はものを見たてることにて二字ともにものをよそへる心ゆゑしかとせぬ事を比興といふ成べし

虛空をにらんで

虛も空もむなしといふ字にてあてどのなきこと也

廣言吐し

廣はひろしといふ字にておほきなることをいひ出す也

膽礬色

膽礬といふ石は色の青き石なる故顏色のまつさをになることをたんば色と云也

猶も吹來る暴風

はやてともいふにはかにふきくる大風也

底の藻屑と

藻の波にくだけてちり〴〵に成たるを云

中にも强氣の

强はつよしと云字にて氣のつよきこと也

甲冑を帶したる

周禮の註に甲は今の鎧なりと有韵會に冑は兜鍪也とあり俗に冑をよろひとし甲をかぶとゝするはあやまり也又秋草に云古代は鐵砲なくしてたゞ矢軍のみなりし故甲冑の製も矢ばかりをふせぐやうにこしらへ煉革をもつて制小札につくりし也たまたま薄金にて製したること珍らしさに源氏重代の鎧を薄金と名付て稱美したる也天文十二年に鐵砲わたりし後は鐵砲の勢矢よりは烈しきによつて甲冑の制かはりて札を鐵にて作りあるひは胴を鐵のべにして鐵砲を防ぐ事をおもとしたりと有甲冑を帶

したるとはよろひかぶとを著たるを云也

一嫗山姥　第二齣

松浦がたひれふる山の石よりも
まつらさよひめの望夫石となりたることまへに註す

女護の島にことならず
女護島のこと書言字考に古老傳へて日本東海の中に在といひまた羅刹國といふ所を女護島といひ傳えたるよししるせれどいつれもより所なき說也按ずるに後漢書の東夷傳に海中に女國ありて男なしその國に神井ありこれを闚きて子を生むといへりまた金樓子には女國に池ありこの水を浴ればはらむとあり又文献通考に女國は扶桑の東千里にありて鹹草を食ふ葉邪蒿に似てにほひ香はしく味はひ鹹しと有この鹹草といふものは八丈草ともあしたぐさともいひて八丈の島に生ずる物なりそれゆゑ今の八丈の島をむかしの女護の島也といふ說も有不求人全編には女人國とかきたり

いさめられてもいさまぬ顏
上のいさめられてもは諫むるといふ字にて異見することと也下のいさまぬといふ詞はしめりかへりて勇みすゝまぬこゝろ也

袖は涙のかはごりを
涙の川といふことを皮骨柳といひかけたる也これは皮籠と骨柳とがひとつになりたる名也皮籠は皮にてはりたる竹の籠のことこりは柳の枝をくみあはせてこしらへたる物ゆゑ骨柳とかくなり

三味線もとゝのへ置
三味線とかくはあやまり也三線とか三絃とか書べし此もの漢土にては楊外庵集に出て今の三絃は元の時にはじまるといへり春臺獨語には玩咸のかたちの變じたる也といへり玩といふものは拾芥抄にもいでゝいにしへ日本にも有たる物と見えたり三才圖會に晉の玩咸が彈せし琴の類なるものにて琵琶に似て圓なるものなりといへり近代の三絃の事は箕山大鑑第一翫器の部に云三絃のおこりは永祿年中に琉球國よりこれをわたす其ときは蛇皮にてはりて三絃なる物也泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲人に人のとらせたりけるをこの盲人よろ

こびてしらべこゝろみけれどひき様をきかざれば音律かなはすこれをこゝろうくおもひて長谷の觀音へまうで一七日參籠して彈やうの事をいのりしにあらたなる靈夢ありて階を下るときに大中小の糸三すぢ盲人が足にかゝるこれをとり三筋の糸をかけてひくに無盡の色音いでたりそれより三すぢのいとにきはむる故に三味線となづけたり其みぎりはむさとひきてなぐさみとせしにしばらくして虎澤と云し盲人これを彈かためて後世につたへし也と云り

こきう

書言字考に胡弓と書たり箕山大鏡にむかしの小弓は弓の絃をいたくはりてひきもちひたり八橋撿校みづから考がへて手づから弓をなめらかに長く削りてこしらへたりつるを引はらすゆた／＼とゆるやかにのべて無名指にてひくやうにかけたり其色音昔にかはりて各別也さと有

あはれむかしはせんせいの松の位も冬がれし

新古今菅家の御歌「道のへの朽木のやなき春くれはあはれむかしとしのはれそするといふをとれり

せんせいはまつたくさかり也と云こゝろなり唐詩選に言を寄す全盛の紅顏子憐べむし半死の白頭翁とつくれり松の位のことは秦の始皇松を大夫に封じたる故事あまねく人のしりたる事なれば註せずしかるに今の人松の位といへば大夫職のことゝのみおもふがおかしければちなみに書つく藻鹽草に松の位は三位也と有また重家の集に刑部卿三位したりしにいひかはしゝといふ事書有て「ちとせまてさかへ行へき君なれは松も位をゆつる也けりといふ歌あり

ついぢのかげにやすらへば

伊勢もの語についぢのくづれといふこと有今のへいの事也築地と書はあやまりにて築土と書が本字也土をひぢと訓ずるゆゑつきひぢといふ事にて土をきづきて塀としたるを云也

車よせより立聞ば

大内の御車をよせらるゝ所にて門内の玄關といふやうなる所也と書言字考にいへり

あの小歌は吾身くるわにありし時

箕山大鏡に小歌といふはむかしの白拍子のうたひ

し今やうといふものを縮めたる物なり中ごろ泉州堺の住人高三氏隆達といひしもの三十一字の和歌にみづからふしをつけてうたひたるこれいよ〳〵小歌といふ名目にかなへりすなはち隆達ふしとて今も世に殘れりと有くるわは廓の字にて城のそとくるわのこと也難波の新町京の島原などを廓といふは市中の外に一かまへ有所ゆゑくるわと云也漢土にてくるわを曲中と云よし虞初新志にみゆ

作り出せしかへせうが

替唱歌と書て今いふかへうた也

出ほうだいに聲はり上

出傍題とかくべし傍題とは歌をわがまゝによみて題にはづるゝこと也八雲御抄にくはし理にあたらぬことを口より出るまゝに云事を譬へたる詞也

男ちく生人でなしあか耻かゝせて

人をいやしめて畜生といふことは涅槃經に身丈夫也といへ共おこなひ畜生に同じと有また隋書に煬帝の淫佚なることを父の文帝の詞に畜生也とせめられたること有人でなしは人外非人など云におなじあか耻とは用捨なく耻をかゝすを云也

そなたの物ごしつまはづれ

物ごしといふ詞は源氏ものがたりに所々ありてみすなどをへだてゝ聲ばかりきくことを云て物へだてごしのこゝろといふ事也それをあやまりて俗に人のものいひを物ごしと云也つまはづれは手足の爪のさきまでいやしからぬといふこと也

一河のながれも他生の縁

ひとつながれの河の水をくみあふ事も此世ならぬ前世の縁なりといふこゝろ也この詞は平家物語にも見えたり篠崎維章の和學辨には此語を聖徳太子の明眼論にて見出せしよしかけり

うき河竹の傾城

むかしの遊女は江口神崎などにて川船に乘たるもの故かはたけ或はながれの身などいひならはしたり

よな〳〵かはる大臣の

遊女の客を大臣といふ事は古事談に云小野の宮の大臣香爐といふ遊女を愛し給ひけるが其時また大二條の大臣も此香爐を愛したまへりあるとき小野の宮の大臣香爐に問てのたまはくわれと髯とはい

づれを愛するやなんぢすでに大臣二人を通はせりとのたまへり二條の大臣御髯の長かりし故髯とのたまへりし也と云これをみれは後世に遊女の客を大臣といふことより所ありと云へし

とうり天の中二かい

忉利天は欲界の六天の中にして須彌山のいたゞきにありといふこと諸天傳に出たり

木やりでもかんどでも

大木をもちはこぶとき歌をうたひて力をつくるを木やりといふ准南子に大木を擧るものは邪許とよぶ重きをあぐるに力をすゝむる歌也と有も木やりのこと也

そりやこそけんくわがはじまつた

文選蜀都賦に諠譁鼎の沸かごとしといへりこれはやかましくにもかへることをいふ也日本にて人とあらそひのゝしることをのみけんくわとあやまれり

神子山伏にうらやさん

神子はめかんなぎとて神につかへいのりなどをするものを云梓みこのことにはあらず山伏はもとは行脚する出家を稱することば也野にふし山にふすといふ心にて山伏とよみたるうた有夫木集に「山ふしのすかたけとをきかは衣心こはくも身にそはぬかなとよめり職人歌合には今の修驗者のさまによみたり其歌は「せんたちのさんきさんけは我やせんいたの目につくむしのした哉うらやさんは陰陽師の算をかきてものをうらなふを云書言字考に占算とかきてうらやさんと讀ませたり

せつたかたしにげたかたしわらんづがけでくるも有

雪踏とかきてせつたとよむが本音也書言字考に天正年中千の利休はじめてこれをつくり雪の中に路地をふむにたよりすといふ説をいだせり三齋筆記には三齋公のはゝ君雪の茶の湯にはじめて思ひよりて製せさせたまへりしといふ事見えたりげたはあしだの事にて足踏とかいてあしたとよみたるを後に下踏とかきかへたる也かたしは片足の略語なりわらんづは藁履といふことをのべていふなり

だい所からざしきまで

禁裡の御膳をとゝのへる所を臺盤所といふより轉じて下々の食物をとゝのへる所をも臺所といひ來

り し也源氏物語末摘花のまきに御だいとあるは膳のことなり

水たごたらひにこけかゝり

擔桶の字をたごとよませたれど是は宛字也もと田へ水をくみ入れるうつはものにて田子がになひてゆくものゆゑ其まゝに此ものをたごと名付たる也たらひは本字は盥の字にて文選の註に水を貯はふるうつはものにして手を淨め洗ふもの也と有たらひはてあらひの略語なり

神武以來のりんきいさかひ

神武天皇は人皇のはじめにて鸕鷀草葺不合尊の第四子にて御母は玉依姫也以來はこのかたとよむ字なり悋氣の悋の字はしわきこと也わが夫を人のけさうするをしはくねたむこと也いさかひは息逆ひの略語にて人と息せはしくさからふ心也

跡かたもないあかうそ

跡はあしとゞまるといふ詞の略語にてしかと目にかゝる程しるしの有ことを云かたは形の略語なればこゝはあともかたちもなきといふ事也赤うその赤の字はもと心の臟は色あかきもの故まことの心を赤心と云丹誠をぬきんづるといふも丹の字はあかしとよむゆゑこれも誠の心をいだしてと云こと也されば衣裳のつくろひなき事をあかはだかといふがことくうそに相違なきといふことを赤うそといふなり

我身に秋風立ぬれば

秋といふ字をものを飽ことにいひかけたる也續千載集良信の歌に「人とはで年ふる軒のわすれ草身を秋風に露そこほるゝとよみたるもわが身を飽たる事にいひかけたる也

男のざんげ

慚愧と書て二字ながらはぢといふ字也阿含經に慚と愧とを二つの法とたてこのふたつの法なければ父母妻子尊長をもわかたず人間ながら畜類とひとしとゝきたり

定か誠か

定はものゝさだまること成故しかとしたることを定といひしかとせぬことを不定といふなり

弓矢神

八幡宮を申也謠曲に弓八幡といふも弓と矢と幡と

三つの軍器をならべ八幡宮の御神德をのべたるところにて此謠をゆみやはたとなづけたるよし惠南が謠曲拾葉抄にもしるせり

頼光樣をざんそうし勅勘の身と成給ふ

讒言をかまへて奏聞せし故勅諚にて勘當の身となりたまふといふこと也讒言をさかしらごとゝよむなり奏聞とは天子へ申あぐること也勅諚は天子のおほせつけらるゝ御こと葉なり

ヱ、おとましい

あいうゑをと五音通ずるゆゑうとましいといふことををとましい共いふ也

名字のはぢをすゝがんと

秋草に云假名といふを今の世に苗氏といふ假名と書はあやまり也家名と書べし今昔物語第八に上總守平惟時朝臣といふは貞盛か孫にてかくれなき兵なり其郎等に家名はしらず字は大記といふもの有といふ事有天下の武士源氏も平氏もいくらも有てたゞ源の某平の某とのみ名のりてはまぎらはしくて家筋わかれざるゆゑおの〳〵其出る所の地の名あるひは領所の地の名を氏の上にそへてなのりてその家すぢをわくる也されば是を家名とはいふ也先祖は其家の苗なる故に苗氏ともいふと有されば こゝも名氏と書は誤にて苗氏と書べき所也

うんでいばんりと耻しむる

雲泥萬里眼今窮といふ橘正通が詩あり雲は天にあるもの泥は地にあるもの故に上下のちがひを雲泥萬里といふ也白樂天の詩にも會面雲泥をへだつとつくれり

一騎當千の兵

涅槃經に人王大力士あり其ちから千にあたる故にこの人を一人當千と稱すとありこれより出たる詞也騎は馬にのりたる武者を云なり

鎧通しおつ取

よろひのうへにさす小刀をいふ也武備志に解手刀と書てよろひどほしと譯せり

伍子胥が呉王を諫めたる

伍子胥の事まへに註す

項羽記信が勇氣にも

楚の項羽漢の紀信のこと史記漢書等にいでゝみな人のしりたる事なれば註せず

神變きたい勇力の
神變は諺草に云佛書にもとづきていへる詞也内に天心ありて外に變動の相あるを神變といふと有あんずるに涅槃經には一念の中種々の神通變化をなすとあり仁王經には神變神通自成をなすと說りきたいは希代と書てよにまれ成勇力と云心也
今一度人がいに生れ出
人界と書て此人間世界といふこゝろ也
飛行通力有べきぞ
飛行は空中をとびありくこと通力は神通力といひてわが身の自由自在になる事也
無二無三にむらがつて
二も三もなきといふ心也法華經に無二亦無三と有新後拾遺集尊圓親王の御歌に「春はたゝ花とそおもふふたつなくみつなきものは心なりけり共よませ給へり
人畜類の右大將
人間ながら畜生同前のものといふことば也
正盛が家の子大田の太郎
花鳥餘情に家禮とは子の父をうやまふこと也他人なれども子に准じて禮をいたすをば今の世にも家禮といひ來れりとしるされたりされば家禮を家の子と云も此心なるべし
おもふ敵をうつせみのからだは
空蟬とは蟬のこと也せみは時有てもぬけとなるものにてかたちはありながら内のむなしき物ゆゑうつほなるせみといふ心にてうつせみといふ也其ぬけがらをうつせみのからといふ故それを又からだといひかけたるもの也古今集のうたに「うつせみのからは木ことにとゞむれと魂のゆくへを見ぬそかなしきともよめり
たちまちやしやの鬼がはら
夜叉とも藥叉ともかく也義楚六帖に藥叉は天竺の語にてもろこしの詞には暴惡とも勇健ともいふ心也神鬼の類なれども福德殊勝にして諸天を衞り護るもの也といへり

○近江源氏先陣館　船長齣

比良の暮雪と賞せしも
近江八景の内の一つにて比良山の暮方の雪のけし

きを賞美したる詩歌あまた有

世をこぎ渡る船長の

渡世することを船をこぎ渡ることにいひかけたり

船長は船頭也

双紙に六道の切書て

草紙とかくが本字也草は草稿とてしたがきをいふ也

入相の鐘にちりしく花ならで

「山寺の春の夕ぐれをきてみれば入相のかねに花ぞ散けると云能因法師の歌をとりなしたり此歌は新古今に入たり

くつさめ又人を譏らんすかいのと

かげごといはれてはなひるといふたとへ有はなひるはくさめする事也野客叢書に今の人噴嚏てやまざるものはかならず祝して人ありてわれを説といふと有しかれば漢土にも云ならはしたることわざ成べし

兵法の御鍛練が

鍛は鐵匠の刀をきたひてうつこと練はものをねりにねりて念を入るゝ事也後漢書の註に鍛練は成熟なりとありてものゝとくとゝのひたることをいふ

御手練の程を

これもよくねりとゝのひたる手ぎはといふことなり

竹刀しなへの用意もなし

竹刀は竹を刀のなりにこしらへたるもの也しなへは韜の字を書て韜革韜竹(しなひかはしなひだけ)などゝもいふ竹をひしぎて革の袋に入れ刀のかはりにして劔術のけいこに用ゆうちあふときしはるやうに製したるものゆゑ名をしなひといふなりそれをあやまりてまたしなへと唱へならはしたり

納戸へ入や

をさむる戸と書て雑物を入おく一間を云禁中に納殿とて諸國より貢するものを入おかせ給ふ殿ありそれにかたどりて名付たる物なるべし

亂杭にくゝり付

川ばたのみづよけにうちたる杭をいふ長短をそろへずみだりにうちたるゆゑらんくゐといふ也としやおそしと

としは疾といふ字にてはやきこと也はやくゆかんおそくはなきかといそぐことをいふなり

凪がないだら石山へ

凪の和らぐ事をなぐといふ也歌に朝なぎ夕なぎなどゝよむみな和の字也すべてやはらか成ことを和やかといふも同じこゝろ也

佐々木が謀の醜しやと舌を巻て物語

漢書の楊雄が傳に禮官博士其舌をまいて談らずといふ事ありおそれてものをいひ果さぬことを舌をまくといふ也

薄の穂にもおぢるとやら

諺草にいはく落武者になりては臆病ごゝろまして草木までも人と見なして恐るゝといふこと也晋の謝玄といふ人軍立して賊の大勢をうちやぶりてこれを追ふ賊の兵のがれさり程へだゝりて後八公山の草木のうごくを見て謝玄が軍兵おひきたるとおそれしことありまた日本にても平家の軍勢ども水鳥の羽音におどろきて敗北せしなどみな諺のこゝろのごとし

跡に女房がくし〱と

屈の字を源氏物語にくんじてとよませて心の屈することに書り俗語のくし〱も思ひ屈する心なるべし

一七日の逮夜

釋氏要覧に人亡して七日に至るごとにかならず齋をいとなみて追薦す是を累七日といふと有中陰經に中有は壽を七日に極むと有て七日〱に中有の身がいろ〱にうつりかはりて七七日にしてそれそれの生をうくるゆゑことに大切にして弔ふべきよりいへり逮夜は書言字考に宿忌ともいふと有て七日にあたる宵より追薦をいとなむことをいふ也

御あかしの火は有ながら

古今著聞集に仁王經をおこなひけるが御あかしの火障子にもえつきて其夜やけにけりといふこと出たりしかれは昔より佛前のともし火を御あかしといふと見えたり

佛果の爲と手をあはせ

果は因果の果の字にて餓鬼の果畜生の果などはあしき因果なれば佛の果を得るやうの爲にとむらふことをいふ

泪は琵琶の湖にさゝ波よするごとく也
近江のみづうみのかたちが琵琶に似たるゆゑびはのうみといふ也實業卿のうたに「よる波のひゝきもたえぬよつの緒のすかたににほの海邊氷りてとよませ給へり琵琶は絃を四すぢにかくるもの故よつのをといへばびはのことになるなりさゝ波は小々波とかきてちひさき波のこと也
ひそ〳〵聲
密といふ字をかさねてひそ〳〵と云也
さん候
されば候といふことばをつめていふ也
粟津の汀に屯をかまへ
汀は水ぎは也屯は一かたまりかたまる事にて軍勢をあつめて陣取するをいふ也
大將時政釆配ふり立
また釆幣ともかいて四下のやう成ものをふりて軍勢をまくばること也釆はとるといふ字配はくばるとよむ字也漢土にては史記周の本紀に武王右に白旄を秉て麾くとあり白旄は牛の尾にてこしらへたるものにて和名をざいといふ故俗に物をさしづする事をざいをふると云も此心也
稲麻竹葦と取卷しが
稲はいね麻はあさ竹はたけ葦はあしのことにていづれもはへしける物なればすきまなくとりかこむ事にたとへたるなり稲麻竹葦のごとしといふ事法華經にいでたり
汝が五音は
宮、商、角、徴、羽の五つを五音のてうしといふ也
六穴よりほとばしる
眼と耳と鼻と口と前陰と後陰とを六つの穴といふ也
七顛八倒
顛はくつがへるといふ字倒はさかしまといふ字にて七の字八の字はつけ字にてこゝろなし
暴惡ぶ道の大江の入道
暴はあらしとよむ字也不道は道にそむけたることをいふ也
阿修羅王の荒たる如く
法華經の普門品に阿修羅迦樓羅といふ語あり科註に阿修羅は千の頭二千の手ありあるひは一萬のか

しら二萬の手あるも有あるひは三つの頭六つの手なるも有と見えたり是は佛入滅のとき佛の齒をうちかきて迯れたるものにて其時韋駄天に片時のあひだに追かけられてかの佛牙をとりかへされしものなり

おまへは天魔が見入たれ

天魔は第六天の魔王のことにて人のさはりをなすものをいふ

適我夫奇代の計略

奇代は宛字也稀代とかくべし代にまれなるといふ心なり

いふ間に取出す種が島

南浦文集に云天文十二年八月廿五日大隅國の内種が島の西村の小浦に異國の大船一艘漂ひ着船客百餘人あれとも其ことば通せずして何國の人といふことをしらす其中に明の儒生五峰といふものありこのとき西村の司に織部丞といふもの有てよほど文字を識たりければかの五峰と筆談してこの船は南蠻國の商ひ船なることをしれりそれより嶋のつかさ種ヶ島時堯と云人その船中を吟味し禪僧忠主座といふ人を以て筆談せしむ彼船の頭分のもの二人あり一人を牟良叔舍といひ一人を喜利志多孟太といふ手に二三尺なるものをもてり是すなはち今の鐵炮也時堯値ひを限らずしてかのふたつの鐵炮をかひとり其術を蠻人にならひ得たりまた玉藥の製法の事をば小臣の篠川何某といふものにならはしむこの時に當つて根來寺の僧杉の坊といふものはる〲來りて鐵砲を求めしかば時堯其懇望ふかきに感じ津田監物と云者をして鐵砲一挺を杉の坊に贈り其上妙藥の法と火を放つ道とをしらしむまた時堯鐵匠數人をめして其器のかたちをみせ日夜鍛練して新たに是を製せんとするにその形はほどこれに似たりといへども其底をふさぐ故をしらず然るに其翌年また蠻國の商人たねがしまの内熊野浦に來りけるに其中にさいはひに一人の鐵匠ありければ時堯天のあたふる所也とよろこひすなはち金兵衞清定といふものをしてその底をふさぐ法をならはしむこゝにおいてあらたに數挺の鐵砲を製せりその後泉州堺の商人橘屋何某種が嶋に一年滯留して鐵砲をたんれんするの術をまなびえて

歸りしより畿内近國に弘まりけるとぞ此南浦文集の説によれば鐵砲のことを種が嶋と云ひならはしたるも其比よりのことなるべし

瑠璃天狗卷之四終

瑠璃天狗卷之五

○信州川中島合戰　配膳齣

葉公龍を好んで畫き刻め共眞の天龍を見て魂を失ふ是龍を好むにあらず龍に似て龍にあらざる物を好といはん

　この故事は劉向新序に出たりむかし子張と云人魯の哀公に目見えをしけるに哀公無禮也ければ子張哀公の僕にいひ置て魯の國を去たり其詞にいはく今君よき士を好み給ふと聞て來りたるに無禮のあしらひを仕給ふは葉公といふ人の龍をこのみたるに似たりかの葉公日ごろ龍のかたちを好みてあるひは畫きあるひは木に刻み彩色などして龍に似たりとてよろこびしかば天龍これを聞て葉公か家に下り頭を以て牖をうかゞひ尾を以て堂に拖(ひき)ければ葉公これをみて大におどろきうちすてゝにげ去しとかや日比このみし龍のかたちは其さまは似たりといへとも龍の魂なしいま天龍を見てにげさりたるは葉公まことの龍をこのむにあらず龍に似て龍にあらざる物を好むなり今君よきさむらひをこのみ給ふといへどもかくのごとき無禮をしたまふは是もさむらひに似てさむらひに非ざるものをこのみたまふなれば此國を立さる也といひしとぞ

將の賢士を好む賢に似て賢にあらず少哉才賢の臣

今戰國のときに大將たるものゝよきさむらひをこのむもかの魯の哀公のごとくにして賢人にあらざるものをこのむとおなじ事也さればまことの才智ある賢こきさむらひはすくなきこと哉といふこゝろなり

無念の敗北骨髓に徹す

軍にまける事を敗北といふは敗はやぶるゝとよむ字北はつねには方角の北といふ字なれどもこゝにてはやぶるゝといふ心になる也其わけは通鑑集覽に服虔が云人陽を好んで陰を惡む北方は幽陰の地也かるがゆゑに軍のやぶるゝをも北といふ也と有骨髓は骨はほね也髓は其ほねの中のあぶらと云字也徹はしみとをる心にて俗にほね身にこたゆるといふ心なり

切所の細道より
切の字はあやまり也本字は太平記には殺所と書下學集には節所と書て難所なりと註す
武略の鋭き
略ははかりことゝよむ字にて武略はいくさのはかりこと也
かゝる奇計をなしけるぞ
軍法に奇計正計あり武備志に奇正虚實は兵家の樞要也と有て正計はありふれたるはかりこと奇計は思ひもよらぬ計を云也
間者を入て
間はすきまとよむ字にてすきまよりやうすをうかがふものを間者といふ也
士卒のかけ引
士はさむらひ卒はひきゆるとよむ字にて足輕の類をいふなり
秋の田面の月に嘯き薪を荷ふて山路の花を友とし
月に嘯とは田をかりに行ても月をおもしろく思ひて歌などをうたふこと薪を荷ふてとは山に柴なとをかりに往ても花をめでゝわか友だちのやうに思ふといふこと也古今集の序にたきゞをおへる山人の花のかげにやすめるが如しと書たる心をとれり
勘助が賤しきわざをしても世にへつらはず月花をたのしむおもむきを云也
天命をたのしみ
いやしきわざをするも天道のはからひ也とおもひてそれをたのしみとして不義なることをせぬよし也
蘩噲張良でも
前漢書に蘩噌高祖に從つて天下をさだめ功を以て舞陽侯に封ぜられしこと見えたりまた張良も同書に下邳の圯橋にて太公望が兵法を黄石公にさづかり後に高祖の師と成て留侯に封ぜられしよししるせり
弓矢八幡
八幡大菩薩は源家の氏神にして弓矢の守護神なれば弓矢八幡も照覽あれ今いふ詞に違はじと云誓ひの詞也
廿四孝
孝子廿四人をあげて廿四孝といふこと日記故事に

見えたり

だいすの間に

湯などを汲ためにを臺子置たる次の間也庭訓往來には圍爐裏の間とあり

頭は雪

白髪になりたるを云也古今集康秀の歌に「春の日の光りにあたる我なれとかしらの雪と成ぞわびしきとよめり

祐筆衆にもすくない程の

祐の字はあやまり也右筆と書べし東かゞみ治承四年の所に大和の判官代邦道右筆す御書御判を加へらると云事あり又同六年の所に伏見の冠者藤原廣綱始て武衛に參る是右筆なりと有また木曾義仲が右筆大夫坊覺明と有をみれば賴朝卿の時代より武家の書役を右筆といひしことしるべし

おりしも床の倭琴

源氏河海抄に和琴は伊弉諾伊弉册の尊の御時作り出さしめたまふよつてもろ〳〵の樂器の最上にこれをおく也あづまごとゝも云也鴨の長明の無名抄に和琴はもとは弓六張を引ならべて用ひけるを後に琴に作りたる也と有今こゝにやまとことゝいふものは今の十三絃の琴なり此十三絃のことを箏のことゝいふ也これはむかし命婦石川の色子といひし人筑紫の彥山にて唐人にあひてつたへはじめ字多の天皇にさづけたてまつるが始也といへり此河海抄の說によりて是をつくし琴とは云也今の箏の手は寬文のころ筑後國の僧法水といふ人善導寺に住してつくしごとを學びしが後江戸にゆき還俗して八橋撿挍に傳えしかば八橋撿挍これをならひえて其節奏をあらためて三絃の曲を合せしよし和事始に見えたり八橋撿挍は貞享二年に七十餘歲にて卒す墓は黑谷に在と云

おめず場うてぬ白書院

近世武家にて客に對面する所を書院といふはいにしへは大家にては主殿といひまた客殿といひ小家にては出居といふ是對面所也書院とは佛寺にて佛書を講ずる所也俗家にはなき事也しかるに太平記卷三十七に佐々木佐渡入道道譽が宿所のことをいふに書院には羲之が草書の詩韓愈が文集とかけり思ふに鎌倉の時代北條一家ははなはだ禪法を崇敬足

利尊氏もまた禪法に歸依して夢窓國師を師とせられければ上の好む所はかならず下これにならふ事にて禪法を學ばざるものなし故に其家居の内に書院を立佛書をよみ座禪する所とせしより後には書院と稱したがへし成べしといふこと秋草に見えたり

あからむ顏の櫨もみぢ

櫨は木の名にて秋はもみぢするもの也こゝは耻といふ字にかけてはづかしがるこゝろにもちひたり櫨紅葉のうたは夫木集に爲家卿「山さとの賤か垣ねの村竹にもりて色つくはしもみち哉とよめり

世尊寺やうのはしり書

世尊寺家の先祖權大納言行成卿能書のきこえ有て本朝三跡の一人なりしゆゑ子孫能書家と稱す數代の後行能卿、經朝卿、經尹卿、行尹卿、行俊卿などみなみな能書の聞えあり系圖は諸家傳につまひらかなり走り書とは俗に逹者にかくといふこと也つれづれぐさに手などつたなからずはしりがきとあり

狂文の綾の呉服

庭訓往來に狂文の唐衣といふこと有て註に狂文はいろいろのうけもんあるを云といへり呉服はむかし呉の國よりくれはとりあやはとりと云二人の織女來りてきぬをおりはじめしゆゑ呉服といふ也呉の字をくれとよみ服の字をはとりとよむなり

式臺ふかく

式臺は宛字也色代と書べし書言字考に色は顏色のこと代はかゆるといふ義にて顏色を常とかへてうやまひつゝしむ心也とあり

遠路の御光駕

駕はのりものといふ字光は人をほむる心也よつて人のわが方へ來るを光駕といふなり

御逗留

逗も留もとまるといふ字なり

隨て此小袖は

隨がつては書狀にもかく詞にてまづ何々といふ事をかいてそれに從ひてと云事にて俗に夫につきてと云心に遣ふことば也裝束拾葉抄に大袖はうは着也袖口大也小袖はした着也そで口大袖よりちひさしかるがゆゑに小袖といふとありこの上着下着といふは今下々にていふうはぎしたぎの事に非ずこ

の下着といふが下々の上着也其譯は上つかたにてび又此上にうへのきぬとて禮服をめさるゝ故につねの上着を下着といふ也また秋草に小袖といふはすべてそでの下を丸くぬひたるを云袷にても綿入にてもひとへものかたびらにても袖の下圓きは小袖なれども今はわた入のみ小そでと云事に成たりと有

二つ引龍の

紋といふは衣服に五所に付るばかりをいふにあらず公家にてはすべて物のもやうを紋といふ也また武家の紋は旗幕などの目じるし也是保元平治の戰のころより始りし事也後世にいたり旗幕ならで衣服にも紋付ることに成しなり東山義政公の時代に白き綾またはつむぎなどを地をいろ〳〵に染て御紋を紫などにて付たる事宗五記に見えたりされど御紋定まらずといふをみれば其ころは衣服は家のもんにかぎらずなにの紋にても付し也後世にいたりては家のもんの外はつけぬ事に成たりと秋草にしるせりふたつひき龍の龍の字は兩の字のあやまり也引兩ともいふこれは足利家庶流の衣紋にて今いふ二つ引の事也

御主人の本丸か

城を築く法に長く方なるを利あらずとし小さく圓きを以て要害とするゆゑ本丸二の丸三の丸などゝいふよし書言字考に見えたり

御時分がよし料理〳〵

貝原好古の諺草に云料理といふ字は晋書に出てはかりをさむるといふ義也今俗に食物を割烹ことを料理と云は居家必用に蒟蒻を製することを料理すると有てもろこしにもこの詞あるにやとかけり按ずるにこの好古の説は非也こんにやくを製するもはかりをさむるといふ心也もろこしに食物を調味することを料理といふこと決してなし是は日本にていひつたへたる俗語なり

本膳の懸盤

本膳は二の膳三の膳とだん〳〵すゆる故はじめに持いづるを本膳といふ也かけ盤はふちの高きあしつきの膳なり折敷のごとく平かにしてふちあるを手がけといふ類なり盤の字はすなはち今いふ膳の事也三光院内府記にも膳のことを盤としるしたま

へり
珍物のやさい美味をとゝのへ
野菜は青ものを云美味はうまきあぢはひ也
配膳の侍
はいせんは膳をくはるといふことにて禮義をたゞして品々の物をまくばりすゆる心也
ひたゝれつくろひ
西三條装束抄に布直垂は諸大夫着すこれを俗に大紋といふとあり秋草にひたゞれは官服にあらず無位無官のもの丶服なるゆゑいにしへは官位なき武士も式正のときは素襖をぬぎてひたゞれを着せしとあり
ゑぼし八分にさし上
目八分といふよりすこし高くさゝげる事を烏帽子八分といふ也
官領ふうのすり足にて
官の字はあやまり也管領と書へし室町家にて天下の政をとりおこなふ人を執事とも管領ともいひたることは足利高經の時よりはじまるよし書言字考に見えたりもろこしにて詩に管領の字を用ひたるに聯珠詩格の註に管は主當也領は統領也とあればものをつかさどりてとりしむる心也
邊國の義
邊土とも邊鄙ともいふ心にてかたゐなかといふ卑下の詞也
老母ゑしやくし
會釋と書てこゝろにがてんしてあしらふこと也
隔心がましい饗應
隔心はこゝろにへだてのあること饗應はもてなしとよむ字なり
殊に仰山な
ことわざ草に物の廣大なるは況山といふ山にたとふとよめり韵會に況は譬擬なりとしるしたり按ずるにこの諺草の説むつかしくてあしゝやはり仰山とかきて高き山をさしあふむきてみるやうなる事をぎやうさんといひならはしたる物也仰山といふ熟字は漢土には仰山禪師といふ僧有て仰山禪師語錄といふ書もある也
近習衆か外ざま衆か
近習は禮記の註に天子の親しく幸する臣を近習と

いふと有日本紀にては近習の字をちかくつかふまつるとよませたり外さまは外様といふことにて君の手まはりのことにはあらすして外むきの事をつとむる役を云

女子共に給仕さする此母

給仕はそなへつかふとよむ字にてそれ〲の事にめしつかはるゝ心也されど本字は給事とかいてもろこしの官名也事物紀原に給事といふ官名有て殿中に事あるを以て給事中と云と記せり

慇懃な給仕ではきうくつでたべにくい

いんぎんといふ詞はもとは物のねんごろにしんせつなる心也韵會に慇懃は委曲の貌とあり諺草に今俗に隔心なる事をいへるはあやまり也とかゝれたれど是もあたらぬ註なりものをねんごろにくはしくする氣味の字なれば丁寧すぎることをいんぎんと云也

辭宜は却てめいわく

辭宜は宛字にて時宜と書べし時のよろしきにしたがふといふ事にて無禮のなきやうにさしひかへる事也漢書に時宜に達せずといふ詞あり迷惑はまよひまどふといふ心にて俗にこまり入といふ心也韓文に迷惑の胸を開くと云語有

楠正成が再來とも

再來はふたゝびきたるとよみて生れかはりといふこと也

玉を泥になげうち

寶となる玉を泥の中へなげすて世にめづらしき麒麟といふけだものをつなぎおきて犬のかはりにかふやうなるもの也といふたとへ也麒麟は獸の中の聖なりといふこと王充論衡にみえたり

かゝる英雄の御老母

劉邵人物志に草の精しく秀でたるを英といひ獸の上にたつものを雄といふそれゆゑ人の文武をかねそなへたるものをこれにたとへ才智かしこく人にひいでたるを英といひ勇氣の人にまさりたるを雄といふされば張良は英也韓信は雄也といへり今山本勘助は張良韓信をひとつにしたるさむらひ也といふ心也

ふ思議の御出

ふ思議は思ひはからずと書て佛經に出たる字也俗

におもひよらずと云心也
優曇花の咲たる悦び
法華經に其人甚希有なる事優曇華に過たりと云語あり疏には三千年にひとたびこの花現ずれば金輪王出るとあり又楞伽經の疏にうどんげは世間の中において人曾てみるものなしといへりよつてあひがたくめづらしきことのたとへとす源氏物語若紫巻に源氏の君のたま／＼北山の僧都のもとへまゐり給ひたるとき僧都のよろこびてよまれたる歌に「うとんけの花まちえたるこゝちして深やまさくらに目こそうつらねまた按ずるに日本にては芭蕉のはなをうどんげといふこと東かゞみに見えたれどこれはもちひ難き說なり
しるしのさかづき頂戴の望み
頂はかうべ戴はいたゞくといふ字也法苑珠林に佛經のことをいふとて肩のうへに荷ひあるひは頂戴すとかけるも經文をかしらにいたゞくこと也
長尾彈正の少弼輝虎
彈正はたゞすつかさとよむ字にて風俗をよろしくし內外のひがことをたゞす官なるよし職員に見えたり其したやくを少弼とて一人有やまとよみにすないすけとよむ也
天より受たる明命をかへりみ
大學に太甲にいはくこの天の明命をかへりみるといふ語を用ひたり天よりうけたる明かなるおほせつけをよく守るといふ事也かへりみるとはかの天命をまもることをとりうしなはぬやうにわが身にかへりみるといふ心成よし四書蒙引にとけり
天の時地の利に叶ひ諸卒これに和し
孟子天の時は地の理にしかず地の理は人の和にしかずと云語に寄り軍をいだすに天にとりてはほどよき時節をはづさず地によりてはほどよきみちに出るを大將の心がけといふ也其天の時地の理を得たりといふとも多くの士卒のこゝろが打やはらがねば軍には勝たれぬと云なり
こしもと女のわらは
女童とかきてめのわらはとよむ也俗に小女郎といふほどの事なり
鶏をさくになんぞ牛の力を用ひんとは聖人のいましめ

五行の本に牛のちからと書たるは大なるあやまり也牛のかたなと書へしこれは論語に出たる孔子の詞にて鷄はちひさき鳥なればそのにはとりを料理するに牛をれうりする庖丁はもちゆまじきとのたまへる也集解の孔安國の註に小さきことを治むるになんぞ大きなる道をもちひんといふ心也とあり今この勘助の母に輝虎の給事せらるゝが其やうなる物なりとあざける詞なり

僞り表裏

口と心とうらおもての有こと也

けふのふるまひにあらはれ

このふるまひは擧動と書てたちふるまひのことなり

おじやらしませぬ

御座りませぬといふにおなじおば御と同しくじやとざと聲かよひらとりと五音かよふ也ゐなか人の詞におんじやり申といふもござりますと云事也

膝に味噌汁淵をなし魚よりおどろく嫁娘

淵をなすとは汁のひざにたまること也これは詩經の鳶飛で天に戻り魚淵に躍るといふ句によりてかやうにつゞけたるもの也この齣に大學論語孟子なとの語をおほく引て用ひたれはかやうの所にまで經書の語をもちひたること作者の力あらはれておもしろきこと也

狂人同然と

きちがひと同じことゝいふこゝろ也

重代のあづき長光

秘談抄備前長船物の系圖に長光初代と二代と二人有初代の長光は法名を順慶と號し左衛門の尉と稱す建治弘安正應のころの刀鍛冶也二代の長光は左近將監と稱し正應永仁正安乾元嘉元德治のころの人也と有初代長光のうちたる刀にてあづきのきれしといふことさまさまにいひ傳へたる俗說ある故後にあつき長光と稱する也

ことぢを律にしらべかへ

琴の調子に呂と律とあり源氏ものかたりはゝきゝの卷にりちのしらべは女のものやはらかにかきならしてと有細流抄に律は秋を司どるてうし也又律は陰なれば女のかた也ともいへり

むなしくかれしはゝきゞを

帚木とは美濃信濃兩國の其原ふせやといふ所にある木也遠くてみれは帚をたてたるやうにて近くて見ればそれに似たる木もなしと源氏ものかたり宗祇抄にしるせり箒木をはゝの事にたとへたる證歌は續拾遺集平の正家の歌に「しなのなるそのはゝにこそやとらねとわかはゝきゝと今はたのまん」とよめり

○松風村雨束帯鑑　うつぼ猿

八まん大名

神社考に緣起を引て筑前宮崎に八幡宮有むかし白幡四つ赤幡四つ天よりこゝにくたる故に八幡となづくといへり大名の字いにしへの書には見えず白川顯廣王紀に安元三年四月諸國の大名國役に應ぜずといふこと見えたり安元は高倉の院の年號にて平の重盛の育王山に金をおくられし時也されはそのころより大名といふ稱號はあることしるべし庭訓往來には關東下向の大名高家の人々とありこの往來の出來しは南朝のとき也今八まん大めうといふことは八幡は源家の氏神にて弓矢の守護神なればば源氏の大名といふ事を八まん大めうといふなるべし

劔は箱に納め弓は袋に治るといふ

詩經の周頌に明に昭なる有周式て位にあることを序つすなはち干戈を戢めすなはち弓矢を櫜にすといふ詩ありこれは周公の亂を治めたまひて天下太平になりたるゆゑ干戈を箱にをさめ弓矢をふくろにをさめ給ふことを賛て作りたる詩なり

突もうら／＼とのどやかにござれは

うら／＼ははるの日のながくのどかなるを云菅家文草の詩の二月三月日遲々といふ句を聖一國師の點にきさらきやよひ日うら／＼と附られたりまた西行の山家集に「ことゝへはもてはなれたるけしき哉うらゝかれなや人のこゝろのといふ歌有これはこゝろのやすらかなるをいへり

太郎冠者

書言字考に往古いまだ官に任ぜざるものはたゞ太郎次郎と稱すとありて上にたつものを太郎といひ其次を次郎といひたる也さて冠者といふことは元服して間のなき若者をおほく冠者といへり木曾の

冠者義仲蒲の冠者範頼などもわかき人の稱なりくわじやと云はくわんじやの字をつめていふなり

のさもの有かやい

書言字考の俗語に野風俗といふ字を出せり是はのふずといふことば也すべていやしき事に野の字をつくるは漢土にも野鄙とかきてはいやしきことゝし野人と書ていやしき人とすること論語にもいでたりこの方の俗語にものらといふは放蕩なる若ものをいへりまた家に畜はぬ猫をのらねこといふは仲正の歌に「眞葛原下はひありくのらねこのなつけかたきは妹かこゝろかとよみ給へりこれは野猫といふことにてらの字は付字也古今集のうたに庭もまかきも秋の野らなるとよみたる同しこと葉也されば此のさものといふは俗にいやしきものゝ無禮なる事をするをのさばるといふに同しくいやしめ云詞なるべし

野遊山などは何とあろふ

野遊山とは野に出てあそぶことをいふ俗語なり諺草に云晋の郭文弱きより山水を愛し名山にあそび老に至て終に廬を山中にむすびて住りこれを蒙求に郭文遊山としるせり今ぞくに遊樂することを遊山といふ郭文が遊山とは興味はなはだ異也といへりあんずるに遊山は山にあそぶとかく字なれば野にあそぶことを遊山とはいふまじき詞なれどこれはたゞ外へあそびに出ることをいひならはしたる詞なればしひてとがむべからざる物也其子細は三才圖會に遊山船といふものありて湖などに遊ぶ用としておほく酒を載る故遊山をもつて名とすといへりまた堯山堂外記にも遊山船を雇ふて石湖といふみづうみにゆきたる事もあれば野にあそぶことを遊山といふもあながちにあやまりとは定めがたし

此あたりの猿引でござる

續撰吟抄さる引の歌に「畜生もつかひいるれは中中にわれにはましの能のおほさよとよめりこの歌は文明のころの職人歌合にも入たりこの判者は逍遙院實隆公也漢土には猿引を狙公といふこと列子にみえたりまた唐音統籤には弄猴人と有て弄して君王を一笑せしむとあれはまつたく日本のさるつかひと同しこと也

たのふだ人の靱が

わが主人と頼みたる人といふ事を頼ふだ人と云なり靱の事は冬草に云矢を入るうつぼといふものは上古の書に見えず中興にできしものなるべし義家奥州後三年の合戰のとき舍弟義光奥州へ下らんとしけるとき相撲の國あしがら山にてうつぼのうちより笙の譜をとりいたし豐原の時秋にさづけられしことと古今著聞集にみえたり東鑑には羽壺とかきたり空穂と名付しことはその中空にして外に毛皮をかけたる躰粟の穂に似たれば空穂といふなるべし又靱の字をうつほの字とするはあやまりなり本字は靫かくのごとく書て是はゆきといふ字なり靫は形異なるもの也春草に云むかしはうつといふもの有て腰につけたりしを後に穂を作りそへたるとて其うつといふものゝ繪圖を武用辨略に載たり用ゆることなかれうつといふもの古書に肯て見えず其繪圖も出所をいはず妄作なりと云々今あんずるにうつぼものかたり俊蔭の卷にとしかげの娘北山の奥なる熊のうつほ木の中にて子うみたる事をかけり熊のうつほは精華錄には熊舘とかきて古木の朽てうつろになりたる所を熊が臥所にすることをいふ也さればすべて中のうつろなる物をうつほといふゆゑこのうつほも其こゝろにて名づけたるものなるべし

しさりおろ

すされといふに同し俗に下りおろふといふこと葉也

いかい大名じやといふて

いかいは大きなるといふこと葉也

此大鴈股を以て

春草にいはく鴈股となづくる事は鴈のあしのゆびの股に水かきあるに似たればかりまたと名付しといふ説あり用ゆべからず鴈にかぎらす惣じての水鳥みな水かき有また侯とあればとてゆびのまたとするもいかゞ也ある人のいふは鴈侯といふはかへるまたなり蛙のまたのごとくなる故かへるまたといふこと葉を略してかるまたと云又轉じてかりまたとよびたる也其詞に付て鴈侯の字を宛用ひたるといへるは發明の説也用ゆべし

きうしよがござります程に

院本に急所と書はあやまりにて本字は灸所なり灸をすゆる穴所のことにて其穴所を撲ば死するをいふ也

ヤイましよ

猿をましともましらともいふなり翻譯名義集にさるを天竺にては摩斯吒といふとありしかればましらは和訓にはあらずして梵語なるをそれを略してましともいふなるべしましと讀たる歌は夫木集猿の題にて「おもふこと大江の山に世中をいかにせましと三こゑなく也といふ兼昌の歌出たりましらとよみたる歌は古今集躬恒のうたに「わひしらにましらな鳴そあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

ならぬと申せば殿樣の

秋草にいはく殿と稱すること禁中にて殿と稱するは攝政關白より外にいはず其外の人を表向にて殿といふ事も內々のうやまひ也いにしへよりありしこと也殿は宮殿の殿にて宮殿をかまへ居住したまふゆゑ殿といふ也されば攝政殿關白殿といひまた殿とばかりもいふ也神のことを太神宮八幡宮といふ宮とおなし意なりされば殿といふはいたつておもき稱也つねの人の名に殿と付てよぶは分にすぐる事なりされども內々のわたくしのうやまひに殿とよぶ也とあり樣といふことはまへに註す

船こぐ眞似をしますかいの

まねはまねぶといふことを略したる語にて學の字なり源氏ものがたり品定の所にさてありぬべきかたをばつくろひてまねび出すにそれしかあらじとそらにいかゞはおしはかりおもひくたさんとありこのまねび出すといふ詞もまねをして聞すといふこと也俗に眞似と書は後の世におしあてたる字なり

畜生さへ物を知てなげくに

畜の字はかひやしなふといふこゝろ也毘婆娑論に横生は生を禀ること愚癡にしてみづから立こと能はず他のために畜養せらるゝゆゑにちくしやうとなつくといへり

物の哀をしらぬといふは

俊成卿の長秋詠藻に「戀せずは人はこゝろもなからまし物の哀れもこれよりぞしる

鬼畜木石にもおとつた

鬼や畜生や木や石やと物のあはれをしらぬ心のなきものを四つかぞへ立たる也俗にいは木にあらざればといふは人といふものはよく哀れをしるといふこゝろなり文選の鮑昭か詩に心木石にあらざれば豈感なからんやと作り白氏文集にも人木石にあらずみな情ありともつくれり伊勢ものかたりいは木にしあらねばこゝろくるしとやおもひけんとありげんじ物語にもいはきならねばおもほししるとちかけり歌によみたる例は順德院御集に「人ならぬ石木もさらにかなしきはみつの小島の秋のゆふくれとよませたまへり

息災延命富貴萬福の御祈禱

息災は大日經に此は是息災の法也といふこと有てわざはひをやめるといふ事也萬福はもと詩經にいでたる字にて尺牘にめでたくといふかはりに萬福とかくこと翰墨全書に出たり祈禱は神にいのることなり

猿がまいりてのふ仕る

藝能をすることいふこと也前に註せしさる引の歌にもわれにはましの能のおほさよとよめるは猿のげいのう數々あるをいふなり

御知行まさるめでたき

いせ物語にかすがの里にしるよしゝてある註に知行の事也と有眞名伊勢ものがたりには知由と書て其人の領知するところよりをさむる米穀を知行米といふ也

人命草木增長すれば

人の命ものひ草木もます〳〵おひのびるといふことなり

綾が千反錦が千反

續日本紀に元明天皇の和銅五年に伊勢尾張以下二十ヶ國にはじめてあやにしきを織しむる事見えたり

なばか佐古志か室がとまりか

那波佐古志室みな播磨の地名也

ふねのなかには

ふねの中には何とおよるぞとまをしきねにかぢをまくらにひんだのをどりをひとをどりといふ文句

三絃本手の飛驒組末章なり

何とおよるぞ
寐ることをおよるといふは古き詞なり増かゞみに帝といづくにおよるぞと問ふよるのおとゞにといらふればと有物に倚かゝりてねる事也
楫をまくらに
夫木集公朝の歌に「わするなよ同しみなとのかちまくらおもひ〳〵にこきわかるともと讀り
一のへいたて二のへいたて
幣をたてゝ祈禱するこゝろなり
三に黑駒信濃を通れ
八月十五日しなのより黑駒を引てみやこにのぼるを駒牽といふことは公事根源にみゆ
船頭とのこそゆうけんなれ
勇健とかきていさましくすこやかなりとよむ
はくさいこくより
百濟國は新羅百濟高麗とてむかしは三つの國なりしが今はあはせて朝鮮國と成たるよし明史にみえたり
普賢文珠のめされたる
文珠の獅子にのり給へるかたちは佛像圖彙にみえたり翻譯名義集に普賢と文珠と二つにして二つにあらずこの菩薩つねに一對とすといへり
千秋や萬歲の
秋といふ字はこゝにては春秋の秋に非ず說文に秋は禾穀熟する也とありてものゝ成就する時を秋といふ也麥が熟するゆゑ四月をも麥秋といふ類なりゆゑに千秋も千年といふにおなじ韓非子に君をして千秋萬歲の聲を聒しめんといふこと有王維の詩にも萬歲千秋聖君に奉ずとつくりてめでたき事に用ることば也

瑠璃天狗卷之五終

今昔操年代記上之巻

目録

近來操年代記序

つれ〳〵なる儘友かたらひ、生玉天王寺安居清水の邊におゆみ知る人あるに假の足やすめさつと仕た料理膳とつて薄茶、枕引寄四方山のはなし襖一重あなたに、わかい衆五七人集り、芝居の噂とり〳〵の評判、ひとりは竹本流と見へ、筑後芝居の贔負口今一人は豐竹門弟と打見へ、上野のかたをもつて、出るまゝの討つこたへつ今日の慰是ならんと耳の垢取てきくを知らぬが佛樣、竹本方の云、今世にもてはやす淨瑠璃皆筑後風也、さのたまふ豐竹は文彌風かせつきやうか風義かはりたる音曲ならは息筋はつて申さることはり、筑後風を學る丶上は竹本芝居の善惡かたく御無用と座を打ての丶しる豐竹つ丶と出、一通り尤也、まつたく竹氏を譏るにあらず義太夫とて生立からの名人にてもあるまじ行年つもり〳〵て今名將の名をおぐる、是一藝の修行積りしゆへ也、其年數をくらべては豐竹上手也といふがあやまりか竹本仕出しの音曲といふにてもあらず古播摩のながれを汲で其流義をかたらる丶からは豐竹もおなじ事也、殊に近來の淨留り、第一趣興文句のはだへむつかしければ、あたるはまれにしてあたらぬはつねなり、何程名人の太夫にても淨瑠璃不作にては評判あし丶今筑後最來あつてもむかし、播摩太夫かたられし四天王事の上るりあてがはゞ見物おもしろしとはいふまじ、しかるに播摩は、何ほどあらき淨るりにても諸人好る樣にかたらる丶は名人といふにあらずや、竹本方云、それは時々を知らぬといふ物、今の淨るりを播摩どのにかたらさばどのやうにふしを付てかたり給はん、頃日の淨るり五段昔の三十段よりながし、其とき其心に應じて、見る者聞者なれば一圖に播摩太夫を、名人とかたよらる丶はくだから天を覗くにひとし出なをされよと云ふ、豐竹方さの給ふかた〳〵ここそかたいぢといふ物、既に今淨留理をかたるひとなくかたらぬ者もなき時節、たへず筑後のふし事を第一に稽古仕る人、大かた播摩の景事おの〳〵さきにかたらる丶宮嶋八景長生殿の四季屏風八景、此類數百段與の卷に記すゆへ爰に略す、惣して播摩風の音は何れかまねる人なし、此太夫を譏るかた〳〵めい〳〵宗旨の祖師笑ふに同じ、あな もつたいなやおそるべし

恐るべし 竹氏方かふりを振此方の師釋の道喜は淨るり音曲の精といふ者昔〳〵祖父とばゝのはりまはそんせぬ當流稱美する所の竹本氏ならて此道の司はごわるまいと兩方腕まくりひたいに血筋をはつて既にけんくはになるべき所に七十あまりの老人二重の腰にじゆずをつまぐりよろ〳〵よは〳〵立出是わかい衆れうじめさるな此口論せつしやもらひました双方互に一利屈有ておもしろき評定筑後上野身に取ての滿足此上何かあらんさいせんは東西の評論□△かはりを聞むとおもひの外播摩太夫にころび仕廻付ず今舍利〳〵佛淨るり太夫に出現せられても此源の元祖たる播摩太夫に善惡いふ人覺ず、殊におの〳〵としわかにして物のしやべつもわきまへず、當前の事ばかり利屈はつて其根を知らず出儘の我儘、我等當年七十五歳若かりし時より此筋の音曲に身をよせ、播摩風より段々筑後豐竹の淨るり、替る度每見物せぬといふ事なし、とりわけ播摩になづみ深く、此流義をもつはら稽古いたしぬ齒は一枚なけれど、富士の牧狩の道行、今語るを聞てはもどかし、とかく同席につらなる事ふしぎの緣、此流義の發旦より是迄の因緣を咄、それ〳〵の門にゆうゐんいたさん、羽ぬけ鳥にて舌のまやらぬおちた所は御免〳〵

浄瑠璃來暦

浄瑠璃諸人もてはやし口ずさむ事昔井上市郎兵衛といふ人音聲たくましくふしはかせかいぐ等に心を付けおのれと此一流をかり出し終に操芝居を取立程なく受領して井上大和掾藤原の要榮と名乘り其後大和を改め井上播摩掾と云しより今に播摩風といへり、播摩太夫生年の頃より音曲を好みフシ、ヲクリ、三重、ヲン、フシヲクリ、ハル、ギン、此類に心をくばり、なかんづくうれい、修羅を第一にかたられしかば、見物なづきをさげ、めい／＼口まねせんとすれ共、其頃は床本かたく閉て、弟子たらんにもむさとゆるさず、勿論稽古本といふ事なく、漸聞書にして、一行二行つゝおぼへ、夜あるきの友となしぬ、いまだ大阪に浄るり本屋なく、つてをもつて替り浄るり出れば、前の浄るりをこんもうして、京にて是を板行するといへども、しらみ本といふに五段を書、その間／＼に、一段／＼の繪をさし込、童子のもてあそびとしてひろむる、まつたく稽古人の助とならず、やうやく播摩太夫手筋より、心齋橋筋三津寺邊に、書本を商賣仕る井上彌兵衛といふ人、太夫のゆるしを請、語り本の内、道行四季、神落などを乞請、是を書本にして稽古人の助となしぬ、其外段物望む衆中、傳をもつて弟子と成、ふし口傳稽古するといへども、むさとおしへずむさと弟子をとらず

△序に播摩太夫名人といふいはく、今おの／＼もつはら稽古なさるゝふし事、何ぞといへば市郎丸ひでとら、安藝の國いつく島に着しかば、わに口ならしぬさをとり、神慮をすゞしめ奉ると、宮島八景のけい事、是にかぎらずあまたある、中にもおもしろきは

一掛物ぞろへと云は　頼義北國落の内也
一歌仙之段と云は　菅原親王の内也
一宮島八景と云は　源氏筑紫合戰之内也
一しほがまの段と云は　頼光跡目論之内也
一馬の段と云は　同　斷
一屛風八景と云は　金剛山合戰之内也
一清明神おろしと云は　花山院之内也
一七夕祭と云は　道寸軍法競の内也
一五天竺と云は　日本王代記
一長生殿四季と云は　源氏熱田合戰の内也

これらのたぐひかぞふるにいとまなし、尤文から古風にしていやし九、地よみおもしろからず、たとへば松のかれ木にひとしく、すんとしてとりじめなく、道行なんど名所方角前後し、文にくり事有て亂れたる糸のごとし、然るに井上、音曲そなわりたる妙には其亂れをほどき、其かれ木のふし〳〵の中より、いろいろの音聲を出し、樣々のふしを編、末の今まで竹本氏豐竹氏、是をもちゆる勿論其流をくむ輩、此太夫の景事語らぬといふ人なし、しかれば此播摩太夫浄るりの祖師といふに誰か一點をくはゑん○播摩太夫一生のふし事數百段あり、是をあつめ、全部三册にして西澤所持の板行ありといへども、辰のとし燒失して其外題のみ殘りぬ

○有頃京四條の芝居より勸進元下り、播摩太夫一座を買請京都へ參りたまふ、井上初ての京入、吉日良辰をあらため、始まる初日賴光跡目論を出されしに、人形あやつり道具、役者に至るまで美を盡し、見物のお氣にまいるやうに、座中氣をはりゆみ、思ふつほにあたりめ嚴しく、京中評判、よしやよし野の花見より此芝居と、日々に見物入まし、はりま殿の外聞目出申納ぬ、木戸役者より御目出たの酒肴、せいろう山をなし、大阪よりは門弟知べのもの、聞およびの生鯛生貝、鱧太刀魚のひかり芝居をてらし、毎日の酒盛、千秋樂萬歲樂と祝ひの中、太夫本心地あしきと、假初の風重〳〵しく、京中にてあらゆる天醫入かはり、療治の匕をつくすといへども、かぎりの命にてや有なん、次第〳〵にげんきおとろいぬ、目ずいしやうの都人にまで名人とよばれ、ほまれを夢の内にたのしみ、終にむじやうの風にさそはれ、五十四歲を此世の見おさめ王城の土となりぬ、皆々あん夜にともしびをうしなひ、せんかたなきからを長明寺におくり、昨日にかはる石塔戒名ばかり殘しぬ、おもへばおしき命、京大阪の男女おしなめ袖をしぼり南無妙法蓮華經をとなへ、忌日名日とふらひぬ

▲播摩死後井上市郎太夫石屋三衞門尾崎權左衞門此兩人芝居を勤め、勸進元約束の日限、つゝがなく仕舞難波にくだりぬ、其間の淨るり、業平一代記、大職冠知略の玉取、跡目論以上三番にて止ぬ、是より市郎太夫、段々立身して一分のやぐらをあげ、新淨るり源氏十五段、五大力ぼさつなどゝされしかど、はか〴〵し

からず終に立ぎへにして其おわる所を知らず

○播磨弟子の内清水理兵衛といふは、此安居天神の南に住所をかまへ浪花の腹ふくれ衆をあつめ、碁將碁茶の湯、連俳の座敷なれ共あるじ、はりま風をかたり出せしより、皆音曲けいこ場となれり、もとより理兵衛井上流をたんれんし、かたをならぶるものなし、聞人我も／＼と尊敬うやまひもてなしぬ、元來料理屋を商賣し安樂のくらし、寐ても覺ても、立にも居るにも、ヤア天めい知らずの賴近めや、子として親を調伏仕る事其聲天に響き今播摩といへり、遊人連ゝぱいきげんのあまり理兵衛を招き、あつたら淨るり此儘捨んものこりおほし、芝居興行し幕あけさせんと、なんなくていしゆをそゝりあけ、おもひ／＼こゝろこころに、銀をもちよりまんまと一座を組立、櫓まくはなやかに、新作にて上東門院と云ふ淨るりをかたり、町中めづらしく山をなしけり、然れ共、なじみある播磨の花香うせず、見物なじみなきと、珍らしき淨るりなきとに行當り、中ば芝居も止め、此時天王寺の五郎兵衛と云ふ人 竹本筑後こと 理兵衛ワキをつとめ、初て床になをつてかたる、此五郎兵衛竹馬より播磨風に心魂をとられ、節季しらぬ農業の業をすて、あけくれ淨るりに氣をうつし、太夫號をよび、京四條川原の芝居におゐて、清水理太夫とあらため、日本王代記、松浦五郎など云ふ淨るりをかたるといへども、はか／＼しからず、出たり引込だり、半年つゞかぬ芝居、見るに氣のどくの天窓をかきぬ

○宇治嘉太夫といふは、紀州和歌山宇治といふ所の人也、幼少より音曲に妙をなはり、第一謠をよくたんれんし、なり物ゝとをりうとからず、ふしはかせかなかいぐまでにこゝろを付、一藝何よらず人より上にたゝん事をねがひ、ついに京にのぼり竹屋庄兵衛に密談し、あやつり芝居を興行し、伊勢島宮内が名代をもつて、淨るり宇治嘉太夫と大看板にしるし、新作にて虎遁世記といふをかたり出しぬ、播磨風をおもてとし、ふしくばりこまかに、よは／＼たよ／＼、うつくしくかたり出せば、京の見物あたまからお氣に入て、思ひの外ひやうばんよく、段々新作の淨るりを出し、人形いしやうまできれいにこしらへ、一年あまり首尾よく勤る三年めの正月より天王寺五郎兵衛をワキにかゝ

へ、西行物語といふ浄るりの二段目、藤澤入道夜盗の修羅を、五郎兵衛かたられしが、元來大音にて甲乙ともにそろひ、まないたに釘かすがいを打たる如く、何程の大入にてもとゞかぬといふ事なし、字どめ字頭の文字きへず、文のあやうく聞へければ、見物よろこぶ事かぎりなし、嘉太夫も五郎兵衛浄るりには心おき、後に我はこさきの甲斐になるべきは此男と、云れしはさすかの嘉太夫ぞと後にぞおもひ知られぬ、さればこそ筑後風とて、國々浦々まで口ずさむ、くれないはそのほにうへてもなり

〇嘉太夫水魚のごとくむつまじき庄兵衛と藝の筋より互のゐちを云つのり、終に中あしく、たちわかつて竹庄方には一座を取組、五郎兵衛を太夫にして、まづ京地をはなれ、西國にくだりぬ、然れ共嘉太夫ひるまづ、日々にはんじやうし程なく受領し、加賀掾宇治好澄とあらためしより、町中いよ〱此流をかたり出し、ふまつさへけいこ本八行を、四條小橋つぼやといへるに板行させ、浄るり本に謠のごとくフシ章をさしはじめしは此太夫ぞかし、名人は播磨、上手は嘉太夫也、取分世繼曾我より諸人もてはやしけり

〇竹庄五郎兵衛を同道し、宮島の市を仕舞、大阪に參り、今の竹田外記芝居をかり、天王寺五郎兵衛といふ名をかへ、竹本義太夫と改め、やぐら幕、まりばさみの内に笹の丸のもん所、今につたへ此まゝ也、其頃は貞享三年、丑の年にてぞありけり、浄るりは嘉太夫致されし世繼ぞかし、是義太夫出世のはじまり、町中の見物此ふし事になづみぬ

げにうけがたき人のたいを受ながらと□二段目待つ夜の恨

さりとては戀はくせ物皆人のと□三段目道行

立子這子、此二所のふし事口まねせぬ者なし、次のかはりあいそめ川梅の名よせ、道行のすみとすゞりの濃巾をはやらし、續いて三のかはりいろはものがたりの獅子の亂曲、道行のなつのゝじかのまき筆にて手習させ、其暮は堺にまかりいよ〱評判よく、義太夫ふしは、播磨此かたの浄るりと見物におもひつかし、其年のくれ心よき越年、是義太夫大音にて萬そろひたるうへに、理兵衛嘉太夫を呑込、おもしろきふしを付てかたらるゝは、鬼にかなさいぼうなんでも三味をべづしては出世の門はひらきがたし

○其明寅の年、京宇治加賀掾難波にくだり、今の京四郎芝居にて、西鶴作の淨るり、暦といふをかたられければ、義太夫方には賢女の手習並新暦として兩家はりあい、ついに義太夫淨るりよく、嘉太夫がた止ぬ、其次のかはりかいぢん八嶋、是も西鶴作にて、評判よき最中出火して、加賀掾は是限にして京へのぼられ、又々なじみ道都におゐて、操をはじめ、だん／＼珍しき淨るりをかへ、音曲修行、三十餘り、花落におゐて、たのしみ、寶永年中卯の初春廿一日に往生し、自語院本淨道融居士となれり、世は夢現ぞかし、其年は七十七歳にてぞ有けり、義太夫寅の年二の替りは、近松に緣をもとめ、出世景淸といへるをこしらへ、是にて月を重ね、其後のかはり源氏移徙祝、但し賴朝七騎落也、是も評判よく町中口まねする所に、佐々木大鑑並に藤戸の先陣、松よひしぐれ相の山の道行、思ひ川ほさぬ袂のかたり出し珍敷趣興と、はし／＼角々、此道行けいこせぬといふものなく、是より義太夫ぶしともてはやしぬ、そのうへに近松門左衞門、つゞいて新作をこしらへ追ておもしろき趣興に、かはり文句はたらき、義太夫のかたり盛り、日々夜々音聲に實のりふし詞に花を咲せば、聞人見る人此太夫ならではともてはやしぬ、なれ共其頃は、かぶき芝居あたりおほく、殊に出羽にはさま／＼のからくりなどし、見物諸方にわかれば、さのみ大入、大あたりと云ふ事なく、しぶらこぶらの見物、なれ共こたへもこたへたり、剩へ筑後掾藤原博敎と、受領迄申請、西國おもて、山路ふみわけ木こる杣人、海邊に迷ふ海士の子も、御いたはしやせみ丸といへば、又とこ闇の雲はれて日月ひかりかゝやけりと、よし野忠信のさいもん、何所からどこまでいかぬものなく筑後掾のいせい、夜まし日増の繁榮、藝者のほまれ四方にかゝやくといへども、ほつこりとした藏入なく、三八の十八にてあはぬそろばん、胸算用あふてあはぬは世間なみ、次のかはりの談合、一ツ盃庄兵のばゝさまさしあひ、さしみは鯉にこせう、あたり淨るり何をかするめといふ所へ、やれ曾根崎の天神で、見事な心中、有馬藥師、藥がまはつた、是を一段淨るりにあしらへ、そねさき心中と外題を出しければ、町中よろこび、入ほどにけるほどに、木戸も芝居もゑいとう／＼こしらへに物は入らず、世話事のはしめといひ、淨るりはおもしろし、少しの

間に餘程のかねを儲け、諸方のとゞけも笑ひ顔見てすましぬ、此上に望もなしと後生心に成、きめうむりやうじゆ如來に身をまかせ、芝居も是切に安樂國土きはめんと、明暮御堂に參り、あさじ日中お八つをかゝさず、一心ふらんにしやうしんげ、御和讃のふし猶殊勝にきこゑぬ、折ふし竹田氏參會し未だ老木といふにもあらず、今町中しやうびする所に、おもひよらぬ引込じあん、二三年勤て給らば、拙者座本仕、萬事の世話を引請、貴殿內證入用銀御用次第つゞけ不自由させまじと、同行衆を以て賴みしかば、下地は好なり御意はおもし、いか樣ともの詞をきわめ、盃すんで其暮、かはみせ淨るりといふをはじめ、用明天王職人鑑、作者近松門左衞門をかゝへ、太夫竹本筑後掾、座本竹田出雲と看板並べ、三段目かね入の出がたり、泪川戀のこほりにとぢられて、身を切くだくおもひより、うき川竹のながれの身、辰松八郞兵衞出づかひ身振よく、見物の氣をとつてのかね入藏入、目出たくかはり〳〵の首尾よくかほよ歌かるたといふ淨るり迄語りそれよりふと病付たまひぬ、日本一の太夫今一度とゝめ度いろ〳〵と療治の手をつくし、人參の山を積でとゞめんとすれども、かぎりの命はとゞめがたくもはや末期の水も通さず、おしや六十四才を一期とし、正德四年九月十日を此世の見おさめめいどかうせんの旅しばゐにおもむき給ふ、門弟數十人、白無垢の數をそろへ、なく〳〵野邊におくりむじやうの煙となしぬ、竹本氏門流あまた有中に、豐竹上野は其流義まねると云ふ心さしより、天王寺念佛堂のむかひに石塔きざみ、釋道喜、施主豐竹上野としるしぬ、心あらん人々名日には參詣あるべし

○豐竹若太夫事若輩の頃より竹本流義を學び、家業はよその事にして、每日芝居に入込、けいこおこたる事なし、其頃は竹本釆女といへり、年十八さいの頃、筑後諸芝居にをゐて、傾城懷子といふ淨るりをかたられしかど、しか〳〵の事なく其年もくれ、あけのとし東立慶(ひがしりうけい)しばゐにて、道具屋吉左衞門永島重太夫、其外門弟あまた寄合、素淨るりの出かたり、是もはかばかしからず半にて止ぬ、それより修行の爲爰かしこにくだり、其もとり堺南の端にて芝居とりくみ給ふ、折ふしいとやの娘、手代の久兵衞と密通あらはれ娘をつれ萬代(もづ)とやらんへかけ落、はたけの井戸に身を投

兩人共に死たり、是幸の心中と俄に一段淨るりに作り、さつとした道具拵云づきにして、心中泪の玉の井と云ふ外題を出しければ、所の事といひおもひの外あたり、究の日限仕舞大阪に皈り、長門九郎兵衞とかたらひ、相座本にて舞のしばゐにやぐら幕、豐竹若太夫とあらため、はなやかなる看板、さかいみやげ心中泪の玉の井と出しける、春頃筑後がたにはそね崎心中、兩家同じやうな仕組、玉の井の奧、久兵衞おち道行の内に、さのみじみ〴〵なけかずとあゆましやれ、さきには鬼はないものと、初冠より町中に口眞似させ、次のかはり金五郎うき名の額、是も一段淨るりにて茶屋名よせの道行に、まことに小さんと我中はあのほり詰の二つ井戸、どちらを見ても深ければと、浪花のわかい衆によろこばせ、そね崎道行同前に、此稽古本京大坂の淨るり本や、門をならべ板行してひろむ、あたまから見物にのみこませしは、太夫になるべき五音の調子聞人かんじけるなり、その明東岸居士をかたり、それより備中にくたぐれし内泉州築能といふ人舞のしばゐをもとめやぐらは濱の竹田にゆつり、芝居をつふしかし家となしぬ其折ふし出雲より、此太夫を助分に賴たきのよしたび〳〵云來りぬ、太夫留守なれ共親の子を思ふしあんこそあらめ、心よくすまし究の盃すんで、太夫登られ、右の品かたられしかば心よく請合、出雲芝居へ出られ、用明天王二段目の役見物筑後の聞まがへるほとにそありける、二年務め其幕、河内屋加兵衞といふ此道の粹方、操芝居におもひ付、是非〳〵はだてんと、豐竹辰松相座本とし、篠の丸のやぐら幕、淨るりの作者紀海音、新作追追出しければ町中余程御贔負の見物おほく、御取立によつて上野少掾藤原重勝と口宣を請つぎ、其明鎌倉三代記といへる淨るり、是迄の大あたり、大黑舞のふしと我も〳〵とけいこするもの多く夫よりのかはりさのみあたりしといふ事なし、なれとも根つよく一座をもちかため、折にふれ時によつては、和歌山奈良さかいへも罷り、さま〴〵の評判よく、卯のとし村上嘉介作にて、建仁寺供養といふ淨るりを出し、明辰の二月より賴政追善芝居、大出來大あたりにて、町中他國の見物此しばゐにかたより、三月廿一日木戸口はりさく大入、近年の不仕合取かへさんと、はづみきつたる所に、其日中より出火夥しく、手と身とになるは

世間なみ、され共操道具を助、漸々さかいに立のき、様子を見合せ、ふつがうなる道具そこ〳〵にこしらへ、初の四月廿三日を初日と定、建仁寺くやうを出し、閏四月十五日より頼政、此二家にて六月中旬まで勤、つゞゐて六月廿三日よりそねさきにて頼政をはじめ、初日より八月三日まで入つめ、藏入の宣敷事、豐竹氏御贔負つよきゆへぞかし、それのみならずあらし芝居賣やしきのよし、太夫本年來の望、折あしけれどもとめたきねがひ、尤の相談に究まり、傳をもつて地主方へいひ入、まんまと首尾して豐竹芝居と成りぬ、むかしより今にいたり、淨るり太夫芝居ぬしと成は、宇治嘉太夫豐竹なり、まつたく自力にあらず、他力によつて是程の大望成就せしは、諸天三寶諸見物のおかげ、いよ〳〵佛神信厚あるべし、かねて太夫本、伊勢よりうすやくそく、ゆかねばならぬ首尾、せひなく一座其用意、跡の普請は一家衆大工の頭梁受取、人數をもつて按立ければ、作者方には顔見世淨るりのこしらへ、太夫元は伊勢より下向の荷物、三方一度にもみ合せり合、なんなくかほ見せの日限定、辻札橋札、はなやかなる舞臺棧じき、さあ上野がかほ見せしばゐ結構なり、女せみ丸と云ふ外題、さこそおもしろからんと、おもひの外の大入見物も初日を見てせいきをつかし、ひやうしのない出がたり出づかい、作者のおもひちがひ、巳のとしもつゞいて不作、兎角此作者と、太夫本の相性あしきかと、ふしんにおもふ折ふし、作者の方より隙を乞、淨るり不作ゆへ斯成なとげて身退くは天の道と心得、三十石に夢むすび都の方へ登られしと也、凡上野是迄の淨瑠璃數百番有

○人一心に誠あれは、天道の惠招かずして來福仕といへり、豐竹氏ふけいきなる芝居、何とぞ珍しき物と、作者も相應にかきあつめたるかなそうし、北條時頼記といへるよりおもひ付、二三人よつて此外題を趣興に淨るり五段にくみ立ん、いづれも知惠を出されとざいふりまはせば、並木宗助安田蛙文、美若なれ共、淨るり一段も書かねぬ器量に西澤の下知に任せ、どをやらかをやら五段をつゝくり、切に最明寺雪の段、太夫本の出かたり嚴しく當り、卯月八日を初日とし、今月今日まで入詰年越の淨るりとなれり、是太夫本邪なく、眞直成る豐竹、一藝をくふうし、此上にも語様のこんたん有べき物と、寐る間忘れぬ心がけ、殊

に身を高ぶらず、我とわが藝みじゆく成とおもはるるは、藝の上手心の名人といふ物也、尤筑後名人なれ共、修行の行年を算へては、豐竹はやき立身何れも左にあらずや　竹本方聞て、段々の長物語、老人のくり事尤なる咄しなれ共、筑後時代には、町中今程淨るりもてはやさず、しかるに筑後といふ名人、かたりこなしかみこなして、今若人の太夫に呑こますの道理、此返答あるまひへいかう〳〵老人尤の返答おもしろし、今世上に竹本豐竹の門弟みち〳〵たりといへども、みじゆくの淨るり誰かもてはやさん、名人といはるゝ太夫なればこそ、東の西のともてはやすにあらずや、たとへていはゞ名〳〵の家職におなじ、我賣物我細工をあしきといふ者なし、先播磨より此流始まり、理兵衛、嘉太夫、筑後、豐竹と、流義少つゝちかひめありといへども、つまる所は播磨よりわかれ播磨風を語れば、いふ程かたるほど費そかし、各好ける太夫のふしを稽古し、名人といはれ給ふがかんよう〳〵

今昔操年代記上之巻終

今昔操年代記下之卷

目録

今昔操年代記下之卷

井上播磨少掾藤原要榮　死す
京都加賀掾宇治好澄　死す
竹本筑後掾藤原博敎　死す
豐竹上野少掾藤原重勝　存命

右四座の太夫本を淨瑠璃四天王と號す

○筑後芝居相續如何と町中門弟おもひの外、竹田出雲頓智發明より、國姓爺合戰といふ淨るりのおもひ付、門左衞門老功の一作、力瘤を出し、文句のはだへかるはしく書きまはしたる筆勢、おもしろく、淨るりは竹本政太夫、竹本賴母、豐竹萬太夫右三人にてあしかけ三年持ちこたへ、見物から子髷の道行口眞似せぬ人なし、筑後掾存命の頃あやつり淨るりしかく〳〵なかりしが、諸人歌舞伎芝居よりおもしろきともてはやし、次第〳〵にはんじやうする事、第一作者の趣興、人形衣裝、道具まで花やかにこしらへ、手をつくし美をつくせば、歌舞伎は外に成りて、淨るりの評判はしぐ〳〵つぢ〳〵耳かしましくおもひ存候

○近松門左衞門は作者の氏神なり、年來作り出だせる淨るり百余番、其内あたりあたらぬありといへども、素讀するに何れかあしきはなし、今作者と云はる人々、みな近松のいきかたを手本とし書きつゝる物也、此道を學ぶ輩、近松の像を繪書き、晝夜これを拜すべし、又あるまじき達人うやまひおそるべし、時に享保九辰年十一月廿二日、七十余才にして此世の見おさめ今はの時殘し給ふ辭世

近松門左衞門性は杉森、字名は信盛、平安堂巢林子、代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへて咫尺擧げてすン爵なく市井に漂ひて商賣知らず、隱に似て隱にあらず、賢にして賢ならず、物知りに似て何も知らず、世のまがひもの唐のやまとのおしえ有る道農妓能雜陰滑藝の類迄知らぬ事なげに口にまかせ、筆にはしらせ、一生をさへづりちらし、今はの際にいふべきおもふべき、まことの一大事は一字半言もなき倒惑、心に心の耻をおもふて七十余りの光陰、おもへば無覺束我世經畢ぬ

若し辭世はと問ふ人あらば

夫れ辭世去る程に扨も其後に
殘る櫻か花しにほはゝ
入寂名阿耨院穆矣日一具足居士
不レ俟ニ終焉期ニ自記
殘れとはおもふもおろか埋火の
けぬまあたなる朽木かきして
平安堂のながれをくんで一作なさるゝ人々近年出來

一紀海音 一兩年休足　二竹田出雲 手芝居自作
三松田和吉 一兩年是も休足　四並木宗助 當年より作也
五安田蛙文　西澤一風 今は老年にて心計

あらまし此通り淨るりの作者すくなきもの、當り淨るりは稀にしてあたらぬは道なり

竹本政太夫　筑後芝居の立者

○政太夫は中もみや長四郎とて、いまだ角前髮の頃より音曲を好み、あけくれ筑後風に心をよせ、まんまと淨るりに成し頃、豐竹京にて芝居興行の節、西澤この仁を招き、京都に同道仕若太夫方にて勤める、京を仕舞一座のこらず大阪にくだり、新地曾根崎の芝居にて、若竹政太夫と名をあらため兩年勤め、三年め出雲方へ住まれ、段々淨るり實のり功者と成り、今西の芝居にて筑後替りとならるゝは、日頃音曲に心かけふかき故、諸人稱美する事お手柄〳〵、此人の藝をたとへていはゞ、荻野八重桐におなじ、なぜといへば小兵なれども取まはりりゝしく、修羅つめなどかゆい所へ手の行くがごとし、別して段切を大事に、かけらるゝは上手藝のなき所、去るによつておざのどのとならべておせ〳〵の兵、音聲の非力はぜひなし身のお持ちやう銀持かたぎ、心すなをにして豐竹どのにおなじければ誰も知る人なし、あやかり者〳〵

竹本大和太夫　竹本芝居立者

此人生國は和州田原本の人なり、農業をすて此道を好けり、若かりしより竹本を學び、ついに床になをつて和州をめぐり、程なく出雲芝居に住み、舞臺に出でてかたられしは、天神記の天拜山のふし事也、先づ聲よくよりまはりおもしろければ、突出しより評判よし、今の淨るりを聞くに、おとし一流かはり、おもひ入にあてん事を第一となさるゝ故、見物のうけよし、たとへていはゞ嵐三右衞門仕だしにおなじ、何處やらびらついて又しやんとした處もあり、地事ふしを

藝に應じ、うれい事あはれに又おかしき筋あり、是その身其音曲の癖あるものなり、就中世話事よし、今にては政太夫と肩を並べ四分六歩六歩四分なり、折々とんきよなる聲出るはいかに、よい方へは釣るまじ、しかし聲大きにして、かたり出しはでなりと、聞く人おしなめ田舍に京とは此太夫と、町中の見物とつて譽めてとをしぬ

竹本文太夫

此太夫内名はふしみや五郎兵衞といふ商賣屋生立よりそろばんを枕とし、見一無頭歸一倍市より割出し、此一曲をまねびいつの頃より筑後芝居に出で、あるとしは豐竹をつとめ又西に有つき、今日まで音曲やめず、兩役にてかねを儲ける方便、いやといはれぬしかけ、先づ淨るりおとなしく、ふしをこまかに、詰修羅萬事巧者分也、たとへていはゞ、杉山勘左衞門同前の藝者にて、淨るりの一體を崩さず、本間にかたらるゝ故あたりめすくなし、當世ははすはなるをよしと仕、なれども本間の通りかたらるゝは師のおしへをそむかず仕込みの藝なれば、伊達なるよりかうたうなるがよし、此うへに三重のたぐひ、おもふ樣にあがらば誰にかおとらん、殘りおほいは一聲二こゑにてはんべるであんす

竹本式太夫

此人陸奧茂太夫門弟にて、余程巧者の太夫なれども心の如く音曲叮嚀なる仕出し故あたりめなし、聲よく淨るりのわけさつぱりと聞え、難ずるをたとへがたし、市のや重郎兵衞仕出しにて上下いため行義くづさぬいきかたつかうせり、心がけよくば次第〳〵に上洛あるべし、末賴母敷藝振り、今氣を付け給はねば立身いつをかごせん、唯つめ段切に心をくばりたまへと御見物申されしは金言哉

竹本喜太夫

生立ちは木津難波牛頭天王氏神、守りめあつてはやばやと筑後芝居にあり付き給ふ、尤も頃日の淨るりなれば、つめ〳〵、五段目の役付けなれども、上洛次第に役きまりよきものなり、淨るり語り皆よき場を第一に稽古仕、あしき所を捨て給ふは非が事なり、人けいこせぬ所を、よくかたりまはさねば上手の果に至りがたし、惣じて初心の間は、詰まはりを何んのかのとおもへど、旣に釋迦如來もあらゝ仙人を師と賴み、

難行苦行こけのぎやう、つもり〳〵て佛と成り、衆生たつとむにあらずや、爰を得心あつて精出したまへ、追付け上上吉に成り給はすに

竹本喜世太夫　豐竹上野座

此太夫以前はりま屋四郎兵衞といひし頃より、筑後風をもつはらかたり、其頃は肩を並ぶる人なし、第一聲よく、修羅つめのたぐひ嚴しく段切よし、聲に應じてはふしをはんなりとよし、此人道頓堀にて櫓をあげ、新地にていろ〳〵の淨るり出されしに、はか〴〵しからず中ば仕舞ひ、其後曾根崎にて座元を仕、文流作にて淨るりを出しけれ共、しか〴〵の事なく、陸奥茂太夫、竹本源太夫一つになりてかたられしを、是も立消して止みぬ、それより豐竹芝居にとしを重ね、午のとし休み、その暮よりつとめ給ふ、惜きは此音聲、せつしやあの聲あらば誰にかおとらん、是心がけうすき故と存る、近年の淨るり、前々のかたりやうとは違ひ、頭字おさへ字わかりぬ故、文句消ゆる樣子おもはるゝは玉に疵なり、心を付けてみがきたまはば、光の出まいものにあらず、よく〳〵工夫あるべし何と左にあらずや、たとはゞ、音羽次郎三郎諸藝の如し、のこりおほいはせりふつぼへゆかぬにおなじ、なれ共大鳥なれば下に置かれず、よく〳〵たんれんし名人の名を取りたまへとこん〳〵

豐竹和泉太夫

此人紙屋理右衞門といひし頃より此流をかたりそめ、西の芝居につとめ、夫より東に有り付き、豐竹澤太夫と云ひ、今は和泉太夫と呼ふ鳥の子、淨るりの器用はだは美濃紙なれど、めりはりのないが半切紙にひとし、郞事は芳野、杉原音曲のきれい成るは奉書におなじ、つめ段切修羅のたぐひ、男の延紙違ふが如くぬるし、景事道行のふしも相應に付けかねぬをとこ、音聲高からずひくからず、藝の一體花妻どのに同じく、きれいなると調子のいきかた同前、何とぞ此人のごとく萬事に心をつけ立身あるべし、今にては竹本頼母と、になはず枴中やたへなんにて候かしく

豐竹品太夫

此客人生ひ立ちから上野弟子にて外を見ぬ太夫、去年迄他國をかせぎ、享保十年六月頃、身替弓張月を少しの間助られ、其くれ十月晦日より上野芝居にあり付き給ふ、久々にて音曲うけたまはりしに、思ひの外

の上洛、聲よくはなやかに、乙大きにして聞きよし、淨るりの、體中々巧者にて、間ひやうし操りに應じよくうつる故、いよ／＼出來ばへ見物の受けよし、さるに依て近年のあたり役者澤村音右衞門と釣り合せて何とかあらん　かぶき方音右衞門との出合おもしろし、實惡武道事、せりふつめ合のたてり、いづれかつり合申ぞ、品方あふとも／＼實惡實のせりふ、三浦彈正、二階堂城之助のたぐひにて知るべし、音右かたに節ごとうれいなるか／＼　かぶき方ふしをは淨るりかたらねば存せず、しうたん事は其役なればおろかはなし、品方然らば此太夫も人形役者にあらねばたてりの事はぞんせぬ、巧者と間拍子はいかに、かぶき方かぶき役者の拍子といふは、舞ひ所作事也、こうしやはおとらじ、拍子も舞も所作ばかりにあらず、相手を取てつめひらき、間のぬけぬを以て、拍子利と申、然らばおせおせ又五歩／＼にて申分なし、兎角音曲のたんれん工夫あるべし

豐竹伊織太夫

此人よしのや喜右衞門とて、道頓堀に料理屋を商賣として居られしが、出火の後、豐竹座に住まれ、今豐竹伊織太夫と云ふ、聲よく、ふし事、道行のつれよし、つめ修羅のたぐひ、次第／＼に上洛し、いつまでも上野どのに付きて廻り、淨るり修行あらば追付け上手に成り給はん末賴母敷身のうへ、是によつて山本京四郞とつき合はして如何んといへば、かぶき方それはどうしたおもはくと云ふ、されば京四郞どのいまだ美若にして、ぬつと出られし舞臺つきどうも云はれず、され共行年なき故しか／＼の評判なし、追付け立身ある藝者、それによつて此人ならぶる事非がことならず、とかく藝者は善惡いはるゝ間がはなかのあるお茶、うまひあぢなひいかれぬは、めい／＼の損と知るべし、あなかしこ／＼

豐竹新太夫

此客も去年よりつとめ給ふ、元來商人にてありしが好ける道とて終に淨るり語りとなれり、時賴記のつまつま語られしに、見物評にかけぬは先づあしきにあらず、床馴れたまはゞいやみはのくものなり、先づかつかうより太物やにて、なんでもかでも御座れ／＼、間にあはさんと晝夜の本ぐり尤なる心がけ也、藝者にかぎらずかせぐにおひつかぬといふ事なし、いま

だ初心の内なればよしあしいふ事なし、跡替りの役を見て評を申さん、今にては此人の音曲どくにも藥にもならぬ藝者、兎角精の一字を忘れず、口のあかるゝ程あいて、音曲大きにかたり給へわすれたまふな

竹本國太夫　江戸出羽芝居

此國太夫、大阪天神橋筋農人橋邊にて、昆布屋彌兵衛といひし商人、仕似せの見世を振捨て筑後になづみ、雨の夜も風の夜もかよひ小町、なんなく淨るりの間にあふむ小町と成り、片時もはや筑後芝居へ出んと、あけくれ心關寺小町、ついに床に直つて語らるゝ、尤も淨るり小兵なれども、氣をつけらるゝ德には、ふしを地事よし、修羅つめのたぐひちと甲斐なき音聲、近年江戸にくだり一座の立者と成り、今國太夫と賞美せらるゝは仕合、此太夫と市川團十郎の藝とくらべて、いづれか甲乙あるべし、お見立の程承らんと申ける、仰におよばずくらべんも、役者はあいみたがいに事、仕方と身振り、音曲は雪と墨とのちがひあり、なれども此人おなじみの團十どのに相同じ、あたり役者の市川にあやかるための競べもの、出世の程はかぎりなし隨分氣をつけ名人の名を取り給へと夕告げの鳥が鳴く鐘がなる、聲にひかるゝ淨るりとみなみなあしをはやめける

豐竹島太夫

東西〳〵ちくとんばいほめまらしよ、此人堺ゑびす島より出現の男、御らうじ付けらるゝ通り、めんていにかみはしり、笑顔のよい公平作り、ちよつと見た所に相撲一ばんもひねりかねぬ風俗、なれ共人はかたちによらず、心はほんじやうほやりと憎からぬかたぎじやわい、ナア、此太夫生立より豐竹にかしづき、外を知らぬ淨るり太夫、然るに江戸座より達て賴まるゝ、元より修行の爲と巳の年のくれ江戸にくだり、國太夫と一所につとめ評判つゞいてよく、午ひつじの年もとめられぜひなく勤め給ふ、是藝の上洛ゆへなり、第一音聲にほひありて遠音をさし、修羅詰のたぐひきびしく、文句のあやぎれよく聞ゆる、是第一也、尤丹前歌事の類少し申分あれ共、だん〳〵上手に成給ふうへは重ねて申さん、今此位の淨るりをかぶき役者にたとへていはゞ、松本幸四郎なりとはいかに、はて松本のあら事、嶋太夫のはしかい音曲、松本

の丹前と嶋太のふしと、松本の實事と嶋太のうれいと、松本のきりやうと島太の器量とは、歌舞伎とあやつりのちがひ、島太に眞鳥かつら大口ひたゝれを着せ、しやく持ちて拍子をとらし、大友の眞鳥の三段目より承りたい、神八まんどうもたまるものではハッアあるまいと敬て申す

豊竹三和太夫

此人内匠理太夫の忘れかたみ、稚名は勝次郎といへり、十五歳の時、辰松八郎兵衞同道にて、和歌山へくだり出かたり生玉八景を語られし事あり、夫より淨るり修行の爲め諸國にくだり、卯の十一月朔日よりはじめて豊竹座に付き、三和太夫といへり、第一器用者にて手跡よく、三味線ひく、ふしのうけ取本ぐりはやし、行年つもらねど見物難をいはず、三年上野の膝元さらず、大鳥にもまれし故音曲に實のること其身の仕合、第一地事景事道行のたぐひよし、つめ詞少しつゝ申分もあれど、美若に應じては上手ぶんなり、音曲一通りなんでもやらるゝ、是三弦彈かるゝ德にて、間拍子よし、此人と嵐三五郎とは當初下り初顔見世先立てあらしの評判あたりのよし、此人におなじく萬事器用なる藝者、あたらいてはと、おもふほしをくらはせし金具の揚弓、三和どのも是にあやかり是に對して御評判、お江戸の若い衆、すみから角までつらりと賴み上まする

豊竹染太夫

是も豊竹門弟にて、いまだ未熟成し頃より豊竹流をかたり、餘程音曲實のる時分江戸に下り、辰松八郎兵衞座を勤め、夫より下總の長子にくたり、芝居を始め、御贔負の若衆、其外あまたの御見物を引き請け、あたり嚴しく又江戸に皈り、出羽芝居を勤め給ふ、行年積りし故淨るりのいやみぬけ今は聞きよし、前方より詰語り、修羅のたぐひよし、ふしをも相應にかたらるゝ、なれども本地のそばをとをざかり給へば、つまる所音曲我儘なるべし、坂田半五郎どのにあやかつてほと拍子こんたんあるべし、諸藝仕上げ追付け故鄕へは錦の土產、今一度難波の一曲一かなで所望仕り承りたい事でごわります

竹本森太夫

此仁も大阪より下りし太夫、此芝居に足を止、今森太夫と御見物の口にかゝり給ふも淨るりのゐとく、當

代此流義口眞似すれば、野の末山の奥迄も下に置かず人々もてなす事、竹本の影おろかに思ふべからず、同藝者にてもかぶき役者獨旅して諸人もてなすことなし、爰へもかしこへもと呼まはるは義太夫ぶしきかん爲也、その上相應のこれしき取て能い事だらけ、かうじ／＼聲を失ふもの也、此人の音曲未だ實のらねど、行年にしたかひ段々上洛致すべし、とかく本ぐりを大事にかけ、朝夕稽古本をはなさす近學あるべし／＼

豊竹倉太夫　辰松八郎兵衞座

浪花堀江に住宅し、豊竹上野の門弟と成り、をりふしは床にあがつて稽古し、餘程語らるゝ、内江戸辰松參り合せ、淨るりの音聲を聞き、給銀のおりのり究め、武州に同道し、初日より評判よく倉とのゝ仕合せなれ共、折々とんきよなる聲出るが氣の毒、是を大阪にて聞きしより耳にかゝらぬ由、珍重／＼、兎角修行がかんじんかなめ、今少し心を付けて語り給はゞ、段々立身あるべし、世話事丹前事の類かいなし、詰しゆら事よし市川團藏と組合して、あらいことと武道の詰合立りおなじ、市川は手取りの役者、此人はみじゆくの藝、しかし辰松座の立者なれば、ちよつと團藏どのをかりまして傍らに置くばかり、せつしや不調法は御免／＼

竹本勘太夫

此人道頓堀嶋の内にて疊屋町の何某、仕似せの商人成しが、好める道とてぜひなく淨るりにおもひそめ、終に竹本勘太夫と宿札打ち弟子も少し、ある時はかぶき芝居に出で、淨るり狂言のあひ／＼を語り、それより江戸に下り、辰松座にて勤め此芝居の立者、見物のあたりも大てい、尤巧者といふにもあらず世間並の淨るり、若鳥なれど大阪から江戸へ飛で飛び損なはず、今日迄羽をのして乙にはあらず、かん太夫ともてはやさるゝは小鳥なれ共囀よき故也、修羅詰節事世話事大てい難ずることなしたとへば市村竹之丞にあやかり、出世するやうのこんたんあるべし、市村どのも年若此人も美若、若い互、竹之丞どのゝ如く御贔負を受け隨分修行の功を重ね上手の果に至り給へとしかいふ

竹本佐内

此人ちくごの甥のとの也、竹本存命の貌見ぬ人、此佐

内どのを能見給へ、其儘の御影割次にのたとへ、お良の似ぬは苦しからず浄るりがあやからしたい、なれ共、音聲の筋どこやら伯父くさい、あの聲を以て筋事何か心かけあらば、筑後二代の太夫ともてなさんに殘念、定めし御如在もあるまじけれど、心より發らぬ道心末とけかたし、惜む事と此人の噂はかり申出しぬ、一とせ豐竹座に住み、節こと一つ宛毎日がへに語られし時は、筑後の最來かと思ひ出しらくるい仕りぬ、是も伯父御の影おろかにおもひ給ふな、いつしか江戸座に有り付き、今日迄首尾よく勤め給ふ事お手柄〳〵、此上にも精を出し稽古をはげみ、追付上手と成たまへ、たとへていはゞ此人の音曲、勝山又五郎と並べおせ〳〵か、いひや何も角も勝山どの

竹本今太夫

近年筑後風はやり出し、江戸表の浄るり太夫あるいは土佐節、半太夫節、永閑さつま、此類の浄るり消え消えと成ぬ、今若衆專ら稽古なさるゝは、竹本豐竹風、此太夫もと江戸の住人成がこつずいより此流れすき人となり、辰松座に出で大阪下の太夫同前に語らるゝは、奇特とやいはん末頼母敷、浄るり今善惡の筋のべがたし、素人細工には御器用、とくと上方の太夫のかたりやうを聞き節配り、詰の差引き覺へぬいて、追付け上手に成り給へ、大阪から抱に參る氣ざし、急使ゆへさつと一筆爰にてとめ畢ぬ

△右の外浄瑠璃太夫、江戸京大坂に滿ち〳〵たりといへども大阪江戸の芝居へ出給ふ計りをのせ其外は略す

享保十二のとし
ひつじの孟春吉辰

攝州大阪南木挽町
正本屋
作者　九左衞門
開板人　同　前

今昔操年代記下之卷終

竹豐故事序

時津風浪靜成難波の濱昔しの京と名に高き高津の宮の高臺に登りて見れは煙立茶屋はいろはの四十八櫓は八ッの定芝居爰繁榮の大湊深き惠や道廣き道頓堀の片邊に住居する老人有年壯き砌りより竹本豐竹の淨瑠璃を好て語る事は不得手なれど聞事は好者也幾年か東西の淨るり操の替りを見放したる事もなし住家より程近けれは芝居の木戸口へ成共毎日通ひ外題看板にても見て歸らねは氣分勝れす餘り此道を好る故知れる友連異名して筑後越前の頭字を取筑越翁と稱しける獨り住身の氣散しと欠天目に德利引寄せ一杯の酒に醉を催す酒呑童子の道行月に分れて月に行實哉盧生か見し夢の榮花の程は五十年假の浮身の樂しみと雪の段を副臥とし一睡せるぞ豐かなれ時まだ東雲の頃成に若き者共數十人入來り先生は御內に在ますかと案內す主じはむくくと起きて戸を開き是は是は未た夜も明さるに各々打連立ての御越は芝居行と推したり初まる迄は余程間も有ぬらん先つ烟草にても參り緩々と御出あれして各々方は筑後へか越前へかと尋ぬれは大勢の中より親父分進み出否此人數の中にも豐竹へ參る者も有又竹本を見に參る人も候か斯同道して宿元は出ましたれど西贔負の東連中のと二組に別れて動もすれば喧嘩を仕出し姦しい事てこさります先生には此道の御粹方故芝居の譯を能御存の義なれは若い者共か片意地成贔負論を致さす納得仕る御示しを賴みます然れは先今日は芝居行を追ての事に致し幸ひ能次でなれば淨瑠璃操の由來物語か聞まし度存ます若い衆何れも何とくと尋ぬれば皆々聞て是は一段と能思ひ付御苦勞なから御咄を賴み上まする筑越翁聞て同氣相求むる御所望幸某も徒然の慰み然らは物語致すへしと大字七行の稽古本二三札と卷物一軸とを手持て座上に居り此來歷の義は余程年經りし事と云又物覺薄きは老人の習ひ傳へ聞しに違し品も忘れたる事も繁からん併し所班らに咄し申さん聞給へと破れ扇子を叉に搆へて聲繕ひし東西くゝ東ッ、西ィ

寶曆第六丙子の年　　　　浪速散人一樂

引用書目

諸社神詫記　古今集
和歌雜題　和名集
增補鐵槌　下學集
羅山文集　南嶺子
指　南　枯机集
孟　子　史記正義
同般本紀　顏氏家訓
周易畧註　爾　雅
老子經　周禮註
毛詩註　文選註
事類全書　風俗通
書言故事　紀　原
小補韻會　調音秘決
名談集　首楞嚴經
法界次第　圓機活法
白氏文集　世事談

竹豐故事目錄

竹豊故事巻之上

芝居濫觴並薪之能付櫓木戸等之事

○抑芝居と云名目の起りは人皇五十一代平城天皇大同三年戊子の二月南都猿澤の池の邊り成地面に大き成土穴出來て其うちより黑煙夥敷立登り隣國に覆ふ其毒氣に觸たる老若男女悉く疫癘に侵されける依之時の博士を禁庭に召さる占者考へ奏しけるは此穴より出る所の煙は地中の陰火也陰火亢ぶり逆上する則は萬民惱むの理に候へは陽火を以て是を制し除かせ給ふへき由を奏聞しける故卽ち彼穴の上に薪を積て燒立ける此術に因て煙も立止諸人の病惱も平癒せしとかや猶又興福寺南大門の前なる芝の上にて翁三番叟を舞はせ其邪氣を秡ひ退け給ひけり今の代に至りても其故實に任せ薪の能と號し芝の上に居て執行せり其遺風を以て其後は猿樂田樂能相撲舞歌舞妓上る操を勤る場所を何れも芝居と號するは此所緣也御免を蒙りて興行するには櫓を揚る櫓も棧敷もなきは場多芝居と云也城戶と云は城廓に順して大切成名目也後世城の字を恐れ木戶と稱す見物人の木札を改め取一人宛〆入る體鼠の小き穴を潜るに似たる故俗に鼠木戶と云習はせり櫓の上に梵天帝釋を勸請し障碍災難を拂ふ祈りとす鑓を並ふるは非常を禁しむる道具也慶長の末に歌舞妓芝居始り寬永十二年に嶋田萬吉と云名代にて京都の北野祇園四條五條に於て淨瑠璃又歌舞妓をも興行し廿日卅日程宛勤ける由山城名跡志に見へたり其後承應三年甲午の年よりも京江戶大坂三个の津共に定芝居を御免有し也

淨瑠璃操之來由並太夫受領之事

○扨淨瑠璃の濫觴は永錄年中の頃織田信長公の侍女に小野の小通と云し秀才の艶女有古への小野小町をも欺く計の美女成しとかや信長公御生害の後は太閤秀吉公の御簾中に召出され近仕し侍りぬ昔紫式部源氏物語を作り給へる例に習ひて草紙を作り出せり其趣向は往昔左馬頭義朝の末子牛若丸幼年の間は鞍馬山に在ませしが御父君の仇敵平家を討亡ほさんと密に彼山を忍ひ出金商人橘次信高と云し者を語らひ奥州伊達の秀衡を賴み彼方に下向し給ふ折節三河の國矢矧の長者か亭に宿り給ふ彼舘の娘淨瑠璃御前と忍

ひて契り給ひし舊事を彼小野の小通草紙物語に作り畢ぬ此矢矧の長者に子の無ことを歎き同國碧海郡峯の藥師如來に立願して儲けたる娘成故淨瑠璃御前と名付藥師瑠璃光如來十二神將の緣を質り十二段の草紙を作り淨瑠璃物語と號せし也後鳥羽院の御宇に信濃前司行長入道と云し人平家物語を作り生佛と云盲眼法師に此物語りを敎へ節を付琵琶に合せて語らせけり彼生佛が生れ質の聲の風を今の琵琶法師は學ひたる由徒然草に見へたり是に例して岩船撿挍と云し琵琶法師音曲に達せし名人なるが此十二段に節を付たり又瀧野撿挍角澤撿挍の兩法師三味線に合せて曲節を語り弘ける天正年中の末薩摩治郎右衛門と云し者角澤撿挍より節を習ひ傳へて攝州西の宮の傀儡師を語らひ木偶に仕形をさせ十二段を語り始めける永祿年中に六字南無右衛門と云し女太夫京四條川原に於て淨瑠璃操芝居を興行せり夫より次第に弘まり珍敷慰成とて大名高家の奥方所々へ召出され後には大閤秀吉公の御上覽にも入剩さへ慶長年中には禁廷へ召出され叡覽に及ひしより淨瑠璃太夫に受領を勅免成し也

三ヶ津淨瑠璃流布并古流盛衰之事

○慶長年中の末より江戶に淨瑠璃繁昌して油屋茂兵衛鳥屋治郎吉四郎與吉等の太夫有別して泉州堺の住薩摩治郎右衛門江戶に立越大に名譽を顯はし繁榮し後に法體して淨雲と云り是淨瑠璃太夫の根元也此淨雲の子も又薩摩治郎右衛門と號し相續きて名人也淨雲弟子丹後太夫丹波太夫源太夫長門太夫右の四人何れも虎屋と號せり正保慶安の頃四天王と稱美せし名人也次に近江太夫法體して語齋と號す江戶肥前同外記同土佐虎屋永閑江戶半太夫剃髮して坂本梁雲と號す此入大薩摩以來江戶近世の名人にして其名高し河東流と云も此末也

○京都に昔は淨瑠璃葉流（はやら）ず說經與八郎歌念佛日暮林清同弟子林故林達等を翫べり寬文年中に江戶虎屋源太夫上京有てより淨瑠璃繁昌し常芝居も出來たり源太夫弟子同喜太夫同相摸太夫越後太夫續て勤らる源太夫弟子山本角太夫延寶天和の頃一流を語り出し大に繁昌し山本土佐掾藤原房正と受領せり角太夫弟子山本長太夫治太夫八太夫等名高かりし中にも治太夫一流を工夫し芝居を興行し松本治太夫と一派立られ

たり是貞享元祿の始め頃の事也
○虎屋源太夫門弟伊勢嶋宮内一流を語り出し其弟子佐太夫相續し北野に於て常芝居を興行し後に剃髪して節齋と號す
○伊勢嶋宮内の弟子に嘉太夫と云人は紀州和歌山の生れ也元來謠に達したる上に伊勢嶋の風義を學ひ一流を建られたり天和貞享の頃より芝居を興行し次第に繁昌し宇治加賀掾藤原の好澄と受領せられ益々宇治の一流を葉流し新作の淨瑠璃を作らせ稽古本大字八行の正本を始て板行させ謠本のことく節章をさし初しは此加賀掾根元なり此人謠の音節を和らけ語られし故呂律甲乙連續して今の世迄も其遺風殘れり中頃は大坂へも下られ始終卅年余京にて宇治の一流を葉流せ寶永八年卯の正月廿一日に死去せられぬ法名は自證院本淨道融居士と稱し行年七十七歳也子息宮内相續て芝居を勤られぬ門人數多の中野田若狹富松薩摩立花河内宇治相摸等何れも譽れ有し也別して宮松氏師匠の跡を相續在て芝居繁昌せり是寶永正德享保の始め頃の事也併し當時は此流を語る人もなく絕果たる同前殘念の至り也

○都太夫一中と云し人は元來本願寺派京都或道場の住職成し由若年の頃より淨瑠璃を好み山本土佐掾松本治太夫等の流義を和らけ一流を語り出し終に相傳の寺を退き淨瑠璃太夫と成寶永正德の比一中節とて他國迄も賞翫せしなり亂髪にて紋紗の十德を着し白練の長袴少刀を指て出語りを勤められし也子息も都和泉掾一中と號したり
○都古路國太夫は一中の弟子成故始の名半中と云たり後に國太夫又豐後と號せり是一中節を又々取直し一流を語り出し三ヶの津は勿論諸國の隅々迄流布したり併し他の流と違ひ新作の五段物時代事抔は語られす世話事を專はら語られし也門弟數多在し內可內辨中等何れも名を顯はされし
○大坂表には前々虎屋源太夫表具又四郎道具屋吉左衞門等の太夫達語られしか共指て繁昌と云程の事もなかりしに元祿年中の比京都山本土佐掾の門人岡本文彌伊藤出羽掾芝居にて一流を語り弘められ大坂中文彌節とて持流しぬ殊更山本飛騨掾手妻人形の所作事操抔取雜へ見せられし故其時代の見物衆大に悅ひ繁昌し大坂中は云に及はす遠國迄も名譽を顯はされ

たり其門弟岡本阿波太夫も相續て世に鳴られし也此人聲柄と云甲乙共に揃ひ上手成しか其時移り年變りて一向當時は用ひず惜き藝を埋もれ仕廻に終られたり此外江戸京の古流皆々絶果當時は兩竹氏の流義諸國に弘まり繁昌す尤江戸の半太夫京都の國太夫等の流義計り殘るとは云共是等は座鋪の一興又は歌舞妓の所作事或は舞子の地道行等の會澤に而已語りて段物操芝居等には曾て用ひず

井上播磨掾並清水理兵衛之事

○寛文年中大坂に井上市郎兵衞と云人有生得音聲强敷古流の節譜に心を付淨瑠璃の道に工夫を凝し風と江戸萬歳の音に意を付て體となし自然と珍敷一流を語り出し終に芝居を興行し程無受領して井上播磨掾藤原の要榮と號し名譽を顯はし世に播磨流と稱美せり此人色々に音聲を遣ひ分品々の節を編出されし遣風今の代に傳り竹本豊竹共に此流を用ひられし上其流を汲太夫達井上氏の節事を稽古せずと云事なし其景事數多有中に掛物揃歌仙の段宮嶋八景鹽釜の段晴明神處跡目論の馬の段屏風八景七夕祭五天竺長生殿四季の段是等の類ひ員ふるに暇なし此芝居の繁昌を浦山敷思ひ京都の銀主井上氏の一座を買切四條の芝居を勤め居られし内風與病氣付五十四歳にて死去し都の土と成られぬ貞享二年丑の五月十九日法名は夏月了音日弘とかや傳へ聞し

○播磨掾門人多き中別して井上市郎太夫清水の理兵衞等は芝居をも興行し名高き太夫也就中理兵衞と云し人は安居天神の邊に住居せる料理茶屋成しか此道に執心深く聲柄能然も功者に能語られ井上氏の奥義を能呑込れし故播磨掾死後に花香失ず諸人今播磨とそ持流しける後に剃髮して伴西と號せり

竹本筑後掾來歴並同播磨掾之事

○攝州東成の郡天王寺村に五郎兵衞といへる農夫有生得淨瑠璃を好み然も聲柄大音にして清潔かに甲乙地合自然と兼備せし大丈夫の生質也井上氏存命の間の淨るりを能學ひ次に清水の理兵衞に彼流の奥義を習ひ傳へ且亦其比京都に名譽を顯はされし達人宇治加賀掾に立入て音節の秘術を受て執行し古風を仰て心の師範となし肺肝を碎き鍛錬を盡し終に一流を語り出し名を改めて竹本義太夫と號し貞享二年乙丑の年道頓堀に芝居を興行し鞠捽の内に篠の丸を付たる

櫓幕の紋所是竹本氏出世の始なり其上近松門左衛門新作を編出し追々面白き趣向と云義太夫の語り盛見聞人此太夫ならではと持葉流しぬ殊更竹本筑後掾藤原の博教と受領を申請繁榮の譽れ四方に輝けり元祿年中の末竹田出雲掾竹本氏の座本となられ人形操道具建に至る迄美を盡さるゝにより益々繁榮して流義弘まりぬ併し定命限り有て正德四年午九月十日行年六十四歳を一期とし終に死去せられぬ法名は釋の道喜とぞ稱しける一生涯の中其名高く死後に至つて名譽を四方に顯はし世擧つて義太夫節と稱美し諸國一圓に此流を學び繁茂せり

○竹本政太夫と云人は大坂の出産中紅屋長四郎とて未前髮立の比より淨るりを好み竹本豐竹の流義に執心厚く滿間と藝に仕負せ若竹政太夫と號し始めて豐竹座を二年勤めらるゝ内節譜に心を付て工夫せられ段々と淨瑠璃に實のり三年目に竹本座へ住て立物と成筑後掾の跡替りを勤らるゝは兼て心懸の深き故と衆人の稱美淺からず夫より次第に立身在て竹本義太夫と變名し相續て播磨掾藤原の喜敎と受領せられしが不幸にして延享二年乙丑の七月廿五日に行年五十四歳にて死去せられ不聞院乾外孤雲居士と稱し冥途の太夫となられしは扨々殘念〳〵又大和太夫と云し大音の名人有若年の砌より竹本座を勤め故政太夫と肩を並べられし大立物成しが惜哉藝盛りに此世を去られて是非もなし此外陸奥茂太夫多川源太夫竹本賴母幾世太夫内匠理太夫和泉太夫河内太夫其余上手分の語り手在しか共何れも故人となられ無念殘念

竹豐故事卷之上終

竹豐故事卷之中

豐竹越前掾來歷並江戶同肥前掾之事

○豐竹氏は大坂南船場の出產若年の時より井上竹本の流義を學び家業を打捨淨瑠璃に心を籠めて工夫を凝し終に達人の名を世上に顯はされぬ世に冠たる器量の驗しにや音聲天然と格別に生れ質れし上衆人に秀でたる器量備はり十八歲の比より竹本采女と號して芝居を勤められ程なく豐竹若太夫と變名し暫時は竹本氏と一所に務められしか共壯若の時より別に芝居を興行して段々と立身有豐竹上野掾より再轉して越前少掾藤原の重泰と受領し益々名譽を世上に陣し晩年に至り功成名遂て隱居せられし後も芝居の繁榮町中の贔負彌增れり年齡八十歲に近けれど長壽の上堅固也斯入納の連續したる果報人は當道に於て古今例なし

○江戶の豐竹肥前掾は元來大坂の出生也若年の比より此道に立入晝夜の修行怠たらず越前掾に隨從し新太夫と號して勤め居られしか享保年中お江戶に立越程無芝居を興行有て繁昌し次第〳〵に町中の贔負強く豐竹肥前掾と受領し剩さへ芝居迄求られし由大き成御立身猶又定芝居の淨瑠璃薩摩座辰松座は休の時も有ぬれど豐竹座計りは絕せぬ繁昌にて相續せらるるは德の顯はれし所也三个津に古來より名人の太夫衆數多在しなれと芝居主と座本と太夫との三つを兼備せられしは京都に宇治加賀掾大坂に豐竹越前掾江戶には豐竹肥前掾との三人計りとの噂先以目出度そんしまゐらせ候

竹豐東西之流芝居繁昌之事

○竹本豐竹の流義は時に合ひし淨るりと云つへし其證據は古代に流布せし江戶の薩摩、土佐、外記、半太夫等の流京都の山本、宇治、都一中抔の節大坂には伊藤出羽掾座の文彌節は諸國の浦々隅々迄も葉流(はやり)遠國邊土の西國順禮の衆中京都にては御內裏樣大坂へ來ては出羽樣の芝居を見て歸らねば西國したる甲斐もなく死ては焔魔大王の前にて云譯の無樣に有難かつて持賞しけるに今にては其名代さへ無成ぬ勿論冷泉網戶平家說經歌念佛歌祭文抔云物は聞知りたる人も稀稀にて只兩竹氏の流義而已諸國一圓に流布せるは當

流の大き成矩摸と謂つへし猶又古来の浄瑠璃は文句短く只有邊懸り成事にて左而已語替つたる趣向もなし操道具も麁末成仕方にて大方は黒幕と山䕃とにて仕舞ぬ人形の衣裳は金泥の摺込摸様女人形は紅の表に淺黄裏抔にて事足りぬ元来足付人形抔は曾てなかりし事也其後次第に操芝居繁昌せるに付道具建衣裳等漸々に向上に成別して竹本豊竹両座と成てより東は西に負まし西は東に勝らんと互ひに勵み出来益々芝居繁榮し浄瑠璃の作者は種々様々の趣向を工み出し道具建にも金銀を惜ます金襖にて舞臺を暉かし或は數寄屋懸りの粹成思ひ付に智恵袋の底を振ひ人形の衣裳には縮緬緞子繻子金襴等にて美麗を盡し詰人形の外は皆々足付と成出遣ひの外は介錯足遣ひ立懸り歌舞妓役者の所作より増りて天晴見物事也併し西か東か一座計りにては斯繁昌もせまじ當時は町中の若い衆豊竹講の竹本講のと號し毎月掛錢を集め置替り淨るりの節進物の入用に仕給ふとかや扨々奇特千萬成御心中益々信仰なさるべし

名人上手下手三品評判之事

〇猶又次でなから故人達の名言共を思ひ出る儘に咄し申さん故陸奥茂太夫多川源太夫豊竹幾世太夫竹本播磨掾同頼母大和太夫和泉太夫河内太夫以下其時代に名人と呼れし太夫衆も筑後掾越前掾の兩元祖に及ふ音聲は壹人も有へしとは思はれす兩祖師は天性自然の達人成故に御句甲乙偏頗の輩の師範には成難かるへきか其故如何となれは斯る衆中の師傳を受得ても音聲不都合の輩は其流を直寫しに語る人は稀成へし喩へは麁相成木地の道具を上手成塗師か塗上たると又島桐さつま杉抔の木工目木地道具との違ひ有かことく成へし兩元祖は木地道具のことし其外の上手分と呼はるゝ衆は皆下手を塗上けて能仕立たる上手成へし夫故に今の世に譽れ有衆中は皆下手を塗直して能藝にする筋を懇鍛しての上素人の弟子中に教へらるゝ故に此理を以て考れはヶ様の太夫衆を師匠と頼み稽古せられは利方能からんと存せらる故竹本播磨掾當時の豊竹筑前掾豊竹駒太夫、竹本錦太夫等は音聲兼備の達人と云には非されと其切瑳琢磨の功を積て名人と譽れを取られしと存る兎角上手分と呼るゝ太夫衆は何分にも生質の器量薄くては名は揚られまし又都ての藝者に名人と上手と下手の三品有先つ

名人と云は其一道に生れ付ねは達人名人抔といふ場には行屆き難かるへし下手にても骨髓に徹して其藝に執心深く修行の功積りなば上手と云迄には成へき也名人に成へき淨るりは未だ功も無内より程拍子の間合能開語譯能聞へ清潔なる音聲なる上序破急の氣轉取り廻し能語らる人は名人になるへき器量兼て見へ透物也然れ共其名人と成へき仕出しの淨瑠璃なれ共稽古修行に精の入ざるは惡備に成上手分と云場迄も行屆かず終る太夫衆も有し也又硬付て當りを取らんとのみ思ひ語衆中は大方下手分の爲業也顏氏家訓に曰上智は敎へずして成下愚は敎ふと云共益なし中庸の人は敎へされは知らすと有此語實に宜成かな所詮名人と云は藝の道堪能にして其爲す業自然と至極の場に至り感應見物の心魂に的するを云成へし故竹本筑後掾同播磨掾隱居豐竹越前掾三味線故鶴澤友次郎人形當時の吉田文三郎等の類は神化不測の名達人と稱して誰か非言有らん哉次に上手と云は夫々の業を能なすを言也併し上手なれとも名譽の少き人も前前に在し故陸奧茂太夫竹本賴母和泉太夫等也又上手の至る所にて名譽在しは故河内太夫當時の竹本大和掾同政太夫等成へし又上手分の中にて大丈夫成聲柄は見物の請る掛聲も多く是等の衆は時に合たる名物と云べし故竹本大和太夫當時の豐竹若太夫等を云べきか何分上手と呼るゝ太夫衆は數無こそ

名人之太夫達弟子中へ敎訓之事

○井上播磨掾淸水の理兵衞に示されて曰淨るりの一體秋は隨分聲花に語るへし是人の陰氣を引立んか爲也春は引締て和らかに語るへし人の氣浮立時なれは引締ざれは人の情寄らす時の氣に乘して和らかならされは人の情に應へ難しと敎訓せられし由是に依て思ふに增補鐵槌に北村季吟の曰呂は凡て和か成音也律は立て硬き音也唐土の音聲は和らか過て聞分かたし日本の言語は淸濁分明鮮然にして剛く聞ゆる唐土は呂の國也日本は律の國也是和漢呂律の不同呂は陰律は陽也和朝には呂は春に用ひ律は秋に用ゆ唐土は是に反すと云云依之見る則は井上氏も此理に達せられし名人と覺ゆ

○宇治加賀掾門弟に敎訓せられて曰淨瑠璃を稽古するに面白氣なく高き聲有美敷けれ共生得低き聲有大音にて下手なるは執行すれば上手に成へし一體小音

にて紋切のせぬ音聲は何程心懸ても其甲斐なかるべし又如何樣成上手成共我藝に自慢の心か有て語られは淨るり悚縮て聲花ならぬ者也と示されし

○竹本筑後掾へ陸奥茂太夫初心の砌問て曰女の詞は如何心得て語り可申や筑後掾答て曰第一に傾城の詞を能合點して語らるへし漂々と語れは懦弱に聞へて下品也只挨止なく蓬然と柔從成言葉を能々考へらるへし是さへ語り胝娗るれは外々の事共は皆語り口かるへし其故如何となれば語る處の者元來男成故佞としたる事は生質に持て居る故也次に心得へきは高位成御方の詞をば能勘辨せらるへし貴き御方の詞成とて位を取過て語れは至才らしく成て聞くるし此段稽古に工夫せらるへしと敎訓有しとかや

○豐竹越前掾門弟和泉太夫河内太夫等に示されて曰藝に精を入ると云は我役割の場を能工夫して稽古に飽迄精を出し扨床へ上りては心を安らかに思ひて語るへし稽古に精を入てさへ置ぬれば易らかに語りても少も間拔はせぬ者也兼ての工夫に心を盡さす床にて計り精を入るれは力身立行詰りたる樣に聞へて賤し其上操への移り人形の働き迄が不都合に成と敎へられし由傳へ聞たり

○加賀掾門人宇治甚太夫伊太夫寄合談せしは師匠の語らるゝ節所は見物衆極て讃さると云事なし我々は隨分精を入大事に語りても見物衆の懸聲なきは合點行すと咄し合けるを加賀掾聞て曰皆の衆は語り出すと否や讃られんと而已思ひ始終面白樣に語らる故要の場に至つて聲疼み聞ゆる故讃度ても聲の懸られぬ樣に成也某しは唯何となく安らかに語り節所要の場處に至りて精を入語る也始終共見物衆の掛聲を取らんと而已心得は肝心の場當るへからすと云云斯る示しを傳へ聞れしにや又自分の發明成や故竹本播磨當時の豐竹筑前掾等は此敎訓の理に合ひし語り方の樣に聞ゆるなり

○岡本文彌の曰荒事を語る時は上るりの文句相應に強みを引張て語るへし上邊計りを語り弁へても人形の働きと相應せす心と形と二つに成故當り目なしと云れし由尤成理也併し事は一圖に計り了解すへからず或太夫酒の醉の場を受取て語られしに床へ上る時に臨んで茶碗酒を二三盃呑て語られしに一段と見物の請能出來晴せしとかやケ樣の人に若し手負の場抔

を語らさば床へ上る時毎日肩先にても二三寸計り切られて後に語らるや、笑〳〵何樣の場成共只、心の工夫に有へき也

淨瑠璃語り萬心得之事

○芝居を勤め給ふ太夫衆は文句の淸濁り節付等にも心を付給ひて能相の無樣に心得給へかし物置納屋の連子は破れても人目に立ず座鋪の障子紙は少の破れにても見苦しゝ元祿年中に岡本文彌の語られし上るりに老女の戀慕せる段の文句にしらかみすじに油付と云所を岡本氏は白髮三筋に油付との開語に語られし也虎屋源太夫此所を難じて曰此文句作者の心には白髮筋に油付にて有へし如何なれは三筋や五筋の髮の毛には油を付る事は成まし勿論三筋計りの白髮は目にも見へす手にも懸るまし併し文彌は天性の妙音にて何事も聲にて押せば是非に及はす、聲二節と云なれは文盲にても時の譽れを取し人也と云云故實を知り顏に自慢せられても聲柄の甲斐なき人を喩へて云は智惠有人の貧乏成に同じ不都合にても聲の能語り手は有德成人の阿房に同じ賢くて金持たらんは猶以て好ましかるへじ然れば聲の能を頼みにして執行の薄き太夫衆は名人と云には成難かるべし

一藝者の身の上計りにも限さる事なれど運の能と惡敷と有先運惡敷人は至極の上手なれ共時に合すして用ひられぬ身の上も有或は自分の器量を顧みず古實を守るが能と計り心得筑後越前兩元祖の語られし通を直寫しにせんと而已思ひ語らるは了解違ひと云成へし斯る人を喩へて云は學問に能達したる僧の談儀の下手成と同意也佛の本意計り說て方便說を雜へざれば聽衆眠氣出次第に參詣も薄らく者也而れは何を以て衆生に濟度利益を施さん哉機に因て法を說と云なれば此段淨瑠璃に引當工夫有べし併し芝居を見淨るりを聞は欝氣を晴さんが爲の慰み事なれは兎角して成共見物衆を悅はさんと名譽有し太夫達の眞似をし又は歌舞妓役者の詞色を似せ或ひは放廣にて當りを取らるゝは本道の當りとは云難し道外がましき語り方は場の見物衆への當りは有へけれど棧敷に居らるゝ衆の耳には悅はれまし何とやら此近年に及ひては兩元祖の語り弘められし遺風は薄らきし樣に聞ゆる也

五段續語り場役柄之事

○連中間て曰浄るり五段續拾壹貳幕の内何れの場か大切に候哉、筑越翁答て曰是を五段に綴るは能の番組に同じ初段は脇能貳は修羅三は葛事四は脇所作第五は祝言也大體是に表せる物也其内第一太夫の重んする所の役と謂は大序と三段目の切第二は四段目の切と道行第三は二段目の切と三段目の口也第四は初段の切と四段目の口也又出語りは三段目の詰と同敷大切成役也其外作趣向に依て景事抔に限らす此余の所にも要とする能場所有べし古來より兩元祖大概此意を以て勤め役割をもせられたり右に談するごとく大序は一座の立物太夫の勤めらるへき第一の大役也先つは其日の祝義と云次には見物衆への一禮の爲也尤一部の始成は末々の輕き衆には語らせ間敷場也爾雅の釋詁に曰序は叙也緒也と然る則は其綱要を擧る事繭の絲を抽つるか如しと云云序と云字を糸口と訓也其糸の口亂れなば始終の亂と成なん物を而るに此近年良共すれは輕き太夫衆の大序を語らるは歎かは敷事に非すや併し今時の太夫達は兩元祖程に大丈夫に有ざる故三段め四段めの本役を大事と思はるゝから未た見物も入揃はさる間の役故此大役を未熟成衆中に勤めさゝると推量せり故筑後掾存命の節は今時程浄るりも永からす越前掾時代に至りては五段續も次第に永く成しか其大序三段四段めの切は勿論五段目に景事の有しか其要の場は越前掾壹人して勤められし也老子經に曰天下の難事は必す易きより作る天下の大事は必す細か成より作ると云云然れは大序は勿論其外の役義を緩かせにし給ふへからす又末々の太夫衆初段の中五段目落合等の輕き場を受取給ふ共其役義を大切に存られ工夫を付て勤め給はゝ次第に立身し給ふへし指せる場にあらすとて捨鞭を打給ふことなかれ

音曲狂言綺語并呂律五音十二調子之事

○惣じての音曲を名談集には郢曲共俳優共戯遊共云なり何れも狂言綺語の戯れ事也と云云狂言とは物狂は敷詞也法界次第に曰綺は側ら也語は辭ば也と云心は道理に卒を綺語と名づくと云云周禮の註に曰發端を言と云答へ述るを語と云と云云毛詩の註に曰直に吉を言と云論難するを語と云と云云然れは狂言綺語と云は堅き事を和らげ或は方便の爲に戯れ言をなして愚か成人を善道に導引謀計の誡しめ也白樂天の洛

中集の記に曰願くは今生世俗文字の業狂言綺語の誤りを以て飜かへして當來世々讃佛乘の因轉法輪の縁となし給へと云云此文に依て見る則は諸法實相の理顯然たり峯の嵐谷の響き鶉鳴鵲噪皆佛法と觀ず況哉此淨瑠璃の文句趣向表には世間の戯相を顯はすといへ共勸善懲惡の深理を含み詞には當世の人氣を察して作文をなせり神祇釋敎幽玄戀慕哀傷兵戈君臣父子夫婦兄弟朋友等の五倫の道を正し世の爲人の爲專一賞翫すへき道也信ずべし見物すべし聞へし心を止て語るべし

○夫若以謠淨瑠璃等の郢曲の譜は狂言綺語の嬉遊言成とはいへ共其態堪能に達する則は音義正しく大鐘、大族、姑洗、蕤賓、夷則、無射等の六律に通し大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘等の六呂にも達す史記の正義に曰律は氣を統て物を類す呂は陽を統て氣を宣ふと云云呂律調和すれば化來宮商角徵羽の五音に達せめ故衆人の六根に徹して心身を淸させ六塵六情の偏欲を厭離なさしめ神魂を淸淨になさしむる也調音秘決に曰○甲は聲の始め也其音上つて天の五蘊と成寒暑燥濕風なり呼息則はち天也陽也一調子高きを甲の音とす○乙は聲の終り也其音下つて地の五位と成金水木火土なり吸息則はち地也三調子下るを乙の音とす○呂は悅ひの音也陽也双調黃鐘一越調等は呂の音也是天を司とる天上には樂しみ多き故に此調子を悅の音と云也○律は悲しみの音也平調盤渉は律の音なり陰也是地を司とる下界には苦しみ多き故に歎き憂ふるの音とす○角の調子は肝の臟より出る和調にして直をなり是双調なり○徵の調子は心の臟より出る和調にして長し是黃鐘調也○宮の調子は脾の臟より出る大きに充て和らかに緩し是一越調也○商の調子は肺の臟より出る輕く少けれども勁し是平調也○羽の調子は腎の臟より出る沈て深し是盤渉調なり○壹越、斷金、平調、勝絕、下無、双調、鳧鐘、黃鐘、鸞鐘、盤渉、神仙、上無是を十二調子共十二律共云也

○熟思ふに筑後越前は天性の達人にて音聲の開語自然と五調子十二律に合ひし淨瑠璃一道の聖也孟子に曰大に而之を化するを聖と云と云云生得にして事の理に達するを聖と云也と註す而れは兩元祖の當道に達せられし所を以て見る則は聖といふに何て憚る處のあらん哉周易の略註に曰聖人の道は天地の萬物を

育つかことしと註せられしは尤宜なるかな竹本豐竹の兩氏當道を世に弘められし德に依て今當流の淨瑠璃世上專はらに流布し是を產業として世る渡る人諸國の中に幾千萬人といふ數をしるべからず是天地の萬物を育くみ養ひ給ふ理に違ふへからず其功大ひならすや

竹豐故事卷之中終

竹豐故事巻之下

淨瑠璃作者並近松氏之事

○淨瑠璃の作者と極まりたる人昔古(いにしへ)はなし誹諧師或ひは遊人抔の慰みに作れり中昔曆と云淨るりは西鶴翁の作也とかや是を産業となせる人は近松門左衛門に始る此人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察して世間の世話を能吞込て百余番の淨るりを作られり其文句言妙不思儀を綴る元來は京都の産にて去る堂上の御家に仕へ本姓は杉森氏にして由緒正敷人成しか故有て浪人と成元祿年中の始め歌舞妓芝居都萬太夫座の狂言作者と成又宇治加賀掾の淨瑠璃をも作られたり此人世上作者の元祖也其後大坂に立越竹本筑後掾の作者とならる享保九年辰十一月廿二日七十余歳にて死去せられぬ平安堂巣林子と號す法名は阿耨院穆矣日一具足居士と稱せり近松氏過行れしか共猶餘光失す相續き數多の作者出來りて趣向作文をなすといへ共元來近松程の器量無き故か古語の取誤り古實の相違有職の違ひ等間々有て見聞苦敷品も多ければ畢竟は狂言綺語成と了簡せねばならす併し機轉發明の作意劣らぬ所も有又は稀有の趣向等も出さるる故大當りを取らるゝ段是又何れも達人と云はんに強て難有べからす其外作者と名を揚られし人々には錦文流、村上嘉助、紀の海音、西澤一風、筑後の座本竹田故出雲、松田和吉、長谷川千四、並木宗輔、同丈輔、安田蛙文、爲永太郎兵衛江戸にては北條宮内、塚原市左衛門、岡清兵衛等此外にも有しかど換骨の餘情薄く名高き衆ならねは略し畢ぬ併し是等は何れも故人と成られしも多し當時東西の座共に名譽を顯はされし作者達は人々の知れる事なれは談するに及はす

三味線來由並寸法三筋糸付澤之字苗字に付る事

○連中間て曰三味線の縁起をも御物語下されは忝じけなからんと望みける筑越翁聞て御所望に任せ咄して聞せ申さん抑々三味線の來由と謂は元來琉球國の弄そび物成故琉球絃と號す琴瑟琵琶和琴等の音を摹したる物也日本に是を傳來せし始めは人皇百七代の帝正親町の院の御宇永祿五年壬戌の春琉球より泉州

堺の津に渡り來る其比の武將織田信長公下知有て是を朝庭に献し叡覽に入奉らる時に帝久我右大將通興卿を以て其比音曲に名譽を顯はせし琵琶法師瀧野撿挍を内裏に召出され是を彈せて叡聞在ませしに其郢曲甚はた妙音成しを叡感ましましぬ其砌京都に名を得し琴琵琶の細工人龜屋市郎左衞門石村と云し者此三絃を摸し作り出せり琉球には三絃の胴を蛇の皮を以て張ると云共我朝に斯る大き成蛇皮なし依て猫の皮に替て是を張たり此三絃の形ち大體琵琶に同し惣尺三尺は天地人の三極を表し棹長貳尺余は陰陽の二氣海老尾の五寸は天の五星胴幅六寸は地の六合同長さ六寸余は地の六種震動厚さ三寸は高下平の三形を象れり轉手綛手又天柱共書也是天の象ちを表し反首に半月の形ち有海老尾の糸卷に三台の星を象とる一の糸は虚精と云二の糸は陸淳と云三の糸を曲順と號す十二調子の内壹越斷金平調勝絕の四つを一の糸の中に兼備ふ下無双調鳬鐘黃鐘の四つを二の糸に兼備へ鸞鏡盤涉神仙上無等の四調子を三の糸に兼備ふ首楞嚴經に曰譬へは琴瑟琵琶の妙音有といへ共若妙手無んは終に發する事能はすとの佛說のことく堪能の達人此三絃を皷則は衆人の神魂に徹して邪念を退ぞく而れは自然と六根を淸淨ならしめ神明佛陀の加護に預るへし亦懦弱好色の意を欲して彈則は聞人婬欲惑亂の念を發す尤欽まさるべけん哉然るを傾城遊女豎子野郎等の業に翫物となせるは歎かは敷事ならすや當世の三絃は其形少し異にして惣長三尺一寸五分海老尾五寸二分棹長さ二尺五分胴幅六寸同長サ六寸六分天手三寸五分也○世事談に曰三絃は永祿年中琉球より渡る或人泉州堺の津の盲人中小路と云法師に取らせたり其後虎澤と云盲人本手端手の術を引始む慶長の比角澤と云法師琵琶の名人成しか三絃を手鍊して小歌に乘る其比又淨璃瑠節出來たり此淨るりに乘せ彈は角澤か始め也其後大坂に城秀と加賀市との兩法師此術を得たり後に江戶に立越加賀市は柳川撿挍と成城秀は八橋撿挍と成り當時八橋流柳川流と稱するは此兩人か術也是を三絃と號せるは三つの糸筋有故也然れは淨瑠璃三味線は角澤撿挍を元祖とす角澤の澤の字の緣を取て後世淨るり三絃を產業とする衆中竹澤野澤鶴澤富澤等と云成へし大坂に中古達人と呼はれし人々は竹澤權右衞門同彌七野澤喜八

郎富澤歌仙竹澤善四郎鶴澤友次郎同三二此衆中は故人と成られり野澤後の喜八は此近年休息是も殘念

操人形之故事並名人之遣手付古今達人之事

○連中問て曰操人形の始りを承り度候筑越翁答て曰匀會に曰機關木偶は人に象とる肢と體と聚め集まる謂也云云活法傀儡の詩に曰絲を穿ち木を刻みて巧み神のごとく限り無し機關此身に在と云云文撰の註に曰手の伎を技と云體の才をは藝と謂と云云事類全書に曰木偶は人形也本來は喪家の樂なり漢に至て始めて喜會に用ゆと云云傀儡子又は郭禿茻書也委は風俗通紀原書言故事顏氏家訓等の書に出たれは唐土にも古來より翫そび來る哉順の和名集に傀儡子でくつかひでくゞつ共訓を付られたり指南に曰木偶を弄そふ者を屈儡子と云へり本朝攝州西の宮より出る俚俗是を名つけて筥出狂坊と云と云云史記般の本記の正義に曰土木を以て人形を對象すと云云此説を以て人形と號する者成べし南領子に曰傀儡は木偶の戯むれ也と註に曰今云人形舞し也と云云然るに和歌雜題には傀儡と云てくぐつと訓て遊女の事とす傀儡何ぞ遊女に限らんや惣て人形舞しの事成へきを遊女の事に限る樣に成しそと思ふに攝州西の宮より人形舞し世間を廻りて始て遊女の人形を第一番に立て遣ふこれより轉し來れりと見へたり下學集に曰日本の俗遊女を呼て傀儡と謂と云云是等の本文に依るときはおやま人形遣ひを立物札に書來れり枯杌集に曰傀儡師とは出狂坊舞しの事也是を詩の註には滑稽優人といへり滑稽とは嬉游言を云て人を笑はする也優人とは猿樂の事にて狂言をする者成是皆傀儡子の類ひ也と云云諸社神詫の紀に曰西の宮惠美須太神御詫宣に年の始に諸々の民爾笑於催左世勇勢而富貴於護牟と云云此神詫に依て往古より此所の民春の初めに女人形に吳服の所作事を舞す也是を紗の〳〵衣と號せり其外異相成人形を舞し京都を始め國々を廻り獸の皮を終に出して惡ひ事した者は山猫にかまそふと威す是上代の勸善懲惡の誡め質素正直の神敎への遺風出狂坊を舞して笑ひを進む此故に此傀儡子を神道秘要には惠美須賀質と號する也

○寛文の比江戸に小平太と云人形遣ひの名人有羅山文集に曰皷吹蠻琴有て木偶の動くに應し曲節有且是を操り是を引板を踏んて呼者と木偶の相得たる事殆

と生るが如し今日の爲所の者江都第一の傀師小平太と號す近世傀儡の巧手たりと云云此小平太おやま男人形共に能遣ひし名人のよし傳へ聞たり相續ておやま次郎三郎此道の達人也近世には辰松八郎兵衞名譽を顯はされたり京都には貞享元祿の比おやま五郎兵衞同五郎右衞門大藏善右衞門正德享保の比三升平四郎宇治久五郎三十郎與八郎等何れも名を得し上手の遣ひ手也大坂には辰松氏藤井小三郎桐竹三右衞門等のおやまの名人有し也當時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人也相次て若竹東工郎譽れ高しおやまは今藤井氏男人形には桐竹吉田豐松、若竹氏の中に上手分多し

○手妻人形は山本彌三五郎飛驒掾に始まる南京糸操は寛文延寶の比より遣ひ始めし由京都山本角太夫芝居に專はら遣ひし也又其比に江戸和泉太夫座に野呂松勘兵衞と云し人形遣ひ有頭平めにして青黑き顏色の賤氣成人形を遣ひて是をのろま人形と云のろまは野呂松の略語也又鎌齋佐兵衞と云は賢き質の人形を遣ひ相共に賢きと愚成との體を狂言に仕始めし也其比の人愚かに鈍き者を賤しめのろまと云異名を付痴漢に比したり此野呂松氏を祖とし京大坂の芝居に野呂間飩呂間飩呂七麥間等と名を付道外たる詞色をなし淨るり段物の間の狂言をなしたり近來はヶ樣成事は捨り知れる人も稀に成し也出遣ひは辰松八郎兵衞に始る此人古今の達人にて手摺を放れ無量の手段を遣ふに全身少しも亂るゝ事なし京大阪にて譽れを取後に江都に來つて益々其名高く成剩さへ御免操の櫓幕を上芝居を興行せり是を辰松座と號せし也

○筑越翁の曰扨々何れも打揃ひ此道に執心の厚き段愚老も大悦是に過す次手ながら各々へ御目に懸る物有と卷物一軸取出し忝も此書の義は去年節分の夜不思儀なる靈夢を蒙むれり先年死去有し近松門左衞門の靈魂來られ夢中に某かしに與へられし處の一卷也是にて讀上申さん間各々謹んで拜聽有へしと三度推戴きて紐を解高らかにこそ讀上げる

淨瑠璃古今之序 并 當時之太夫名人之評

○夫淨瑠璃は人の心を種として萬づの趣向とはなれりける世の中に在人事業繁き物なれは心に思ふ事を見る物聞物に付て作り出せる也色に愛る世話事義理に淸る時代事を見れば幾年生る者何れか此道を好ま

ざりける力をも入ずして人の情を感せしめ嫁を惡む姑にも哀と思はせ男女の中をも和らけ愘き親父の意をも慰むるは此道也過し時世の竹本筑後掾なん淨瑠璃の聖也又豐竹越前掾といへる人在けり淨瑠璃に奇敷妙也けり賴光山入の道行は竹本氏の一節に綾錦のごとく語り雪の段の出語りは豐竹氏の音聲に雲井迄も響きなんと思はる越前は筑後の上に立む事難く又豐竹は竹本の下に立む事難くなん在ける此人々を置て吳竹の世々に蔓茂り多き門弟達の中に竹本播磨掾なん世に知られし名人なりしかど惜哉不幸にして短命也爰に往古の事をも此道の意を得たる人當時は僅に五六人なりき而はあれ共彼是得たる所得ぬ所なん有れり

一豐竹若太夫は歌仙第一僧正遍照の歌の意に同じ淨瑠璃の樣は得たれ共其言葉花にして實少し譬へば圖に畫る女を見て徒に情を動かすがごとし

一豐竹筑前掾は歌仙第二在原業平の歌の意に同し其情余りて調子下し譬へば盛り過たる花の色は少しといへども而も薫香有がごとし

一竹本政太夫は歌仙第三文屋康秀の歌の意に同じ淨瑠璃は巧者にして其體俗に近し譬へば商人の能衣着たるがごとし

一豐竹駒太夫は歌仙第四喜撰法師の歌の意に同じ詞幽か成樣なれど始め終り正しく喩へば雲隱れせし秋の月の曉の風に晴るがごとし

一竹本大和掾は歌仙第五小野小町の歌の意に同じ古への竹本賴母の風也音聲艶敷して氣力なし喩へて謂はゞ能女の惱める所有に似たり

一竹本錦太夫は歌仙第六大伴黑主の歌の心に同じ頗逸興有然共少し野鄙也譬ば薪を負る人の花の蔭に休めるがごとし

此外の太夫達其名聞ゆる野邊に生る葛の榮曠ごり林に繁き木の葉のごとくに多かれと未だ淨瑠璃の奧義には至らざるべし竹本の流絶せす豐竹の節細やかにして正木の藤永く傳はり鳥の跡久敷止まらば程拍子をも知り事の意を得たらん語り人達は大空の月を見るが如くに上代を仰て今を希望さらめとそ

○名代 竹本筑後掾座本 竹田出雲掾座當時出勤之衆

○太夫至功美麗音節無双　竹本大和掾藤原宗貫

成功甚深琢磨無類　竹本政太夫

風雅名譽獨歩無格　　竹本錦太夫
恬然優美　竹本春太夫　聲花秀術　竹本紋太夫
功術珍重　同　友太夫　同土佐太夫　同長門太夫
寛濶　同　桐　太夫　同　染太夫　同　組太夫
對揚　同澤太夫　折太夫　家太夫　森太夫　仲太夫
○三味線　妙術　明廉　　大西藤藏
晏如　竹澤甚三郎　鶴澤文藏 徳二郎　竹澤佐の七 宗吉
○人形おやま立役　眞至極抜群操宗匠　吉田文三郎
おやま風流美躰　田中小八　最媚　小松文十郎
立役起居壯健　　桐竹門三郎
同箕裘業　　吉田文伍
擧動尋常　吉田彦三郎　術巧　竹川七郎次
若術　吉田藤五郎　同貫藏　淺田太四郎　桐竹源十郎
土佐幸助　同　三津八　松嶋又三郎　吉田嶋八
同　源八　笠井茂十郎　桐竹定七　吉田平治
太田源五郎　田中平次郎　京都出勤之衆中は除之
巻軸功老錬磨　　桐竹助三郎
○名代座本　豐竹越前少掾座當時出勤之衆
優艶妙絶音聲無類　　豐竹若太夫
幽玄至妙潤色無比　　豐竹駒太夫

至要表珍　豐竹鐘太夫　功勞天晴　豐竹新太夫
適時强健　豐竹時太夫　丈夫　同十七太夫
功術　豐竹伊豆太夫　丁寧　同式太夫
若術　同　鰭太夫
○三味線妙手　野澤文五郎　淳朴　鶴澤重次郎
功若　富澤正五郎　同　伊八郎　鶴澤龜次郎
新參　竹澤幸助　野澤文藏　鶴澤喜太郎
○人形おやま嬋娟當中美艶無上　藤井小八郎
同　綏飾芬芳美壯　藤井小三郎
立役人形　莫大擧動發明無類　若竹東工郎
粉骨時明　若竹伊三郎　度量的中　豐松彌三郎
考積功　中村勘四郎　若發　豐松祐二郎
同　門三郎　若竹清五郎　若竹友五郎　豐松元五郎
同　彦七郎　豐松藤四郎　同　勘三郎　同　源三郎
福嶋市之丞　柏井傳三郎　若竹三十郎　同　清次郎
淺井徳二郎　笠井乙五郎
おやま美若　　藤井八十八　同　新十郎
人形巻軸　積術模範湜賑　豐松藤五郎
○此一軸の意は紀の貫之の撰み給ひし古今集の序に
例らへ當時に名譽を顯はせられし太夫衆の藝の品を

察し六歌仙の列に准して位次に搆はらす近松先生未來記に認め置れし書なり初心の衆中たり共淨るり修行の旁々は此意を熟得有て稽古したまひて然るべし

雨座繁榮并逃助之字義事

○花奢優艶は京都繁榮の勇ま敷は江都北濱の景氣と淨るり芝居の繁昌は大坂に並ぶ所は有まじ上に伸ふる所の先代の役者衆に名人達多かりしといへども古代と當時と競べなば當代の衆は皆々術を盡したる名人衆數多有べし就中京都には加賀掾の門弟中の以後定芝居の操はなし近來竹本氏の太夫衆折々上京在て語らるれば大躰程も知れたり然れは操淨瑠璃の芝居は大坂を第一とし諸國の水上と存せらるべき也各や我等斯る土地に生れ住居して大切成芝居を心安く見物致すは大き成果報と悦び給ふべし然るにてう助やら云人は札錢場錢も拂はずして見物致さるゝよし近比卒忽千萬成仕方と存る逃助のてうの字はのかるゝと訓助の字はたすかると讀と承はれば札場錢共に逃れ助からるゝと云義理にて逃助と呼來りしと傳へ聞ました猶又贔負の二字は力を副ると云字心なれば自然作趣向の惡敷時成共惡き所は能取なし能場は益々評判能なさるゝが肝要と存る惣じて贔負といふ物は己が心の依所酒呑有は餅食有砂糠好みと唐辛子好は大き成違ひなれど夫々の口中に味はひて心の欲し樂むに二つはなし鶴の觜が永いとて切ても捨られず鴨の足が短ひ迚繼足もしられず柳は緑に景氣を顯はし花は紅ひに咲て人の目を悦ばしむ我等は年來竹本豐竹の兩芝居共に贔負に存し見物致すれば贔負といふ名も有てなし唯好者と申す成べし各々方にも其意にて見物し給ふべし猶又此席へ出座なき若い衆中へは各御宿處へ御歸りの節宜敷評判頼みますぞ評判〳〵

竹豐故事卷之下大尾

歌系圖

本邦慶元建櫜巨來、長歌短歌雅歌稗歌託ニ絃誦一者非レ古也多是民間之諷謠也、以レ故識ニ作者音者之姓名一者亦鮮矣、然究ニ其所レ與、大平餘風鼓レ腹而不レ知ニ困勞一者所レ爲也、所レ謂安以樂也、偶有ニ怨者哀者一限ニ其人一矣、惜哉具ニ諸八音一列ニ諸舞人一則爲レ樂者毎有レ之乎、不下徒悅ニ兒童婦女之聽一而已上、流石庵羽積恐ニ其久而湮滅一洽問博求得ニ四百餘篇之姓名一、各附ニ之其傍一、題曰ニ歌系圖一其功亦勤矣、丐レ序予不レ諳ニ其事一然徵レ古而言レ今如レ斯、若夫傳ニ之千歲之後一、羽積之功豈空乎、

浪華　梅花老人序

烏丸光廣卿も常になげぶしの御口僻てあなるよし尋ね申せし人のあれは御作のよしして御自筆にをなし空なる影かとおもて見れはあやしや月さへさまとともにみぬめてかはるけな

投節とたにいへは其傑の極まれるものそと思はれぬるもまことに百とせあまり過にしさま也とそ八繼の手馴棹もたちまち胴の中へ疊みこむさかしさ來へき宵なるさゝかにのいとのもつれは早おとゝひの唱歌となりきり〳〵すの舌皷もちよいとあさつてはのべかたきのうたひらきは君か代のおたやかなる中のせわしさ實や諷の世に生れ合されし羽積の主むさしあふみの御心をおもひやりつゝこのめる事とてまめやかにかいつけまはれるも世の人心をそ推量の推こそ今の粹にあたると去學者の粹のいへるに愛をやもたさんと猶此書に好士の書をとり〳〵にとりあつめ調子の栞となせるも眼の呼子鳥やこゝろの時鳥やうくひすの子も啼初る比とて朝霜に筆を慢すもつゐ端書とはなりて斯は

そらあきらけきはしめなる冬の日　おろし藻

歌系圖附言

一　琴三絃の唱歌を、あながちに淫風とおししりぞくるはいかにぞや

我御國の道たる歌も、其はじめはおもふ事をうたひて心をやるよりの名にして、たゞかりそめにうたへるまゝなるが、後には詞花言葉の巧を競ふて、其法おごそかになれるになん、されば其うたへるいにしへをおもふに、ちはやふる神代の事はしばらく置、人の代となりても、萬葉集を見るに、大友家持卿の比も、猶歌はうたひしにや、宴會の席などにも、自作の新歌を誦すると、古歌をうたふものありて、其誦するをききて書とむるもの丶、新歌とも古歌ともしれざるには、新古未詳としるせりうたふ事なくば、酒宴の席にて古歌を誦する事はあるべからず、又それより後の世にも、清少納言の枕草紙に、うたは杉たてる門、神樂歌もをかしと見えたり、杉たてる門とは古今集雜歌に出たる、我宿はみわの山本戀しくば、とむらひきませ杉たてる門、といへるなり、又源氏物語に、月に日にかはり行とも久にふる、みむろの山のとつみやどころといふ萬葉集の歌をうたへる事見えたり、もろこしにも、堯の代には擊壤の歌とて、つちくれをたたきて聖代をうたひ、又書經の益稷にある、帝舜皐陶の歌はうたひ給ひし事、其辭にても明なれば、治れる御代に、歌をつくりてうたふはめでたきためしにしてそのかみをしのぶ心ずさびなれば、是を淫風とのみいはんこと、不風流の人といふべし

一　むかしは歌をめさるゝ官ありて、雅樂の字をうたとよまれしも、うたひものを掌る官なればなり、江次第に大歌小歌の目見えたり、是はいかなるものにや今考がたし、又狂言舞などに、小歌といへるは、今のはやり歌の類なるべし、太神宮式にも歌長二人と出たるは、雅樂をめさるゝ時、唱歌をつかうまつるものをいへるならん、又さいばり今様朗詠などみなむかしのうたひものなれど、今のうたふ歌とは、其しらべ異にして、こゝにあづからざる事なれば詳にこれをしるさず、但うたといふ言葉はうたより出たれば、幸に古風の今に遺れる事、此歌のふしあるをや、誰か古を尚ばざらん

一　今の世にうたふ長歌等、松の葉に出たるは、此曲

の古調にして、いはゞ古今後撰拾遺の歌の體ともいふべし、あからさまにをさなきやうなれど、巧ならざるにあらず、華實相半して、えもいはれざるあぢはひありて、後世調をもとむる本歌とする所なり、又次橋撿挍がしらべをあやどりしより、鶴山吉村の比までは、詞花集より新古今にえらはれし歌の體ともいふべし、巧にして卑陋からず、しつとりとして實にみやびやかにして、花尤も艶へり一應此歌のしらべは、しめやかにわびしからんよりは、みやびてはなやかならんとむねとして、作りもし、手をもつくれば、此時代の風調を賞翫すべきなり、かの歌木の御坊のさかんに唱起してより、風調一變して、實やら花やら品さだめがたく、かくれんぼといへば六段れんぼを合の手にかすり、はくさいしには、上るりめかせし一くせをほのめかすなど、禪家に所謂一足飛の悟りにして、正法眼にあらすといへども、遊藝は活機を尙びて、時におこなはるゝをいさぎよしとすれば、是又難ずべきにあらず、されば新曲の時めくも、しはがれたるがしらぶればものかなしく、古調のわびたるも、はなやぎにほはすればうかれ出るさまにされば、かしこの色事、こゝのくせち、あるはやさしうあはれなる、あるはをかしうざればみたる、きくまゝにこれ歌につくり、糸にもして、えんなるあたりにうたひしらべさせんこそ、になきたのしみなりけらし、しかはあれど、かくたのしさも春秋の富るほどの事にして、老ては思ともかひなし、年々歳々人同じからざれば、わかきうちに歌を作りて、世にうたひひろめんには、老て後に、そのかみをしのぶなさけともなりなん、心すさびともなしてん

一　此篇をえらべるきはめて問はかるといへども、猶差謬多かるべし、已に清平調のごとき、もはら柳里恭の作のよしいへど、是は柳君長相思の作ありしほど、朱陸（のまや嘉兵衛）といふ人、同じく樂府題を采て作れる也、しかれども柳君の作とおもへるにも、いさゝかより所あり、余これを芦屋主人に聞り、芦屋主人童齢のころ、しば〳〵柳大夫の第に過れるに、或時大夫ののたまふに、此頃清平調といふ新曲をきゝしが、いかにもおもしろき調なれど、恨くは其詞うまく李靑蓮か詩意を得ざる事を、よて我其調にしたがひて詞を換たりとて、扇に書給りし、其扇は其頃三津崎撿挍に

おくりしが、わづかに其はし〳〵をおぼえしとあるをきくに・

雲とのみ、みよし野とほき、雪の袖、花のすがたを思ひねの夢、妻戸の柳春風ふけば、よれつもつれつかた糸の云々

此下わすれたり、此詞も猶たがひたるやしらずとなん、おもふに此類猶多かるべし、四方好事の諸君子かかる事あらんには、ねもころに正し示し給はん事を、庶幾にこそ

・流石菴羽積述

酒劫花魔埋沒人無數還堪悟囘首來暮正在邯鄲路

雪蓬書獃

歌系圖

浪華　流石菴羽積選

三下り之部

さをの露　吉村撿校調　柳里恭作
かたしがひ　繼橋撿校調　千苗作
さくら川　(前)藤永撿校調　麒十作
かよふかみ　歌木撿校調　馬宥作
袖もみぢ　小野村撿校調　羽積作
四ツの草　菊永撿校調　象牙屋次郎右衛門作
塵むしろ　政島撿校調　川崎屋三右衛門作
三ツの星　繼橋撿校調　鴻池宗羽作
糸のしぐれ　鶴山勾當調　胡雁作
村すゝき　小野村撿校調　雅物作
おもひ寐　(前)藤谷勾當調　升三作
たが身　村住勾當詞　羽積添削升ニ作
あいせん　歌木撿校調　巾花出　雨鳳作
龍田川邊　吉村撿校調　山田屋平介作
よし野川　吉村撿校調　河合立牧作　柳里恭添削
末はとふかもヨリ　藥大黑ノ後家作
あだまくら　歌木撿校調
うたひ出し身にかへて云々
名取川　吉村撿校調　今宮屋新五郎作
秋のうらみ　歌木撿校調
作未詳世ニ柳里恭ト云ハ非也
深山草　(前)藤永撿校調
京小袖　歌木撿校調　川崎屋源兵衛作
くれの松　繼橋撿校調　鴻池宗羽作
なたねざと　同調　加賀屋宗因作
嵐小六か事を作ると
里の風　鶴山勾當調　鍵屋左介作
わらひ月　八重崎撿校調　自作
雲の端　廣橋勾當調　茅柴雨作　羽積

うら〳〵か　同　郎調　龜男 羽積兩作
てり葉　三津崎撿校調
をしの名殘　富岡撿校調　卜獅作
笹の風　吉村撿校調
春の鳥　纎橋撿校調　鴻池宗羽作
四の袖　鶴山勾當調　ソウライ作（河内屋勘兵衛事）
里の都　歌木撿校調　堂島平小作
のべ鏡　鶴山勾當調　青瓦作
捨小舟　纎橋撿校調　鴻池宗羽作
ほの〴〵　村住勾當調　羽積作
南妓明石の事
むさしめ　小野村撿校調　池忠作
ひる寐　歌木撿校調　青瓦作
京人形　船橋撿校調
あづさ弓　纎橋撿校調
福壽草　菊島勾當調　（京）富永やゆき作
鶴のはし　歌木撿校調
まごと　纎橋撿校調

秋の七草　吉村撿校調　今宮や新五郎作
はくさいし　歌木撿校調　ヤブタツ作
末のよるべ　（前）藤永撿校調　大和屋彦二郎作
みをづくし　吉崎勾當調　キカク作（丹州笹山家中也）
あだくらべ　春木勾當調　流石菴作
はでゆかた　歌木撿校調　離佛作（又麒十トモ）
笛吹の甚十郎長田や百松の事
蔦紅葉　小野村撿校調　羽積作
うらおもて　歌木撿校調　田中氏某作
きんきく　豐賀撿校調　稻葉春禽出　麥鱗作
たぬき　鶴山勾當調　堺や方舟作
八聲の鳥　纎橋撿校調　住吉（東大寺僧作ト云）
ぬりまくら　小野村撿校調
荻の風　吉村撿校調　扇屋つぐ作
捨あふぎ　佐々木勾當調　サカヒ（松作作）
八重崎撿校調にも此名あり
みなれざを　深艸撿校調
なれざね　同　調

曲名	作調
里にしき	小野川撿校調 卜龍作
袖の香	藤村撿校調
秋の色	倉橋撿校調
橋の雨	藤永撿校調（一説に長屋撿校とも）
置ごたつ	繼橋撿校調（一説に玉山勾當とも）
後のあさ	吉村撿校調 山田や平助作
山もみぢ	菊村勾當調 指山作
かづま	關川撿校調 保井算知作
たき川	神坂勾當調 石出常軒作
ふところ	歌木撿校作 巴洞作
おぼこ菊	八重崎弟子 留都調 青瓦作
其扇	八重崎撿校調 羽積 李十雨作
藤衣	小野村撿校調 山本善吉作
東げしき	深艸撿校調
わやく	春木勾當調 呂口出藍々舍作
前市川吉太郎追善 あしま舟	淺村勾當調
むしのね	尾州 藤尾勾當調
口きり	玉岡 豐賀撿校兩調 二斗菴作
辰巳屋平兵衛追善 花鳥	廣橋勾當調 菱正作
ついのきせる	小野村撿校調 青瓦作
八嶋	尾州 藤尾勾當調
筆の跡	（前）藤谷勾當調
秋の時雨	吉村撿校調 扇屋つぐ作
沓の音	八重崎撿校調 ふうし作
四季の宴	繼橋撿校調
難波がた	鶴山勾當調
笛の縁	繼橋撿校調
塵づか	吉村撿校調 （京）河野州作
すがた身	八重崎撿校調 近藤忠藏 流石菴 兩作
伊勢物語	廣橋 菊島 勾當兩調 五百 雁羽 兩作
よそめ	廣橋勾當調 りざん作

むつのてふ　（今）藤永勾當調　塚本や八左衛門作
此いと　戸川勾當調
見ぬもみち　菊島勾當調　加州はやう作
染越後　戸川勾當調　星連作
端手てかた　廣橋勾當調　きかく出（但此きかくはみなつくしの作者とは別也）
一艸舍作
かたてざを　扶永追善　戸川勾當調　泉明作
いもと草　玉岡撿校調　二斗菴作
ひなの袖　藤尾勾當調
筆しぐれ　城民　羽積両調（作はづみ）
かよひぢ　杉本爲三調幷作
うとふ　同　調
裏もやう　羽積調　小野村撿校添削
ふたへ月　高田大甫作　小川や猶出　近江屋彌兵衛調　雨曉作
春の雨　紙屋永三調　神原賴母作
そへぐし　升屋三郎兵衛調　山田屋平介作

八重垣　流石菴調　君竹作
かなのとめ　稲葉眷禽調　戸川勾當添削　竹作出
ひとり寐　二斗菴作
網代屋長左衛門調幷作
初ざくら　以下芝居歌　山本喜一　若村藤四郎　両調
里の松　嵐小六調
繪すがた　（前）加茂川野鹽　高島尾上　両調　山下才三郎作
戀ばなし　調作未詳　京都二ノ替リ中ニ石突オント有
ありまふし　杵屋長五郎調
春の雪　杵屋長五郎　青木半兵衛　両調　助高屋高助作
八郎兵衛　（前）廣橋勾當改調　（初代）嵐三右衛門作ト云
道成寺　岸野次郎三調
石橋　芳澤金七　若村藤四郎　両調　瀬川路考試
まんぎく　永島庄左衛門調　佐野川萬菊作
ふじ　榊山小四郎調　戸田瀬撿校改調　紀海音作

こんくわい　岸野次郎三調　多門庄左衛門作

あを葉　杵屋長右衛門　萬山四郎兵衛　両調　芳澤春水作

きゃす　鳥野勘七　若村藤四郎　両調　（初代）加茂川野鹽作

金五部　増井勾當改調　竹島幸左衛門作

前廣橋勾當の妙音によつてきゝす金五郎三かつ等世に行ル

雪見酒　山本喜市　若村藤四郎　両調　坂田藤十郎作

三ツ人形　芳澤春水調　中村慶子所作事ノ歌

十三がね　潮山金四郎調　山本喜市改調　近松門左衛門作

猩々　岸野二郎三調　竹島幸左衛門作

きぬ／＼　柴野勘六調　杉山勘左作

沖の石　永島庄左衛門調　尾形撿校改調

高瀬ふね　辻甚左衛門調　城澤改調

つくば山　柴崎勘六調　多門庄左衛門作

松かせ　岸野次郎三調　佐渡島傳八作

山姥　澤野九郎兵衛調　紀海音作

西照庵　鶴澤名八調　熊貫作

二上り之部

花もみぢ　小林撿校調　御堂上方作

てうさうし　吉村撿校調　柳里恭作

せいへいてう　鶴山勾當調　政島撿校補　朱六作

沖のふね　久米崎勾當調　田中桼翁作

夏のつま　松谷勾當調　城ノ大炊作

此歌莊子の故事を用ル故誤テ半時菴ノ作といへり

いさゝめ　今川勾當調

雪の音　吉村撿校調　山田や平介作

けしぐゝり　鶴山勾當調　長生作

長生は播州明石の人也、木端弟子にて、狂歌をよめり、木端遊所にて藝子の三絃をきゝて長生が此作ありし事も思ひ出して口ずさみに

袖口のあかしの人の作りたる　けしぐゝりをはひてたもとよ

とあるにて其作者をしるべし

花のきみ　久米崎勾當調

たそかれ　元崎勾當調

うづみ火　戸川勾當調　官家某作　塚善出
其はづみ　廣橋勾當調　山本やまだき出　扇やさよ作
木の葉づみ　流石菴作
右のかへ歌又落葉ともいふ也
しづの床　鶴山勾當調　くづしま作
はらげ髮　玉岡撿校調　みそち作
春のかな　吉村撿校調　自作
八重咲　玉岡撿校調　山本吉門作
八重崎撿校追善
閨八景　佐々木勾當調
うはき　歌木撿校調　風志作
五大力　白川撿校調　李丈作
此李丈といふ人は、さいかや七兵衛とて風流人なり、此人の作の歌猶多きよしなれど、今知れがたし、白川は作物の上手にて、其作今に殘れり、悉く後篇に出すべし
羽衣　春木勾當調　笹屋五兵衛作
夏の空　梅園勾當調
みづかき　八重崎撿校調　青雅作

戀のくせ　吉村撿校調　一本亭作
袖の色　戸間瀨撿校調
鳴立澤　繼橋撿校調
あけのかね　同調　うたひ出し　たまそとおもふて
花のなごり　歌木撿校調　馬宥作
巾華追善
伊達もやう　吉村撿校調　山田や平介作
ならのひろば　深草撿校調　御堂上方作
雪けしき　深川撿校調
なでしこ　戸川勾當調　巴遊調　泉明作
小野村弟子元都追善
よそのてには　富岡撿校調　知水出　東曦作
袖しぐれ　今川勾當調　自作
袖のうら　菊島勾當　梅都雨調　雪助作
なの葉　歌木撿校調
詞じち　同調　一物けいかう作
山びこ　上杉撿校作　千草屋彌左衛門　たつみや平兵衛作

里の名殘　鶴山勾當調
丹頂の鶴　深艸撿校調 今西一音作と
みすの追風　同調 其磧作
うき世ほうさい　佐山撿校調
ふそらごと　むかし 藤谷撿校調
みだれかみ　深草撿校調 一説に深山撿校とも
まさづき　鶴山勾當調
うら紅葉　富岡撿校調
中直り　小野村撿校調 青瓦作
雲の駒　八重崎撿校調
當世調　流石菴作 せいへいてうのかへうた也
袖まくら　菊村勾當調 富石作
一夜舟　大西勾當調と
冬ごもり　山田撿校調 小刀屋八兵衞作と
玉がしは　吉村撿校調 山田や平介作
むかしの夜　同調 今宮や新五郎作
洞の梅　津山撿校調
又神樂ともいふ
古
きさらぎ　繼橋撿校調

中
きさらぎ　(前)藏永撿校調
新きさらぎ本調子の部に出
さくら戸　吉村撿校調 釘や久兵衞作
とまり舟　政島撿校調
朝寐髪　歌木撿校調 馬宥作
二王門　同調
うき雲　同調 孛屋何某作
月の枕　同調 柳里恭作
正慶尼云吉村調と
ひとりこと　同調 弁作
里の霜　同調 流石菴 必々菴雨作
くゝり猿　同調 しざん作
秋の旅　繼橋撿校調 千苗作
ひとつよぎ　同調
今木勾當の作といへとさだかならず又繼橋自作ともいへり柳吉兵衞といふものゝ歌也
ふたつもん　同調 すいかう作
秋のふじ　同調 鴻池宗羽作
浪がへし　鶴山勾當調 近藤忠藏作

閨の露　同　調　そきう作
七ぐさ　津山検校調　河野對州作
さゝやき竹　政島検校調　一本亭作
ちとせ草　大橋勾當調　一見作
かけしや　廣橋勾當調　一見作
後月坊の歌也
小川ぶね　同　調　羽積作
吉太郎追善
にはたづみ　同　調　青亭作
手まねき　戸川勾當調　ひさを出　慶子發句前書
丑の冬京登り暇乞の歌
むらさめ　倉橋検校調　自　作
まんざい　城志賀調
廓まんざい　右かへ文句　羽積作
又しやなまんさいといふ
夢のうら　瞽女須磨調　同　作
三つのわらひ　瞽女小卷調　近藤氏作　流石庵作井ニ調補
かづき面　城志賀調

うつぼ猿　城志賀調
秋の野　左樂調井作
くきら　茨木屋四郎三調井作
たのしみ　羽積調　戸川勾當添削　山下里虹作
又虹のうしとも云
松のふた葉　升屋三郎兵衛調　山田屋平介作
野分　流石菴調　月寒作
すはま漬　砥平調　泉明作
さそふ水　羽積調　廣橋勾當添削　菊島平野やいは出
夜明がらす　袖崎歌流調　澤村長十郎作
以下しはゐうた
因幡の松　藤村半太夫調　坂田藤十郎　瀧川六三郎作
長生でん　中村綴子作　調未詳
あしたの原　（初）瀬川菊之丞調
ねざめ鳥　（二代）瀬川路考
二の替りの歌
佛の原　上村吉彌　岩井左源太調

孫嫡子　大和山甚左衛門調　松本重巻作

おそめ　杵や長五郎調　岡崎検校改調　紀海音作

いもせ川　山本喜市調　水木辰之介作

右桂川検校改調又歌木検校の改調を新いもせ川といふ今兩流有

歌うら　榊山小四郎調

同せめ　同人　岸野次郎三　兩調

出口柳　杵屋長五郎調　宇治加賀掾作

相の山　山本喜市調　文耕堂作ト云

三つの車　杵屋長右衛門　大和屋甚兵衛　兩調　淺尾重二郎作

花の香　坂田兵四郎調

御堂上の作又瑞龍の僧或は淀屋古庵作ともいふ

長崎鳥　芳澤春水調

又かり枕ともいふ

名ごやおび　山本喜市調　尾形検校改調　二代目嵐三右衛門作

鳥部山　潮出金四郎調　岡崎検校改調　近松門左衛門作

新道成寺　二代目杵屋長五郎　よし澤金七　兩調　六次郎改調

はん女　水木辰之介調　中村七三郎作

しらいと　山本喜市　若村藤四郎　兩調　茨木や幸齋作

新草づくし　島野勘七　若村藤四郎　兩調　高島尾上作

放下僧　岸野二郎三調

井筒　坂田兵四郎　山本喜市　兩調

蚊帳道成寺　芳澤あやめ　大和屋甚兵衛　兩作　中村少長　山本歌門　兩調并ニ兩作

あさま　中村七三郎　岩井左源太　兩調

かうきでん　虎屋榮閑調并作

淀川　（前）山下龜之丞　澤村長十郎　調并作　岩井左源太

本調子之部

八千代獅子　（前）藤永検校調　園原勾當作

元來尺八の曲なるを政島検校胡弓にうつし藤永検校三弦にうつせるより世にひろまりぬ

同替手　國山勾當作と云
ゆふぐれ　深川撿校調　御堂上方作
舞あふぎ　野川撿校調　家都作
秋　空　歌木撿校調　秋築作
つるべ　同調　麒十作
袖あふぎ　廣橋勾當調　羽積作
新子のび　深草撿校調
菊流し　八重崎撿校調　石上甘吉作
袖づきん　同　調
登りふね　佐々木勾當調　并ニ作
夏ころも　富岡撿校調　加賀や文吉出　柳川花松氏作
五つがしは　上杉撿校調　堂島海老作
ゆかりの月　鶴山勾當調　投文にて作者不知
作者は事絃所故實に出す
しをり　吉村撿校調　今宮や〻五郎作
いとしとはた　八重崎撿校調　青丸作
閨の文　同　調　大燮作

ことぶき　玖島　菊永撿校兩調　鐵重作
あやづる　歌木撿校調　田中氏某作
友ちどり　佳川撿校調
さんかつ　房崎勾當調　住吉屋某作
前の廣橋勾當妙音によつて上品になり彈はやり世に廣橋のさんかつと賞翫せり
かへあふぎ　廣橋勾當調　鯉文　羽積　兩作
みさほ草　繼橋撿校調
羽織妻　菊島勾當調　羽積　龜男　兩作
ひなのみち　藤永撿校調　知水作
いもせの秋草　鶴山勾當調并作
葉ざくら　連川撿校調　歌木撿校彈はやらす
其からす　佐々木勾當調
菊の露　廣橋勾當調　助松や虎太郎出　ふくしん作
よるべ　戸川勾當調　ひさ志作
丸はだか　（前）春木勾當調　金英作
しぐれの松　鶴山勾當調　さんし作

ゑくぼ　廣橋勾當調　龜男作　平いや鱶出
露のてふ　歌木撿校調　東都ろてふ作
舌つゝみ　同調　尼崎や園瓜作
しぐれ月　同調　中村鯉長作
京上り暇乞
ゆふすゝみ　同調
かげろふ　同調　筑州荒木氏作　長濱に某出
うひかうふり　同調
うらにしき　同調
みまゝがみ　同調
かつらめ　同調　如瓶又秋藥作ともいふ
はだしらず　同調　巾華出　雨鳳作
つとの雪　同調　しんさい作
しのぶ　同調　自作
松賣　同調　巾花作
かくし題　同調　秀鏡作

かつら男　吉村撿校調
ぬれあふぎ　鶴山勾當調　海老や藤兵衛出　今宮学瓜作
あさと出　玉岡撿校　村住勾當　兩調　泉明作
新町高嶋屋でん追善
あさがほ　菊島勾當調　ふんかう作
空いびき　政島　龜島　撿校兩調　二斗庵作
北しぐれ　豐賀撿校調　海部屋傳右衛門作
閨のひま　同調　魚売出　二斗庵作
松風呂りう追善
玉づさ　小野川撿校調
けしのふた葉　知恩院中みんぶ調并作
山路の菊　田中撿校調
後の月　同調
八重崎撿校調にも此名あり
夏のしのゝめ　藤村撿校調
花むすび　同調
たゝみざん　同調

曲名	調・作
奥ざしき	小野川撿校調 秦阿彌作
うつぼ舟	同 調
ねなし艸	繼橋撿校調と云
難波ぶり	國山勾當調 穗積賴母作
飛鳥川	佐山撿校調 藤田友閑作
たにし	調作未詳 但白川撿校歟
夜半樂	戸川勾當調 泉明作
やまと文	津山撿校調
あふ夜の月	富岡撿校調
誠くらべ	小野村撿校調 (京)毘沙門堂僧作
きせん 近藤忠藏追善	廣橋勾當調 龜男作
すり衣	八重崎撿校調
袖のしづ	龜崎勾當調
糸すゝき	歌木撿校調并作
よぶこ鳥	小野村撿校調 扶永作
若 葉	品都 元都 兩調 瓦屋彌右衛門作
廓の嵯峨	羽積調并作 貴得齋出
ねぐら	同 調 吉田一保作
みなめざめ	同調并作
よこ雲	同 調
天の川	同調并作 臼杵左一出
雲井の空	稻葉春鴬調 石上甘吉作
みやこ鳥 中村慶子の歌	辰巳屋平兵衛調作
しのぶ土	八百六伊八調 扶永作
ひなぶり	同 調 茨木や要助作
海 士	さらさや新兵衛調作
新きさらぎ	南妓明石調 玄暉出 二斗庵作
月のしづく	砥平調 艸秀作
京あふぎ	紙屋永三調 羽積 茅柴兩作
あさもよひ	はづみ調 ひさな作
里げしき	岸野二郎三調 大石うき作
在郷げしき	右かへ歌也 御堂上方作

きつね火　岸野次郎三調 或は澤村長十郎 荻野八重桐三人調とも云

同まへ歌　同 調 大石うきさ 村松たんすい 作と云 小野寺ほんたん

二段獅子　同 調 又榊山小四郎と兩調とも云

關寺小町　同 調

橋づくし　富岡検校改調
近松門左衛門作の通り也

釣あんどう　（前）一中調 鶴山勾當改調
前中村十藏の事と云々きさんは若き時の誹名なりしと

梅のよし兵衛　（前）春木勾當改調
江 戸 三原十大夫作

花いかだ　葉山岡右衛門 葛山四郎兵衛 兩調 津打次兵衛作

身がはりおんど　歌木検校改調
大塔宮上るりの通り也

すみだ川　古今新左衛門調

廓たゝき　調並作者未詳 或は山本喜市調と
前廣橋勾當彈はやらす彈出し鳥おひ

新廓たゝき　春木勾當調 馬宥作
唱歌色かへぬ名の九軒町云々

わんくわつ一休　さつま外記調 杉三安作
中比江崎茂左衛門これを彈く事妙をなるを以て大に賞翫せり

いけん曾我　調作とも未詳 政島検校より専ら行る

以下半太夫

せいし曾我　江戸閑洲調 傾城高尾作

八丈曾我　小野川検校調 堂上方御作

月見曾我　（江戸）河東調 閑洲作

風呂入曾我　（大阪）玉川半太夫調 かなや金五郎作といふ

五人曾我　（江戸）坂本梁雲調

此外灸する曾我、たばこそが、願ひ曾我、元服曾我の類あれども江戸坂本半太夫自作の書[illegible]鳥に見えず但髪すき曾我帯引曾我あれども今しれる人まれなり灸する元服の類は河東閑洲の後調ならん

長歌之部

八重霞　繼橋検校調

雲井らうさい　佐山検校調幷作

更衣　市川検校調 御堂上方作

六段すがゝき　深草撿校調　尾形撿校作
同　かへ手　國山勾當調

三下り

冬の夜　深草撿校調
春のさち　小林撿校調　今木勾當作
あけのかね　深草撿校調　唄出しおき出ろ
古さらし　北澤勾當調幷作
新さらし　深草撿校調
難波獅子　總橋撿校調　作者之事後編に出す
都獅子　津山撿校調　河野對州作
しのぶ山　深艸撿校調
秋の夜　同　調
淺茅生　同調　耕雲子作
いづみ川　同調　烏丸家女房作
村しぐれ　同調　高田家賢作のよし
あけつげ　同調　鷺水作
春の夜　同　調
松の雪　同調　尼崎や無元作

冬景色　深草撿校調　桃井氏作妻
夏げしき　同調　二口意伯作
池づくし　同　調
たが袖　同調　自作のよし
ちとせの秋　同調　永井の尼作
かたいと　同調　扇屋卜曉作
大和琴　同調　御堂上方作
夏の夜　同調　自作のよし
東　窓　同　調
長歌づくし　同調　嶋原長歌太夫作と云
常盤木　連川撿校調　永井赤帆作
櫻づくし　佐山撿校調
冬　草　同調　嵯峨隱士作
もしほ草　同調幷作
きやり　佐山撿校調　作者未詳

近年豐賀撿校彈はやらす

若みどり　同調　同作と云々
三谷をどり　同　調

不二まうで　同調
まさみち　同調
小夜衣　同調　御堂上方作
源五衆　同調　自作のよし
戀衣　同調　元隣作
うき寐　朝妻撿校調　御堂上方作
小むらさき　同調　江戸前の湖十作
香づくし　同調　自作のよし
花の宴　同調　御堂上方作
引くるま　同調　團水作
戀づくし　同調　元隣作
川竹　朝妻撿校調　言水作
七夕　同調　自作のよし
鎌倉八景　同調　とらや榮閑作
かさでら　同調　錦花翁作
東山八景　同調　自作のよし
浪まくら　同調　自作のよし

いく春　同調　自作のよし
夏草　同調　秀佐軒作
山づくし　同調
八重梅　市川撿校調　自作のよし
春日野　同調　西鶴作
若草　同調
手まくら　同調　嵯峨隱士作
春風　同調
春こま　市川撿校調　自作のよし
らつぴ　同調　後松軒作
朝がへり　同調
岩根の松　同調
夏のさち　小林撿校調　今木勾當作
冬のさち　同調　同作
秋のさち　同調　同作
あさぢ　連川檢校調　澤口宗隱作
秋草　松岡撿校　藤島勾當　兩調　御堂上方作

加茂川　上杉撿校調

おもひ葉　玉井撿校調　廣庭中務作

玉くしげ　小野川撿校調　伏見知膓作ト云

しぐれ　同　調　今宮翁作

あだまくら　同　調

色香　小野川撿校調　西鶴作

月見　同　調　秀松軒作

菊永豐賀の兩撿校彈はやらせり

花見　同　調　同　作

關つくし　藤林勾當調

川霞　大澤撿校調　田原や後室作

戀ぐさ　松岡撿校調　御堂上方作

若松　野川撿校調　自作のよし

かぞへ歌　同　調　自作のよし

古子のび　同　調

紅葉づくし　津山撿校調　自作のよし

ひなづる　藤林撿校調　御堂上女房作

きぶね　同　調　小谷立靜作

しのゝめ　花部十三歳にて調すと　晉其角作のよし

小笹　生田撿校調　自作のよし

梅づくし　爲澤撿校調　佐山撿校作

夕ざれ　朝妻撿校調

嵯峨八景　繼橋撿校調　一時軒作

すみゑの月　房崎勾當調

玉川　國山勾當調　穗積頓母作

松づくし　(前)藤永撿校調

瀧づくし　右かへ唱歌　羽積作

我身　政島撿校調　いづ新作

白菊　歌木撿校調

きれづくし　同　調　かゞや七郎兵衞作

住の江　村住勾當調　羽積作

こしかた　小野村撿校調　流石庵作

春艸　野川撿校調　小堀遠州作と

四季の文　津山撿校調　湖春作

三つのいと　深艸撿校調　自作のよし

衣づくし　野川撿校調　又藤林撿校とも

山家の秋　津山撿校調　御堂上方作と云
清水まうで　繼橋撿校調
或は長歌にあらすといふ
三段獅子　佐山撿校調
まへ歌はうかれめといふ古曲を後人の添たる也
あづまじゝ　調者未詳
此曲難波獅子と其合手の同調猶きさらぎと八重霞と合がごとし
六段れんぼ　岸野二郎三調
大石氏作といふは非也

手事唱歌なき部

きぬた　佐山撿校調
八段すがゝき　津山撿校調
十二段すかゝき　生田撿校調と云
すごもり　品川勾當調
りんせつ　深草撿校調
又みだれともいふ

本手組之事

琉球組　鳥組

腰組　不祥組
飛騨組　忍組
浮世組

右表七組　石村撿校　虎澤撿校　兩調

端手目錄

待にごされ　長崎
比良や小松　京鹿子
下總　くれなゐ
片ばち

右七曲　柳川撿校調

裏組

倭文　錦木
青柳

右三組　柳川撿校調

中許

早舟　八幡
亂後夜　翠簾

揺上　　なよし
らうさい　二上り
右七曲　　柳川撿校調
大許
第一七ツ子　　二淺黄
右　　柳川撿校調
三茶碗　　四松蟲
右　　淺利撿校調
五晴嵐
六堺　附ほそり　三下り　　七中嶋
右　　柳川撿校調

右は野川流本手組の次第也早崎流組の次第は松の葉に出たるがごとし

附録

子のび　　久かた
三千年　　あふひ

くゐな　　御稜
初秋　　名月
重陽　　しぐれ
神樂　　御幸
右十二月新組
千代の恵
已上　　深草撿校調

右の新組早崎流にありて野川の流義にこれなしといへども爰に出せり

右輯錄する所、もとより同好に索問といへども、必ず遺脱差謬あるべし、采覧の君子萬望補正し給はん事を。偖又此編の出る、實に無益の至り、梨棗を辱する事、多罪々々、しかはあれど、年々に梓行する所、盡く教戒有益の書ならんには、篤實家のみにて、世ははなやかなるべからず、嗚呼、是此等の書ある、載大平の逸樂にして、おのおの幸に拜見せらるゝこそ、かたじけなくも、聖代に生れ逢ぬる餘澤と、よろこび給へと、このむ

所に、阿るなん、われにはゆるせ我にはゆるせ

辛丑仲冬

流石庵主人書

歌系圖畢

友に一冊子を選して跋を徴るあり、余が文事に疎かるをいかにと見れば、歌系圖と外題して、古來詞曲者流の曲を裁調を起せしあたりを、ねもころにかうがへしるせるなりけり、これやおのがこのめる技のめいぼくにして、質を綜とする君子の賜なる哉、先開卷に龍蛇走れるぞ、漢隷に名たゝる大人の筆次に金玉ひゞきなすは、鉅儒鴻粹の序、さて附言の考索すべき、篇中の集につどへる間々を、時に秀たる工の繪さへ繡せるぞ、いはんかたなく見ごろありや、おほよそ世に梓行する書等、已に充棟汗牛とかきけど、かゝるたぐひはいまだあるべうもなし、後の裁曲創詞先生、此系圖の系の緒のたえざる圖につらなりば、よしや其曲調すたれゆくとも、かの裁創せし當時の風流は不朽に傳ふといはざるべけんや、されば今よりすりものはなやかに、歌びらき時めかさば、もとめずしておのづから歌系圖に増補せん事、選者の仙たる所にして、余が跋して二三子をそゝのかす所になん

香宮枝去來

羽積先生歌系圖、刻已成れり、予其序跋をよみ、棹頭曰、吁諸君只絃歌の美のみを稱して、何ぞ其舞に及ばざるや、先生歌を作れば、其調を起して、又其婆娑をなす舞の妙たる、優家の巧なると、素人のうたてきとを謝して、一風流をものせらるゝは、住の江の偃女が扇を感得せる故なるべし、其流石庵の號あるも、流石羽積作ニ奏に表れし德なれば、先生の舞に於るや、其曲の名長たる事しるべし、よて筆を走て香宮氏が跋の後に贅し侍りき

湯河亭主人書

流石庵羽積、素性好生將ニ作レ歌歌曰ニ詞曲一方言爲但調レ絃曲於絃一調調ニ新之謂方言閨屋貴結兒絃曰ニ箏及提琴一方言斅篤鼞蜜設模好了、自家把ニ其名聲一發ニ賣了四下里一、在下就把ニ一號一贈ニ與他一、喚ニ做絃歌堂一、這是甚麼緣絲、如今本府有ニ箇海內有名的博物兼葭堂一、絃歌兼葭國音相通這個羽積也那所レ好、和レ他一般博物、便ニ看ニ見了此冊子一、方可ニ知道了一、雖ニ然作レ歌調レ絃將ニ華麗也浮浪的一、怎生其曲兒遺レ在ニ千載一、那箇姓大石的爲ニ復讐之道兒一、調ニ着里景色一、里景色曲名歌ニ花街風致ニ方言跋咄傑失吉柳大夫亦向ニ詩文書畵之傍邊舖面一、有ニ了長相思曲名的作一、嗚呼絃歌主人之好尙、已似ニ膏盲的盲字一入ニ着盲一哩盲瞽者唱レ曲鼓レ絃者方言雜咄烏又福廣失卻不ニ恁地一、那裏有ニ此冊子一麼、

辛丑仲冬、香嶹外史、書ニ于浪速安曇寺街僑居一、

新群書類從第六終

黑川眞道
米光關月
校

明治四十年八月二十日印刷
明治四十年八月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　市島謙吉

東京市本所區番場町四番地
印刷者　本間季男

東京市本所區番場町四番地
印刷所　內外印刷株式會社